岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 117

小中遺跡
白迫古墳群
小中古墳群
湯ケ迫古墳

おかやまファーマーズ・マーケット
建設に伴う発掘調査

1997

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 117

小中遺跡
白迫古墳群
小中古墳群
湯ケ迫古墳

おかやまファーマーズ・マーケット
建設に伴う発掘調査

1997

岡山県教育委員会

1．1区G大形竪穴住居群（上空から）

2．4区A北半部（上空から）

序

おかやまファーマーズ・マーケットは、観光や農業体験を通じて、都市と農村、消費者と生産者といった人々の交流や、豊かな自然とのふれあい、また農林水産業の理解ができる体験型農業公園として、県北では勝田郡勝央町に、県南では児島郡灘崎町にそれぞれ建設されています。

県北の勝央町では、建設予定地内に、弥生時代の集落や多数の古墳をはじめとする遺跡の存在が知られていました。遺跡の一部は、すでに中国縦貫自動車道の建設に先立って岡山県教育委員会が調査を行っており、弥生時代の集落や古墳群などが確認されています。おかやまファーマーズ・マーケットの建設にあたり、これらの遺跡の取り扱いについては、関係当局と協議を重ね、やむなく破壊される部分について記録保存のための発掘調査を行うことになりました。

調査の結果、弥生時代中期から後期にいたる大規模集落、古墳時代後期の古墳群をはじめ、古代の建物群や中・近世の遺構も確認されました。特に、弥生時代の集落については、岡山県北部でも有数の大規模集落であることが明らかとなり、岡山県下で最大級の規模をもつ竪穴住居は注目を集めました。

これらの成果を収めたこの報告書が、学術研究に寄与できるばかりか、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を研究する上で広く役立つならば、これに過ぎる喜びはありません。

最後に、発掘調査及び報告書の作成にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の諸先生から種々の御教示と御指導を賜りました。また、岡山県農林部ファーマーズ・マーケット推進室、岡山県農地開発公社、勝央町教育委員会及び関係各位から賜りました多大な御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成９年３月

岡山県教育委員会

教育長　森　崎　岩之助

例　言

1．本書は、おかやまファーマーズ・マーケット建設に伴い発掘調査した、勝田郡勝央町岡に所在する小中遺跡・白畚古墳群・小中古墳群・湯ケ畚古墳の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は岡山県教育委員会が担当し、岡山県古代吉備文化財センターが実施した。

3．調査期間は、第一次調査が平成５年７月～９月、第２次調査が平成５年10月～平成７年３月、第三次調査が平成８年４月～６月である。

4．発掘調査の実施にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の近藤義郎・水内昌康の両先生から現地指導ならびにご助言を賜った。

5．発掘調査は、平成５年度の第一次調査を山磨康平・速水章人、第二次調査を２人に加えて山本昌彦・氏平昭則・瀧川明徳の５名、平成６年度を浅倉秀昭・二宮治夫・渡辺武仁・山田明信・大柳浩・伊東孝に加えて尾上元規・杉山一雄の８名、平成８年度を尾上元規・高田恭一郎が担当した。

6．整理作業は、平成７年度に浅倉・二宮、８年度に尾上が担当し、岡山県古代吉備文化財センターにて行なった。

7．平成７年度整理作業において、石材鑑定を吉備国際大学妹尾護先生、鉄滓の鑑定を大澤正己先生に依頼した。

8．本書の執筆は、浅倉・二宮・山磨・氏平・尾上・正岡睦夫が行ない、その分担は目次に示している。全体編集は浅倉が行なった。

9．出土遺物・実測図・写真類の記録は、すべて岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

凡　例

1．第２図は、国土地理院発行の１/25,000の地形図「真加部」・「津山東部」を複製・加筆したものである。

2．掲載図に用いた北は、１～３区の遺構図は磁北で、４・５区の遺構図は真北である。

3．掲載図の高度値は海抜高である。

4．遺構・遺物実測図の縮尺については、一部を除き以下のように統一している。

遺構　　竪穴住居・建物・段状遺構（１/60)、土壙・土壙墓・溝（１/30)

遺物　　土器（１/４)、石器（１/２・１/３)、鉄器（１/２・１/３)、玉類（２/３）

5．遺構配置図の略号は以下のとおりである。

竪穴住居（H）　建物（B）　段状遺構（S）　土壙（K）　土壙墓（X）　溝（D）

土器棺（C）　柵列（A）　道（R）

6．遺物番号については、土器・土製品・石器・金属器・玉類に分けて図ごとに番号をつけ、土器以外については下記の略号を番号の前に付している。

土製品（C）　石器（S）　金属器（I）　玉類（A）

目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……（尾上）… 1
Ⅱ　発掘調査の経緯と経過…… 5
(1)　調査にいたる経緯……（正岡）… 5
(2)　第一次調査の経過……（山磨）… 5
(3)　第二次調査の経過……（浅倉）… 5
(4)　第三次調査の経過……（尾上）… 6
(5)　日誌抄……（浅倉・尾上）… 6
(6)　発掘調査および報告書作成の体制
（浅倉・尾上）… 7
Ⅲ　調査の概要…… 9
(1)　1区の調査……（二宮）… 9
1．竪穴住居…… 15
2．建物…… 69
3．段状遺構…… 87
4．土壙…… 88
5．土壙墓…… 92
6．道…… 95
7．その他の遺構・遺物…… 96
(2)　2・3区の概要……（氏平）… 99
(3)　2区の調査……（氏平）… 100
(4)　3区の調査……（氏平）… 101
1．竪穴住居…… 101
2．建物…… 118
3．段状遺構…… 121
4．土壙…… 123
5．土壙墓…… 123
6．中世の遺構…… 125
(5)　4区A・C～E・Gの調査
（浅倉）… 126
1．竪穴住居…… 130
2．段状遺構…… 181
3．建物・柵列・建物周辺遺物…… 182
4．土壙…… 192
5．土器棺・土壙墓…… 201
6．溝…… 202
(6)　4区Fの調査……（尾上）… 203
1．竪穴住居…… 203
2．段状遺構…… 211
3．建物…… 220
4．土壙…… 223
5．溝…… 223
(7)　5区の調査……（浅倉）… 224
1．竪穴住居…… 224
2．段状遺構…… 227
3．土壙…… 227
4．溝・道…… 228
(8)　白迫古墳群の調査……（二宮）… 229
1．1号墳…… 229
2．2号墳…… 235
3．3号墳…… 237
(9)　小中古墳群の調査……（氏平）… 238
1．1号墳…… 238
(10)　湯ケ迫古墳の調査……（浅倉）… 239
Ⅳ　まとめ…… 241
(1)　竪穴住居について……（二宮）… 241
(2)　段状遺構と竪穴住居
（浅倉・尾上）… 248
(3)　弥生土器の編年と集落の消長
（尾上）… 250
(4)　古代の建物群……（尾上）… 253

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図…… 1
第２図　周辺主要遺跡分布図…… 2
第３図　よつみだわ古墳群測量図…… 3
第４図　小中遺跡ほか調査範囲図…… 7
第５図　１～３区調査範囲・遺構全体図… 9
第６図　調査区割図…… 10
第７図　１～３区遺構配置図・区割図…… 11
第８図　１区竪穴住居・建物配置図…… 13
第９図　竪穴住居１・２・竪穴住居２出土遺物…… 15
第10図　竪穴住居３…… 16
第11図　竪穴住居４・出土遺物…… 17
第12図　竪穴住居５…… 18
第13図　竪穴住居５出土遺物…… 19
第14図　竪穴住居６…… 20
第15図　竪穴住居６断面図…… 21
第16図　竪穴住居６出土遺物…… 22
第17図　竪穴住居７…… 22
第18図　竪穴住居７内遺物…… 23
第19図　竪穴住居７出土遺物…… 23
第20図　竪穴住居９…… 24
第21図　竪穴住居９出土遺物…… 25
第22図　竪穴住居10…… 26
第23図　竪穴住居11…… 27
第24図　竪穴住居10出土遺物…… 28
第25図　竪穴住居11出土遺物…… 28
第26図　竪穴住居12…… 29
第27図　竪穴住居13・14・14出土遺物…… 29
第28図　竪穴住居15・出土遺物…… 30
第29図　竪穴住居16…… 31
第30図　竪穴住居16出土遺物…… 32
第31図　竪穴住居17・出土遺物…… 32
第32図　竪穴住居18…… 33
第33図　竪穴住居19…… 33
第34図　竪穴住居20・出土遺物…… 34
第35図　竪穴住居23・出土遺物…… 34
第36図　竪穴住居21(1)…… 35
第37図　竪穴住居21(2)…… 36
第38図　竪穴住居21築造順序…… 37
第39図　竪穴住居21断面図・出土遺物…… 38
第40図　竪穴住居21出土遺物(1)…… 39
第41図　竪穴住居21出土遺物(2)…… 40
第42図　竪穴住居22・出土遺物…… 41
第43図　竪穴住居22築造順序…… 42
第44図　竪穴住居22断面図・出土遺物…… 43
第45図　竪穴住居22出土遺物…… 44
第46図　竪穴住居24…… 45
第47図　竪穴住居24断面図・出土遺物…… 46
第48図　竪穴住居24出土遺物…… 47
第49図　竪穴住居25…… 48
第50図　竪穴住居25断面図・出土遺物…… 49
第51図　竪穴住居25出土遺物…… 50
第52図　竪穴住居26・出土遺物…… 50
第53図　竪穴住居27…… 51
第54図　竪穴住居27出土遺物…… 52
第55図　竪穴住居28…… 52
第56図　竪穴住居28出土遺物…… 53
第57図　竪穴住居29…… 54
第58図　竪穴住居29築造順序…… 55
第59図　竪穴住居29断面図・出土遺物…… 56
第60図　竪穴住居29出土遺物…… 57
第61図　竪穴住居30・出土遺物…… 58
第62図　竪穴住居31…… 58
第63図　竪穴住居31出土遺物…… 59
第64図　竪穴住居32…… 59
第65図　竪穴住居32出土遺物…… 60
第66図　竪穴住居33…… 60
第67図　竪穴住居34・出土遺物…… 60
第68図　竪穴住居35・出土遺物…… 61
第69図　竪穴住居36…… 61
第70図　竪穴住居37・出土遺物…… 61
第71図　竪穴住居38…… 62
第72図　竪穴住居38出土遺物…… 63
第73図　竪穴住居39・出土遺物…… 64
第74図　竪穴住居40・出土遺物…… 65
第75図　竪穴住居41・出土遺物…… 66
第76図　竪穴住居42・出土遺物…… 67
第77図　竪穴住居42閉塞部・出土遺物…… 68
第78図　建物１…… 69
第79図　建物２…… 70
第80図　建物３…… 70
第81図　建物４…… 71
第82図　建物５・出土遺物…… 71
第83図　建物６…… 72

第84図　建物７・出土遺物…… 73
第85図　建物８…… 73
第86図　建物９・段状遺構３…… 74
第87図　建物10・出土遺物…… 74
第88図　１区建物・段状遺構・土壙・土壙墓配置図（中世～近世）…… 75
第89図　建物18…… 77
第90図　建物19…… 77
第91図　建物20…… 78
第92図　建物21…… 78
第93図　建物22…… 79
第94図　建物23…… 80
第95図　建物24…… 80
第96図　建物25…… 81
第97図　建物26…… 81
第98図　建物27…… 81
第99図　建物28・出土遺物…… 82
第100図　建物29・出土遺物 …… 83
第101図　建物30・出土遺物 …… 84
第102図　建物31・出土遺物 …… 85
第103図　建物32 …… 86
第104図　段状遺構１・２・出土遺物 …… 87
第105図　段状遺構７・８・９・柱列・出土遺物 …… 87
第106図　土壙１ …… 88
第107図　土壙２・出土遺物(1) …… 88
第108図　土壙２出土遺物(2) …… 89
第109図　土壙２出土遺物(3) …… 90
第110図　土壙２出土遺物(4) …… 91
第111図　土壙12 …… 92
第112図　土壙墓２ …… 92
第113図　土壙墓３・４・出土遺物 …… 92
第114図　土壙墓５ …… 93
第115図　土壙墓６ …… 93
第116図　土壙墓８・出土遺物 …… 93
第117図　土壙墓９・出土遺物 …… 94
第118図　土壙墓12 …… 94
第119図　土壙墓14・出土遺物 …… 94
第120図　土壙墓15 …… 94
第121図　１区道配置図 …… 95
第122図　道８平・断面図 …… 95
第123図　道出土遺物 …… 95
第124図　１区Ｆ柱穴遺物出土状況・同写真・出土遺物 …… 96
第125図　柱穴列平・断面図 …… 97
第126図　柱穴列平・断面図 …… 97
第127図　溝状遺構平・断面図 …… 97
第128図　柱穴・トレンチ出土遺物 …… 97
第129図　柱穴内・包含層出土遺物 …… 98
第130図　２・３区遺構配置図 …… 99
第131図　２区Ａ遺構配置図 …… 100
第132図　建物11・出土遺物 …… 100
第133図　３区Ａ・Ｂ全体図 …… 101
第134図　竪穴住居43 …… 102
第135図　竪穴住居43断面図・出土遺物 … 103
第136図　竪穴住居44 …… 103
第137図　竪穴住居45 …… 104
第138図　竪穴住居45断面図・ピット・出土遺物 …… 105
第139図　竪穴住居45内土壙 …… 106
第140図　竪穴住居45出土遺物 …… 107
第141図　竪穴住居46 …… 108
第142図　竪穴住居46出土遺物 …… 109
第143図　竪穴住居47・48 …… 110
第144図　竪穴住居48外周溝出土遺物 …… 110
第145図　竪穴住居49 …… 111
第146図　竪穴住居49出土遺物 …… 112
第147図　竪穴住居50・出土遺物 …… 112
第148図　竪穴住居51・出土遺物 …… 113
第149図　竪穴住居52 …… 114
第150図　竪穴住居52出土遺物 …… 115
第151図　竪穴住居53 …… 116
第152図　竪穴住居53出土遺物 …… 117
第153図　建物12 …… 118
第154図　建物13 …… 118
第155図　建物15 …… 118
第156図　建物14 …… 119
第157図　建物16・出土遺物 …… 119
第158図　建物17 …… 120
第159図　段状遺構５・出土遺物 …… 120
第160図　土壙３・４ …… 121
第161図　土壙７ …… 121
第162図　土壙５ …… 121
第163図　土壙６ …… 122
第164図　土壙墓１・出土遺物 …… 123
第165図　３区Ａ・Ｂ段状遺構・道配置図 … 124
第166図　段状遺構10 …… 125
第167図　道11 …… 125
第168図　４区・５区調査範囲図 …… 126
第169図　４区上位部（Ｃ～Ｇ）遺構配置図 …… 127
第170図　４区Ａ遺構配置図 …… 129
第171図　竪穴住居１出土遺物 …… 130
第172図　竪穴住居１ …… 131

第173図　竪穴住居２・出土遺物 …… 132
第174図　竪穴住居３ …… 133
第175図　竪穴住居３出土遺物 …… 133
第176図　竪穴住居４出土遺物 …… 133
第177図　竪穴住居４ …… 134
第178図　竪穴住居５ …… 134
第179図　竪穴住居５出土遺物 …… 134
第180図　竪穴住居６ …… 135
第181図　竪穴住居６出土遺物 …… 136
第182図　竪穴住居７ …… 137
第183図　竪穴住居７出土遺物 …… 138
第184図　竪穴住居８・９・10・竪穴住居８出土遺物 …… 138
第185図　竪穴住居９出土遺物 …… 139
第186図　竪穴住居10出土遺物 …… 139
第187図　竪穴住居11・出土遺物 …… 139
第188図　竪穴住居12・出土遺物 …… 140
第189図　竪穴住居13・14・15・16・出土遺物 …… 141
第190図　竪穴住居17 …… 142
第191図　竪穴住居17出土遺物 …… 142
第192図　竪穴住居18・19・20・竪穴住居19出土遺物 …… 143
第193図　竪穴住居21・出土遺物 …… 144
第194図　竪穴住居22 …… 145
第195図　竪穴住居23・24・25 …… 145
第196図　竪穴住居23・25出土遺物 …… 145
第197図　竪穴住居26・27・竪穴住居27出土遺物 …… 146
第198図　竪穴住居28 …… 146
第199図　竪穴住居29 …… 147
第200図　竪穴住居30 …… 147
第201図　竪穴住居32・出土遺物 …… 147
第202図　竪穴住居31・出土遺物 …… 148
第203図　竪穴住居33 …… 148
第204図　竪穴住居34 …… 148
第205図　竪穴住居35・出土遺物 …… 149
第206図　竪穴住居36・37 …… 150
第207図　竪穴住居36出土遺物 …… 150
第208図　竪穴住居37出土遺物 …… 150
第209図　竪穴住居37内土壙出土遺物 …… 151
第210図　竪穴住居38・出土遺物 …… 151
第211図　竪穴住居34・39 …… 152
第212図　竪穴住居40・41・出土遺物 …… 152
第213図　竪穴住居43 …… 153
第214図　竪穴住居44 …… 153
第215図　竪穴住居42・45・47 …… 153
第216図　竪穴住居42・45出土遺物 …… 154
第217図　竪穴住居46 …… 154
第218図　竪穴住居48 …… 155
第219図　竪穴住居49 …… 155
第220図　竪穴住居50出土遺物 …… 155
第221図　竪穴住居51・52出土遺物 …… 155
第222図　竪穴住居50・51・52 …… 156
第223図　竪穴住居53 …… 156
第224図　竪穴住居54 …… 156
第225図　竪穴住居55 …… 156
第226図　竪穴住居56 …… 157
第227図　竪穴住居57・出土遺物 …… 157
第228図　竪穴住居58・59 …… 157
第229図　竪穴住居58出土遺物 …… 157
第230図　竪穴住居60・出土遺物 …… 158
第231図　竪穴住居62 …… 158
第232図　竪穴住居63・出土遺物 …… 158
第233図　竪穴住居61・66・67 …… 159
第234図　竪穴住居61出土遺物 …… 159
第235図　竪穴住居64出土遺物 …… 159
第236図　竪穴住居64・65 …… 160
第237図　竪穴住居68 …… 160
第238図　竪穴住居69・70・71・74・76 … 160
第239図　竪穴住居69出土遺物 …… 161
第240図　竪穴住居71出土遺物 …… 161
第241図　竪穴住居72出土遺物 …… 161
第242図　竪穴住居73出土遺物 …… 161
第243図　竪穴住居72・73 …… 162
第244図　竪穴住居75 …… 162
第245図　竪穴住居77 …… 162
第246図　竪穴住居78・出土遺物 …… 162
第247図　竪穴住居74出土遺物 …… 163
第248図　竪穴住居75出土遺物 …… 163
第249図　竪穴住居76出土遺物 …… 163
第250図　竪穴住居77出土遺物 …… 163
第251図　竪穴住居79出土遺物 …… 163
第252図　竪穴住居79・80 …… 164
第253図　竪穴住居81出土遺物 …… 165
第254図　竪穴住居83出土遺物 …… 165
第255図　竪穴住居81 …… 166
第256図　竪穴住居82 …… 166
第257図　竪穴住居84・85 …… 166
第258図　竪穴住居83・87 …… 167
第259図　竪穴住居86・89 …… 167
第260図　竪穴住居87出土遺物 …… 168
第261図　竪穴住居88出土遺物 …… 168
第262図　竪穴住居88 …… 169

第263図　竪穴住居90 …… 169
第264図　竪穴住居90出土遺物 …… 169
第265図　竪穴住居91・出土遺物 …… 170
第266図　竪穴住居92出土遺物 …… 170
第267図　竪穴住居92・93 …… 171
第268図　竪穴住居94 …… 171
第269図　竪穴住居95 …… 171
第270図　竪穴住居95出土遺物 …… 171
第271図　竪穴住居96 …… 172
第272図　竪穴住居97 …… 172
第273図　竪穴住居98 …… 172
第274図　竪穴住居99・101…… 172
第275図　竪穴住居99出土遺物 …… 173
第276図　竪穴住居100…… 173
第277図　竪穴住居103…… 173
第278図　竪穴住居102…… 174
第279図　竪穴住居102出土遺物…… 174
第280図　竪穴住居104・出土遺物…… 175
第281図　竪穴住居105…… 175
第282図　竪穴住居106…… 176
第283図　竪穴住居107・108・118…… 176
第284図　竪穴住居107出土遺物…… 177
第285図　竪穴住居108出土遺物…… 177
第286図　竪穴住居109・116 …… 178
第287図　竪穴住居110…… 178
第288図　竪穴住居111…… 178
第289図　竪穴住居112…… 178
第290図　竪穴住居113…… 178
第291図　竪穴住居114・115・竪穴住居
115出土遺物…… 179
第292図　竪穴住居117…… 179
第293図　竪穴住居117出土遺物…… 180
第294図　竪穴住居119・出土遺物…… 180
第295図　段状遺構1出土遺物 …… 181
第296図　段状遺構1 …… 181
第297図　段状遺構2・3 …… 181
第298図　4区A建物配置図 …… 182
第299図　建物1 …… 183
第300図　建物2 …… 183
第301図　建物3 …… 184
第302図　建物4 …… 184
第303図　建物5・出土遺物 …… 184
第304図　建物6 …… 185
第305図　建物7・出土遺物 …… 185
第306図　建物8 …… 185
第307図　建物9出土遺物 …… 186
第308図　建物9 …… 186
第309図　建物10・11 …… 186
第310図　建物11出土遺物 …… 187
第311図　建物12周辺出土遺物 …… 187
第312図　建物12 …… 187
第313図　建物13・出土遺物 …… 188
第314図　建物14 …… 188
第315図　建物14出土遺物 …… 189
第316図　建物15出土遺物 …… 189
第317図　建物15 …… 189
第318図　建物16 …… 190
第319図　建物17 …… 190
第320図　建物18 …… 191
第321図　建物19 …… 191
第322図　柵列1・2 …… 192
第323図　建物周辺出土遺物 …… 192
第324図　土壙1 …… 192
第325図　土壙2 …… 193
第326図　土壙4 …… 193
第327図　土壙5 …… 193
第328図　土壙6出土遺物 …… 194
第329図　土壙7・8・9 …… 194
第330図　土壙10 …… 194
第331図　土壙10出土遺物 …… 194
第332図　土壙11 …… 195
第333図　土壙11出土遺物 …… 195
第334図　土壙12 …… 195
第335図　土壙13 …… 195
第336図　土壙14 …… 196
第337図　土壙15 …… 196
第338図　土壙16 …… 196
第339図　土壙16出土遺物 …… 196
第340図　土壙17 …… 197
第341図　土壙18 …… 197
第342図　土壙19 …… 197
第343図　土壙20 …… 198
第344図　土壙21・22 …… 198
第345図　土壙23 …… 198
第346図　土壙24 …… 199
第347図　土壙25 …… 199
第348図　土壙26 …… 199
第349図　土壙27 …… 199
第350図　土壙28 …… 200
第351図　土壙29 …… 200
第352図　土壙30出土遺物 …… 200
第353図　土器棺1 …… 201
第354図　土器棺1使用土器 …… 201
第355図　土壙墓1 …… 201

第356図　溝１ …… 202
第357図　溝１出土遺物 …… 202
第358図　溝２ …… 202
第359図　溝２出土遺物 …… 202
第360図　溝３ …… 202
第361図　溝４ …… 202
第362図　竪穴住居１・２ …… 203
第363図　竪穴住居１出土遺物 …… 204
第364図　竪穴住居３ …… 205
第365図　竪穴住居３出土遺物 …… 205
第366図　竪穴住居４ …… 206
第367図　竪穴住居４出土遺物 …… 206
第368図　竪穴住居５ …… 207
第369図　竪穴住居５出土遺物 …… 208
第370図　竪穴住居６・段状遺構12 …… 209
第371図　竪穴住居６出土遺物 …… 209
第372図　竪穴住居７ …… 210
第373図　段状遺構１・出土遺物 …… 211
第374図　段状遺構２・出土遺物 …… 212
第375図　段状遺構３・４ …… 213
第376図　段状遺構３・４出土遺物 …… 213
第377図　段状遺構５・出土遺物 …… 214
第378図　段状遺構６・７・８ …… 215
第379図　段状遺構６出土遺物 …… 216
第380図　段状遺構９・10 …… 216
第381図　段状遺構11 …… 217
第382図　段状遺構13 …… 217
第383図　段状遺構14 …… 217
第384図　段状遺構15 …… 218
第385図　段状遺構16 …… 218
第386図　段状遺構16出土遺物 …… 218
第387図　段状遺構17 …… 218
第388図　段状遺構18 …… 219
第389図　段状遺構19・20 …… 219
第390図　建物１・Ｐ１出土遺物 …… 220
第391図　建物２・Ｐ２出土遺物 …… 221
第392図　建物３・Ｐ１出土遺物 …… 222
第393図　土壙１ …… 223
第394図　溝１ …… 223
第395図　竪穴住居５上層出土遺物 …… 223
第396図　５区遺構配置図 …… 224
第397図　竪穴住居４出土遺物 …… 224
第398図　竪穴住居１ほか …… 225
第399図　竪穴住居６ …… 225
第400図　竪穴住居４・５・竪穴住居５出土遺物 …… 225
第401図　竪穴住居６出土遺物 …… 226
第402図　竪穴住居７ …… 226
第403図　竪穴住居８ …… 226
第404図　竪穴住居９・10 …… 226
第405図　竪穴住居８出土遺物 …… 227
第406図　土壙２ …… 227
第407図　土壙３ …… 227
第408図　溝１ …… 228
第409図　溝２ …… 228
第410図　溝３ …… 228
第411図　白迫１号墳調査前地形図・位置図 …… 229
第412図　白迫１号墳調査後地形図・遺構配置図 …… 230
第413図　白迫１号墳土層断面図 …… 231
第414図　白迫１号墳主体部平・断面図 … 232
第415図　白迫１号墳石室内遺物出土状況 …… 233
第416図　白迫１号墳石室出土鉄器・耳環… 233
第417図　白迫１号墳石室出土遺物 …… 234
第418図　白迫２号墳調査前地形図・土層断面図・位置図 …… 235
第419図　白迫２号墳調査後地形図 …… 236
第420図　白迫２号墳及び周辺出土遺物 … 236
第421図　白迫３号墳完掘・出土遺物 …… 237
第422図　３区Ｃ小中古墳群地形図 …… 238
第423図　小中１号墳調査範囲・土層断面… 238
第424図　湯ヶ迫古墳全体図 …… 239
第425図　湯ヶ迫古墳横穴式石室 …… 240
第426図　湯ヶ迫古墳出土遺物 …… 240
第427図　地形図・調査範囲図 …… 241
第428図　１区住居址配置図 …… 242
第429図　３区Ａ・Ｂ住居址配置図 …… 243
第430図　４区Ａ住居址配置図 …… 243
第431図　４区・５区住居址配置図 …… 244
第432図　小中遺跡住居址形態別分類図 … 245
第433図　住42閉塞部 …… 246
第434図　住27溝部分図 …… 246
第435図　住45溝部分図 …… 246
第436図　４区Ａ住１溝部分図 …… 247
第437図　住52・住５断面図 …… 247
第438図　竪穴住居の分布 …… 249
第439図　小中遺跡における弥生土器変遷図 …… 251
第440図　弥生時代の遺構の時期別分布 … 252
第441図　４区Ａの古代の建物群 …… 253
第442図　美作東部における古代の主要遺跡の分布 …… 254

図 版 目 次

巻頭カラー図版
1．1区G大形竪穴住居群（上空から）
2．4区A北半部（上空から）

図版1 1．1区竪穴住居1・2・道1（北西から）
2．1区A全景（上空から）
3．1区竪穴住居3（北東から）
図版2 1．1区竪穴住居4（南西から）
2．同上（南東から）
3．1区竪穴住居5（南東から）
図版3 1．1区竪穴住居6（北西から）
2．同壁体部分断面
3．同柱穴1
4．同柱穴3
5．同柱穴5
図版4 1．1区竪穴住居7（北西から）
2．同住居内遺物近景
3．1区竪穴住居9（南西から）
図版5 1．1区竪穴住居10（北西から）
2．1区竪穴住居11（北西から）
3．1区竪穴住居12（北東から）
図版6 1．1区竪穴住居14·13·11(北東から)
2．1区竪穴住居15（南西から）
3．1区竪穴住居16（北西から）
図版7 1．1区D・G・H全景（上空から）
2．同近景（上空から）
図版8 1．1区竪穴住居20（南東から）
2．1区竪穴住居21（東から）
3．1区竪穴住居22北西断面(南から)
図版9 1．1区竪穴住居22（新）（南東から）
2．同完掘（新・旧）（南東から）
3．1区竪穴住居23・25（南東から）
図版10 1．1区竪穴住居24（南西から）
2．1区竪穴住居25（南東から）
3．1区竪穴住居25遺物近景
図版11 1．1区竪穴住居26（北西から）
2．1区竪穴住居27（北西から）
3．1区竪穴住居27ベッド下溝断面
図版12 1．1区竪穴住居29（南東から）
2．1区竪穴住居30·31·32(南東から)
3．1区竪穴住居34（東から）
図版13 1．1区竪穴住居35（東から）
2．1区竪穴住居38（北西から）
3．1区竪穴住居39（北西から）
図版14 1．1区竪穴住居41（西から）
2．1区竪穴住居42（南西から）
3．同北辺コーナー部閉塞部・同遺物
図版15 1．1区建物1（東から）
2．1区建物2・23・24（南東から）
3．1区建物3（東から）
4．1区建物4（北東から）
5．1区建物5・6（南東から）
6．1区建物7・26・25（南東から）
7．1区建物9（北西から）
8．1区建物10（南西から）
図版16 1．1区建物19（南西から）
2．1区建物20（南東から）
3．1区建物22（南西から）
4．1区建物21（南東から）
5．1区建物29・30・31（南西から）
6．1区建物32（北西から）
7．1区土壙2（北西から）
8．同完掘
図版17 1．1区土壙墓2（西から）
2．同完掘
3．1区土壙墓3（北西から）
4．1区土壙墓4（北西から）
5．1区土壙墓8（北西から）
6．同遺物近景
7．1区土壙墓14（北西から）
8．1区土壙墓15（北西から）
図版18 1．2区A建物11（南東から）
2．3区A・B全景（上空から）
図版19 1．3区竪穴住居43炭化物検出面（北西から）
2．同完掘（南西から）・壁外溝断面
3．3区竪穴住居44（西から）
図版20 1．3区竪穴住居45（北から）
2．同内土壙4（南から）
3．同内土壙5（北から）
4．同内土壙6（北から）
5．同内土壙6（南から）
図版21 1．3区竪穴住居46（北から）
2．3区竪穴住居47（北東から）
3．3区竪穴住居48（北から）

図版22　1．3区竪穴住居49焼土面検出（北東から）
2．同完掘（北北東から）
3．3区竪穴住居51（南から）
図版23　1．3区竪穴住居52焼土・炭化物面（北から）
2．同完掘（北西から）
3．3区竪穴住居53（北北西から）・遺物近景
図版24　1．3区建物12・13（南西から）
2．3区建物14（西北西から）
3．3区建物15（南南東から）
4．3区建物17（北西から）
5．3区土壙5（北北東から）
6．3区土壙6（北から）
7．3区土壙7断面（北から）
8．同完掘（北西から）
図版25　1．3区土壙墓1（北北西から）
2．同遺物近景
3．同上
図版26　1区竪穴住居出土遺物(1)
図版27　1区竪穴住居出土遺物(2)
図版28　1区竪穴住居出土遺物(3)
図版29　1区竪穴住居出土遺物(4)
図版30　1区建物・柱穴出土遺物
図版31　1区土壙2出土遺物(1)
図版32　1区土壙2出土遺物(2)
図版33　1区土壙墓出土遺物
図版34　2区A建物11・3区竪穴住居出土遺物
図版35　3区竪穴住居出土遺物
図版36　3区建物・柱穴・土壙墓1出土遺物
図版37　1区竪穴住居出土遺物
図版38　1・3区竪穴住居出土遺物
図版39　3区竪穴住居・1・3区柱穴・包含層出土遺物
図版40　1．4区A竪穴住居6（南から）
2．4区A竪穴住居1（東から）
3．4区A竪穴住居7（北から）
図版41　1．4区A竪穴住居2（東から）
2．4区A竪穴住居21（南から）
3．4区C竪穴住居79（南から）
図版42　1．4区E竪穴住居群（南から）
2．4区E竪穴住居4（南から）
3．4区G竪穴住居106ほか（南から）
図版43　1．4区A建物16・17・18（南から）
2．4区A建物15（北から）
3．4区A建物1・13（東から）
図版44　1．4区A土器棺1（東から）
2．4区A土壙墓1（東から）
3．4区A竪穴住居37内土壙(南から)
4．4区A竪穴住居6壁体溝内土器出土状況
5．同柱穴内土器出土状況
図版45　1．4区F竪穴住居1・2(南西から)
2．4区F竪穴住居3（南から）
3．4区F竪穴住居5（南西から）
図版46　1．4区F竪穴住居5土器出土状況（南西から）
2．4区F竪穴住居7（西から）
3．4区F段状遺構3・4(南西から)
図版47　1．4区F建物1（北から）
2．4区F建物2（北から）
3．4区F建物3（北から）
図版48　1．5区拡張区（北西から）
2．同上（南西から）
3．同上（西から）
図版49　4区竪穴住居出土遺物
図版50　4・5区出土遺物
図版51　4区F竪穴住居5出土土器
図版52　4区F段状遺構3・4出土土器
図版53　小中遺跡出土石器(1)
図版54　小中遺跡出土石器(2)
図版55　小中遺跡出土石器(3)・玉類
図版56　1．白迫1号墳調査前全景（東から）
2．同表土除去後（南から）
3．同掘り上げ（南から）
図版57　1．石室内状況（奥壁より望む）
2．奥壁部分
3．遺物近景
図版58　1．遺物近景
2．内部取り上げ後(羨道部より望む)
3．完掘後全景（南から）
図版59　白迫1号墳出土遺物
図版60　白迫1・2号墳出土遺物
図版61　白迫1・2・3号墳出土遺物
図版62　1．白迫2号墳調査前（南西から）
2．同表土除去後（南西から）
3．同完掘（南から）
4．白迫3号墳周溝（西から）
図版63　1．小中1号墳調査前（北から）
2．同表土除去後（南から）
3．同土層断面（北西から）
図版64　1．湯ケ迫古墳（南から）
2．同横穴式石室（南東から）
3．同遺物出土状態（南西から）
図版65　湯ケ迫古墳出土遺物

Ⅰ　遺跡の位置と環境

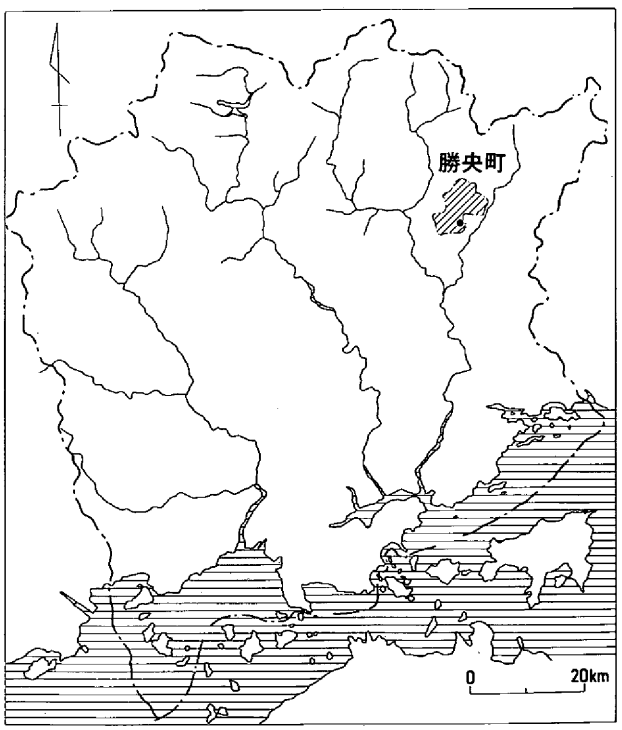
今回調査を行なった小中遺跡・白迫古墳群・小中古墳群・湯ヶ迫古墳は、岡山県の北東部、勝田郡勝央町岡に所在する。

勝央町内を蛇行して流れる滝川は、勝央町に東接する美作町内において、梶並川と合流し、吉井川の支流である吉野川に注いでいる。この滝川は、勝央町内でその流域にいくらかの小盆地を形成しているが、最も広い面積をもつのが勝間田の盆地である。今回調査を行なった遺跡は、この勝間田盆地を南に見下ろす丘陵上に位置している。背後には標高260数mの間山（はしたやま）が存在し、遺跡の位置する丘陵も間山からのびたものである。また、この勝間田盆地から間山を挟んで北側の植月、田井から美野にかけての地域にも、滝川流域に比較的広い盆地を形成している。両盆地とも広く水田として利用されており、古くから人々の経済基盤として重要な役割を担ってきたものと思われ、その周囲には人々の生活の跡をうかがわせる遺跡が多数分布している。

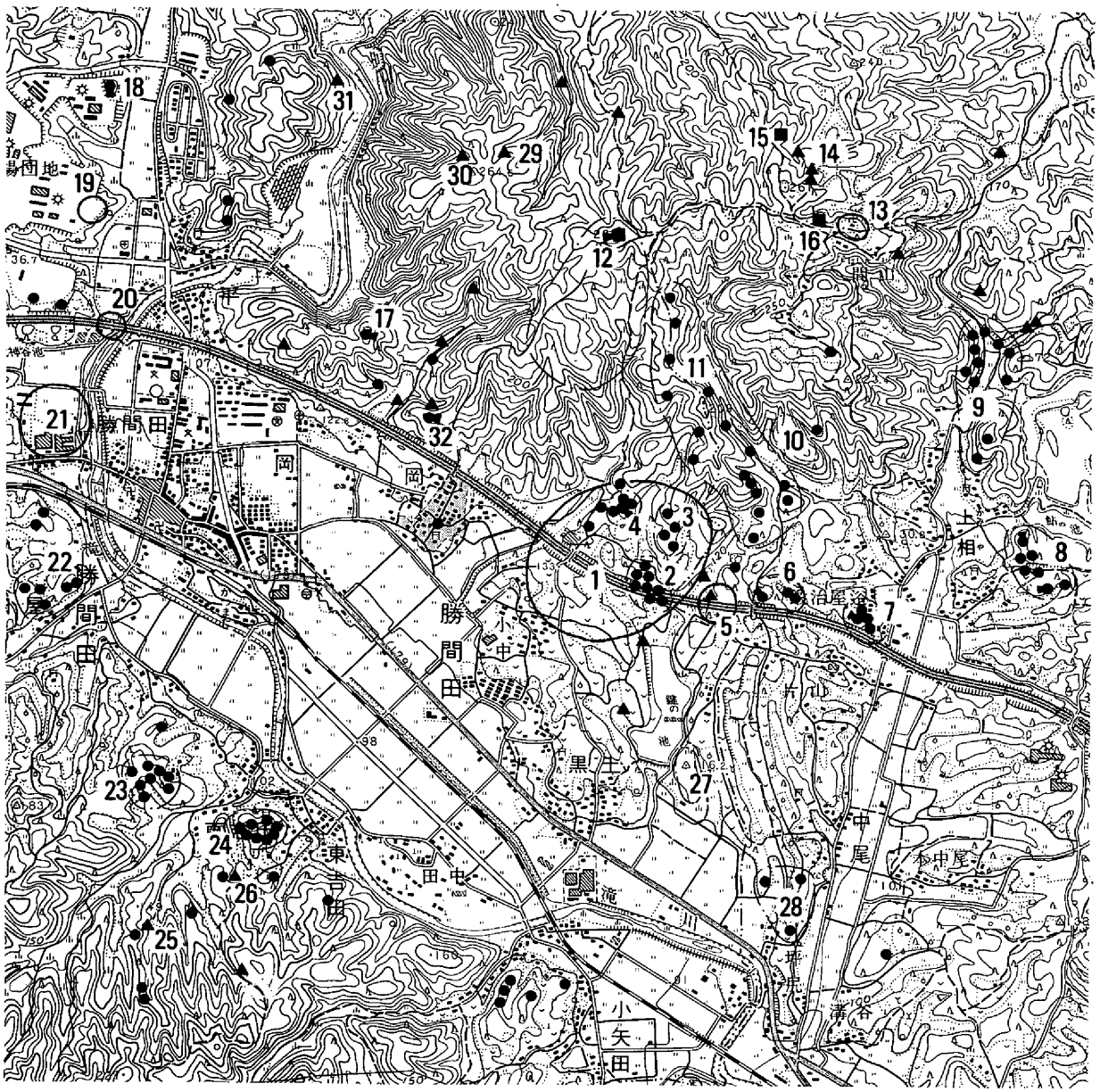
勝央町内で確認されている最も古い遺跡・遺物は、縄文時代までさかのぼるが、現在のところ非常に断片的な資料であるといわねばならない。植月中所在の金鶏塚遺跡において、縄文時代早期の押型文土器が採集されている[1]程度である。

つづく弥生時代になると、多くの遺跡が知られるようになるが、美作の他地域と同様、中期以降の遺跡が中心である。岡に所在する小中遺跡は、今回の調査以前にも中国縦貫自動車道の建設に伴って一部が調査されており、多数の竪穴住居や建物が検出されている[2]。今回の調査ともあわせて、弥生時代中期から後期にいたる大規模集落であることが明らかとなり、この地域の発展をうかがわせる。植月東の弥平治遺跡、美野の能部遺跡でも後期を中心とする集落址が調査されている[3]。また、植月北の念仏塚遺跡では、畑中より袈裟襷文銅鐸が出土している[4]。

古墳時代に入ると、この周辺には多数の前方後方墳が築かれるようになる。前方後円墳ではなく前方後方墳という墳形を多くとっている点がこの地域の特色のひとつである。筒形銅器をはじめとする副葬品が出土している岡高塚古墳は、間山山塊の最高所に位置する全長50.5mの前方後方墳である。勝間田盆地を望む首長墳としては、この岡高塚古墳を筆頭に、琴平山古墳（全長48mの前方後円墳）、殿塚古墳（全長48mの前方後円墳）が知られている。一方、北部の植月、田井、美野地域に広がる盆地周辺では、美作第２位の規模を誇る全長91.5mの前方後方墳である植月寺山古墳をはじめとして、美野高塚古墳（全長58mの前方後方墳）、美野中塚古墳（全長52.5

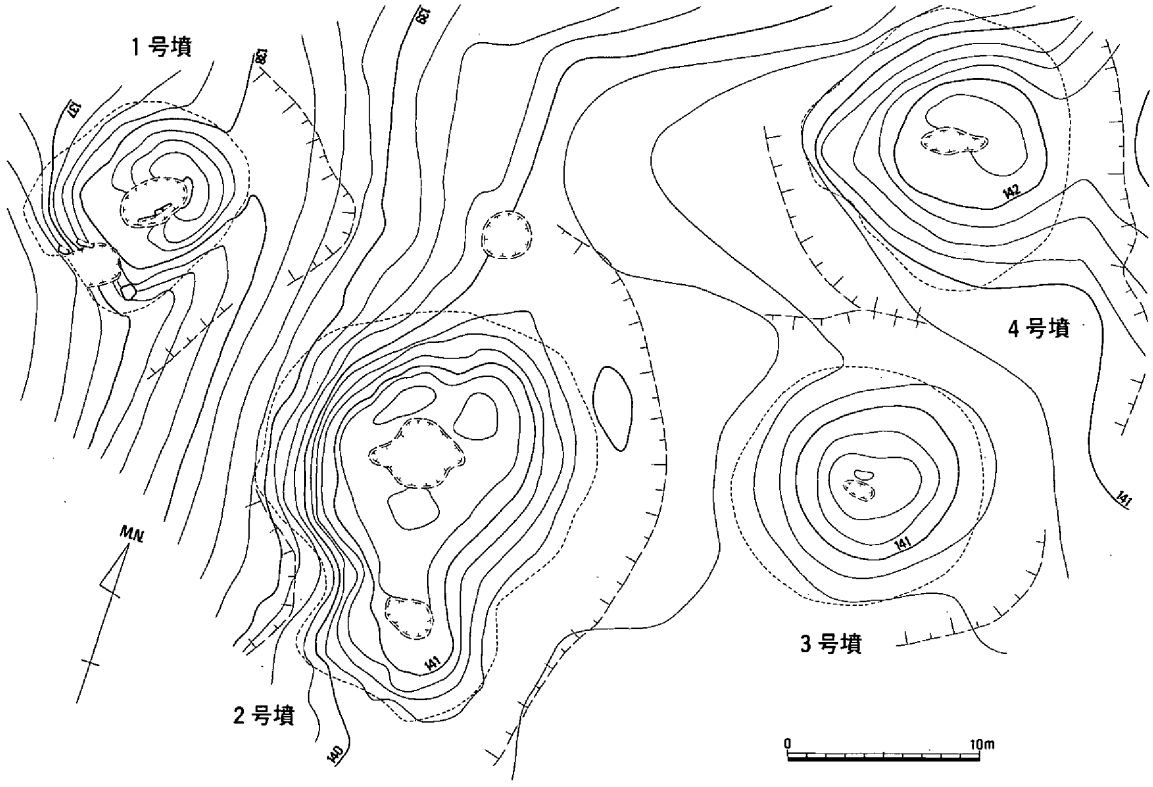


第１図　遺跡位置図



1．小中遺跡
2．小中古墳群
3．修理免古墳群
4．よつみだわ古墳群
5．上相遺跡
6．鍛冶屋迫古墳群
7．大年古墳群
8．中塚古墳群(鮎の池南古墳群)
9．金尾古墳群
10．よぼしや古墳群
11．鳥ケ風呂・岩井谷古墳群
12．岡高塚古墳
13．高福寺跡
14．女夫岩窯跡ほか
15．瓦経出土経塚
16．(伝)経塚
17．琴平山古墳
18．愛宕山古墳
19．勝央中核工業団地内遺跡
20．平遺跡
21．勝間田遺跡
22．畑屋古墳群
23．源族古墳群
24．東光寺裏山古墳群
25．宇津木谷窯跡
26．清水谷窯跡
27．丸山古墳群
28．坪尻古墳群
29．河内奥窯跡
30．大平山窯跡
31．戸岩窯跡
32．殿塚古墳

第２図　周辺主要遺跡分布図（1/25,000）



第3図　よつみだわ古墳群測量図（1/400）

mの前方後方墳）、田井高塚古墳（全長41.5mの前方後方墳）などがある。2つの盆地それぞれに君臨する強力な首長の姿が垣間見られる。古墳時代中期の首長墳は明確なものがなく、首長系譜が途絶えるようにもみうけられるが、古墳時代後期に入ると小規模な前方後円墳、あるいは帆立貝式の前方後円墳がみられるようになる。今回の調査地内に現状保存されることとなったよつみだわ古墳群中の2号墳もそのひとつであり、全長約20mの前方後円墳である。後円部中央の乱掘壙の中には石材が若干露出しており、竪穴式石室を内部主体とするものと考えられる。なお他の3基は、横穴式石室をもつ方墳の可能性のある1号墳と、おそらく木棺直葬と思われる円墳2基からなる。そのほか周辺では、美作町の上相地区に、大年1号墳、上相東塚古墳、上相中塚古墳といった小型の前方後円墳が分布している。時期の不明なものが多く古墳時代中期にまでさかのぼるものも含んでいると思われるが、大年1号墳は平成6年度に調査され、6世紀代の築造であることが判明している[5]。そのほか周辺一帯には多数の群集墳が築かれている。陶棺を内蔵する古墳も多く、美作地域の特徴を示している。特に平五反遊古墳からは類例の少ない鴟尾装飾をもつ陶棺が出土している。

古代の遺跡としては、平遺跡[6]およびその南方数百mに所在する勝間田遺跡[7]が著名である。方位をそろえた建物群や鍛冶炉といった遺構とともに、「郡」字ほかの押印土器、ヘラ書き土器、墨書土器、陶硯、瓦などが出土しており、勝田郡衙に関連する遺跡と推定されている。そのほか特筆すべきものとして、豊久田小字国司迫（くにさこ）より出土した人面墨描き土師器、東吉田の宇津木谷窯跡より出土した陶馬などが挙げられよう。

また、この近辺では古代より窯業の発展が著しく認められる。上述した宇津木谷窯跡をはじめ、古代の須恵器が散布する窯跡と考えられる遺跡が点々と分布しており、やがて勝間田焼と呼ばれる須恵器の一大生産地となり、古代末から中世にかけて発展した。

間山の山頂付近には、平安時代頃以降の祭祀・宗教遺跡が認められる。山頂からやや下った谷間に所在する、瓦経を出土した経塚が有名であり、大正年間に発掘され大量の瓦経片が出土したという。鳥取県倉吉市の大日寺瓦経と酷似し深い関連がうかがえることから、11世紀末頃のものと推定されている(8)。また山頂付近の、間山神社（山王宮）が建てられている箇所にも経塚が存在しその上に神社を建てたとの伝承がある。さらに間山神社の東側には、間山高福寺と呼ばれる寺院跡がある。現状では平坦な広場に礎石とみられる石材が散見されるが、創建年代は明らかでない。ただし上述の大日寺瓦経とされる資料の願文の中に「美朔勝北高福寺」とあるから、間山の瓦経出土経塚と深く関連する寺院と考えられる。

また、この地域の水田には、条里地割りをうかがわせるものが多く認められる。その施行時期は不明なものが多いが、美野地区の美野条里遺跡は一部確認調査が実施されており(9)、それによると古代まではさかのぼらず、中世段階の可能性が高いと思われる。美野条里遺跡から東へ数kmの勝田町矢田地区の矢田条里遺跡についても確認調査が実施されており、こちらも中世段階に由来するものであることが明らかとなっている(10)。当地域の中世における大規模な耕地開発の様子がうかがえる。

以上のように、勝間田地域は古くから滝川流域における農業生産を経済基盤として発展し、古代には勝田郡の中心地となった。さらに古代から中世にかけての窯業生産、また間山の遺跡にみられるように宗教上の中心地としての役割も果たしてきた。現在の国道179号線沿いには出雲街道が通っており、交通の要衝としての役割も忘れてはならない。室町時代から戦国時代にかけての山城跡が多数存在するのもそれと無関係ではなく、さらに近世には宿場町として発展していくのである。

註

(1)　近藤義郎「美作金鶏塚発見の押型文土器」『瀬戸内考古学』第2号　瀬戸内考古学会　1958年

(2)　栗野克己・高畑知功「小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7　岡山県教育委員会　1975年

(3)　中野雅美ほか『弥平治・能部遺跡』広域農道美作台地地区勝央町地内埋蔵文化財発掘調査委員会　1983年

(4)　近藤義郎「美作国植月村念仏塚発見の銅鐸」『吉備考古』第83号　吉備考古学会　1951年

(5)　尾上元規・杉山一雄「大年古墳群ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』102　岡山県教育委員会　1995年

(6)　井上弘・田仲満雄「平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8　岡山県教育委員会　1975年

(7)　「勝間田遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財報告』4　岡山県教育委員会　1974年

(8)　石田茂作「瓦経の研究」『瀬戸内考古学』第3号　瀬戸内考古学会　1958年
　　間壁忠彦「美作間山瓦経」『古文化談叢』第30集　九州古文化研究会　1993年

(9)　江見正己「美野条里確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　岡山県教育委員会　1983年
　　松本和男「美野条里遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』62　岡山県教育委員会　1986年

(10)　尾上元規「矢田条里」『岡山県埋蔵文化財報告』26　岡山県教育委員会　1996年

その他の参考文献

勝央町『勝央町誌』1984年

近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編　1991年

Ⅱ　発掘調査の経緯と経過

(1)　調査にいたる経緯

岡山県は、農林水産業の振興と地域の活性化のために、「おかやまファーマーズ・マーケット」を建設している。

県内に設置される２施設のうち、県北部の勝央町岡には、古墳群のほか弥生時代の集落跡が存在することから、県教育委員会が分布調査を行なった。調査の結果、小中古墳群・よつみだわ古墳群・修理免古墳群などの古墳群と弥生時代の集落跡である小中遺跡が用地内に広がっていることを確認した。遺跡の現状保存のために、関係当局と事前の協議をたびたび行なった。

平成５年４月30日付け、農公第10号で、岡山県知事から文化財保護法57条の３に基づく協議が提出された。さらに協議を重ねた結果、小型前方後円墳１基を含むよつみだわ古墳群と小中古墳群は１つのまとまりとして現状で保存し、修理免古墳群についても、造成地内にある古墳については、現状で保存し、周辺部も緩やかな傾斜とするなどの方策をとるようにした。小中遺跡などの集落遺跡については、造成の及ぶ範囲について発掘調査を実施することにした。県教員委員会は、平成５年５月17日付け、教文埋第1237号で、現状保存の困難な遺跡について、工事着手前に発掘調査を実施するように岡山県知事へ通知した。

修理免古墳群を現状保存したことによる設計変更に伴って土量が不足したため、東側丘陵の斜面から土取りを行なったところ、後期古墳を１基発見した。確認調査を実施したところ、著しく破壊されていたこともあり、記録保存をすることとし、付近で検出された集落跡とともに発掘調査を行なった。

調査によって、大型の竪穴住居が発見され、勝央町から住居の保存についての要望もあって、修理免１号墳に近接した竪穴住居を現状で残し、整備が行なわれた。区域内に現状保存された古墳についても、公園内で活用できるように見学路などを設けることにした。

(2)　第一次調査の経過

第一次調査は、平成５年７月１日から９月30日の期間に、1,760㎡を発掘した。岡山県古代吉備文化財センターから２名の職員が担当し、地元の作業員により、開発の計画はまだ確定していないものの、遺跡の範囲・密度・性格などの基礎資料を収集するため、トレンチによる発掘調査と古墳の分布調査、測量を行なった。開発が比較的確定している用地南部を４区に分割し、古墳・遺跡の予想できる尾根にトレンチを設定した。調査の結果は、以下のとおりである。なお、時期については弥生時代後期～中世、性格については集落と古墳と考えられた。

（１区）竪穴住居５・土壙１・段状遺構２・横穴式石室１　　（２区）段状遺構１

（３区）竪穴住居３・土壙２・溝１　　（４区）竪穴住居３・土壙１

(3)　第二次調査の経過

第一次調査の結果を受けて、岡山県教育庁文化課と岡山県農林部が協議を行ない、保存できる古墳を確定し、止むを得ず開発にかかる部分を記録保存することとなった。発掘調査は、第一次に引き続いて、平成５年10月１日から全面調査に移行した。センター職員は先の２名に３名増員して５人体制とし、平成６年３月31日までに3,120㎡の調査を行なった。１区Ａ・Ｂ、２区Ａ、３区Ａ・Ｂ・Ｃの調査を実施した。平成６年２月14日には埋蔵文化財専門委員会を現地で開催し、指導・助言を得た。また同年２月24日には１区～３区をラジコン・ヘリコプターで空中写真撮影した。

平成６年４月１日からの調査は、センター職員を一新して６名とし、作業員もほぼ２倍に増員した。この年度の当初計画では、１区10,000㎡とその他4,400㎡の合計14,400㎡を発掘することになっていたが、工事の設計変更等によって調査面積の拡大をよぎなくされた。現場ではこのため新たにセンターから２名の職員の応援を得て対応した。平成７年３月31日終了時の調査面積は18,890㎡に達した。この間、平成６年10月15日には１区Ｇの大型竪穴住居をはじめとする調査成果について現地説明会を開催した。また、埋蔵文化財専門委員会は２回開催し、指導・助言を得ている。また、平成６年10月14日には１区を、平成７年２月７日には４区をラジコン・ヘリコプターで空中写真撮影した。検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

遺構　（１区Ａ）竪穴住居２・建物１・土壙２・溝１・段状遺構１など
（１区Ｂ）段状遺構１など
（１区Ｃ～Ｉ）竪穴住居30・建物19・土壙８・土壙墓５・溝15など
（２区Ａ）建物１など
（３区Ａ・Ｂ・Ｃ）竪穴住居８・建物６・土壙５・段状遺構２・溝１・土壙墓１・古道１・小中１号墳の墳端など
（４区Ａ～Ｇ）竪穴住居119・建物19・土壙30・土壙墓１・溝４・土器棺１など
（５区）竪穴住居10・土壙３・溝３など

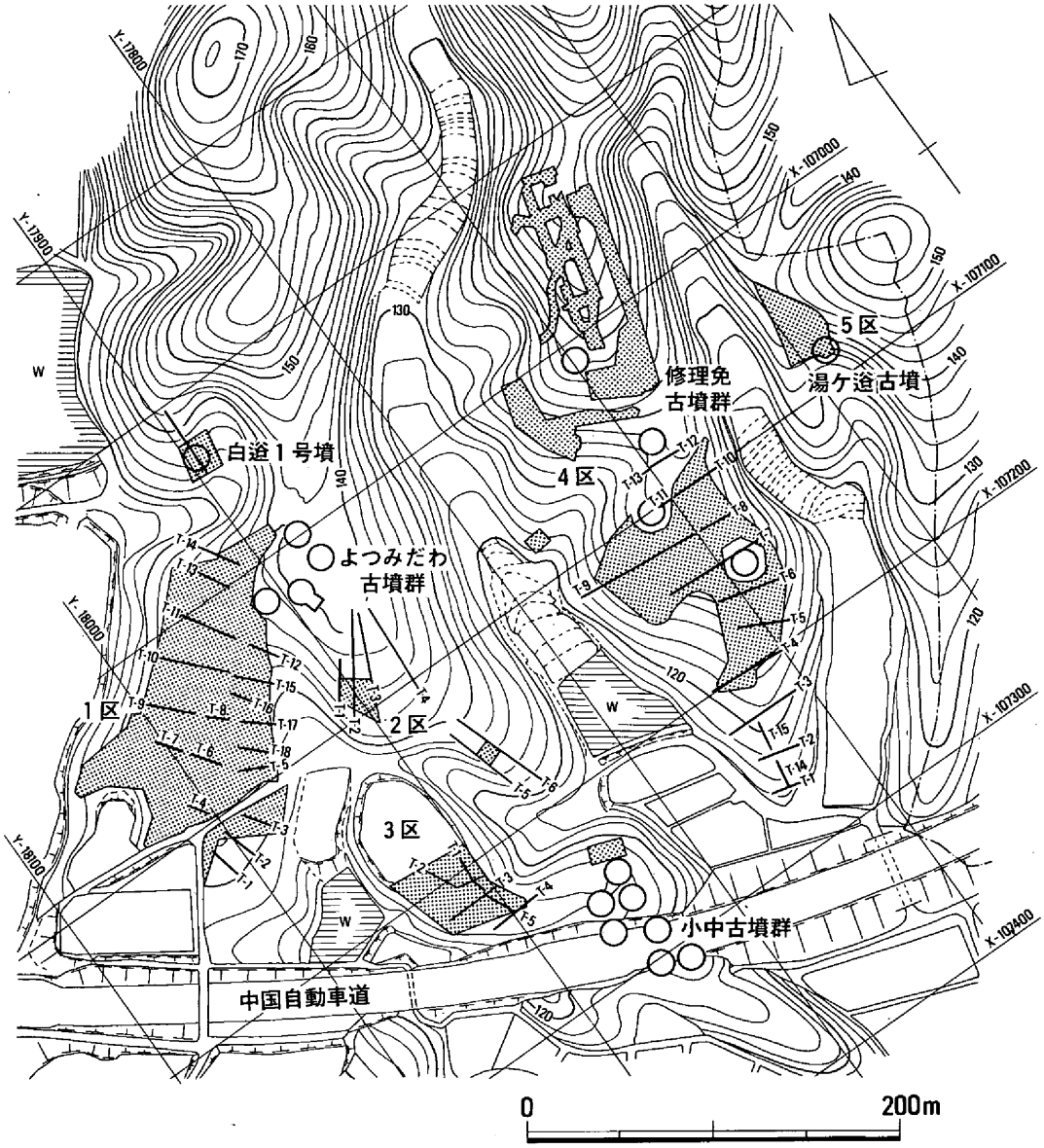
遺物　弥生土器・土師器・須恵器・石器・鉄器・玉類など

(4)　第三次調査の経過

第三次調査は、平成８年４月１日から６月30日の期間に、アスレチック施設建設予定部分（４区Ｆ）1,534㎡について実施した。センター職員は２名が担当した。調査地点は尾根の頂部付近にあたるため遺構の密度はそれほど高くないことが予想されたが、調査の結果、予想以上の数の遺構が検出された。調査は、天候にも恵まれ順調に進めることができた。なお、大部分の遺構検出を終え、遺跡の概要が明らかになってきた頃の５月16日には埋蔵文化財専門委員会を現地において開催し、指導・助言を得た。この第三次調査をもって、おかやまファーマーズ・マーケット建設に伴う発掘調査を完了した。検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

遺構　竪穴住居７・建物３・段状遺構20・土壙１・溝１など

遺物　弥生土器・須恵器・石器



第４図　小中遺跡ほか調査範囲図（1/4,000）

(5) 日　誌　抄

第一次調査（平成５年度）

７月　１区・２区トレンチ調査

８月　３区・４区トレンチ調査

９月　４区トレンチ調査

第二次調査（平成５～６年度）

（平成５年度）

10月　１区Ａ・２区Ａ調査

11月　３区Ａ調査開始

12月　３区Ｂ調査開始

（平成６年度）

１月　３区Ａ・Ｂ調査

２月　埋蔵文化財専門委員会開催

３月　３区Ａ・Ｂ調査終了

４月　１区Ｃ・白迨１号墳調査

５月　１区Ｄ・白迨１号墳調査

埋蔵文化財専門委員会開催

６月　１区Ｄ・白迨１号墳調査

７月　１区Ｇ調査

８月　１区Ｇ調査

９月　１区Ｇ調査

10月　１区Ｈ調査、現地説明会開催

埋蔵文化財専門委員会開催

埋蔵文化財現地打合せ会

11月　１区Ｈ・Ｅ調査

12月　４区Ａ・Ｂ調査

１月　４区Ａ・Ｃ調査

２月　４区Ａ・Ｄ、１区Ｆ・Ｉ調査

３月　４区Ａ・Ｅ・Ｇ、５区調査終了、撤収

第三次調査（平成８年度）

４月　４区Ｆ調査開始

５月　４区Ｆ調査

埋蔵文化財専門委員会開催

６月　４区Ｆ調査終了、撤収

(6)　発掘調査および報告書作成の体制

平成5年度発掘調査体制

岡山県教育委員会
教　育　長　森崎岩之助
教育次長　岸本　憲二
文　化　課
課　長　渡邊　淳平
課長代理　松井　新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）　高畑　知功
主　査　時長　勇

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　横山　常實
次　長　葛原　克人
総務課長　北原　求
課長補佐(総務係長)　小西　親男
主　査　石井　茂
主　査　石井　善晴
主　任　三宅　秀吉

調査第一課長　正岡　睦夫
課長補佐(第二係長)　山磨　康平
文化財保護主事　山本　昌彦
文化財保護主事　氏平　昭則
主　事　速水　章人
主　事　瀧川　明徳

平成6年度発掘調査体制

岡山県教育委員会
教　育　長　森崎岩之助
教育次長　岸本　憲二
文　化　課
課　長　大場　淳
課長代理　松井　新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）　高畑　知功
主　任　若林　一憲

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　河本　清
次　長　葛原　克人
総務課長　丸尾　洋幸
課長補佐(総務係長)　杉田　卓美
主　査　石井　善晴
主　任　三宅　秀吉
調査第一課長　正岡　睦夫
課長補佐(第二係長)　岡田　博

文化財保護主幹　浅倉　秀昭
文化財保護主査　二宮　治夫
文化財保護主査　渡辺　武仁
文化財保護主任　山田　明信
文化財保護主任　大柳　浩
文化財保護主事　伊東　孝
主　事　尾上　元規
主　事　杉山　一雄

平成7年度報告書作成体制

岡山県教育委員会
教　育　長　森崎岩之助
教育次長　黒瀬　定生
文　化　課
課　長　大場　淳
課長代理　樋本　俊二
参　事　葛原　克人
課長補佐（埋蔵文化財係長）　高畑　知功

主　任　若林　一憲
岡山県古代吉備文化財センター
所　長　河本　清
次　長　高塚　恵明
次　長　葛原　克人(文化課本務)
総務課長　丸尾　洋幸
総務主幹　守安　邦彦
課長補佐(総務係長)　井戸　丈二

主　査　石井　善晴
主　任　木山　伸一
調査第二課長　伊藤　晃
課長補佐(第一係長)　井上　弘
文化財保護主幹　浅倉　秀昭
文化財保護主査　二宮　治夫

整理協力者　井上弘子・田中淑子・丸山啓子・山本千恵子

平成8年度発掘調査・報告書作成体制

岡山県教育委員会
教　育　長　森崎岩之助
教育次長　黒瀬　定生
文　化　課
課　長　大場　淳
課長代理　松井　英治
参　事　葛原　克人
課長補佐（埋蔵文化財係長）　平井　勝

主　査　若林　一憲
岡山県古代吉備文化財センター
所　長　河本　清
次　長　高塚　恵明
次　長　葛原　克人(文化課本務)
文化財保護参事　正岡　睦夫
総務課長　丸尾　洋幸
総務主幹　守安　邦彦

課長補佐(総務係長)　井戸　丈二
主　査　木山　伸一
調査第三課長　柳瀬　昭彦
課長補佐(第三係長)　岡田　博
文化財保護主任　高田恭一郎
主　事　尾上　元規

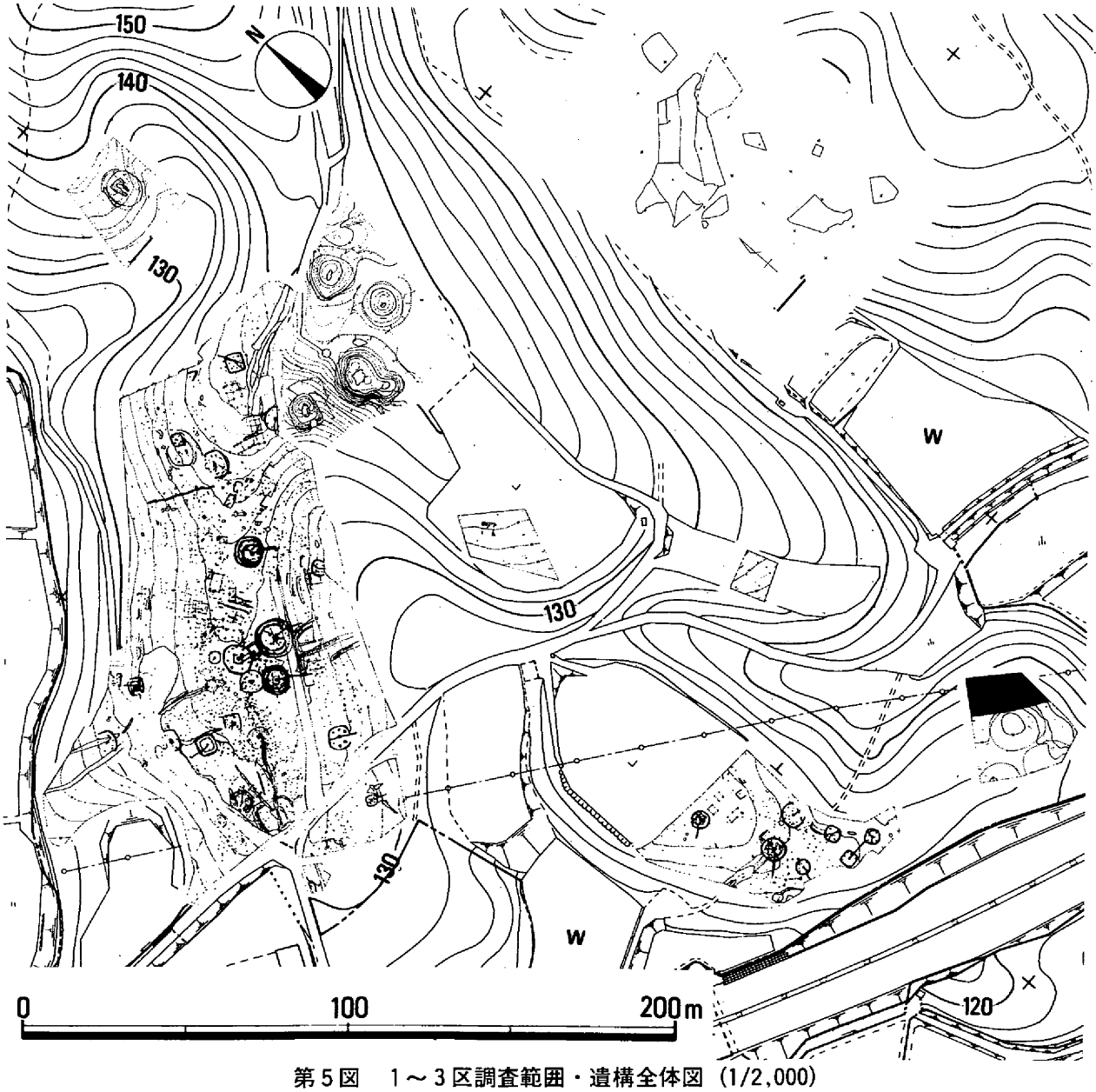
Ⅲ　調査の概要

(1)　1区の調査

小中遺跡は北東から南西にかけて袖広がりの形状を呈する舌状にのびた丘陵上に位置する。本遺跡の南側は昭和47年・48年度にかけて中国自動車道に伴って発掘調査が行われた小中遺跡である。また、丘陵はいくつかの谷によって区切られている。

遺跡の確認調査は平成5年度に行ない、その結果、調査区を9区画（A～I）設定し、順次全面調査を行った。調査区内は、国土地理院座標系の東西軸・南北軸座標値を設定し、これを基軸とし一辺10m四方の区割りを設定した。

調査の結果、この丘陵上は近世における開墾によりかなりの削平を受けていることが確認された。

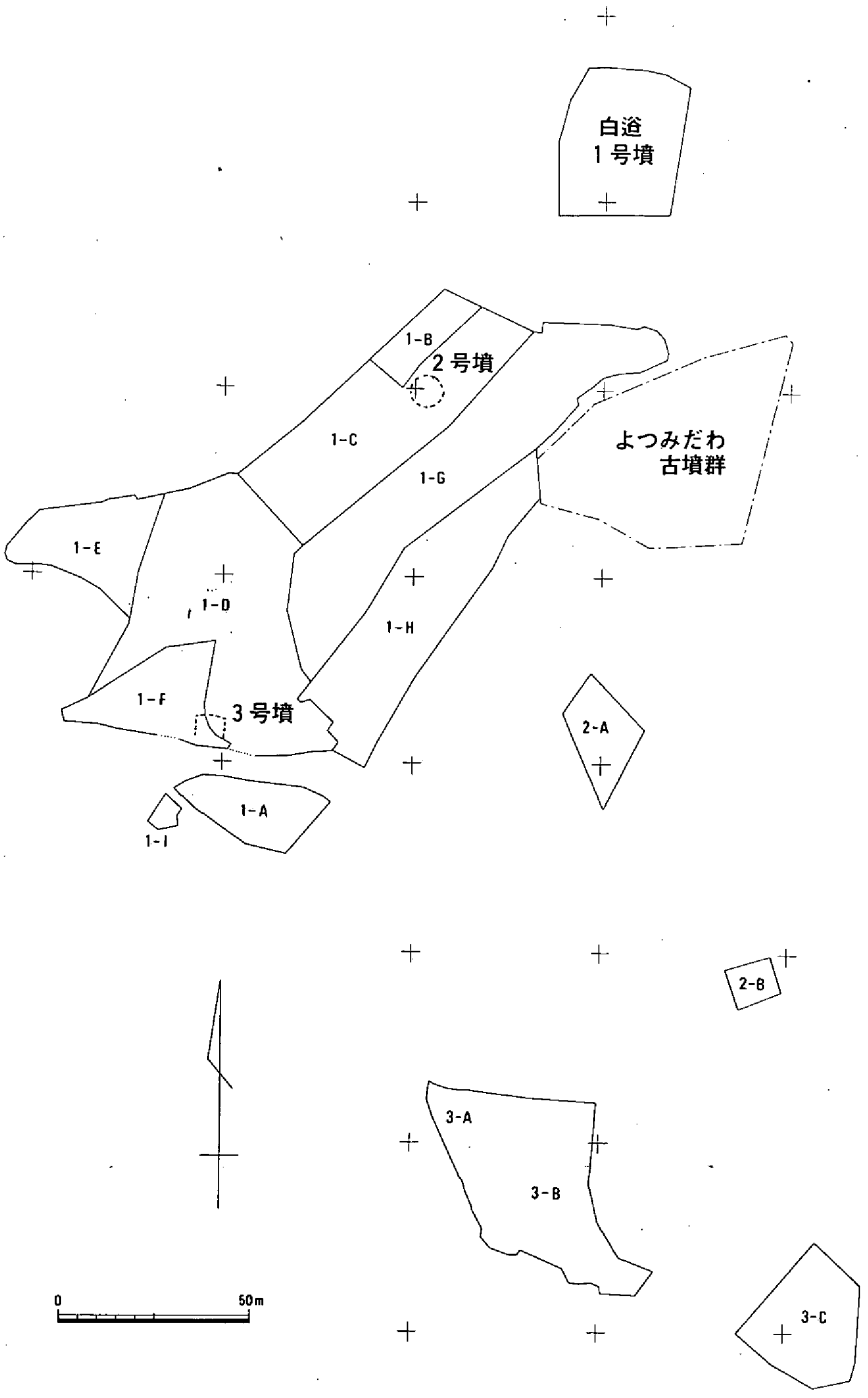


第5図　1～3区調査範囲・遺構全体図（1/2,000）

調査区の北東部には4基からなる「よつみだわ古墳群」と人工的な谷を隔てて横穴式石室を有した「白迮古墳」が存在している。

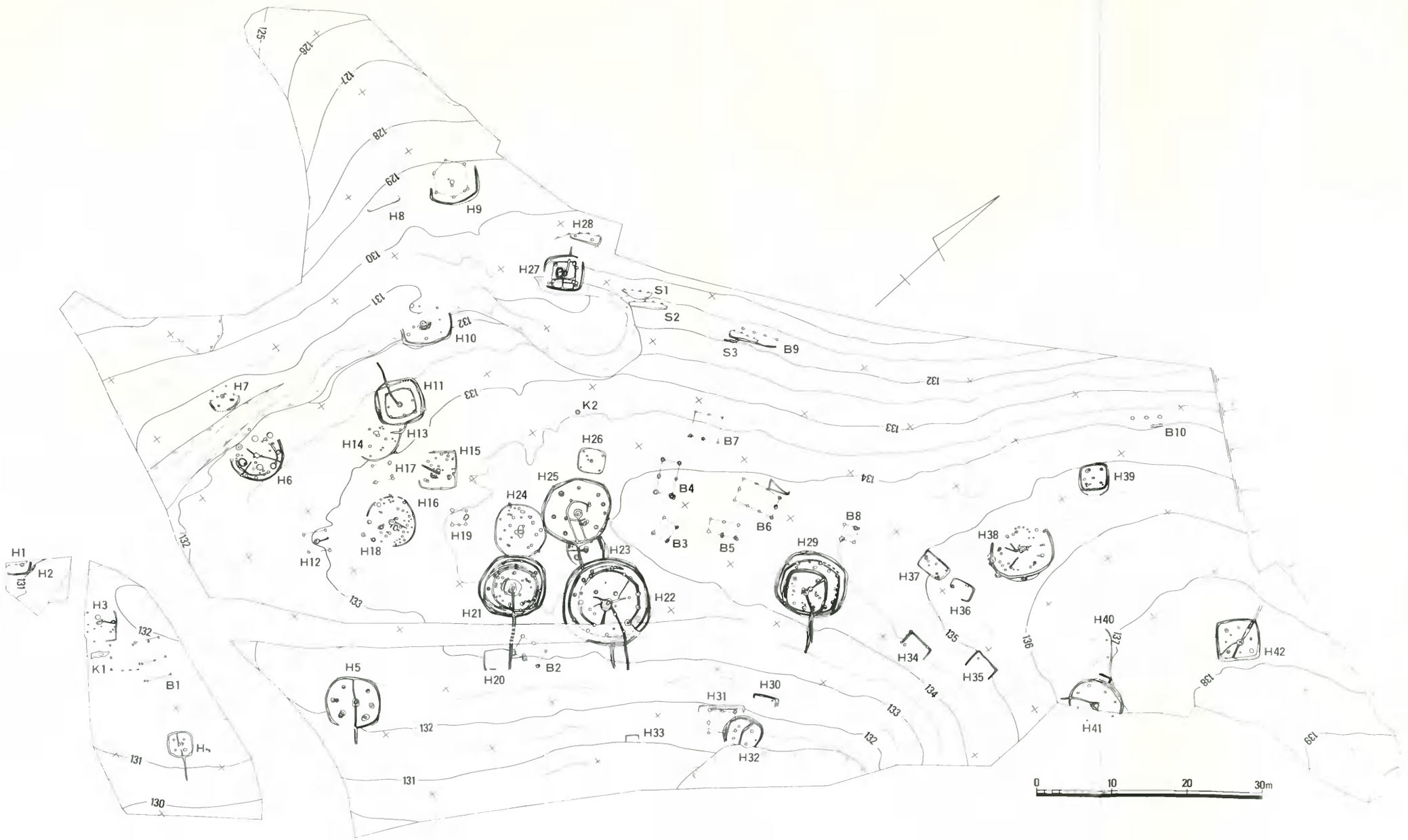
遺構はAからⅠにかけて弥生時代後期を中心とした竪穴式住居が確認され、それも丘陵線上に多く認められた。さらにはC、Fにおいて円墳・方墳（いずれも主体部を欠くもの）を検出している。中～近世の遺構はまばらに点在していた。中でも近世の土壙墓は、調査区北東（C）部を中心として検出されている。

このように遺構の確認はできたものの、丘陵全体（谷部方向も含む）の開墾が著しく進行しているため、斜面部・稜線上にかなりの柱穴等が纏りがたい遺構が散在していた。



第6図　調査区割図（1/2,000）

第７図　１～３区遺構配置図（1/1,000）・区割図（1/5,000）



第8図　1区竪穴住居・建物配置図（1/500）

1．竪穴住居

竪穴住居1・2（第9図・図版1－1）

1区Iで丘陵南西端部に位置し、重複して検出された住居址である。南西側は現町道に、南東側は開墾により切られ消滅している。

残存する部分から想定し、竪穴住居2はほぼ円形、竪穴住居1は方形の形態を呈すると思われる。

竪穴住居2は壁体溝の一部のみ残存であり、断面形は浅い「U」字状。1は全体の約6分の1程度と考えられる残存状況で、床面で直径50cm、深さ45cmの円形の柱穴1本が検出されいている。

出土遺物は竪穴住居2から鉄製品（鉋）・高杯の出土をみた。

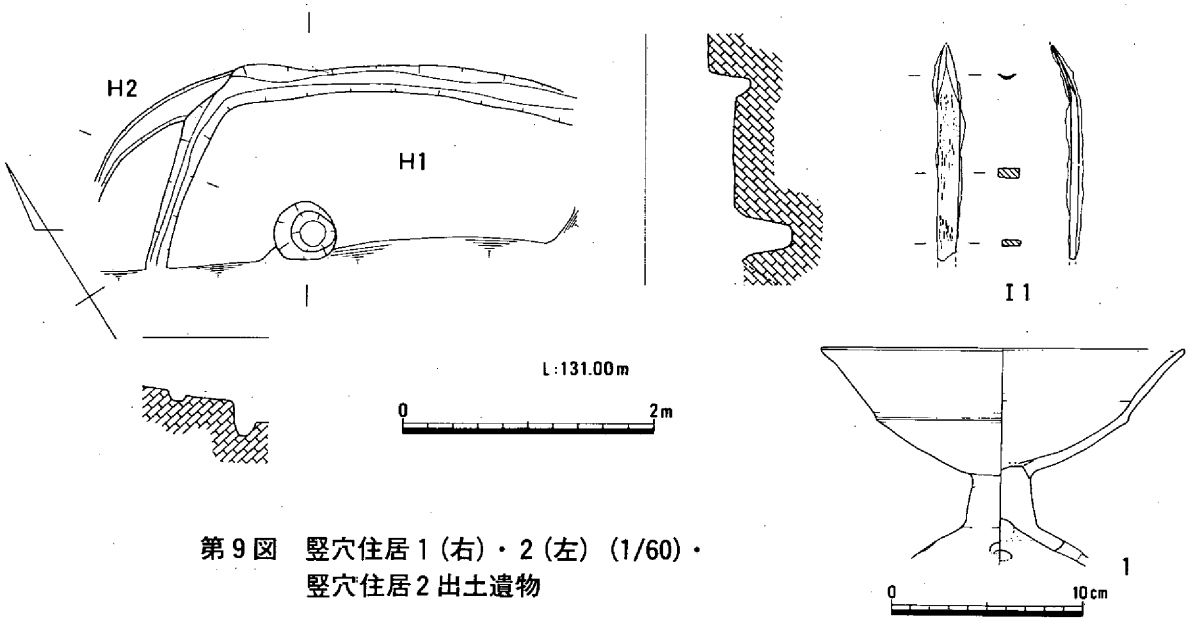
時期は弥生時代後期末に属するであろう。

竪穴住居3（第10図、図版1－3）

1区Aで住居1・2の北東で、南にゆるやかな斜面に位置するが、中央部付近より南西側は開墾により床面・溝等は消滅し、柱穴を残すのみであった。

本住居は4本の柱を有していたものであろうが、北隅の柱は伐根により消滅、残る3本の柱穴と壁体溝から想定して、北東―南西に長軸を持つ方形の竪穴住居と云うことができよう。ちなみに柱間は南東辺で310cm、南西辺は265cmである。

さらに住居内には、中央に火所、北東壁体溝中央部分から中央火所に向け一条の溝が走り、中央より南西に向け抜けている。



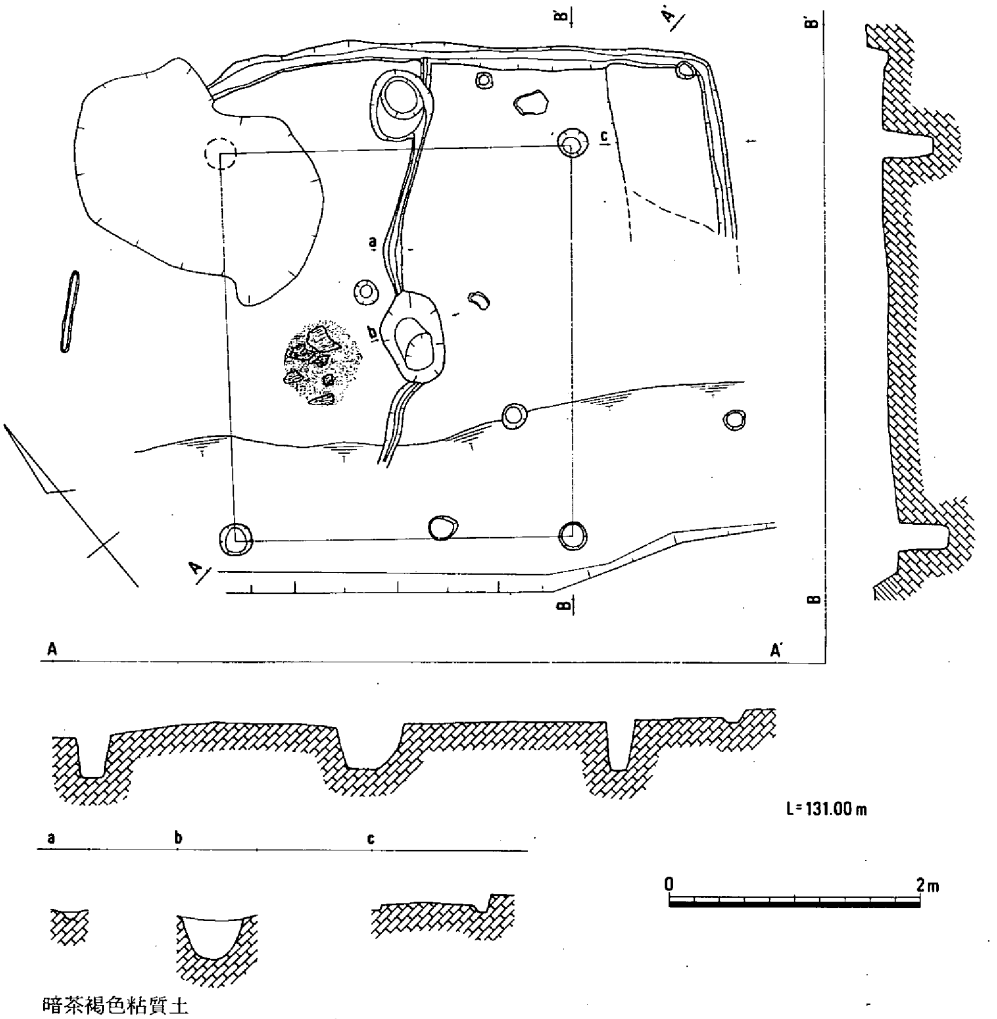
第9図　竪穴住居1（右）・2（左）（1/60）・竪穴住居2出土遺物

また住居の南東辺では、住居床面よりわずかにではあるが高まりが認められた。いわゆるベッド状遺構と呼ばれるものであろう。

出土した土器片から弥生後期に属すると考えられる。

竪穴住居4（第11図、図版2－1・2）

1区Aで南東に下がる緩斜面にあり、竪穴住居3の東に位置している。



第10図　竪穴住居３（1/60）

この住居の平面形態で南角部が円形を呈するものの方形の形状を呈した住居であり、壁高は最大で約50cm程度残存していた。

この住居は火災を受けており、埋土中には炭化物片・焼土塊等が多く含まれ、床面直上にはかなりの範囲にわたって焼土が認められた。残りの良い炭化材は住居の周縁より中心部に向けた格好で傾倒している。平面図におけるドットの部分は焼土が点在していた。

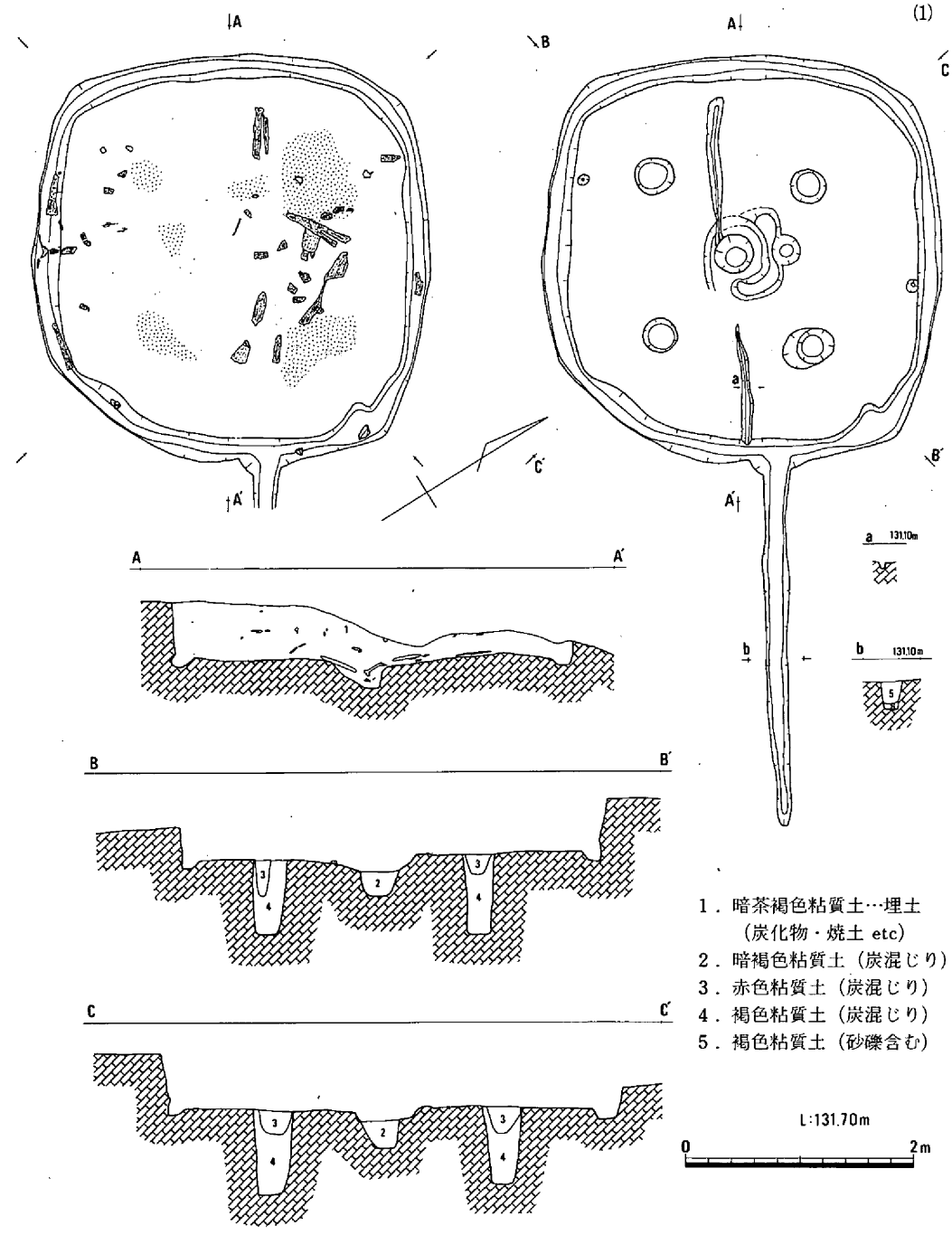
住居屋内には、主柱穴・中央穴・壁体溝・さらにその溝から中央にかけての溝からなっている。柱間は130cm～140cm、深さは65cm～70cmを測る。中央穴は住居のほぼ中央で、南西側で途切れた土手状の高まりを持ち、深さは35cmを測った。また屋外には南西斜面の方向に壁体溝から溝が延びて、先細りで終るものである。屋内の中央穴から南西壁に延びている溝は、断面形から想定するならば、暗渠となっていた可能性を示している。

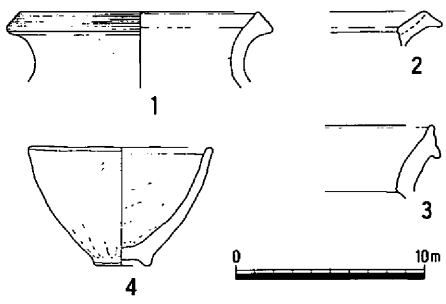
遺物は床面直上からの検出は認められなかったが、図示された埋土中の遺物から、弥生時代後期に位置づけられる。

竪穴住居５（第12図、図版２－３）

１区Ｄの南東部で南東斜面に面した所に位置する。南東部の一部は表土掘削中に消滅したものである。

住居の平面形態はやや隅丸方形ぎみの五角形状を呈し、丘陵にそって長軸を有し550cm、短軸520cm





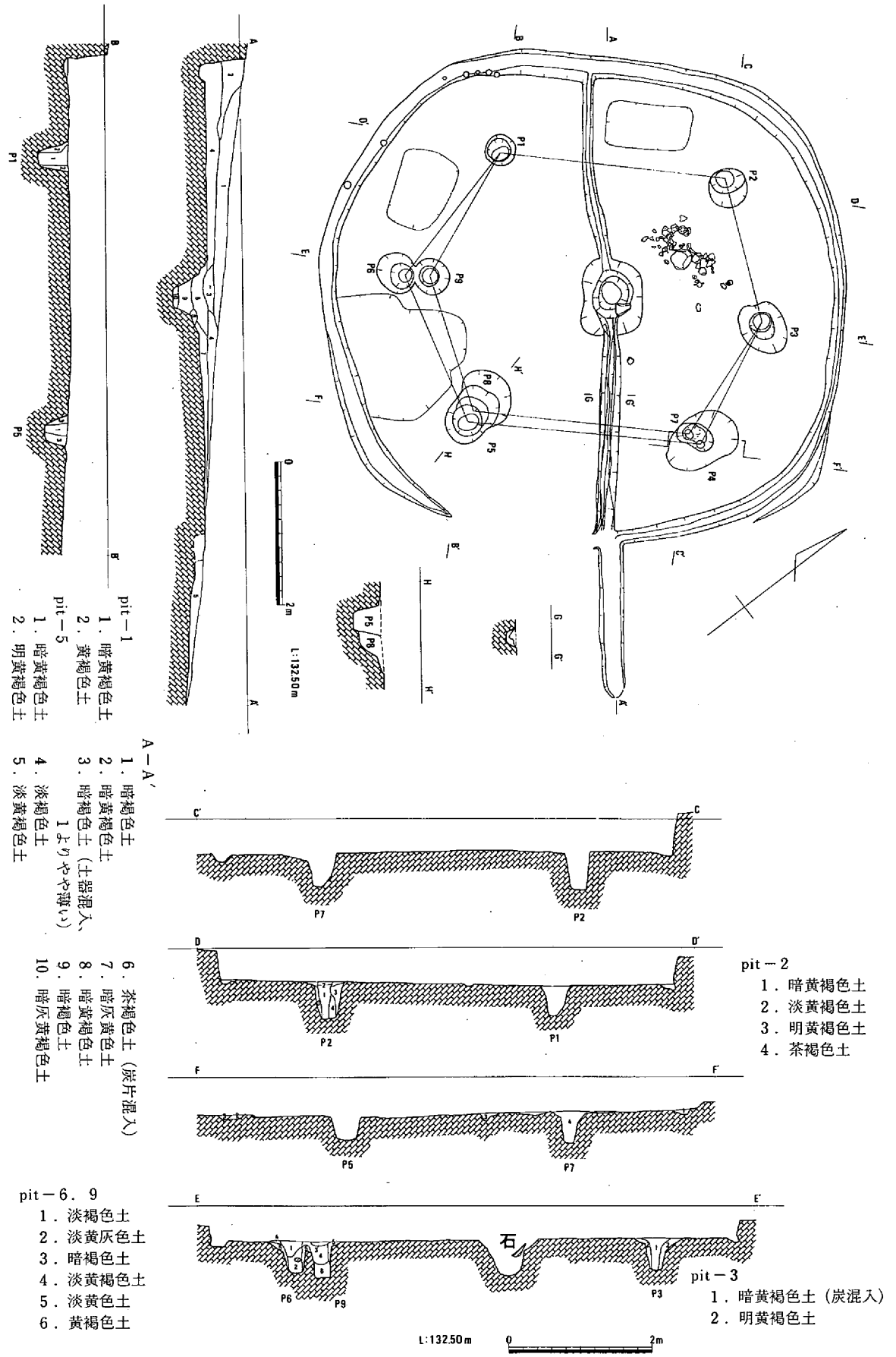
第11図　竪穴住居４（1/60）・出土遺物

を測り、壁高は最大で約45cm程残存していた。

この住居は２回の建て替えがなされているが柱穴は同一のものが使用された住居もある。住居の屋内には柱穴・中央穴・壁体溝・中央穴へ向かった溝、またそこから南東壁体溝へと延びる溝、さらに長方形の浅い窪みが認められた。検出された柱穴は６本で、いずれもが重複し、ほぼ左右対称的な配列を示している。中央穴から南東に出ている溝においても３重となっていた。

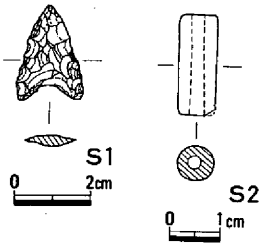
屋外遺構は、中央穴より延びた溝が、壁体溝部分で一段下がりさらに南東に延び、丸みをもって終っている。その断面形は「U」字状を示していた。

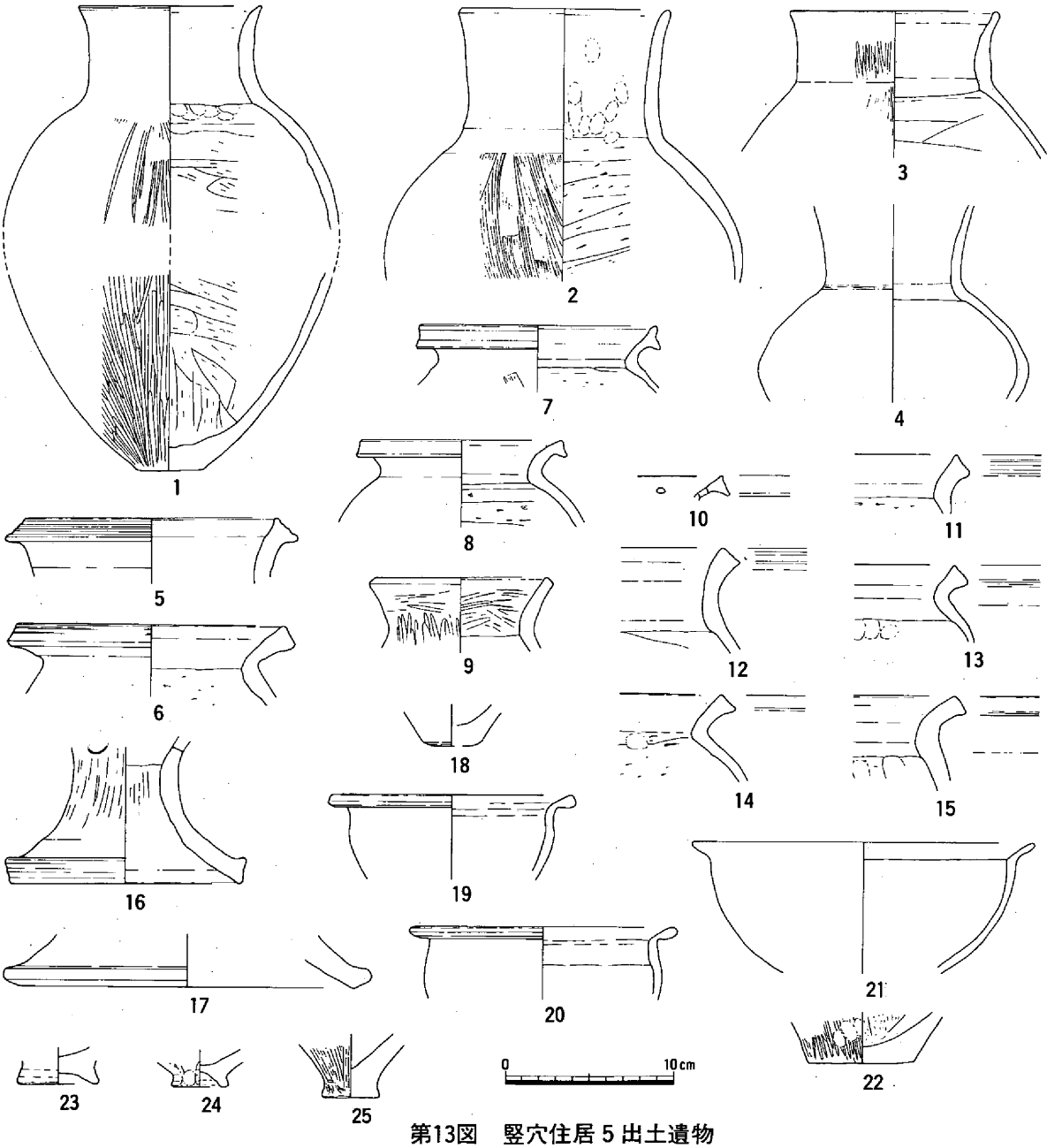
住居柱間はＰ１－Ｐ２が235cm、Ｐ２－Ｐ３は155cm、Ｐ３－Ｐ４は140cm、Ｐ４－Ｐ５は240cm、Ｐ



第12図　竪穴住居5（1/80）

5－P6は165cm、P6－P1は175cmであり、さらに、P3－P7が140cm、P7－P8は225cm、P8－P9は145cm、P9－P1で150cmを測る。床面からの深さは25cm～40cmを測った。現状での中央穴は不整隅丸長方形を呈するが、本来は円形を示していたと思われる。また、北東面には板状の石皿（？）がはりついていた。





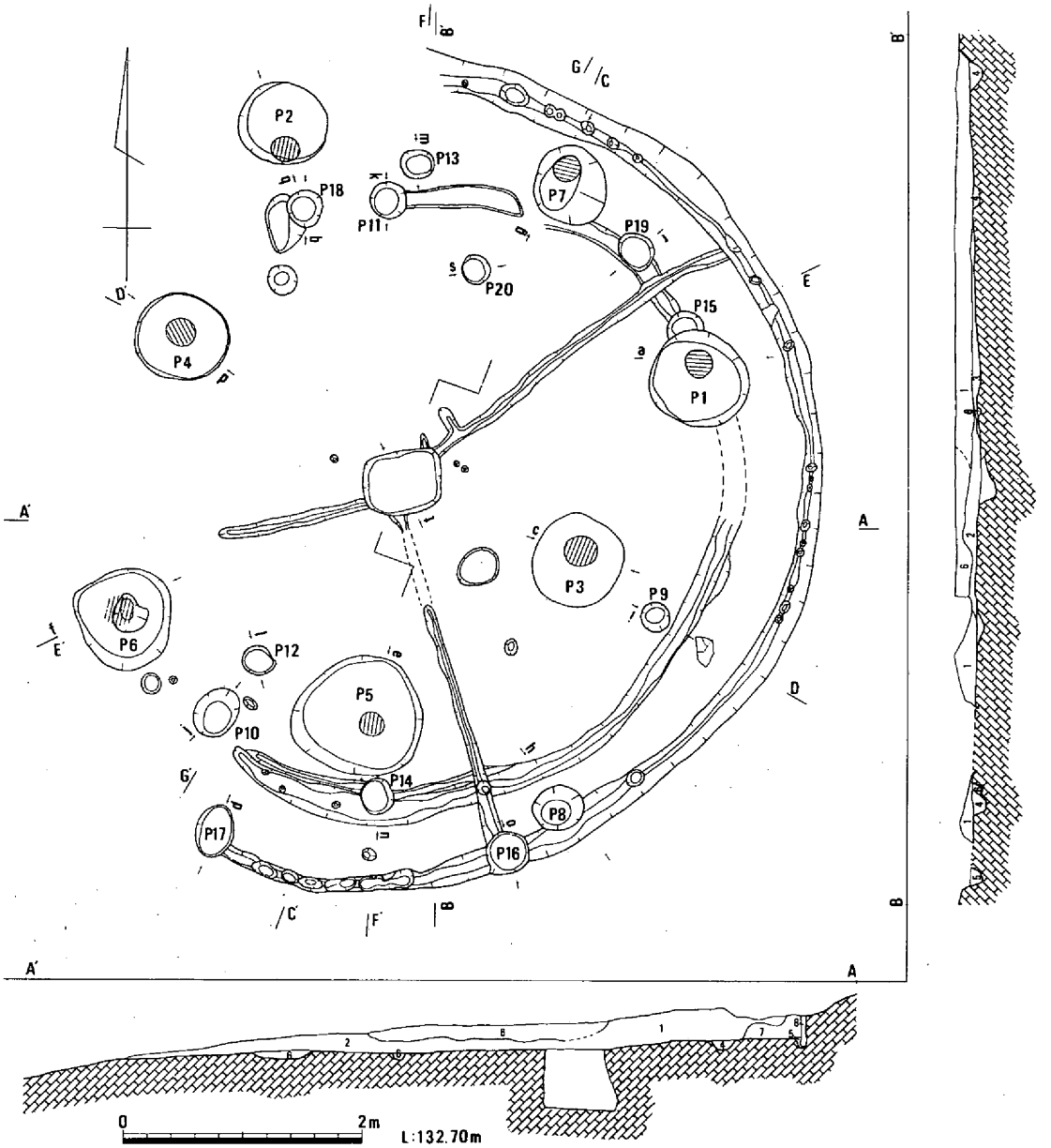
第13図　竪穴住居5出土遺物

遺物は覆土中が大部分で、床面直上からは、壺・甕等が出土している。これらから時期は弥生時代後期に比定されよう。

竪穴住居6（第14図、図版3）

1区Fの東部に位置する。竪穴住居の西側は近代の山道により切り取られ消滅している。

残存している壁体溝から想定しての平面形態はやや歪な形状を示す円形を呈する。住居の北東一南西での最大径は710cmを測る。検出された床面までの壁高は最大で約20cm程残っていた。



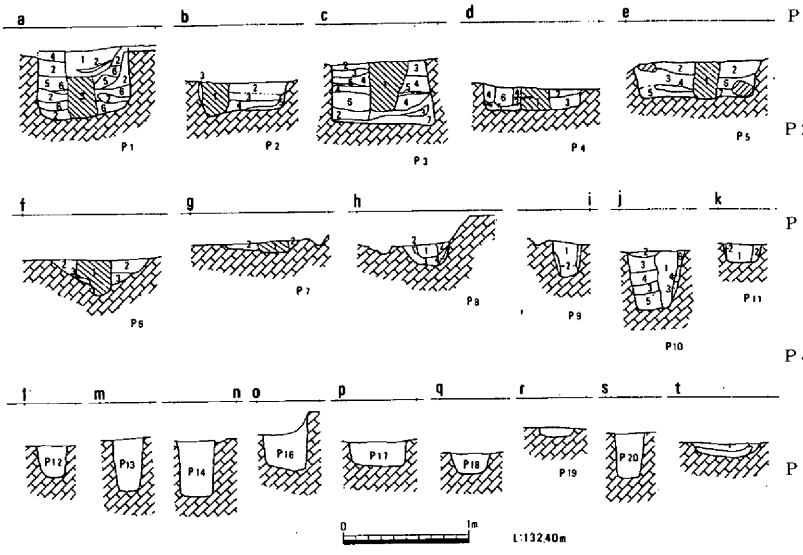
1．褐灰色土
2．暗褐灰色土（床面付近に炭の散布が見られる）
3．にぶい黄褐色土（貼床）一部分的に暗褐色土を混じえて締めつけている。
4．にぶい黄褐色土
5．暗褐灰色土
6．黒褐色土
7．にぶい黄褐色土
8．暗褐色土（黒みが強い）→板材痕か？

第14図　竪穴住居６（1/60）

住居は２軒が重複しており、内側の住居は径約510cmを測るものである。

住居は内側の小型が古いもので、４本柱を持つものであろうが北西部を除く３本が検出されたにすぎない。また中央部も重複の可能性がある。次いで大型の住居の屋内には、変則的な配列を示した柱穴が７本・隅丸長方形で浅い中央穴・壁体溝・さらには壁体溝から中央穴に向けての３方向（北東、南々西、西）からの溝が検出されている。この検出された７本の柱穴は最小で60cm、最大で105cm、深さはまちまちで、浅いもので10cm、最も深いもので50cmを測る。20cm前後を測る柱根跡を確認することができた。さらに、柱穴埋土は、版築状に埋めもどしが行われたことも確認された。

出土遺物（第16図）は石鏃・砥石・石皿・甕・高杯等である。これらから弥生時代後期に属する時期と考える。



P1　1．黒褐色土
2．黒褐色土（黒褐色多く、黄褐色土少ない）
3．褐灰色土
4．にぶい黄褐色土
5．暗褐色土（黒色土少ない）
6．黄褐色土（地山ブロックが締められている）

P2　1．黒褐色土
2．褐灰色土
3．灰褐色土
4．黒褐色土（粘性がある）
5．橙褐色土（粘性やや低い）

P3　1．黒褐色土
2．にぶい黄褐色土（ナメラ礫多含）
3．暗褐灰色土（ナメラ礫少含）
4．暗褐灰色土
5．黄褐色ナメラ礫層
6．ナメラ礫層
7．黒褐色土（粘性高い）

P4　1．黒褐色土（柱痕）
2．灰褐色土（地山粒の層）
3．2層よりやや暗い（地山粒の層）
4．暗灰褐色土
5．暗褐灰色土
6．灰褐色土（後世のピット痕）

P5　1．黒褐色土
2．オリーブ色土
3．ナメラ礫層（5～6㎝大のナメラ石を多含）
4．ナメラ礫層（黄色ナメラを中心とした層）
5．ナメラ礫層（橙色ナメラ中心、1～2㎝大のナメラ石を多含）
6．オリーブ色土（2～3㎝大のナメラ石を多含）
7．暗オリーブ色土（土を主とした層）

P6　1．黒褐色土
2．にぶい黄褐色土
3．にぶい黄褐色土（ナメラ礫少含）

P7　1．黒褐色土
2．にぶい橙色ナメラ層

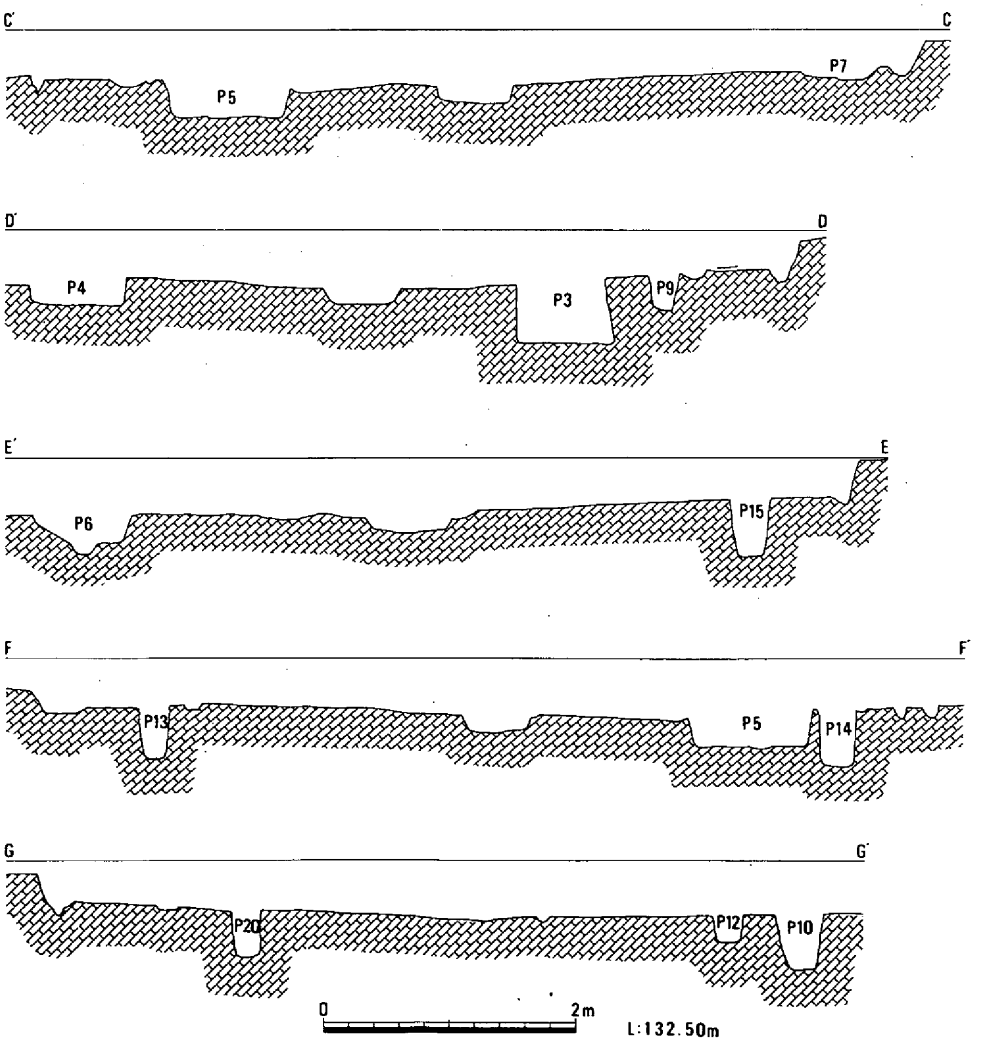
P8　1．暗褐灰色土
2．褐灰色土
3．黄褐色ナメラ層
4．黒褐色土

P9　1．暗褐灰色土
2．にぶい橙色ナメラ層

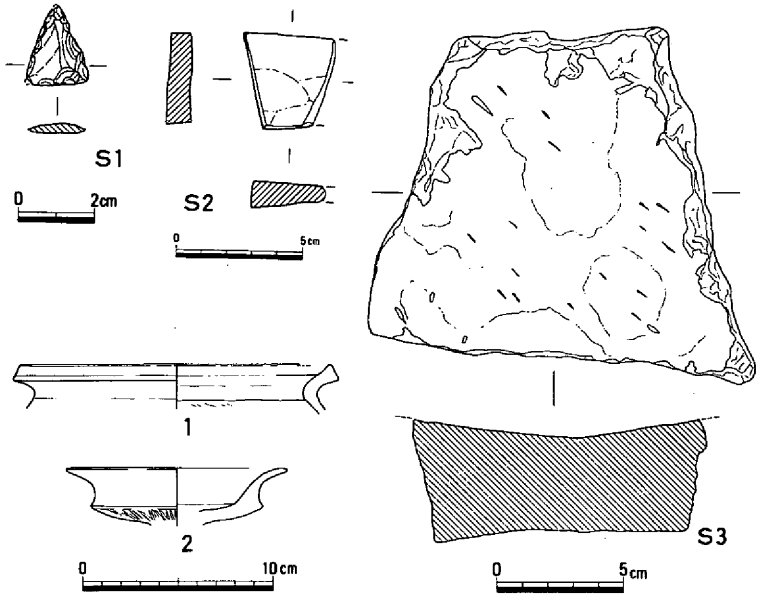
P10　1．暗褐灰色土（ナメラ礫少含）
2．灰褐色土
3．暗褐灰色土（ナメラ礫少含）
4．ナメラ礫層
5．暗褐灰色土
6．にぶい橙褐色土

中央穴　1．褐灰色土
2．暗褐灰色土

P11　1．暗褐灰色土
2．にぶい黄褐色土（暗褐灰色土混じり）



第15図　竪穴住居6断面図（1/60）

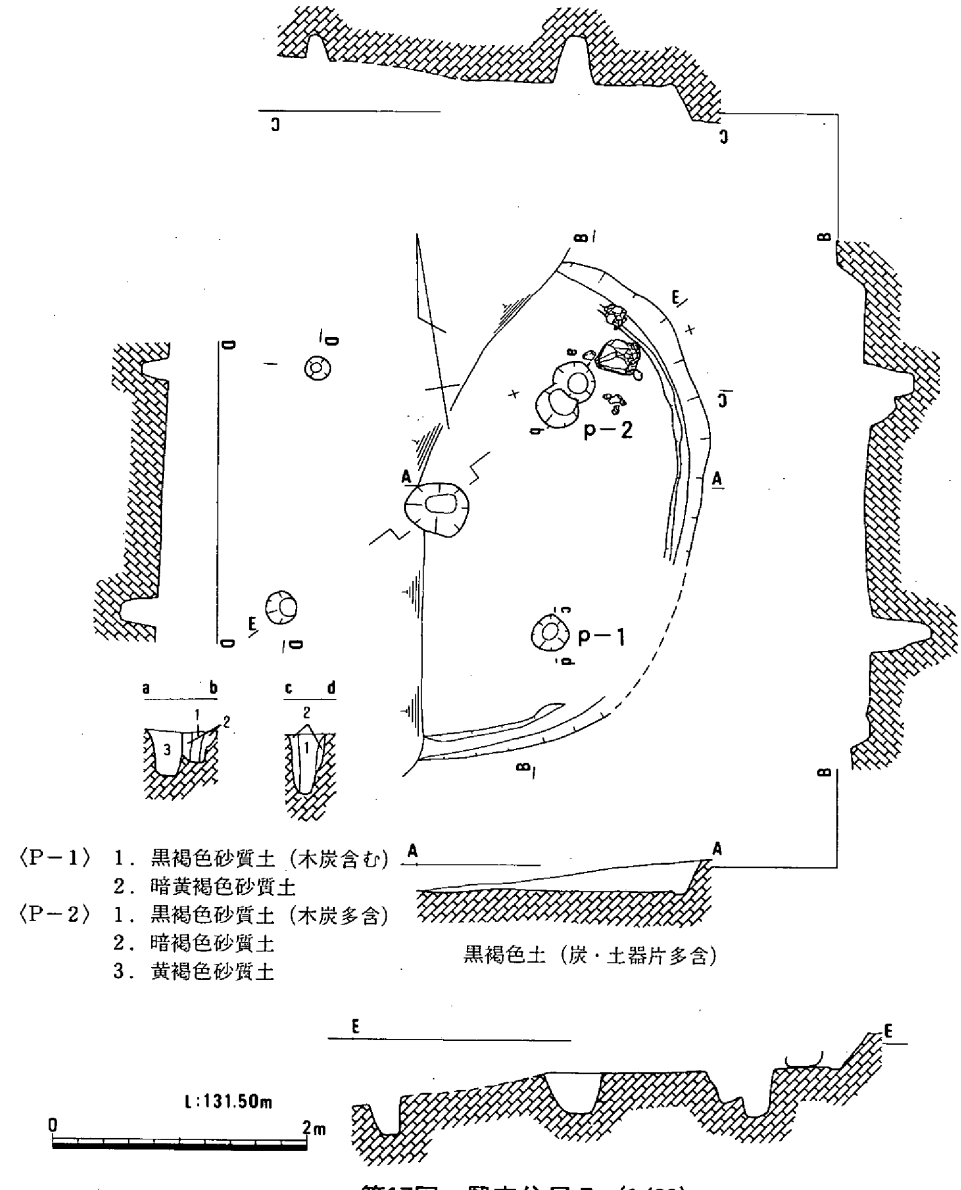


第16図　竪穴住居６出土遺物

竪穴住居７（第17図、図版４－１・２）

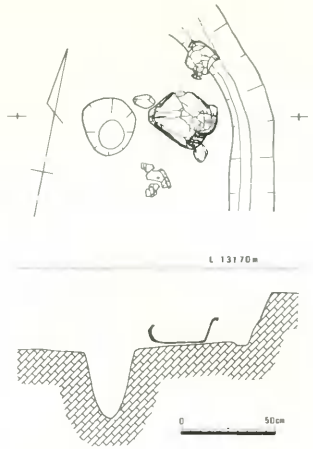
竪穴住居６の西側に位置する住居址であり、北西側約半分は近代の開墾等によって削平が行われたことにより消滅している。

現存している壁体溝から推察した平面形態はほぼ円形を呈すると思われる。壁体はゆるやかに外傾して立ち上がり、検出面から床面までの深さは約25cmを



〈P－1〉　1．黒褐色砂質土（木炭含む）
　　2．暗黄褐色砂質土
〈P－2〉　1．黒褐色砂質土（木炭多含）
　　2．暗褐色砂質土
　　3．黄褐色砂質土

第17図　竪穴住居７（1/60）



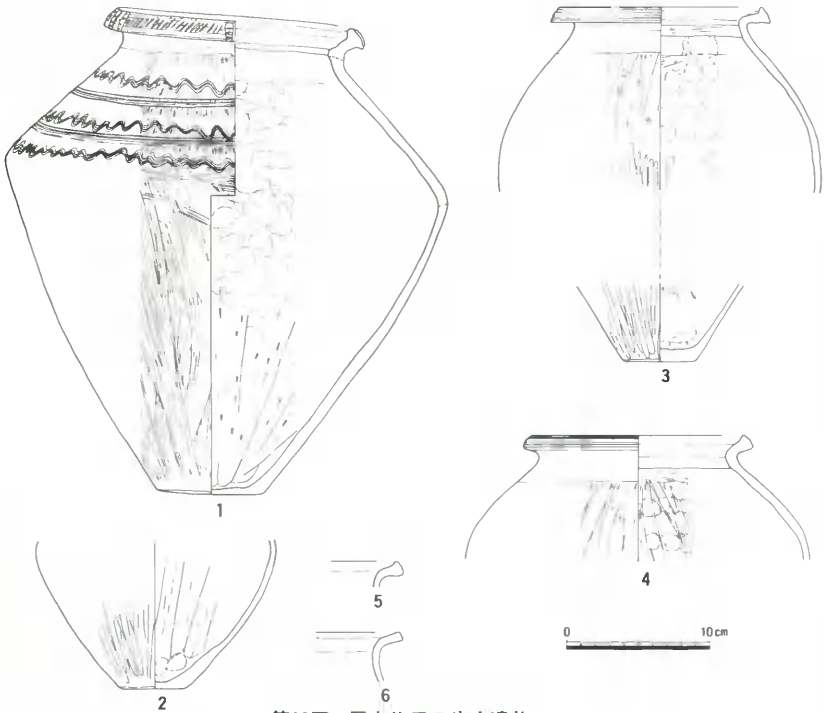
第18図　竪穴住居７内遺物（1/30）

測った。

この住居は火災を受けているかのように埋土中には炭化物等を多く含まれていた。

屋内には主柱穴・中央穴・壁体溝が確認されており、柱間は東西方向の南北共に205cm、南北方向西側で190cm、東側では北東柱穴が建替えがあるが、180cmと200cm、検出面での径は20cm～30cmの円形、深さは20cm～45cm、中央穴は歪な不整楕円形を呈し、30cmの深さを測った。P1と壁体溝の間の床面直上と壁体溝内上に第19図の遺物を検出している。

遺物は住居埋没覆土中にかなりの破片が存在しているが、床面直上の遺物が時代を決める資料となろう。この土器から、時期は弥生時代中期中葉に位置づけられよう。



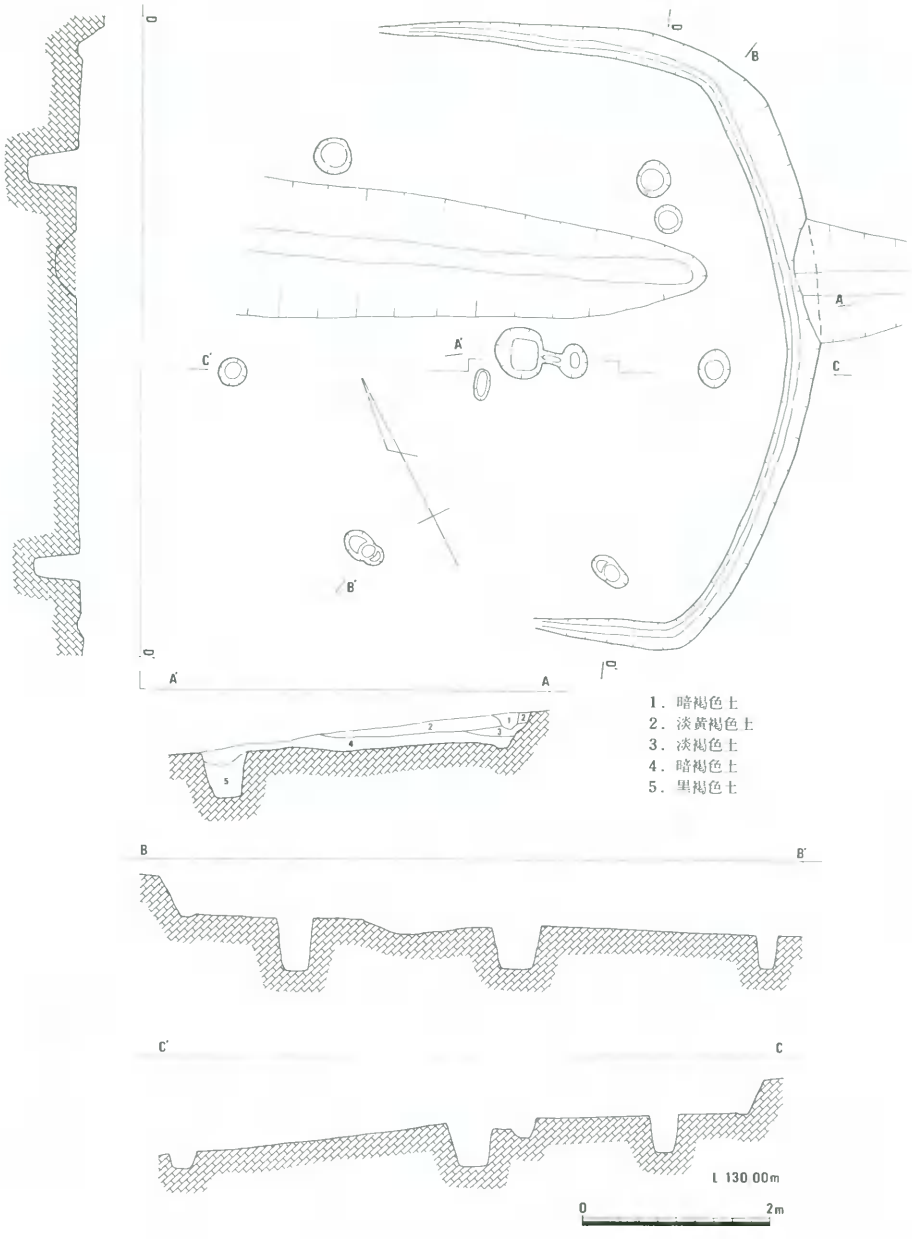
第19図　竪穴住居７出土遺物

竪穴住居８（第８図）

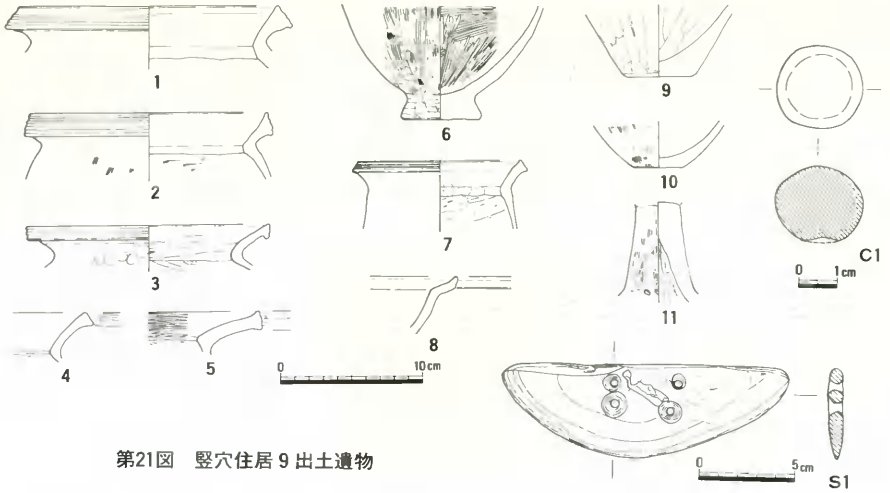
１区Ｅで西部に延びた尾根上に位置し、検出された遺構は壁体溝のみであり、形状から住居の平面形態は方形となるであろう。時代を決定づける遺物等は確認されていない。

竪穴住居９（第20図、図版４－３）

１区Ｅの北東部に位置する。北西部の半分が開墾等により削平、さらに住居の長軸方向にそって中央より北側を中世の道によって切られている。



第20図　竪穴住居９（1/60）



第21図　竪穴住居９出土遺物

平面形は北東－南西に長軸を有した６角形を呈すると思われる。推定長軸約720cm、短軸約650cm、検出面から床面までは最大で35cm程残っていた。

この住居は主柱穴６本、中央穴２、壁体溝からなり、柱間は210cm～330cm位とまちまちであり、その径は25cm～40cmで円形、楕円形、検出面からの深さも20cm～50cmを測った。中央穴は隅丸方形と円形が溝でつながり深さも20cmと50cmである。

遺物は覆土中がほとんどで、床面直上のものは少ない（第21図）。Ｃ１は土製品である。時期は、弥生時代後期に属する。

竪穴住居10（第22図、図版５－１）

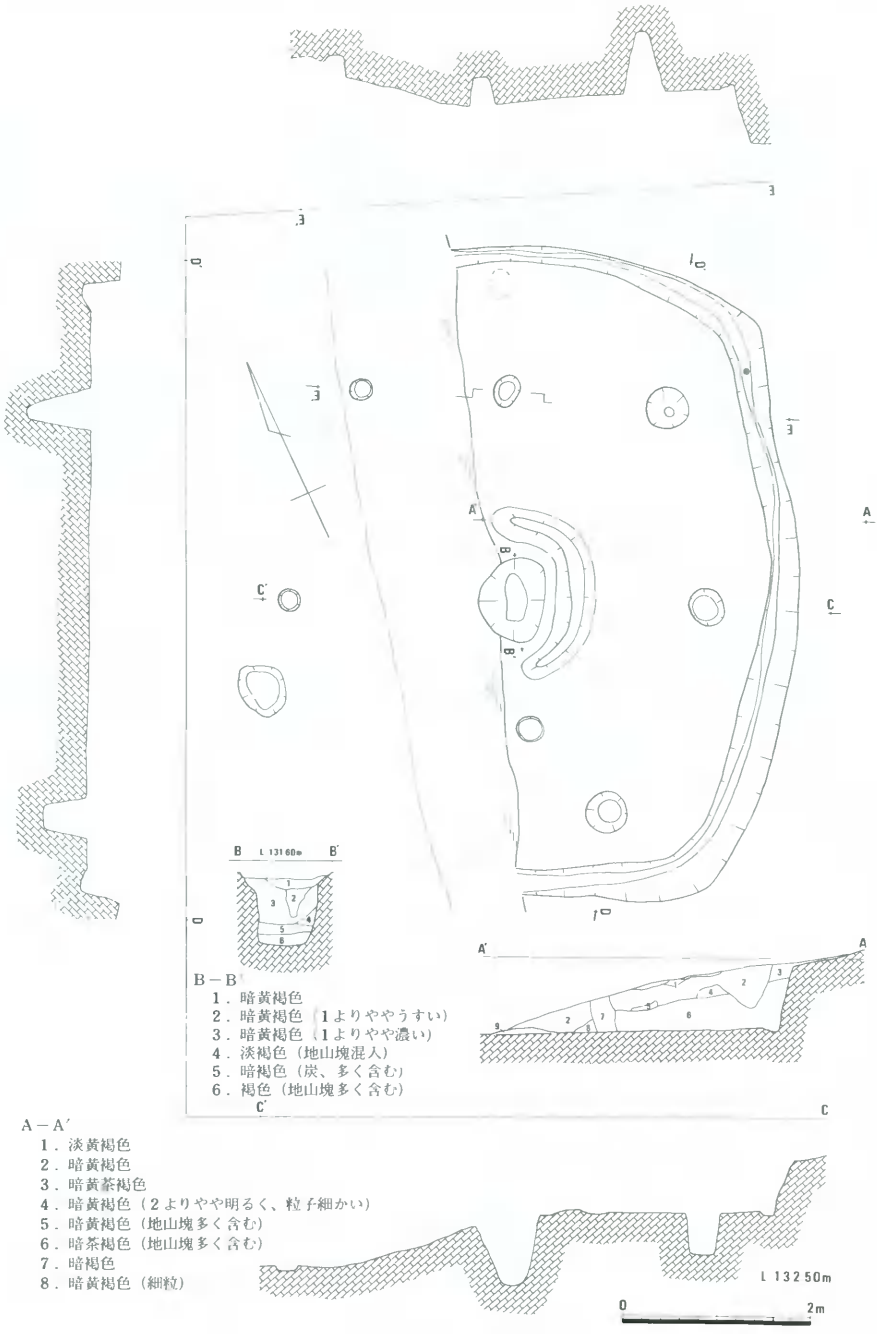
１区Ｄ南西斜面の中程に位置する。住居址は約半分が残存し、北西部側が近代の山道で切られ消滅している。残存部から全体を推定した場合の平面形態は胴張りの方形を呈する。

本住居の屋内施設は柱穴（おそらく８本）・中央穴・壁体溝からなっている。検出面での柱穴径は20cm～45cm、深さ５cm～65cmを測る。壁体溝は浅い「Ｕ」字形の断面を示す。さらに壁は垂直に立ち上がり、外反状に広がる。深さは約70cmを測った。また中央穴は、不整長楕円形を呈し、75cmの深さを有し、南東側には「コ」字状に高まりが確認されている。第24図の出土遺物から弥生時代後期に属する時期と考えている。

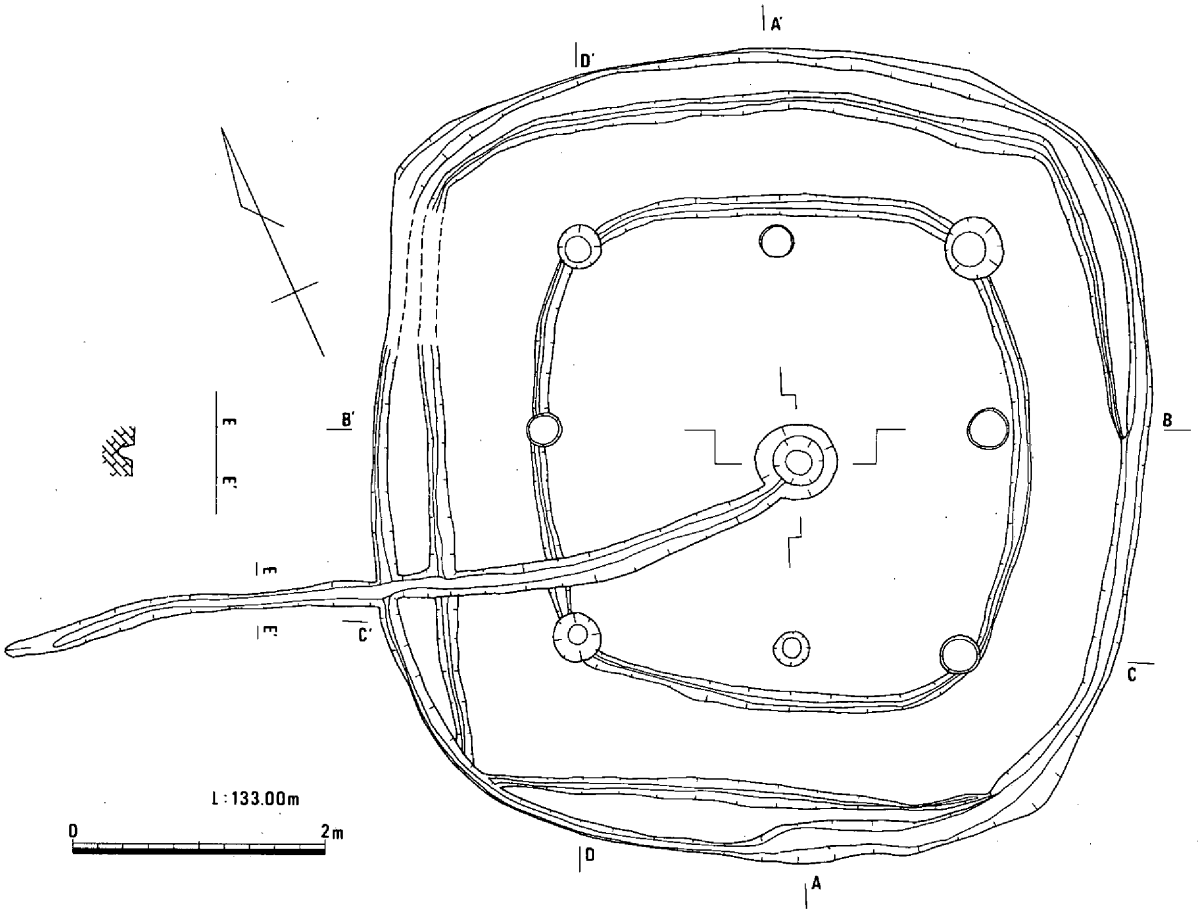
竪穴住居11（第23図、図版５－２）

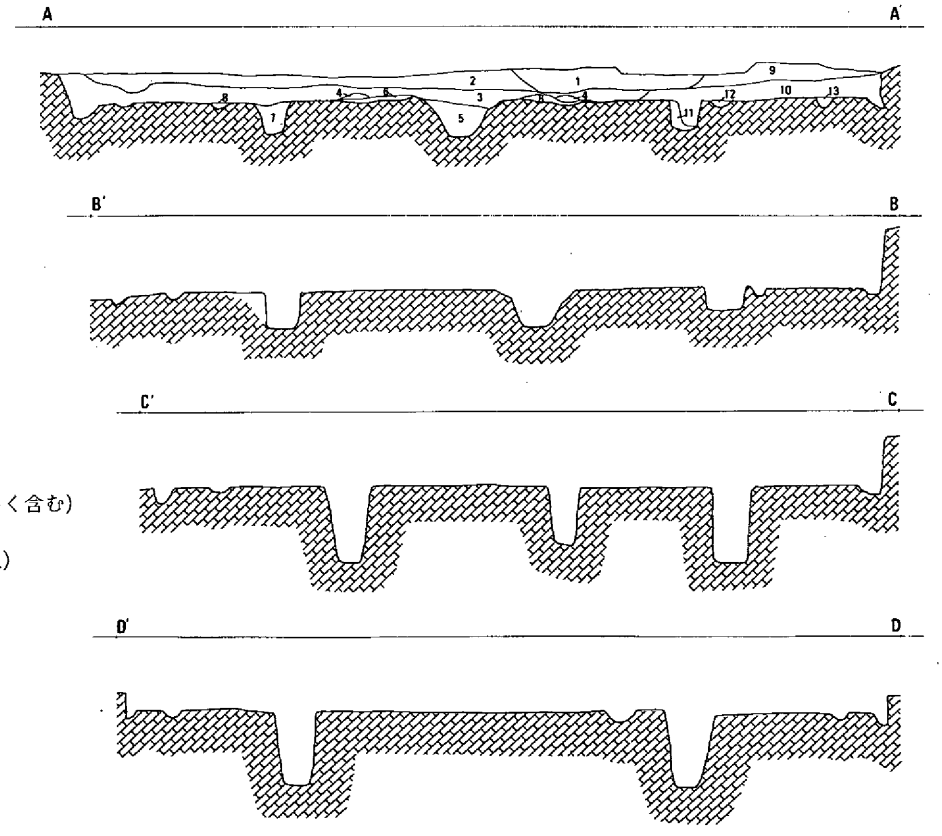
１区Ｄで竪穴住居10の南東に位置する。検出された住居は３軒が重複していた。

住居の平面形はいずれも隅丸方形を呈しているが中程の住居はより方形に近いものである。これらの順序は中央部から外へと拡張されているものである。住居の屋内には柱穴（いずれの住居も偶数本）・壁体溝・中央穴、さらにその中央穴から西方屋外にかけての溝からなっている。中央部から１・２・３で、１は２本柱（北北東－南南西）。いずれの辺も丸みを持っている。２は１の東・西辺にあたる位置で２本柱。３は１の四隅の壁体溝を切って４本が確認された。検出された床面までの深さは最大で45cm程であった。住居内からは第25図の遺物が出土している。これから弥生時代後期に位置づけられよう。



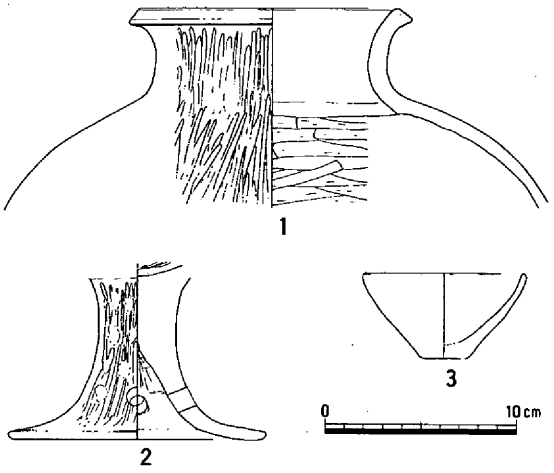
第22図　竪穴住居10（1/60）





1．暗黄淡茶褐色土
2．淡黒褐色土
3．淡黒褐色土（細粒）
4．黄褐色土
5．黒褐色土（炭混入）
6．黒色土（炭多く含む）
7．淡黒褐色土
8．暗黄茶褐色土
9．暗黄褐色土
10．暗黄褐色土（地山塊多く含む）
11．黄色土
12．淡褐色土（地山塊混入）
13．淡茶褐色土

第23図　竪穴住居11（1/60）



第24図　竪穴住居10出土遺物（1/4）

竪穴住居12（第26図、図版５－３）

１区Ｄ南西部で竪穴住居６の東に位置する。存在する遺構は屋内施設の柱穴・中央穴・中央穴から延びた溝である。その他は開墾により削平され消えさっている住居である。

平面形・規模共に不明。柱間は東が285cm、西で290cm、南は250cm、北が270cm、柱の径は25～35cmの円形、深さ65～75cm。中央穴は70×80cmの楕円形で２段掘りで最深部で55cmを測った。各遺構内からの出土遺物は確認したものの図化しえなかった。周辺の遺構等から弥生時代後期に属するものであろう。

竪穴住居13・14（第27図、図版６－１）

１区Ｄで西側を竪穴住居11によって切られ「く」字状の壁体溝と南東側の柱穴２本を残しているのみであった。柱間は230cm、20cm前後の円形で15cm前後の深さの柱穴である。

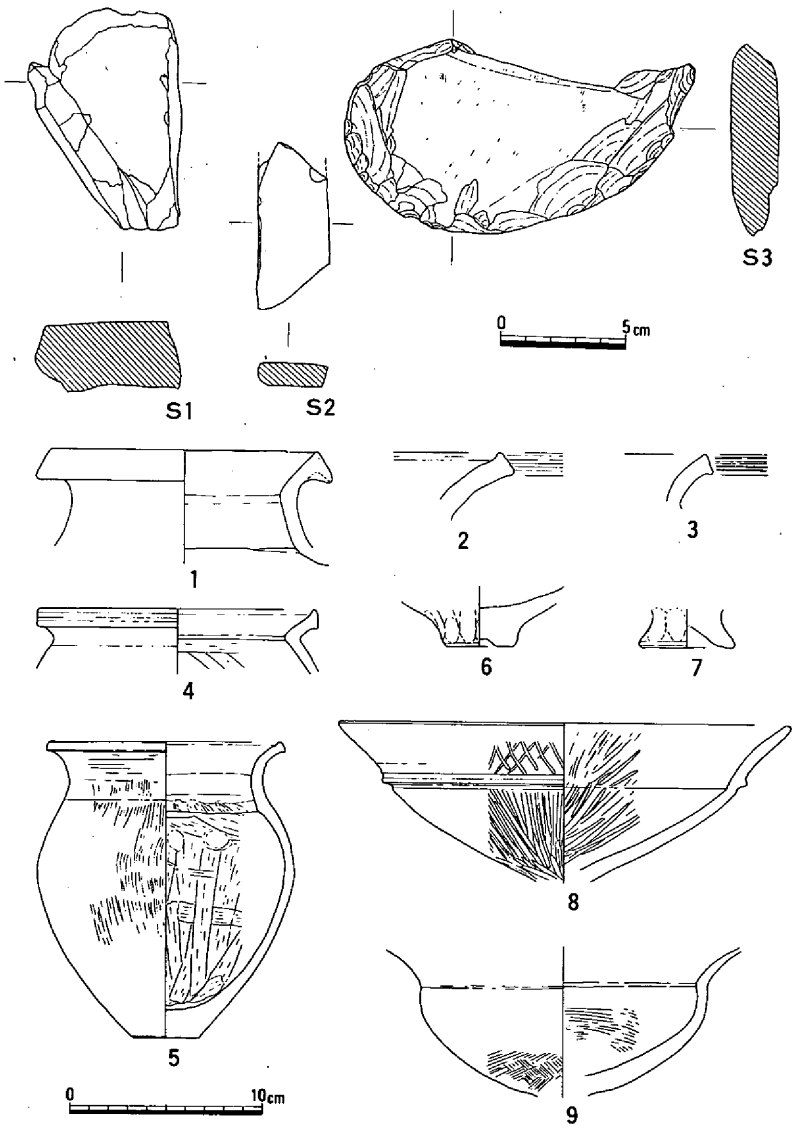
14は弓状に湾曲する壁体溝と柱穴２本（柱間225cm）、長径45cmの楕円形の中央穴等を検出、北西部で壁体溝を13が切っている。図示した遺物は14から出土している。いずれの住居も弥生時代後期に位置づけられよう。

竪穴住居15（第28図、図版６－２）

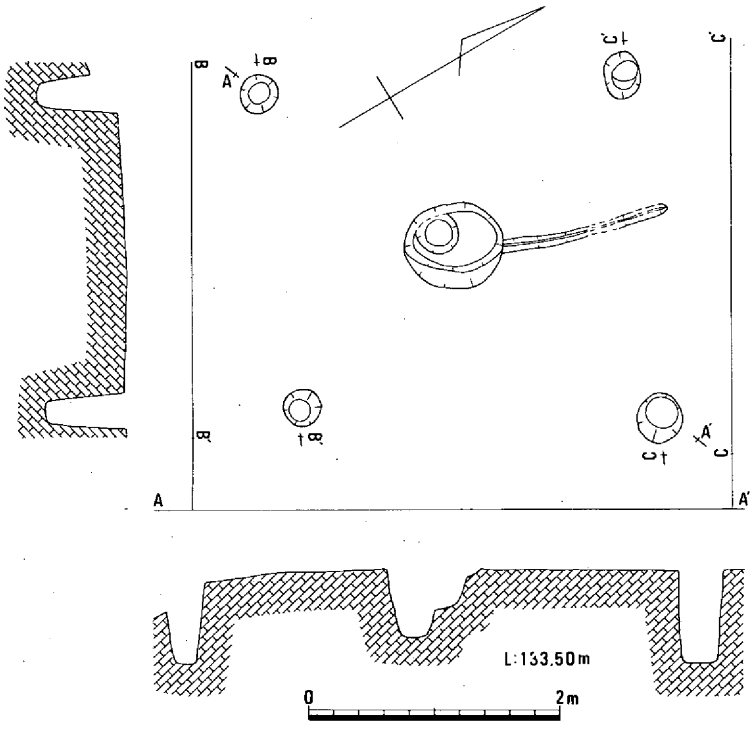
１区Ｄの中程で住居11の東に位置する一辺470cm（北東辺）の方形の竪穴住居である。

この住居は開墾等により南西辺が消滅している。しかし、屋内施設としては、柱穴・中央穴・壁体溝は明確に検出された。

柱間は最短245cm、最長280cm、径は25cm～55cm、深さ35



第25図　竪穴住居11出土遺物

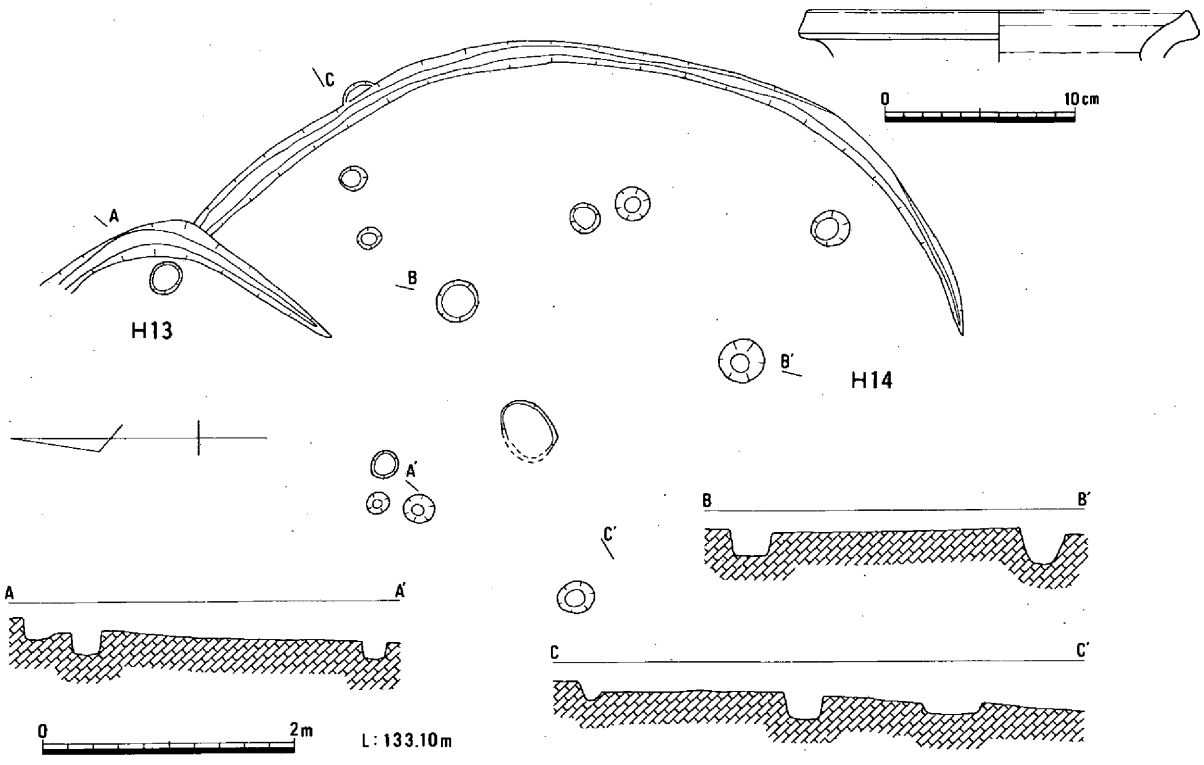


第26図　竪穴住居12（1/60）

cm～40cmとまちまちである。中央穴は50cm×60cmの不整楕円形で、深さ20cmの擂鉢形を呈する。東隅の柱穴は建替えられており、古いものには礫石を用いている。覆土内より図示遺物や、土器片も少量出土している。弥生時代後期に属する。

竪穴住居16（第29図、図版6－3）

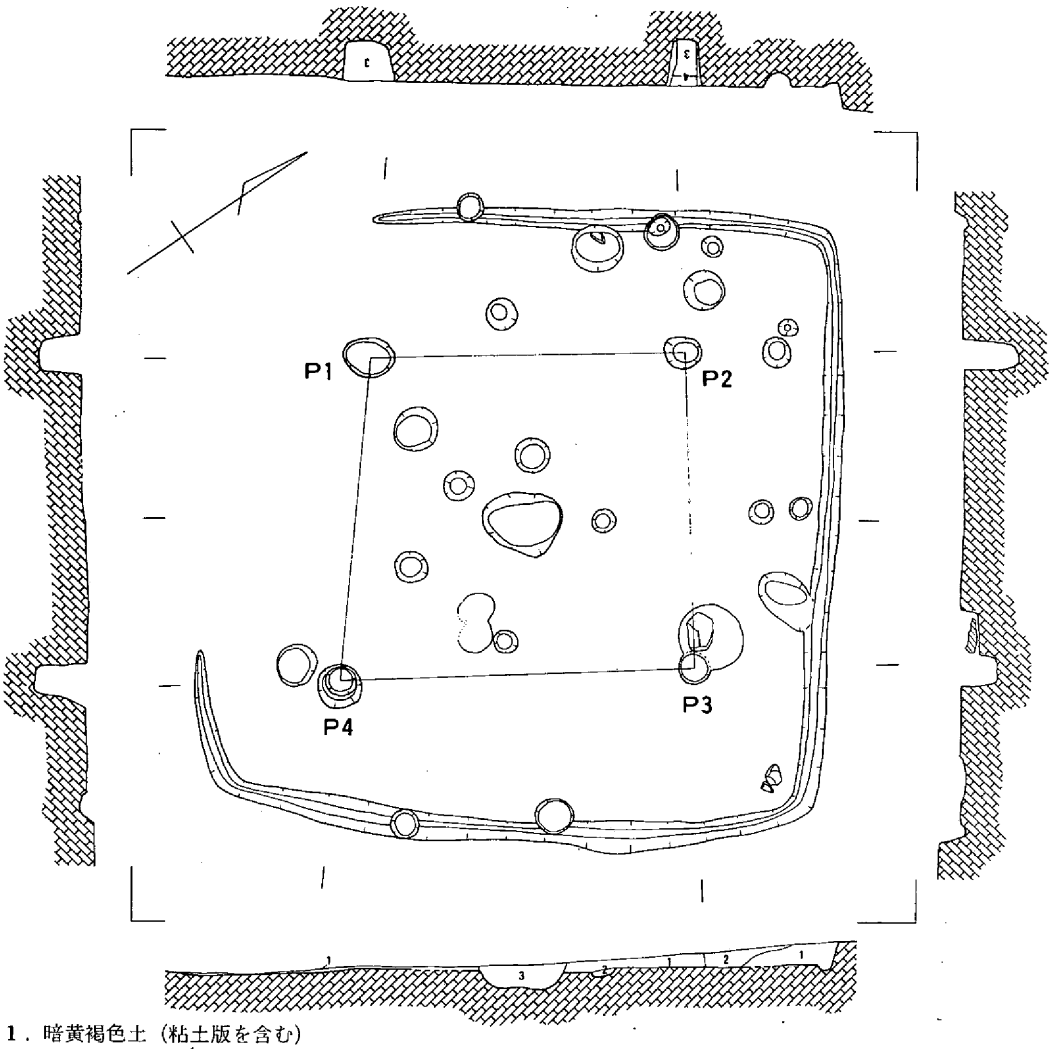
1区D中程で竪穴住居15の南に位置す

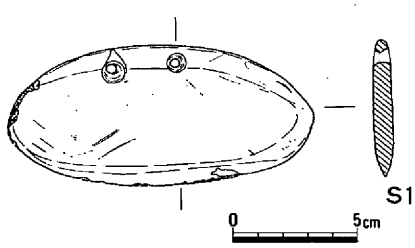


第27図　竪穴住居13(左)・14(右)（1/60）・14出土遺物

る。この住居が検出された地点の削平はかなり激しく行われている。最大壁高は10cm程測った。確認された壁体溝から、平面形はほぼ円形と想定される。

この住居は火災を受けており、床面直上には焼土がかなり認められた（平面図のドット部分）。炭化材は削平で移動している。





P１～４　１．暗褐色土
２．黄褐色土
３．暗黄褐色土
（粘土含む）

第28図　竪穴住居15（1/60）・出土遺物

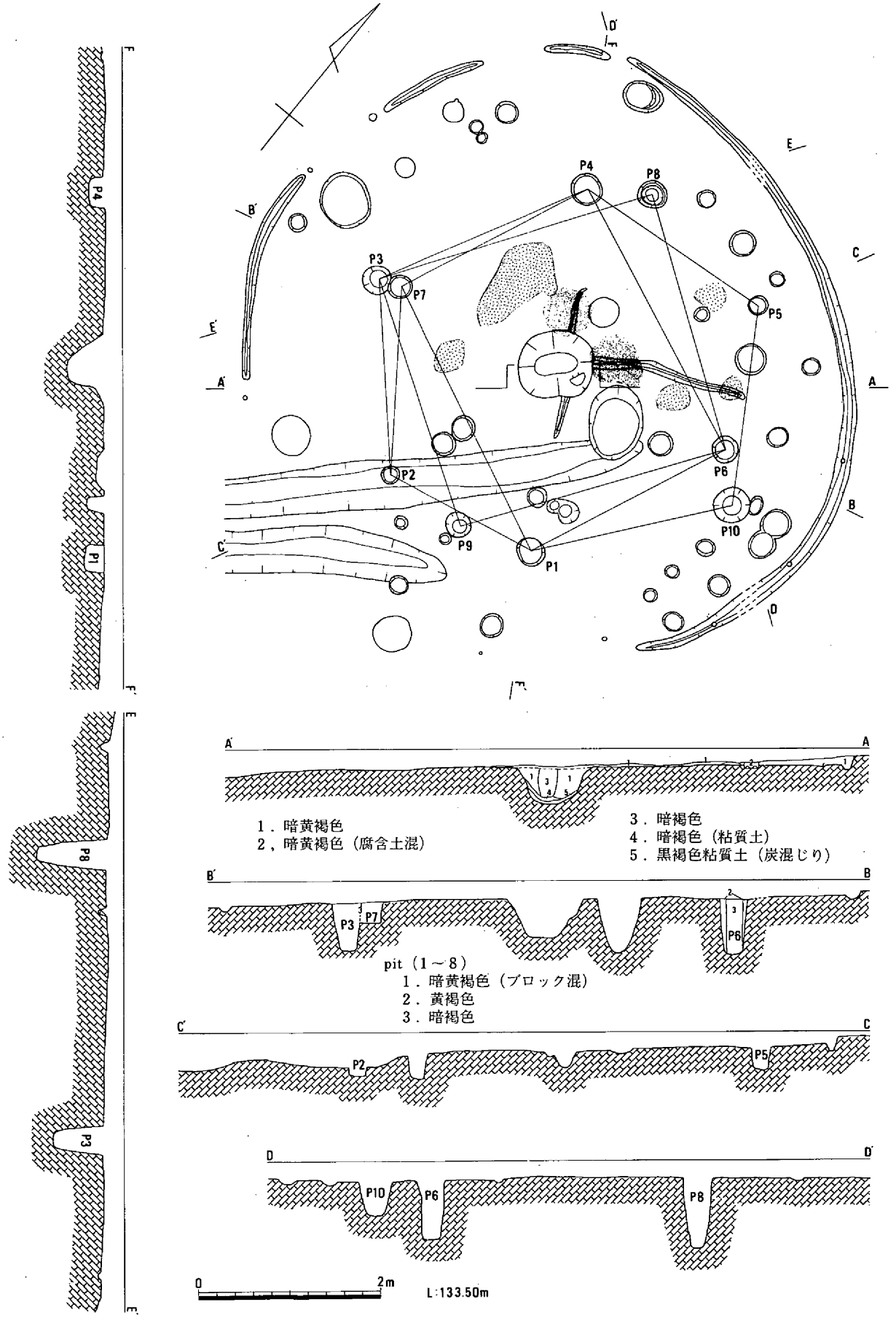
屋内施設の壁体溝・中央穴は同一を用いているが、確認できただけで４軒分の柱穴を認めた。

さらに中央穴へと三方向から溝が入っている。柱穴は径18cm～最大で40cm、深さ15cm～75cmを測る。中央穴は70cm×80cmの楕円形、深さは最深部で40cmを測った。床面直上に土器が散乱していた。出土遺物から弥生時代中期終末期に位置づけられるであろう。

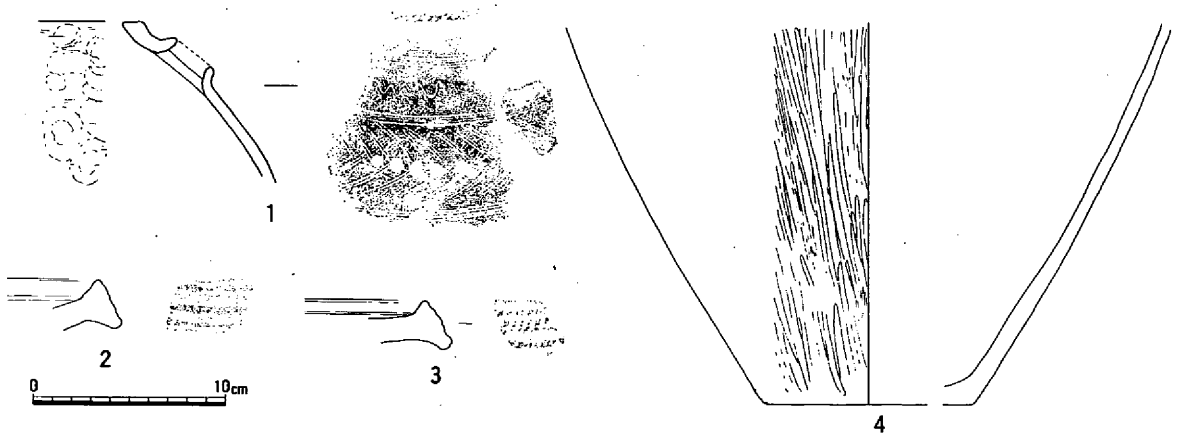
竪穴住居17（第31図）

１区Ｄで竪穴住居15の南西に位置する。

住居の平面形は不明であるが、柱間の規模から想定して住居と確定した遺構である。柱間は東西220cm、南北240cm、柱穴は径35cm～45cm、30cm～60cmの深さを測った。図示した遺物から弥生時代後



第29図　竪穴住居16（1/60）



第30図　竪穴住居16出土遺物

期に属する遺構であろう。

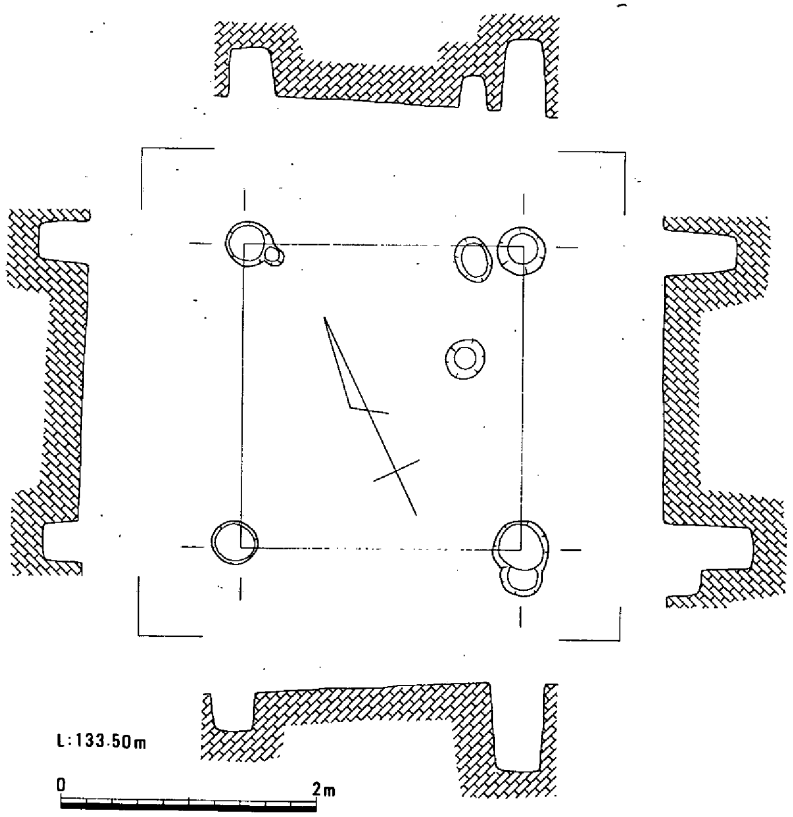
竪穴住居18（第32図）

１区Ｄの中程に位置し、竪穴住居16に重複している４本柱の遺構である。柱間は150cm～190cmとまちまちであり、柱穴はほぼ円形で径50cm前後、深さも25cm～50cmを測った。規模的に住居址と考えるのが妥当である。

竪穴住居16以前の時期に位置づけられよう。

竪穴住居19（第33図）

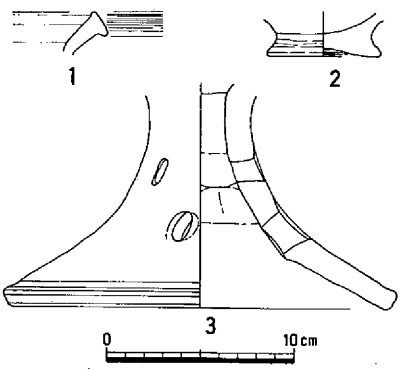
竪穴住居16の北東に位置する１間×１間の柱間の建物である。柱間寸法は３辺が180cm、南西辺のみ195cmを測る。また柱穴は30cm～45cmのほぼ円形を呈し、深さ25cm～40cmを測る。竪穴住居と考えるのが妥当な遺構である。弥生時代後期に属するであろう。



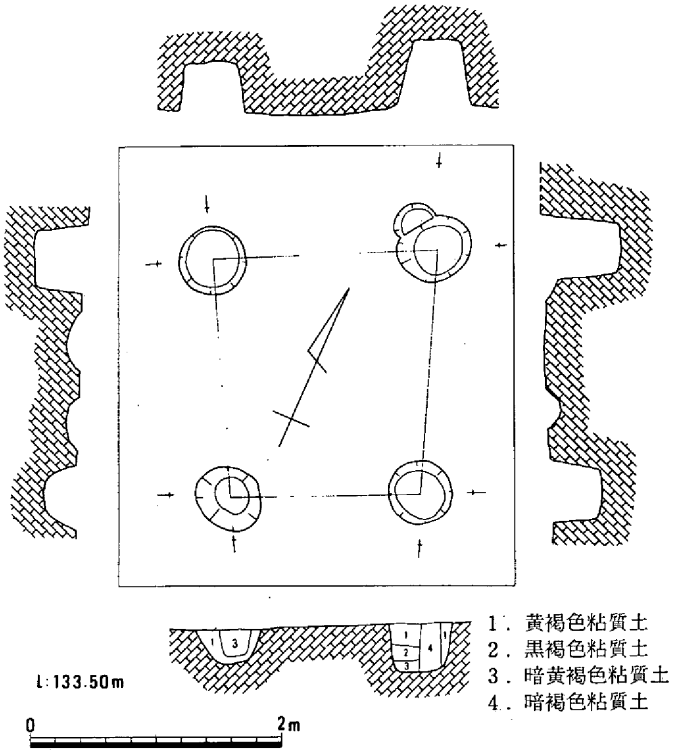
竪穴住居20（第34図、図版８－１）

１区Ｈの南部で南東斜面にかかって位置する。北東辺壁は住居の屋外溝によって切られている。

平面形は胴部の張った長方形を呈すが、長軸不明、短軸は現存で265cmを測り北西辺壁高で



第31図　竪穴住居17（1/60）・出土遺物



第32図　竪穴住居18（1/60）

10cm程残っていた。

この住居は火災を受けており、床面（ドット）には焼土が点在していた。

屋内には柱穴・中央穴は存在しないが、南西・南東側でのみ壁体溝を認めた。出土遺物・切り合いから弥生時代後期の範疇に位置づけられよう。

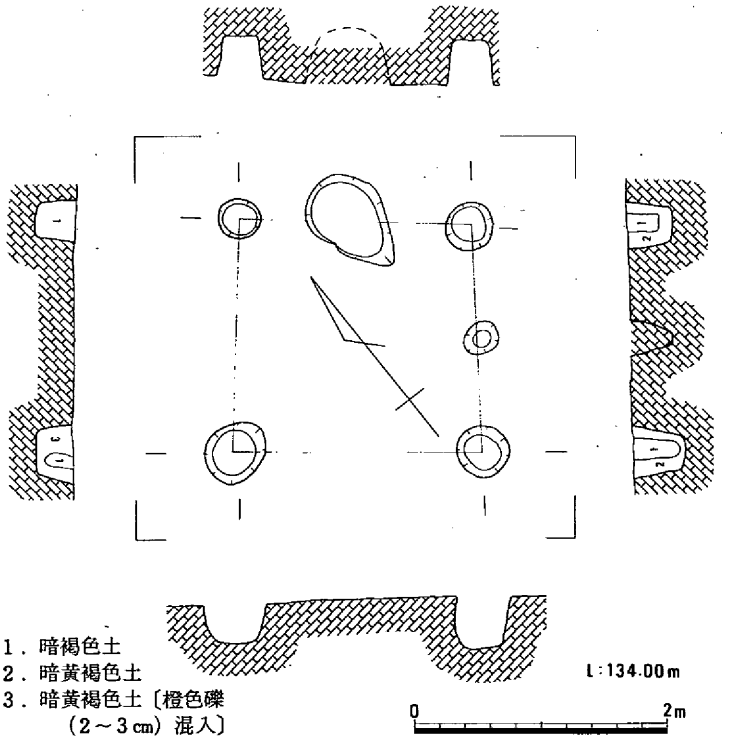
竪穴住居21（第36図～39図、図版8－2）

1区Gの南東に傾斜していく面で、住居20の北西部に位置する重複した竪穴住居で、不整円形のものから多角形の形状を呈する平面形であり、その直径も最小で440cm、最大では690cmを測る。

各々の住居壁体溝に伴う柱穴は4本～7本で、住居自体が拡張され、切り合いで新旧とそれに伴う柱の数（第38図）が認められた。

屋内施設での中央穴は各々の住居のほぼ中央部に位置し重複している。平面形態は不整楕円形で擂鉢状の断面を呈する掘り方である。さらに南西側には地山土（黄褐色粘質土）を三ケ月状に貼り付けて高まりを設けているが、それが何軒目の住居址に伴うかは不明。また中央穴から南東屋外へと延びる溝も検出されている。この溝の断面形は「U」字状を呈し、中央穴部分から屋外へと下がっている。屋内の溝内埋土下層に灰色土の沈着が認められた。

検出された最終（外側）住居での柱穴は7本で中央より南東で4本・北西で3本の配列である。また中央穴は南側の小ぶりのものである。屋内外の溝の幅・断面形も様々で、屋内部分では15cm～25cm、断面形は浅い「U」字状、屋外壁体部では幅・深さ共に約35cmでしっかりした「U」字状を呈

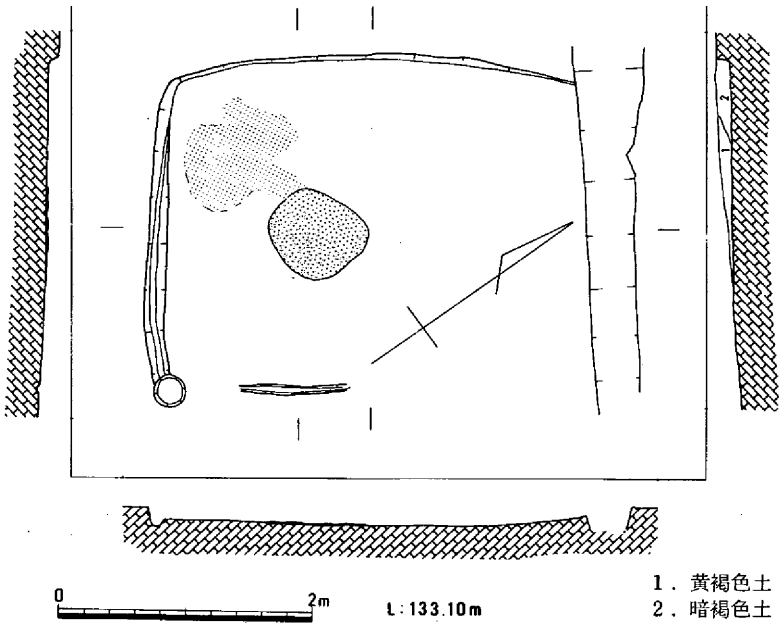


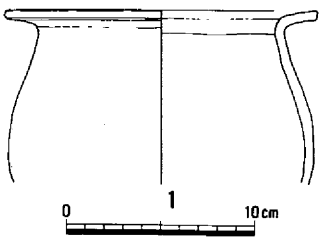
第33図　竪穴住居19（1/60）

し、南東方向にかけて擂鉢状の深い形状を示し先細りで終る。

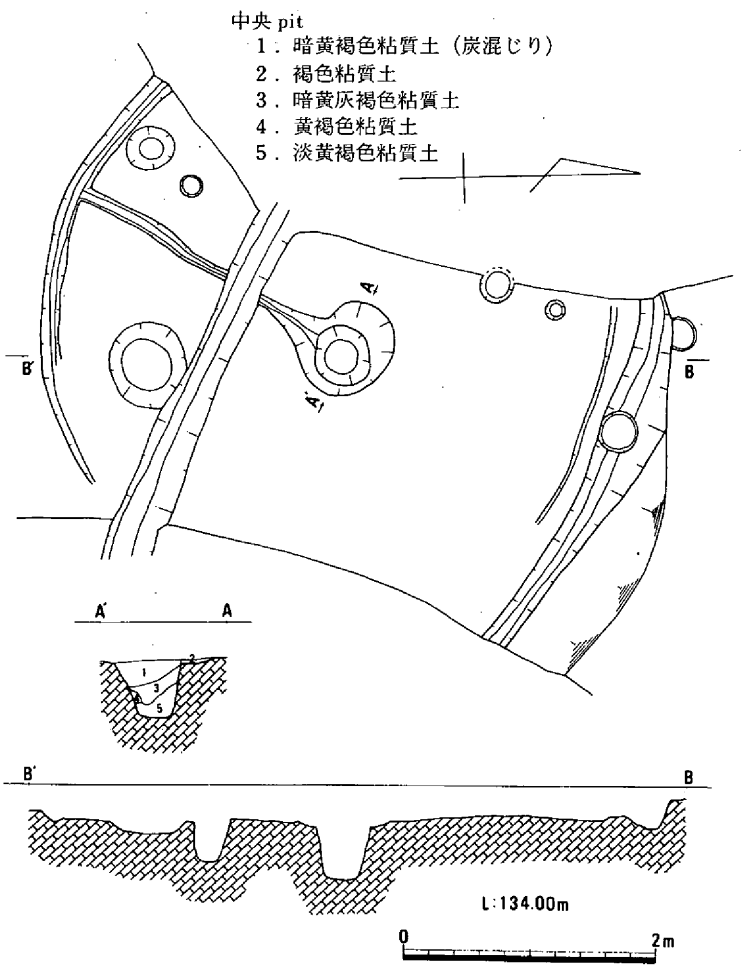
検出確認された壁体溝については、第36図、第37図と２通りの平面形を図示しているが、この差は壁体溝が最初の掘り上げ時（第37図）の状況、第36図は住居内使用中に壁体溝が埋没した状態の違いである。このように、壁体溝が埋っても住居は使用されていたということが確認された。

遺物は大部分が覆土中より出土し、土器以外にはガラス製小玉・小型鉄製刀子・土錘・石器があり、小型の台付鉢が比較的多く出土している。





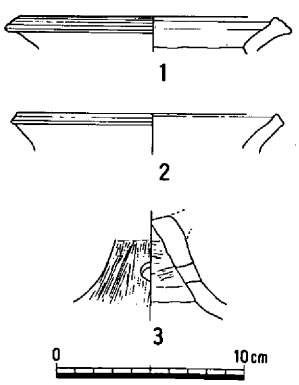
第34図　竪穴住居20（1/60）・出土遺物



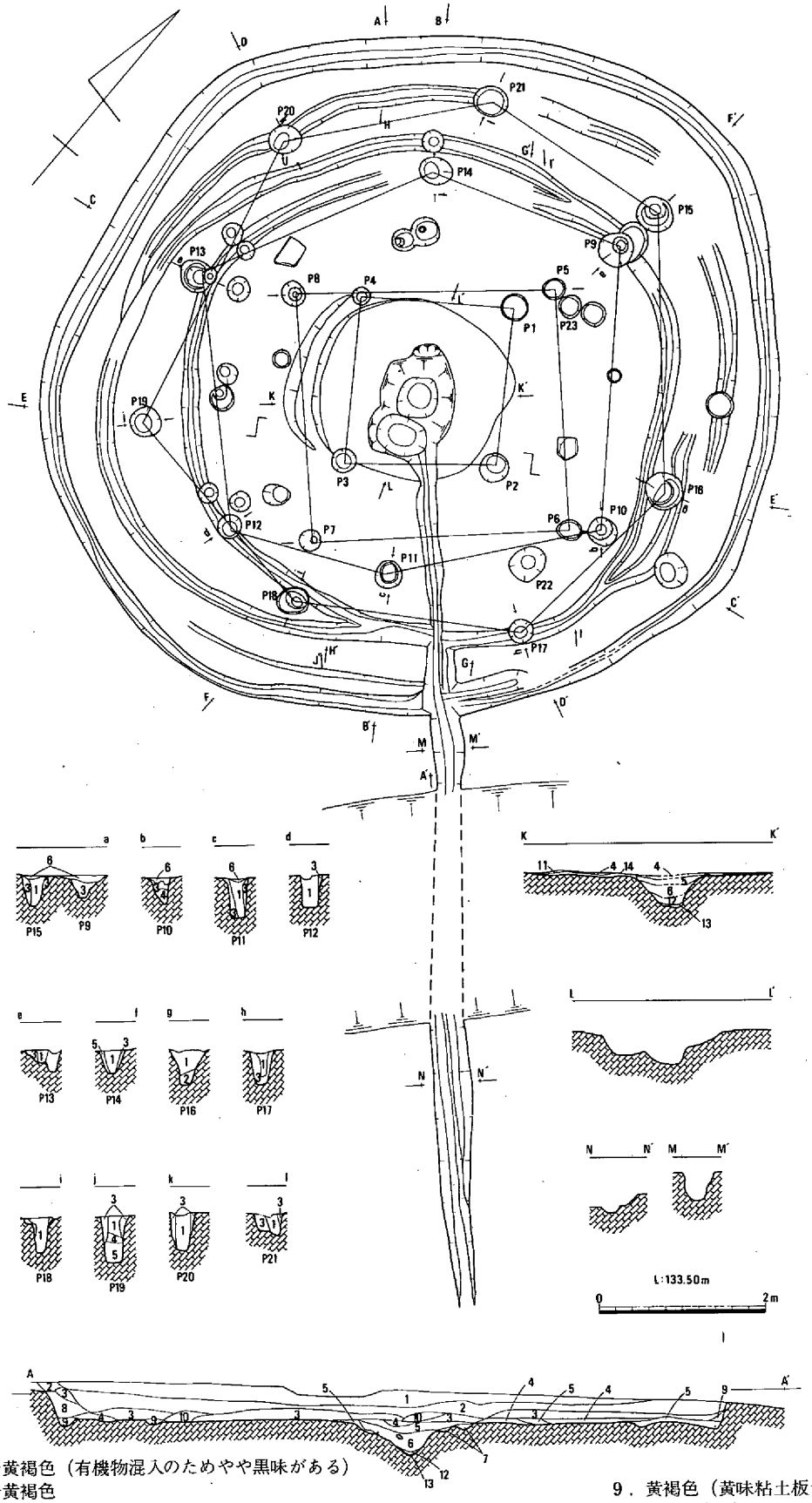
時期は弥生時代後期の範疇に位置づけられる。

竪穴住居23（第35図、図版９－３）

１区Ｇで尾根の中程に位置する。北西部、南東部を竪穴住居により切られているが、残存部から平面形は円形を呈すると思われる。住居の屋内には、中央穴・壁体溝・この２つを結ぶ溝のみであった。中央穴は60×80cmのほぼ円形で深さ45cmを測る。弥生時代中期に属すであろう。

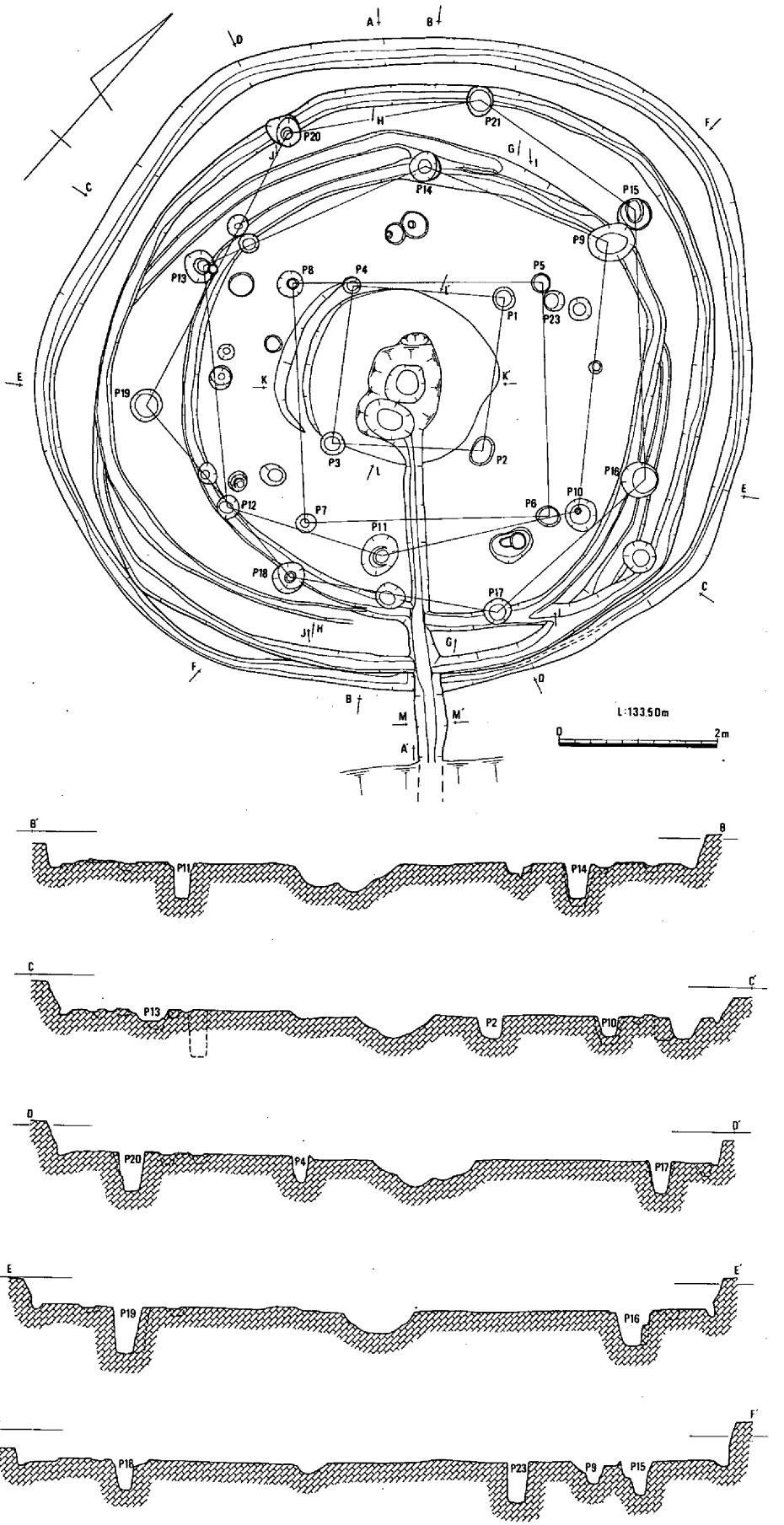


第35図　竪穴住居23（1/60）・出土遺物

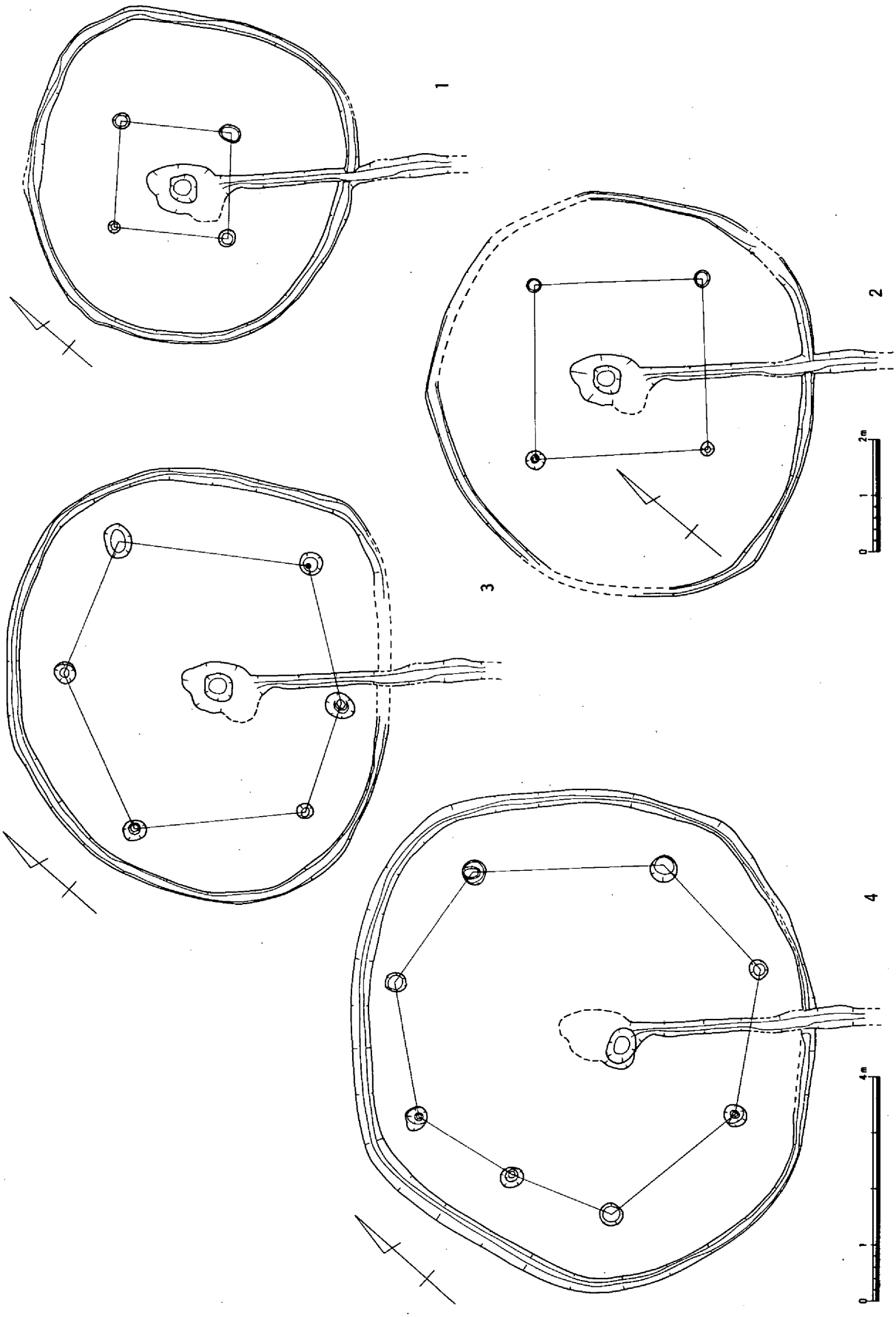


1．暗黄褐色（有機物混入のためやや黒味がある）
2．暗黄褐色
3．暗黄褐色（少量、黄味粘土板含む）
4．黄褐色（黄味粘土板、大量に含む）
5．淡黄褐色砂質土（灰混入）
6．淡暗黄褐色（灰混入）
7．黄褐色（炭混入）（地山）
8．暗黄茶褐色（炭混入）
9．黄褐色（黄味粘土板含む）
10．暗黄褐色（焼土混じり）
12．淡暗黄褐色（炭混入）
13．灰白色

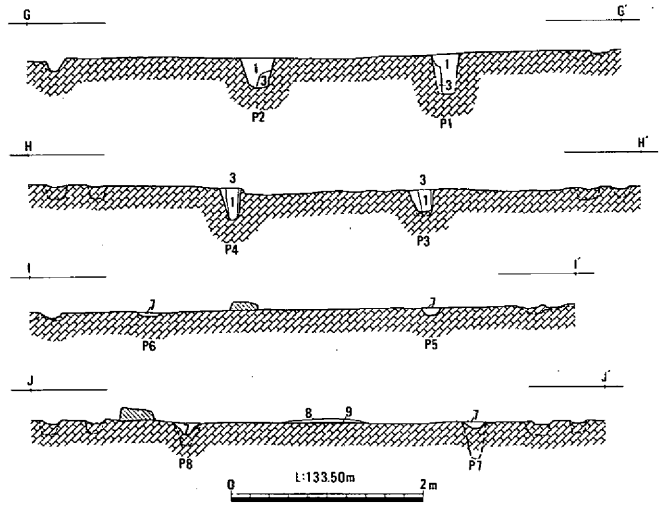
第36図　竪穴住居21(1)（1/80）



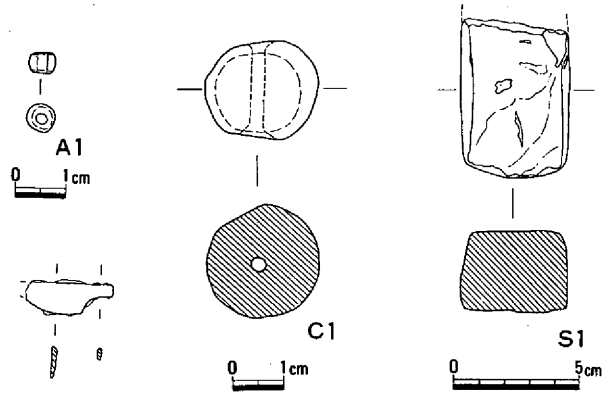
第37図　竪穴住居21(2)　(1/80)

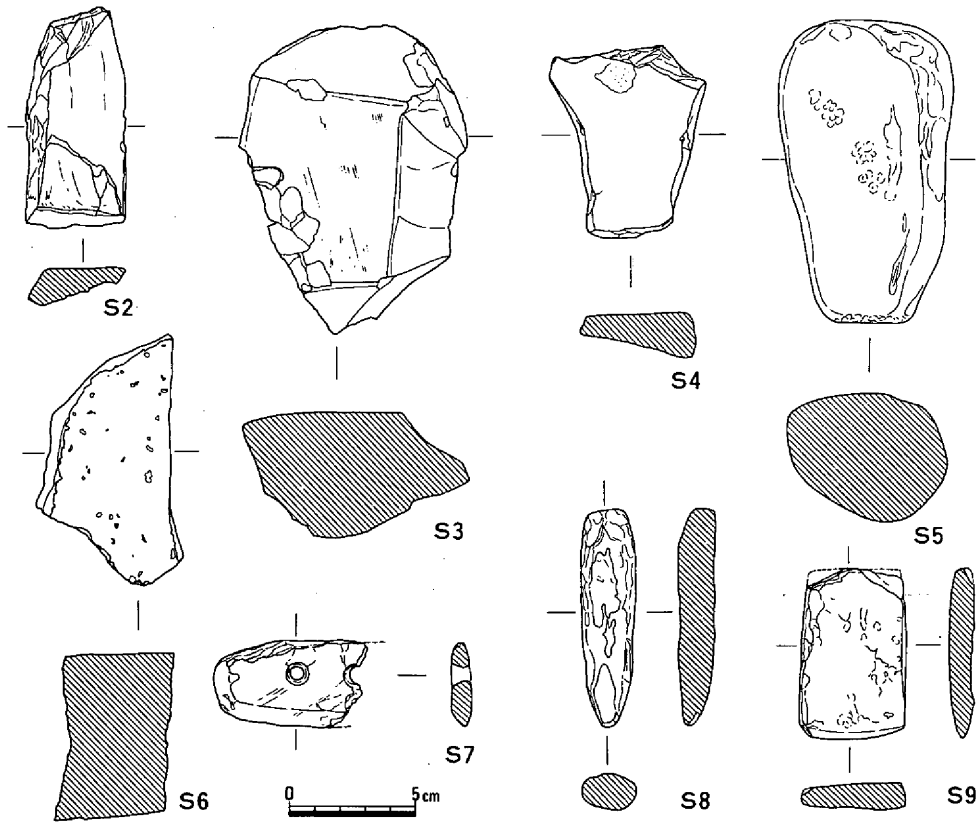


第38図　竪穴住居21築造順序1(上右)・2(下右)・3(上左)・4(下左)(1/100)

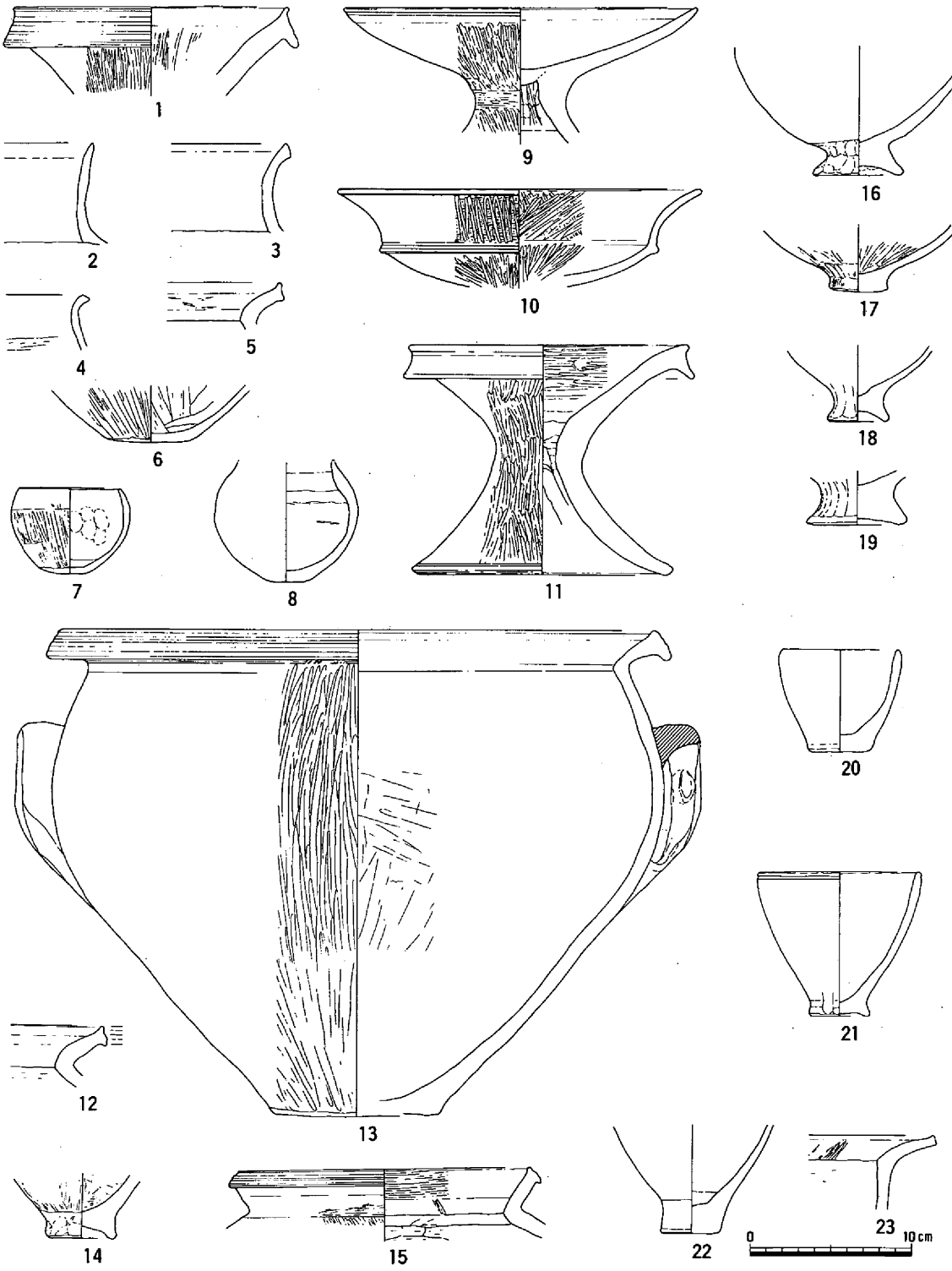


中央pit（K－K′）
4．黄褐色（黄味粘土板を大量に含む）
5．淡黄褐色（灰混入）…砂質土
6．淡暗黄褐色（灰混入）
11．黄褐色粘質土
12．淡暗黄褐色（炭混入）
13．灰白色
pit（柱穴）
1～4
1．灰黄褐色
2．黄褐色
5～8
暗黄褐色
J－J′
8．黄褐色粘質土（上）
9．炭化物の層　（下）
pit（柱穴）
9～21　1．灰黄褐色（柱根）
2．黄褐色（炭混入）
3．黄褐色
4．暗黄褐色粘質土
5．黄灰褐色
6．暗黄褐色





第39図　竪穴住居21断面図（1/80）・出土遺物

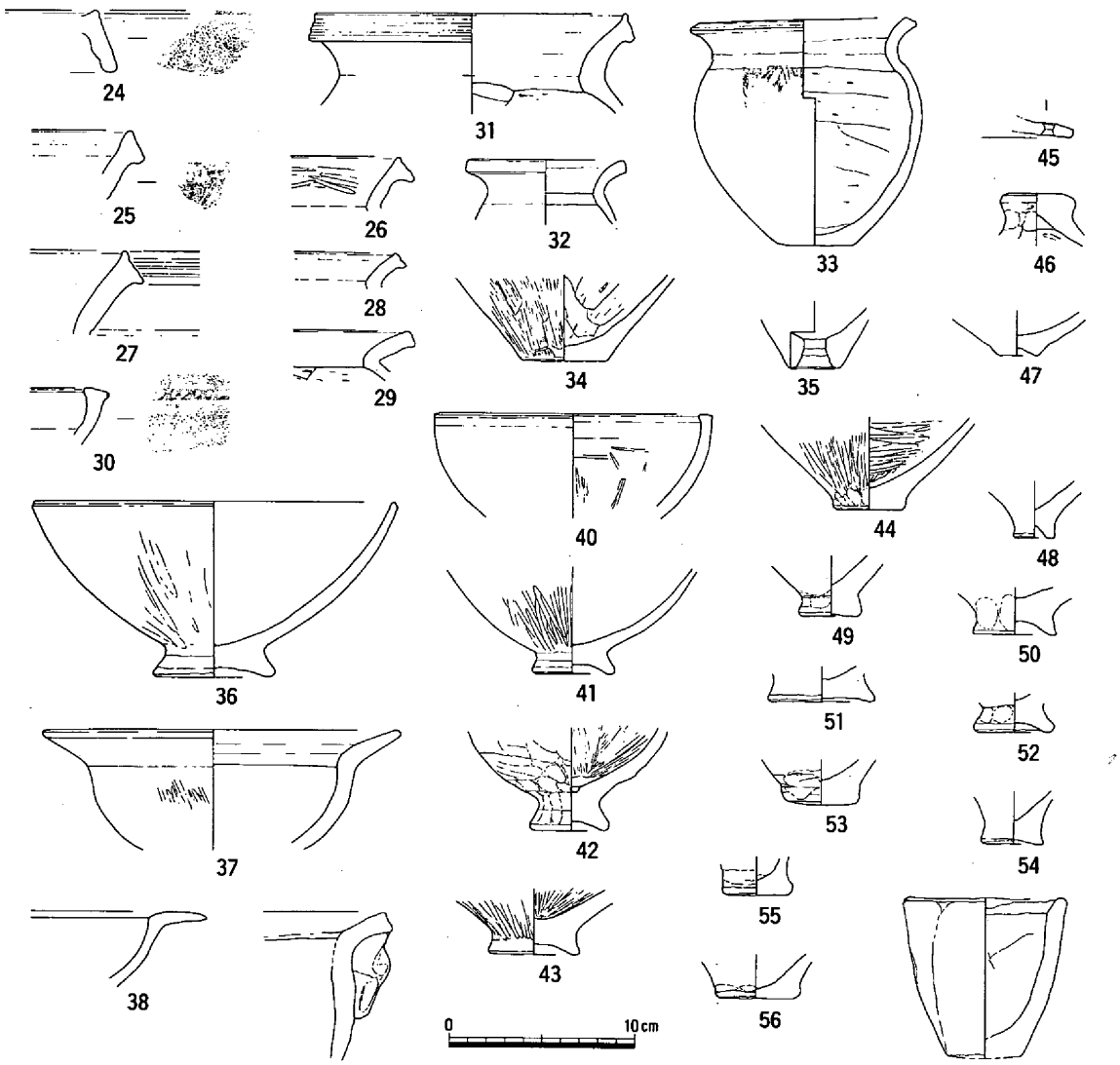


第40図　竪穴住居21出土遺物(1)

竪穴住居22（第42～44図、図版８－３、９－１・２）

１区ＧＨで竪穴住居21の北東に近接して位置する。南東部中程を山道によって切られている。

検出されたこの竪穴住居の平面形態は、最大径を東西に持ち、その長さは12m、南北では11.8mを測り、わずかに歪みを示した円形を呈すものであり、検出面から床面までの壁高は最大で約50cm程残していた。



第41図　竪穴住居21出土遺物(2)

現在までに県内で検出された竪穴住居の中では最大級の竪穴住居である。

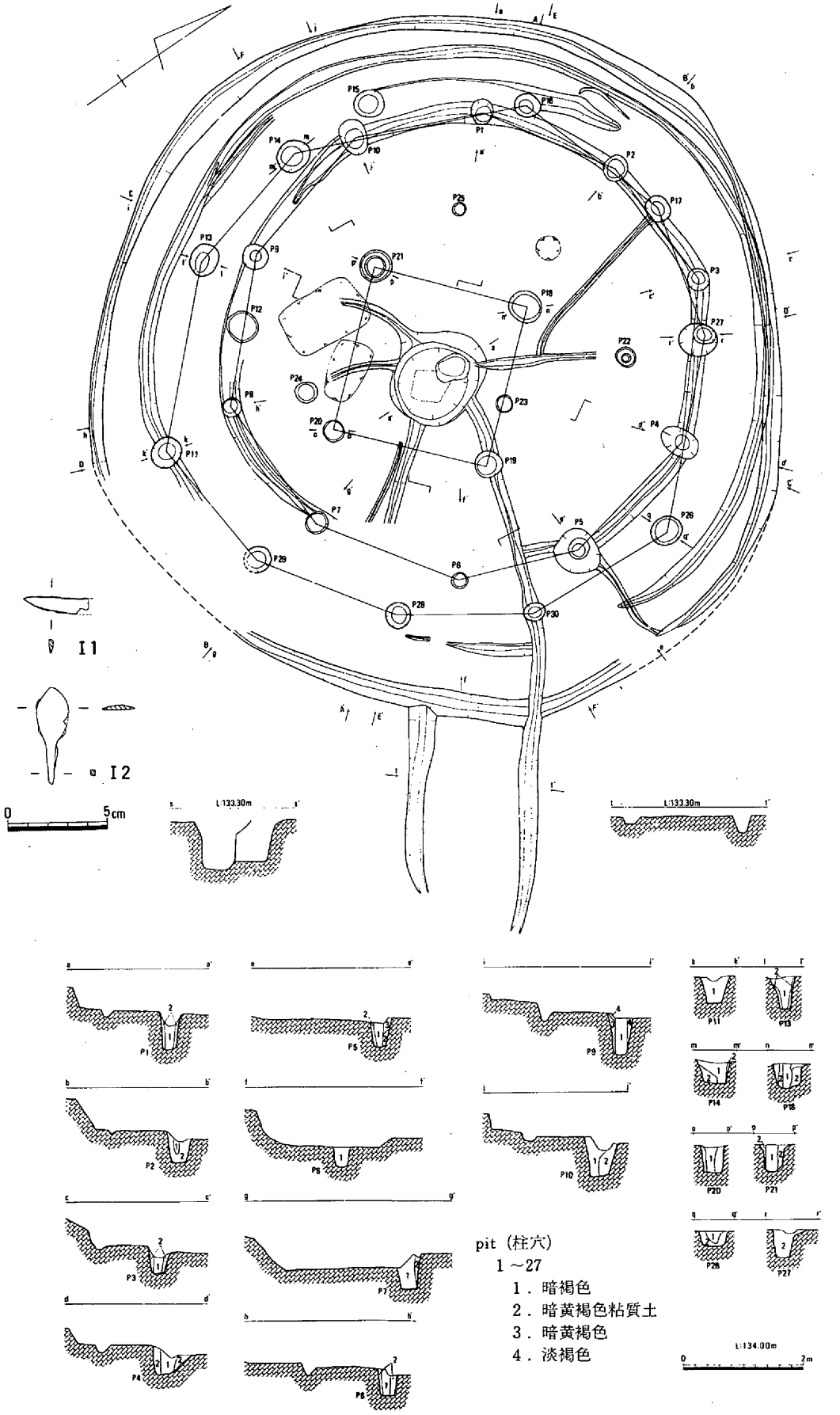
この住居の掘り下げの段階で、重複が確認された。中側（縮小）住居が新しいと判明（第44図土層断面図に図示）した。さらに住居を掘り下げ、床面での遺構検出中、新たに内側から壁体溝が確認された。したがって、住居は２回の建て替えがなされていたことになる。平面形はほぼ円形を呈する。

住居の建築順は、中央の小型が最初、次いで外側の大型、最後が中間の中型の順で拡大・縮小で建て替えている。

住居の屋内には、柱穴・中央穴・壁体溝・溝・ベッド状遺構からで成り立っているが、最大の住居にのみベッド状高まりを認める。小型の住居には、中央穴と壁体溝を連結する溝は検出されていない。以下、各住居を建築順にその概要を記述していく。

中央の小型住居は、直径約８ｍのほぼ円形の平面形で、深さ約70cmを測る円形の中央穴を有した４本柱の竪穴住居である。

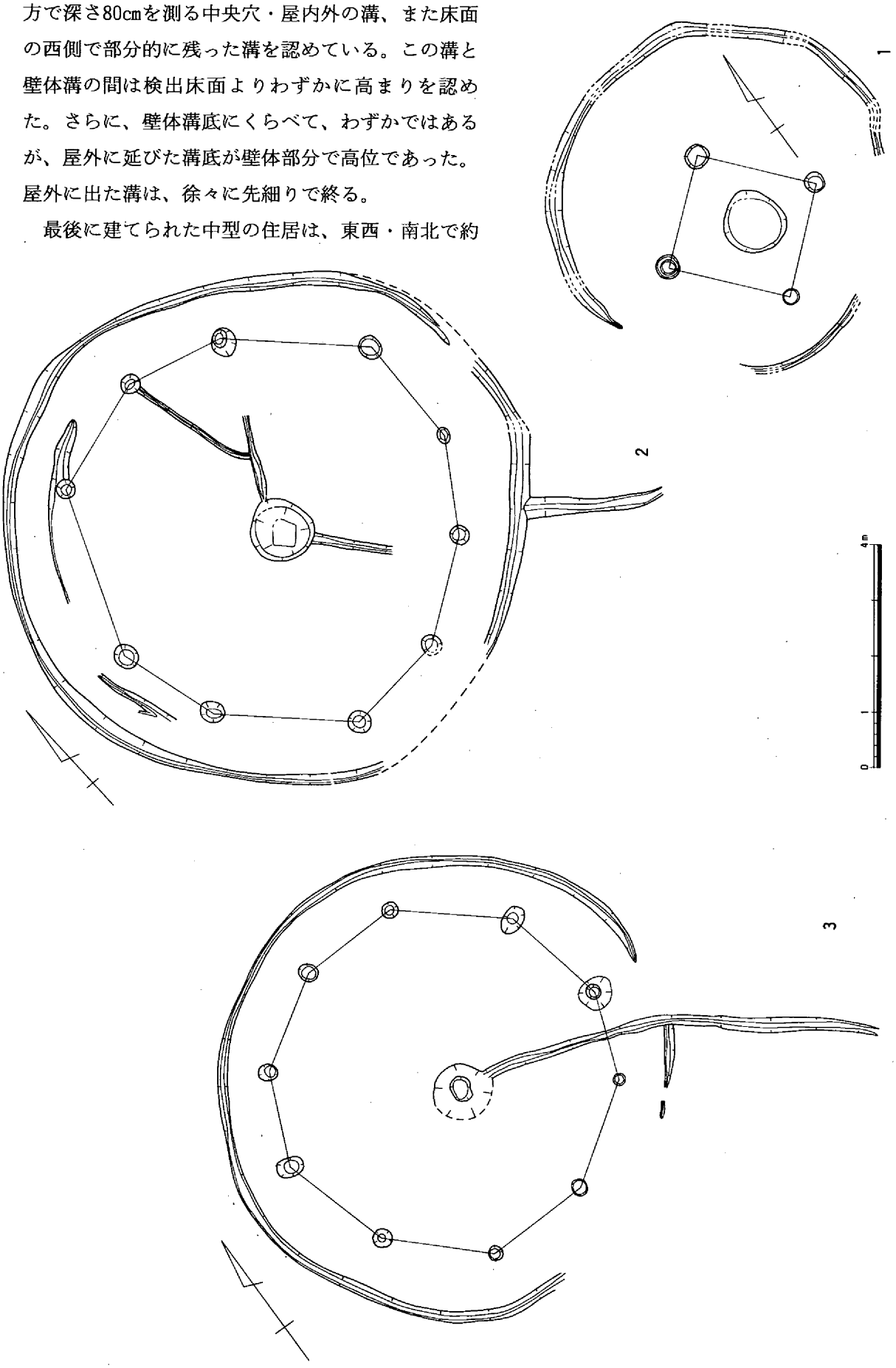
次は外側の最大級の竪穴住居で、東西で12m、南北11.8m、検出面から床面まで最大で約70cmを測る歪な円形の平面形を示し、主柱穴は10本（間隔はまちまち）。底面約80cm角で垂直に立ち上がる掘り



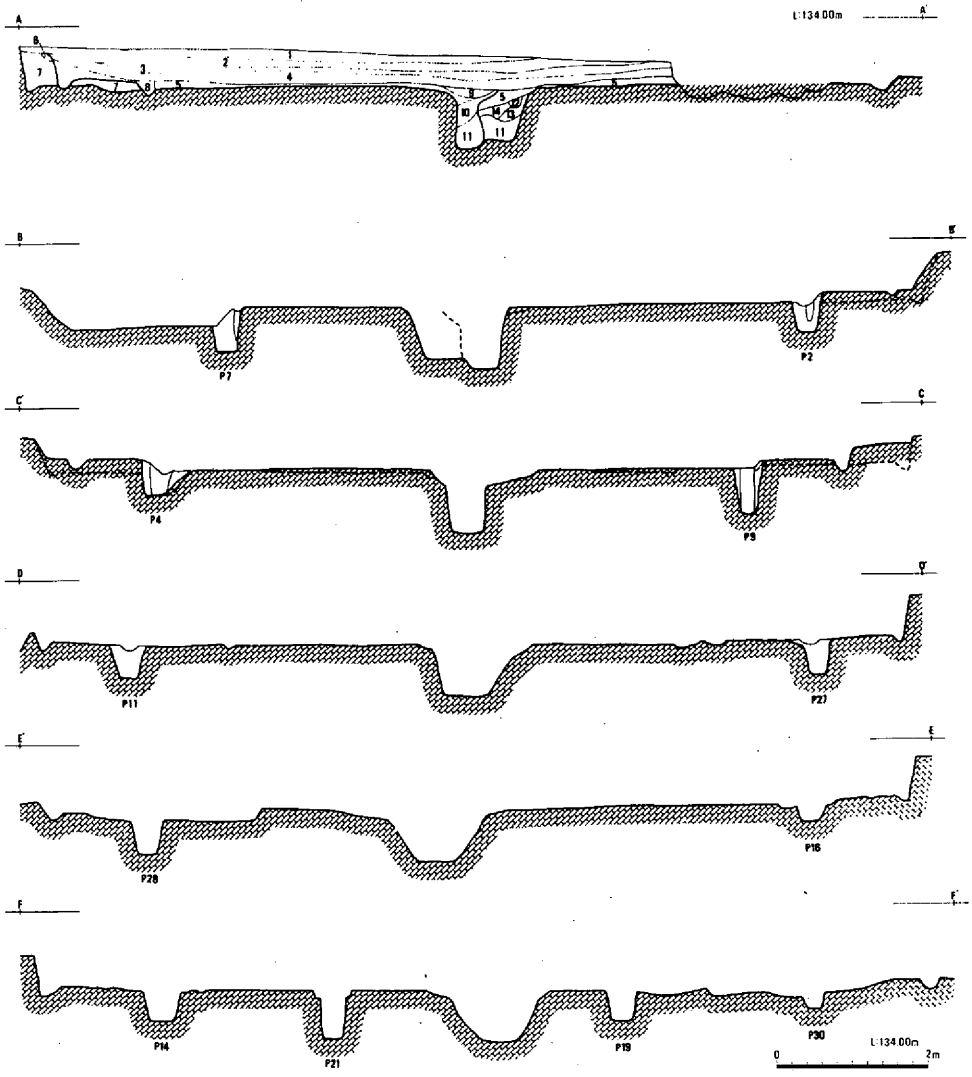
第42図　竪穴住居22（1/80）・出土遺物

方で深さ80cmを測る中央穴・屋内外の溝、また床面の西側で部分的に残った溝を認めている。この溝と壁体溝の間は検出床面よりわずかに高まりを認めた。さらに、壁体溝底にくらべて、わずかではあるが、屋外に延びた溝底が壁体部分で高位であった。屋外に出た溝は、徐々に先細りで終る。

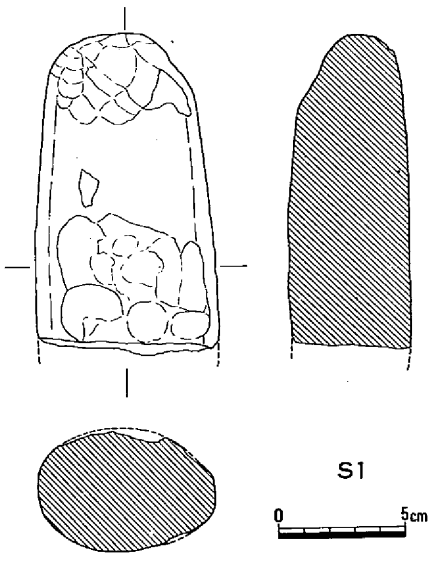
最後に建てられた中型の住居は、東西・南北で約



第43図　竪穴住居22築造順序１（右）・２（中）・３（左）（1/100）



1．黄黒褐色
2．暗黄褐色
3．暗黄淡黒褐色
4．黒黄褐色
5．淡黄褐色
6．黄褐色
（黄色ブロック混）
7．明黄褐色
（黄色土ブロック、黒色粘土含）
8．暗黄褐色粘質土
9．黄灰褐色砂質土
10．灰褐色
11．暗灰褐色
（下層に炭が多い）
12．茶黄褐色
（焼土混）
13．黄褐色
（灰色粘土混）
14．黄茶灰褐色



第44図　竪穴住居22断面図（1/80）・出土遺物

10.5mを測る。わずかに歪んだ円形の平面形を呈し、柱穴掘り方は径25cmから最大で70cmに及ぶものまでの10本を確認。柱間は200cmから最長で270cmと多少のばらつきを示している。円形を示した掘り方径約100cm、深さ80cmの2段掘りの中央穴、さらにはこの中央穴から延びて屋外へと続く溝で構成された住居と確認された。

以上3軒の住居での柱穴掘り方の最小径は約25cmで、最大径は約70cm、またその深さについては30cm～60cmまで様々な数値を得た。

1区の中央部分に位置しているこの大型住居は、単に家族が生活する目的で建てられたものとは判断しにくく、一集落の公共的な場所（たとえば集会所的なもの）であった可能性を示す竪穴住居である。

出土遺物は床面等からは比較的少なく、大部分が覆土中か

らの出土である。出土遺物の中には金属器（刀子片・鉄鏃）・土器片紡錘車の未製品・石斧片がある。土器は小型のものが目立っている。

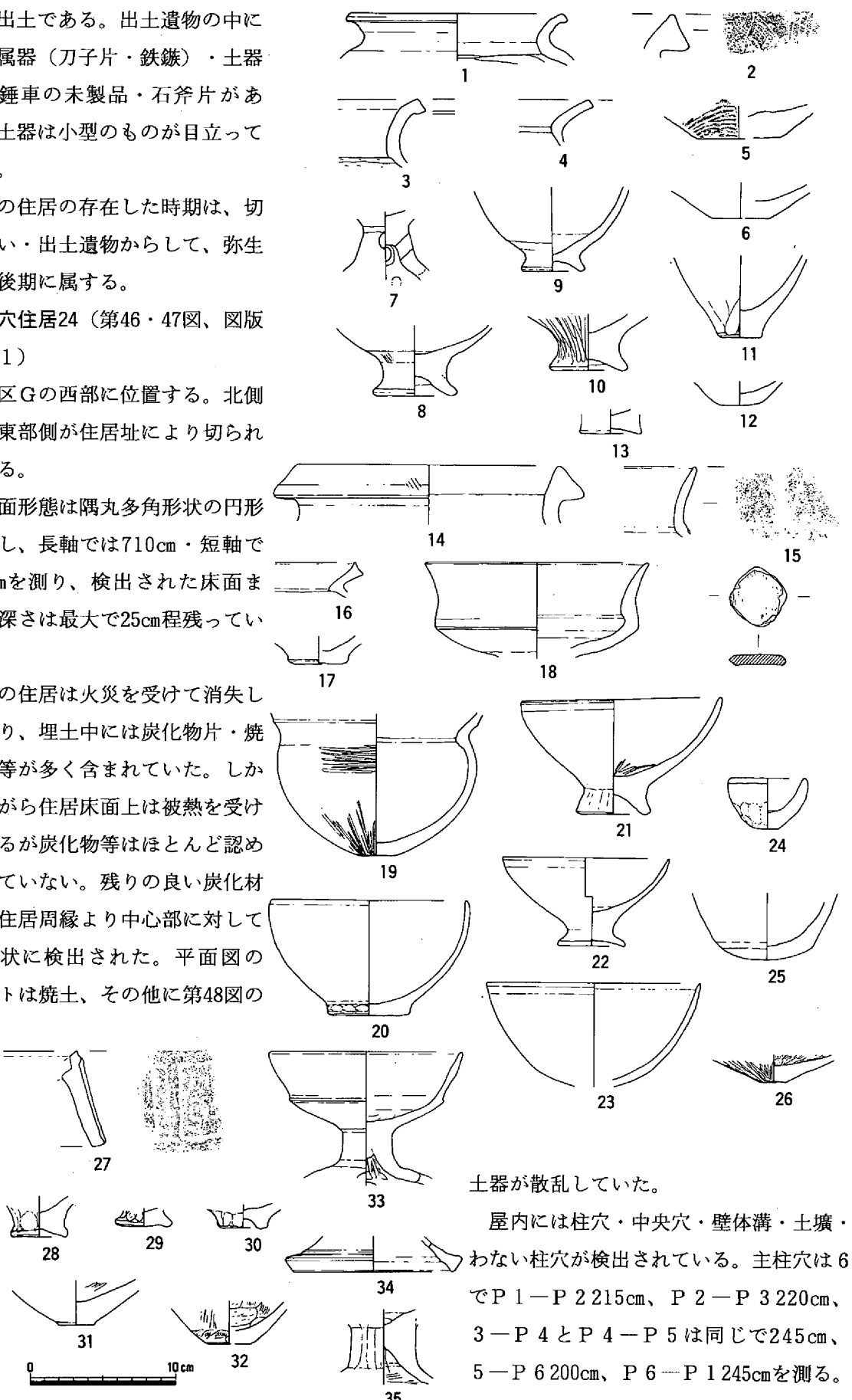
この住居の存在した時期は、切り合い・出土遺物からして、弥生時代後期に属する。

竪穴住居24（第46・47図、図版10—1）

1区Gの西部に位置する。北側と南東部側が住居址により切られている。

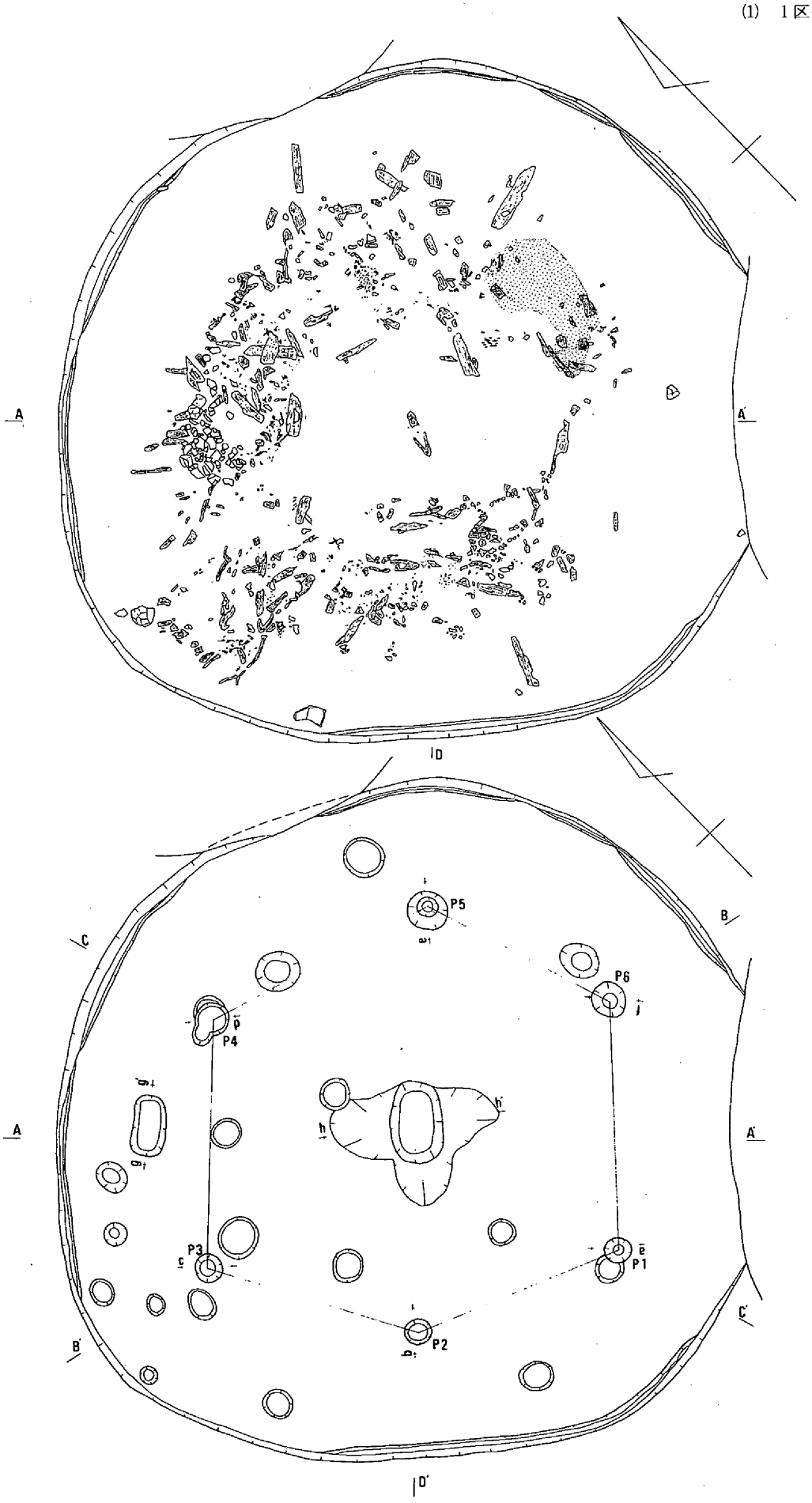
平面形態は隅丸多角形状の円形を呈し、長軸では710cm・短軸で670cmを測り、検出された床面までの深さは最大で25cm程残っていた。

この住居は火災を受けて消失しており、埋土中には炭化物片・焼土塊等が多く含まれていた。しかしながら住居床面上は被熱を受けているが炭化物等はほとんど認められていない。残りの良い炭化材は、住居周縁より中心部に対して放射状に検出された。平面図のドットは焼土、その他に第48図の土器が散乱していた。



第45図　竪穴住居22出土遺物

屋内には柱穴・中央穴・壁体溝・土壙・伴わない柱穴が検出されている。主柱穴は6本でP1—P2215cm、P2—P3220cm、P3—P4とP4—P5は同じで245cm、P5—P6200cm、P6—P1245cmを測る。柱穴も25cm～40cmの径で、深さは約30cm前後か

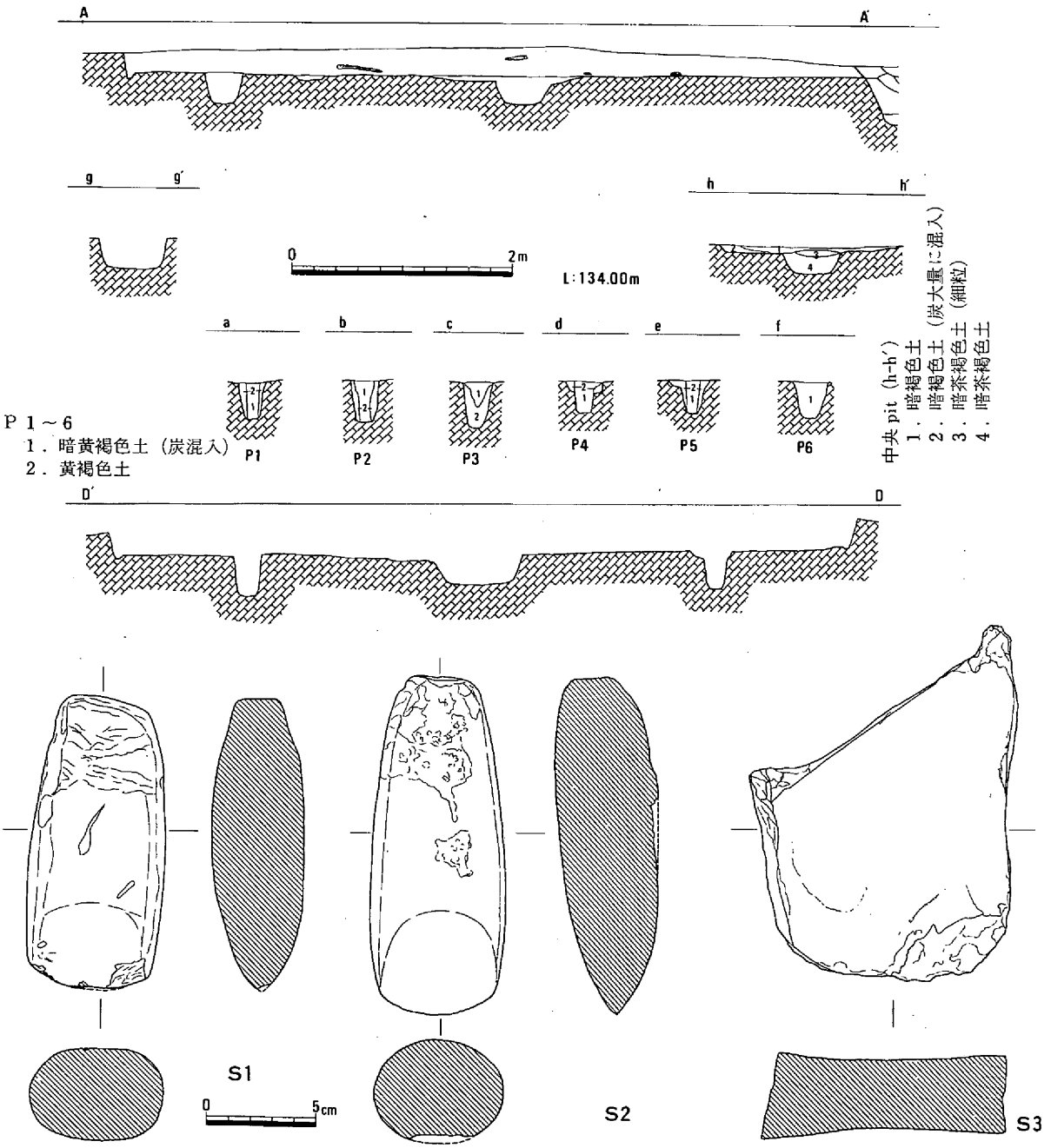


第46図　竪穴住居24（1/60）

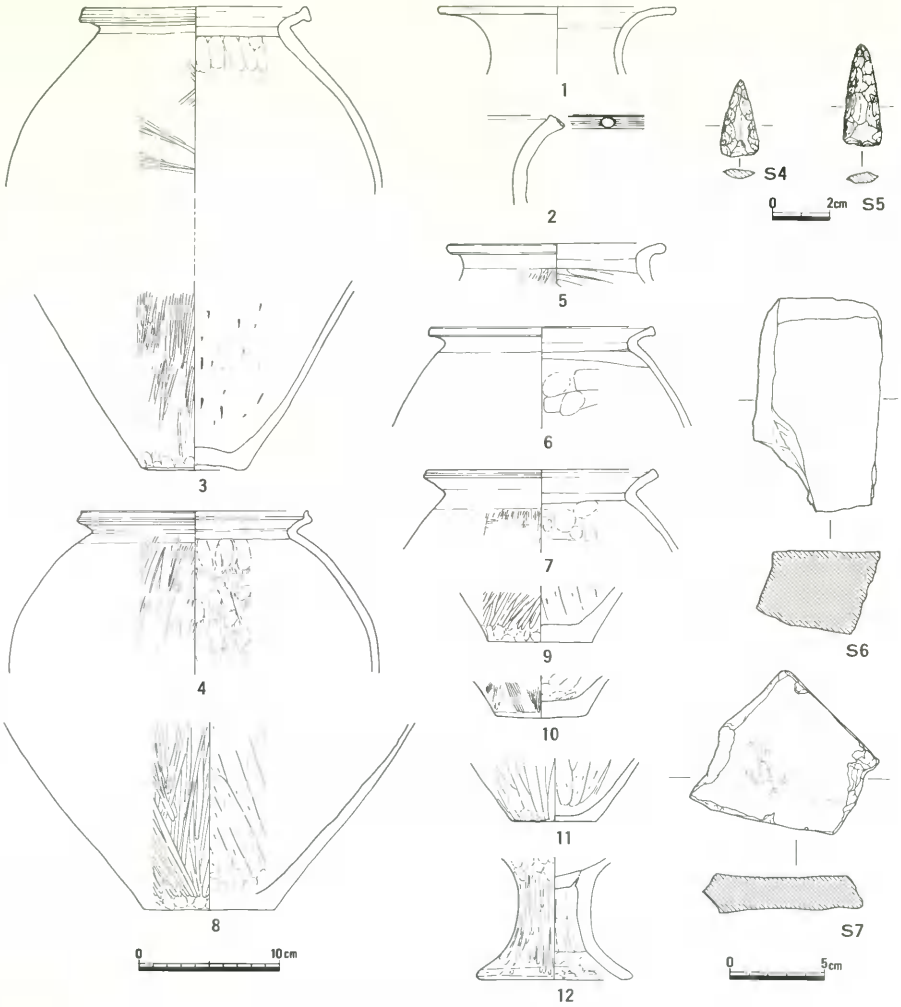
ら最深で40cmを測る。中央穴は不定形で浅い窪み状の外周で、中央部に長辺80cm、短辺50cm、深さ約20cmを測る隅丸長方形を呈し、住居のほぼ中央に位置している。壁体溝は規則的に全周を巡ることはない溝で、幅、深さも不規則である。土壙は北西部側で、Ｐ３－Ｐ４と壁体の中間に位置し、60cm×30cmを測り、深さが25cmの隅丸長方形の土壙である。

遺物は埋土中に多く、床面直上の遺物は少ない。石器には石斧・石皿・石鏃・砥石・土器は壺・甕・高杯等がある。

時期は弥生時代中期に位置づけられる。



第47図　竪穴住居24断面図（1/80）・出土遺物



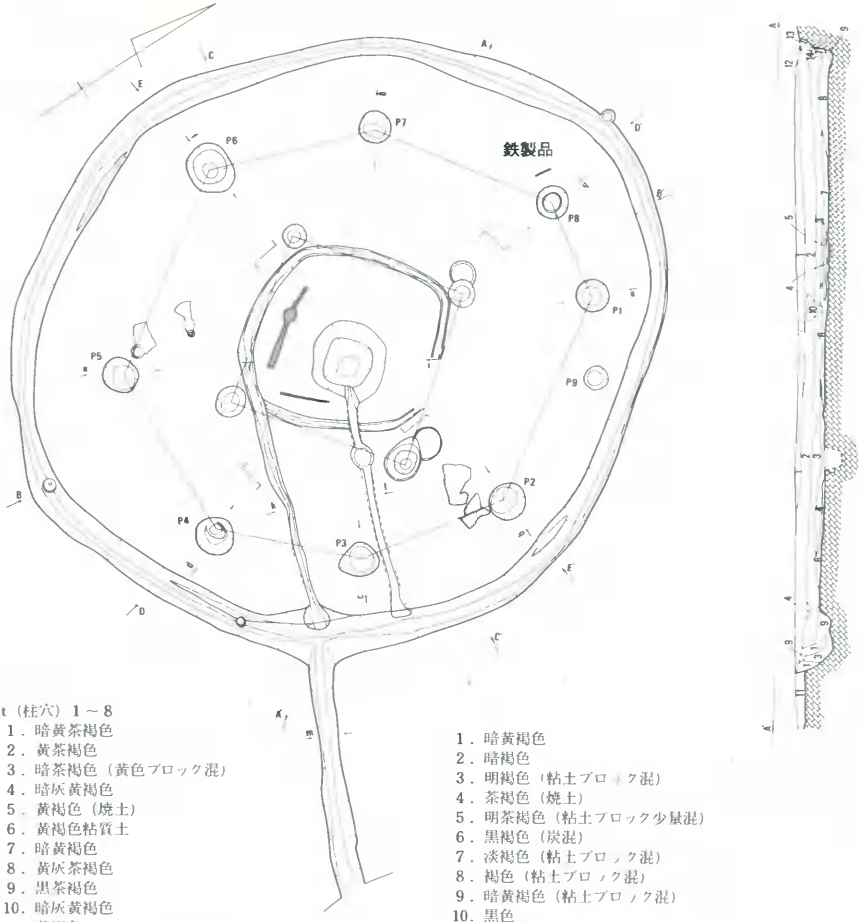
第48図　竪穴住居24出土遺物

竪穴住居25（第49・50図、図版９－３、10－２・３）

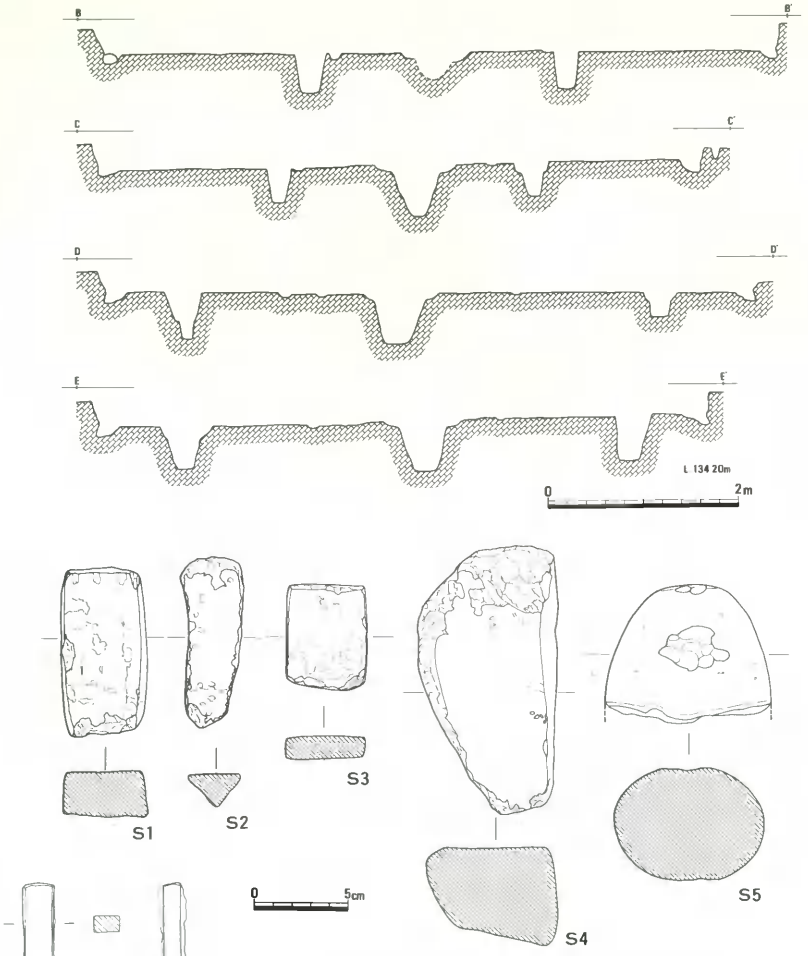
１区Ｇの南西部で尾根が最も平坦な場所に位置し、南と東側で先行している住居を切っている。

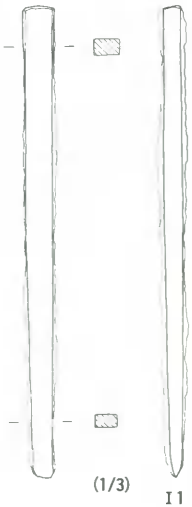
平面形は歪な形状を示す隅丸方形ぎみの多角形（８角形）の竪穴住居で、北西－南東方向に長軸を持っている。さらに住居完掘後における第49図の平面図で、多辺を有していることが確認でき、残存した最大深長は約35㎝程度を測った。床面でＰ２の南西位置に炭化した植物遺体（カヤあるいはヨシの類）が認められているが、この住居が火災を受けて炭化したものではない。

住居の屋内施設には主柱穴・中央穴・それに伴う溝・壁体溝からなっている。主柱穴はＰ８－Ｐ１の110㎝を最短でＰ１－Ｐ２・Ｐ５－Ｐ６の235㎝まで様々な数値を示している。またこの柱間に対して壁を有し、柱はこの住居の壁角の内側になっている。主柱穴は８本と断定できた。また主柱穴の内



第49図　竪穴住居25（1/60）



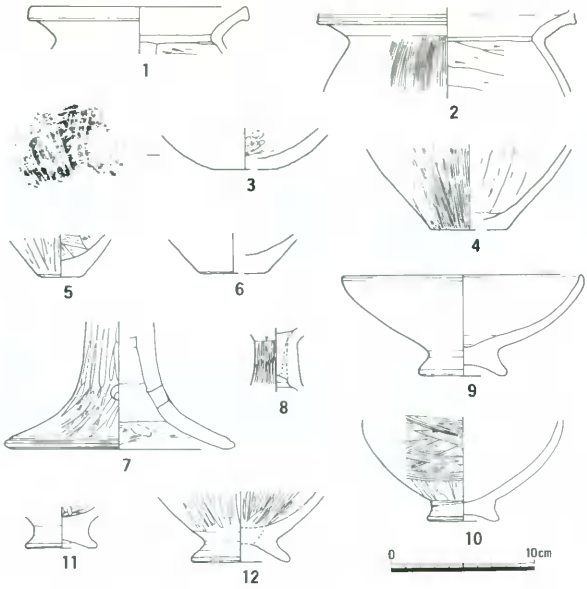


第50図　竪穴住居25断面図（1/60）・出土遺物

側に1間おきの間隔で柱穴を4本検出、この柱は住居の中程に位置していることから主柱穴の添え柱の柱穴と判断しうる。中央穴の掘り方は一辺75cmを測る隅丸方形で尻すぼみで深さ約75cmを測る。

中央穴と壁体溝を結んでいる溝は断面形が丸底フラスコ状を呈している。よってこの溝は暗渠方式を行っていたことが明白な溝である。また中央穴をとりまいている溝は、最後に暗渠溝に併設されている。中央穴と、外側の溝（仕切り溝）の間の南東、南西部に板痕跡が認められた。壁体溝については、部分的ではあるが重複していた。よって1回の拡幅が行われたことがうかがえる。

屋外に延びた溝は20cm～30cmの幅で検出面での深さは30cmを測り、徐々に南東方向に下がっていくが、壁外約240cm位いで竪穴住居22に



第51図　竪穴住居25出土遺物

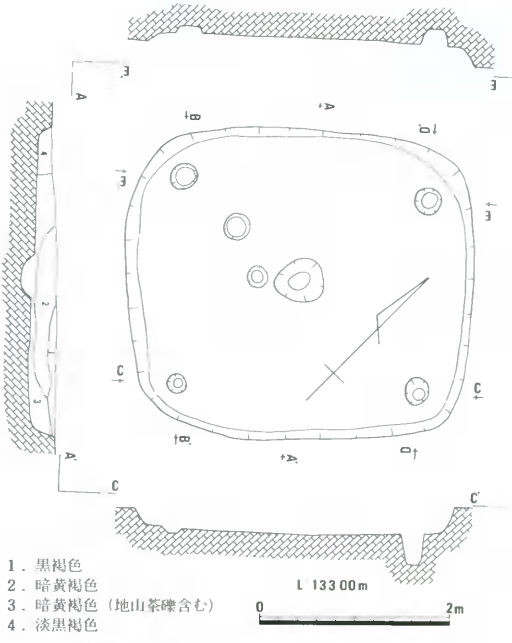
よって切られていることから延長不明。

図示されている遺物は大部分が床面直上、あるいは壁体溝内のものである。第50図のⅠ1は鉄製品（鏃）、石製品（叩き石・凹石）。第51図の土器等である。

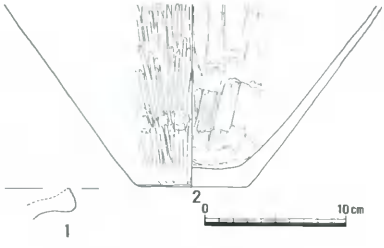
遺物・遺構等から、弥生時代中期後半に位置づけられる竪穴住居と判断したい。

竪穴住居26（第52図、図版11－1）

1区D北東部に位置する。南東部には竪穴住居25が存在している。北東－南西に長軸370cm、北西－南東に短軸325cmの隅丸長方形を呈し、最深部で25cmを測る。壁体溝を有さないこの住居は、4本柱と不整楕円形で擂鉢状の形態を呈した中央穴を伴っている。柱間は200cm～260cm、径20cm～25cm程で5cm～30cmのばらつきのある深を測った。出土遺物から弥生時代後期に属する住居である。



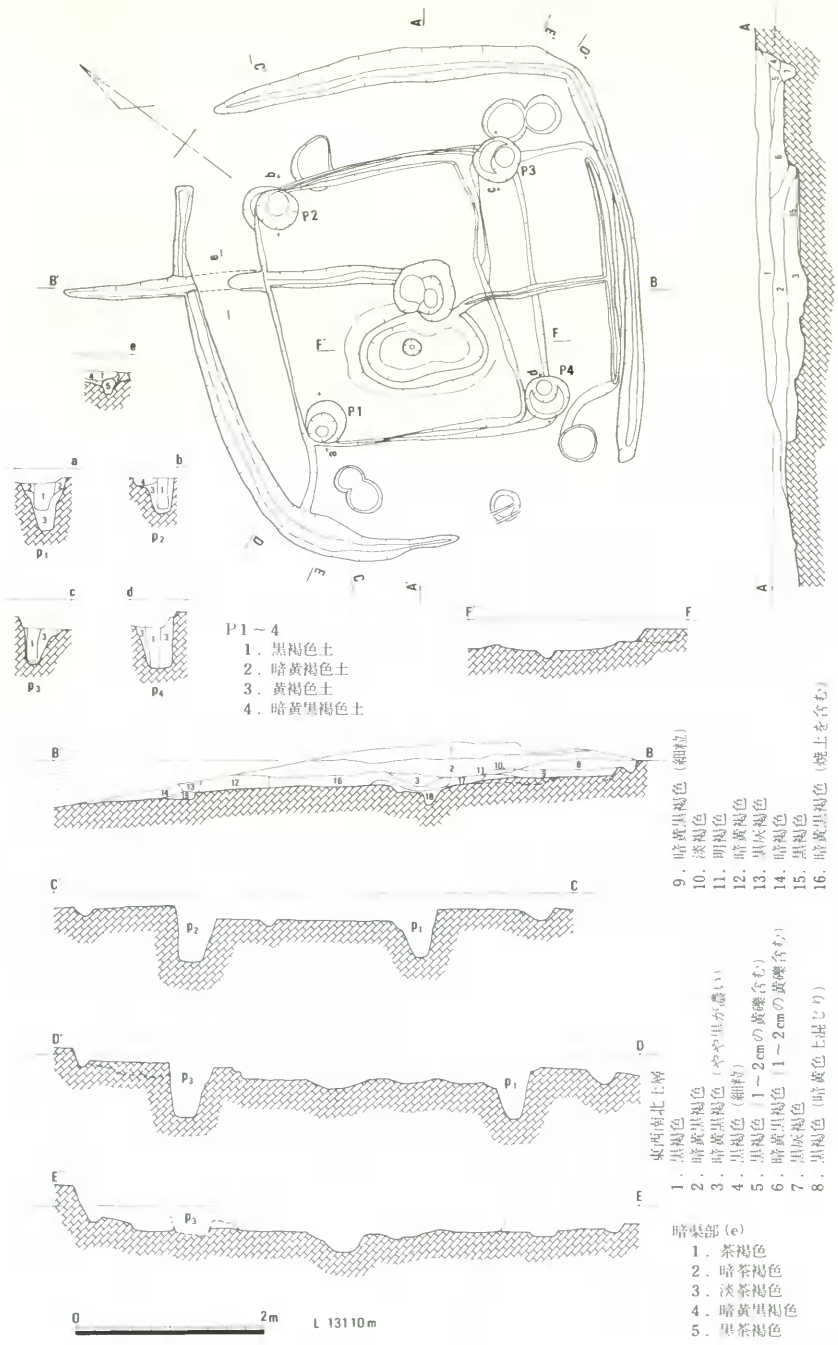
第52図　竪穴住居26（1/60）・出土遺物



竪穴住居27（第53図、図版11－2・3）

1区Dの北西部に位置する隅丸方形の竪穴住居である。住居の南東部を近代の土取りによる削平により住居の上部（壁体）をかなり削り取られていたが、かろうじて下部構造は存在していた。住居の埋土は厚い位置で45cmを測った。

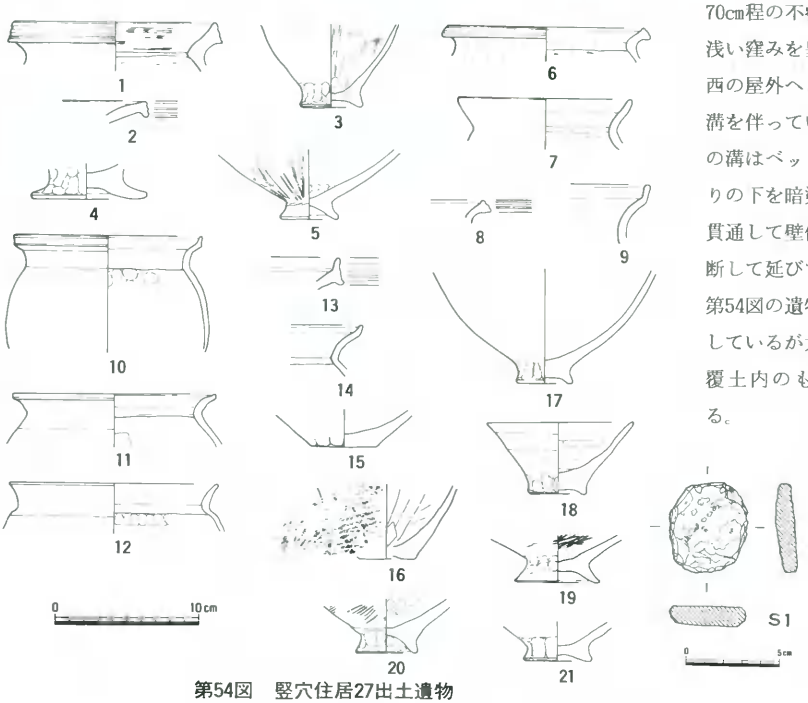
住居の屋内には、柱穴・中央穴・中央穴



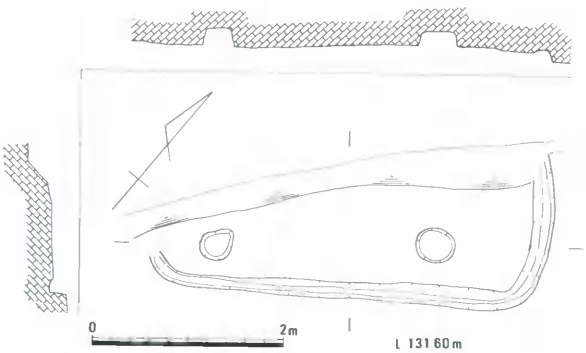
第53図　竪穴住居27（1/60）

より屋外に続いた溝・壁体溝・ベッド状の高まりが確認されている。屋内の遺構検出から、住居は建て替えが行われていることが認められ、古い住居の床面はかなり削られていたが、柱穴は４本と思われる浅い窪みが四隅で認められた。その住居に伴う中央穴は100㎝×160㎝の土手状の高まりに囲まれた長楕円形で、さらに中央やや北西よりに窪みを伴っていた。南東壁体溝と溝で結ばれている。

改築後の住居はほぼ400㎝前後の方形で、深さ50㎝前後を測る４本柱、柱間も245㎝前後と一定している。柱穴と壁体溝の間は中央部と比較して15㎝程度高まりとして残して掘り上げられている。壁体溝は南西隅は掘削により失うが、北隅については建築当初から掘り上げが行われていない。中央穴は70㎝程の不整円形の浅い窪みを呈し、北西の屋外へと延びる溝を伴っている。この溝はベッド状高まりの下を暗渠方式で貫通して壁体溝を切断して延びている。第54図の遺物が出土しているが大部分が覆土内のものである。



第54図　竪穴住居27出土遺物



第55図　竪穴住居28（1/60）

時期は弥生時代後期に位置づけられよう。

竪穴住居28（第55図）

１区Ｄ北西部隅で、竪穴住居27の下方に位置するほぼ方形と思われる竪穴住居であり、北西側は近代の山道によって切られている。

住居の深さは検出面から15㎝で床面を検出し、外周する壁体溝と柱穴２本が確認できた。柱間は230㎝、径30～40㎝、深さ15㎝程

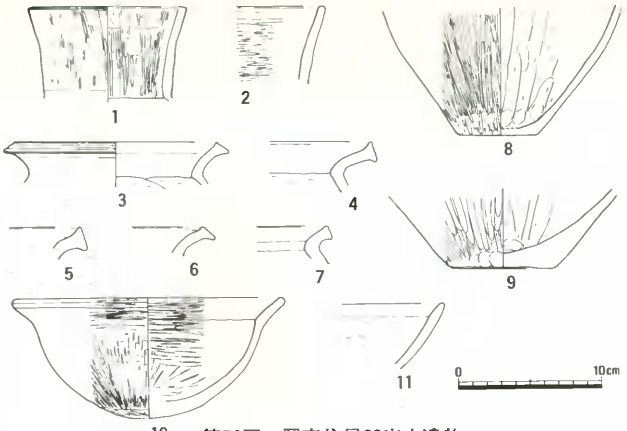
のほぼ円形の柱穴であった。他の遺構は削平で消滅している。

遺物は第56図のものであり、時期は弥生時代後期に位置づけられよう。

竪穴住居29（第57～59図、図版12－1）

1区Gの中程でわずかに南東に傾斜する緩斜面に位置する。

検出された竪穴住居の総軒数は壁体溝の本数から5軒と思われる。しかしながら、その壁体溝の本数と検出された柱穴数とは一致していない。なぜならば、柱穴は同一のもので、壁体のみを改掘したためである。



第56図　竪穴住居28出土遺物

本住居も竪穴住居22と同様に、縮小された竪穴住居が最も新しい時期のものであるが、ここでは若干異っており、中型が最も古く、次いで大型、さらに最後に小型という順であることが確認されている。古い順に1・2・3と付け順次概要を記すことにする。

1は北東側で辺を持つ形態を示し、反対側では円形状の形態を有する2つの違った平面形の合体の住居のようであるが、一般的には不整方形の平面形態の竪穴住居と理解するのが妥当な住居であろう。

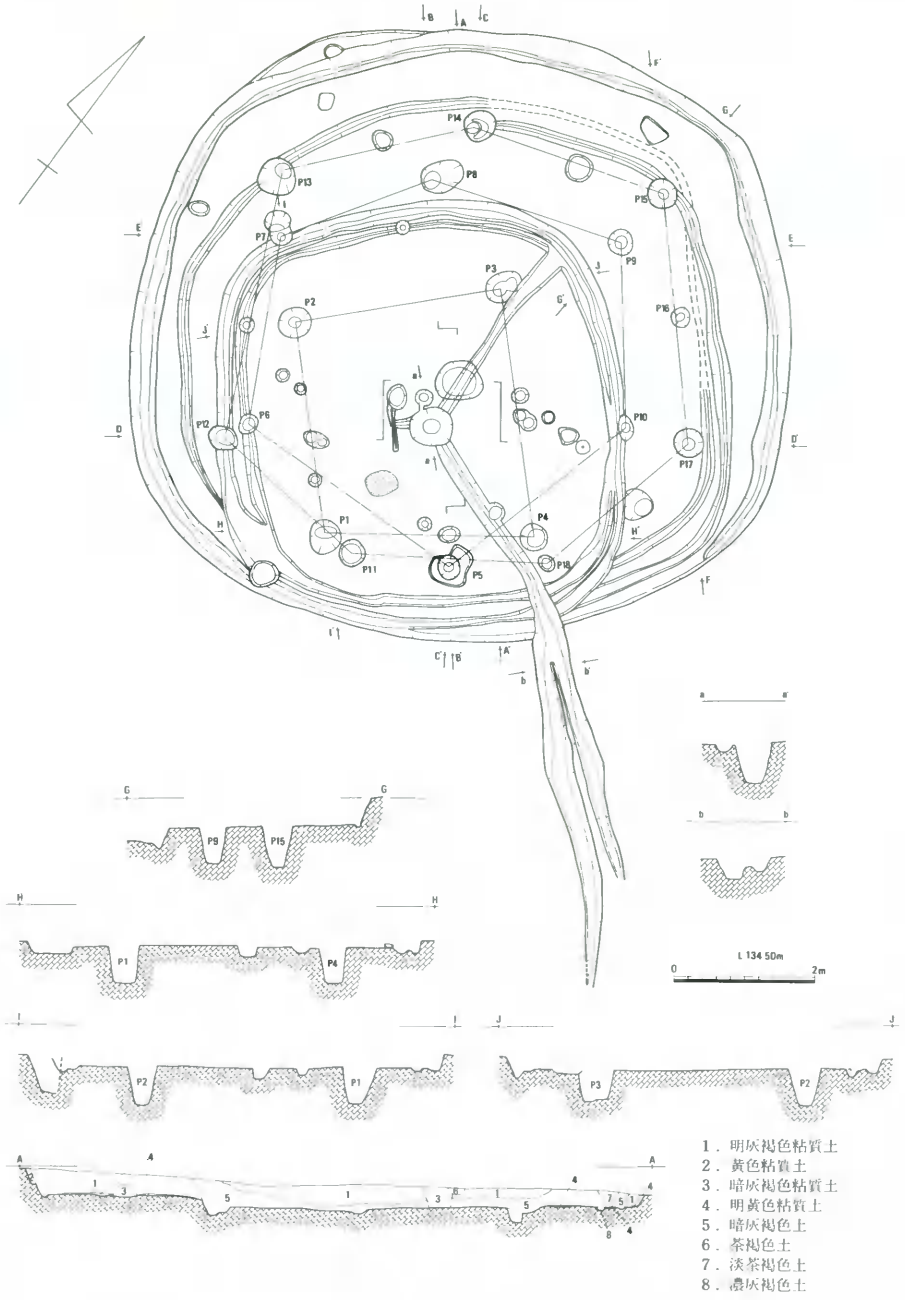
本住居の屋内には主柱穴・中央穴・壁体溝を有する。主柱穴は6本であり、その柱間についてもばらつきがあり、最短で220cm、最長で345cmを測り、南東部の柱穴1本が異様な位置に存在している。住居の規模と比較して柱穴は小振りで、径は15cm～最大で40cm、深さは40cm～60cmを測る。さらに中央穴は、住居の中心部より50cm程度南東部に位置し、径20cm、深さ20cmを測り非常に小さな遺構である。壁体溝は中央部分より北東側で部分的であるが2本を確認。南東側は3に切られている。

2は1を拡張した平面形態を示し尾根に並行して長軸930cm、直交して短軸870cm示し、検出面から床面までの壁高の最大は約35cm程残っていた。床面直上には第59図の石器が点在していた。

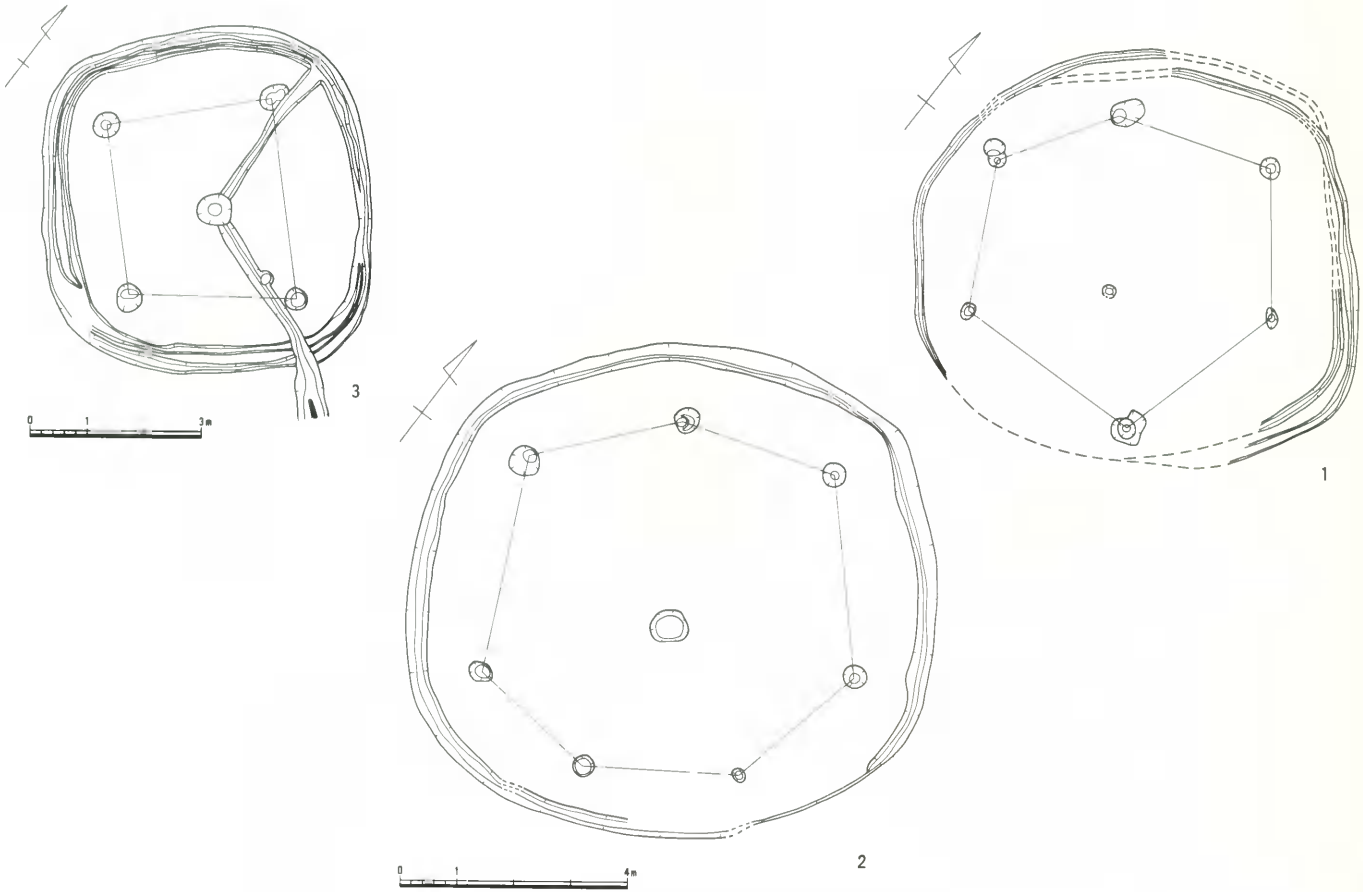
屋内施設は主柱穴・中央穴・壁体溝を有する。主柱穴は7本で柱間は最短245cm、最長385cmを測り、南西部の柱間が他の柱間とかけはなれて広いことに注目される。この柱間が入口の方向であった可能性がある。柱穴は最小で約20cm、最大で50cmの径で、円形の平面を示し深さは約70cmを測る。床面のほぼ中心部に55cm×65cmの楕円形で約50cmの深さをもった中央穴である。壁体溝は南は3に切られ、東側では丸く先細りで途切れている。

3はこの位置での最後に建築された竪穴住居で、平面形態は前2軒よりもより整った若干胴張り気味の隅丸方形を呈する竪穴住居である。その規模は長軸600cm、短軸580cmを測り、確認された壁高は最大で約40cm程残っていた。

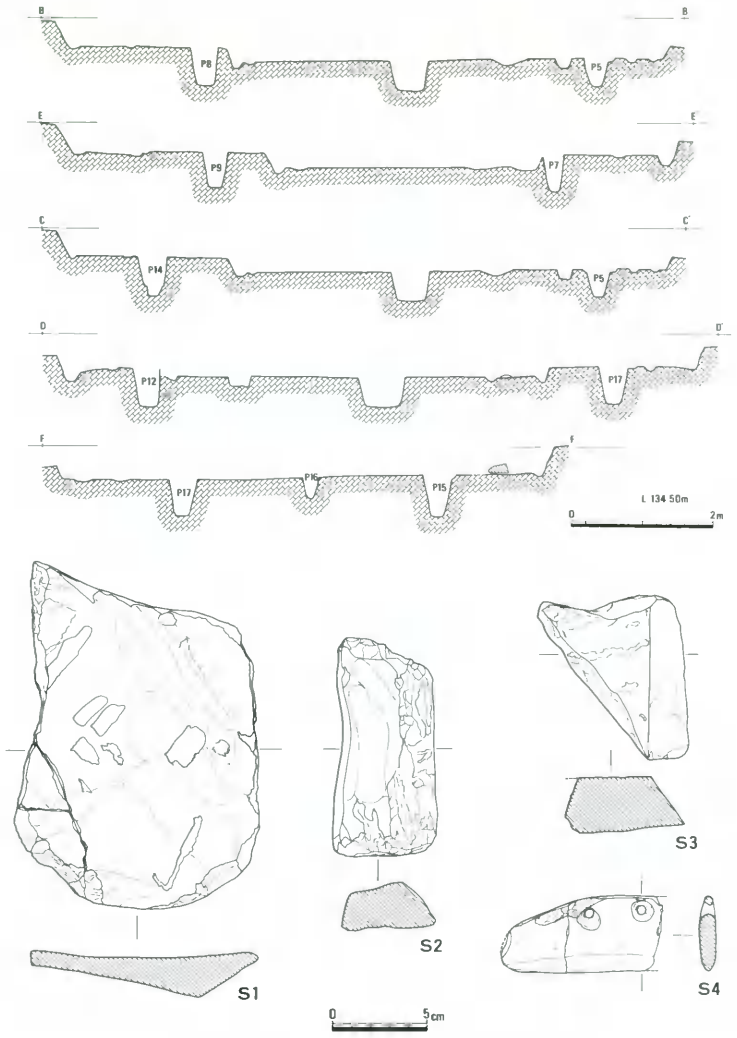
住居に伴う屋内施設は、主柱穴・中央穴・中央穴に関連する溝・壁体溝からなる。主柱穴は4本、



第57図　竪穴住居29（1/80）



第58図　竪穴住居29築造順序 1（右）・ 2（中）・ 3（左） (1/100)

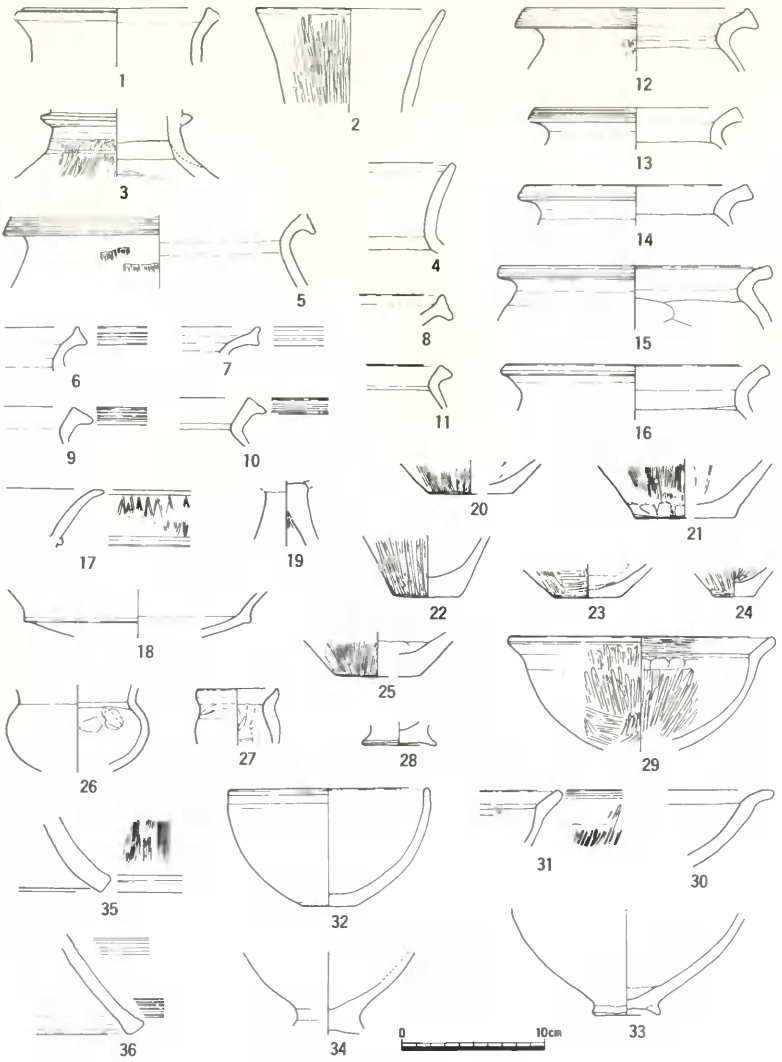


第59図　竪穴住居29断面図（1/80）・出土遺物

間隔は長軸北東で355cm、反対では300cm、短軸は左右290cmを測る。柱穴はすべて円形を呈し、径35cm～50cm、深さは40cm～50cmを測る。中央穴はほぼ円形を呈し50cm、底面で約20cmで60cmの深さの中央穴である。さらに壁体溝北隅から中央穴を通る「く」字状の溝が南東隅部から屋外へと延びている。屋内では浅く窪む溝であるが、屋外では「U」字状の断面を呈し二股に分かれ蛇行して先細りで終る。壁体溝は外周が新しいものと判断した。床面のドットは焼土塊である。

第60図の遺物は覆土中に多く含まれていたものである。時期は弥生時代後期に位置づけられよう。

竪穴住居30（第61図、図版12－２）



第60図　竪穴住居29出土遺物

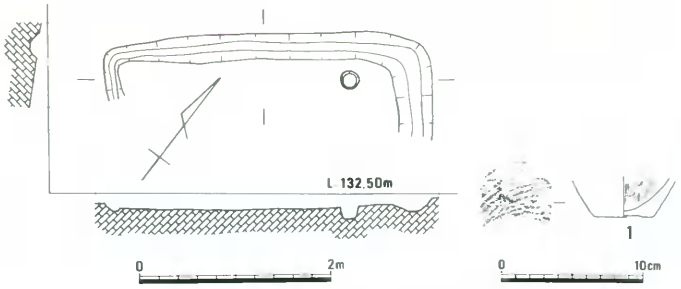
1区H中程やや北よりで南東斜面に位置する。遺構の存在している斜面は、かなりの開墾が行われているために残存率は非常に悪く、壁体溝・柱穴の検出のみであった。

埋土中からタタキ目を施した甕片が出土している。弥生時代後期に属する遺構と考えられる。

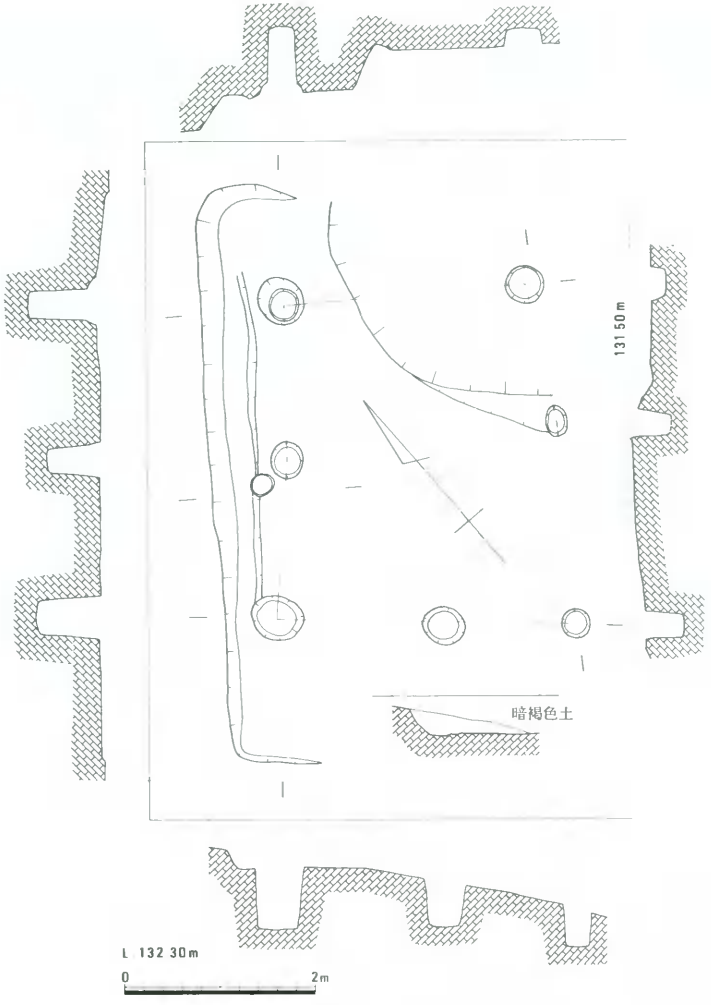
竪穴住居31（第62図、図版12―2）

1区Hで竪穴住居30の南に位置する。南東部は開墾、北東部は住居によって切り取られている。

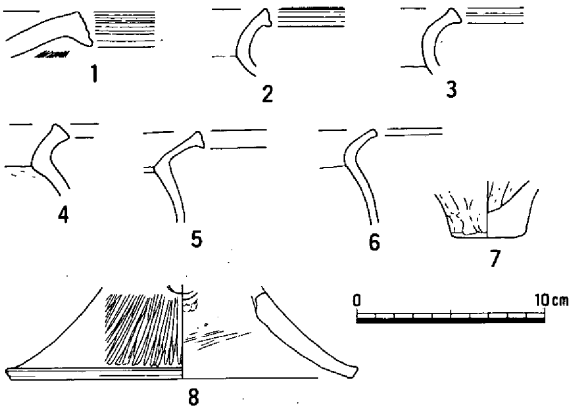
北西側には壁体溝状の窪みを有する。カギ状を呈した段を持つ平坦面を一部確認した。またこの遺構に伴う柱穴は2間×2間を検出、規模から掘立柱建物が妥当である。覆土内出土の遺物で弥生時代後期に属する時期の遺構と考えている。



第61図　竪穴住居30（1/60）・出土遺物



第62図　竪穴住居31（1/60）



第63図　竪穴住居31出土遺物

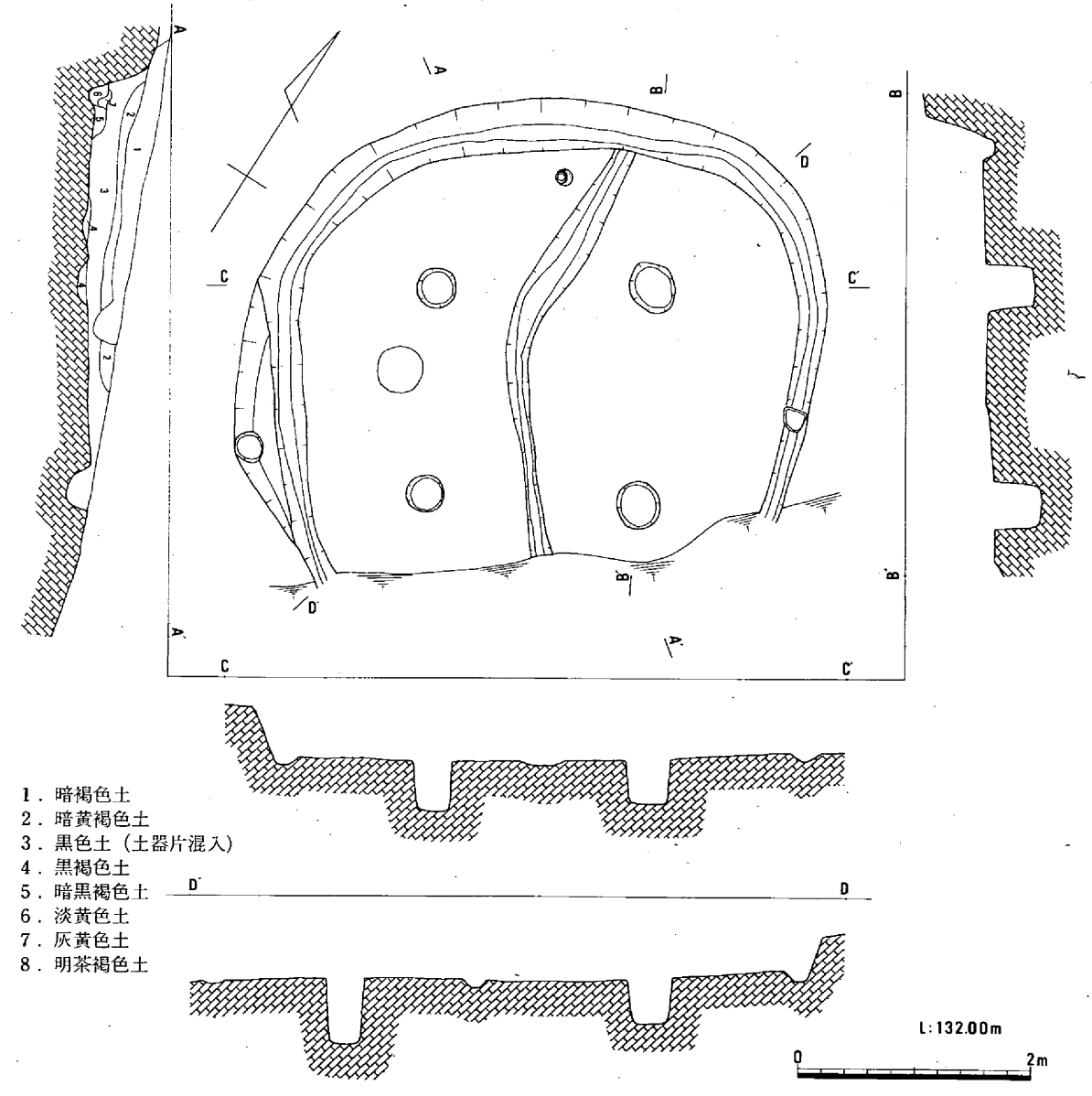
竪穴住居32（第64図、図版12—2）

1区G南東斜面部に位置し、住居南東部は開墾のため切り取られている。

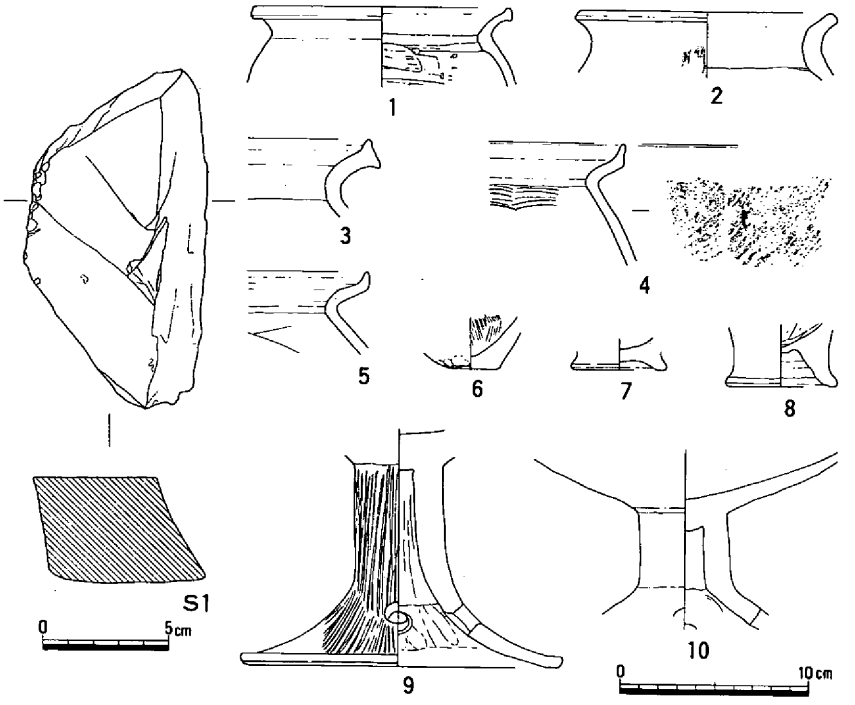
平面形態は胴張りの隅丸方形を呈する竪穴住居であり、残存する床面までの壁高の最大は約50cm程測ることができた。

住居の屋内施設としては主柱穴・壁体溝・北辺壁体溝から中央部を通って「く」字状を呈した溝からなり、中央穴は存在していなかった。

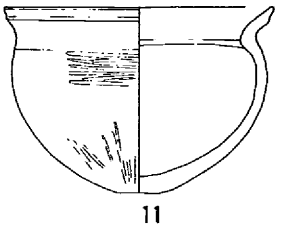
主柱穴は4本でP1—P2間は185cm、P2—P3間190cm、P3—P4間180cm、P4—P1間で180cmを測った。深さは、一番浅いP2で35cm、また最も深いP4では約55cmを測る。床面を「く」字状に通る溝は北側では浅い窪みで、南東部においては幅も狭く「U」字状を呈し徐々に下がっている。



第64図　竪穴住居32（1/60）



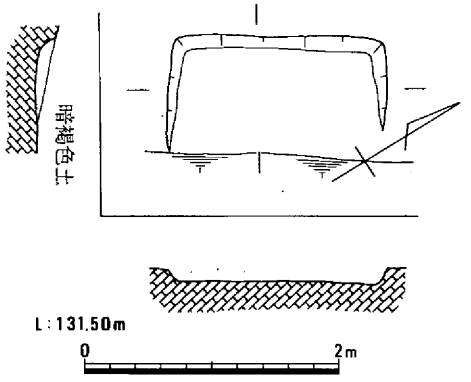
第65図　竪穴住居32出土遺物



遺物は覆土（３層）中に含まれており、床面直上の遺物は少ない。「タタキ」目の土器片も出土している。時期は弥生時代後期に位置づけられる。住居自身は地形をポケット状に掘り窪められ、切り盛りで建てられていることが判明した。

竪穴住居33（第66図）

１区Ｇ南東斜面部で竪穴住居32の南に位置して、南東部を削平によって切られた北東―南西に長軸170cm前後を測る長方形の遺構である。遺構自体はゆるやかに立ち上がる壁体で、床面はほぼ平坦であるが、付属施設・形態・規模・埋土状況から土壙と考えるのが妥当な遺構である。時期不明、中世以降の可能性が高いと思われる。

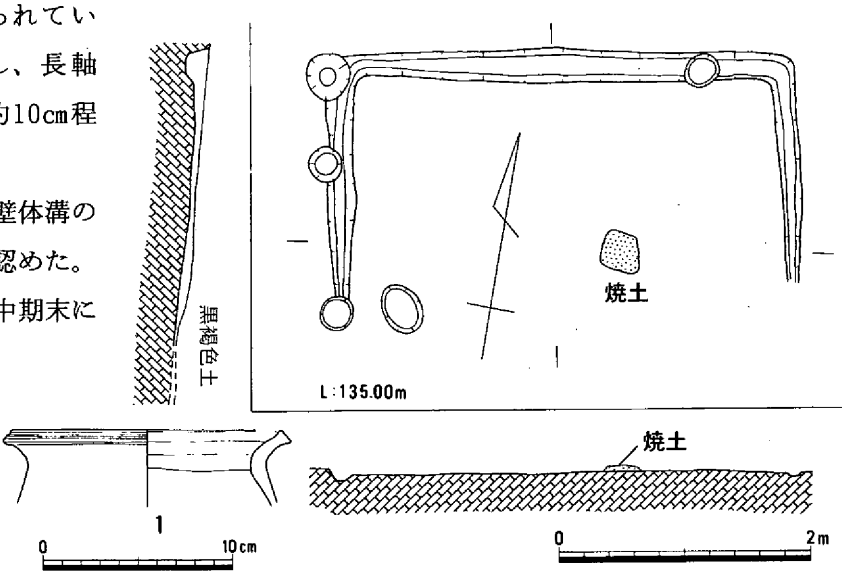


第66図　竪穴住居33（1/60）

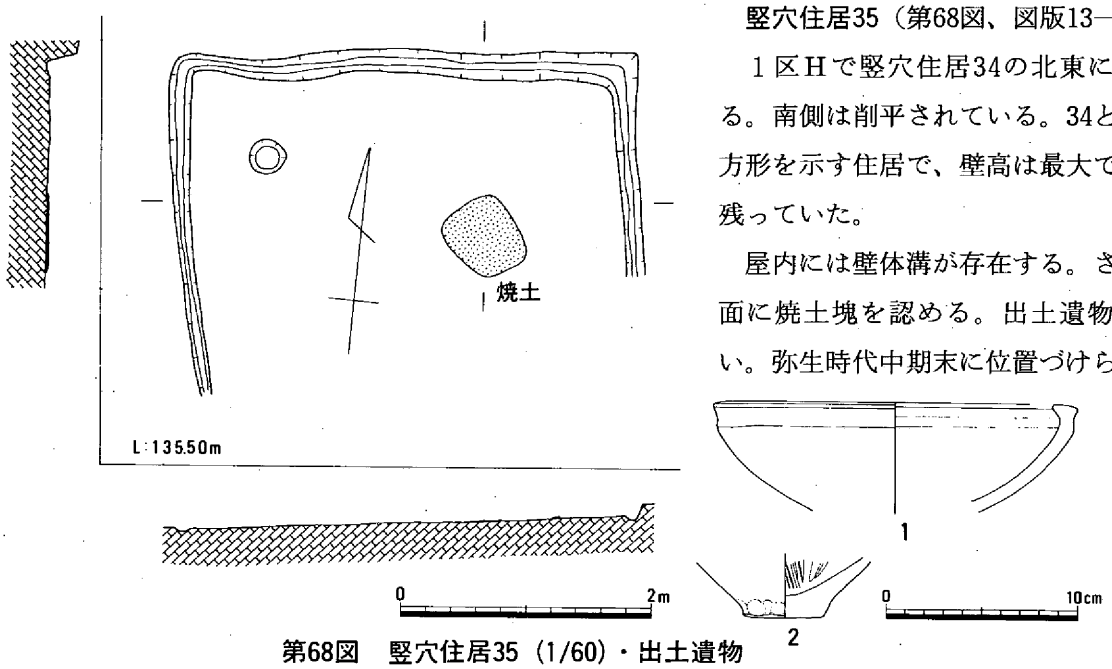
竪穴住居34（第67図、図版12―３）

１区Ｇ中程でＨ区に接した緩斜面に位置し、南側は削平（開墾・山道）により削られている。残存平面形は方形を呈し、長軸380cmを測り、壁高は最大で約10cm程残っていた。

住居には柱穴は存在せず、壁体溝のみである。床面には焼土塊を認めた。出土遺物は少ない。弥生時代中期末に位置づけられる。



第67図　竪穴住居34（1/60）・出土遺物



第68図　竪穴住居35（1/60）・出土遺物

竪穴住居35（第68図、図版13—1）

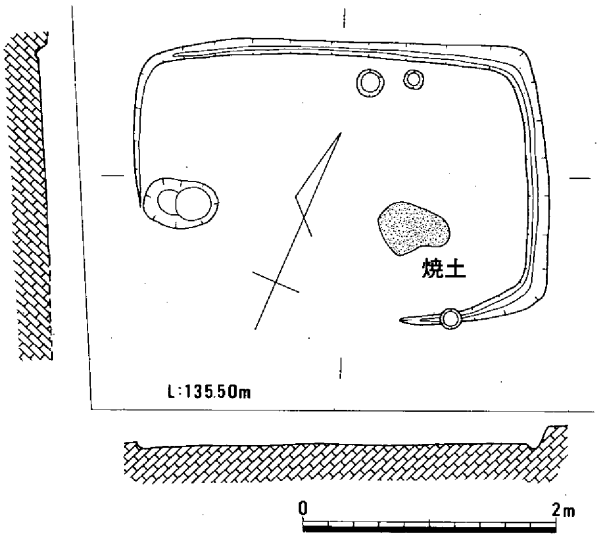
1区Hで竪穴住居34の北東に位置する。南側は削平されている。34と同様の方形を示す住居で、壁高は最大で20cm程残っていた。

屋内には壁体溝が存在する。さらに床面に焼土塊を認める。出土遺物は少ない。弥生時代中期末に位置づけられる。

竪穴住居36（第69図）

1区Gの陵線上で住居34の北に位置する。

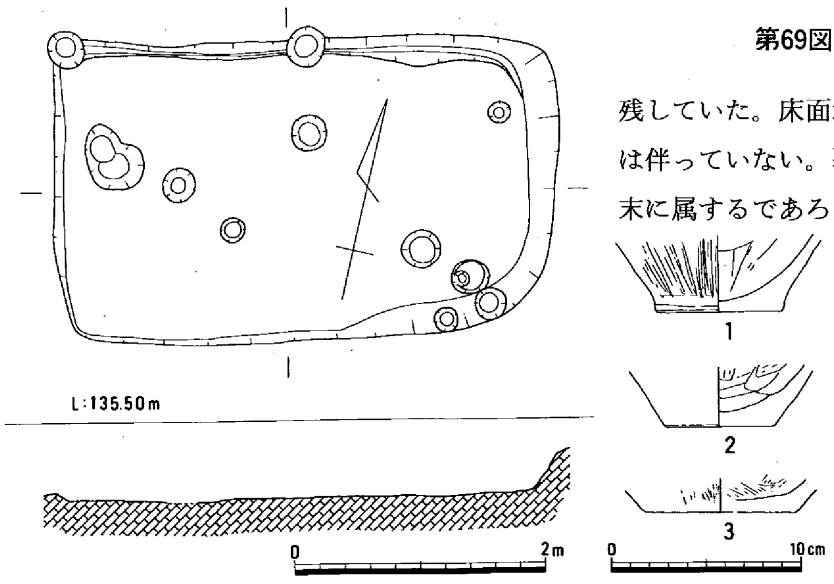
平面形は隅丸長方形を呈し、長軸325cm、短軸225cmを測り、床面までの深さは最大で約10cm程残っていた。住居の南隅は削平されている。屋内施設は壁体溝のみである。また床面北東よりに焼土塊を検出。覆土中から土器細片の出土。弥生時代中期末に属するものではなかろうか。



第69図　竪穴住居36（1/60）

竪穴住居37（第70図）

竪穴住居36の西側に位置し、同一方向に長軸395cm、短軸240cmを示す。壁高は最大で約25cm程残していた。床面北辺にのみ壁体溝を有し、柱穴は伴っていない。覆土中の遺物から弥生時代中期末に属するであろう。

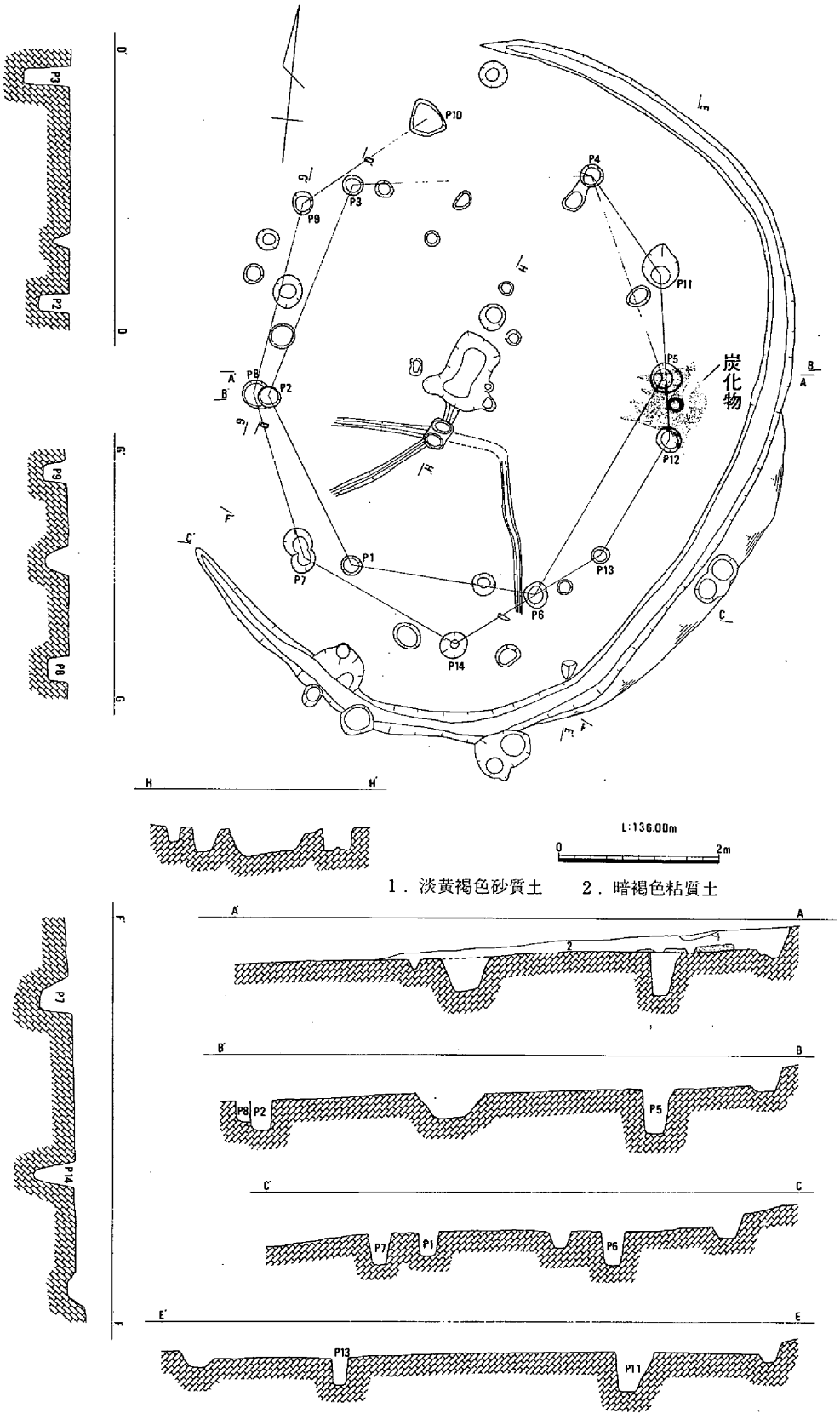


第70図　竪穴住居37（1/60）・出土遺物

竪穴住居38（第71図、図版13—2）

1区北東部でC・G区に位置する。北西部は削平で消滅する住居である。

平面形態は胴張りの隅丸方形を呈し、北東—南西に長軸を有し、850cm、東側での壁



第71図　竪穴住居38（1/80）

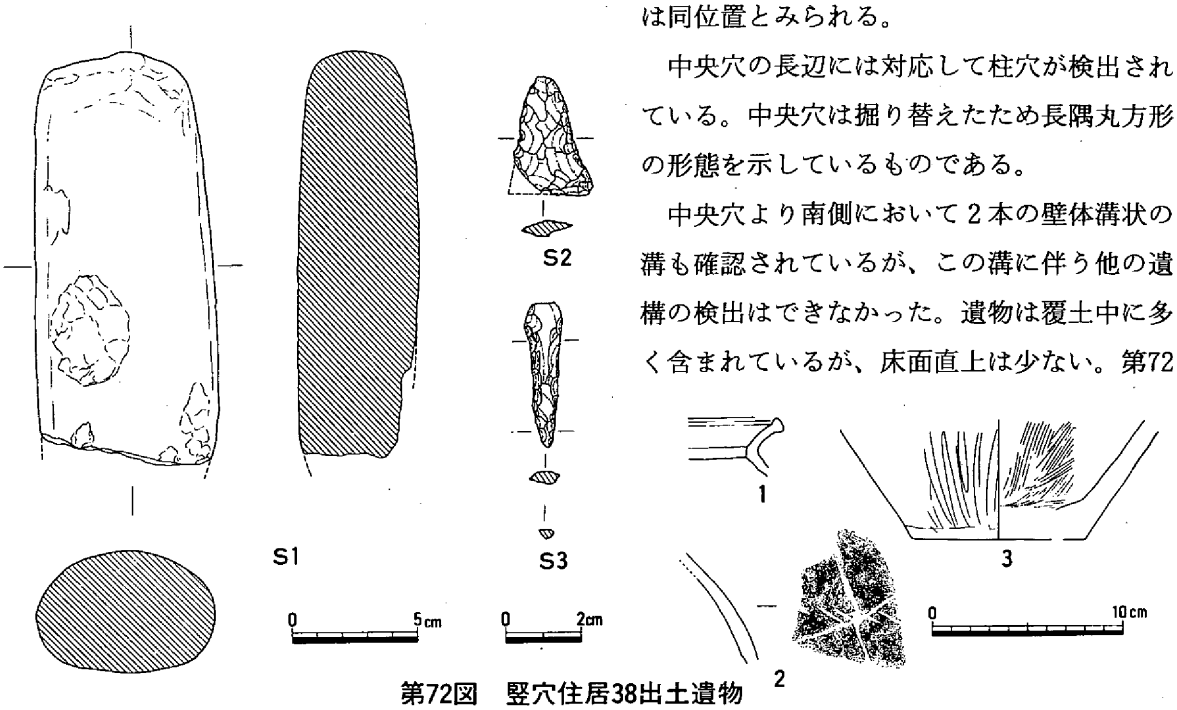
高は最大で20cm程を測った。

本住居は火災を受けており、埋土中には炭化物が多く含まれていた。床面においても東部（ドット部分）に炭化物が残っていた。しかし建築材は放射状には認められなかった。

さらに住居は建替えが認められ、主柱穴は9本と6本であったが、壁体溝ならびに中央穴については同位置とみられる。

中央穴の長辺には対応して柱穴が検出されている。中央穴は掘り替えたため長隅丸方形の形態を示しているものである。

中央穴より南側において2本の壁体溝状の溝も確認されているが、この溝に伴う他の遺構の検出はできなかった。遺物は覆土中に多く含まれているが、床面直上は少ない。第72



第72図　竪穴住居38出土遺物

図である。時期は弥生時代中期末に位置づけられよう。

竪穴住居39（第73図、図版13—3）

1区C北東部西斜面に位置する。この竪穴住居は、白塚2号墳下において検出されている歪な隅丸方形の平面形態を示し、南西部での壁高は最大で約45cm程を測った。

住居は南東辺から北東辺にかけては階段状に掘り下げを行っている。検出された床面での遺構は柱穴・中央穴・壁体溝からなり、柱間は最短160cm、最長190cmを測る径約25cm～最大で約40cmの円形で、深さは45cm～50cmとほぼ一定であった。南西隅部の柱穴は3本が重複しているが、他の3本は同穴を使用。

中央穴は30cm×35cmとほぼ円形の平面形を呈する柱穴状に掘り窪めたもので、深さは床面から約35cmを測った。さらに壁体溝は、北西辺北よりで重複が認められた。このことから住居は建て替えが明らかとなった。土層断面から拡張と見受けられる。遺物は石器・土器があり、床面付着・壁体溝内である。

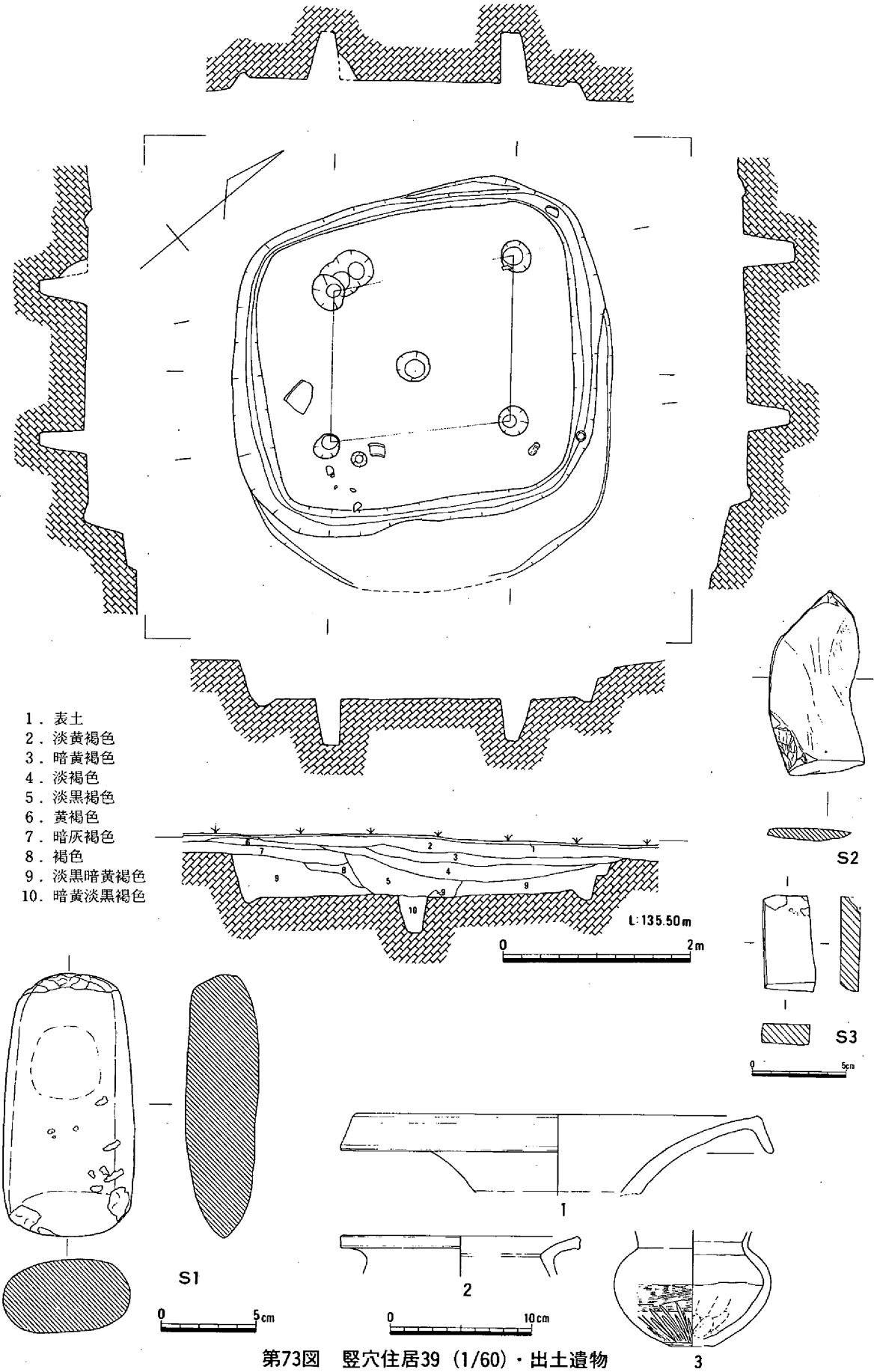
時期は弥生時代後期に属するであろう。

竪穴住居40（第74図）

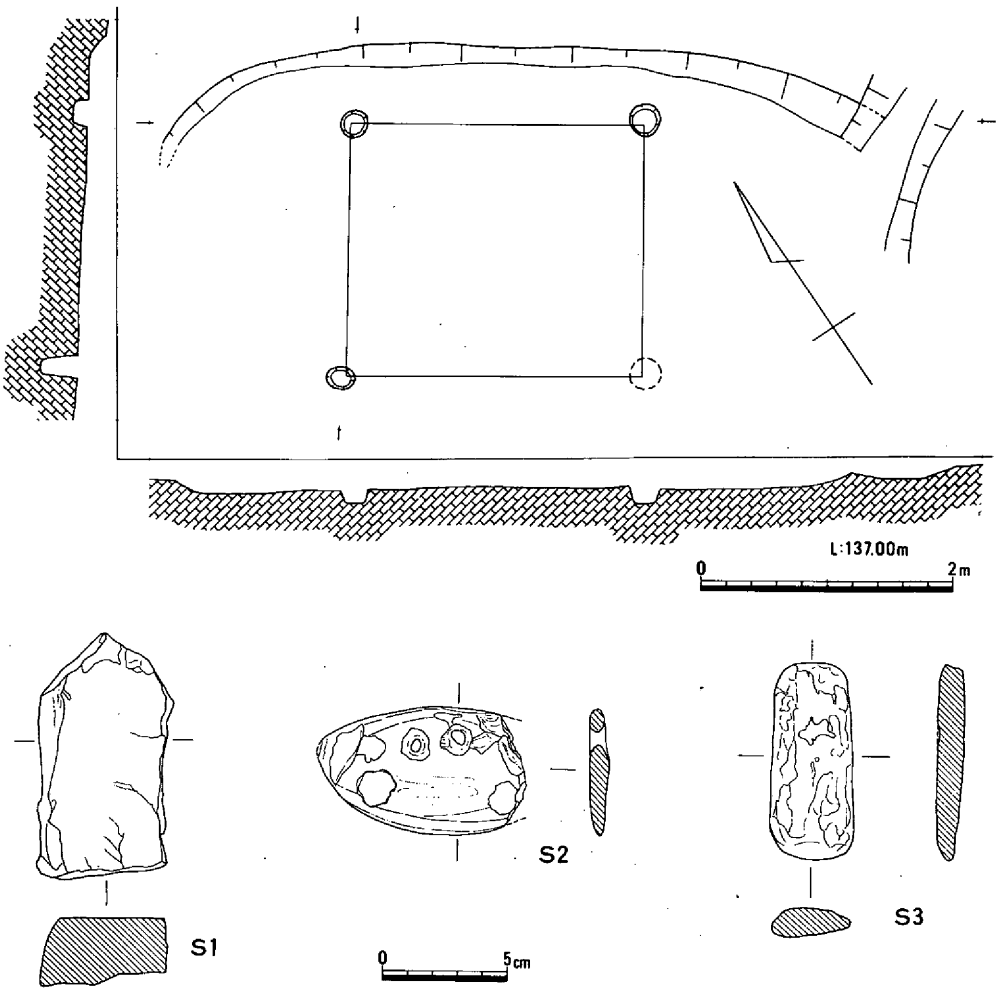
竪穴住居38の東部に位置する。開墾により大部分が削平されている。さらに中世の掘立柱建物と重複しているため平面形・壁体については不明確であるが、遺構内埋土・出土遺物等から竪穴住居が妥当であろう。弥生時代後期に属すると考えている。

竪穴住居41（第75図、図版14—1）

住居40の南東部に近接して位置する。住居の約半分は山道により切られている。また、北西部上層



第73図　竪穴住居39（1/60）・出土遺物



第74図　竪穴住居40（1/60）・出土遺物

には、北西一南東に長軸を持っていた小型の住居も検出、推定規模は長軸約260cm、短軸190cm、床面までは約20cm程測り、壁体溝を伴っている。遺構検出面での形態は、住居41の張り出し部の形状を呈していたが、調査の結果、住居41埋没後の小型の無柱穴の竪穴住居と判明した。

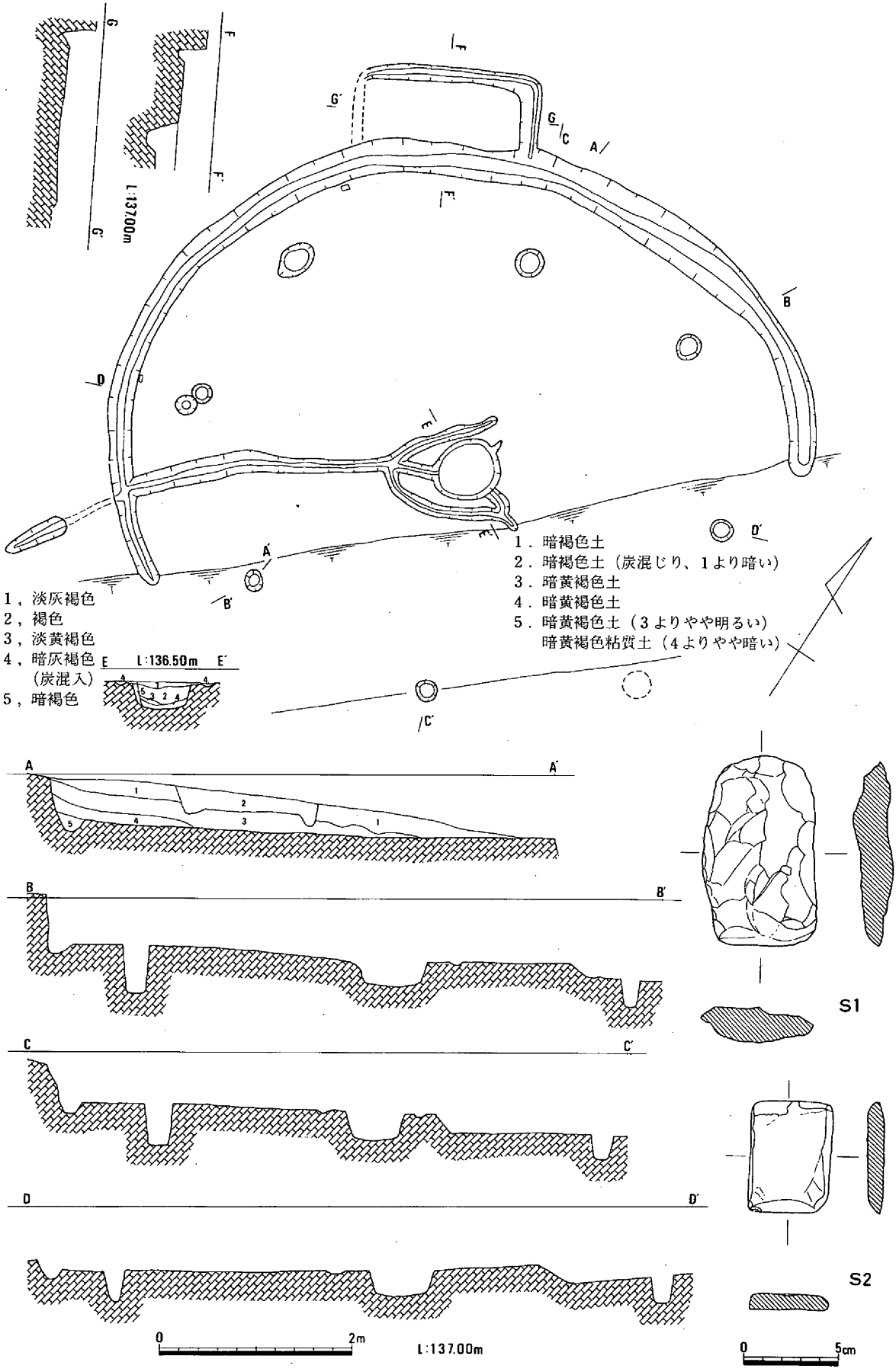
竪穴住居41は道で切られてはいるが、推定で長軸735cm、短軸685cmと考えられる長楕円形の平面形状を呈する住居と判断した。床面までの壁高は最大で約45cm程残っていた。

住居の屋内には主柱穴・中央穴・溝・壁体溝等が確認された。主柱穴はその配列から８本と想定されたが、南東部の１本は削平で消滅。残存する柱間は最短180cm、最長240cm、径は20～30cm、深さは30～45cmを測った。中央穴は径60cm前後の円形で逆台形状の断面を呈し、深さ約25cmを測る。溝は中央穴に入出するもの、挟む形の溝が中央穴の南西側で合流し、徐々に壁体溝へと延び、暗渠で屋外へと続いている。壁体溝の幅は約25cm～最大で約45cm、深さは平均して10cm程度であった。

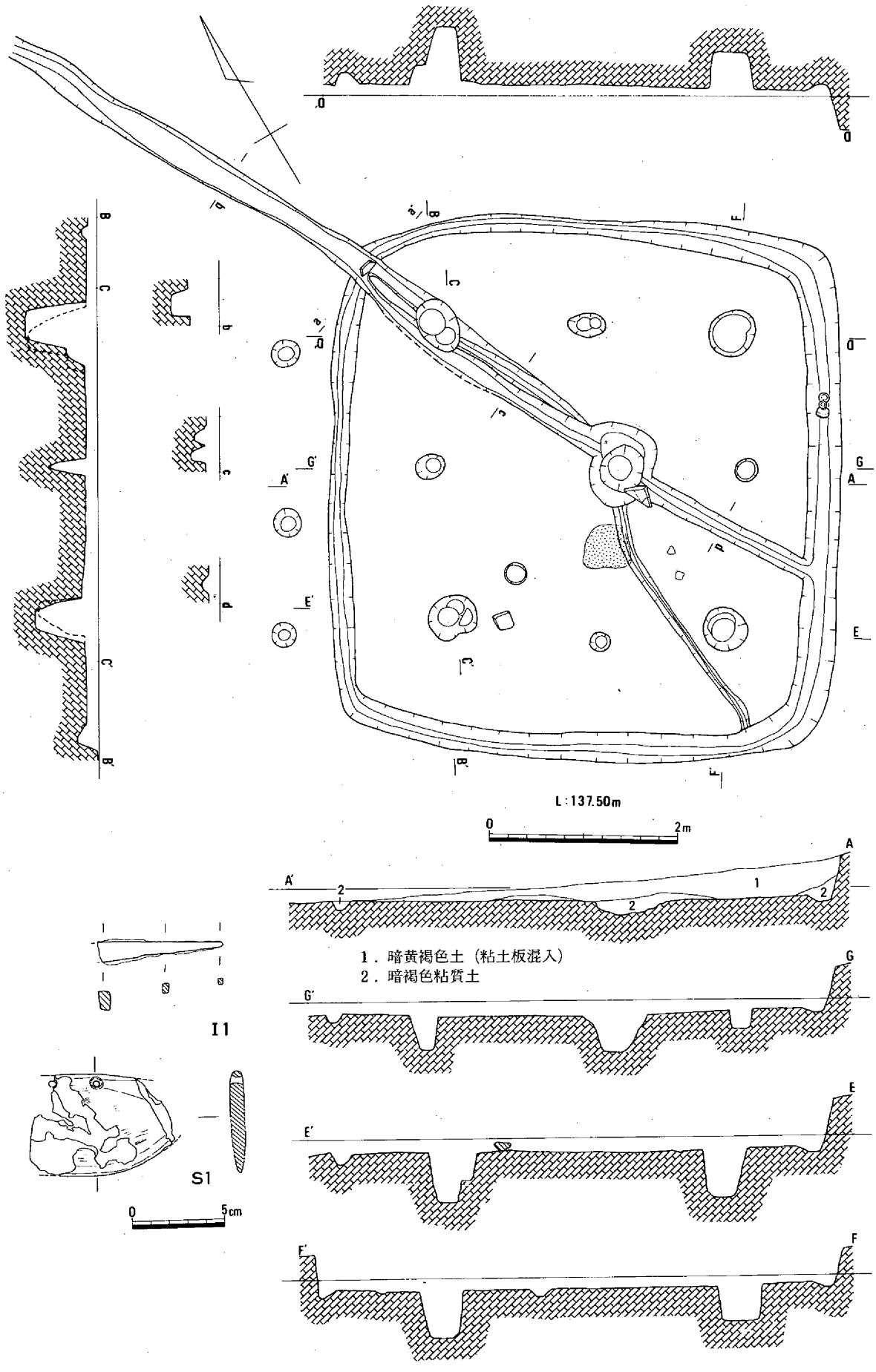
本住居での壁体と屋外の溝との暗渠部分の間隔が約60cmであった。この数値は現状での住居の壁の厚さを表わすものと理解した。遺物は覆土中に多く含む。弥生時代中期の範疇に属すると思われる。

竪穴住居42（第76図、図版14―２・３）

１区G最北東端で、西向きの緩斜面に位置している。この住居は丘陵尾根線上に対して並行に建つ。平面形はやや胴張りぎみを示しているが、長辺580cm、短辺545cmを測り方形を呈す竪穴住居である。最も良く残った南東側での壁高は最大で約45cm程残っていた。



第75図　竪穴住居41（1/60）・出土遺物



第76図　竪穴住居42（1/60）・出土遺物

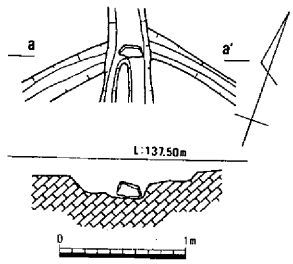
本住居の床面において、２種類の規模の柱穴を検出、重複を確認。中央穴は中心よりやや東に位置し、溝が南隅両脇から中央穴、さらに北隅から屋外へと通じている。壁体溝も数ヶ所で重複していた。さらに中央穴の南西に焼土面（ドット部分）も確認された。

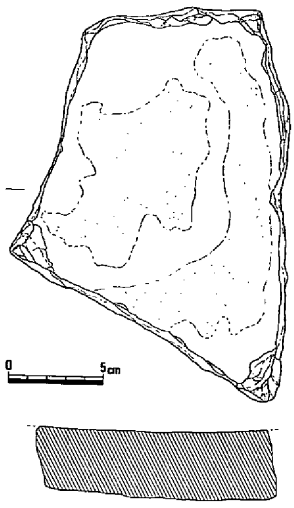
この住居での四隅の柱穴は２回、四辺に面する柱穴では１回の使用のみであった。

屋内外の溝と壁体溝の合致する位置の溝の中には、石皿を利用して閉塞施設を思わせる構造が見受けられた。

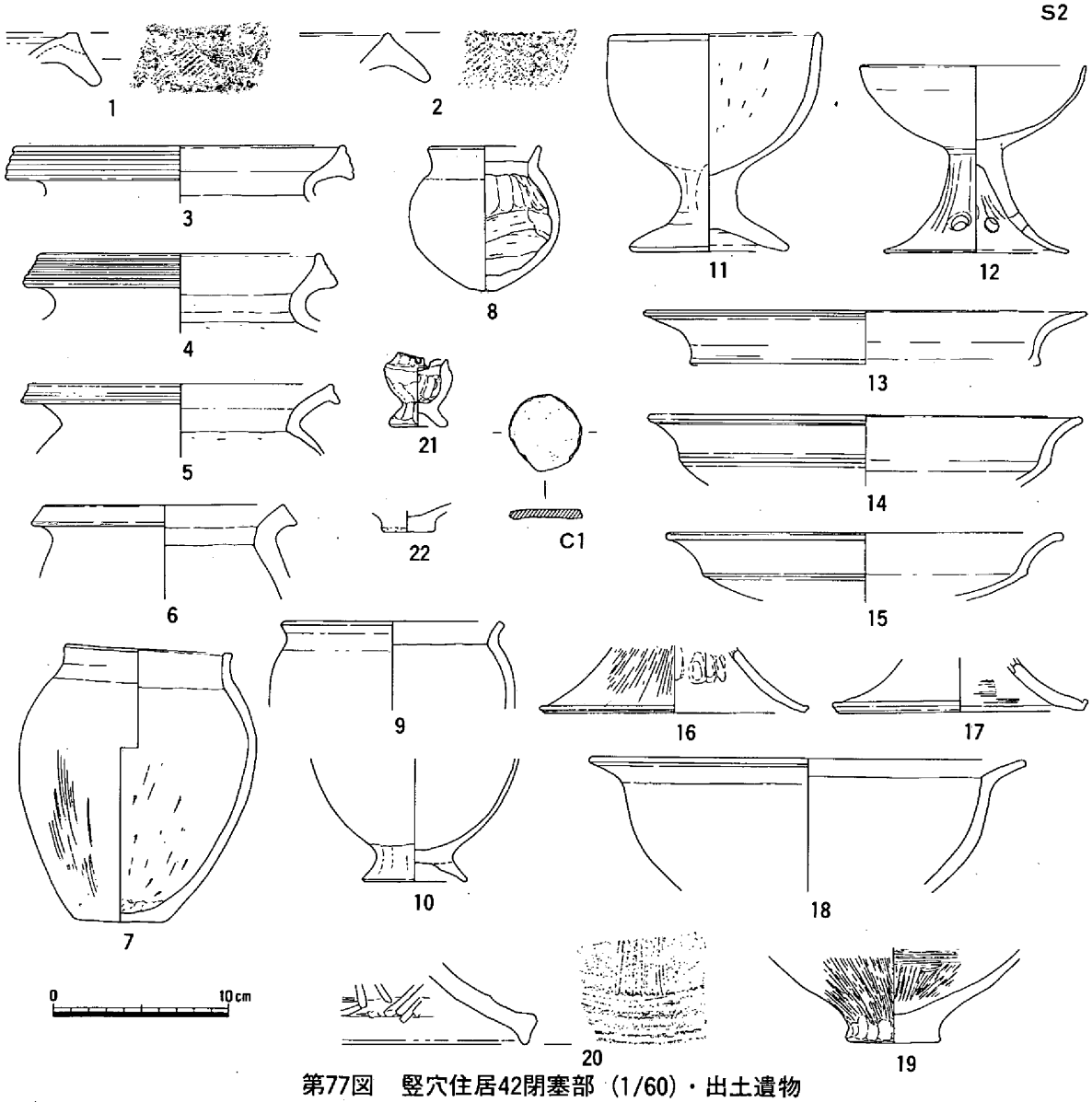
遺物については、北東辺に面した柱穴内から鉄製品（刀子の茎部分）。覆土・床面上からは石器・土器・土製品等の出土があった。

この住居の時期は、出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。





S2



第77図　竪穴住居42閉塞部（1/60）・出土遺物

2．建物（第8・図）

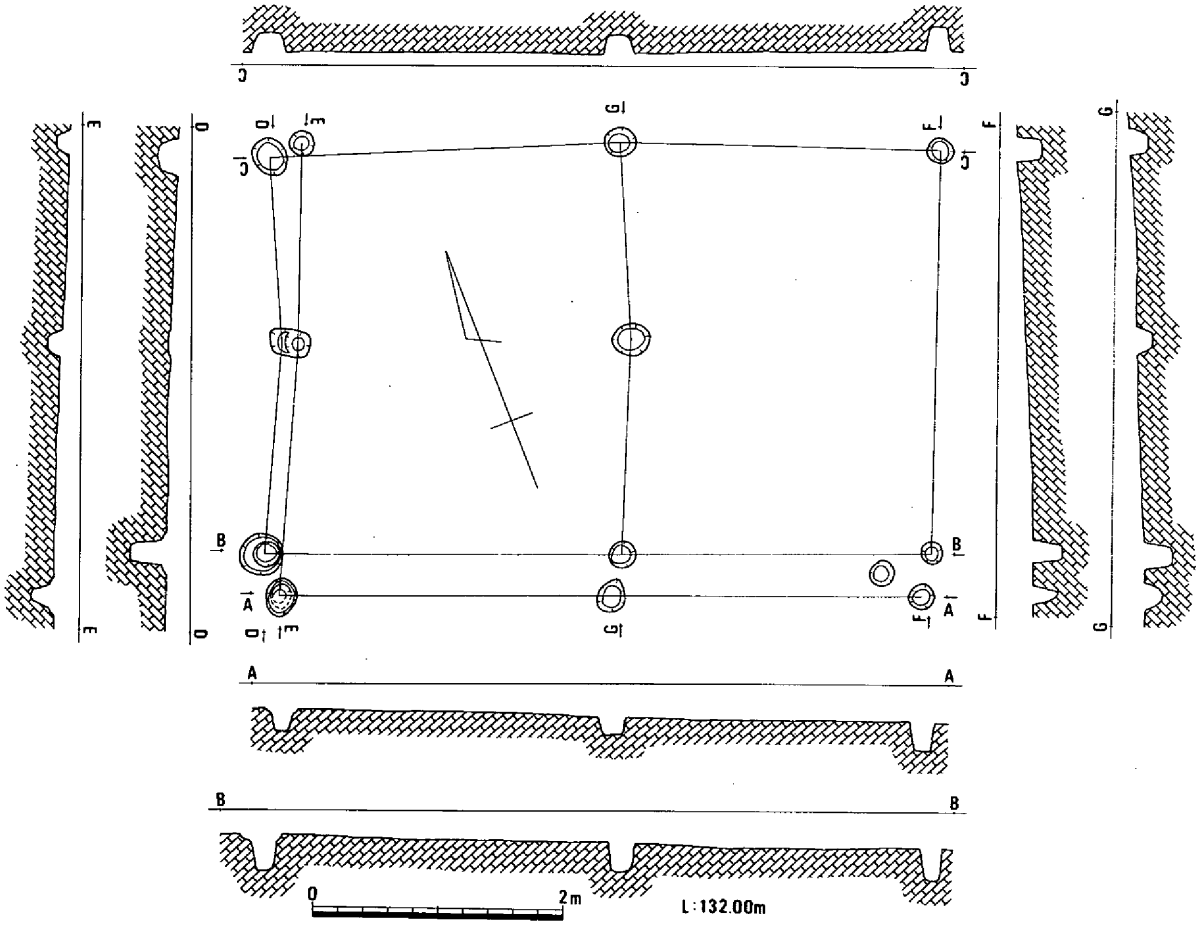
1区内における掘立柱建物は弥生時代から中世にかけてのもので、その検出された総軒数は32棟を数えた。しかしその他にも多数の柱穴が検出されていることから察すれば、さらに数棟の掘立柱建物が建立していたことがうかがえる。

なぜならば、この丘陵全体を中世以降近代にかけての時期に大規模な開墾を行ったために多くの遺構・遺物が消滅しているため、今回の調査で検出された遺構数にとどまったものである。

掘立柱建物は、古い時代、すなわち弥生時代の遺構から順次概要を記すことにする。

建物1（第78図、図版15—1）

丘陵を町道で切られた南側の1区Aに位置する。



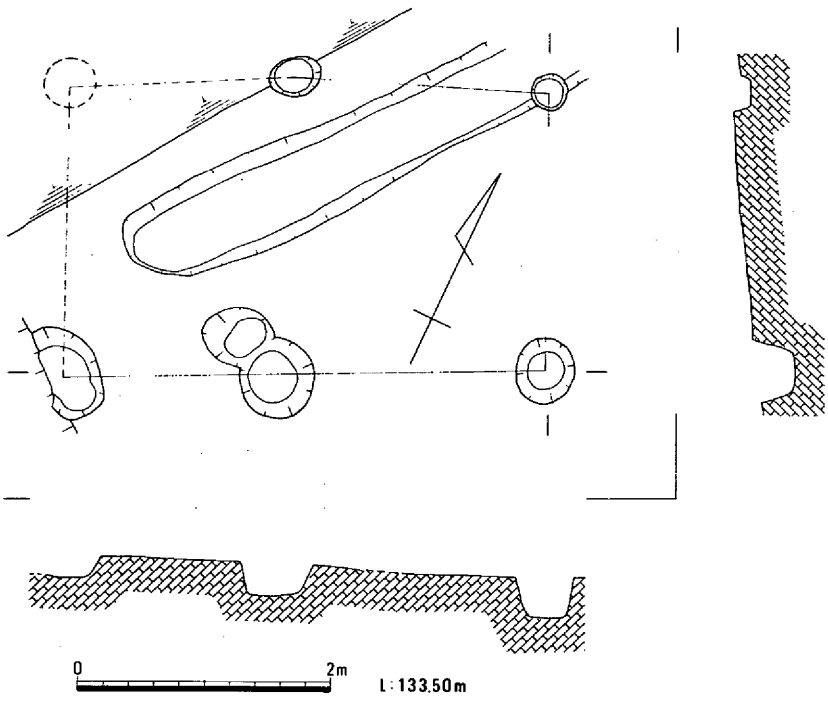
第78図　建物1 (1/60)

建物は長軸を南東—北西にした2間×2間の総柱の掘立柱建物である。北西側の3本の柱は建て替えがなされたものであろう。また南西側には濡れ縁が付随していたと想定しうる3本の柱穴が伴っている。

建物は桁行500cm～525cm、梁間320cm～330cm、柱穴は20cm～30cm、現存する深さは、10cm～30cmを測った。出土遺物は確認されなかった。

建物2（第79図、図版15—2）

1区Hに位置し住居21の溝に切られた柱穴を持つ1間×2間を想定しうる掘立柱建物である。北西隅の柱穴は山道により消滅するが、北東—南西方向の建物である。桁行375cm、梁間は220cm～240cm、



第79図　建物２（1/60）

柱穴は25cm～55cm、深さ15cm～30cmを測ったが、出土遺物は確認されていない。

建物３（第80図、図版15―3）

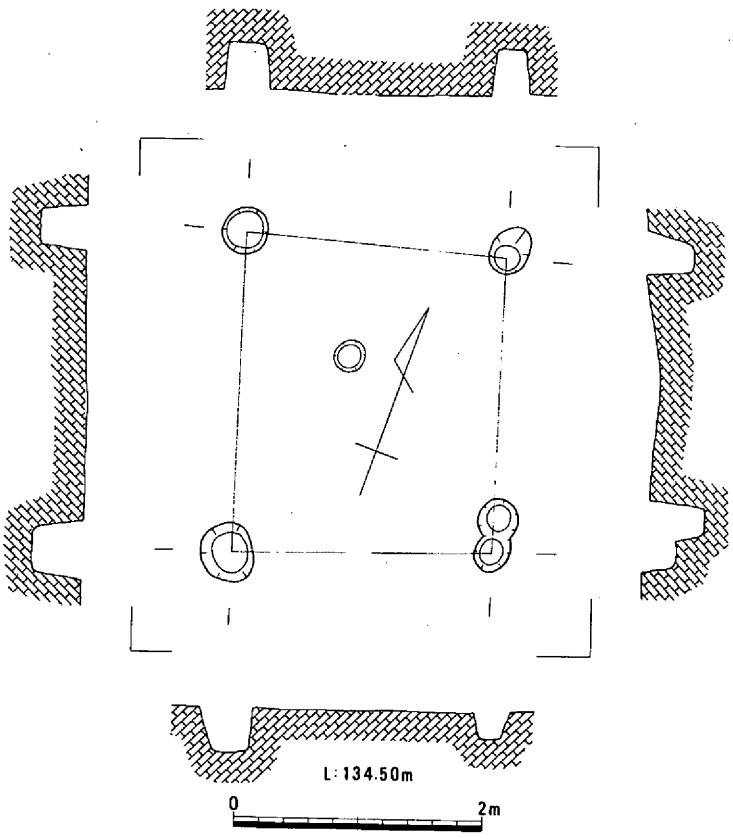
竪穴住居22の北で丘陵の中程に位置す、１間×１間の掘立柱建物である。柱間は235cm～250cmの桁行、梁は210cm、柱穴の深さは20cm～40cmで平面形は円形を呈している。遺物の出土はない。

建物４（第81図、図版15―4）

建物３の北西に位置する１間×２間の掘立柱建物である。建物の主軸は北西―南東で、柱間は220cm～235cm、梁間は220cm～230cm、深さは40cm～50cm、径40cm～60cmを測る。北西隅の柱痕内に角礫の投入があった。埋土中から弥生の土器数片出土する。

建物５（第82図、図版15―５）

建物３の北東に位置した１間×２間の建物である。主軸は北東―南西で建物４と直交する配置であり、同時存在の可能性がある。桁行は380cm、梁間は180cmを測る。柱穴は径30cm～40cmの円形で、深さは25cm～40cmを測るものである。南西中央柱穴には礎石を持つ。数点の遺物も出土している。

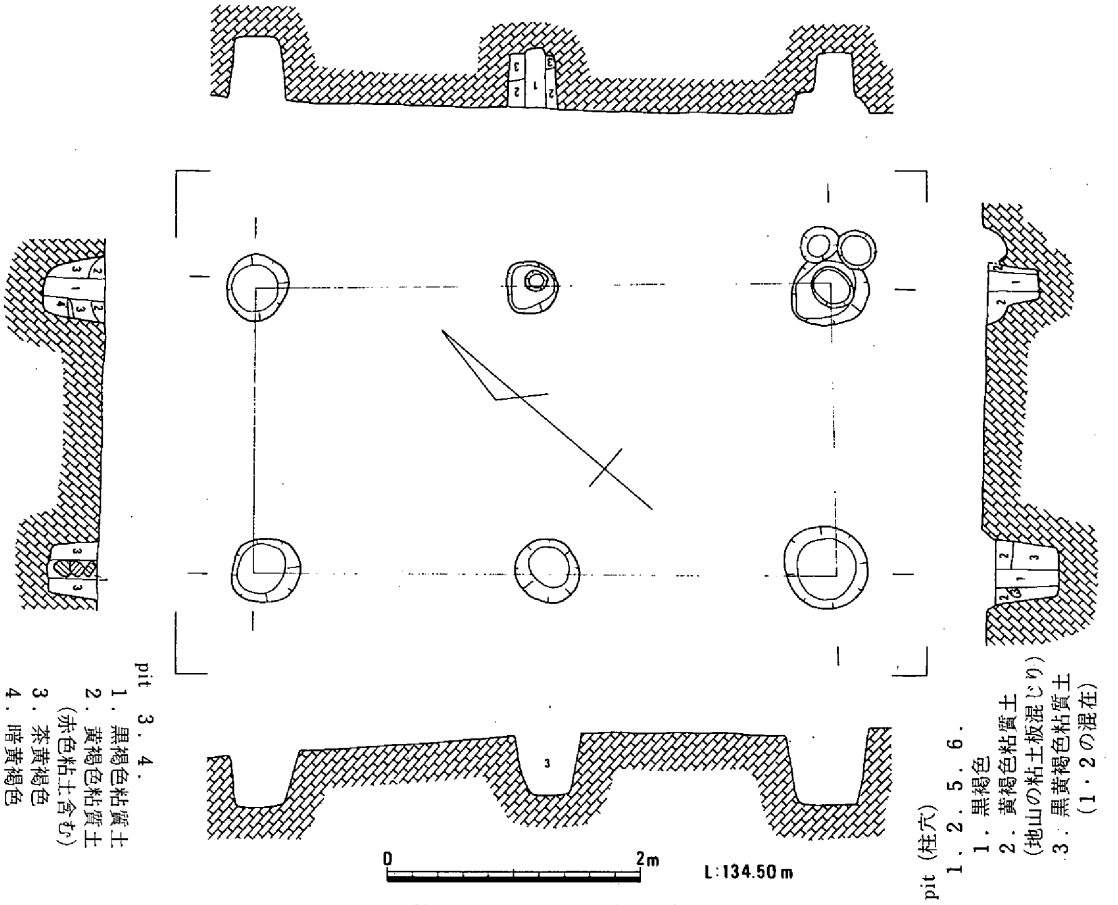


第80図　建物３（1/60）

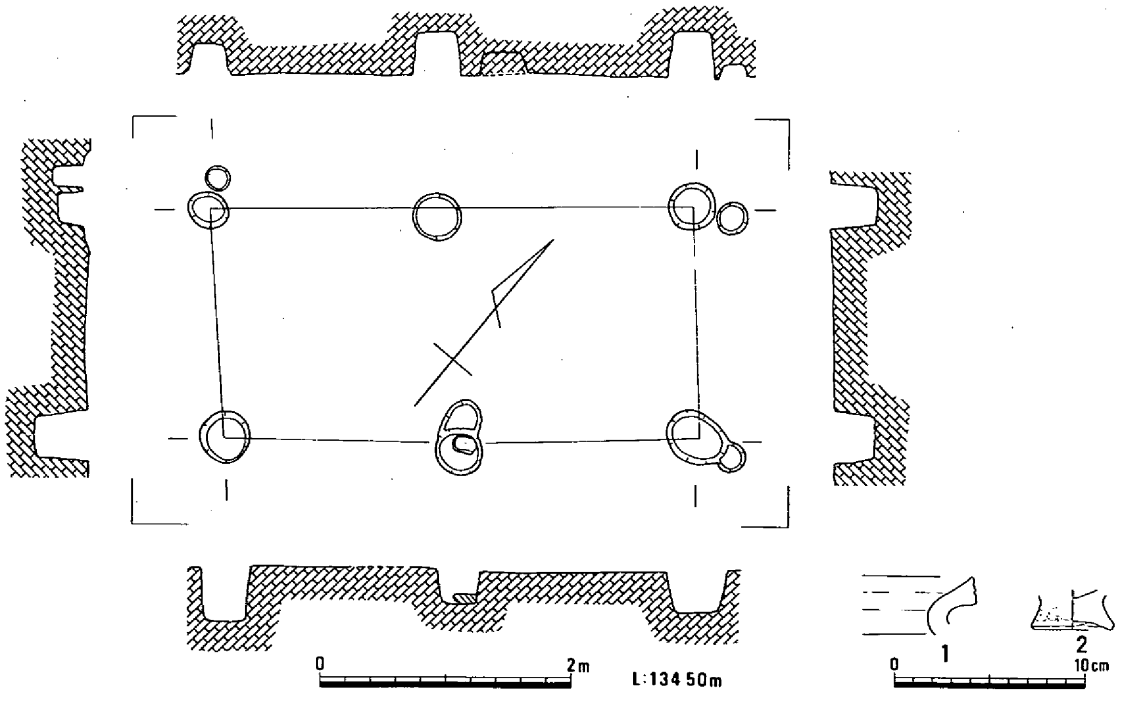
建物６（第83図、図版15―５）

建物５の北に位置する掘立柱建物である。建物の主軸は東北東―西南西で柱間は２間×３間で桁行525cm～540cm、梁間は290cm～320cmを測る。柱穴の規模は25cm～50cm、深さは30cm～50cmで検出面での平面形はいずれも円形を呈している。

この建物の北隅の柱穴の位置が30cm程度南東側によっている。そのため北東辺の梁間が狭くなり、建物柱穴配列平面形態が歪な長方形を示しているが、これで建物として成り立っていたものと想定せ



第81図　建物4 (1/60)



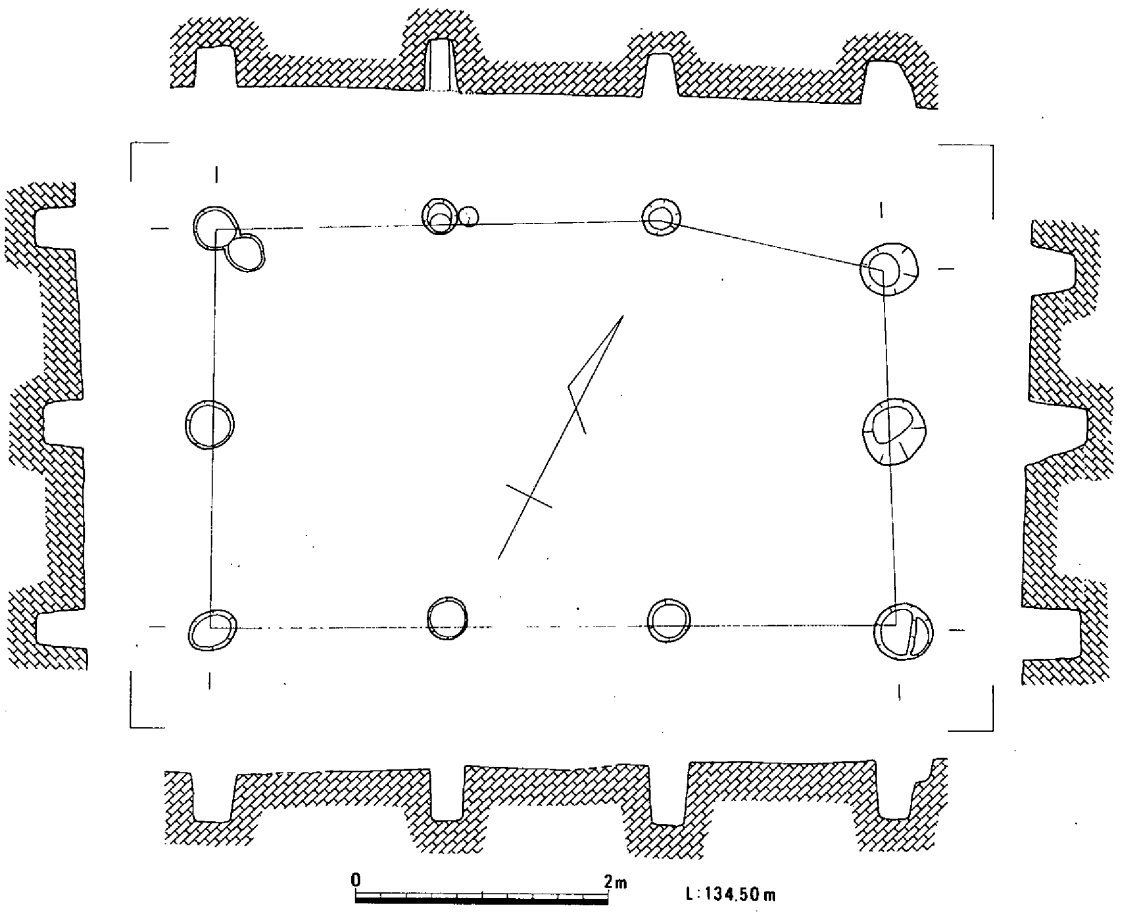
第82図　建物5 (1/60)・出土遺物

ざるをえない配列である。

建物７（第84図、図版15－６）

建物４からわずかに北西に下って位置する１間×２間の掘立柱建物である。建物の主軸は建物４に直交する形態を示している。建物の桁行は390cm前後、梁間340cm前後を測り、検出面での柱穴の平面形はいずれも円形で、15cm～40cm、深さ20cm～60cmである。

南東辺中央柱穴内から図示した小型の鉢形土器３の出土があり、他からも外面にタタキ目を有する



第83図　建物６（1/60）

土器片も認められている。

建物８（第85図）

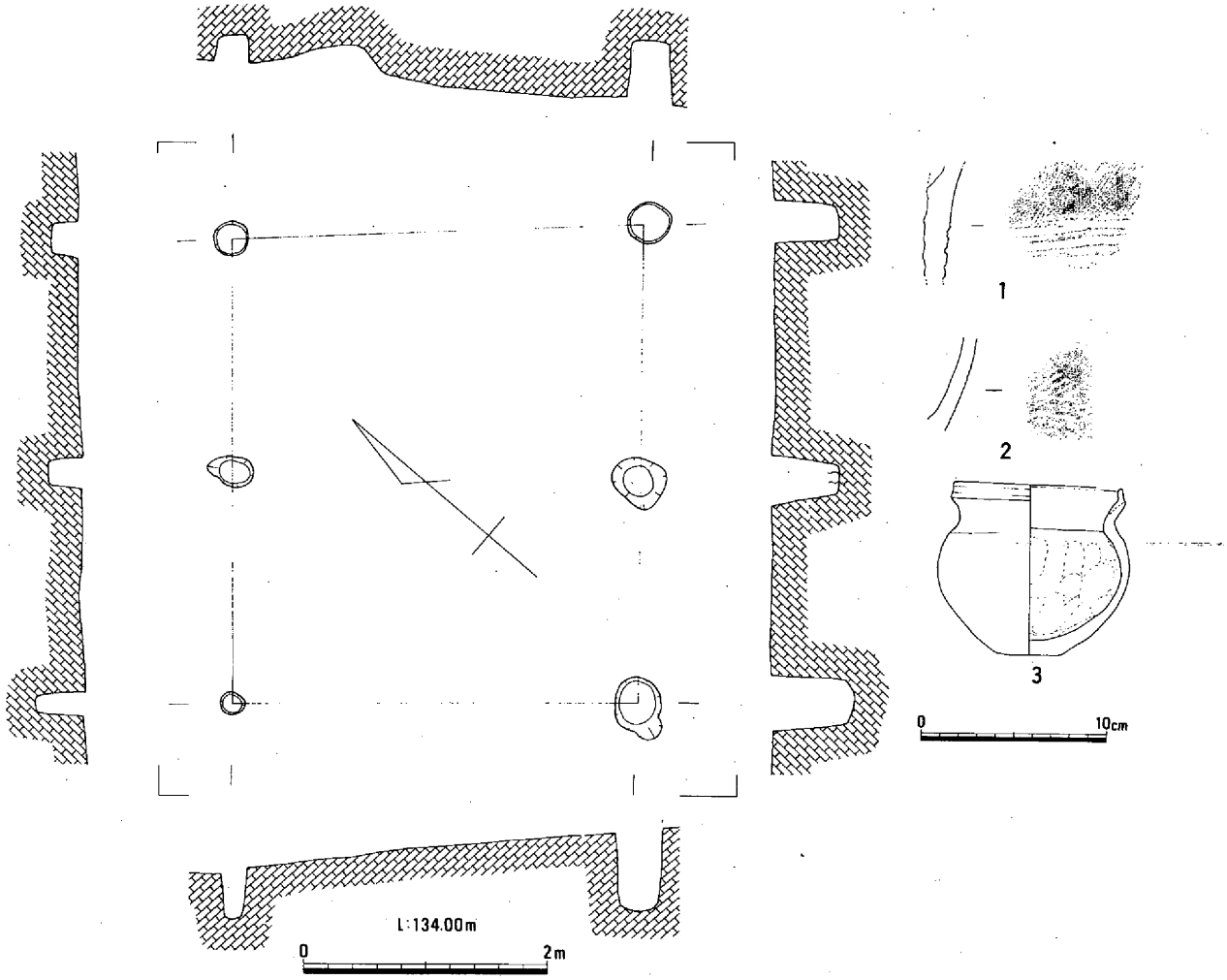
建物６の北東、竪穴住居29の北に位置する１間×１間の掘立柱建物である。この建物は建物６に平行するようである。建物の柱間は165cm～230cmを測る。検出された柱穴の平面形態はいずれも円形を呈し、その規模は、30cm～55cm、深さは10cm～40cmである。

建物６と同時存在の可能性もある建物である。

建物９（第86図、図版15－７）

建物７のさらに下方（北西）に位置する遺構である。遺構検出当初は壁体溝が存在したことから竪穴住居の可能性があったが、その溝に平行に柱穴列が確認されたことから、溝で囲まれた建物と判断した。規模は桁行３間のみでその他は不明である。柱穴は円形で、25cm～30cm、深さ30cm～45cmを測る。

なお、溝は段状遺構３の溝を切っている。なお、これらの埋没土中よりの小片遺物から判断して弥



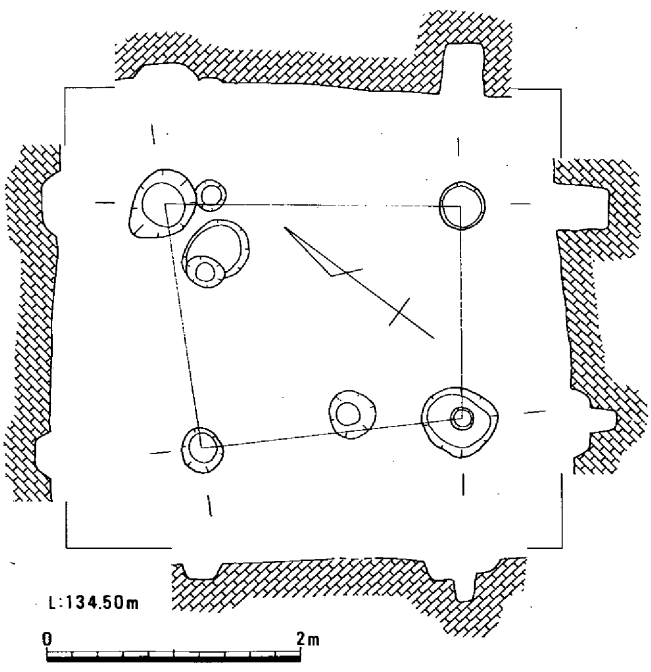
第84図　建物7（1/60）・出土遺物

生時代後期に相当すると考えるのが妥当な遺構である。

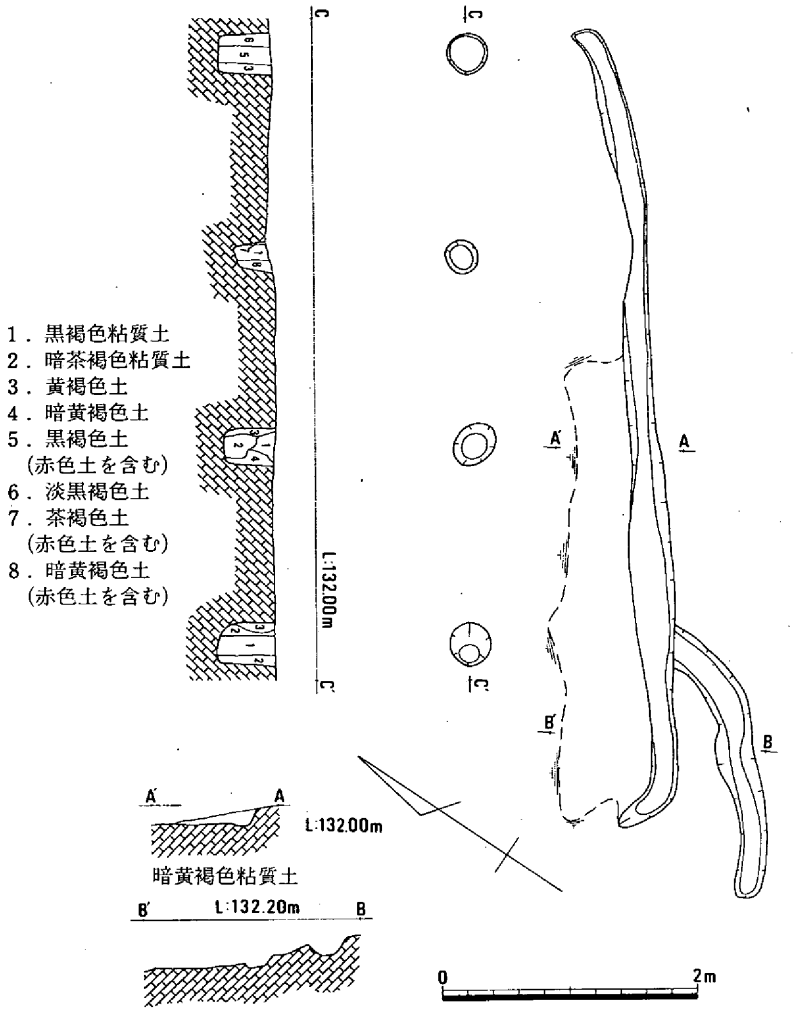
建物10（第87図、図版15—8）

この建物は1区Bの北隅で、竪穴住居39の北に位置する。建物9と同様の形態を示すが桁行2間までであった。検出された柱穴の平面形は直径40cm前後の円形で、深さは25cm～30cmを測った。梁間方向は、急斜面となって検出することは出来なかった。よって建物の規模は不明である。

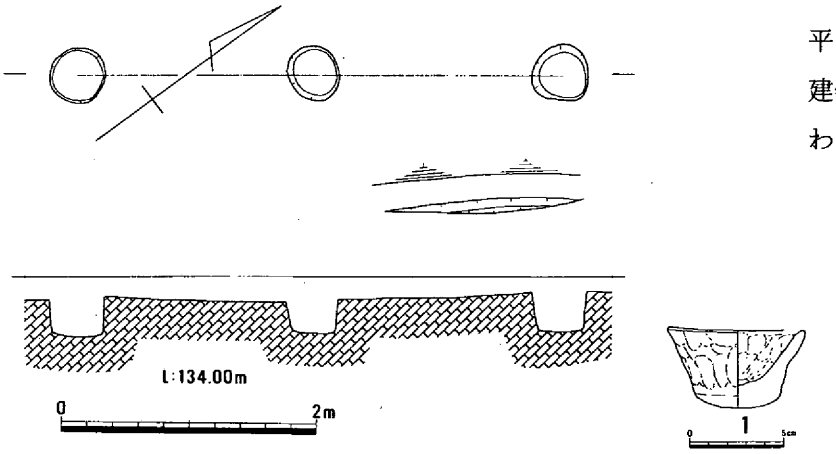
以上のように、1区A～Iまでの全調査区内での全面調査において弥生時代に相当する掘立柱建物（規模の大小は関係ない）について、調査時点において確認でき、また歪な形としてでもまとまりがつき建物となったものについての概要を記述した。



第85図　建物8（1/60）



第86図　建物９（1/60）・段状遺構３



第87図　建物10（1/60）・出土遺物

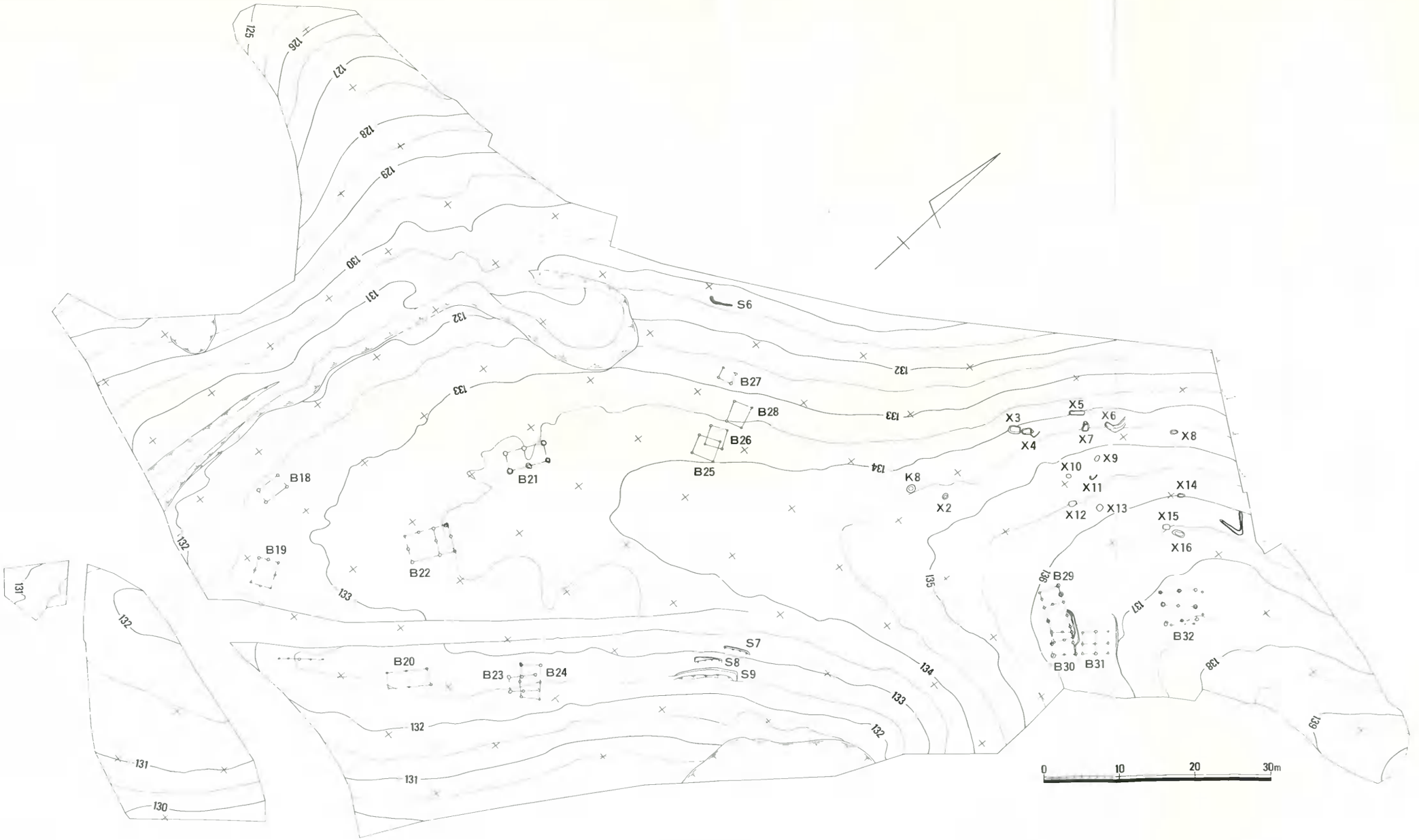
しかし、この掘立柱建物としてまとまった柱穴以外にも無数の柱穴が尾根の中央部分に集中して存在している。これらの柱穴内には明らかに弥生時代に属する土器片・ならびに石器をも伴っていた。

これらの遺物を出土している柱穴に対応して伴う柱穴は見当たらなかった。

これとは別に、１区Ａの掘立柱建物１と土壙１の間には「L」字状を呈する柱穴列（２間×２間）が確認されているが、北西・北東側の柱穴が検出されていない。よって建物になるかいなかはさだかでない。

前節（竪穴住居）で記述している竪穴住居31であるが、高位部を方形に掘り窪めて、床面とおぼしき平坦面を築き２間×２間の柱間を呈した遺構であるが、この場合には、竪穴住居ではなく、丘陵斜面に建築された段状の掘り窪みを持った掘立柱建物と考えることが妥当な遺構である。

本調査区全体が開墾等による削平が激しいため、遺構（とりわけ建物）の検出・確認には困難をきわめた。



第88図　1区建物・段状遺構・土壙・土壙墓配置図（1/500）（中世～近世）

建物（第88図）

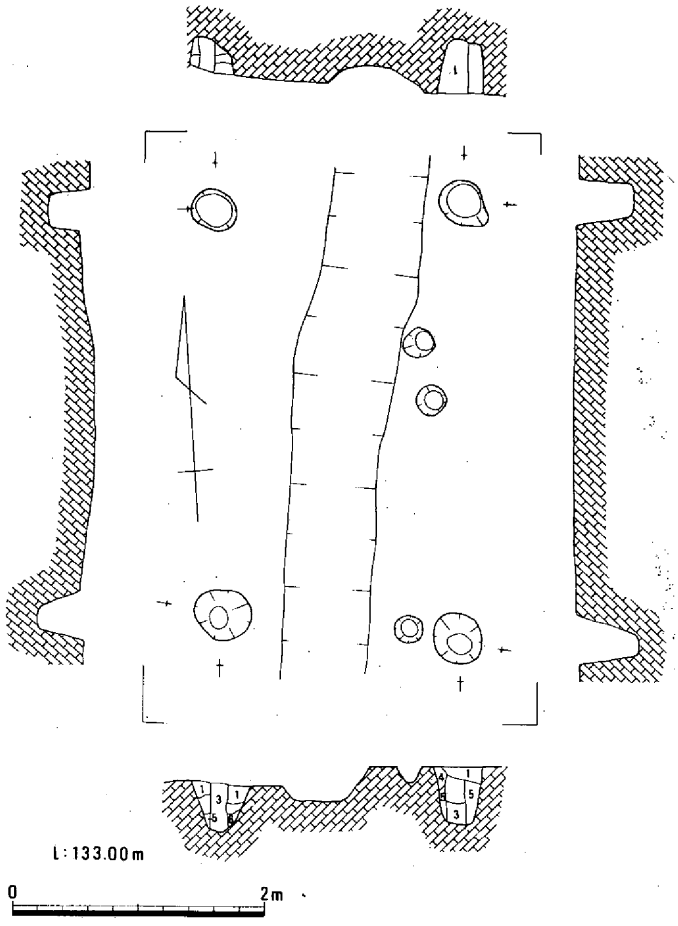
1区Ａ～Ｉの調査区全体は近代の開墾が行われた地区で、ほぼ丘陵全体におよぶ規模のものであったことが調査の時点で確認され、また耕地廃絶後は植林がされ、再び山林と化していた。そのような状況の下での調査中、表土、旧耕土除去後の検出面での中世～近世の遺構である。ここでは中世に属する掘立柱建物について記する。遺構番号は通し番号にしている。

建物18（第89図）

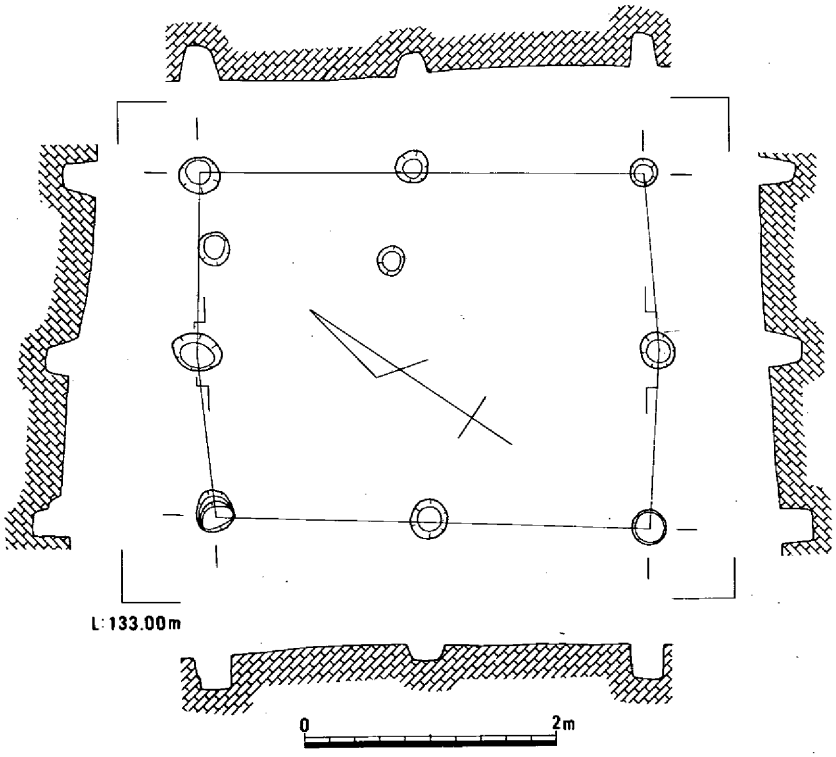
丘陵末端部に近い平坦化された位置に所在し、軸線がほぼ南北方向の１間×１間の掘立柱建物である。建物の柱間は桁行325cm～350cm、梁間190cm～200cmを測る。検出面での柱穴は35cm～45cmのほぼ円形で深さは30cm～45cmを測った。この建物は道４を跨いでいるが新旧は不明。

建物19（第90図、図版16－１）

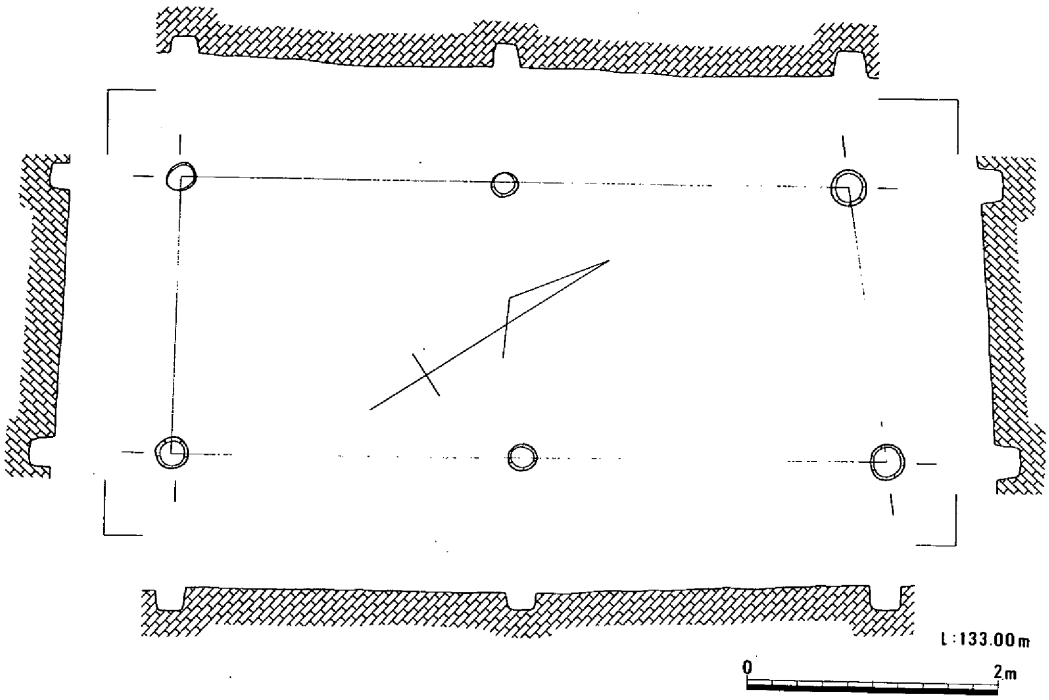
建物18の南東側に位置し、軸線は北



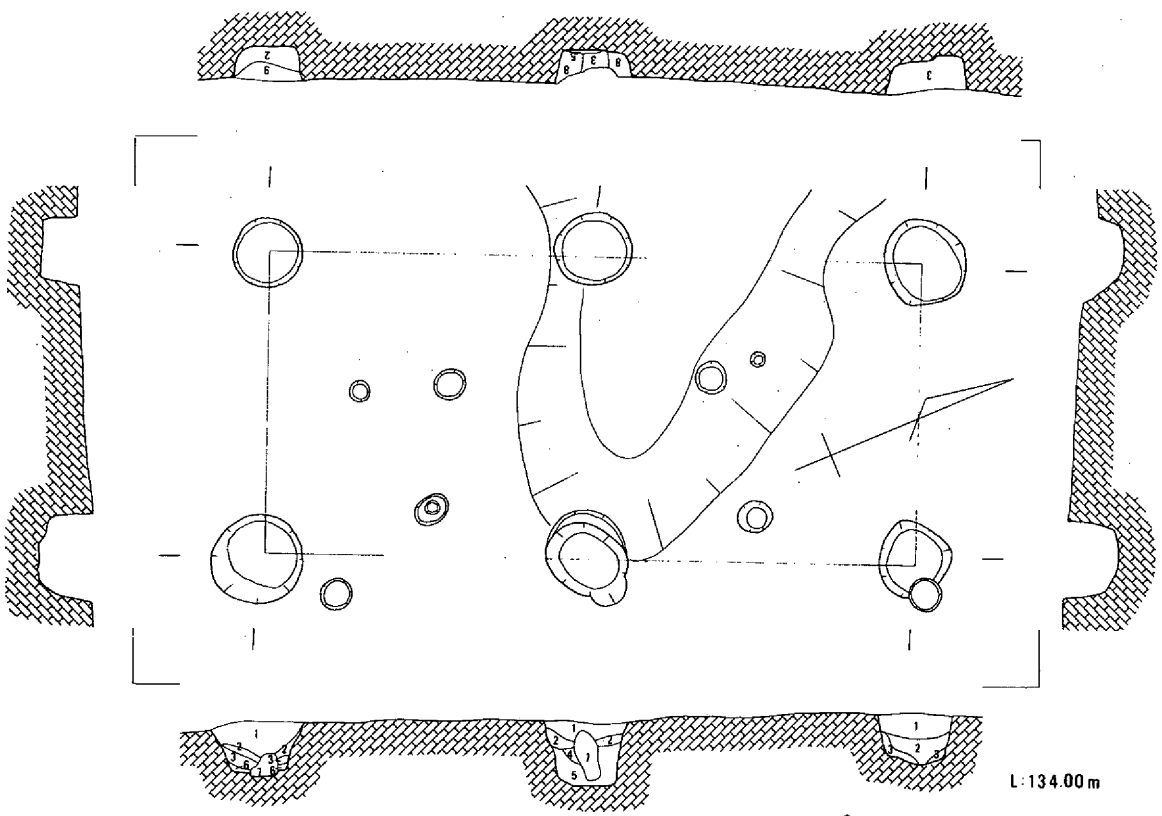
第89図　建物18（1/60）



第90図　建物19（1/60）



第91図　建物20（1/60）



pit－1　1．淡黄褐色土
　　2．暗黄褐色土
　　3．暗褐色土
pit－2　1．淡茶褐色土
　　2．暗黄褐色土
　　3．淡褐色土
　　4．暗褐色土
　　5．
pit－3　1．暗茶褐色土
　　2．暗橙褐色土
　　3．暗褐色土
　　4．暗黄褐色土（地山塊混入）
　　5．
pit－4　1．茶褐色土
　　2．暗黄褐色土
pit－5　1．黄褐色土
　　2．暗褐色土
　　3．暗褐色土
pit－6　1．暗褐色土

第92図　建物21（1/60）

西―南東方向の2間×2間の若干歪な長方形の平面形態を呈した掘立柱建物である。規模は桁行340・350cm、梁間は275・280cmを測る。検出された柱穴は直径20～30cmの円形で、深さは10～30cmを測った。柱穴埋没土中には遺物等はなく、時代決定は困難であったが、埋没土から古い時代のものとは考えられなかった。

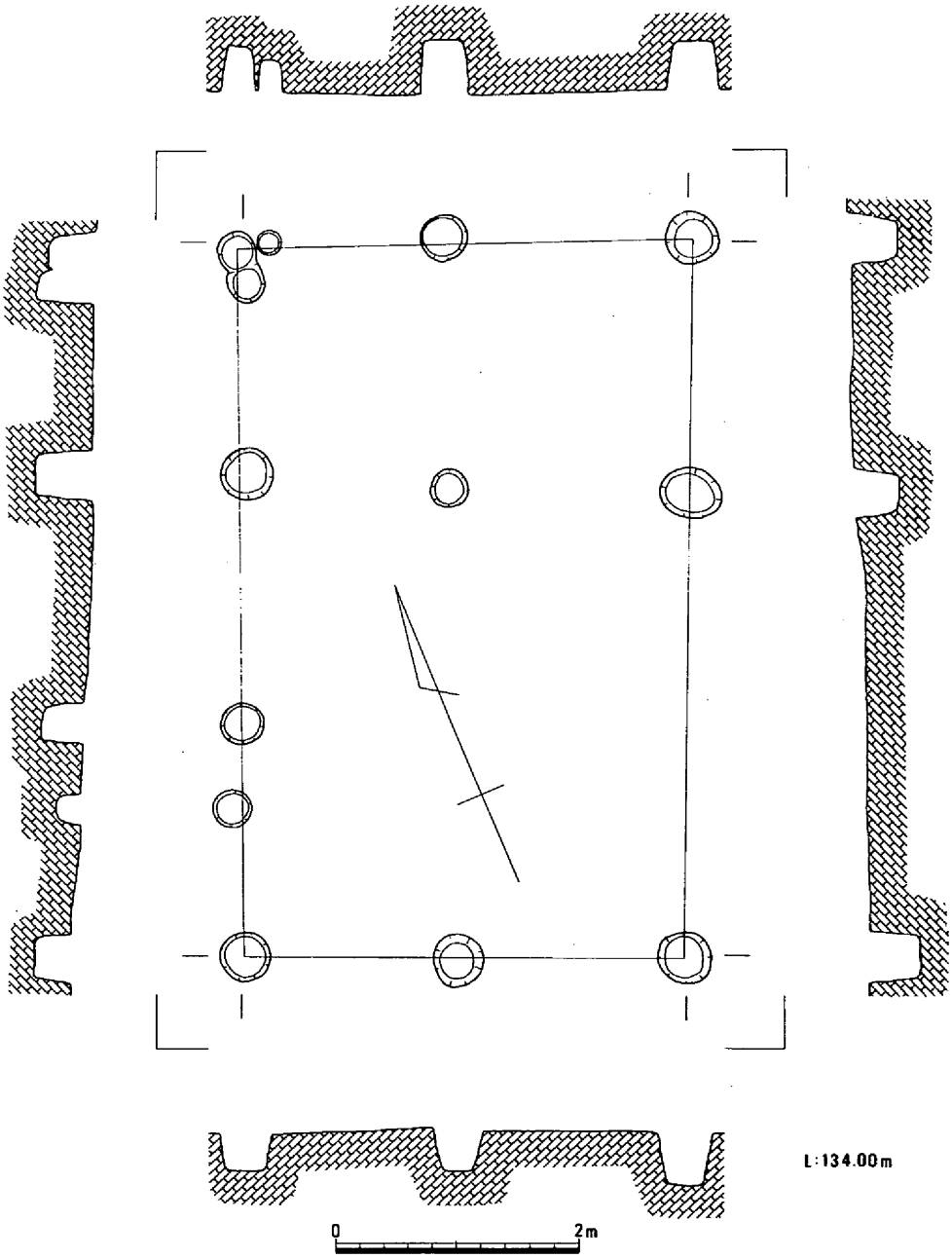
建物20（第91図、図版16―2）

1区D東端で南東斜面に位置している1間×2間の掘立柱建物である。

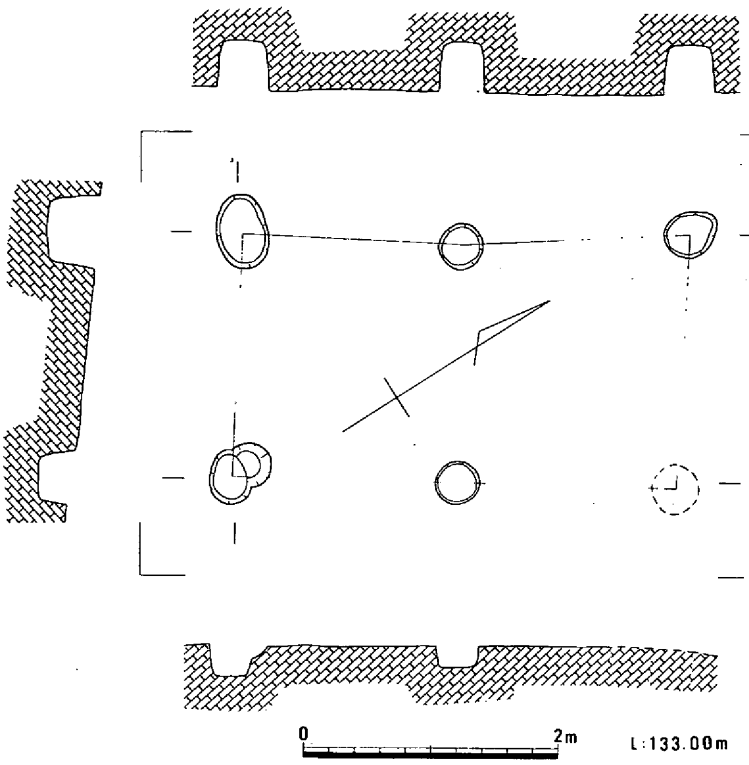
主軸は北東―南西方向で、桁行525～565cm、梁間220cmを測る。時期は中世に属するであろう。

建物21（第92図、図版16―4）

1区D中程で、舌状に延びた丘陵が一段と広くなった西向きの面に北東―南西に主軸をもった1間×2間の掘立柱建物である。この地区内で唯一の大きな柱穴掘り方を示した建物であった。規模は桁



第93図　建物22（1/60）



第94図　建物23（1/60）

行520cm、梁間240cm、柱穴径50～70cmを測った。建物中程には、北西方向から古道が登っているが、この古道おも切って柱穴は掘られている。中世でも古い時代に属する建物である。

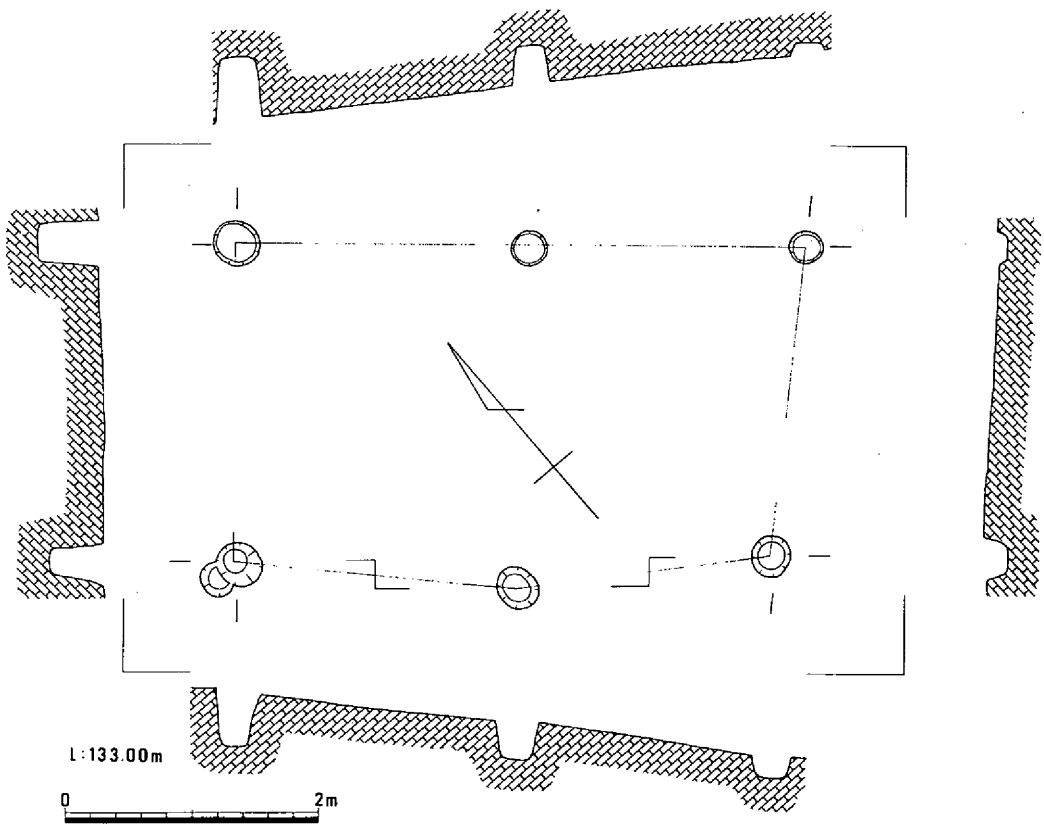
建物22（第93図、図版16－3）

建物21の南に位置した同一方向に主軸を示した2間×3間で間仕切りを持った掘立柱建物である。規模は桁行で580cm、梁間360～370cmを測った。中世に属する建物である。

建物23・24（第94・95図、図版15－2）

南東斜面に面して建物20の北東に位置し、2棟は直交して重複している。

23は北東－南西に主軸、24は北

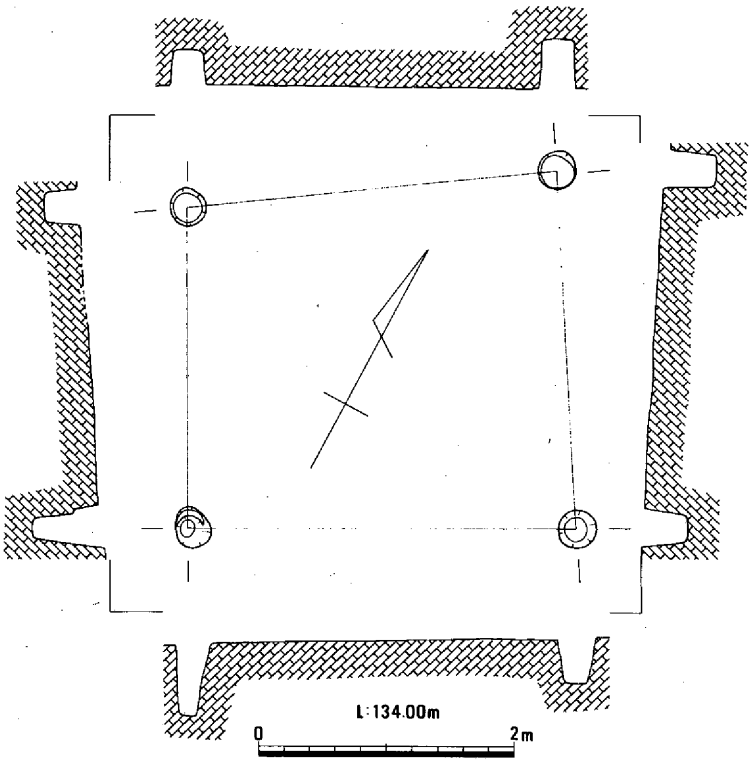


第95図　建物24（1/60）

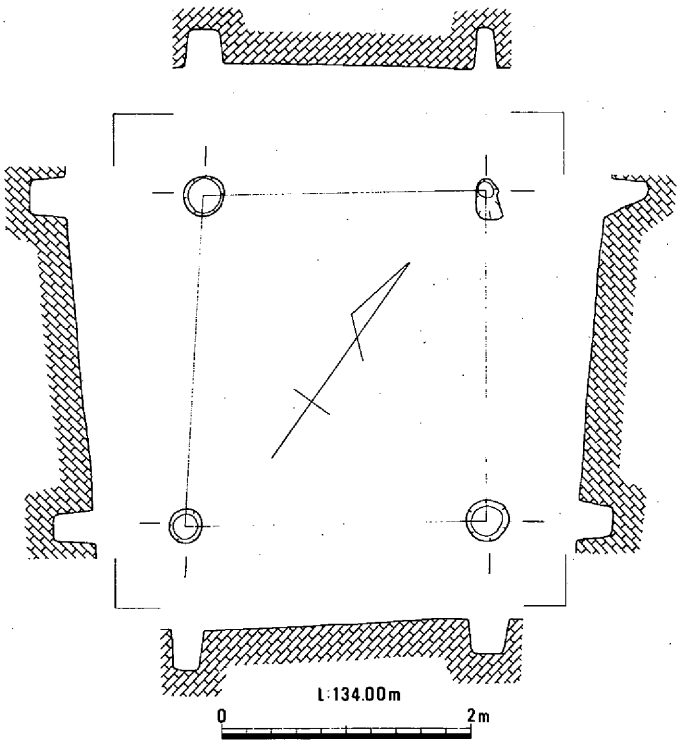
西一南東に主軸を示した1間×2間の掘立柱建物である。規模は23の桁行350cm、梁間190cm前後、24での桁行420～450cm、梁間240～250cmを測る。前後関係は不明であるが、いずれの建物も中世に属する。

建物25（第96図、図版15－6）

1区C南隅で北西斜面に位置する1間×1間の掘立柱建物である。柱間は250cm～305cmを測った。柱穴はいずれも小ぶりであるが、底部の海抜高はぼ一致しているが、東隅部がわずか掘り方が浅い。建物26と重複している。建物の時期は中世に比定されるであろう。



第96図　建物25（1/60）



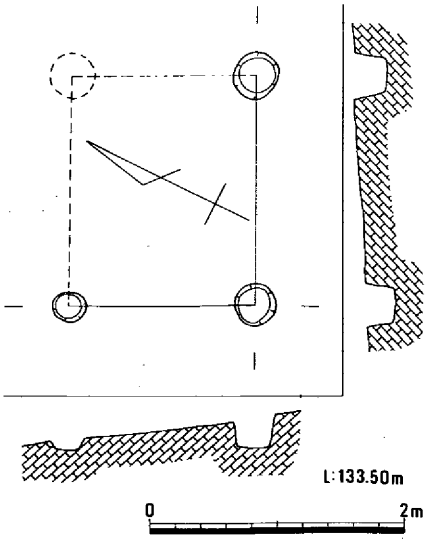
第97図　建物26（1/60）

建物26（第97図、図版15－6）

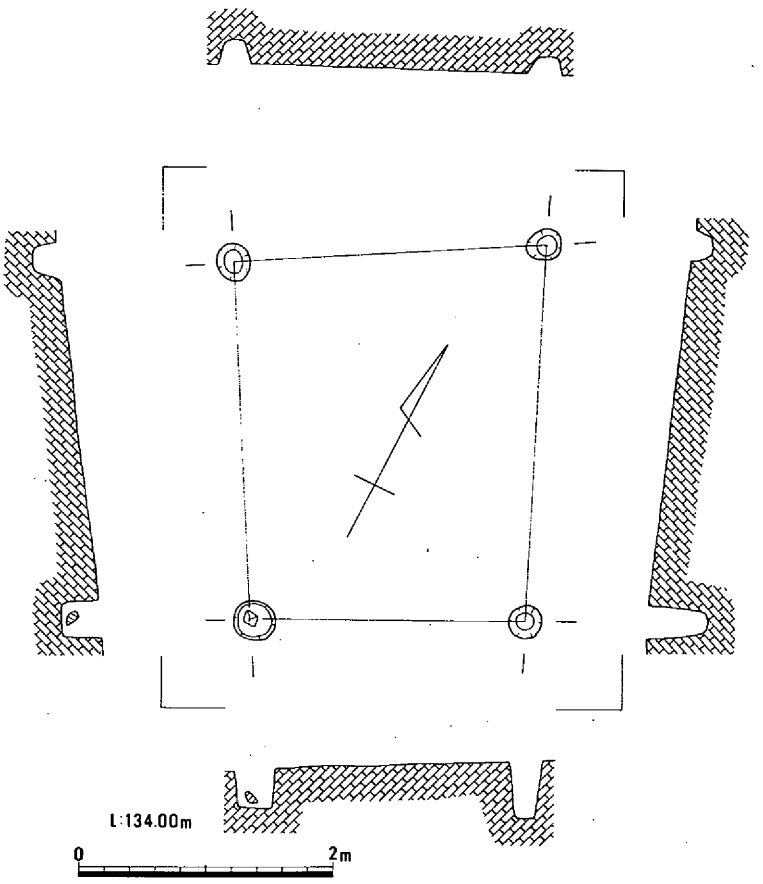
掘立柱建物25の北東側で重複して検出された1間×1間の掘立柱建物である。建物の柱穴配列は25と同一方向を示している。しかし、柱穴底面の海抜高は不揃いで、平均で約15cmの差が認められた。

建物の規模は1間×1間であり、その柱間は北東一南西方向が225cm～240cm、北西一南東方向では260cmを測る。

この建物は、前述の建物25のに直交する形の長軸を示している。いずれにせよ、建物26の時期は中世に比定されよ



第98図　建物27（1/60）



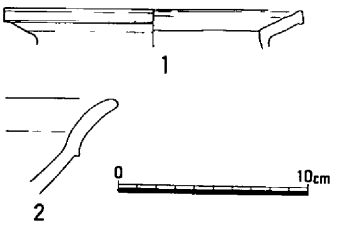
第99図　建物28（1/60）・出土遺物

う。

建物27（第98図）

建物25・26の北西の下位に位置している１間×１間と想定される掘立柱建物である。

現状での建物の主軸は建物25と同一方向の北東―南西である。そしてその規模は、桁



行で180cm、直交した梁間では145cmである。また柱穴底の海抜高の差は５cmであった。

前述の建物と同時代に属する建物であろう。

建物28（第99図）

１区Ｃで掘立柱建物26と27の中程に位置して検出された掘立柱建物である。

検出された建物は北西―南東に主軸を示している１間×１間の北西梁間がやや広がった台形状を呈した掘立柱建物である。

建物の規模は桁行の東方が297cm、反対で280cm、梁間は南方は215cm、北方は245cmを測った。また柱穴は25cm～30cmを測るほぼ円形を呈し、柱穴底面の海抜高はほぼ一定であるが、北西隅の柱穴１本のみが他の柱穴にくらべて20～30cmほど深く掘り込まれている。これは地形に左右されたと考えられる。

柱穴内からの遺物は図示したものが出土しているが、流入した遺物である。

この掘立柱建物は、建物25・26・27と同一方向性を示し、規模的にも酷似している点から、建物の時期は中世に比定されよう。

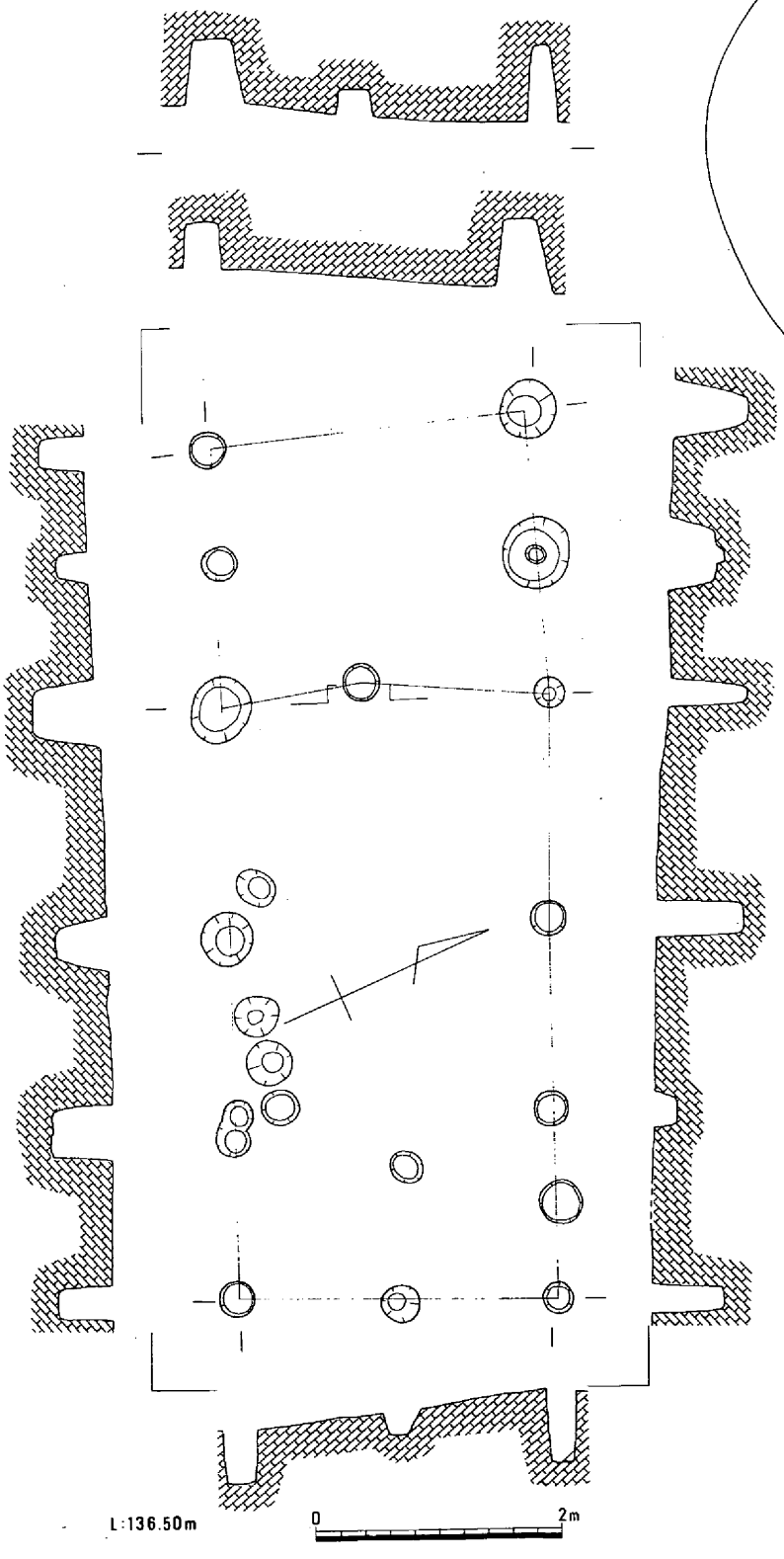
建物29（第100図、図版16―５）

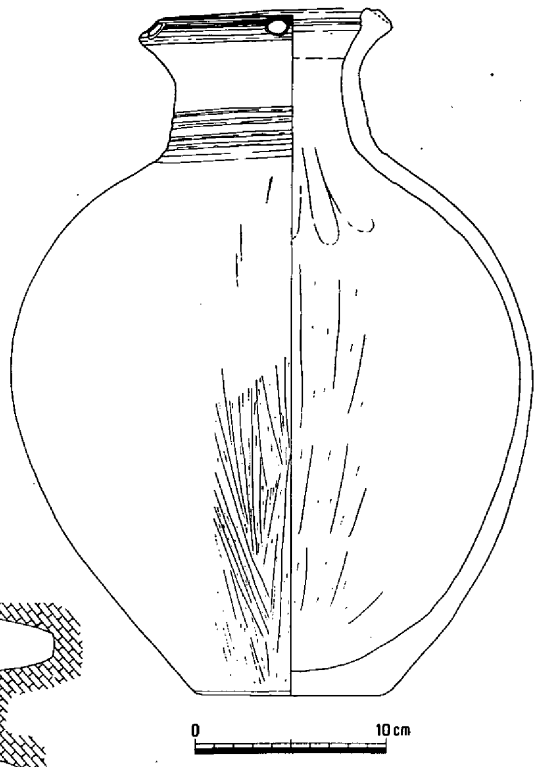
１区Ｇ北東部で丘陵線上の南西方向に下がる緩斜面上に位置する変則的な２間×３間の掘立柱建物である。建物は北西―南東に主軸を呈し、その規模は桁行の北辺では715cm、南辺は685cm、梁間は東辺の２間で255cm、北辺は255cmで棟持ち柱を欠いでいる。さらに間仕切りの北側においては東柱を伴って、間仕切りが行われた柱穴を確認した。

建物の桁行で北辺側がわずかに長い不整長方形の平面形態を示している。さらに柱穴のすべてがほぼ円形の掘り方を示すものであり、その径もまちまちで最小は25cm、最大では55cmを測る。深さにつ

いては20cmと浅いものから65cmの深いものまで様々である。

この掘立柱建物検出面までの包含層中にはかなりの遺物が出土している。しかし、建物柱穴内からは、





第100図　建物29（1/60）・出土遺物

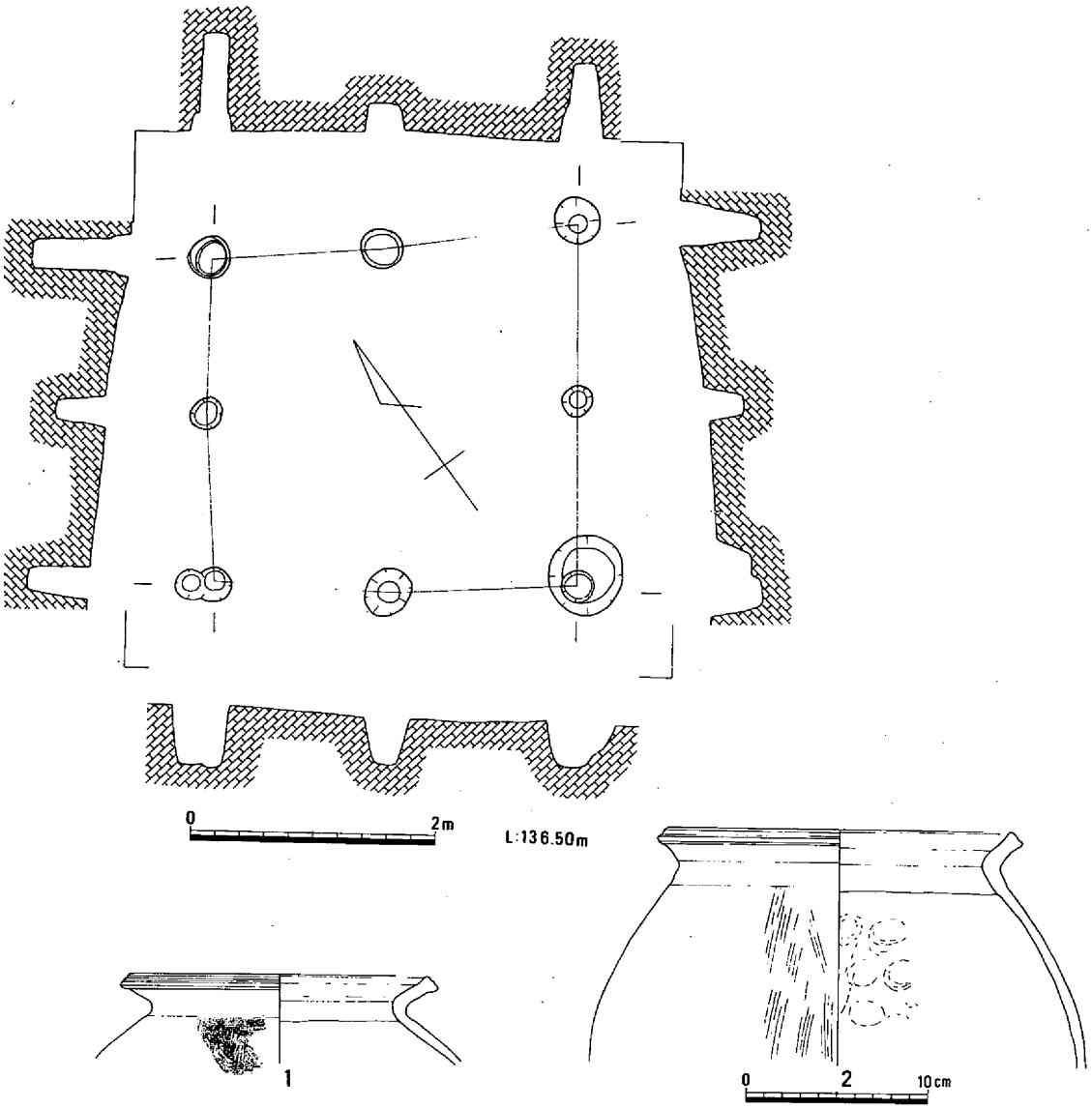
図示した弥生の土器（壺）の出土があったが、建物廃絶後の柱穴内に落ち込んだ遺物である。

建物自体の時期は中世に位置づけられる。

建物30（第101図、図版16—5）

1区Gで掘立柱建物29の南東部で一部が重複して位置する掘立柱建物である。

建物の平面形態は歪な方形を示した2間×2間の掘立柱建物である。各辺での規模は、南東辺が295cm、南西辺で295cm、北西辺は265cm、北東辺では300cmを測った。すべての柱穴は円形を呈し、その径も25cm～60cmとまちまちの大きさであるが、柱穴底面の海抜高は四柱穴・間柱とも各々がほぼ一定の深さを示



第101図　建物30（1/60）・出土遺物

していた。南西左右の柱穴では抜き取り穴を確認している。

掘立柱建物29の時期前後の建築であり、中世に属すると考えている。図示した遺物は、廃絶後流入したものである。

建物31（第102図、図版16―５）

掘立柱建物30の北東部に近接して位置する２間×２間の総柱の掘立柱建物である。

この建物は丘陵陵線上に位置しているため、地形を隅丸長方形状に造成し、段状遺構的な平坦面を造っている。建物はこの面に建築されているが、北西側にかなりの空白地を残している。用途不明の区域である。

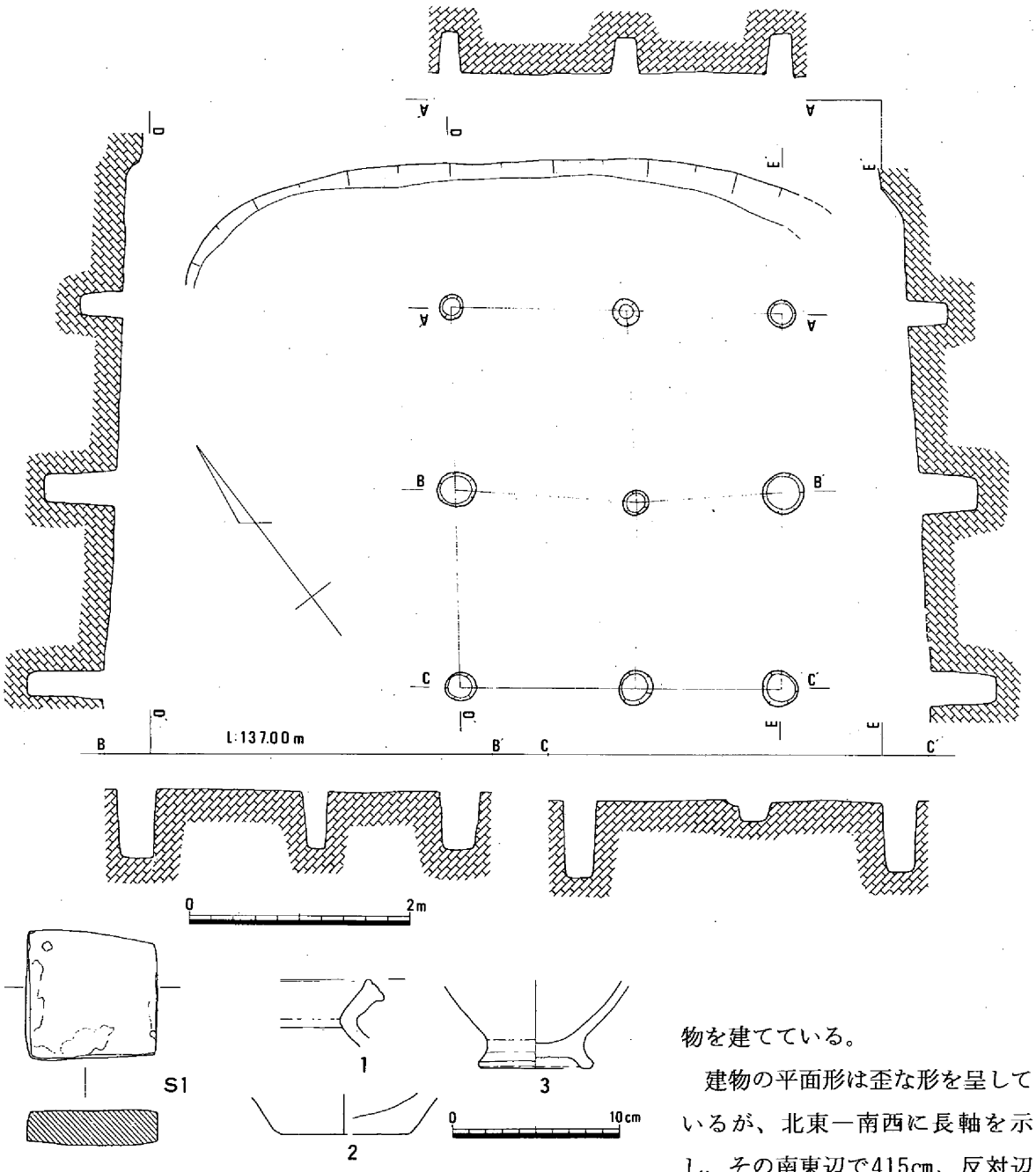
建物は北東―南西に長軸を持ち桁行は東側で340cm、反対で345cm、梁間は南側では285cm、北側で295cmを測る。また円形を呈した掘り方の柱穴で、径は最小で20cm、最大では35cm、またその深さは浅いものでは検出面から約15cm、反対に最も深いもので約65cmを測り、多種の形状を示していた。

また、図示した遺物は覆土中からの出土物であり、この建物の時期を決定できるものではない。建物30と同時存在の可能性をひめている掘立柱建物である。

建物32（第103図、図版16－6）

1区G北東部で丘陵陵線上の西向きの緩斜面に位置する掘立柱建物である。

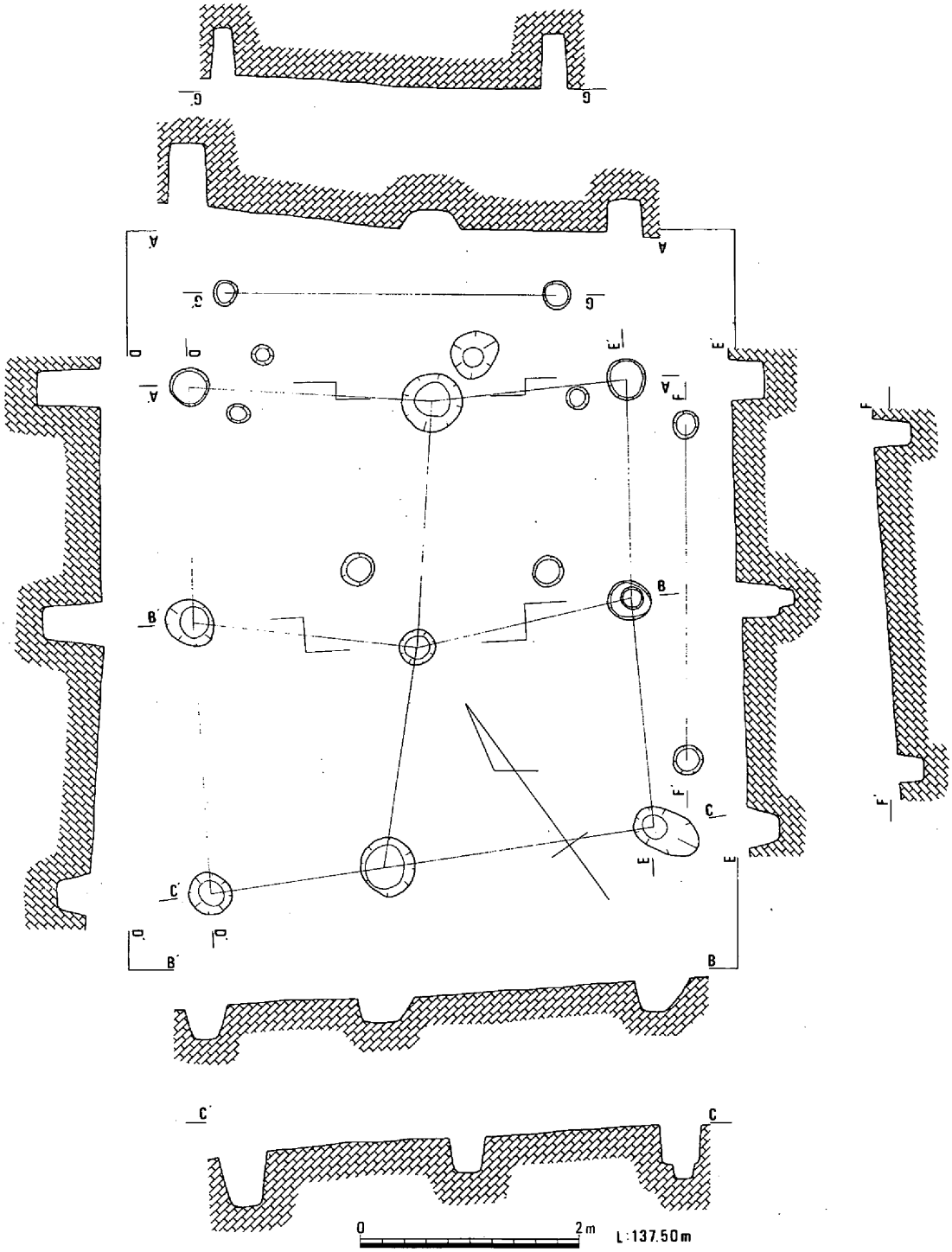
この掘立柱建物の建設地形は、ゆるやかではあるが西方へと傾斜しているため、まず、建物とほぼ同じ範囲を削平・造成を行ない、この整地された平坦面に建物の規模が2間×2間の総柱の掘立柱建物を建てている。



第102図　建物31（1/60）・出土遺物

建物の平面形は歪な形を呈しているが、北東－南西に長軸を示し、その南東辺で415cm、反対辺では470cm、短軸の南西辺は410cm、反対の北東辺は395cmを測る。このように数値からしても歪な方形の形態を示す建物である。

建物の主柱穴すべてが、ほぼ円形を示し、径は約30cm～最大で約55cmの掘り方、深さは約20cm～最深で50cmを測るものと様々であった。



第103図　建物32（1/60）

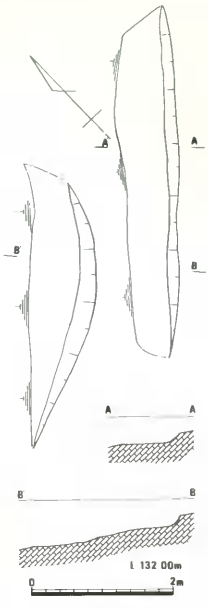
さらに２辺（南東辺・北東辺）においてはこの建物に付随する柱穴を各２本づつ検出した。この柱穴は濡れ縁の束柱と理解される柱穴である。

建物の時期は中世と考えているが決め手となる遺物が存在していない。しかし、建物30・31等と方向性・柱穴の規模等が酷似している点を考慮して同時存在の可能性をひめている掘立柱建物である。

以上が１区内において検出された中世の時期の掘立柱建物の全てである。建物は数軒が単位であろう。時代的に最古は建物21で、古代末の可能性もある掘立柱建物である。

3．段状遺構（第8・88図）

1区内の中ほどで尾根中央の左右の斜面部において検出された遺構である。遺構が存在する位置は図示している位置であり、この遺構が活用されていた当時の規模等は想像しがたい。現存する形態についてのみ概要を記す。第104・105図の段状遺構は、弥生時代後期に属すると考える、竪穴住居あるいは建物の可能性のある遺構である。



第104図　段状遺構1（左）・2（右）（1/80）・出土遺物

段状遺構1・2（第104図）

竪穴住居27の北東に位置する。2段存在するが、若干の時期差が考えられる。段状埋没土は黒ボク土壌・遺物も出土している。

段状遺構7・8・9（第105図）

丘陵南東向き斜面で、竪穴住居31の北西に位置している遺構である。すべての段状遺構が長軸を同一（北東一南西）方向に向けている。

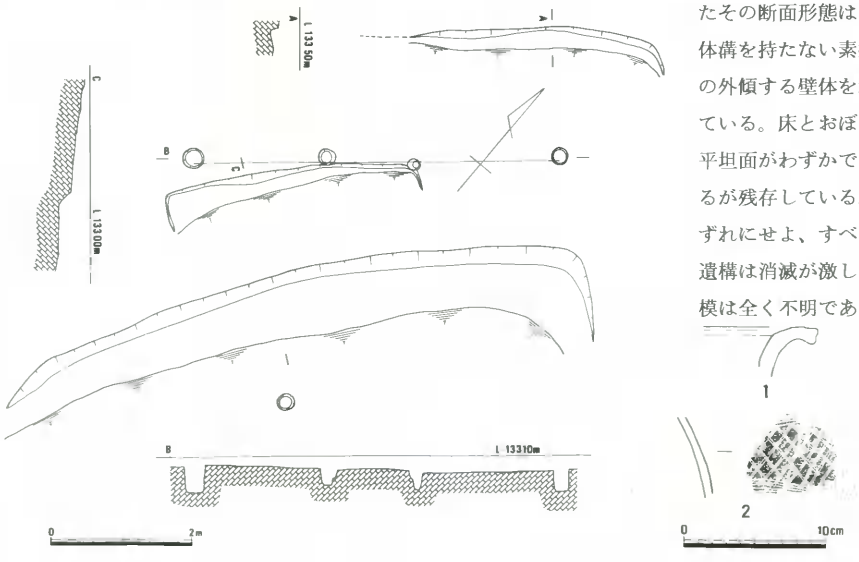
段状遺構7においては、壁側が窪み、あたかも竪穴住居の壁体溝の様相を呈する平面形態である。また段状遺構8を切っている柱穴列が伴うものかと思う。柱穴内からは図示した遺物が出土している。

段状遺構8（第105図）

段状遺構7に伴う可能性のある柱穴列に切られているが、長軸で360cmを測り、床平坦面を示した壁体溝を持たない竪穴住居の可能性を呈する遺構であるが、決定的な資料はない。

段状遺構9（第105図）

段状遺構8の下で長軸を同じくする逆「L」字状を呈する。現存する長辺は約850cmを測る。またその断面形態は、壁体溝を持たない素掘りの外傾する壁体を示している。床とおぼしき平坦面がわずかではあるが残存している。いずれにせよ、すべての遺構は消滅が激しく規模は全く不明である。



第105図　段状遺構7（上）・8（中）・9（下）・柱列（1/30）・出土遺物

4．土壙（第８図）

土壙には、弥生時代と近世に属する時代の遺構が存在している。まず前者の概要を記する。

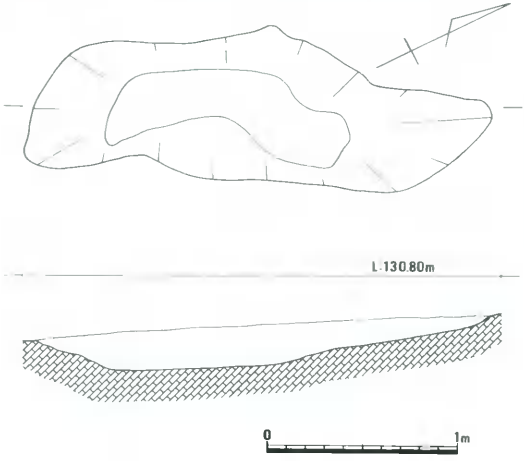
土壙１（第106図、図版１－２）

１区Ａの竪穴住居３の東に近接して検出された不整長方形の平面形態を呈した土壙であり、規模は240×80㎝を測る。掘り方は、ゆるやかな擂鉢状の断面を示す。遺物は確認されていない。

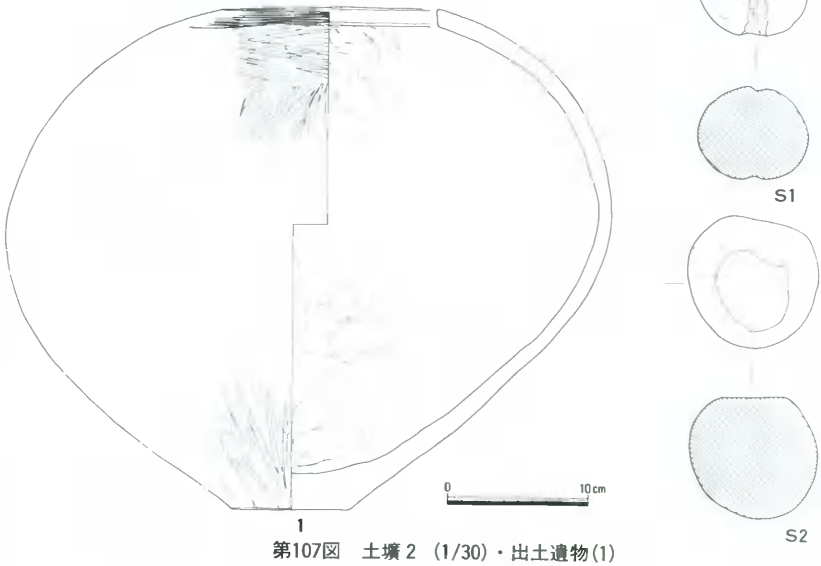
土壙２（第107図、図版16－７・８）

１区Ｄの北東部で、調査区域内中央やや南西よりに位置する素掘りの土壙である。土壙の平面形態は歪な不整隅丸方形状を呈し、壙内には土器が充満している土壙である。

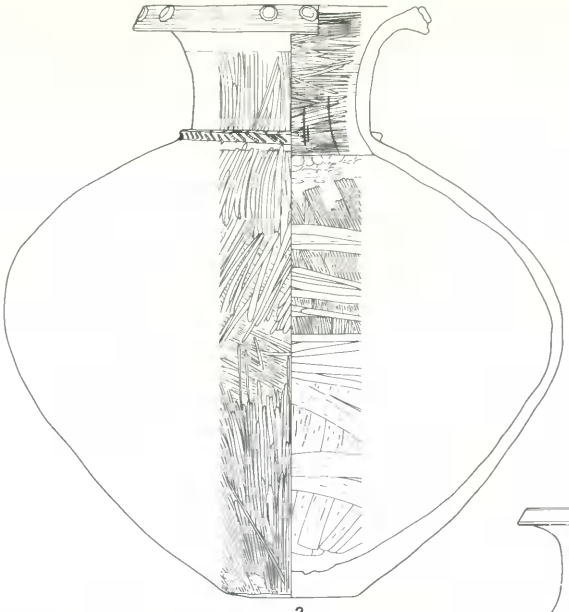
規模は、85㎝×90㎝、検出面からの深さは30㎝程を測った。



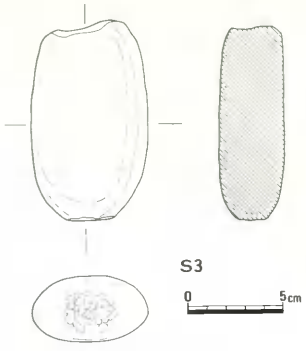
第106図　土壙１（1/30）

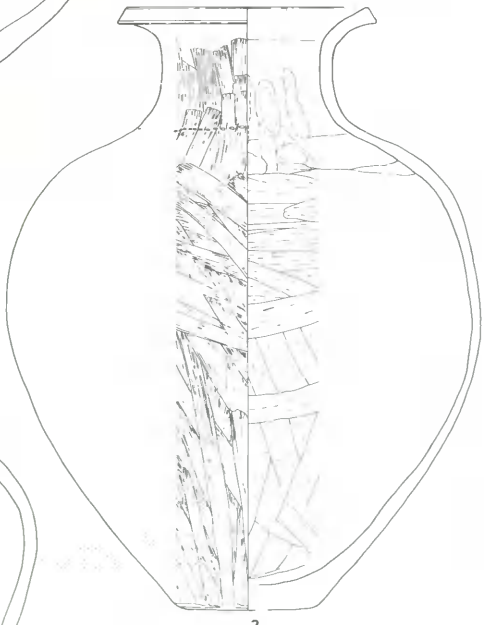


第107図　土壙２（1/30）・出土遺物(1)

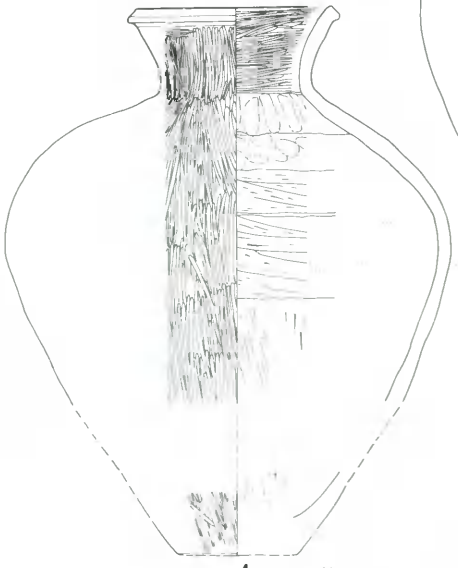


2



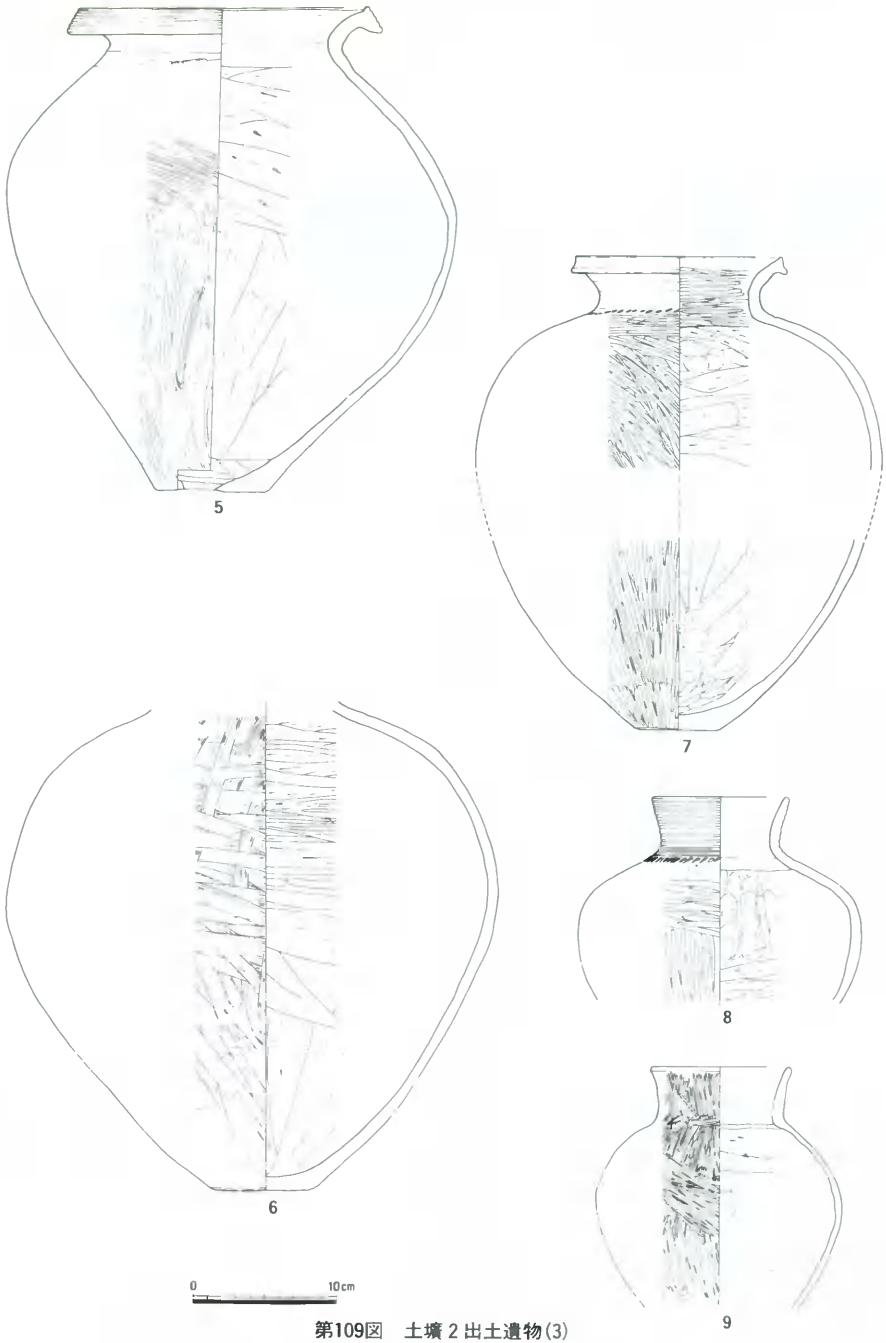


3



4

第108図　土壙2出土遺物(2)



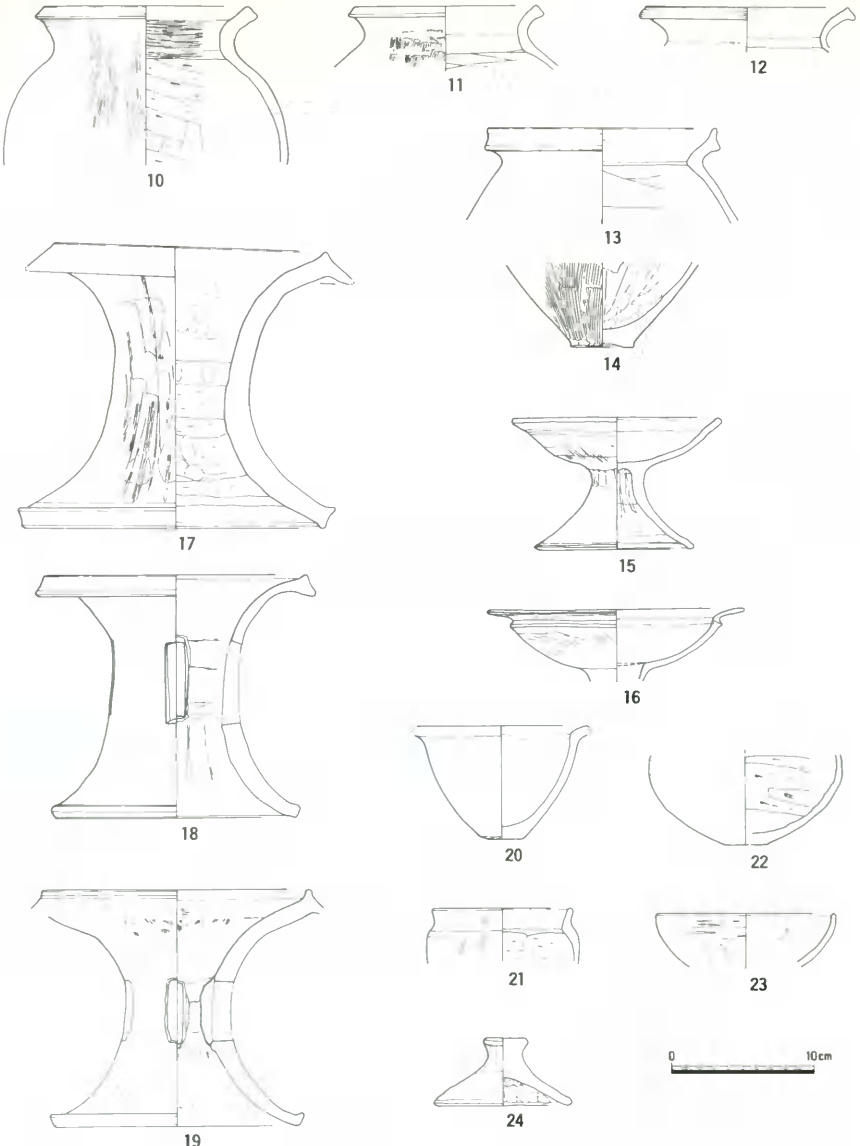
第109図　土壙２出土遺物(3)

土壙内から出土した遺物には、石器・土器である。

石器は石錘・すり石・叩石が出土している。

土器は器種・大小さまざまに出土している。1の無頸壺から2～10までの壺、口縁部がわずかに外反する11・12の壺、20～22の器台、小型の土器、中でも27の蓋形土器等々である。このような遺物が出土しているが、以外と甕・高杯が少ない。5は底部に焼成後穿孔あり。

これらの遺物から、時期は弥生時代後期前葉に相当するであろう。



第110図　土壙2出土遺物(4)

5．土壙・土壙墓（第88図）

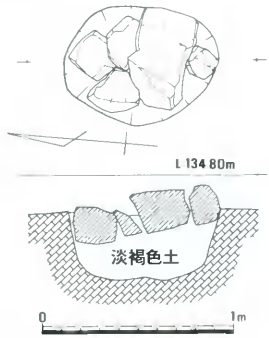
1区C北東部で西に傾斜する面に集中して位置する。検出された遺構はすべてが近世に属すると考えられる遺構である。

土壙8（第111図）

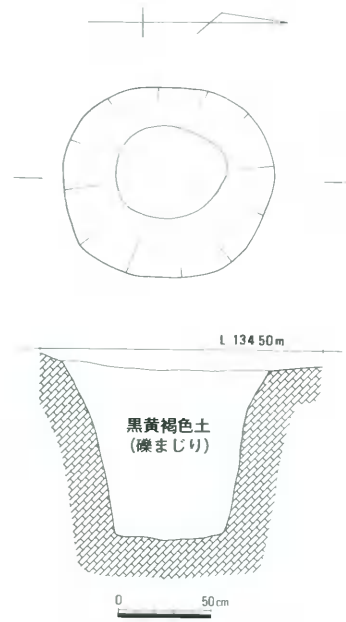
長辺110cm、短辺100cmのほぼ円形の平面形で、検出面からの深さは90cmを測り、逆台形状の断面を呈する土壙で、埋土内には拳大の角礫は混入しているが遺物は無し。

土壙墓2（第112図、図版17－1・2）

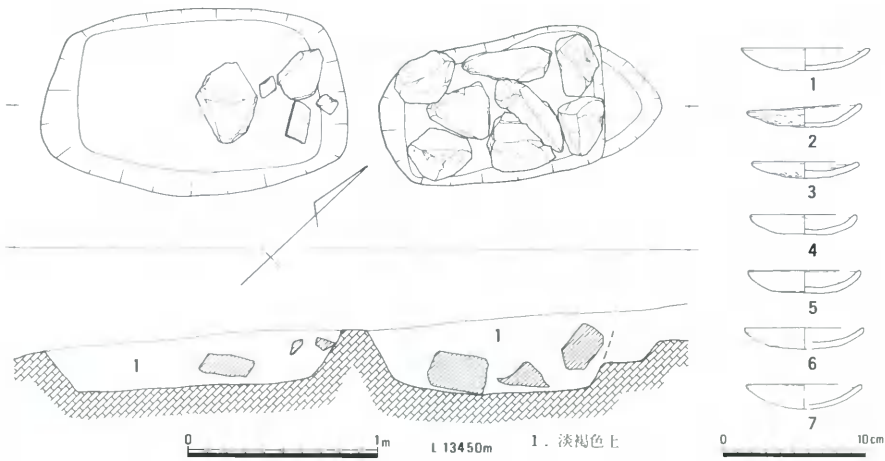
土壙8の北東に位置し、80cm×65cmの小判形の平面形



第112図　土壙墓2（1/30）



第111図　土壙12（1/30）



第113図　土壙墓3（左）・4（右）（1/30）・出土遺物

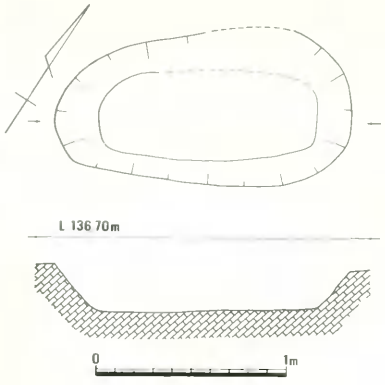
を呈し、35cmの深さを測る。壙内には大小5個の角石が用いられていた。遺物の出土無し。

土壙墓3・4（第113図、図版17―3・4）

土壙2の北12mに位置し、隅丸長方形の平面形を呈している。壙内には数個の角石が落ち込んでいるが、土壙墓3は抜き取られた可能性がある。遺物は土師器小皿が双方から出土している（1～4は土壙墓3、5～7は土壙墓4）。

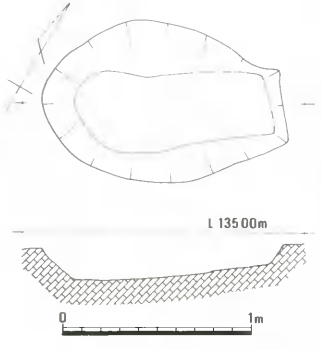
土壙墓5（第114図）

土壙墓4より6m北に位置し、北東―南西の長楕円形で平坦な底面の土壙墓である。遺物は皆無。



第114図　土壙墓5（1/30）

土壙墓6（第115図）



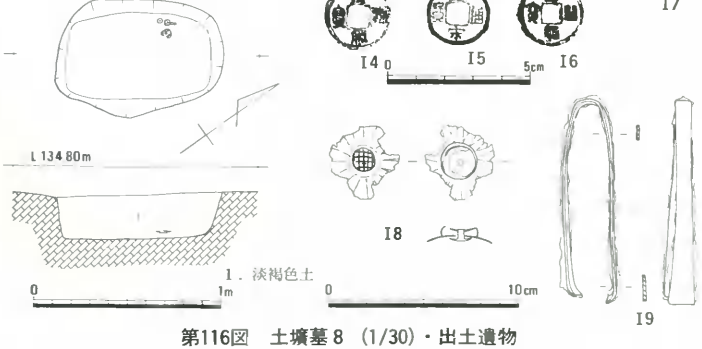
第115図　土壙墓6（1/30）

土壙墓5の北東に位置する不整長楕円形で、底面は北東側に高く掘られている土壙墓であり、出土遺物は皆無であった。

土壙墓8（第116図、図版17―5・6）

土壙墓6よりさらに北東8mに位置し、斜面に直交する隅丸長方形を呈した土壙墓である。壙内から布に包まれた古銭7枚・毛抜き・さらに金具等の遺物が出土している。

土壙墓9（第117図）



第116図　土壙墓8（1/30）・出土遺物

土壙墓6の南東上方に位置し、白迫2号墳・竪穴住居39を切り込む墓である。規模は85×50cm、深さ50cmを測る。底面から10枚の銭貨が出土している。

土壙墓12（第118図）

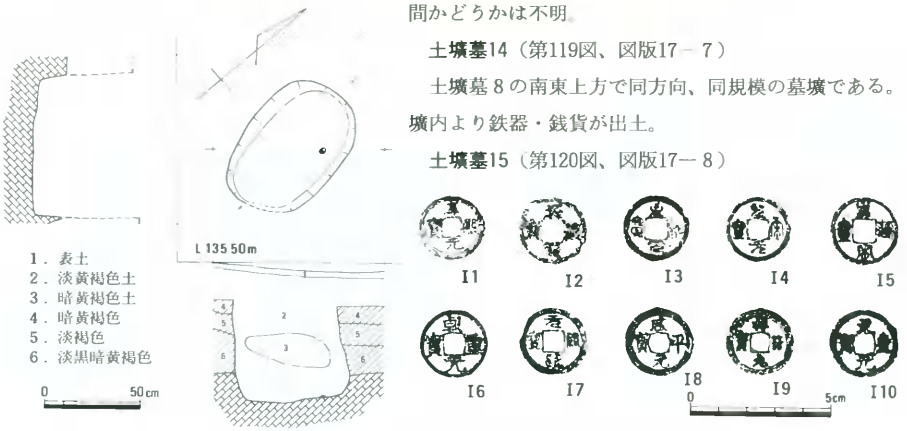
土壙墓9よりさらに上方で、白迫2号墳周溝上に位置する非常に浅い墓であった。壙内には人頭大

の角礫・炭・骨片が確認できた。火葬墓であろうが、人間かどうかは不明。

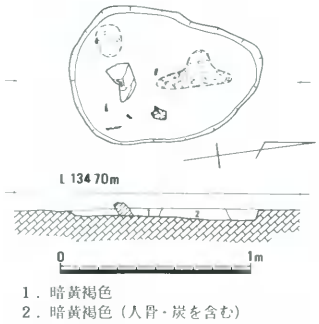
土壙墓14（第119図、図版17－７）

土壙墓８の南東上方で同方向、同規模の墓壙である。壙内より鉄器・銭貨が出土。

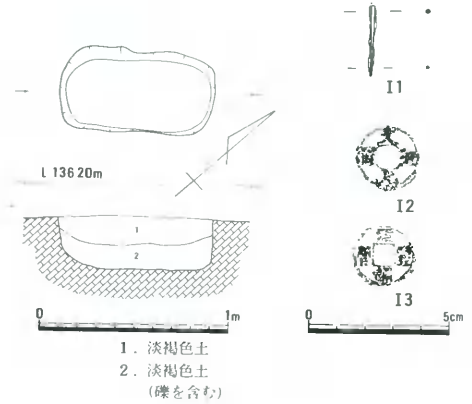
土壙墓15（第120図、図版17－８）



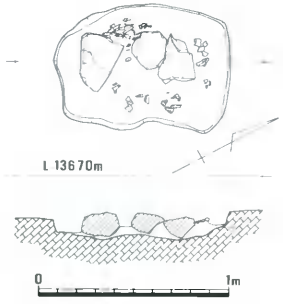
第117図　土壙墓９（1/30）・出土遺物



第118図　土壙墓12（1/30）



第119図　土壙墓14（1/30）・出土遺物



第120図　土壙墓15（1/30）

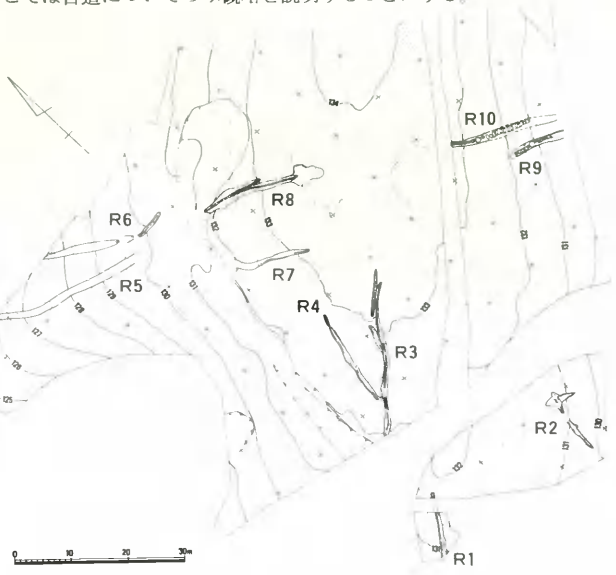
土壙墓14の南東に位置し、土壙墓12と同様である。土器の砕片も少量出土。火葬墓と考えられる。

以上、図化し掲載した遺構についてのみ概要を記述したが、その他に数基の土壙・土壙墓が存在している。それらの土壙・土壙墓は、すべてが第88図に示している位置（１区Ｃの北東端）である。この一帯は中近世において墓地として使用した区画と考えられる。

6．溝・古道

小中遺跡1区内における溝・古道については、丘陵南西部に集中して検出され、溝は数本で第121図は古道のみを図示している。

ここでは古道についてのみ概略を説明することにする。



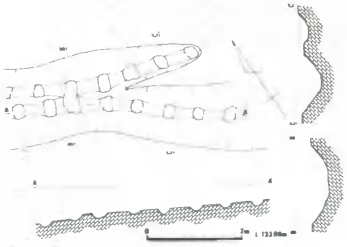
第121図　1区道配置図（1/1.000）

古道は大別して2通りに区別することができる。その1は断面形態は「U」字状を呈してはいるが、底部に約60cm間隔の幅で楕円形の平面形の浅い窪みを有するものである。

その2は断面形態は同様で、底部に窪みを有していない道（道1・2・7）がある。

まずその1についてであるが、道底部には粗砂・小礫が敷きつめられていた道（道3・4）とそうでないものとが見うけられた。この窪みは傾斜を考えた上での構造である。砂・礫についても同様のことが考えられる。

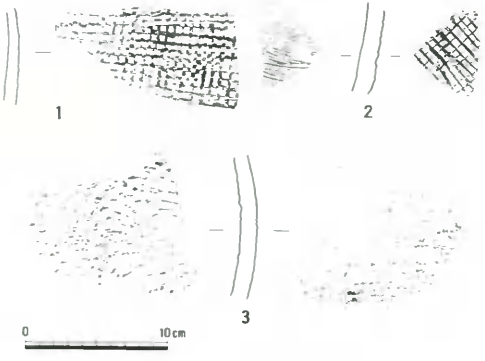
その2については傾斜等から考えてみるならば、そのような構造は必要としなかったのであろう。さらにこれらの道は、丘陵の尾根に対して縦横に走っているもので



第122図　道8平・断面図（1/120）

あり、三方からの交叉すると想定される位置には何らかの構造物が存在していた可能性も考えられるが、後世の開墾によりその可能性は消えさっている。あるいはこの丘陵を昇って間山（はしたやま）へと登る道の可能性もあるが不明である。

道埋没土内からは第123図の勝間田焼等が出土。備前焼も数片含まれていた。これらから中世以降に比定される。

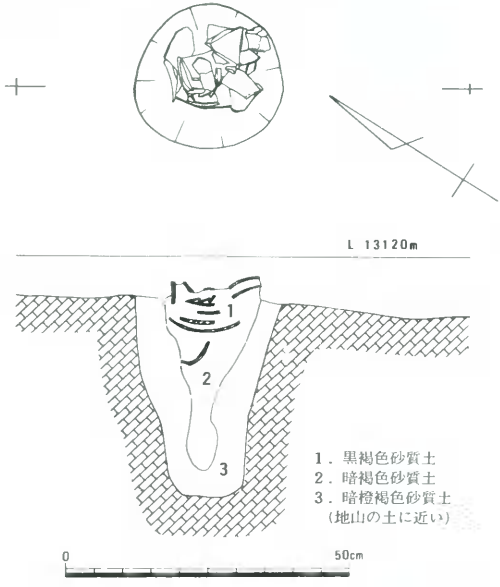


第123図　道出土遺物

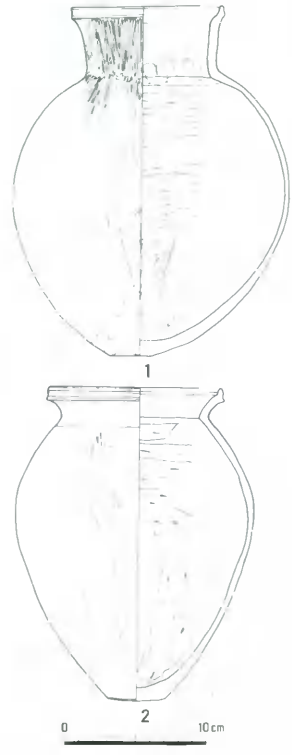
7．その他の遺構・遺物

1区内においてのおもな遺構として第124図～127図までのものと第128・129図の遺物を取り上げてみた。

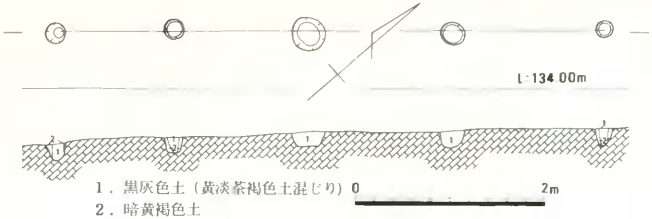
まず第124図のピットは1区FのH7の近くにおいて検出された遺構であり、柱穴内の柱根跡内に土器を投入されたかのように2点の土器（壺・甕）が出土している。柱穴は、ほぼ円形で径50cm、検出面からの深さは70cmを測るピットである。しかしながらこのピットが伴うような遺構等は見当らなかった。



1の口縁はほぼ垂直に立ち上がり、端部はつまみ上げにより丸く終る。外面には細かいヘラミガキ、体部内面はヘラケズリ、ヘラミガキ、頸部指押えがなされている。2は「く」字状の頸部で口縁部は厚味をもち、端部は丸く終り、内外面の調整は荒さが目立つ土器である。遺物から弥生後期に比定されよう。



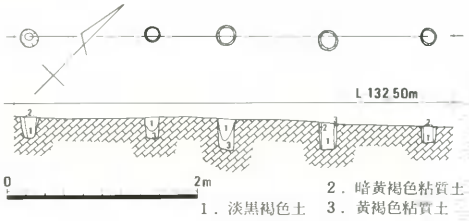
第124図　1区F柱穴遺物出土状況（1/10）・同写真・出土遺物



第125図　柱穴列平・断面図（1/60）

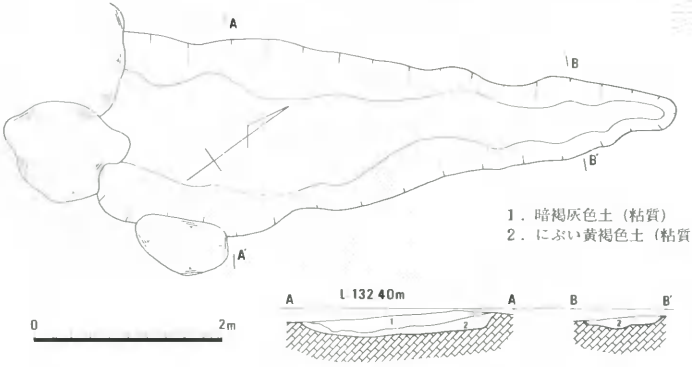
第125図、126図の柱穴列は1区内で、いずれも尾根の東側で検出されている。柱穴の規模は径15㎝～35㎝、現存深は15㎝～35㎝を測る。柱穴内からは弥生の土器片も出土しているが、古代以降の可能性がある遺構である。

この柱穴列の近くには伴うと思われる遺構は存在せず、近世の開墾により消滅し、柱穴列のみが残ったものと判断する。



第126図　柱穴列平・断面図（1/60）

第127図は、H6の北西側を切って作られている溝状の遺構である。遺構は、北東から南西にゆるやかに下る。図示以外は近世に削平され消滅。中世に属すると考える。

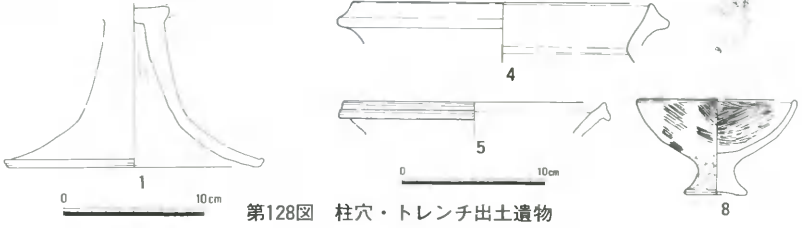


第127図　溝状遺構平・断面図（1/60）

1区の調査区内においては、第128図に示した遺物のほかに、図化しにくい遺物もかなりの量で出土している。

その出土した遺物は、柱穴内のものから、浅い窪み状、あるいは溝状になる遺構等の埋土中からの出土である。

さらに、図示した溝状遺構（第127図）については、断面の形状から、本来は道として機能していた遺構ではなかろうか



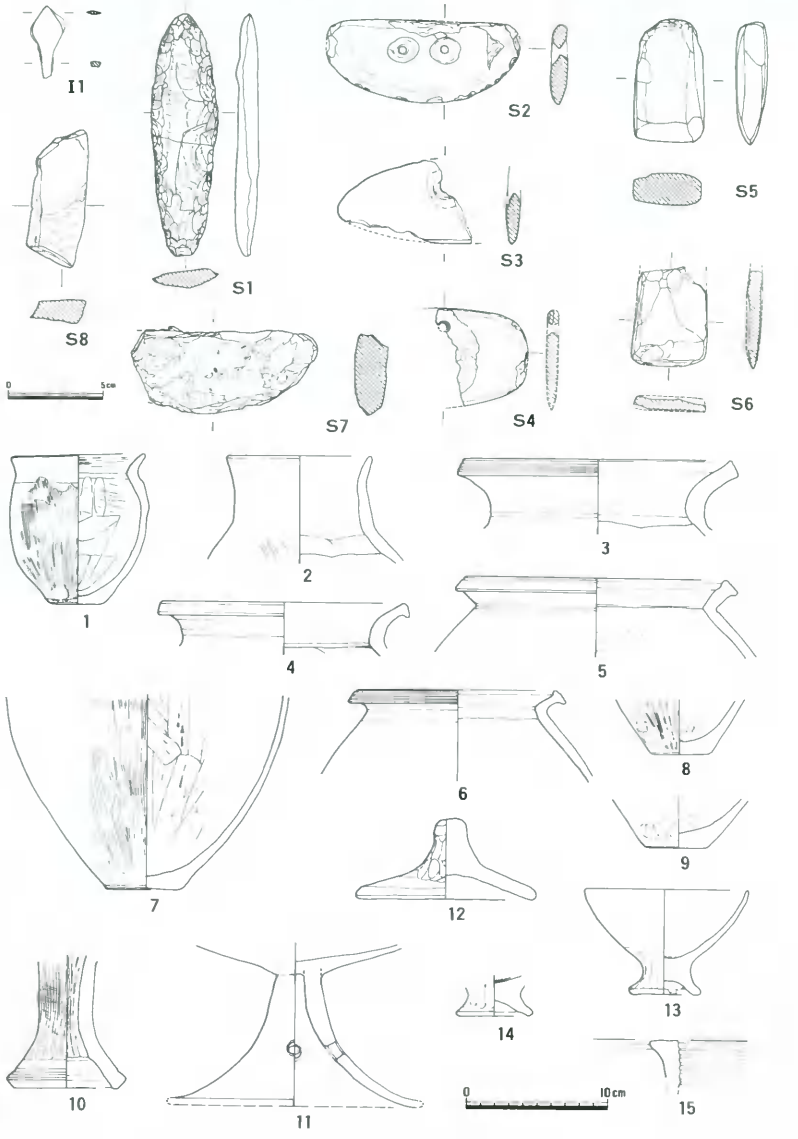
第128図　柱穴・トレンチ出土遺物

と考えられる遺構である。

柱穴・包含層出土遺物

遺構の検出状況に比べて遺物は比較的少量であった。

上段のＩ１は鉄鏃、Ｓ１はサヌカイト製石槍、この２点は柱穴内出土、他は遺構検出中に発見されたものである。住居内から鉄製品も検出されていることからＩ１も住居に伴うと考えたい遺物である。下段の土器も同様に、柱穴内・包含層中より出土したもので、12の土器は転用の可能性もある。

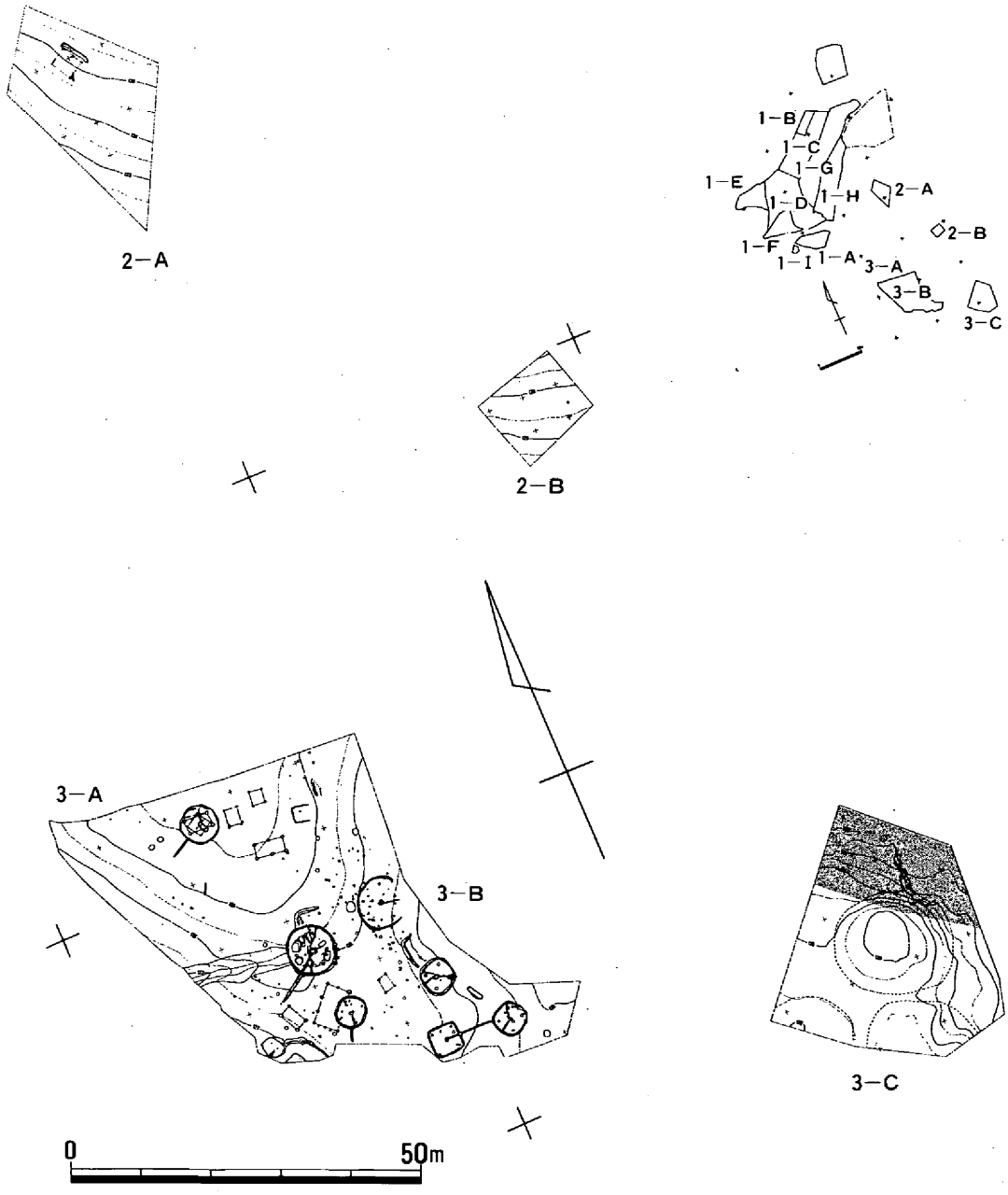


第129図　柱穴内・包含層出土遺物

(2)　2・3区の概要

小中遺跡2区は飛び地状の2つの調査区をまとめたものである。いずれも南へ下る斜面で、遺構密度は低い。

小中遺跡3区は南東に下る尾根頂部にわたる調査区である。調査時当初は便宜上A・B・C区に分けていたがA・B区は最終的には1つの調査区として扱っている。A・B区北側は畑化されていて遺構は残っていなかった。南側は小中古墳群へ続く緩やかな尾根で、東には谷が入り西は中国自動車道建設に伴い昭和47年度に調査された小中古墳群に当たる。C区は小中1号墳北東側の周溝部分と墳丘の端に当たる。

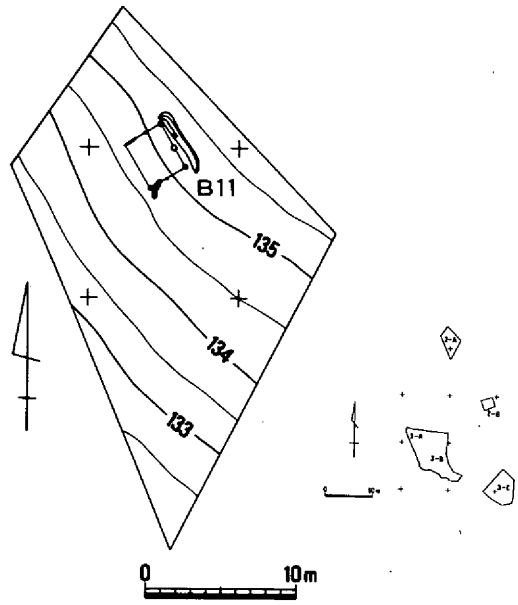


第130図　2・3区遺構配置図（1/1,000）

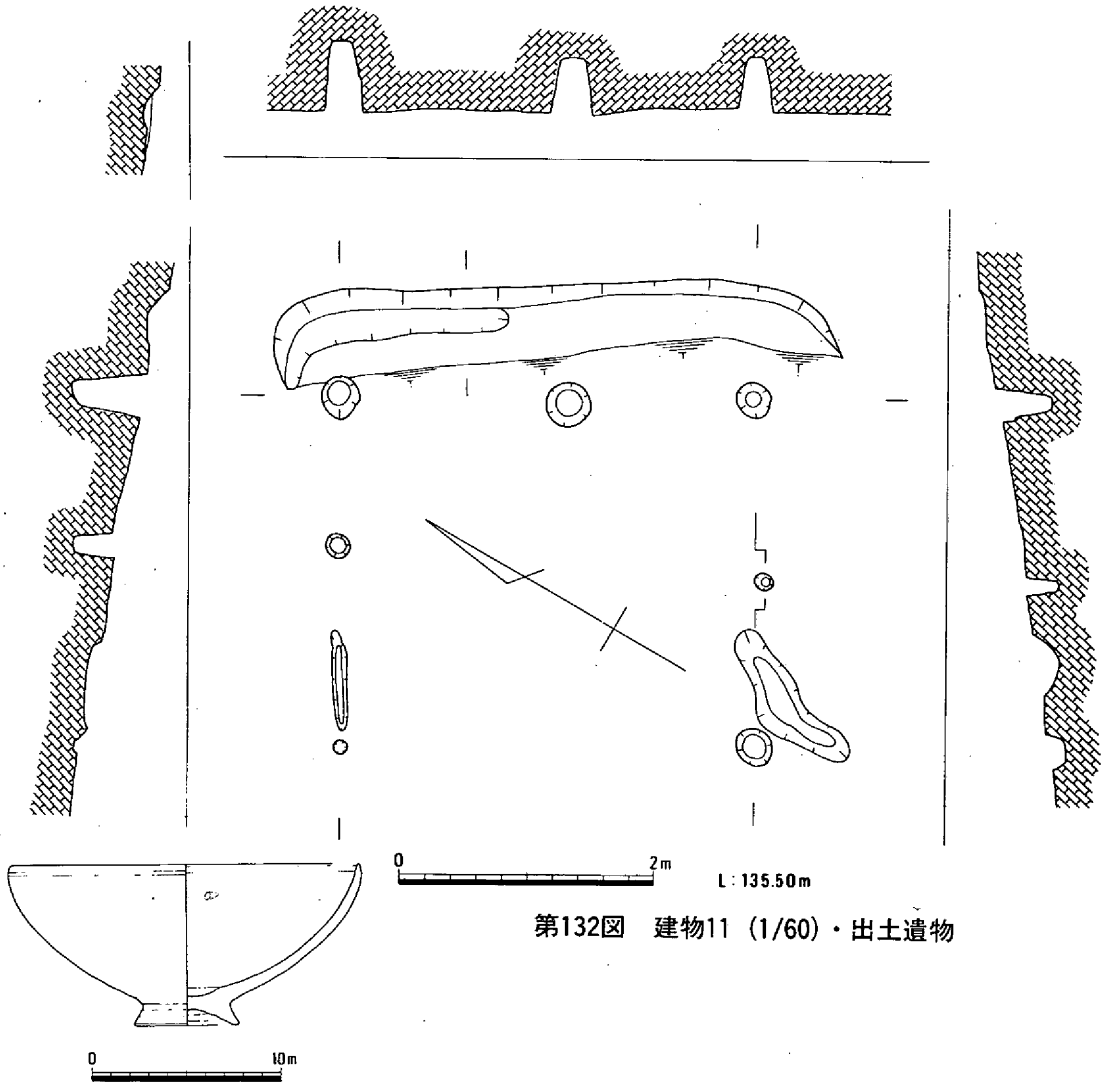
(3)　2区の調査

2区ではA区で建物が1棟検出されたにすぎない。この建物は変則的な2×2間の柱穴配置である。斜面上側に溝状の掘り方を有するが、そこから斜面下方は削平されているため残りはよくない。柱穴間に存在する溝は、この建物には伴わない可能性が高い。

柱穴から出土した台付鉢は全体の4分の3が残存している。口径18.3cm、底径5.5cm、器高8.5cmを計る。調整は内外面とも風化のため不明であるが脚部内面に押圧痕が見られる。この台付鉢は3区竪穴住居45などのものより後出と考えられ、弥生時代後期後葉に相当するものであろう。



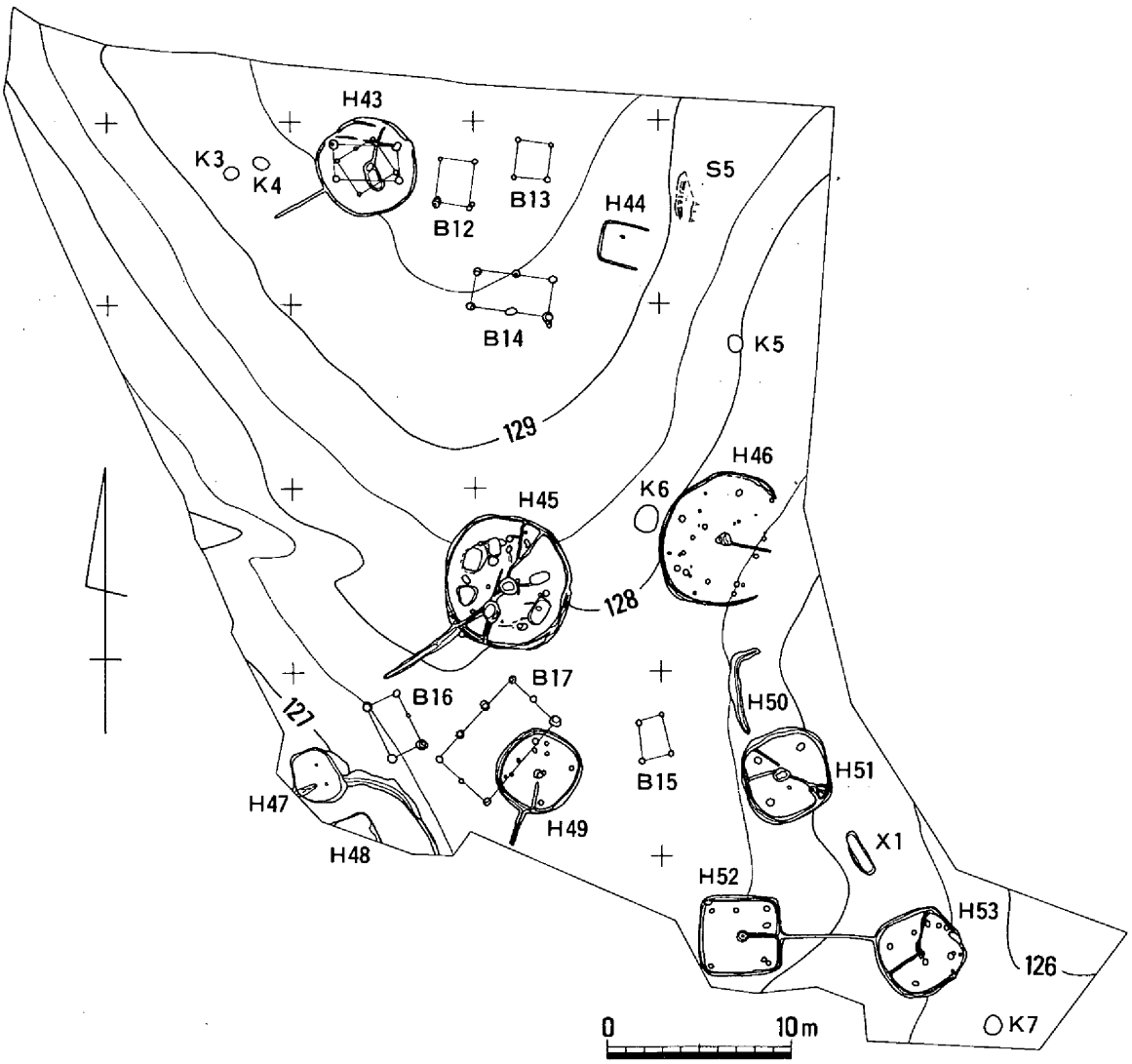
第131図　2区A遺構配置図 (1/500)



第132図　建物11 (1/60)・出土遺物

(4)　3区の調査

検出された全ての遺構の内訳は竪穴住居11軒、建物6棟、土壙5基、土壙墓1基、溝2条、道1条に段状遺構2基である。住居はほとんど弥生時代の竪穴住居で、単独で営まれたものが多い。土壙に関しては、土器を含まず検出面から深さが1m以上のものについては前例から縄文時代の落とし穴と考えた。その他の土壙は少なく、竪穴住居45内の土壙を除いて弥生時代に属すると断定できる土壙はない。古墳時代の遺構は後期の土壙墓が1基だけ存在する。

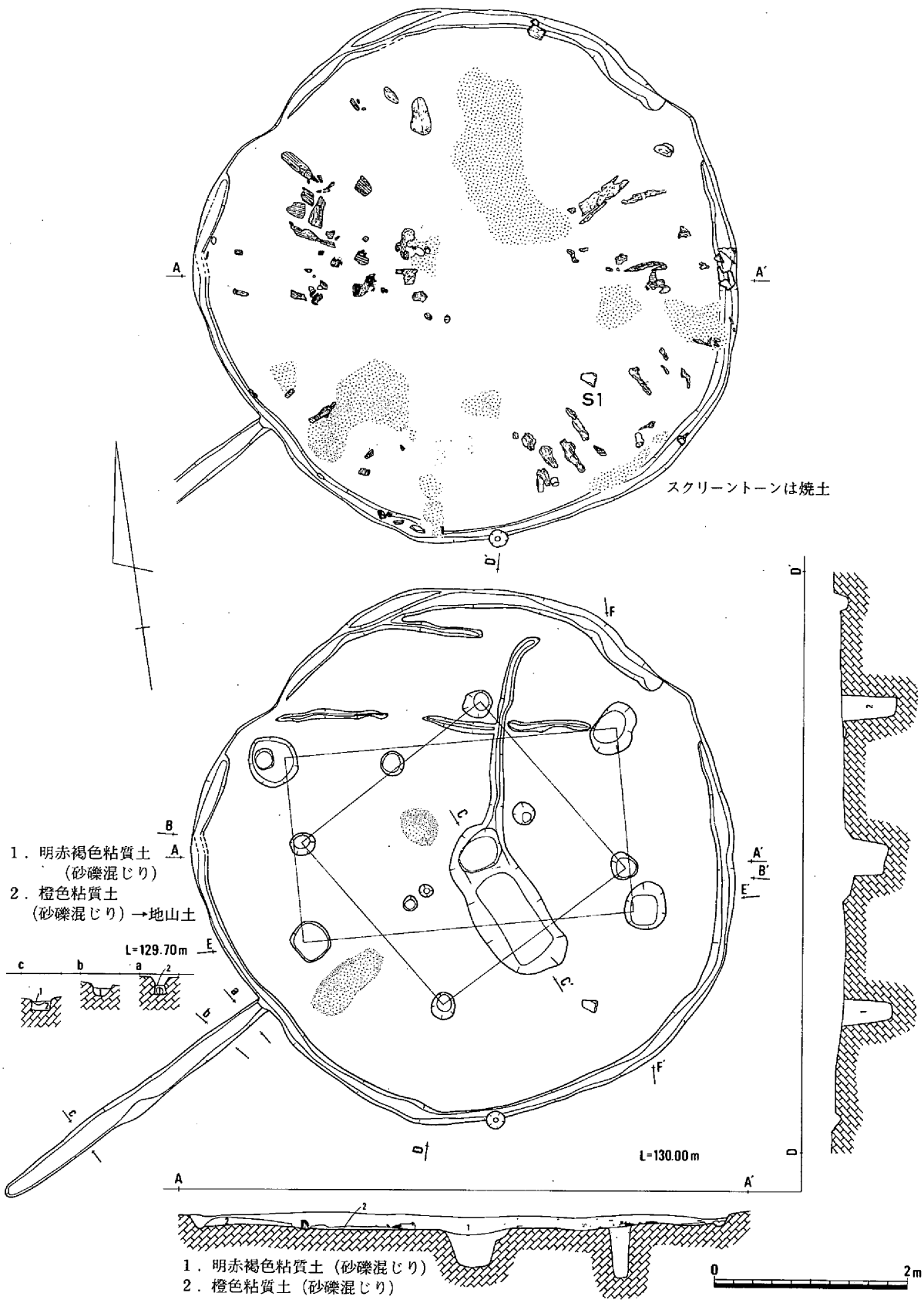


第133図　3区A・B全体図（1/400）

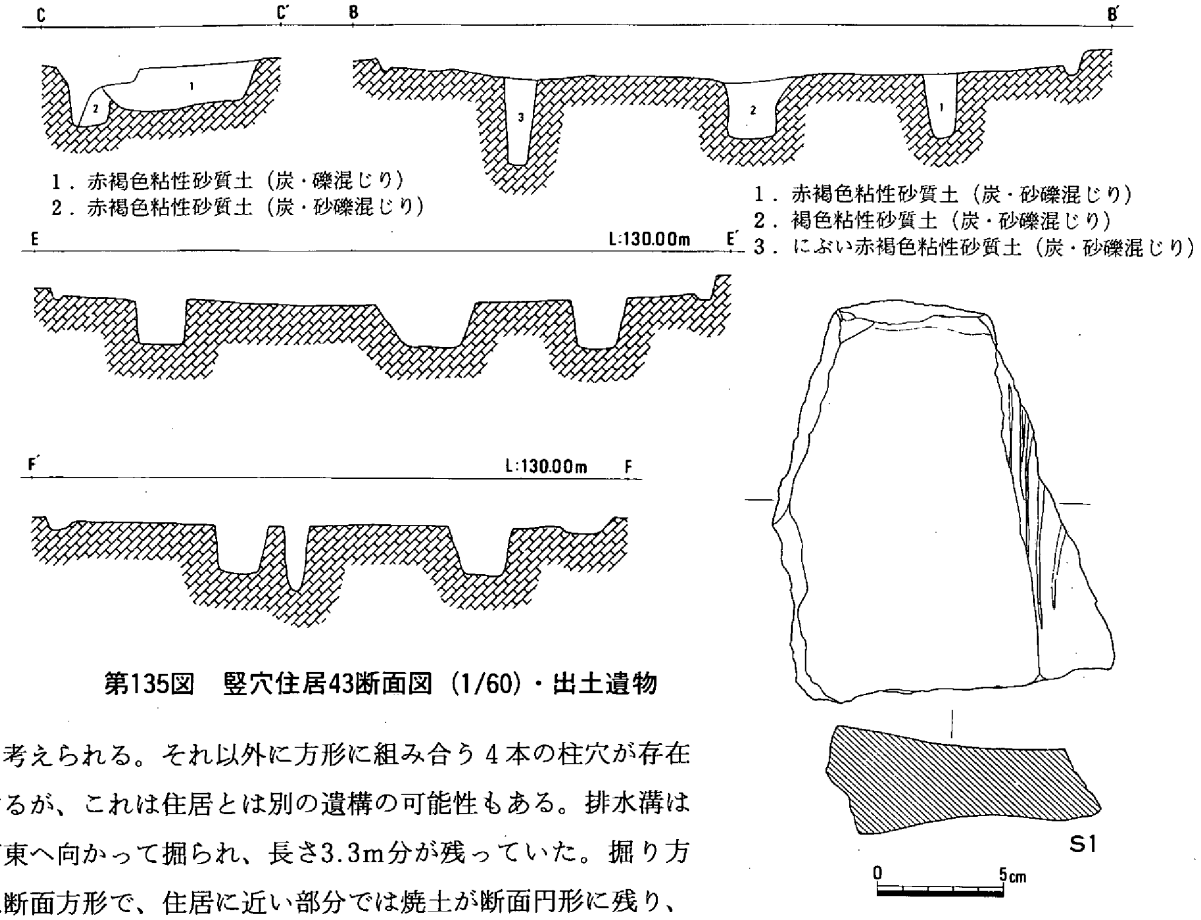
1．竪穴住居

竪穴住居43（第134・135図）

調査区北端にある円形の住居で直径5.6m、検出面からの深さ15cmを測る。検出面で放射状に木炭が残存し、焼土も見られた（スクリーントーンの部分は焼土）。これら木炭・焼土はいずれも床面直上に位置していた。住居に伴う柱穴は、排水溝と平行する位置にある4本と中央穴を挟んで2本である



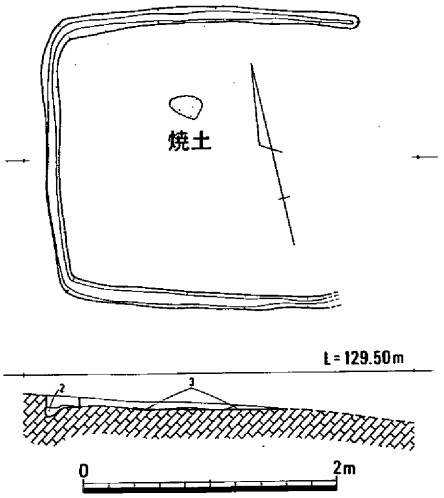
第134図　竪穴住居43（1/60）



第135図　竪穴住居43断面図（1/60）・出土遺物

と考えられる。それ以外に方形に組み合う４本の柱穴が存在するが、これは住居とは別の遺構の可能性もある。排水溝は南東へ向かって掘られ、長さ3.3m分が残っていた。掘り方は断面方形で、住居に近い部分では焼土が断面円形に残り、その回りに地山の土を充填している様子が観察された（第134図断面図ａ）。住居内の溝は中央穴につながるものが床面からの比高差５cmで、壁体溝を除くその他の溝より深い。この溝は中央穴に向かって落ち込む様子であった。

出土遺物であるが、土器に関しては図化できるものはない。Ｓ１は砥石で、工具の当たった痕跡がみられる。遺物が少ないので断定はできないが、時期は弥生時代後期と思われる。



第136図　竪穴住居44（1/60）

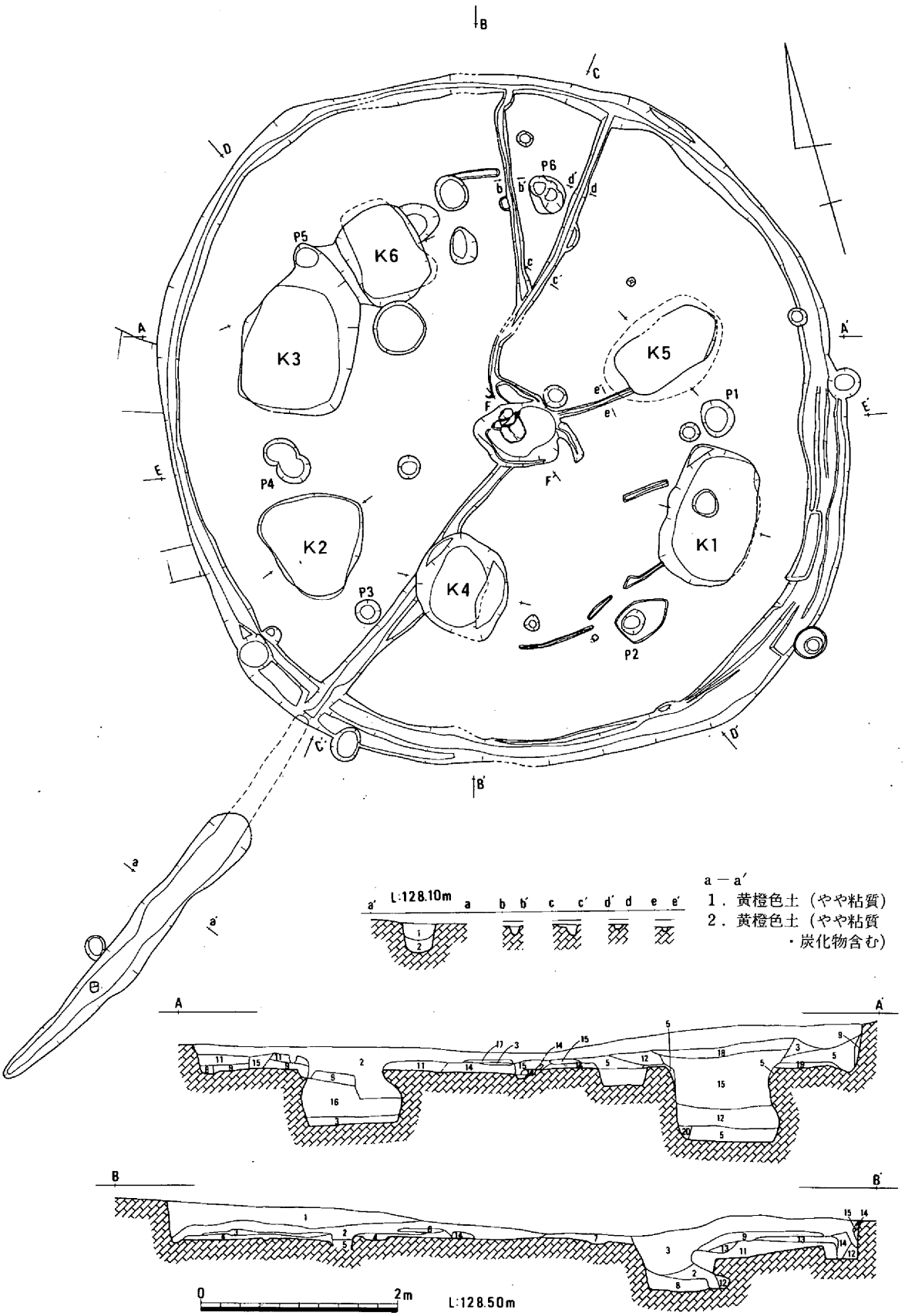
竪穴住居44（第136図）

調査区北東で検出した方形の住居で南北2.4m、深さは検出面から５cmを測る。床面上に焼土面が確認できる。柱穴は見られなかった。

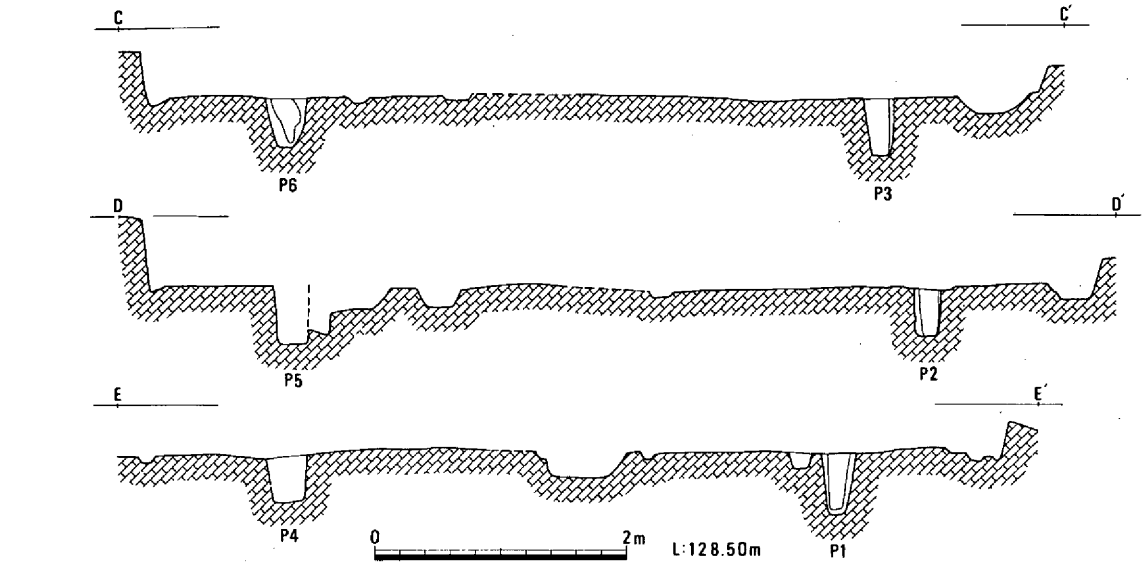
竪穴住居45（第137～140図）

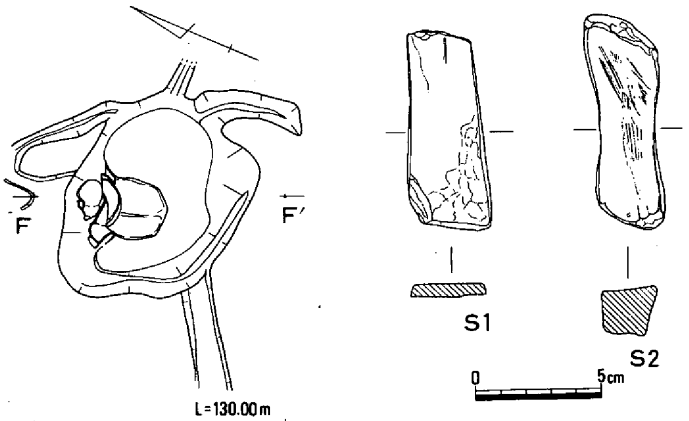
調査区ほぼ中央に位置する直径7.2～7.6mのだ円形の住居である。柱穴は６本、建て替えが１回存在する。調査時には認識できなかったが、断面図３・５・９・11・12・14・15層は建て替え後の床面で、この面から土壙が掘りこまれたと考えられる。

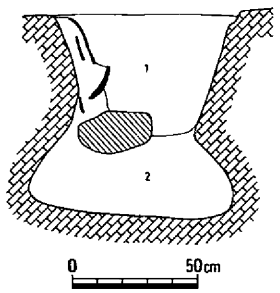
住居内にみられる溝についてであるが、土壙１・４周辺の溝は最初の住居床面からの比高は１～３cmで、埋土は炭の入った褐色土であった。対して壁体溝から



第137図　竪穴住居45（1/60）







〈中央 Pit〉
1．褐色粘性砂質土（少量の炭・礫を含む）
2．暗褐色粘性砂質土（少量の炭・礫を含む）

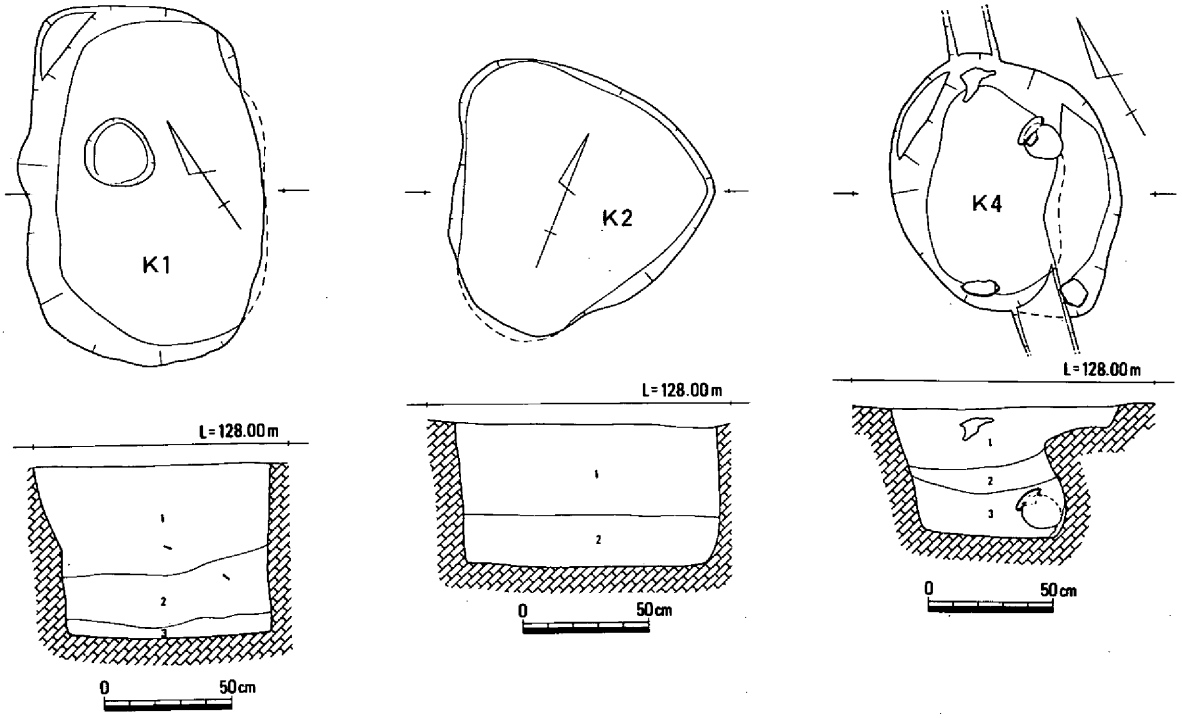
1．橙色粘性砂質土
2．黄褐色粘性砂質土
3．明褐色粘性砂質土
4．明褐色粘性砂質土
5．明赤褐色粘性砂質土
6．明褐色粘性砂質土
7．橙色粘性砂質土
8．橙色粘性砂質土（7よりやや濃い）
9．にぶい橙色粘性砂質土
10．黄橙色粘性砂質土
11．明黄褐色粘性砂質土
12．明褐色粘性砂質土
13．橙色粘性砂質土
14．黄褐色粘性砂質土
15．褐色粘性砂質土
16．にぶい黄橙色粘性砂質土
17．黒褐色粘性砂質土
18．にぶい赤褐色粘性砂質土
19．明黄褐色粘性砂質土
20．橙色粘性砂質土
（8よりややうすい）

第138図　竪穴住居45断面図（1/60）・ピット（1/30）・出土遺物

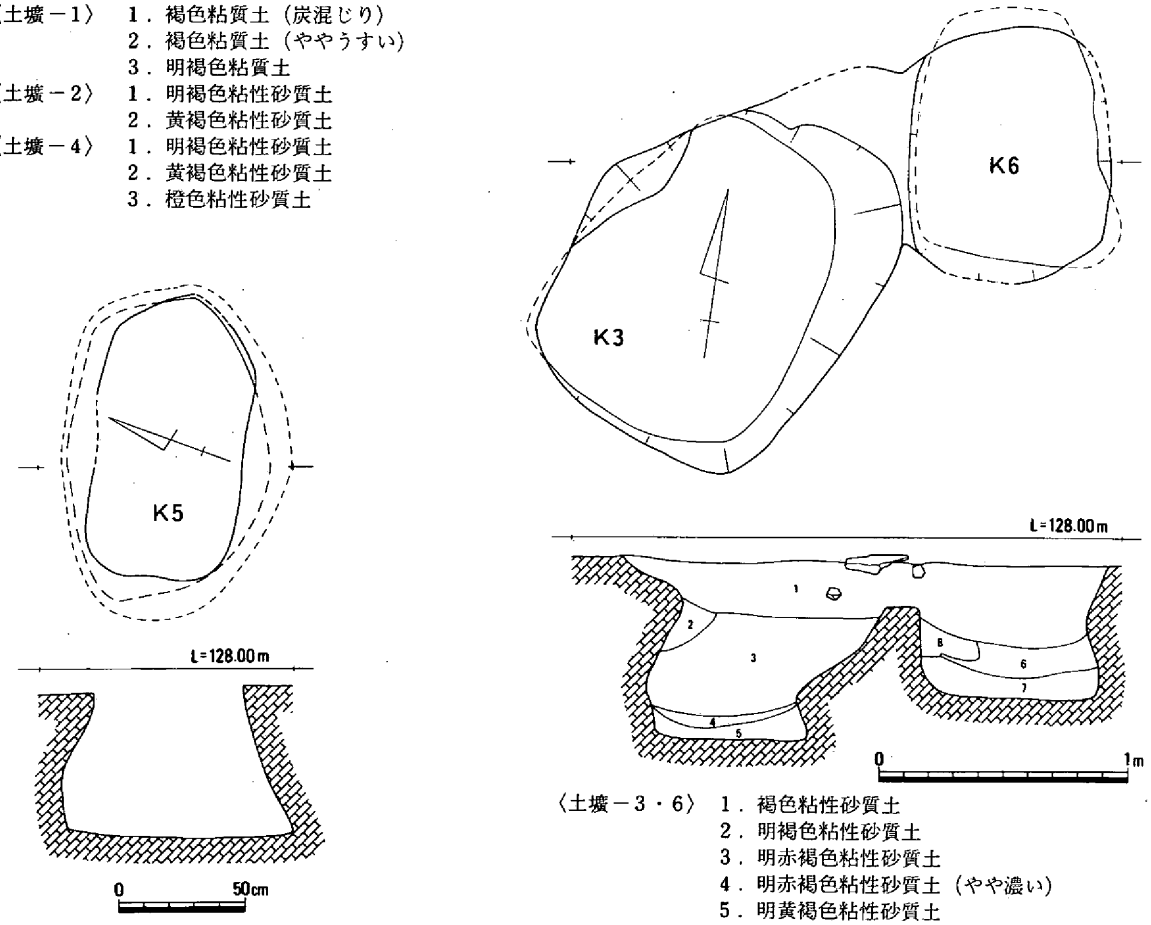
中央穴につながる溝はそれらよりもやや深めで、壁体溝と中央穴に向かって緩やかに下っている。

住居に伴う遺物として、断面ポイントD～Cにかけての壁体溝上で、溝底部から10～20cmの高さに礫群や土器の集中がみられた。これらは土層断面A－A'では2層直下に位置していたものと思われ、1・9・10・12はこの部分から出土したものである。また5はp6西側から、3は中央穴から出土した。8は住居内土壙4から出土したものである。

土器は風化が進み残りが悪い。7は全体の3分の2が残り底部に焼成前の穿孔を有する。8は口径13.9cm、器高17.2cmを計り、外面頸部～底部少し上まで炭化物が付着している。9は口径24.3cm、器

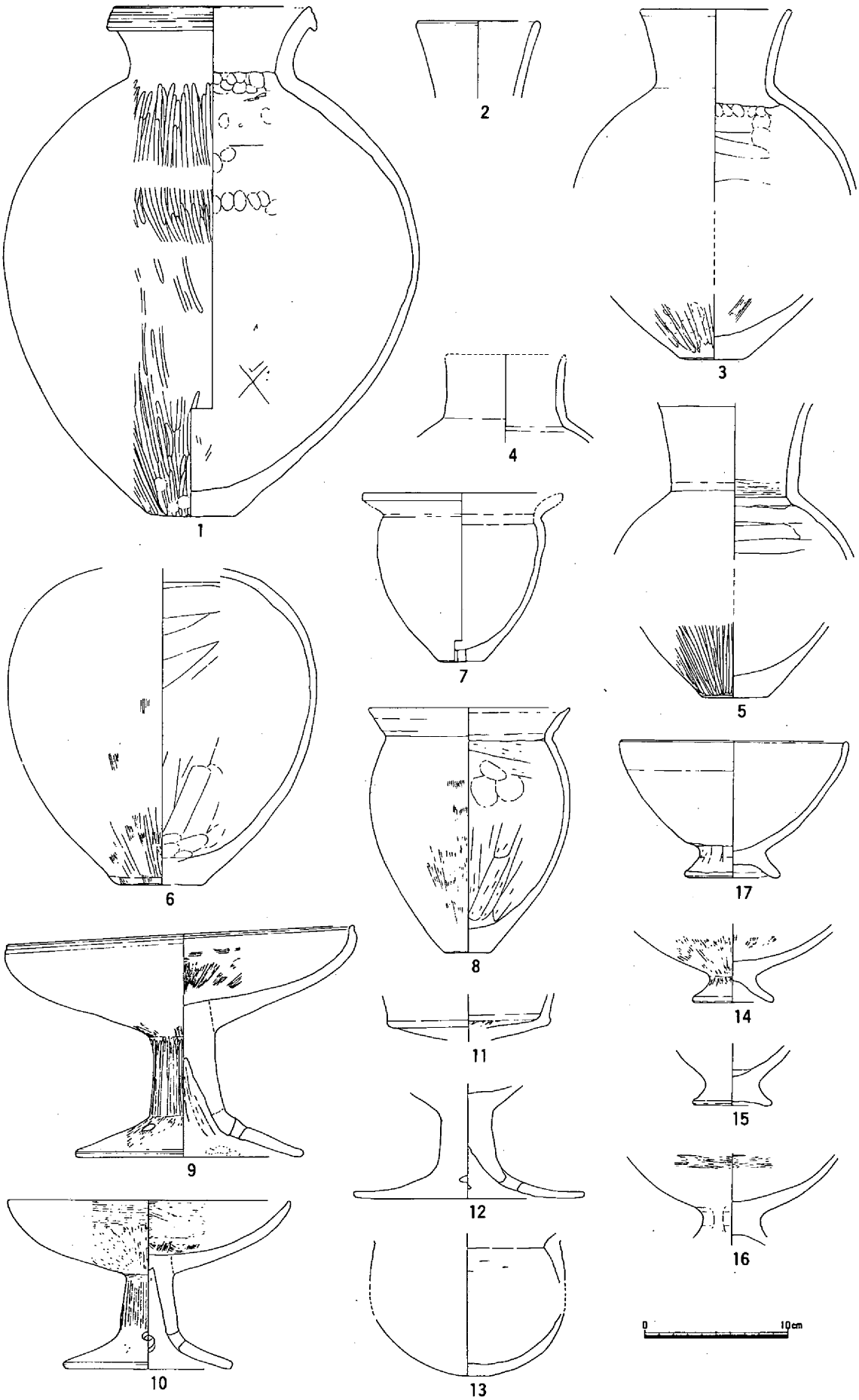


〈土壙－1〉　1．褐色粘質土（炭混じり）
　　2．褐色粘質土（ややうすい）
　　3．明褐色粘質土
〈土壙－2〉　1．明褐色粘性砂質土
　　2．黄褐色粘性砂質土
〈土壙－4〉　1．明褐色粘性砂質土
　　2．黄褐色粘性砂質土
　　3．橙色粘性砂質土

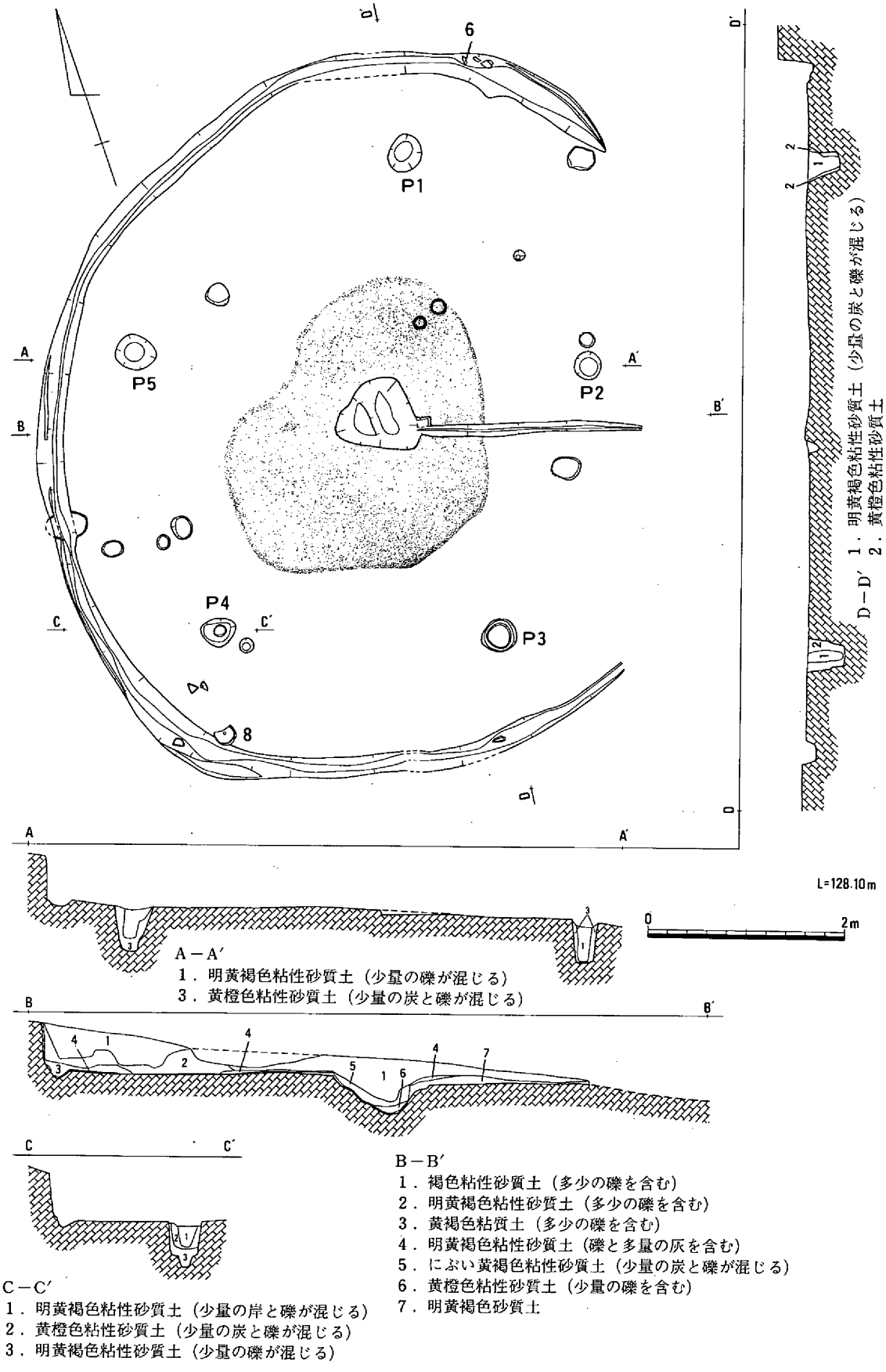


〈土壙－3・6〉　1．褐色粘性砂質土
　　2．明褐色粘性砂質土
　　3．明赤褐色粘性砂質土
　　4．明赤褐色粘性砂質土（やや濃い）
　　5．明黄褐色粘性砂質土
　　6．明褐色粘性砂質土
　　7．明褐色粘性砂質土（6よりややうすい）
　　8．明赤褐色砂質土

第139図　竪穴住居45内土壙（1/30）



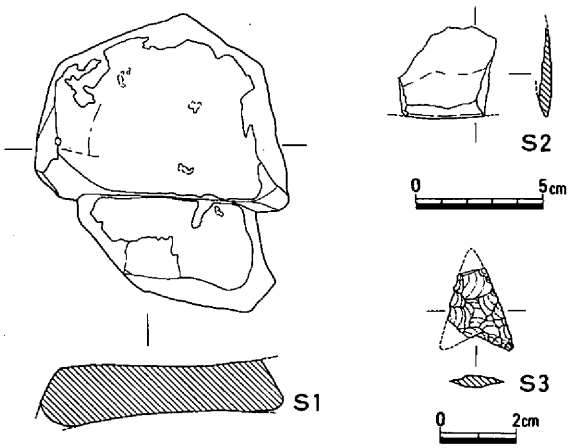
第140図　竪穴住居45出土遺物

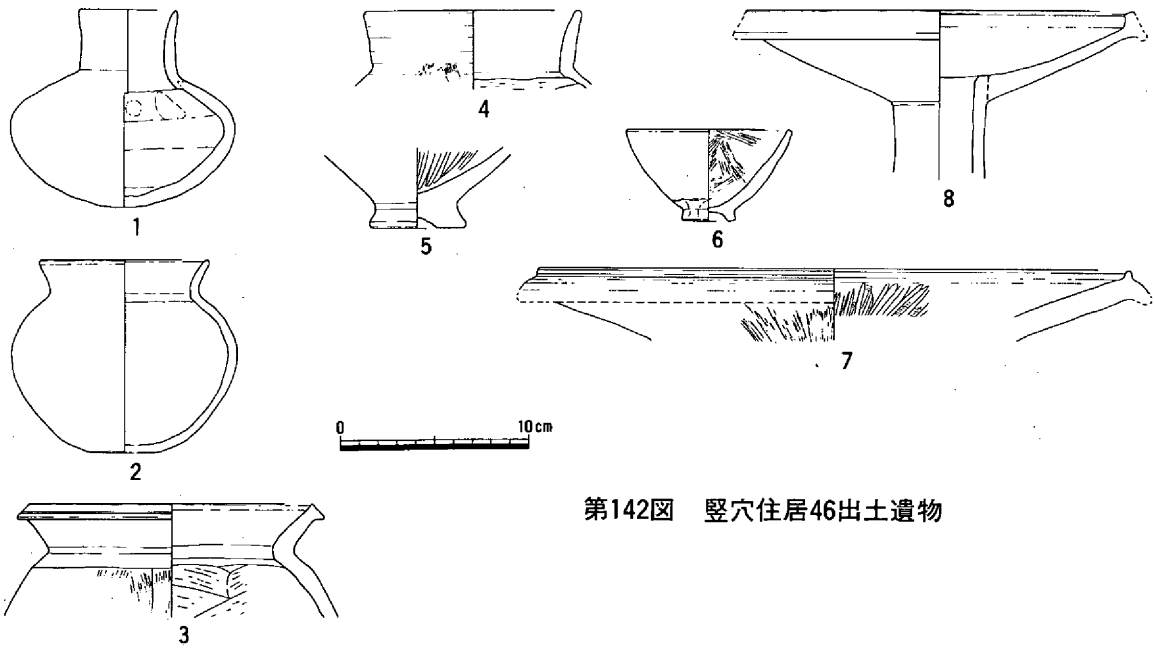


第141図　竪穴住居46（1/60）

高16.2cmを計り、杯部内面は縦のヘラミガキである。10は口径19.8cm、器高11.8cmで、内外面には櫛状工具によるハケメが施される。17の台付鉢は口径15.7cm、器高9.6cmを計る。

図化した土器は、出土位置が異なるものの形状の特徴には変化が少ないといえよう。壷は素縁の直口壷、甕は口径が胴部に対して大きく開くもの、高杯は椀形の杯部を持ち、台付鉢も多く見られる。





第142図　竪穴住居46出土遺物

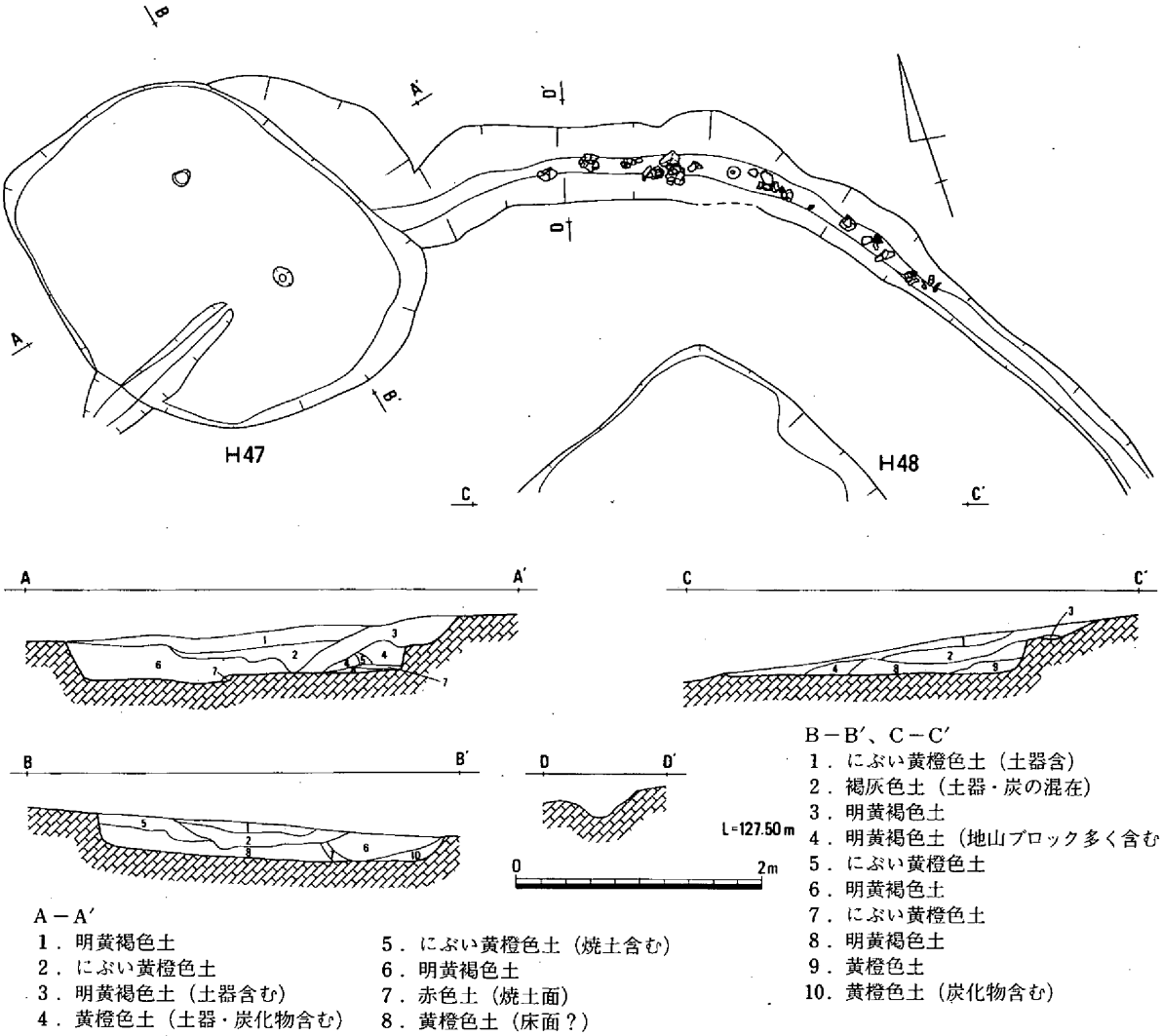
石器はいずれも砥石で、1・2共に南西部の壁体溝から出土したものである。

この住居の時期は、出土した土器から弥生時代後期中葉であるといえる。

竪穴住居46（第141・142図）

調査区東側の谷部に面して位置し、南北7.2m、東西5.2m以上を測るだ円形の竪穴住居である。深さは検出面から最大0.5mで、柱穴は5本が確認できる。壁体溝は段状になる部分もあるが、土層の観察から建て替えはないものと思われる。中央穴の周囲には炭層が広がり、そこから住居の外へ続くと思われる溝を1条検出した。

遺物は土器が壁体溝上や床面上、中央穴から出土している。その他は埋土中からである。5は中央穴から出土した台付鉢である。内面は縦方向のヘラミガキが見られる。6は北側の壁体溝内から出土した。内面はハケメが施され、煤が付着している。8はpit 4南の床面上から出土した器台と考えられるものである。内面には煤が付着している。1・2・3・4・7に関しては住居内に存在する柱穴などから出土したものであるが、当住居から出土したとは断定できない。石器はS1が砥石、S2は石



第143図　竪穴住居47(左)・48(右)（1/60）

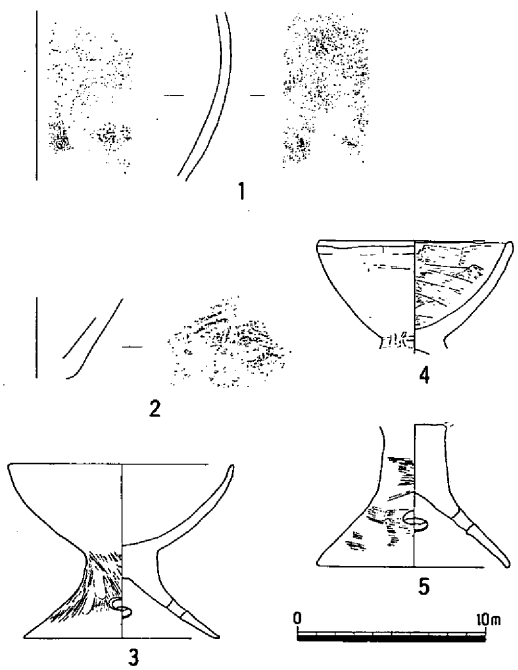
包丁である。これらからこの住居の時期は弥生時代後期中葉であると考えられる。

竪穴住居47・48と外周溝（第143・144図）

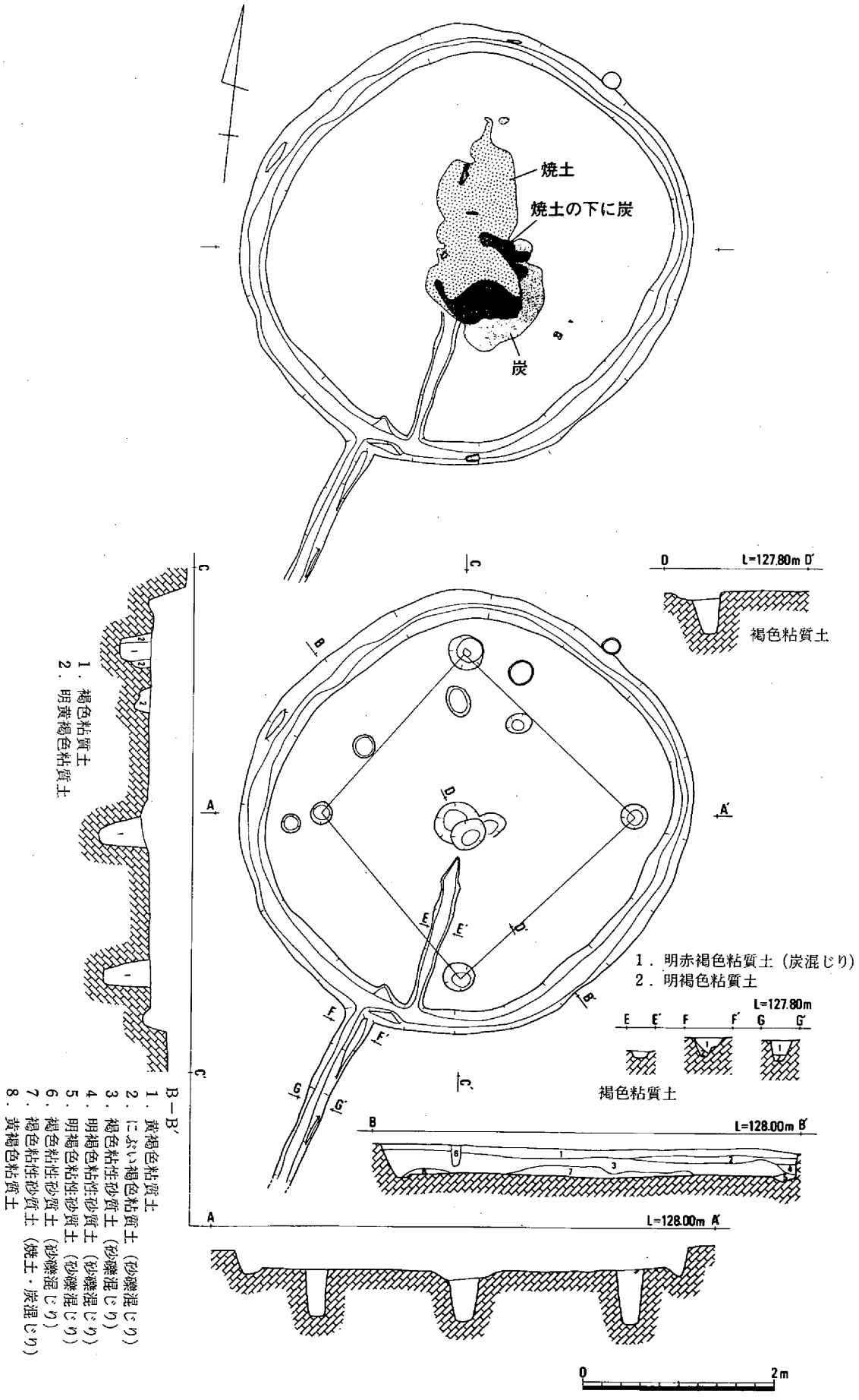
竪穴住居47・48と外周溝は調査区南西端に位置する。

竪穴住居47の平面は南北3.1m、東西2.5mのだ円形を呈する。東側底面に焼土面が確認され、底面に柱穴状の窪みが２ヶ所あったが住居とは断定しがたい。

竪穴住居48は方形の住居であると思われるが、調査区外に出るため全容は不明である。外周溝中からは多くの土器が出土しているが、いずれも底面からはやや浮いた状態であった。１・２は外面タタキメである。



第144図　竪穴住居48外周溝出土遺物



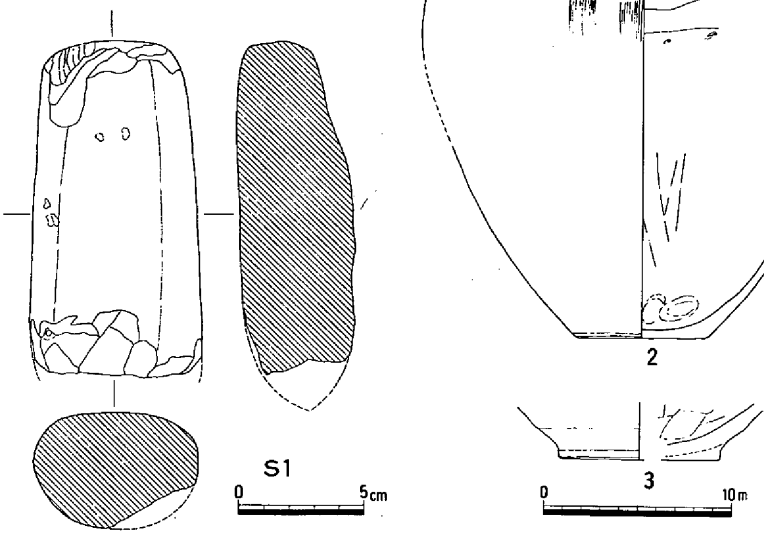
第145図　竪穴住居49（1/60）

4は台付鉢で、内面には細かいハケメが施されている。5は高杯で、外面にヘラミガキが見られる。溝中の土器は弥生時代後期後葉に属するものと考えられる。

竪穴住居49（第145・146図）

調査区南に位置し、直径が4.4～4.6mの隅丸に近い円形の住居である。中央穴を中心にして南北方向に焼土と炭の広がりを検出した。柱穴は4本で、壁体溝から中央穴へ向かう溝と壁体溝から住居の外へ下る排水溝が確認されている。

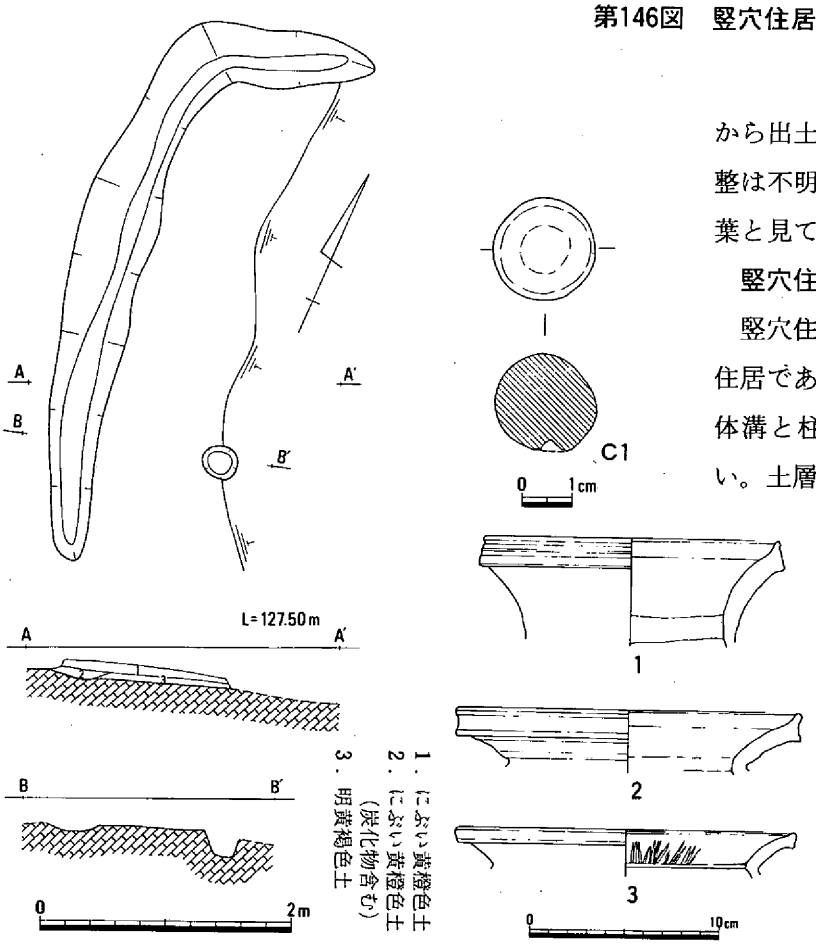
出土した遺物は少ない。S1は石斧で先端と裏面が剝離している。3は埋土中から出土した甕の底部で、磨滅のため調整は不明である。時期は弥生時代後期中葉と見てよいだろう。



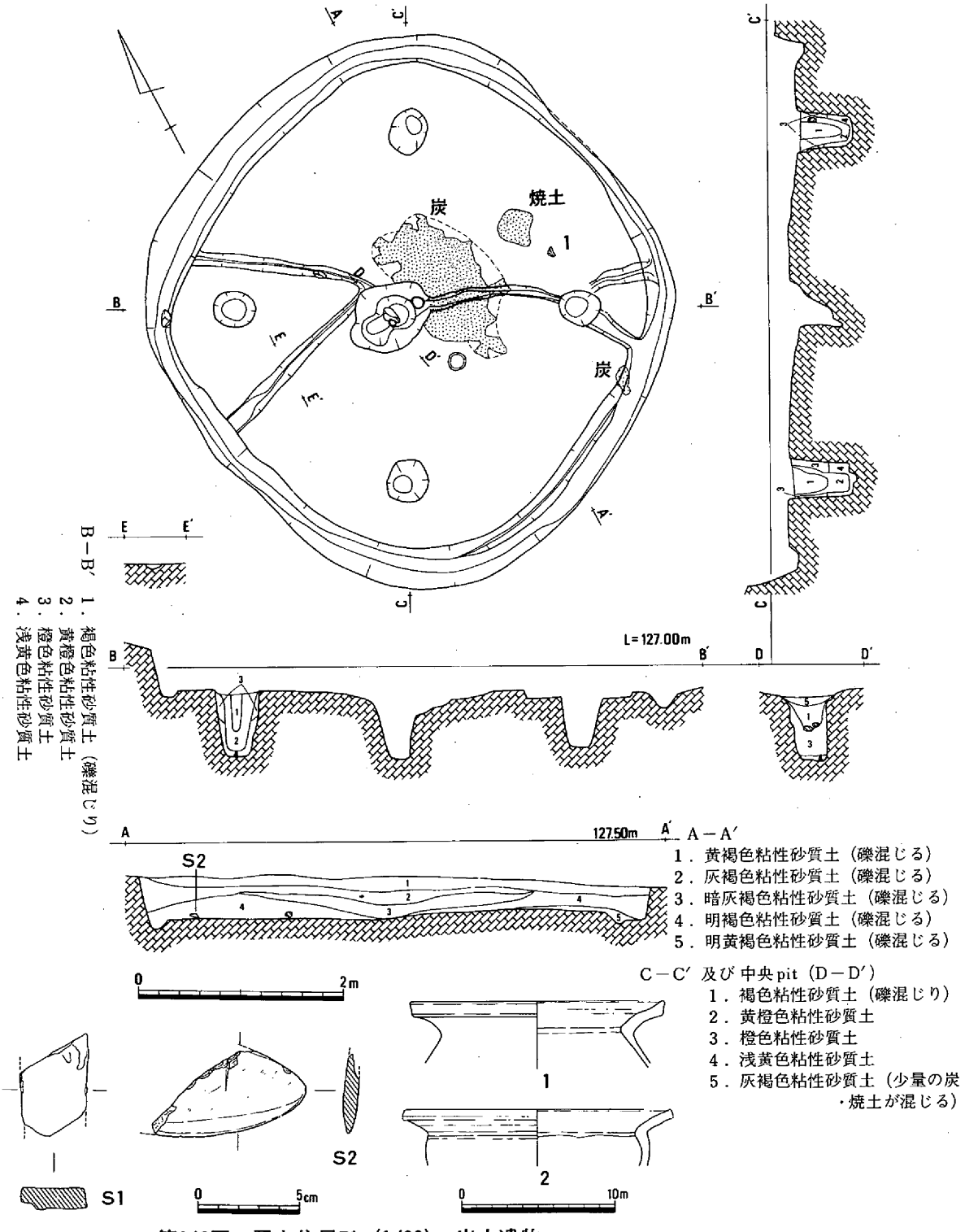
第146図　竪穴住居49出土遺物

竪穴住居50（第147図）

竪穴住居46と51の間で検出した方形の住居である。検出面でわずかに山側の壁体溝と柱穴1本が残っていたにすぎない。土層の1層は住居の埋土、2層は壁体溝の埋土、3層は床面である。遺物はいずれも埋土中から出土した。1は口縁端面に擬凹線の残る壺の口縁部で、口径15.4cmを計る。2も口径18cmを計る壺の口縁部である。3は甕で、内面にヨコナデの後縦のヘラミガキを施す。時期は弥生時代後期中葉～後葉



第147図　竪穴住居50（1/60）・出土遺物

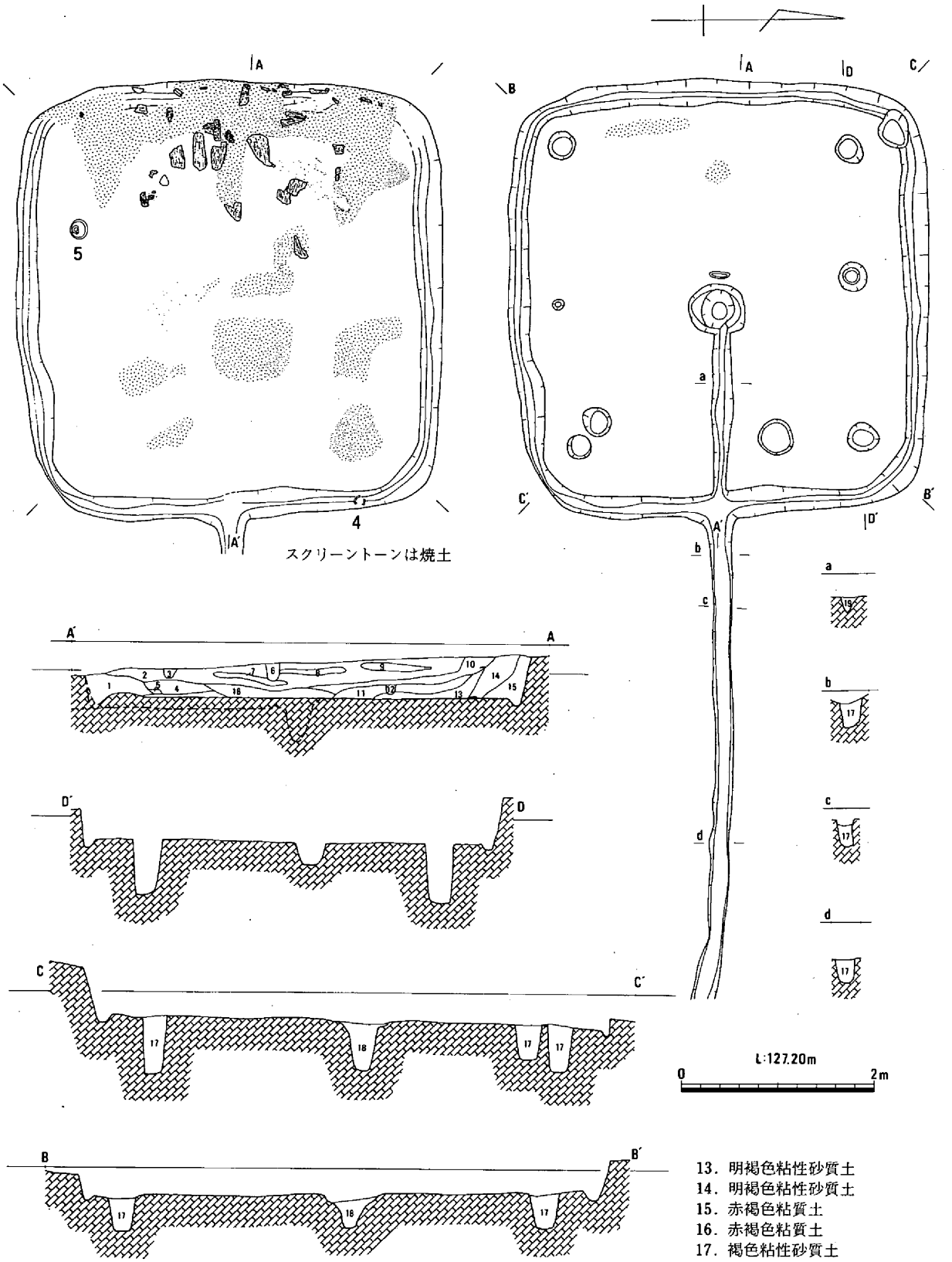


B－B′
1．褐色粘性砂質土（礫混じり）
2．黄橙色粘性砂質土
3．橙色粘性砂質土
4．浅黄色粘性砂質土

A－A′
1．黄褐色粘性砂質土（礫混じる）
2．灰褐色粘性砂質土（礫混じる）
3．暗灰褐色粘性砂質土（礫混じる）
4．明褐色粘性砂質土（礫混じる）
5．明黄褐色粘性砂質土（礫混じる）

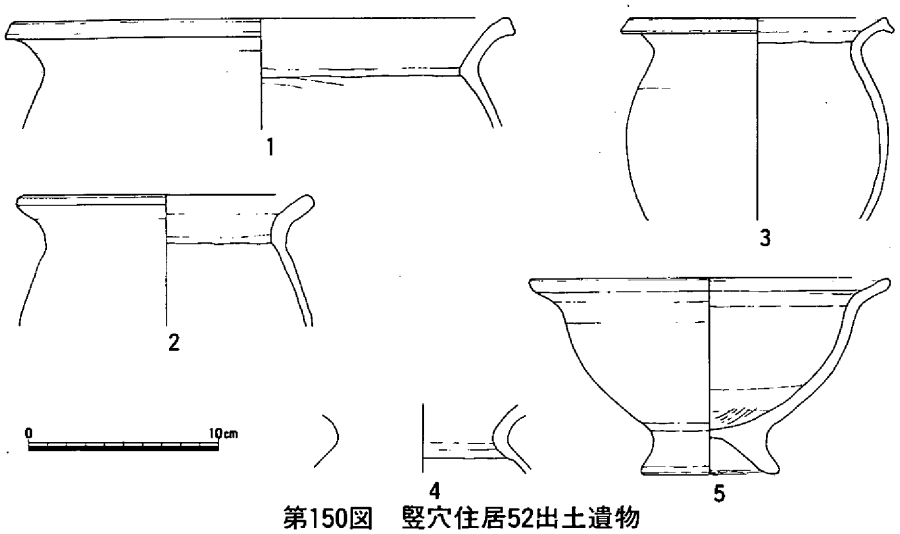
C－C′ 及び中央pit（D－D′）
1．褐色粘性砂質土（礫混じり）
2．黄橙色粘性砂質土
3．橙色粘性砂質土
4．浅黄色粘性砂質土
5．灰褐色粘性砂質土（少量の炭・焼土が混じる）

第148図　竪穴住居51（1/60）・出土遺物



1．明褐色粘性砂質土（砂礫混じり）
2．明褐色粘性砂質土（砂礫混じり）
3．褐色粘性砂質土
4．オリーブ褐色粘質土
5．赤褐色粘質土
6．褐色粘性砂質土
7．赤褐色粘質土
8．暗赤褐色粘質土
9．褐色粘質土（焼土混じり）
10．明褐色粘性砂質土（炭混じり）
11．明褐色粘性砂質土
12．黄褐色粘質土
13．明褐色粘性砂質土
14．明褐色粘性砂質土
15．赤褐色粘質土
16．赤褐色粘質土
17．褐色粘性砂質土
18．褐色粘性砂質土（炭混じり）
19．明褐色粘性砂質土

第149図　竪穴住居52（1/60）



第150図　竪穴住居52出土遺物

であろう。

竪穴住居51（第148図）

調査区南部、竪穴住居52・53の北で検出された南北4.9m、東西4.7mを測る隅丸方形の住居である。埋土は1から3層までの部分と4層以下に分かれ、3層は平面では窪みに溜まった部分であると思われる。柱穴は4本で、中央穴の東に炭の広がりや焼土の範囲が存在した。住居内部に見られる溝は床面上を流れる部分に対して壁体溝と中央穴に接する側が緩やかに下がっていて、中央穴あるいは壁体溝に向かってどちらか一方へ流れている様子ではなかった。

遺物は土器と石器で、S1は砥石、S2の石包丁は床面から出土した（断面図上で出土位置を図示）。1は床面上から出土した甕の口縁部で口径16.4cmを計る。全体に風化が著しいが、内面に煤の付着がみられる。2は埋土上層から出土した甕で、調整は風化のため不明である。時期は土器から弥生時代後期中葉であろう。

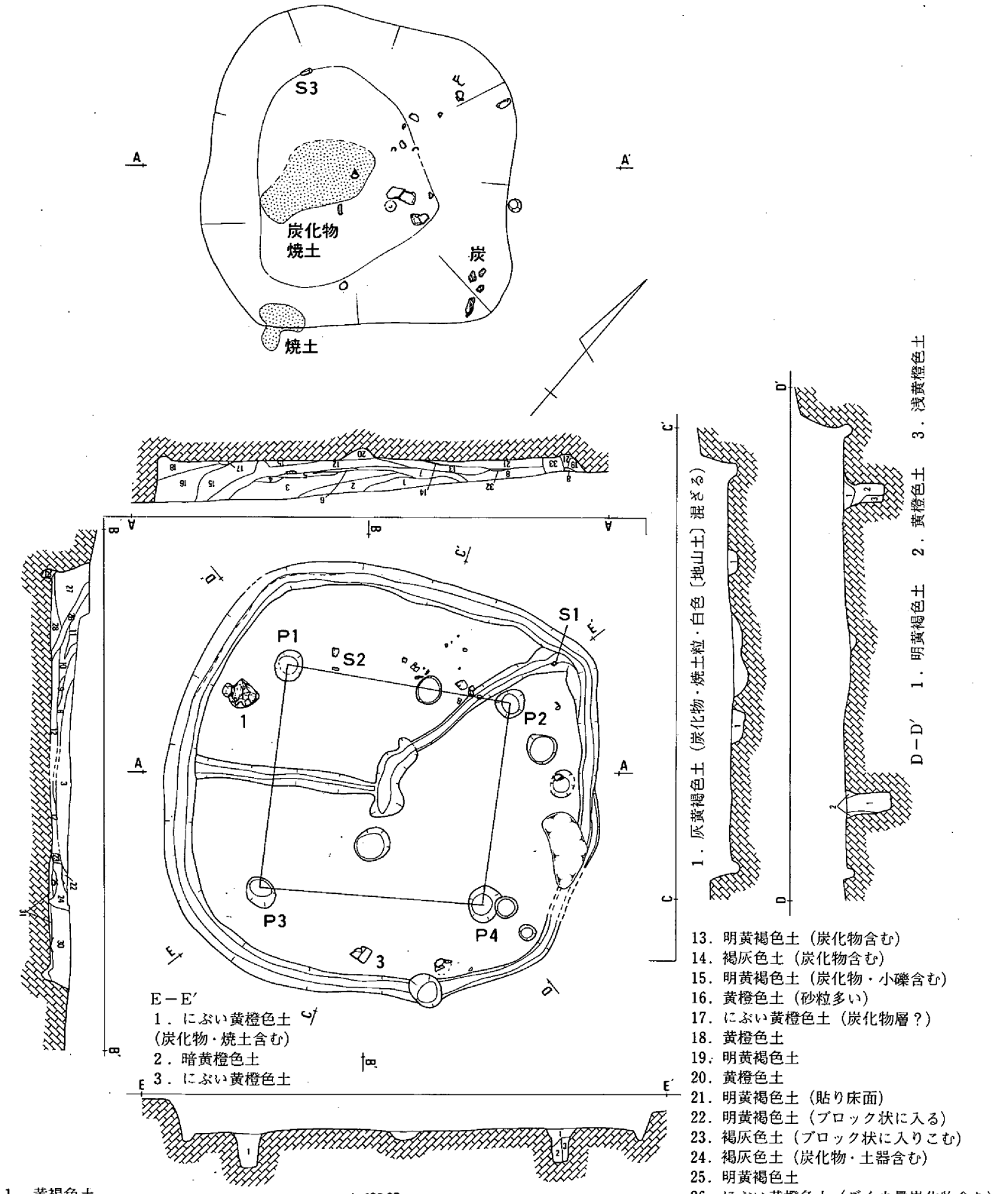
竪穴住居52（第149・150図）

調査区南端に位置し、検出面で南北4.3m、東西4.5mの方形の住居である。深さは検出面から0.4mを測る。

この住居では焼土・炭が撹乱されずに検出できた。まず検出面から少し掘り下げた海抜127mあたりを中心として焼土・炭が多く見られた（住居平面図の左側、焼土・炭検出状況）。特に西壁に接する部分は炭化材と焼土が折り重なるような状態であった（断面図10・11・13～15層）。西壁部分以外では焼土は層状に分布していた（5・7～9層）。

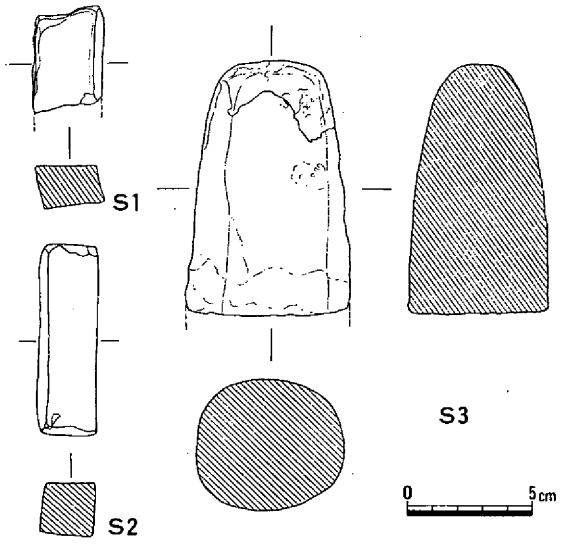
住居内には中央穴から壁体溝へ緩やかに傾く溝1条が存在し、その延長上に住居外へ向けて住居そのものよりはるかに長い排水溝が見られる。この住居は竪穴住居53よりも新しいと考えられるが、調査時には住居53を先に掘り下げを行ったこともあり、住居53上に存在したであろう住居52の排水溝は検出できなかった。

出土遺物は土器が少量存在した。1は埋土中から出土した甕か鉢で、調整は剝落があり不明である。2は口径14.9cmを計る甕で、口縁端面を丸める形態のものである。調整はやはり剝落していて不明である。3も埋土中から出土の甕で口径13.3cmを計る。4は壁体溝内の東部分から出土したもので、外面にヨコナデが残る。5は南東の床面に近いところから出土した台付鉢で、口径18.6cm、底径



1．黄褐色土
2．褐色土
3．明黄褐色土（炭化物・土器・地山ブロック混）
4．灰黄褐色土（粗砂粒多い）
5．黒褐色土（炭化物層・焼土塊含む）
6．〃　（　〃　）
7．黒褐色土（炭化物・焼土少ないが含む）
8．明黄褐色土（炭化物少量含む）
9．黄橙色土（地山土がブロック状に入る）
10．にぶい黄橙色土
11．明黄褐色土
12．黒褐色土（かなりの炭化物を含む）
13．明黄褐色土（炭化物含む）
14．褐灰色土（炭化物含む）
15．明黄褐色土（炭化物・小礫含む）
16．黄橙色土（砂粒多い）
17．にぶい黄橙色土（炭化物層？）
18．黄橙色土
19．明黄褐色土
20．黄橙色土
21．明黄褐色土（貼り床面）
22．明黄褐色土（ブロック状に入る）
23．褐灰色土（ブロック状に入りこむ）
24．褐灰色土（炭化物・土器含む）
25．明黄褐色土
26．にぶい黄橙色土（ごく少量炭化物含む）
27．黄橙色土（砂粒多い）
28．浅黄橙色土
29．明黄褐色土
30．黄橙色土（砂粒多い）
31．明黄褐色土
32．赤色土（焼土面）
33．明黄褐色土

第151図　竪穴住居53（1/60）

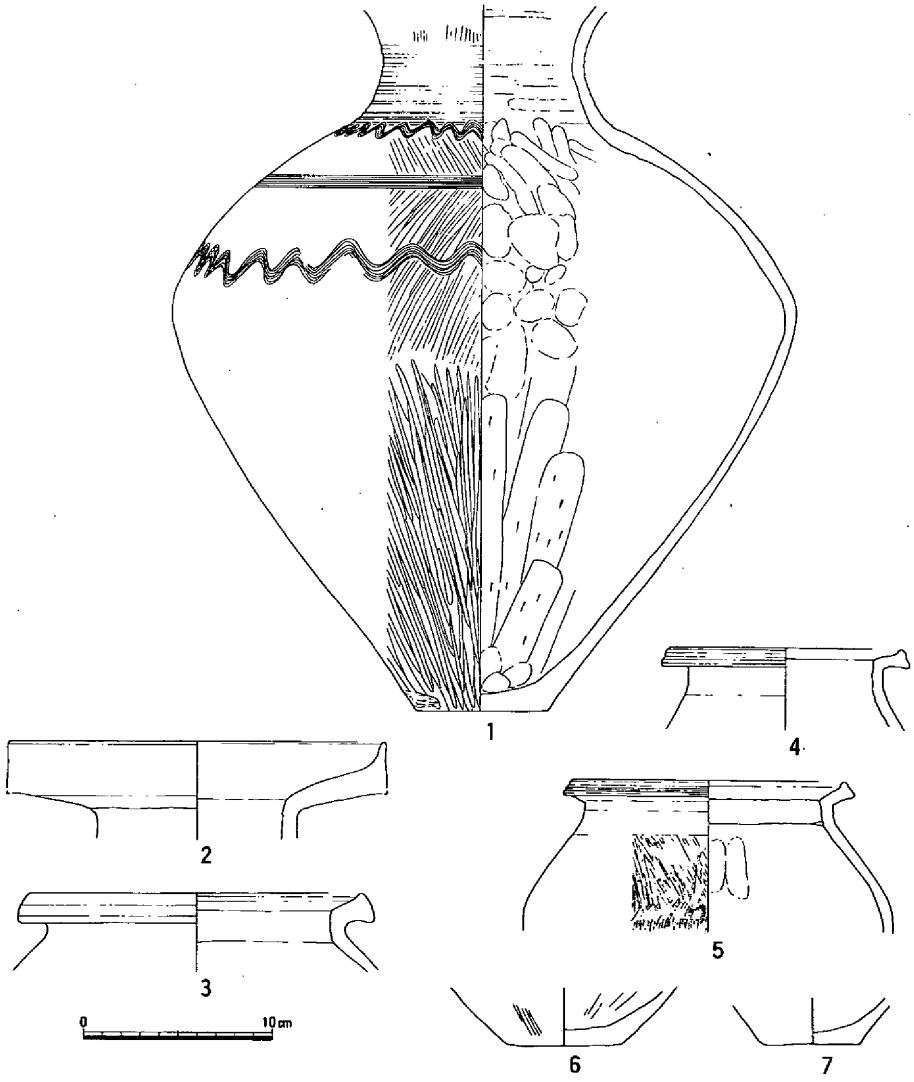


7㎝を計る。全体に風化が著しい。この住居の所属する時期は、出土した土器から弥生時代後期中葉と考えられる。

竪穴住居53（第151・152図）

調査区南東端に位置する一辺4.5ｍの隅丸方形の住居である。深さは検出面から最大で0.4ｍを測る。

この住居では埋土の堆積状況が注目される。埋土は大きくＡ—Ａ'ライン１～12層、Ｂ—Ｂ'ライン22～25層の上層と12～20層、26～32層の下層に分けられる。上層は褐色から黒褐色の層で、これを除去した状態で炭化物・焼土の広がりが見られた（平面図

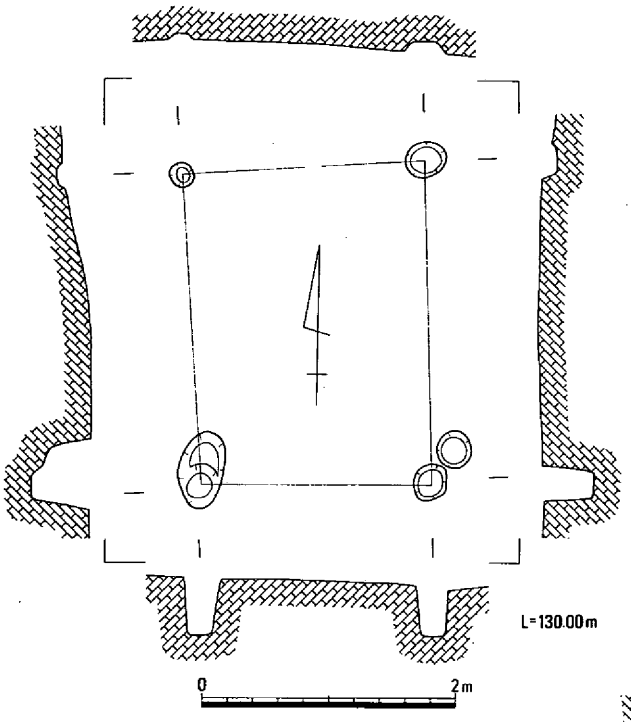


第152図　竪穴住居53出土遺物

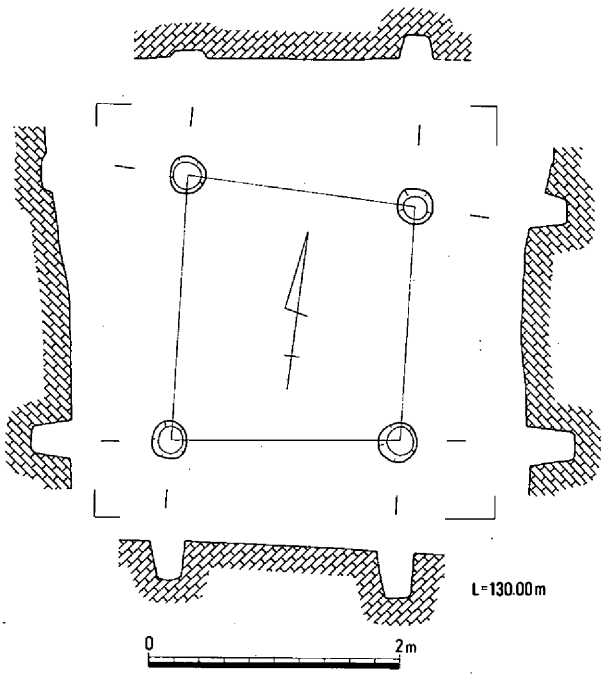
上部)。下層は黄褐色系の土で地山との区別が困難であった。

埋土下層を除去した状態で壁体溝、土器を検出した。柱穴・住居内溝は貼り床面を除去した後に検出している。柱穴は４本で、いずれも隅丸の隅近くに配されている。２条の住居内溝はいずれも壁体溝から中央穴に向かって流れる。また、土層や平面形からこの住居には建て替えはないものと思われる。

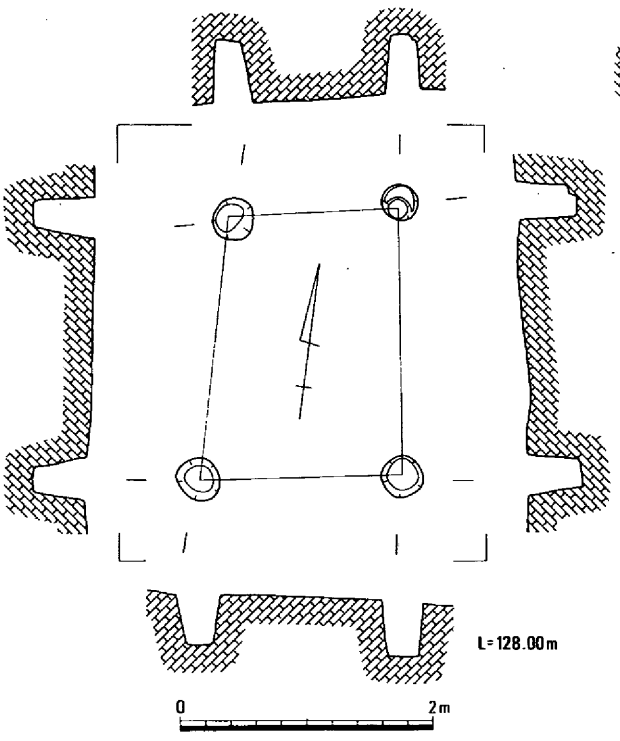
出土遺物はＳ１・Ｓ２が砥石で、床面あるいはその下から出土した。Ｓ３は上層埋土除去後に検出した石斧である。１から５、７は床面上から出土した土器である。１は床面上



第153図　建物12（1/60）

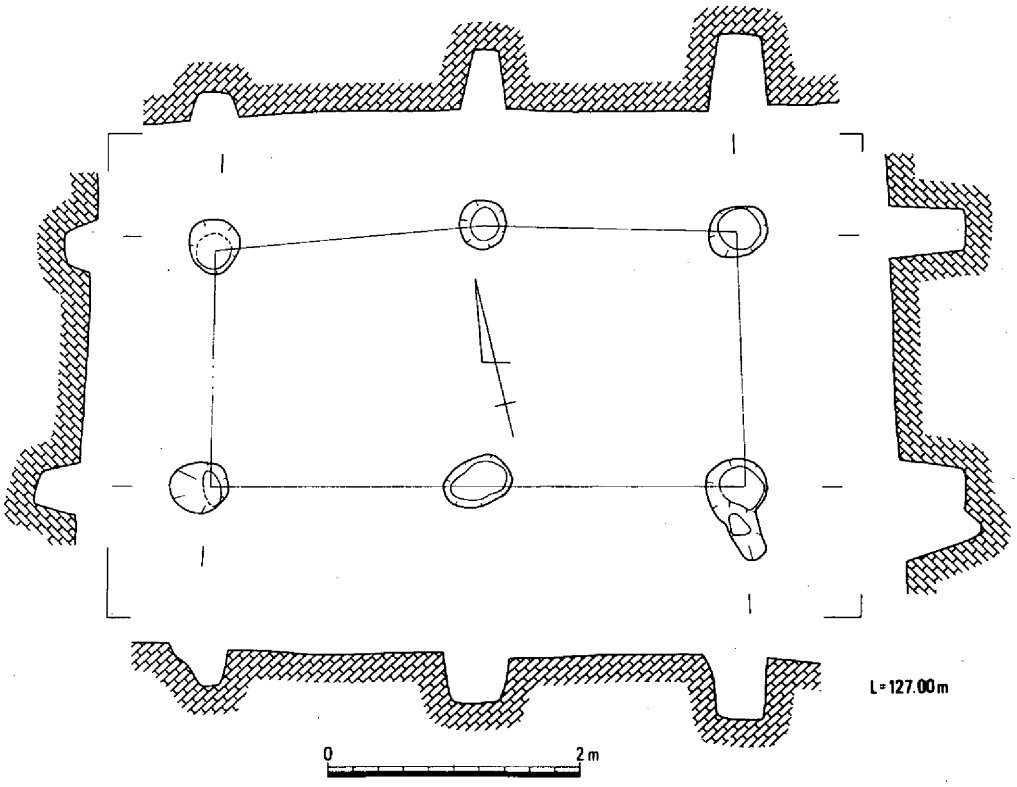


第154図　建物13（1/60）

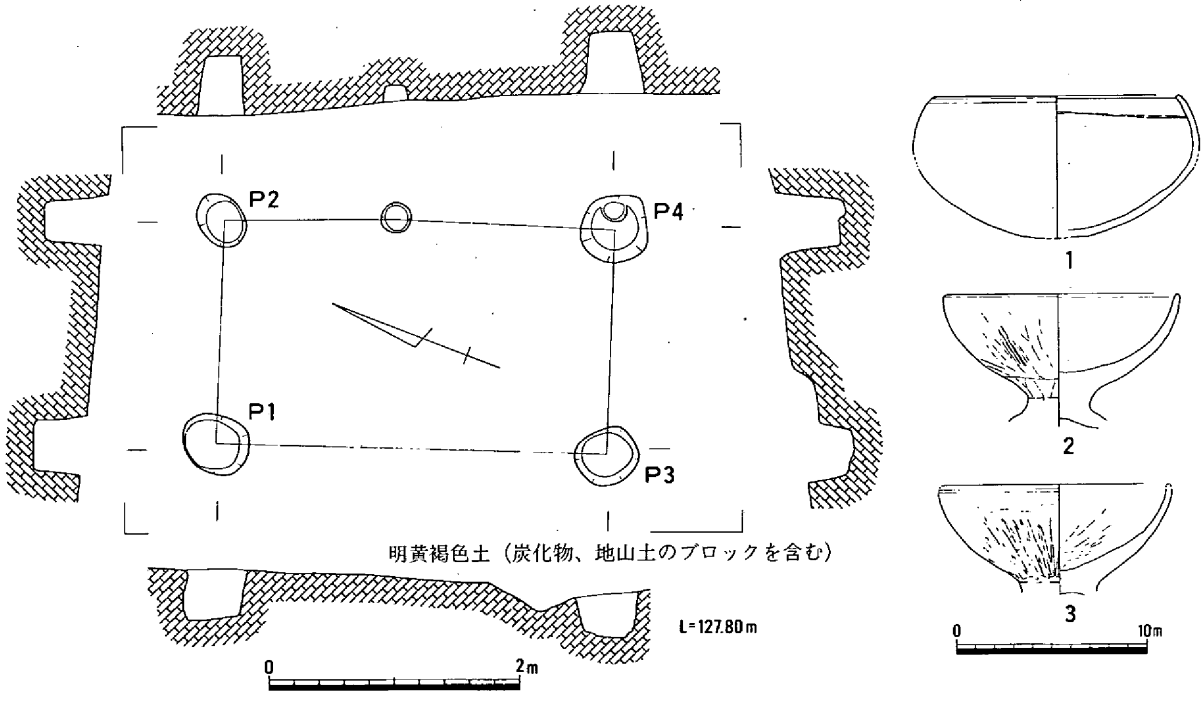


第155図　建物15（1/60）

に横倒しの状態で見つかった壷である。口縁端部を欠く他はほぼ完形で、胴部最大径32.9cm、底径6.9cmを計る。外面の調整はハケメの上から縦のヘラミガキ、内面は頸部から胴部までナデが入っている。２は壷と考えられるが全面摩滅しているため調整は不明である。３～７はいずれも甕である。３は口径17.4cm、４は12cm、５は14.2cmを計る。６の



第156図　建物14（1/60）

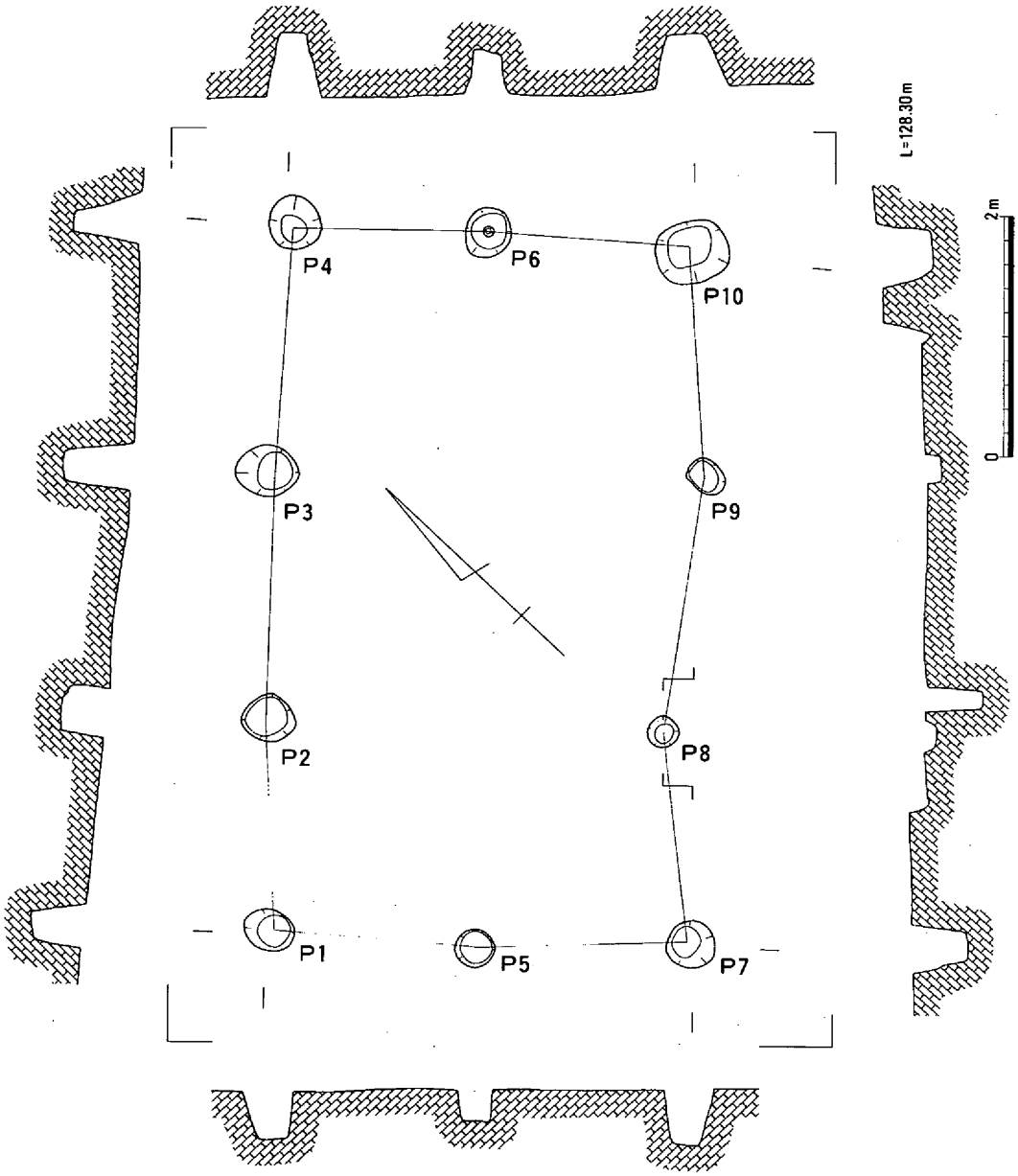


第157図　建物16（1/60）・出土遺物

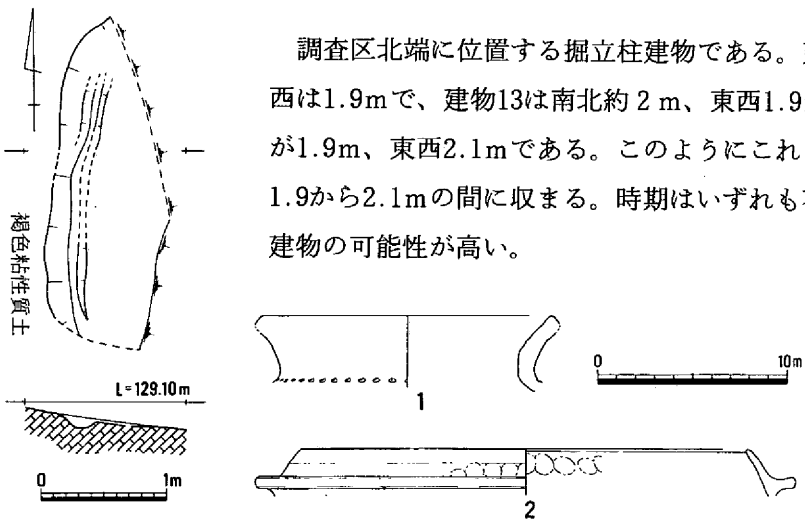
底径は6cm、7は5cmである。この住居の時期は土器から弥生時代中期中葉であると考えられる。

2．建　　物

建物12・13・14（第152・153・155図）



第158図　建物17（1/60）



第159図　段状遺構５（1/60）・出土遺物

調査区北端に位置する掘立柱建物である。建物12は南北の柱間が2.5ｍ、東西は1.9ｍで、建物13は南北約２ｍ、東西1.9ｍである。建物14では南北の柱間が1.9m、東西2.1ｍである。このようにこれら３棟の建物は柱穴の間の距離が1.9から2.1ｍの間に収まる。時期はいずれも不明であるが、これらは同時期の建物の可能性が高い。

建物15（第155図）

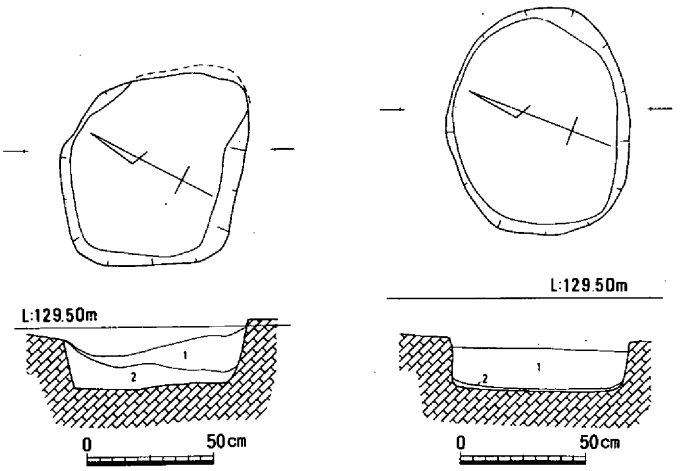
竪穴住居49と51の間の比較的高い部分に立地する１×１間の建物である。住居が削平された残りである可能性も考えられる。

建物16（第157図）

竪穴住居45の南西に位置する変則的な１×２間の建物である。北側２本の柱穴から遺物が出土している。１・２・３はいずれも北西の柱穴からの出土である。１の胎土は水漉粘土、２・３も精良な粘土を使用する。時期は弥生時代後期後葉であると考えられる。

建物17（第158図）

竪穴住居49と重複する形で検出された２×３軒の建物である。検出時当初は建物と認識できなかったため住居49との新旧は確かめられなかった。遺物は土器片が北側の列の柱穴から出土したが、実測できるものはない。時期は弥生時代後期であると考えられる。



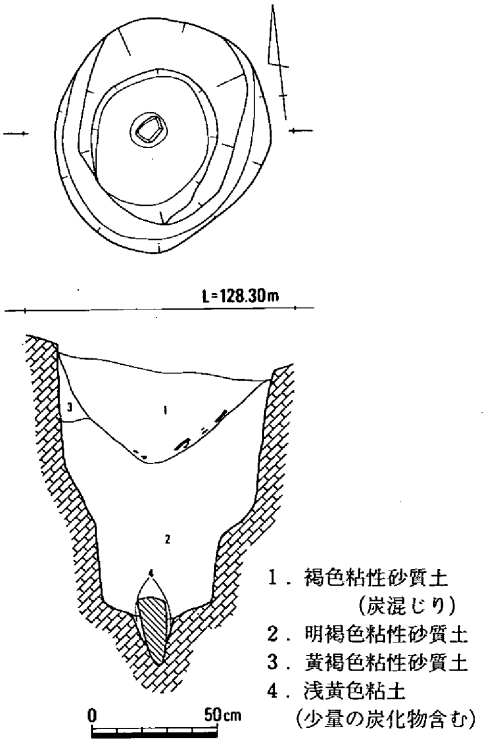
1．明褐色粘質土（砂礫混じり）
2．橙色粘質土（砂礫混じり）

第160図　土壙３（左）・４（右）（1/30）

３．段状遺構

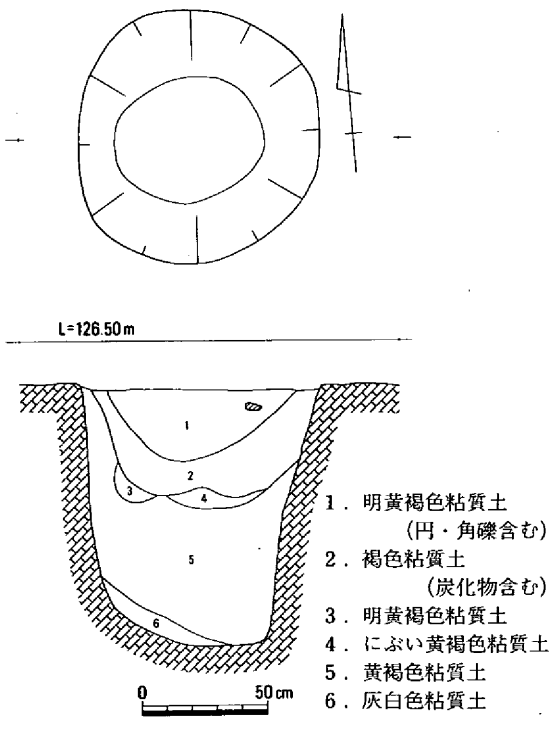
段状遺構５（第159図）

調査区北東で検出された山側に溝状の掘り方を持つ段状遺構である。残りは悪く、規模は不明である。遺物は、１が弥生土器で頸部に刺突を巡らし、内外面の調整は不明である。２は中世の土鍋である。周囲の状況から見て、この遺構の時期は弥生時代後期前葉の可能性が高い。ただし周辺には中世の遺構も多く存在することから、中世の



1．褐色粘性砂質土
（炭混じり）
2．明褐色粘性砂質土
3．黄褐色粘性砂質土
4．浅黄色粘土
（少量の炭化物含む）

第161図　土壙７（1/30）



1．明黄褐色粘質土
（円・角礫含む）
2．褐色粘質土
（炭化物含む）
3．明黄褐色粘質土
4．にぶい黄褐色粘質土
5．黄褐色粘質土
6．灰白色粘質土

第162図　土壙５（1/30）

遺構である可能性は捨てきれないであろう。

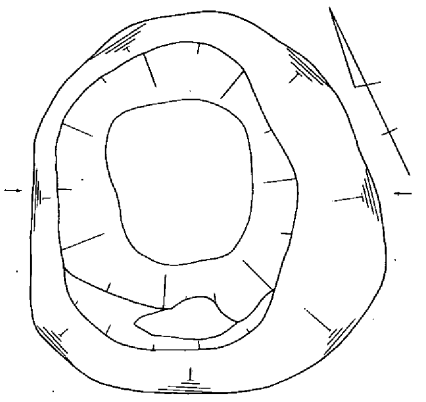
4．土　　壙

土壙３・４（第160図）

２基とも竪穴住居43の西で検出された。土壙３は下層に炭、焼土を含んでいる。時期はいずれも不明である。

土壙５・６・７（第161・163・162図）

土壙５は調査区北東、６は竪穴住居46の西、７は南東端で検出された。土層中では炭化物を含む層も存在するが、全体として地山と類似する色調の埋土を呈する。土壙５では、底面に四角錐状の礫を尖った側を下にして突き刺していた。いずれも遺物は出土していないが、土壙の形状から縄文時代の落とし穴の可能性が高い。

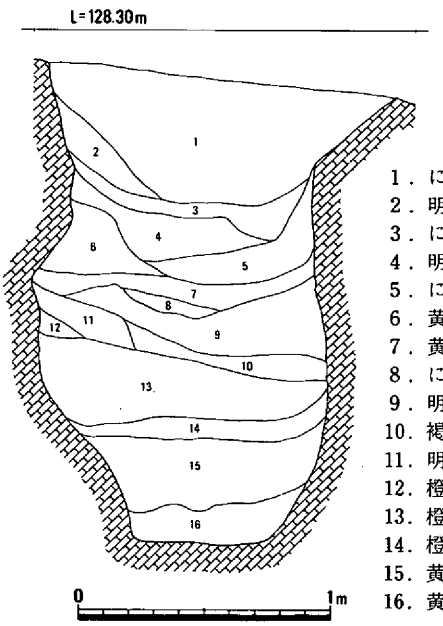


5．土　壙　墓

土壙墓１（第164図）

竪穴住居52と53の間に位置し、掘り方は長さ2.5m、幅0.6mを測る。

遺物の出土状況であるが、北側に須恵器杯身・蓋の組み合わせが２セットと杯身１つが組み合った状態で置かれ、南小口壁に杯蓋１つが張り付いた状態で出土した。紡錘車は北側に先端を向け、土壙墓の主軸に平行に置かれていた。



1．にぶい黄橙色土（炭化物を含む。粗砂多い）
2．明黄褐色土（少量の黄白色土含む）
3．にぶい黄褐色土（少量の黄白色土含む）
4．明黄褐色土
5．にぶい黄橙色土（粘質土）
6．黄橙色土（白・黄白色土多く含む）
7．黄橙色土
8．にぶい黄橙色土（にごった粘質の土）
9．明黄褐色土（地山土多く含む）
10．褐色土（よごれた感じの土）
11．明黄褐色土（多量の白色土含む）
12．橙色土（地山土）
13．橙色土（地山土多く含む）
14．橙色土（炭化物少量含む）
15．黄橙色土（白色土と混在－との互層）
16．黄橙色土

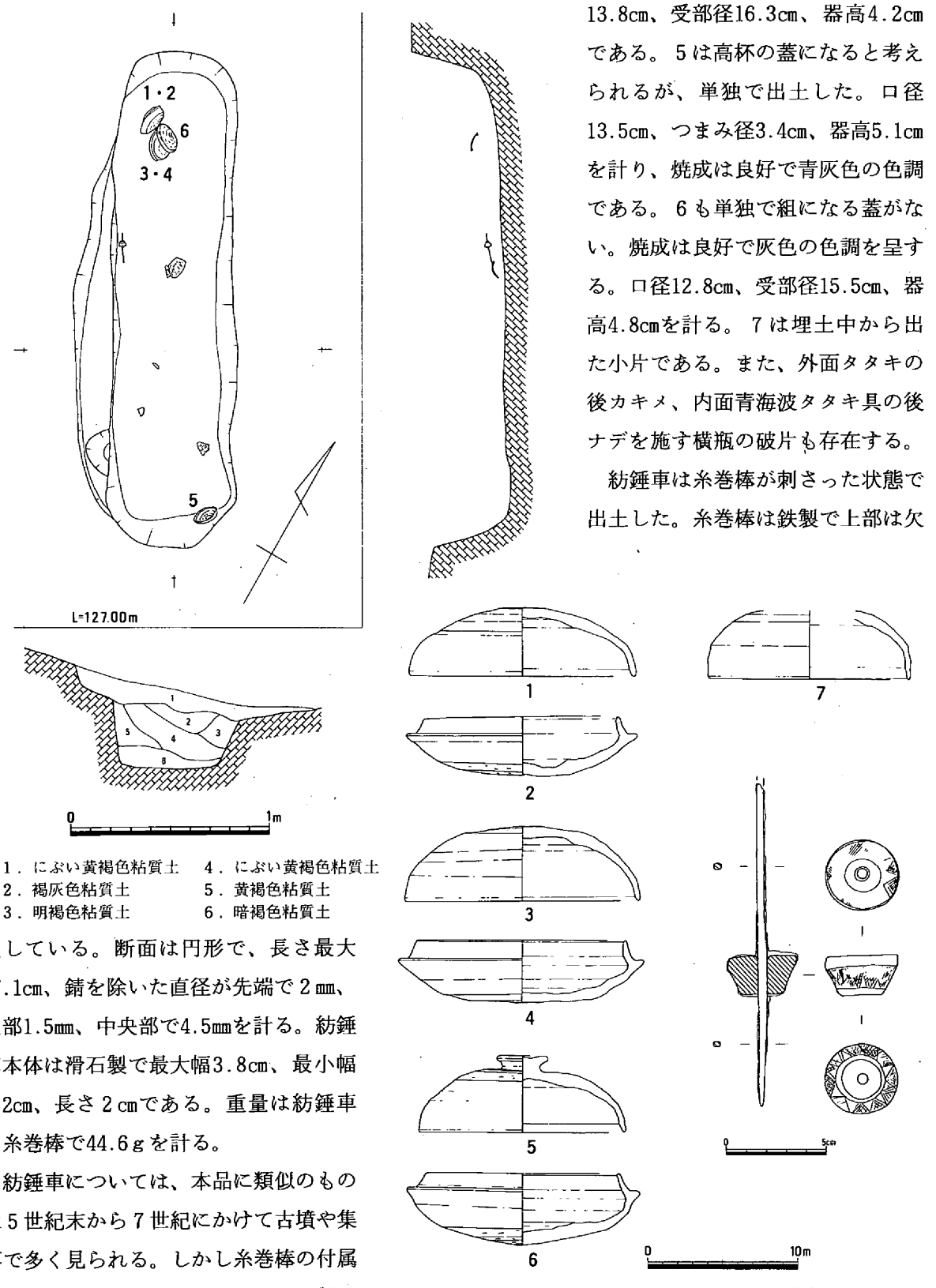
第163図　土壙６（1/30）

埋土は紡錘車の周辺のみは比較的しまりの強いものであったが、そのほかの部分ではしまりが弱く撹乱した様子であった。また埋土中に須恵器横瓶片や蓋片７が見られることから、紡錘車以外の遺物は原位置を保っていない可能性が高い。

1から6はいずれも完形品である。1は口径14.8cm、器高4.6cmを計り、焼成は甘く全体に白い色調を呈する。これとセットになる2も焼成が甘く白っぽい。口径12.8cm、受部径15.3cm、器高4.9cmを計る。3と4もセットで置かれていたもので、1・2と同じく焼成が甘く白い色調である。3は口径15.5cm、器高5cmを計り、4は口径13.8cm、受部径16.3cm、器高4.2cmである。5は高杯の蓋になると考えられるが、単独で出土した。口径13.5cm、つまみ径3.4cm、器高5.1cmを計り、焼成は良好で青灰色の色調である。6も単独で組になる蓋がない。焼成は良好で灰色の色調を呈する。口径12.8cm、受部径15.5cm、器高4.8cmを計る。7は埋土中から出た小片である。また、外面タタキの後カキメ、内面青海波タタキ具の後ナデを施す横瓶の破片も存在する。

紡錘車は糸巻棒が刺さった状態で出土した。糸巻棒は鉄製で上部は欠損している。断面は円形で、長さ最大17.1cm、錆を除いた直径が先端で2㎜、上部1.5㎜、中央部で4.5㎜を計る。紡錘車本体は滑石製で最大幅3.8cm、最小幅2.2cm、長さ2cmである。重量は紡錘車と糸巻棒で44.6gを計る。

紡錘車については、本品に類似のものは5世紀末から7世紀にかけて古墳や集落で多く見られる。しかし糸巻棒の付属するものは珍しく、たとえ祭祀的な製品



1．にぶい黄褐色粘質土　4．にぶい黄褐色粘質土
2．褐灰色粘質土　5．黄褐色粘質土
3．明褐色粘質土　6．暗褐色粘質土

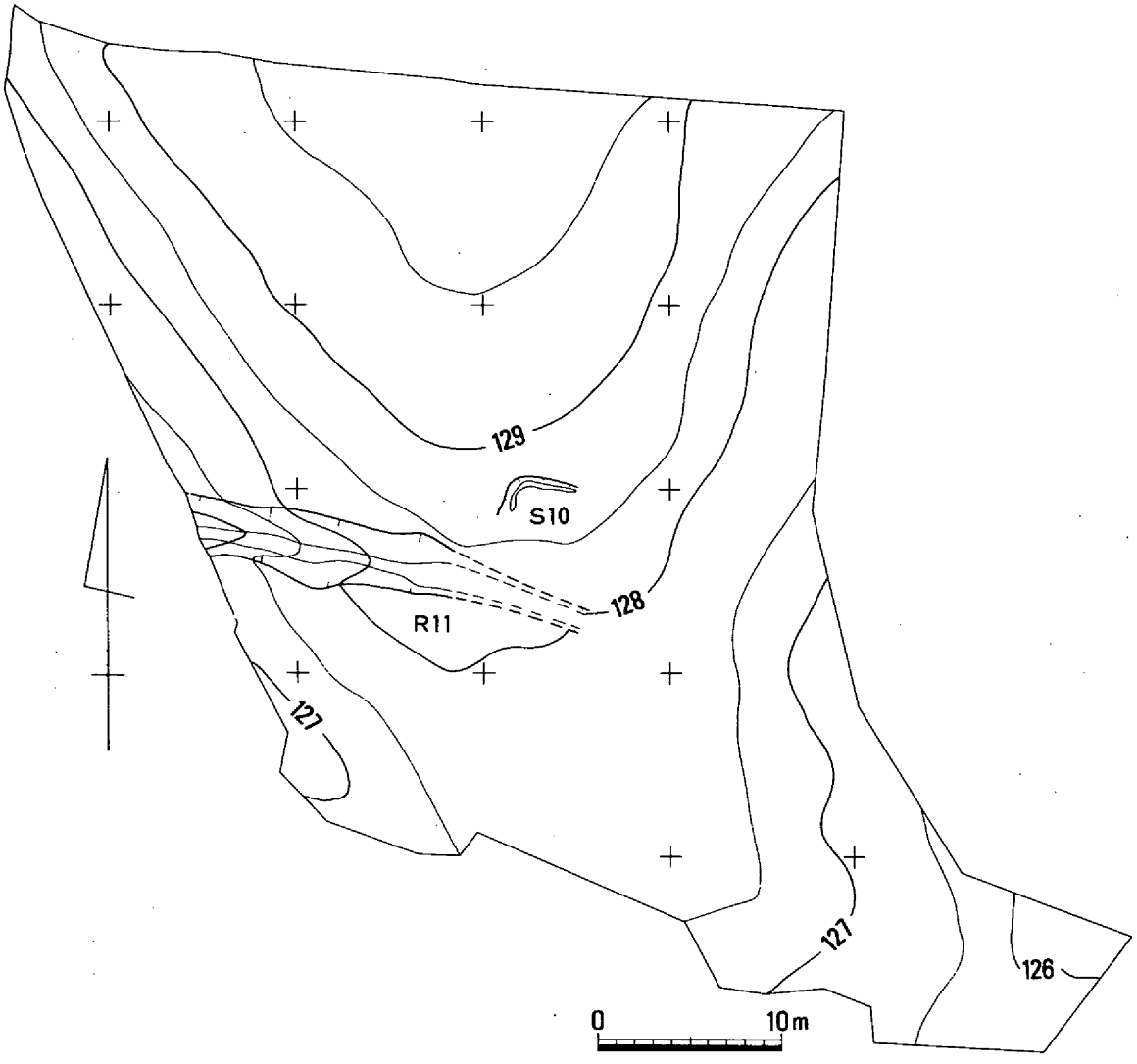
第164図　土壙墓1（1/30）・出土遺物

であるとしても実際の使用状況を示すものとして注目すべきであろう。

この土壙墓の時期は、遺物から６世紀中頃であるといえよう。

６．中世の遺構

調査区中央を東西に横切る道とその北側に段を検出した。建物としてはまとめられなかったが多く

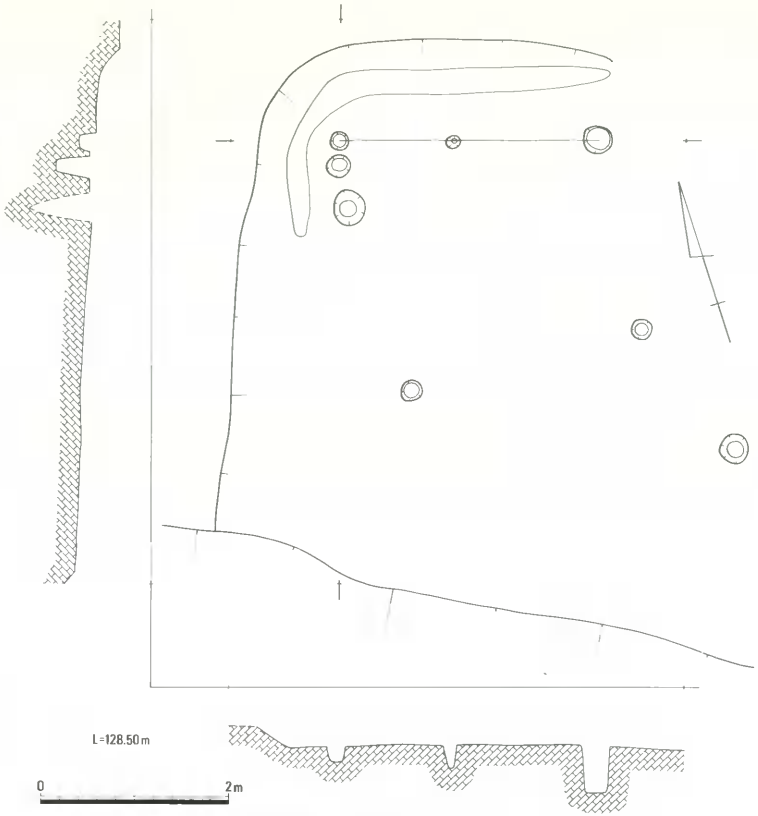


第165図　3区Ａ・Ｂ段状遺構・道配置図（1/400）

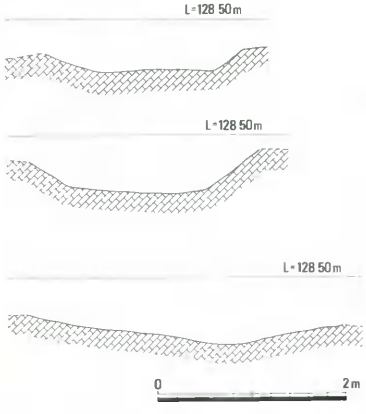
の柱穴も検出している。代表的なものとして、竪穴住居46上に位置した柱穴からは13世紀代の勝間田焼椀・皿や瓦質の土鍋が見られた。

今回調査された道は東から西へ向かい、地山を断面方形状に削りだして作られていた。砂利敷きは存在しない。中国自動車道建設に伴う調査で検出された道は、いずれも尾根に沿って南東から北西へ下り砂利敷きがなされている。時期は同じく平安時代末から鎌倉時代のものと考えられよう。

道に沿って北側に段状遺構が検出された。山側を切って平坦面を作り出しているものである。柱穴をいくつか検出したが、この遺構に伴うものかどうかは不明である。



第166図　段状遺構10（1/60）

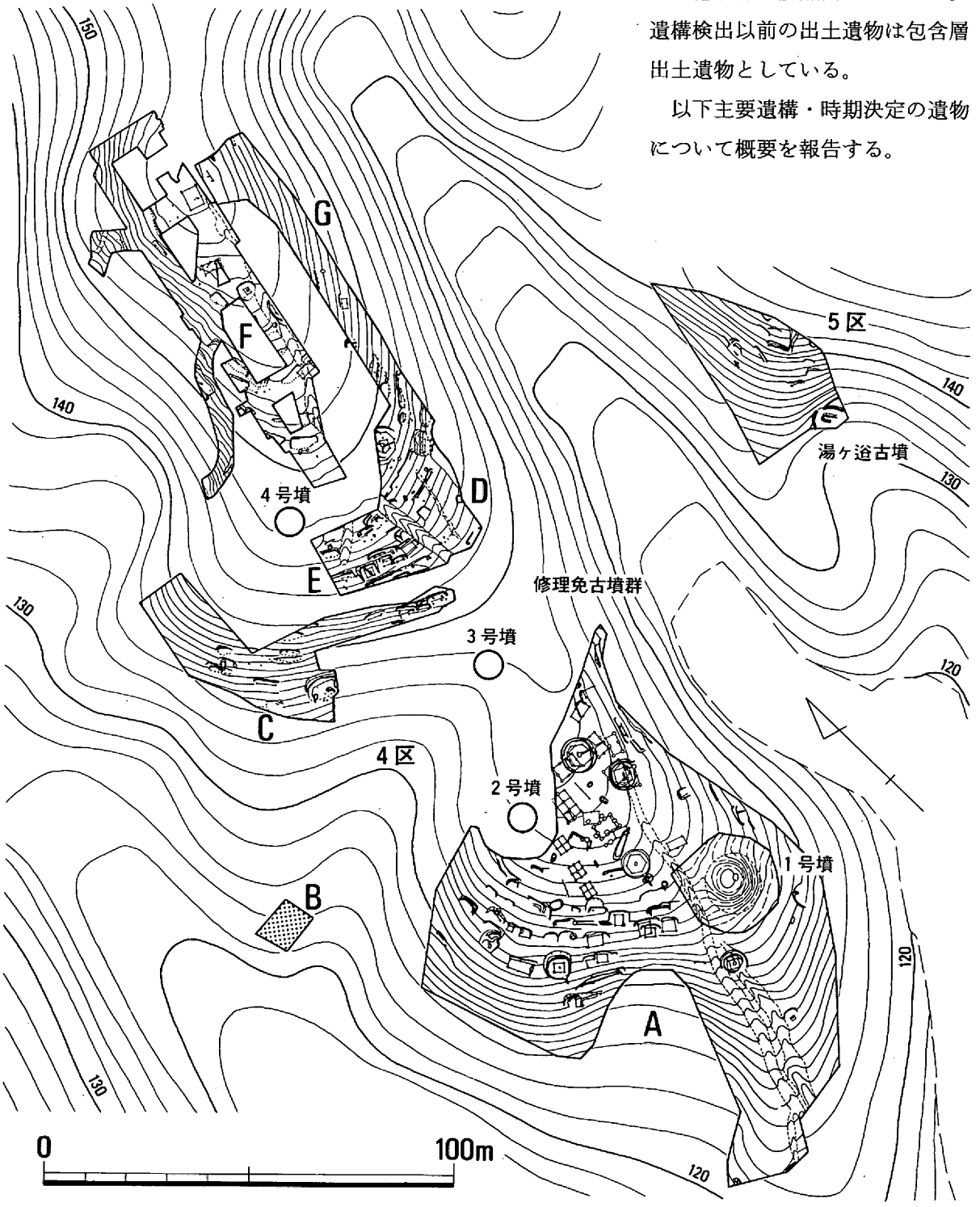


第167図　道11（1/60）

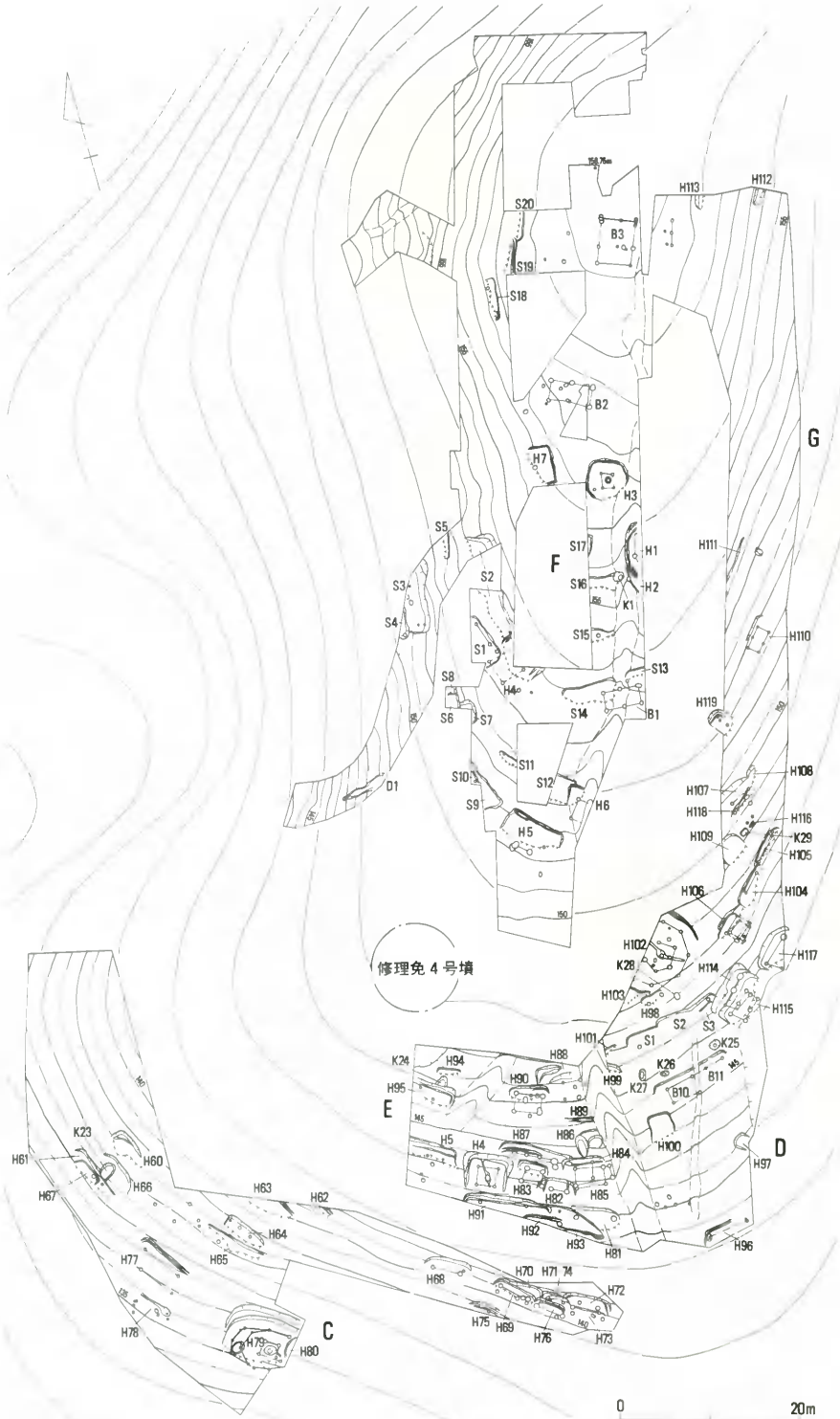
(5)　4区A・C～E・Gの調査

4区の調査は、A～Gの7小区に分割して発掘した。竪穴住居・段状遺構・建物・柵列・土壙・溝・道・土器棺・土壙墓等を検出した。最も多い竪穴住居は119軒に及ぶ。段状遺構としたものは3基ある。建物は19棟まとめている。土壙は30基、溝が4条、柵列2条、土器棺1基、土壙墓1基を数える。4区の出土遺物は、整理箱に35箱である。弥生土器95%、須恵器4%、土師器1%の割合で、その他石器が数点出土している。遺構検出以前の出土遺物は包含層出土遺物としている。

以下主要遺構・時期決定の遺物について概要を報告する。

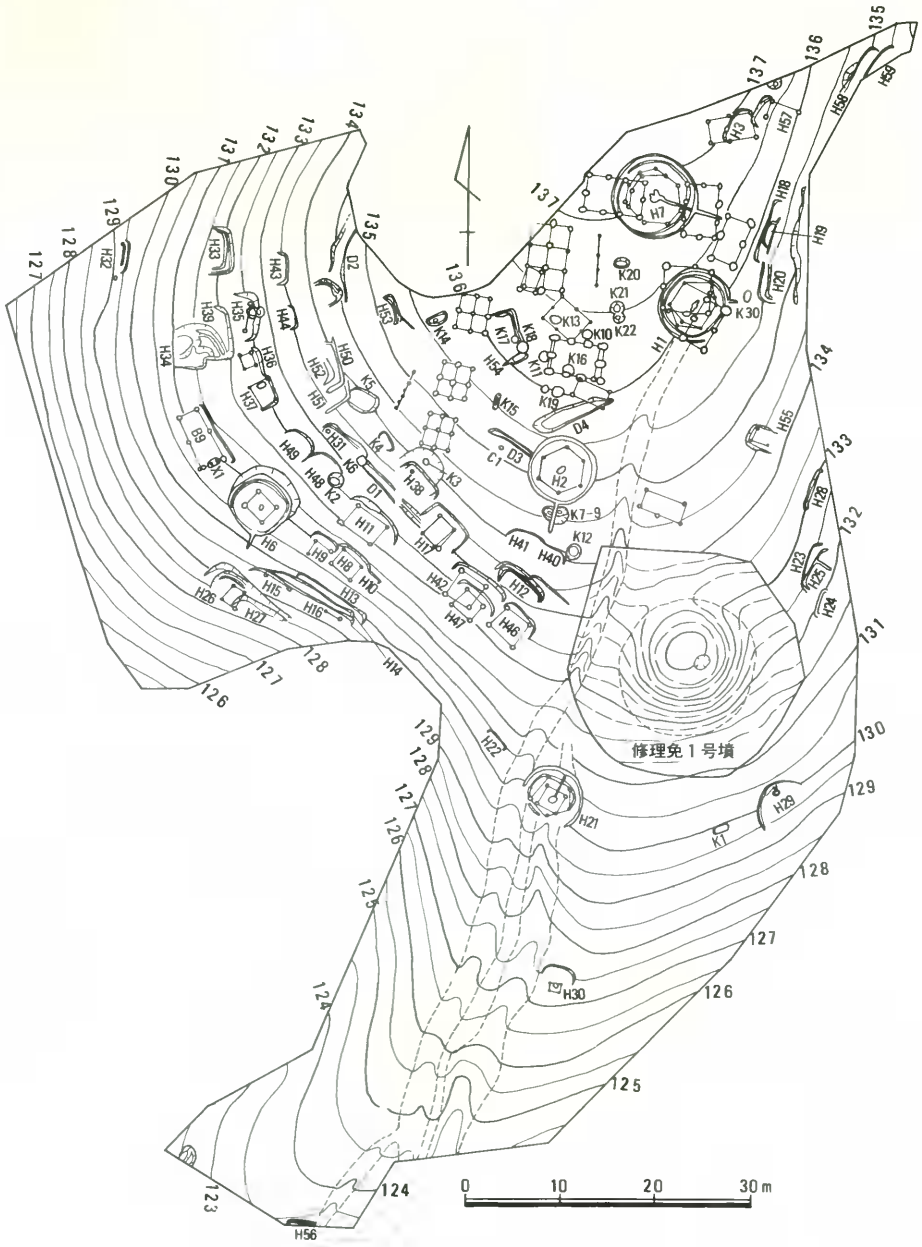


第168図　4区・5区調査範囲図（1/1,500）



第169図　4区上位部（C～G）遺構配置図（1/600）

＊遺構番号は、平成8年度調査の4区Fのみ別番号とし。その他は4区A（第170図）からの続き番号である。



第170図　4区A遺構配置図（1/600）

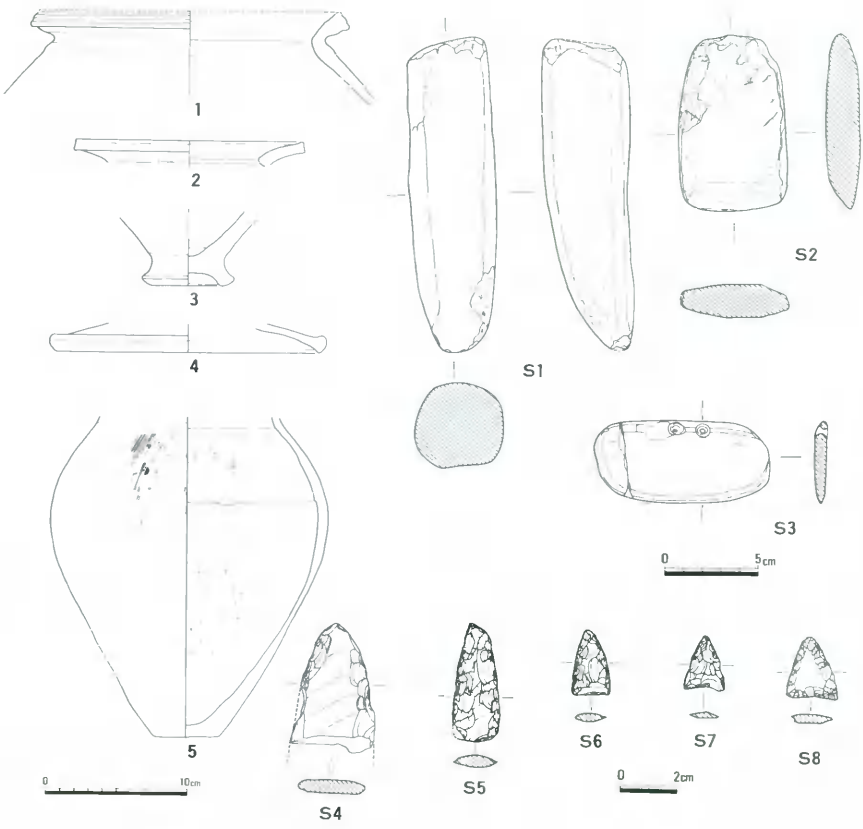
1．竪穴住居

竪穴住居１（第172図、図版40－２）

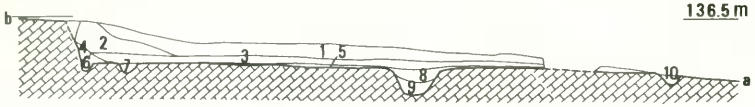
４区Ａの北東部で検出した。平坦面に掘り込まれているまずまず残りの良い住居である。検出面から床面までの最大深度は西側にあって30cmである。平面形は円形と言える。壁体溝は壁直下のものは幅５cmほどで南東部が削られ、30cmほど内側にあるもう一本の溝は全周し、深さは床面から10cm位である。溝内側の床面積は約38.5㎡、いま一つは約28㎡を測る。排水溝は中央穴から伸びず、外側の壁体溝から東に向かって住居の外に100cm検出できた。壁体溝が２本存在することから建て替えしたことが分かる。したがって、柱穴も２軒分検出できた。どちらも６本柱と推定できる。中央穴は一つを再利用している。中央穴の左右に柱穴が検出できた。床面の海抜高は136.0mである。

遺物は埋土から少量の土器と石器が出土している。１・２・５は甕、３は台付き鉢、４は高杯である。石器は叩石、扁平片刃石斧、磨製石包丁、石槍、石鏃がある。

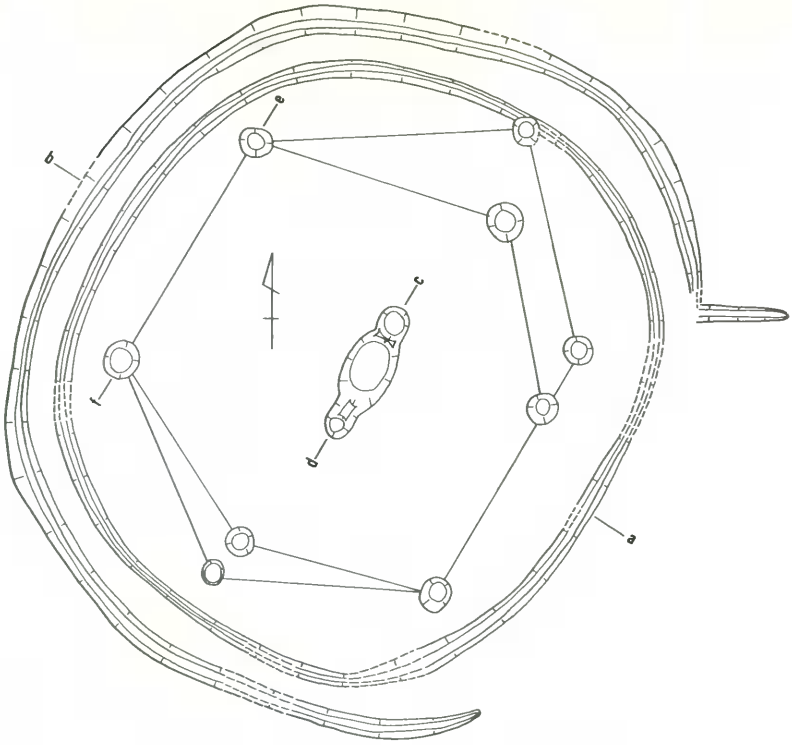
遺物からこの住居の廃絶時期は、弥生中期と考えられる。



第171図　竪穴住居１出土遺物



1．暗黄褐色土　　4．橙色土　　7．明黄灰色土　　10．暗黄褐色土
2．淡黄褐色土　　5．灰色土　　8．灰黄色土
3．淡褐色土　　6．明黄灰色土　　9．黄灰色土



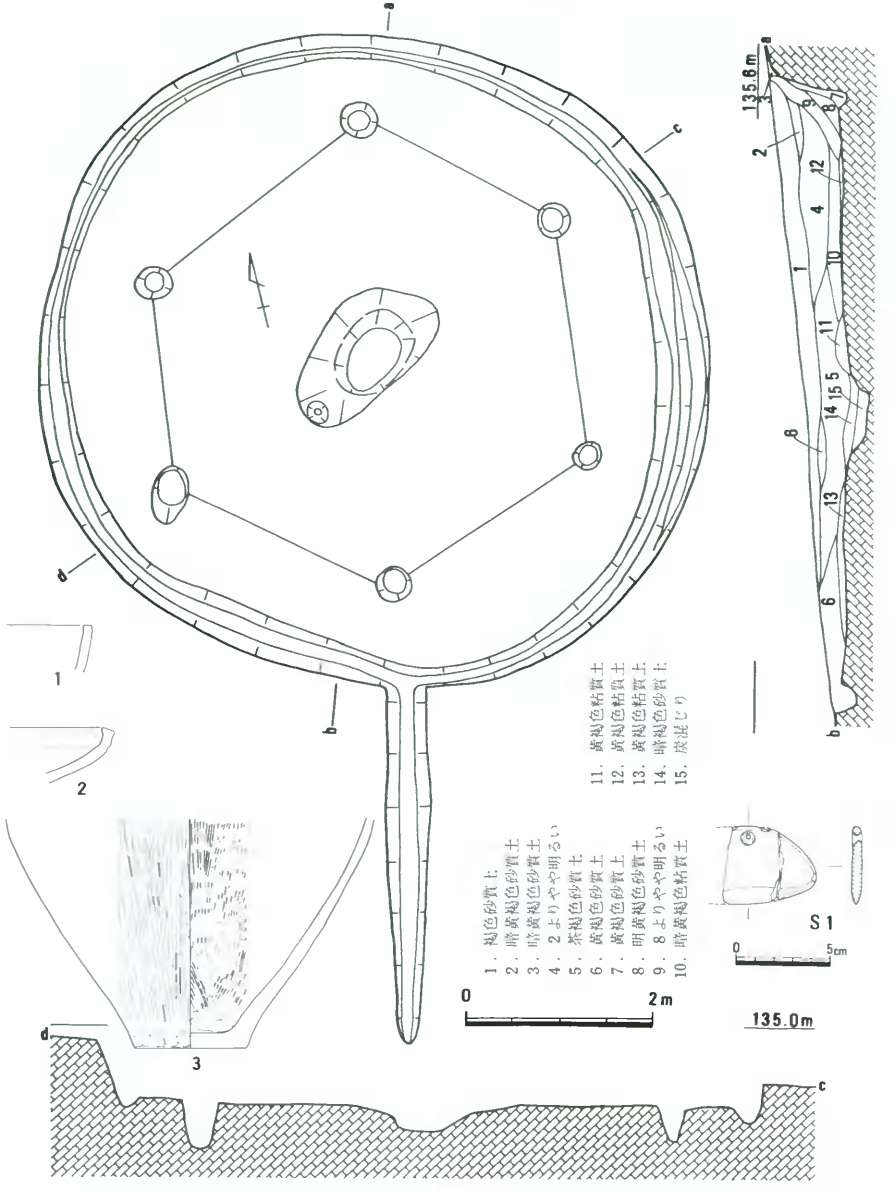
1．褐色土　　3．黄褐色土
2．黄白色土

第172図　竪穴住居1（1/60）

竪穴住居２（第173図、図版41－１）

４区Ａで検出した直径７ｍの円形住居である。壁の残りが良く最大80㎝もある。壁体溝は壁直下を全周し、排水溝は壁体溝の南から住居外に380㎝も伸びている。柱穴は６本あり、深さ平均して50㎝を測る。楕円形の中央穴がある。床面積は38.5㎡、床面の海抜高は134.7ｍである。

遺物としては若干の土器と石包丁が出土し、時期は弥生後期と考えられる。

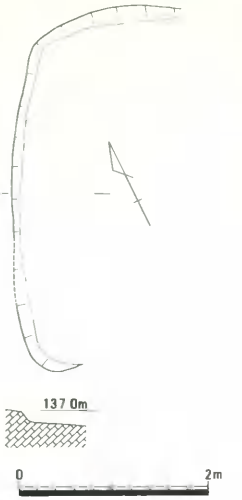


第173図　竪穴住居２（1/60）・出土遺物

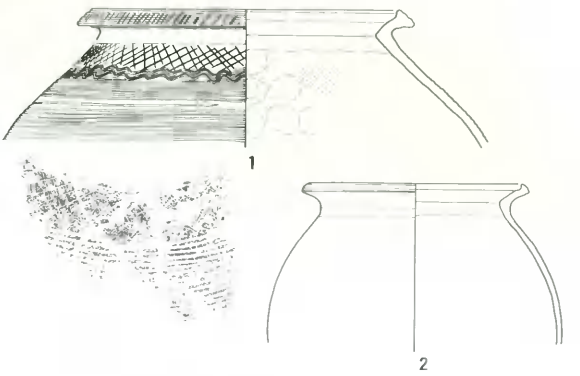
竪穴住居3（第174図）

4区Aの最北端、竪穴住居7の北東で検出した住居である。狭い平坦面の長さ350cm、幅130cm、海抜高136.9cmを測る。

遺物は埋土中から少量の土器が出土している。1の壺は格子目・波状文・刺突文・櫛描文で飾っている。弥生中期である。



第174図　竪穴住居3
(1/60)

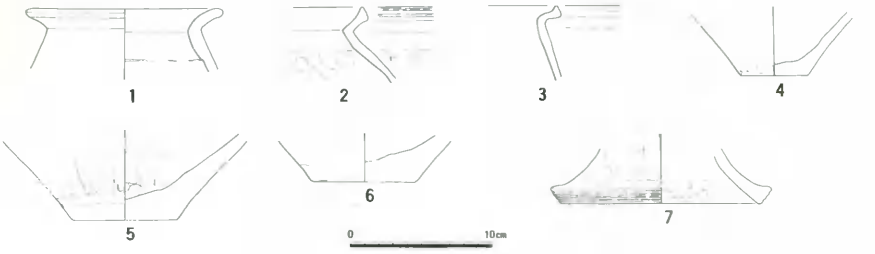


第175図　竪穴住居3出土遺物

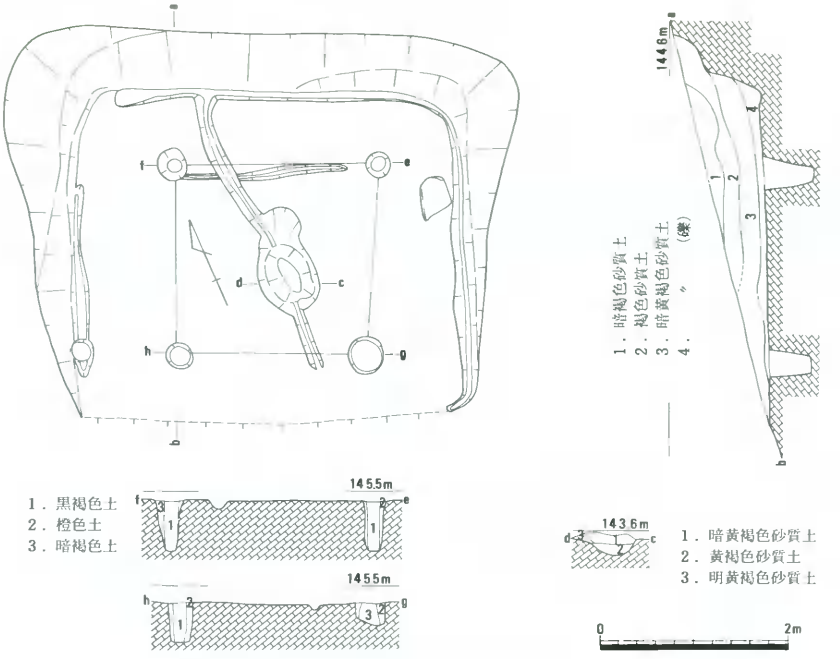
竪穴住居4（第177図、図版42―2）

竪穴住居91の北上で検出した方形の住居で、この地区では最も残りが良い。壁体溝は北西隅と南側は検出できなかった。楕円形の中央穴から南北に溝が出ていて、北は壁体溝に繋がっている。柱穴は4本が正方形にまとまっている。床平坦面の長さは380cm、幅は350cm。床の海抜高は145.4mを測る。

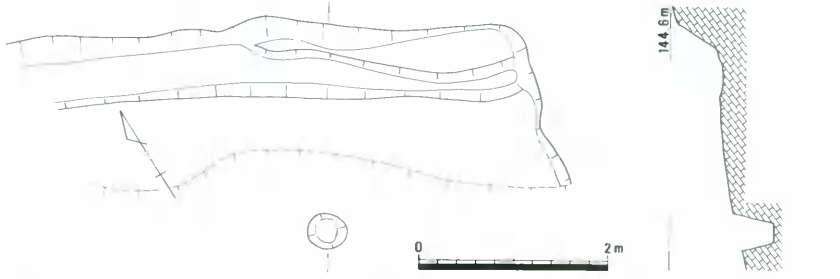
土器は壺・甕・高杯の破片が出土している。この土器群から住居の廃絶時期は弥生中期末と考えて良い。



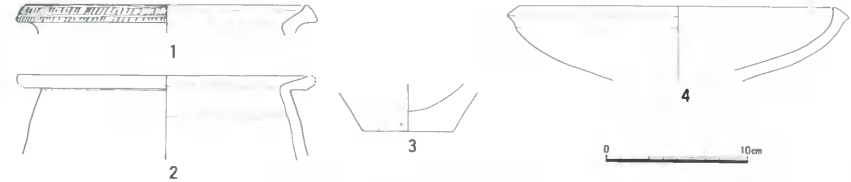
第176図　竪穴住居4出土遺物



第177図　竪穴住居４（1/60）



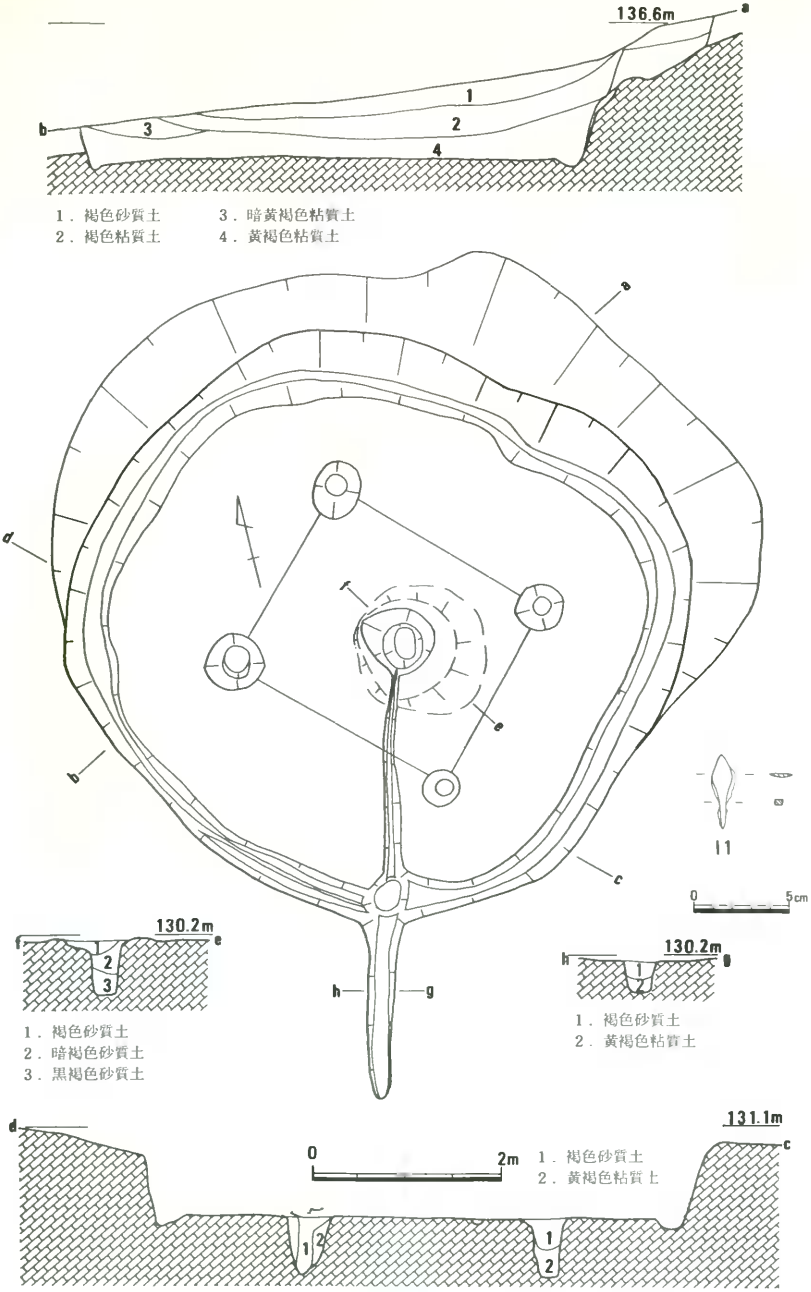
第178図　竪穴住居５（1/60）



第179図　竪穴住居５出土遺物

竪穴住居５（第178図）

竪穴住居４の西で検出した住居である。溝は長さ550cm、幅70cm、深さ床面から５cm。床平坦面の長さは500cm、幅は50cm。床の海抜高は144.1ｍを測る。土器は甕・高杯の破片が出土している。



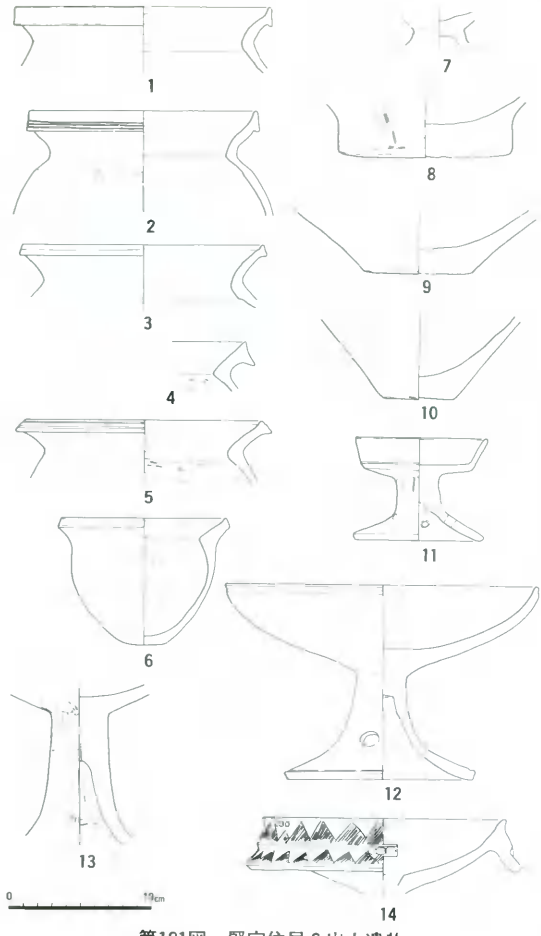
第180図　竪穴住居6 (1/60)

竪穴住居６（第180図、図版40－１）

４区Ａの西南部で検出した。緩斜面に掘り込まれている非常に残りの良い住居である。検出面から床面までの最大深度は北側にあって80cmある。平面形は隅丸方形である。壁体溝は壁直下に下幅15cmほどで全周し、深さは床面から10cm位である。溝内側の床面積は約25㎡を測る。排水溝は中央穴から南に伸び、住居外に200cm伸びる。中央穴の周囲は５cmほど削り出している。柱穴は４本であり、その深さは60cm、直径30～60cmある。床面の海抜高は130.2mである。

遺物は床面及び壁体溝から14点以上の土器が散在して出土している。１～５・８～10は甕、６・７は鉢、11～14は高杯である。14は鋸歯文と円形浮文を施す。

この住居の廃絶の時期は土器の型式から弥生後期と考えられる。



第181図　竪穴住居６出土遺物

竪穴住居７（第182図、図版40－３）

竪穴住居１の北方で検出した直径９mもある４区では最大の大型円形住居である。発掘の工程上二分割して調査したため、全景写真を撮ることが出来なかった。建て替えがあり、柱穴は８本ずつ検出できた。中央穴から東方住居外に排水溝が長く伸びている。中央穴の上とその周囲には大量の炭層が見られた。壁体溝内側の床面積は約58.0㎡、床面の海抜高は136.6mである。

遺物は少なかったが、８点実測した。壺、甕、鉢、高杯がある。時期は弥生後期と考えられる。

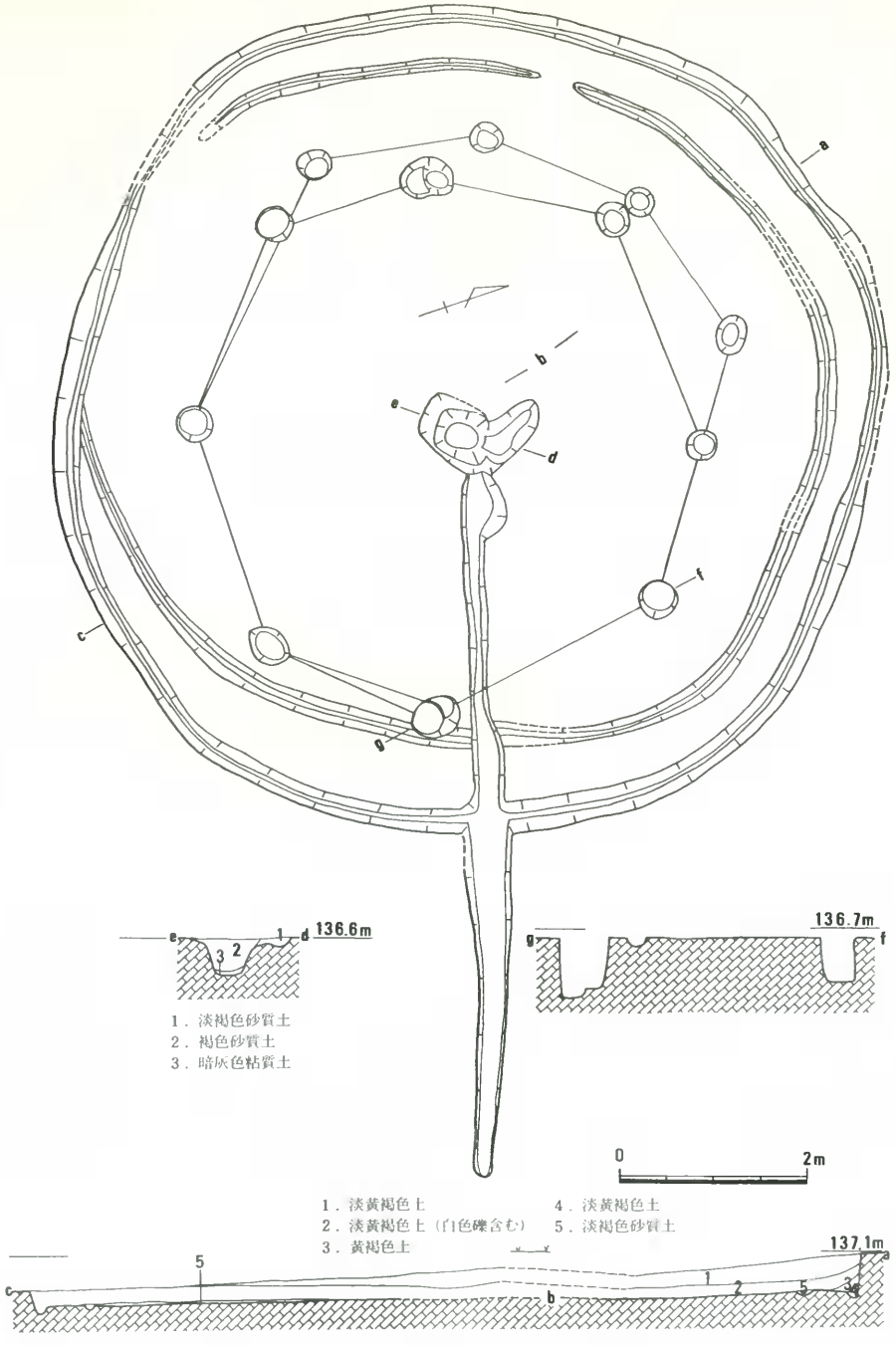
竪穴住居８（第184図）

竪穴住居６の東方で検出した住居。床平坦面の幅は最大190cmある。床面の海抜高は131.0mである。柱穴は４本でまとまる。最も深いもので60cmもある。

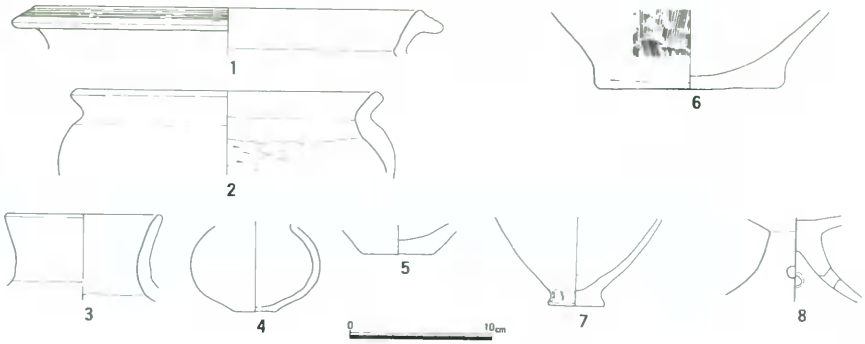
遺物は台付き鉢と大型高杯が出土している。時期は弥生後期と考えられる。

竪穴住居９（第184図）

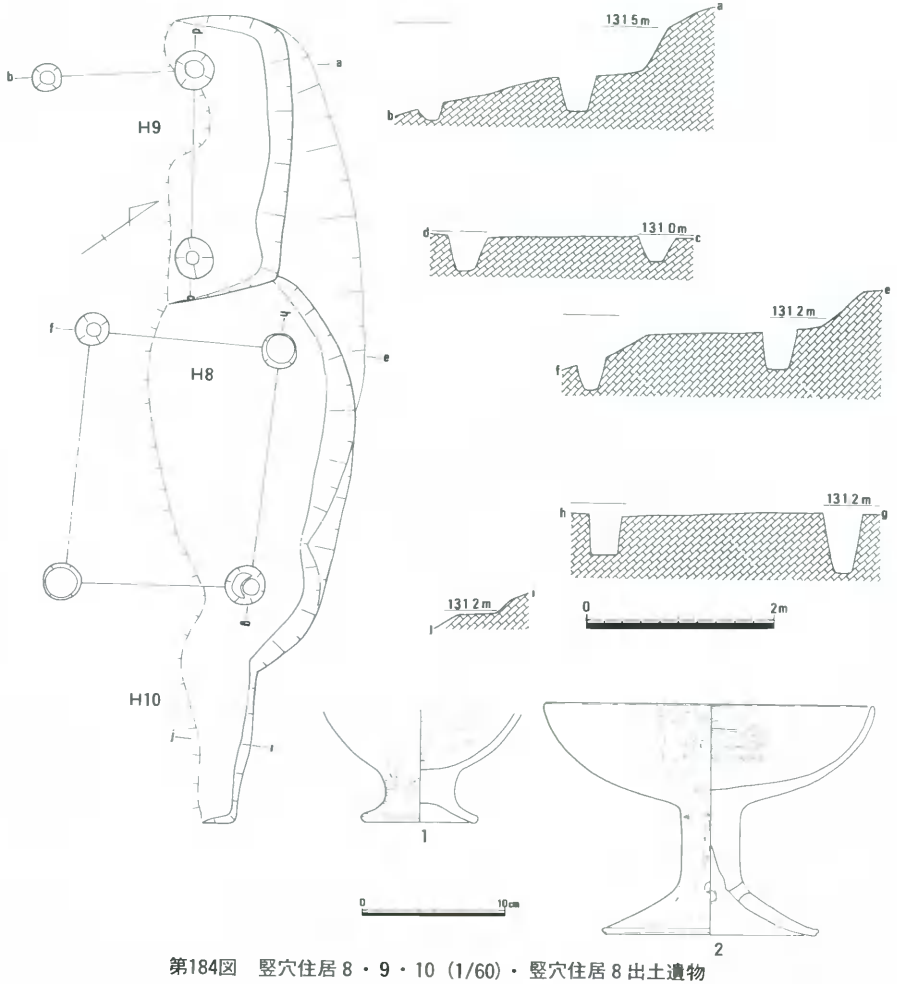
竪穴住居８の西方同一段で検出した住居。竪穴住居８より少し床面が低く、平坦面も狭い。柱穴は３本検出出来た。遺物は細片しかなく、時期の分かる２点を実測した。時期は弥生後期。



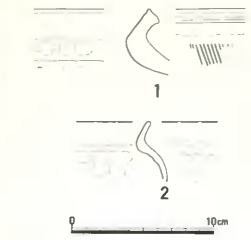
第182図　竪穴住居７（1/60）



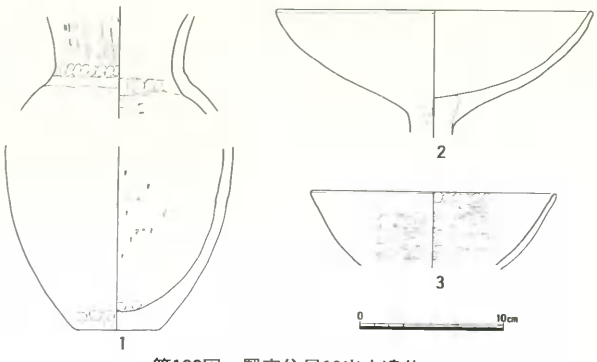
第183図　竪穴住居７出土遺物



第184図　竪穴住居８・９・10（1/60）・竪穴住居８出土遺物



第185図　竪穴住居９出土遺物



第186図　竪穴住居10出土遺物

竪穴住居10（第184図）

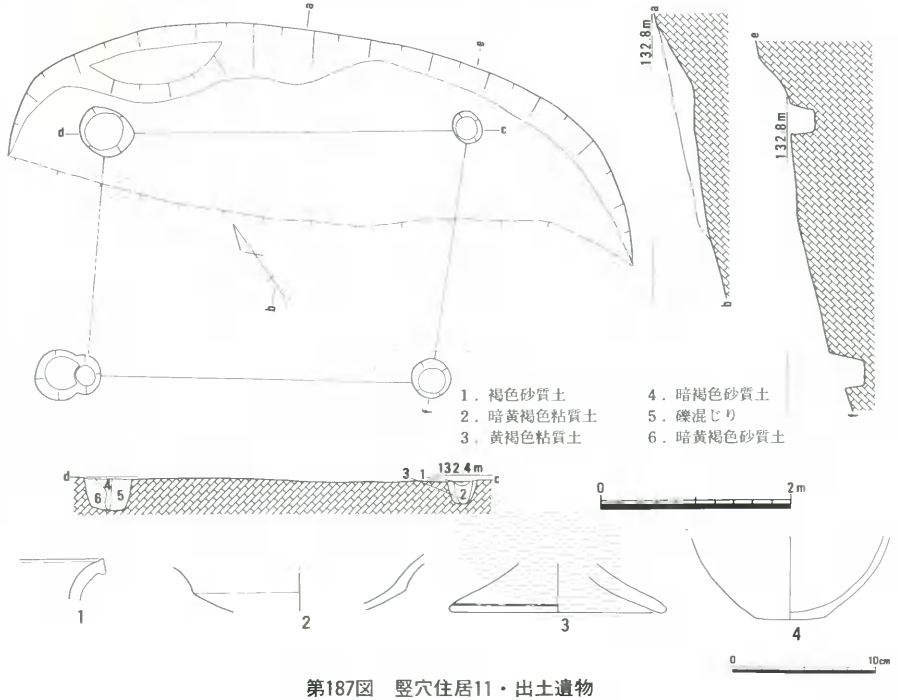
竪穴住居８の東方同一段で検出した住居。竪穴住居８と同一の床面を持つ。竪穴住居８の壁がやや弧状を呈すのに、これは直線的であるところが異なる。

遺物は３点の土器があり、壺・高杯で、時期は弥生後期と考えられる。

竪穴住居11（第187図）

竪穴住居８の北上方で検出した壁がやや弧状を呈す住居。床平坦面の幅は最大180cmある。床面の海抜高は132.7mである。柱穴は４本でまとまる。平均の深さ30cmを測る。

遺物は４点の土器があり、甕・高杯で、時期は弥生後期と考えられる。

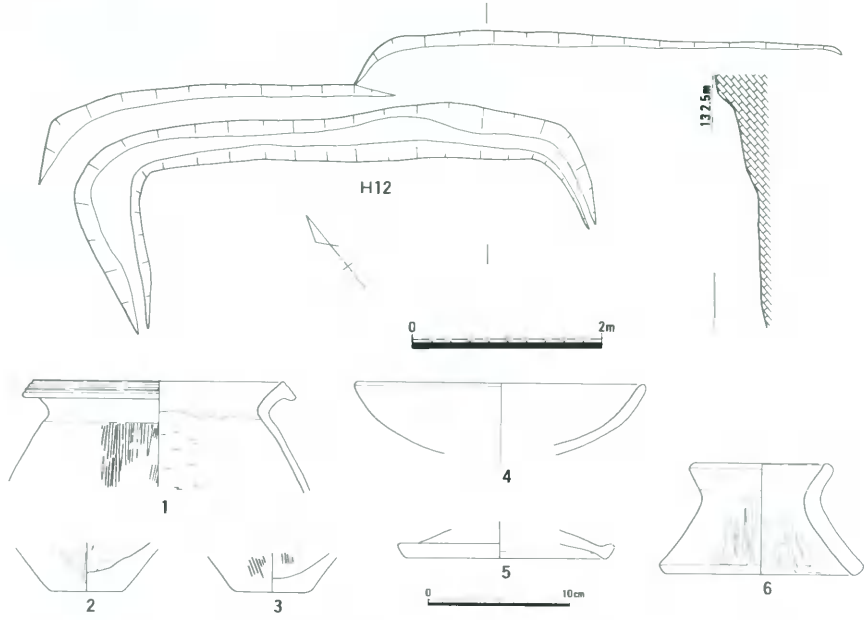


第187図　竪穴住居11・出土遺物

竪穴住居12（第188図）

竪穴住居２の南Ａ－23東で検出した壁が直線的な住居。「コ」の字形の溝と細い平坦面を検出した。壁体溝内法長さ450cm、平坦面幅150cm、平坦面の海抜高は132.0mを測る。

遺物としては若干の土器が出土し、６点を実測した。甕・高杯・器台がある。時期は弥生後期と考えられる。



第188図　竪穴住居12（1/60）・出土遺物

竪穴住居13（第189図）

竪穴住居８の南下方で検出した壁が直線的な住居。「コ」の字形の細い平坦面を検出した。平坦面長さ820cm、幅100cm、平坦面の海抜高は129.8mを測る。

遺物としては若干の土器が出土しているが、実測できるものはない。時期は弥生後期。

竪穴住居14（第189図）

竪穴住居13の南下方で検出した壁が直線的な住居。「コ」の字形の細い平坦面を検出した。平坦面長さ860cm、幅120cm、平坦面の海抜高は129.6mを測る。

遺物としては若干の土器の他石鏃１点が出土。時期は弥生後期。

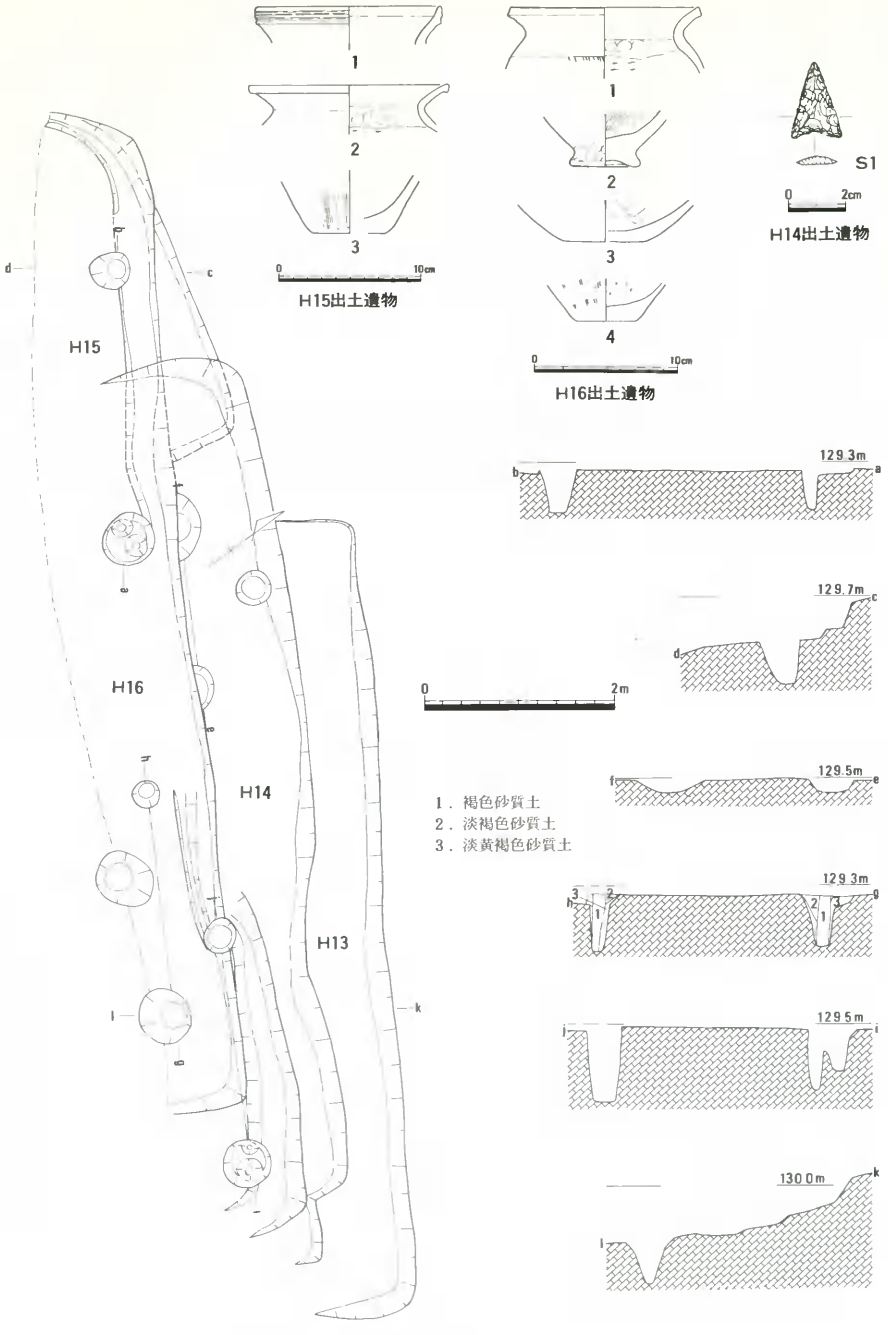
竪穴住居15（第189図）

竪穴住居14の南下方で検出した壁が直線的な住居。鍵形の壁体溝と細い平坦面、柱穴２本を検出した。平坦面長さ不明、幅100cm、平坦面の海抜高は129.2mを測る。

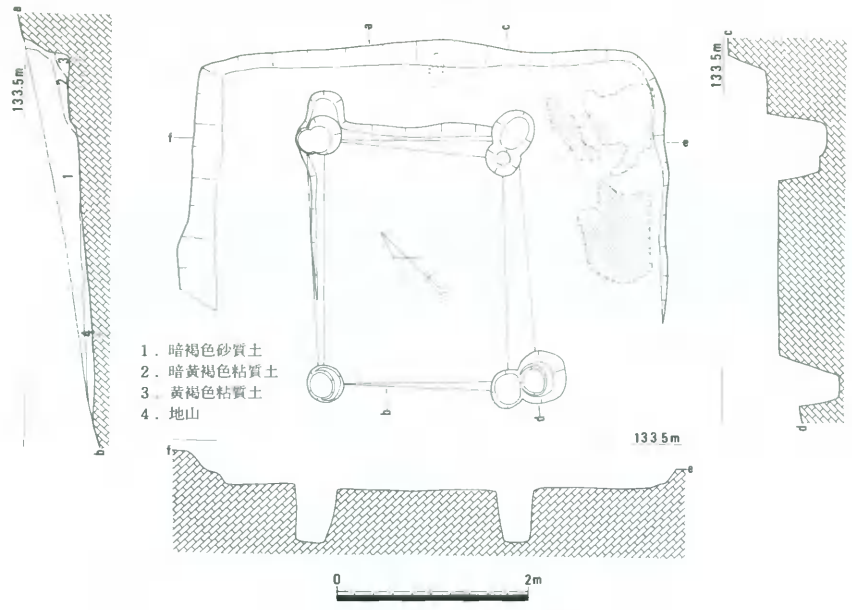
遺物としては若干の土器が出土。甕を３点実測し、弥生後期と考えられる。

竪穴住居16（第189図）

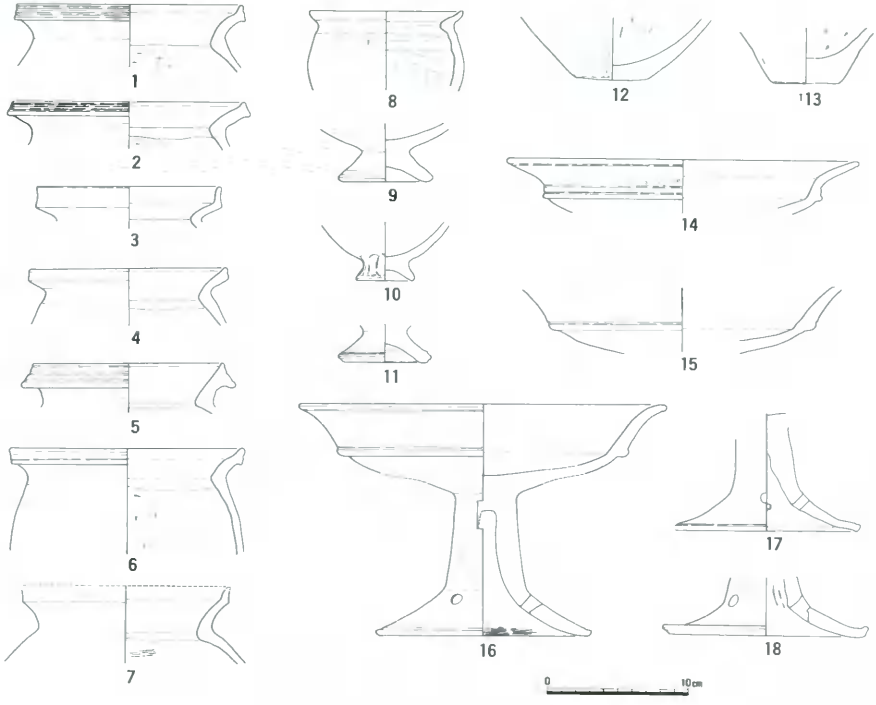
竪穴住居14の南下方で検出した壁が直線的な住居。建物８と同一平面、柱穴２本を検出した。遺物としては若干の土器が出土。甕・鉢を４点実測し、弥生後期と考えられる。



第189図　竪穴住居13・14・15・16（1/60）・出土遺物



第190図　竪穴住居17（1/60）



第191図　竪穴住居17出土遺物

竪穴住居17（第190図）

4区AのA－17で検出した住居である。方形の床面の海抜高は133.0m、長さ470cm、幅300cmを測る。その床面の中央部分は方形に約5cm一段深くなる。逆に言うと周囲がベット状に高くなっている。土器は東側のベット状部分からまとまって出土した。柱穴は4本検出しているが、瓢箪形を呈しているので建て替えが行われたことが分かる。この柱穴の大きさは直径55～30cm、深さ60～50cm、柱間は200～280cmを測る。

遺物は土器が他の住居に比べて多数出土し、実測出来るものも多かった。甕・鉢・高杯がある。16の高杯は上下が直接には接合出来なかった。

この住居の廃絶時期は、弥生後期であろう。

竪穴住居18（第192図）

4区AのA－2で検出した住居である。平面図では直線的な壁直下に溝が示されていないが、断面では溝の痕跡が認められる。

遺物は弥生後期と考えられる土器細片が若干出土している。

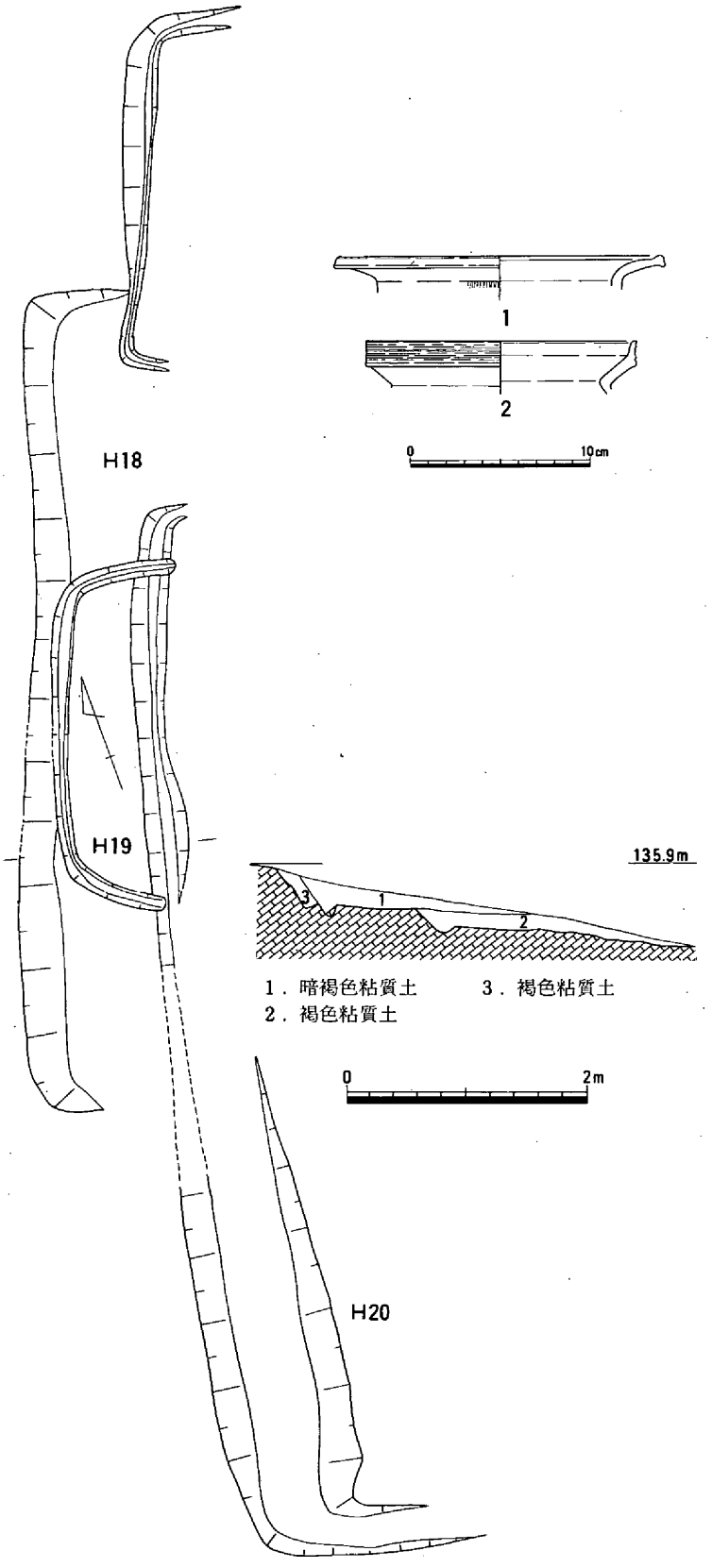
竪穴住居19（第192図）

4区AのA－2で検出した住居である。竪穴住居18の内側にあって、それを切っていることからより新しいことが分かる。「コ」の字形に壁体溝がある。

出土土器から弥生後期である。

竪穴住居20（第192図）

竪穴住居19の東側にあって、それより古いことが分かる。「コ」の字形に壁体溝がある。

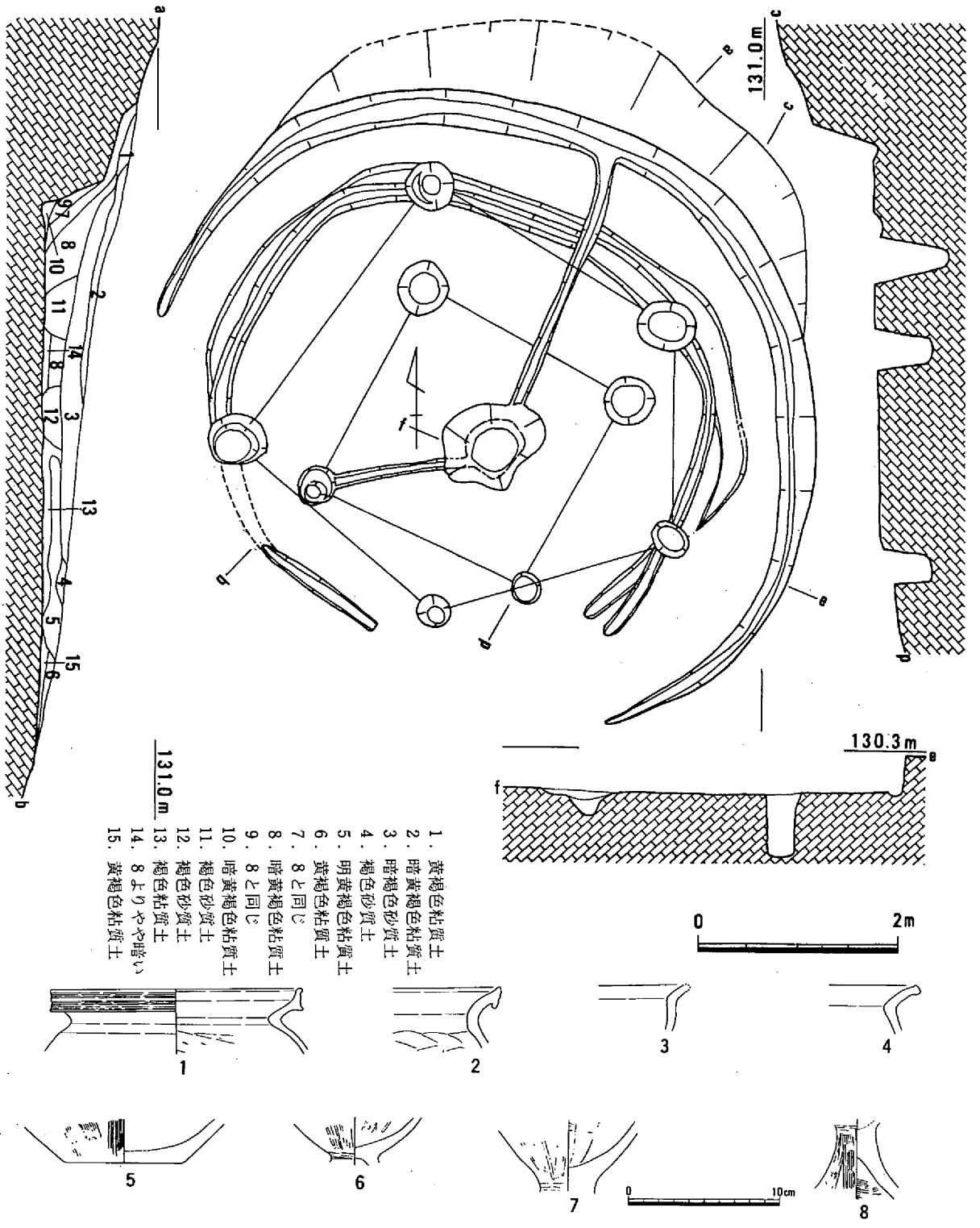


第192図　竪穴住居18・19・20（1/60）・竪穴住居19出土遺物

竪穴住居21（第193図、図版41－２）

４区ＡのＡ－29で検出した円形住居である。南西部は後世削平を受けている。壁体溝を３条検出していることから２回の建て替えを行っていることが分かるが、柱穴に関しては２組しかまとめられなかった。４本柱と５本柱になる。中央穴は不整形なもの１個である。間仕切り状の溝がそれから２方向に出ている。床面の海抜高は129.6mである。本遺跡で唯一発掘調査後保存された住居である。

出土土器は少量で、甕・鉢・高杯があり、時期は弥生後期である。

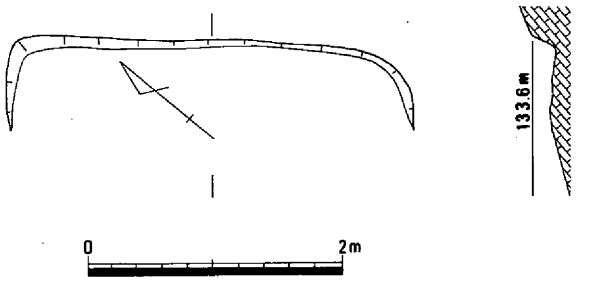


第193図　竪穴住居21（1/60）・出土遺物

竪穴住居22（第194図）

竪穴住居21の北西で検出した小さな住居である。床平坦面は長さ300cm、幅60cmを測り、直線的な壁の高さは15cmである。床面の海抜高は132.0mある。

遺物は土器の細片のみで、弥生土器と分かる程度である。



第194図　竪穴住居22（1/60）

竪穴住居23（第195図）

4区AのA—26で検出した直線的な住居である。床平坦面の長さ550cm、幅90cm、壁の高さ25cmを測る。床面の海抜高は132.4mある。南端は第一次調査のトレンチにかかっていた。

遺物は土器が若干出土している。直口壺・甕である。

時期は弥生後期と考えられる。

竪穴住居24（第195図）

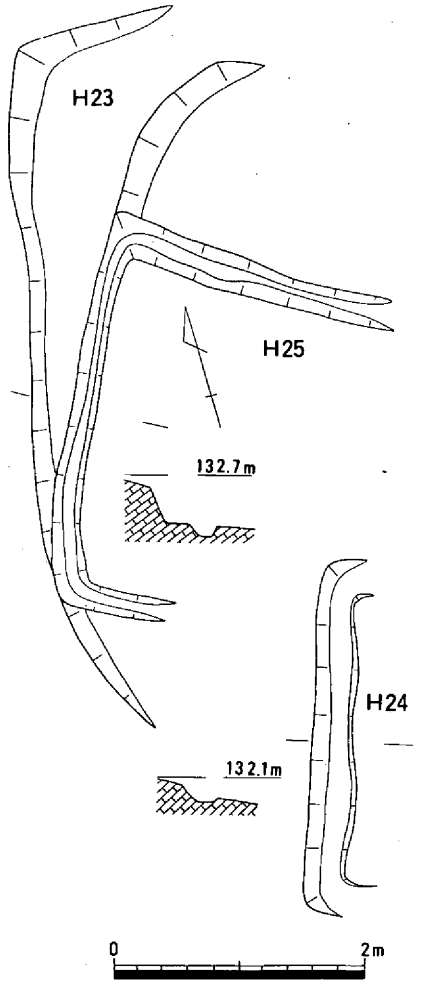
竪穴住居23の南東で検出した直線的な住居である。「コ」の字形の浅い壁体溝を検出した。床平坦面の長さ220cm、幅20cm、溝の深さ15cmを測る。床面の海抜高は131.9mある。

遺物は土器の細片のみで、弥生土器と分かる程度である。

竪穴住居25（第195図）

竪穴住居23の南東で検出した直線的な住居である。「コ」の字形の浅い壁体溝を検出した。床平坦面の長さ250cm、幅210cm、溝の深さ15cmを測る。床面の海抜高は132.3mある。

遺物は土器の細片のみで、弥生土器と分かる程度である。壺の底部である。

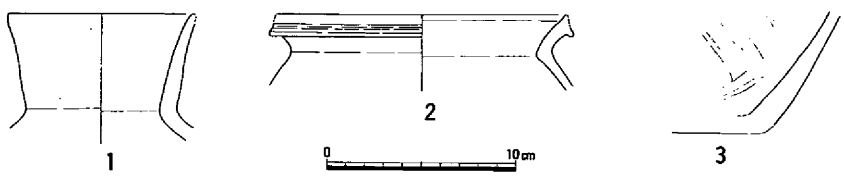


第195図　竪穴住居23・24・25（1/60）

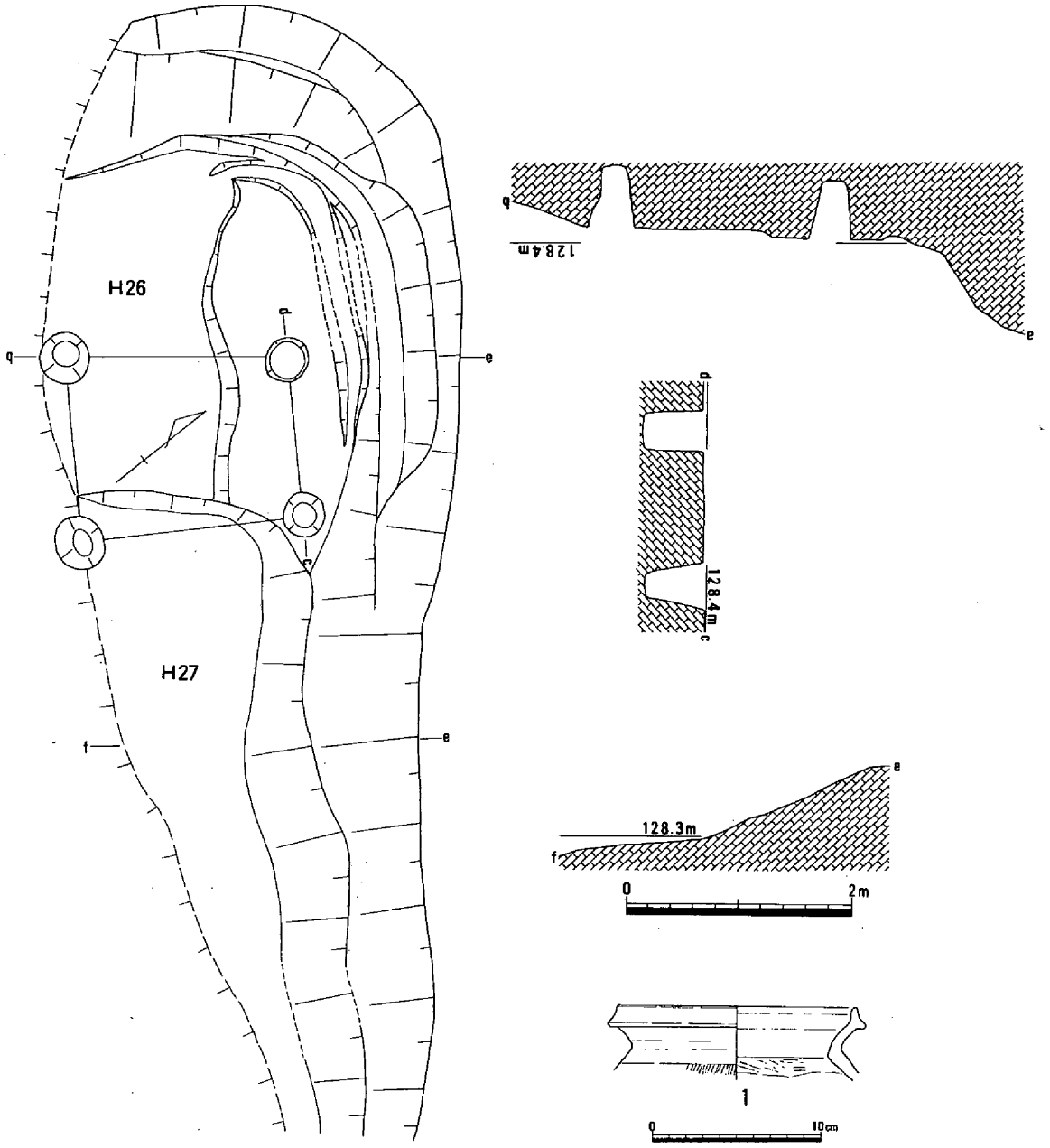
竪穴住居26（第197図）

4区Aの西端、竪穴住居6の南西で検出した弧状を呈する住居である。直径40cm、深さ60cmの柱穴4本も同時に検出した。柱間は125～200cmを測る。壁体溝は「し」の字状に浅いものが残存している。床平坦面の海抜高は128.4mある。

遺物は土器の細片のみで、弥生土器と分かる程度である。



第196図　竪穴住居23・25出土遺物



第197図　竪穴住居26・27（1/60）・竪穴住居27出土遺物

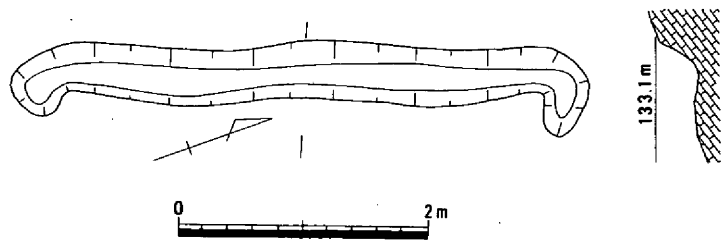
竪穴住居27（第197図）

竪穴住居26の東、同一の段で検出した住居である。西の方には床平坦面が良く残存しているが東側はほとんど残っていない。床平坦面の海抜高は128.3mで、竪穴住居26より少し低い。

遺物としては、実測出来る土器片が１点あった。時期は弥生後期である。

竪穴住居28（第198図）

４区ＡのＡ－21で検出した「コ」の字形の壁体溝を持った住居である。溝は浅く５cm、幅40cm。床面の長さは380cm、幅20cm。床平坦面の海抜高は132.8m。遺物なし。



第198図　竪穴住居28（1/60）

竪穴住居39（第211図）

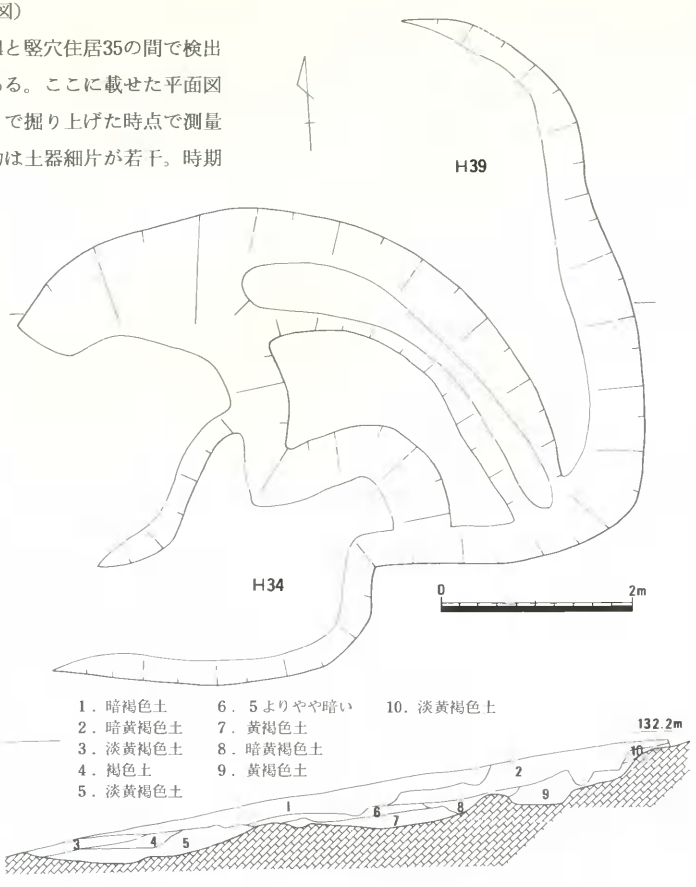
4区Aの竪穴住居34と竪穴住居35の間で検出した長方形の住居である。ここに載せた平面図は下層の自然堆積層まで掘り上げた時点で測量したものである。遺物は土器細片が若干。時期は弥生後期。

竪穴住居40（第212図）

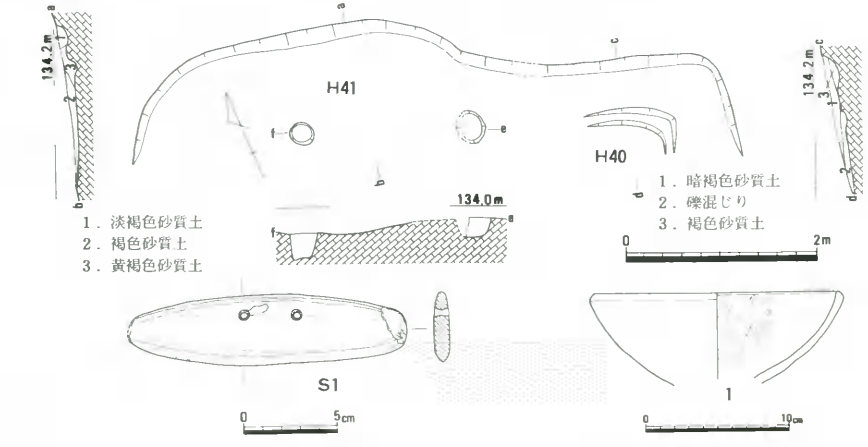
4区AのA－18にある。「L」字形の掘方とその内側に「L」字形の溝を伴う。磨製石包丁は検出作業中に採集したもの。

竪穴住居41（第212図）

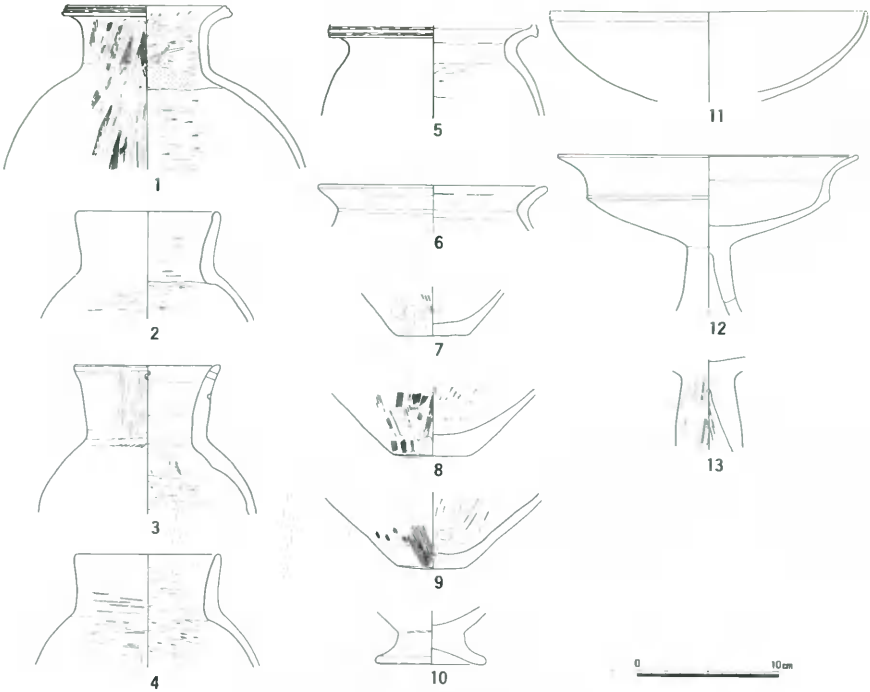
竪穴住居40の西隣に同一段として検出したやや弧状を呈した住居。柱穴を2本伴う。図右の鉢形土器が出土している。弥生後期か。



第211図　竪穴住居34・39（1/60）



第212図　竪穴住居40・41（1/60）・出土遺物



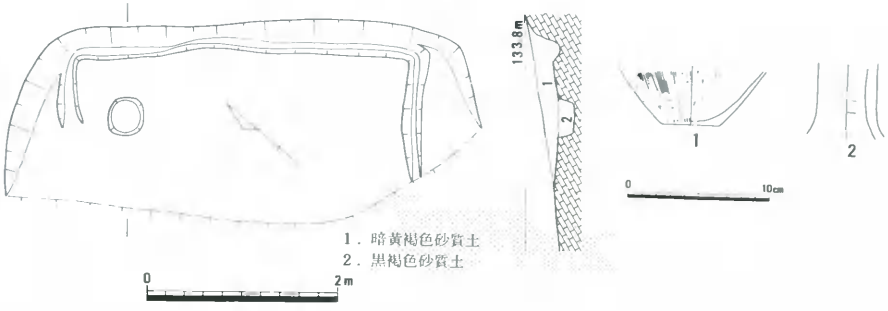
第209図　竪穴住居37内方形土壙出土遺物

竪穴住居38（第210図）

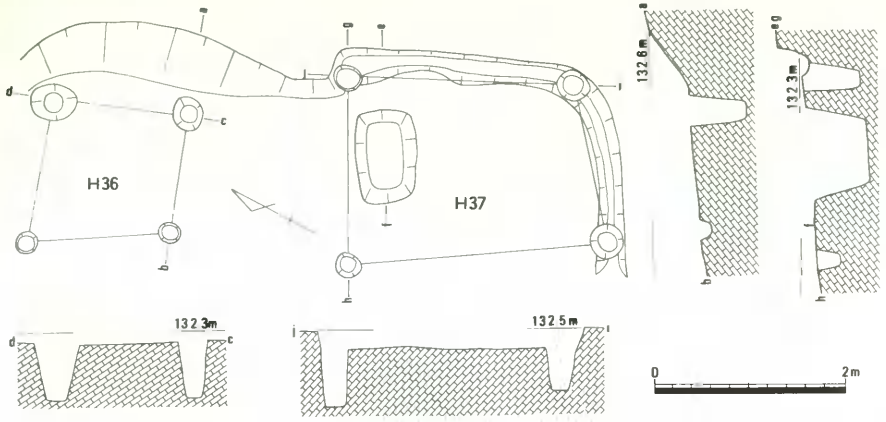
4区AのA－17竪穴住居17の北西で検出した長方形の住居である。壁直下に「コ」の字形に浅い壁体溝を伴う。柱穴は1本しか見つけることができなかった。溝と掘方に南北ともに差が出来ているのは建て替えの為か、または当時の人の作業上の為か知り得ない。掘方の平坦面の大きさは、長さ500cm、溝の内側の長さ330cm、平坦面の幅は180cm、海抜高は133.5mである。柱穴の直径は35cm、深さ15cmである。この柱穴も伴うかどうか疑わしい。

遺物としては甕の底部と高杯の脚柱部が出土しているにすぎない。

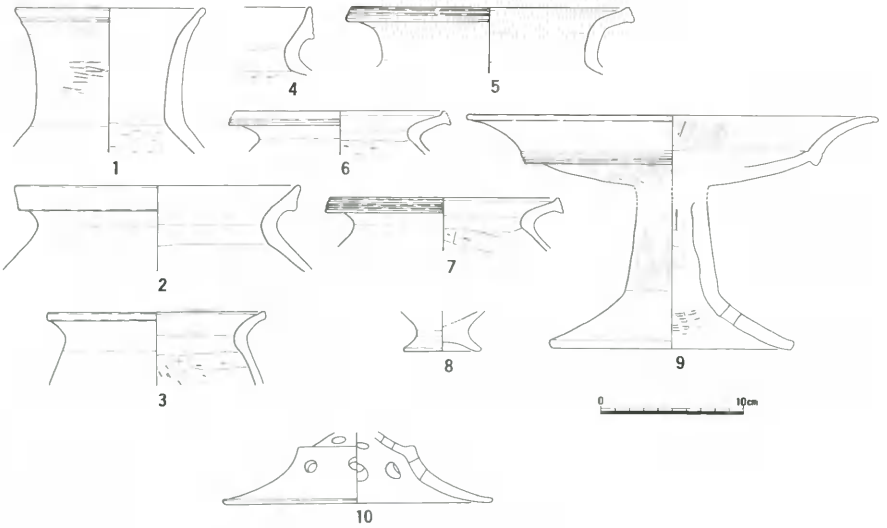
時期はこの土器の様式から弥生後期と考えて良い。



第210図　竪穴住居38（1/60）・出土遺物

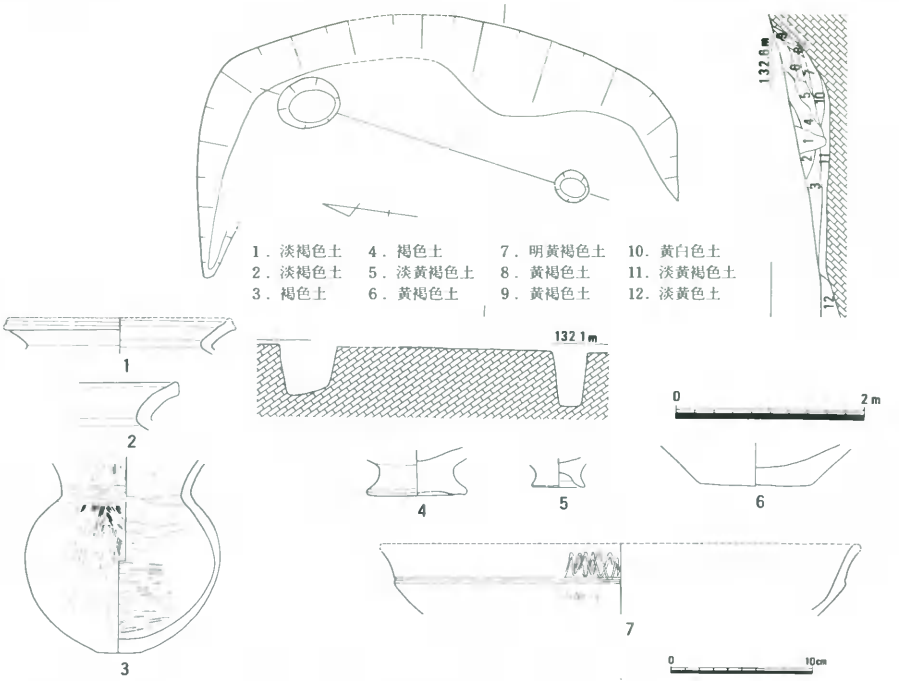


第206図　竪穴住居36・37（1/60）



第207図　竪穴住居36出土遺物

第208図　竪穴住居37出土遺物



第205図　竪穴住居35（1/60）・出土遺物

竪穴住居35（第205図）

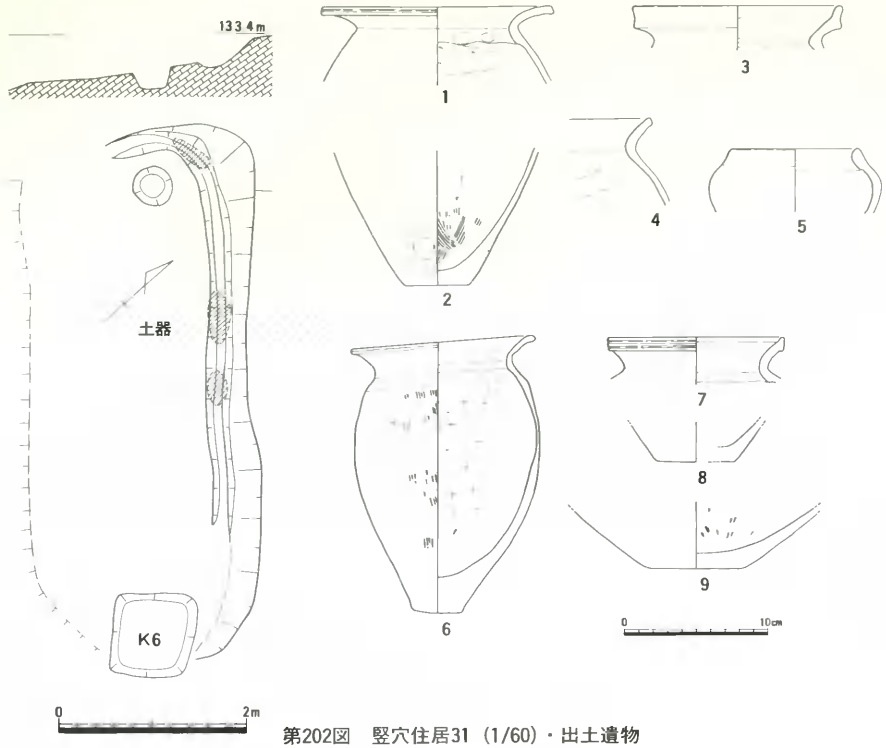
4区AのA－3の南東で検出したやや弧状を呈した長方形の住居である。断面では壁直下に幅の広い壁体溝が認められるが、平面では図示できないほどの浅いものとなる。柱穴が3本見つかったが、図の2本が深さの点からこの住居に伴うものとした。また破線の部分には2個の深い方形土壙があるが、これも住居に伴わない。遺物は南部で集中して出土した壺・甕・鉢・高杯があり、これらの様式からこの住居の廃絶の時期は弥生後期と考えたい。

竪穴住居36（第206図）

竪穴住居35の南東同一コンター上で検出したやや弧状を呈した長方形の住居である。壁体溝はないようである。柱穴は浅く小さいものも含めると6本もあるが、図の4本をまとめる事にした。しかし、東側の2本は60cmと深いが、西側2本は10cmと極めて浅い。床平坦面は幅200cmとやや広い。緩斜面に掘り込まれていることが原因か。床平坦面の海抜高は132.1mある。土器は北の方で集中的に出土した。竪穴住居35の土器と混ざっている可能性もある。壺・甕・鉢・高杯があり、これらの様式からこの住居の廃絶の時期は弥生後期と考えたい。

竪穴住居37（第206図）

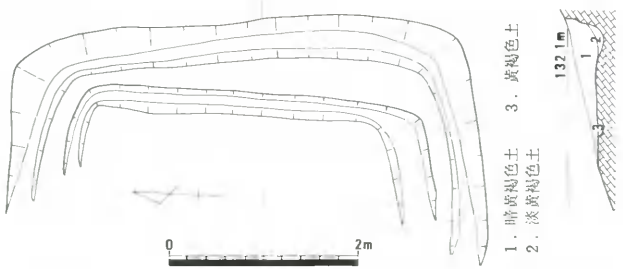
竪穴住居36の南東同一コンター上で検出した長方形の住居である。壁直下に「D」字形に浅い壁体溝を伴う。柱穴も4本まとめたが、竪穴住居36と同様東側の2本は60cmと深いが、西側2本は20cmと極めて浅い。また中央よりやや北側に長方形の土壙を検出した。位置・長辺方向・断面観察からこの住居に伴う貯蔵穴と考えた。遺物は住居の埋土から甕が、長方形の土壙から壺・甕・鉢・器台が出土している。これらの土器からこの住居の廃絶の時期は弥生後期と考えたい。



第202図　竪穴住居31（1/60）・出土遺物

竪穴住居33（第203図）

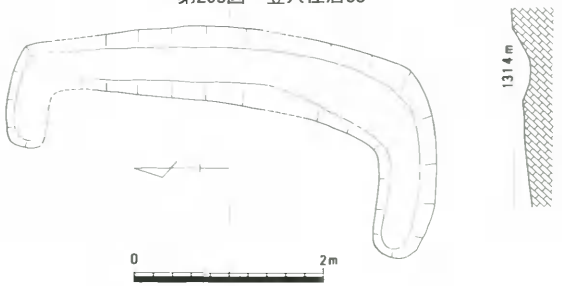
4区AのA－3の北で検出した長方形の住居である。壁直下と20cmほど離れて2本の壁体溝が検出できた。どちらも「コ」の字形を呈する。建て替えを行ったことを意味する。土器細片出土。



第203図　竪穴住居33

竪穴住居34（第204図）

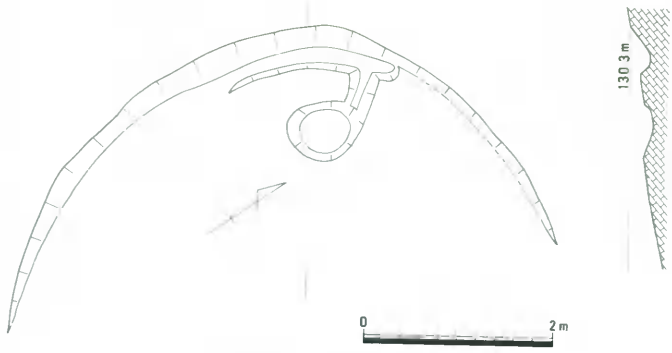
4区AのA－8北で検出した長方形の住居である。太い「コ」の字形の壁体溝だけ検出出来た。溝に囲まれた平坦面の長さは350cm、幅は120cm、床面の海抜高は、131.3mである。遺物は溝の埋土から土器細片が若干出土。



第204図　竪穴住居34（1/60）

竪穴住居29（第199図）

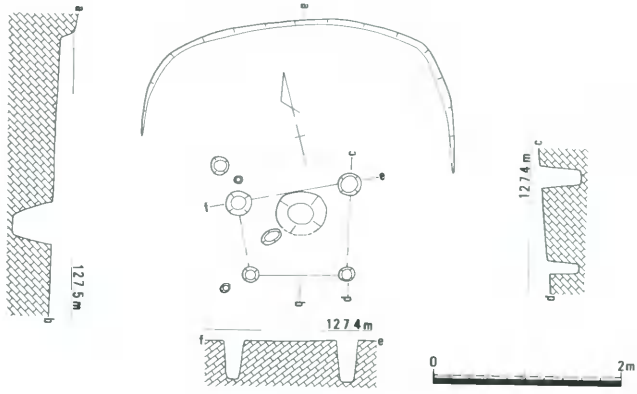
4区AのA—31で検出した半月形の住居である。一部に壁体溝と円形の小土壙を伴っている。床面は平坦ではなく岩盤の凹凸が激しく人が住める状態ではない。遺物として土器細片が出土しているが、時期の分かるようなものではない。



第199図　竪穴住居29

竪穴住居30（第200図）

4区AのA—36で検出した隅丸方形の住居である。第一次調査のトレンチにかかっていたもの。中央穴と4本の柱穴を伴う。柱穴は直径15～25cm、深さ30～45cmを測る。床面の海抜高は、127.3mである。遺物若干。



第200図　竪穴住居30（1/60）

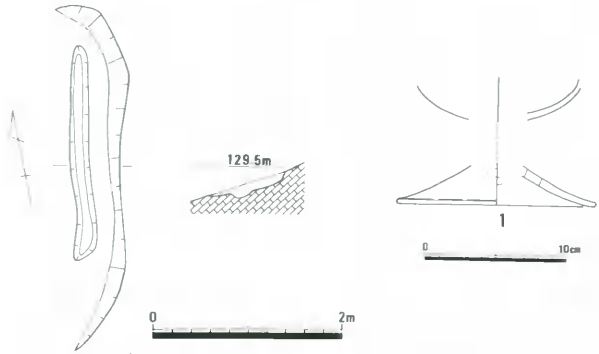
竪穴住居31（第202図）

4区AのA－9で検出した長方形の住居である。壁直下に溝が検出でき、「し」の字形を呈する。土器はこの溝の上層で3カ所に集中して出土した。柱穴は北東隅で1本見つけることができたが、他にはない。南西隅に方形の土壙が検出されたが、この住居に伴うかどうかは分からない。床面の海抜高は、133.1mである。

甕・鉢から弥生後期。

竪穴住居32（第201図）

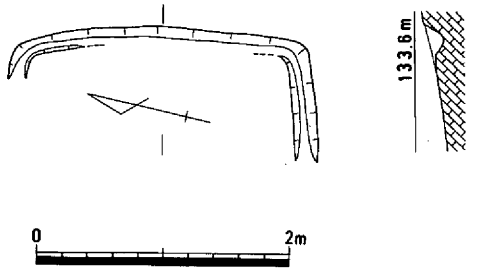
4区Aの西北端急斜面で検出した小型の住居である。壁体溝は壁から20cmほど離れて検出でき、直線で長さ220cmある。これも含めて平坦面は長さ350cm、幅60cmしかない。遺物は高杯の一部が出土している。時期は弥生後期。



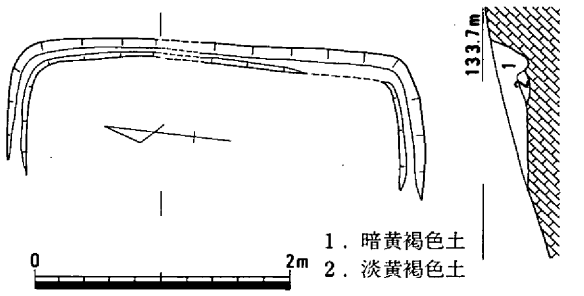
第201図　竪穴住居32（1/60）・出土遺物

竪穴住居42（第215図）

4区AのA—23杭南で検出した住居である。長さ600cm、幅80cmの細長い平坦面に柱穴4本を伴う。柱穴の柱間は300cmで一定している。ほぼ正方形にまとまる。遺物は埋土が少ない事もあり、若干の土器しか出土していない。この甕破片から弥生後期としたい。



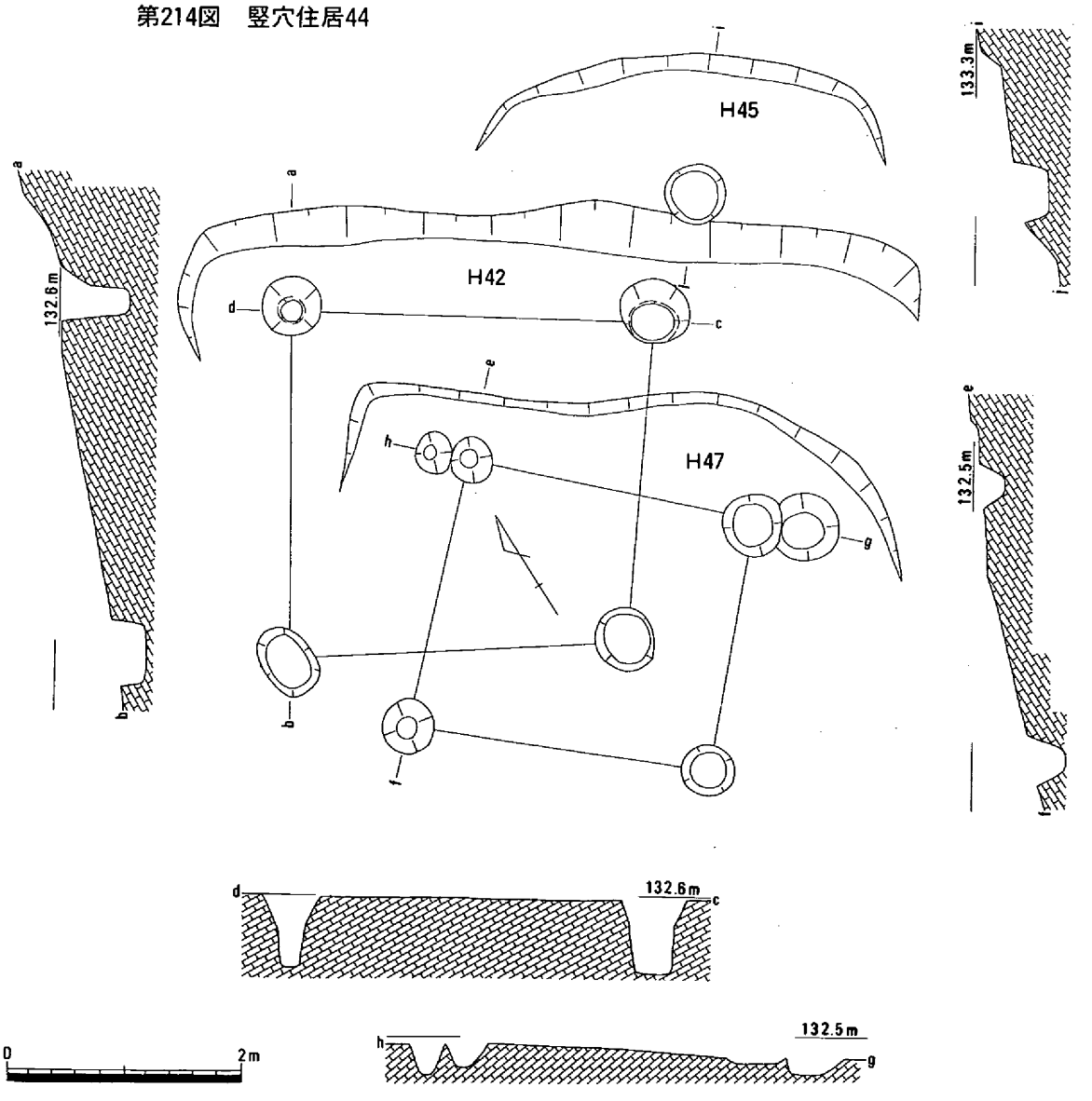
第214図　竪穴住居44



第213図　竪穴住居43（1/60）

竪穴住居43（第213図）

4区AのA—4杭西で検出した住居である。「コ」の字形の壁体溝と平坦面を伴う。平坦面の長さ300cm、幅100cm、海抜高133.4mを測る。埋土は暗黄褐色土だが、遺物はない。



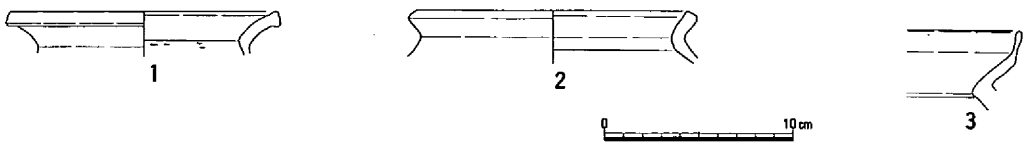
第215図　竪穴住居42・45・47（1/60）

竪穴住居44（第214図）

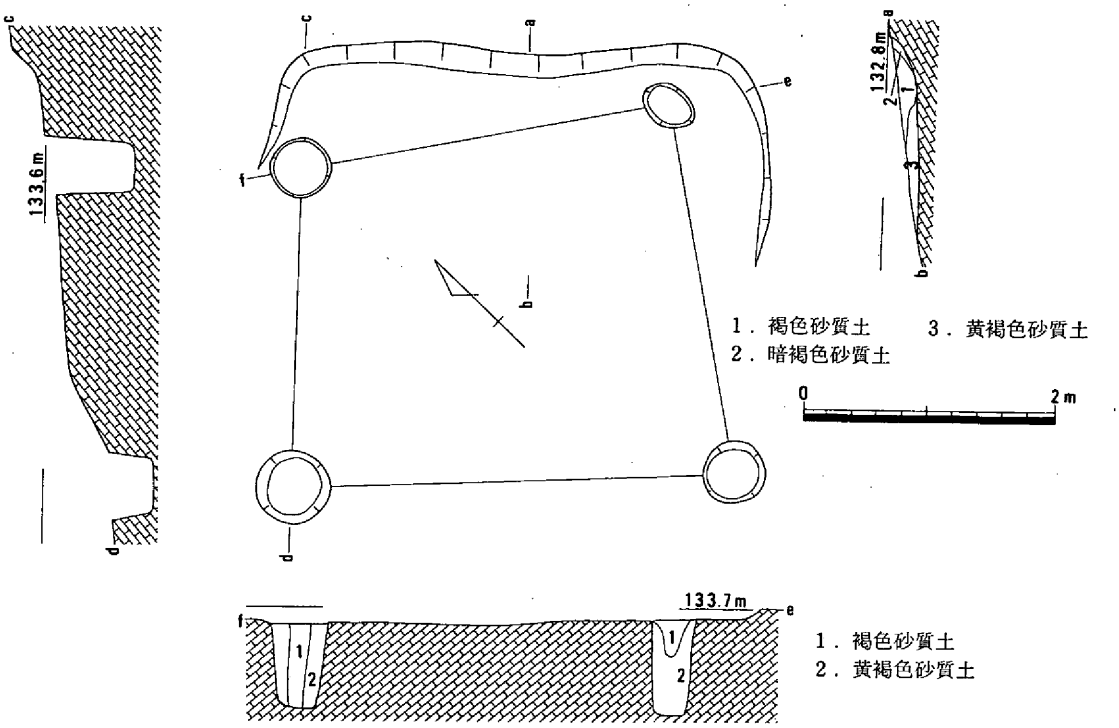
竪穴住居43の南に検出した非常に小さな方形住居。「コ」の字形の壁体溝と平坦面を伴う。平坦面の長さ200cm、幅90cm、海抜高133.4mを測る。埋土は暗黄褐色土だが、遺物はない。住居として使用されていたものか疑わしい。

竪穴住居45（第215図）

竪穴住居42の北上方に検出した小さな三日月形住居。平坦面のみである。平坦面の長さ330cm、幅70cm、海抜高133.1mを測る。埋土は暗黄褐色土だが、遺物は甕がある。住居として使用されていたものか疑わしい。柱穴が１本あるが、伴うか分からない。



第216図　竪穴住居42・45出土遺物



第217図　竪穴住居46（1/60）

竪穴住居46（第217図）

竪穴住居37の南東隣に検出した方形住居である。急斜面に作られているため床平坦面は幅130cmしか残存していない。その面の海抜高は132.5mを測る。断面観察では上層に壁体溝らしい土層が認められる。柱穴は４本まとまるが、やや歪んだ方形を呈する。柱痕の残る柱穴もある。遺物は土器細片が若干出ているが時期が分かるものではない。

竪穴住居47（第215図）

竪穴住居37の南東隣にすこしずれて検出した方形住居である。急斜面に作られているため床平坦面は幅100cmしか残存していない。その面の海抜高は132.4mを測る。柱穴は４本まとまる。北側の２本には１本ずつ別の柱穴が寄り添っている。建て替えを意味するものか。遺物は土器細片が若干出ているが時期が分かるものではない。

竪穴住居48（第218図）

竪穴住居６の北東上で検出した半円形住居である。床平坦面の残りは良くない。その面の海抜高は132.6mを測る。溝も柱穴も見当たらない。遺物もなく、時期は不明である。

竪穴住居49（第219図）

４区AのA－16杭北で検出した三日月形の住居である。床面の海抜高は132.3m、その長さ310cm、幅60cmが残存している。遺物は出土していない。

竪穴住居50（第222図）

４区AのA－９杭東で検出した「コ」の字形壁体溝だけの住居である。溝幅45cm、深さ10cm、長さ700cm、検出面の海抜高は133.9mを測る。溝の中に杭のような小穴が６本ある。遺物は５点実測出来た。甕の口縁部と底部小破片である。時期は弥生後期としたい。

竪穴住居51（第222図）

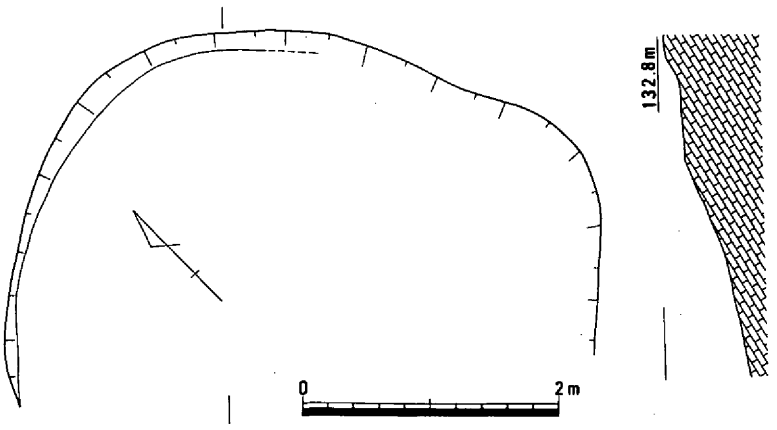
竪穴住居50の南にあって「L」字溝だけ検出できた住居である。検出面の海抜高は133.9mを測る。遺物は図の１・２の２点を実測出来た。両方とも甕の口縁部である。弥生後期であろう。

竪穴住居52（第222図）

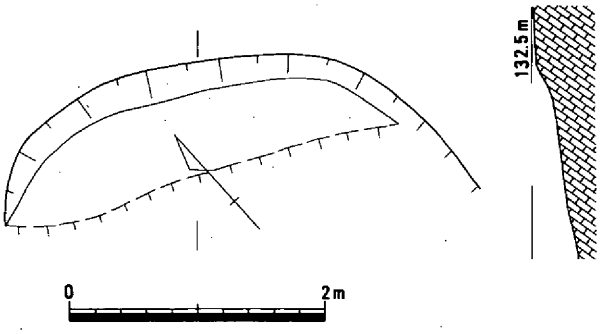
竪穴住居50の西下方にあって「L」字溝だけ検出できた住居である。検出面の海抜高は133.6mを測る。溝の中に杭のような小穴を３本竪穴住居45と同様に検出した。遺物は１点実測出来た。甕形土器の底部であるが、焼成前に小さな穴を開けている。こしきである。

竪穴住居53（第223図）

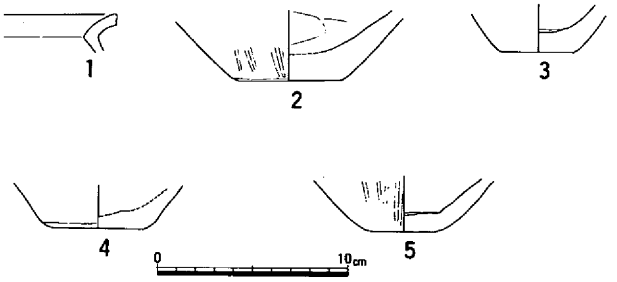
４区AのA－10杭北で検出した「コ」の字溝だけの住居である。溝幅45cm、深さ10cm、長さ400cm、検出面の海抜高は135.2mを測る。土器なし。時期不明。



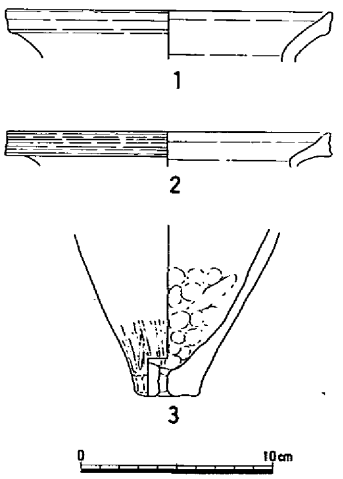
第218図　竪穴住居48（1/60）



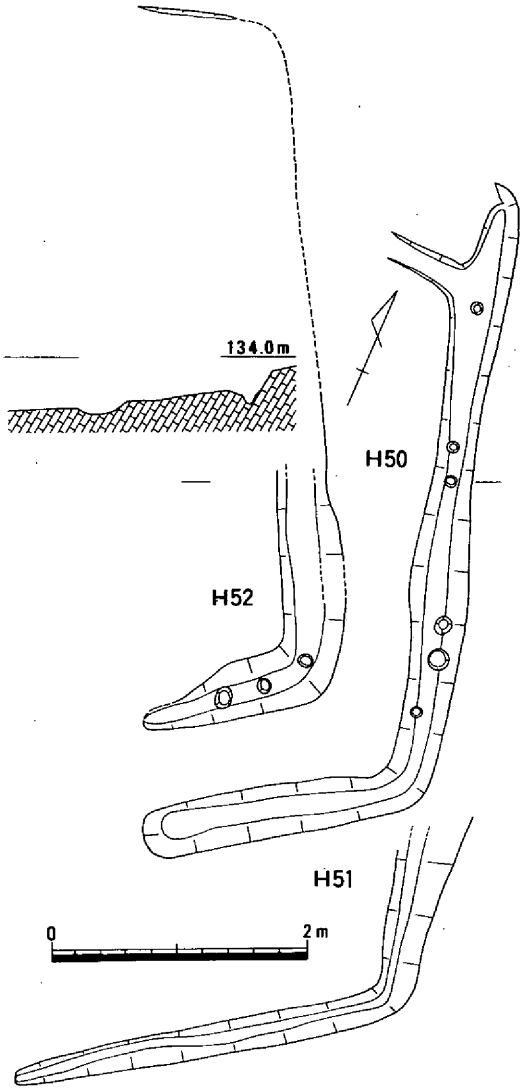
第219図　竪穴住居49（1/60）



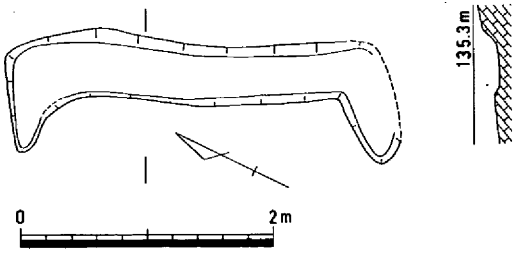
第220図　竪穴住居50出土遺物



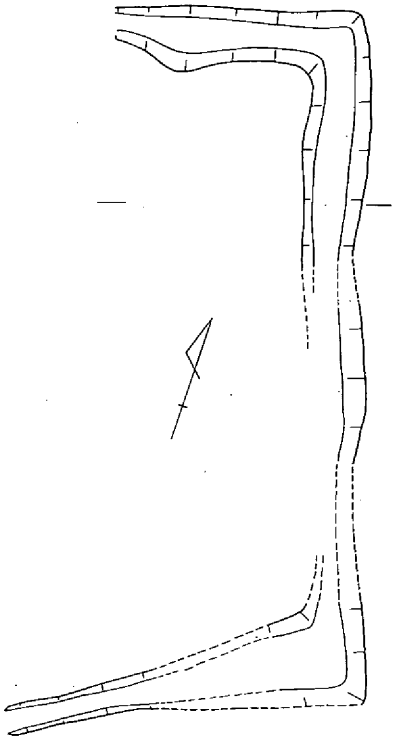
第221図　竪穴住居51・52出土遺物

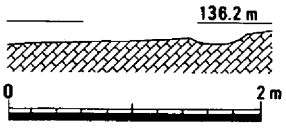


第222図　竪穴住居50・51・52（1/60）

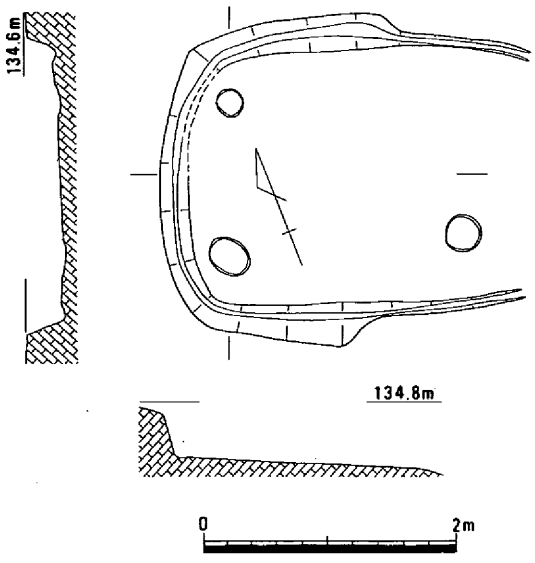


第223図　竪穴住居53





第224図　竪穴住居54（1/60）



第225図　竪穴住居55（1/60）

竪穴住居54（第224図）

４区ＡのＡ―11杭北東で検出した「コ」の字溝だけの住居である。溝幅45cm、深さ５cm、長さ1000cm、検出面の海抜高は136.1ｍを測る。

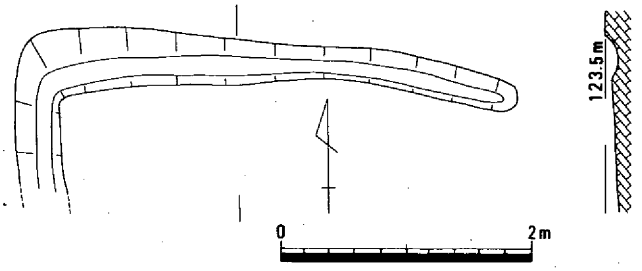
竪穴住居55（第225図）

４区ＡのＡ―21杭北で検出した「コ」の字溝と柱穴３本を伴う小さな住居である。溝内部の平坦面は長辺270cm、短辺200cmを測る。

遺物は土器細片が出土しているが時期不明。

竪穴住居56（第226図）

4区Aの最南端で検出した「L」字溝だけの住居である。溝検出面の海抜高は123.5m、溝幅50cm、溝全長500cmを測る。土器細片が出土しているが、時期の分かるほどのものではない。



第226図　竪穴住居56（1/60）

竪穴住居57（第227図）

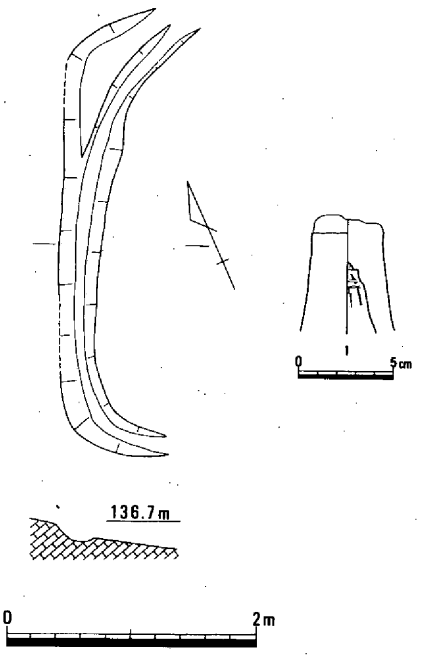
竪穴住居3の東下方で検出した住居である。「L」字溝と床平坦面を伴う。溝検出面の海抜高は136.7m、溝幅35cm、溝全長350cmを測る。遺物は埋土中から少量の土器が出土している。高杯の脚柱部から時期は弥生後期と分かる。

竪穴住居58（第228図）

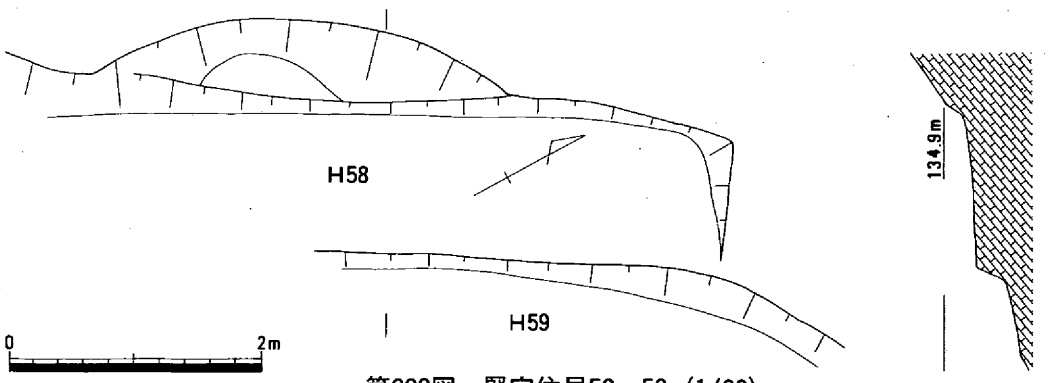
4区Aの最北東端で検出した住居である。溝を伴わない。狭い平坦面の長さ500cm、幅80cm、海抜高134.7mを測る。遺物は埋土中から少量の土器が出土している。鉢・高杯から時期は弥生後期であろう。

竪穴住居59（第228図）

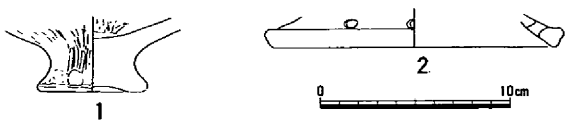
竪穴住居58の東下方で検出した住居である。溝を伴わない。狭い平坦面の長さ400cm以上・幅50cm、海抜高134.4mを測る。遺物は埋土中から若干の土器出土。時期不明。



第227図　竪穴住居57（1/60）・出土遺物



第228図　竪穴住居58・59（1/60）



第229図　竪穴住居58出土遺物

竪穴住居60（第230図）

４区Ｃの西端で検出した「し」の字形の壁体溝を伴う住居。壁の立ち上がりは40cmある。床面の残りは長さ450cm、幅180cm。海抜高は138.6m。遺物は土器と砥石がある。土器は壺・甕の小片である。土器の様式から住居の時期は弥生後期と言える。

竪穴住居61（第233図）

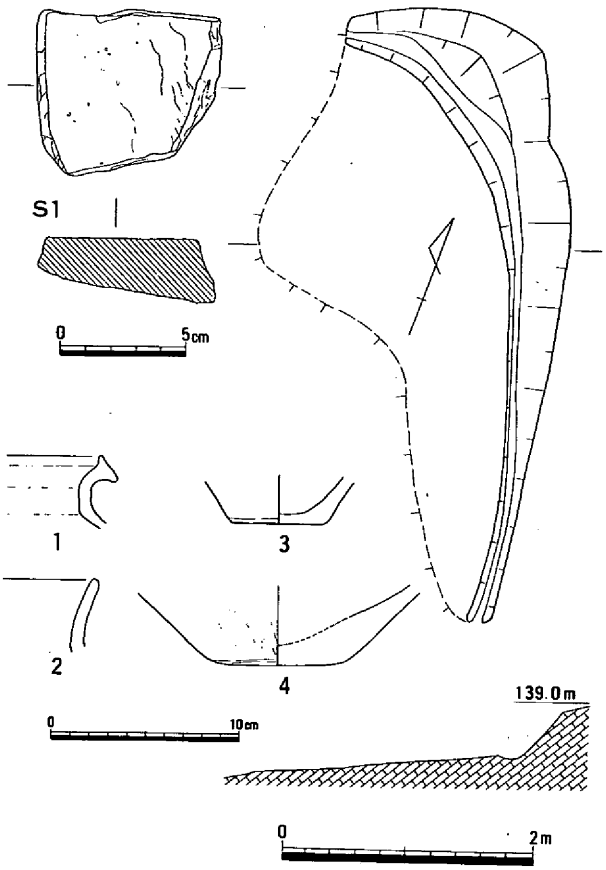
竪穴住居60の西南で検出した「し」の字形の壁体溝を伴う住居。壁の立ち上がりは断面では40cmある。床面の残りは長さ600cm、幅100cm。海抜高は137.2m。土器は壺・甕・高杯・器台の小片である。土器の様式から住居の時期は弥生後期。

竪穴住居62（第231図）

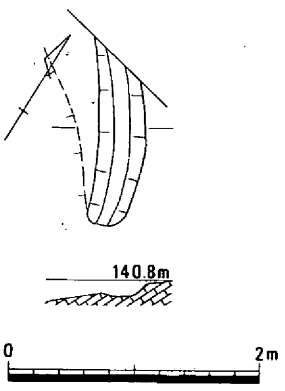
４区Ｃの中央で検出した短い壁体溝を伴う住居。壁の立ち上がりは10cmある。床面の残りは長さ170cm、幅40cm。海抜高は140.7m。遺物は皆無である。住居の時期は不明と言わざるを得ない。

竪穴住居63（第232図）

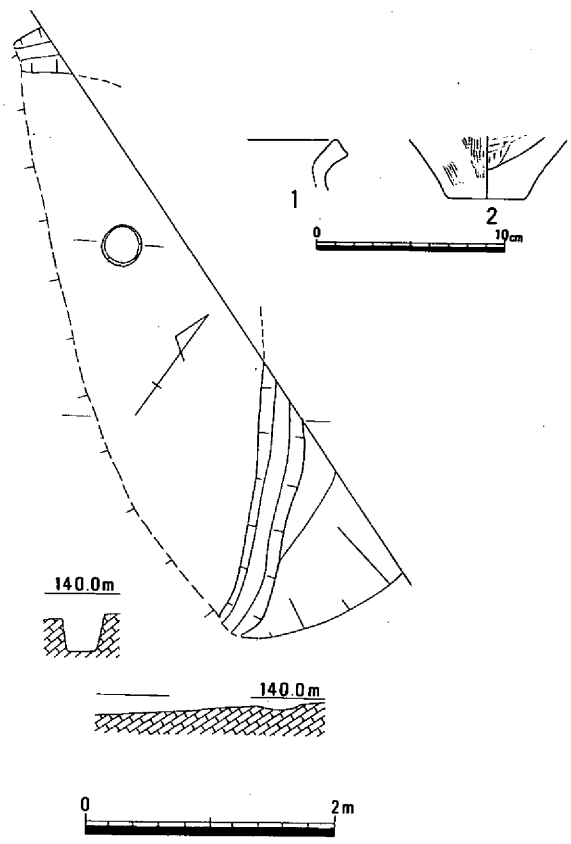
竪穴住居62の西で検出した「し」の字形の壁体溝を伴う住居。壁の立ち上がりは断面では40cmある。床面の残りは長さ200cm、幅150cm。海抜高は139.8m。柱穴は１本見つけた。土器は甕の小片である。土器の様式から住居の時期は弥生後期。



第230図　竪穴住居60（1/60）・出土遺物



第231図　竪穴住居62（1/60）



第232図　竪穴住居63（1/60）・出土遺物

竪穴住居64（第236図）

竪穴住居63の南西で検出した「コ」の字形の住居。壁の立ち上がりは断面では30cmある。床面の残りは長さ480cm、幅100cm。海抜高は138.7m。柱穴は3本見つけた。土器は甕の小片である。土器の様式から住居の時期は弥生後期。

竪穴住居65（第236図）

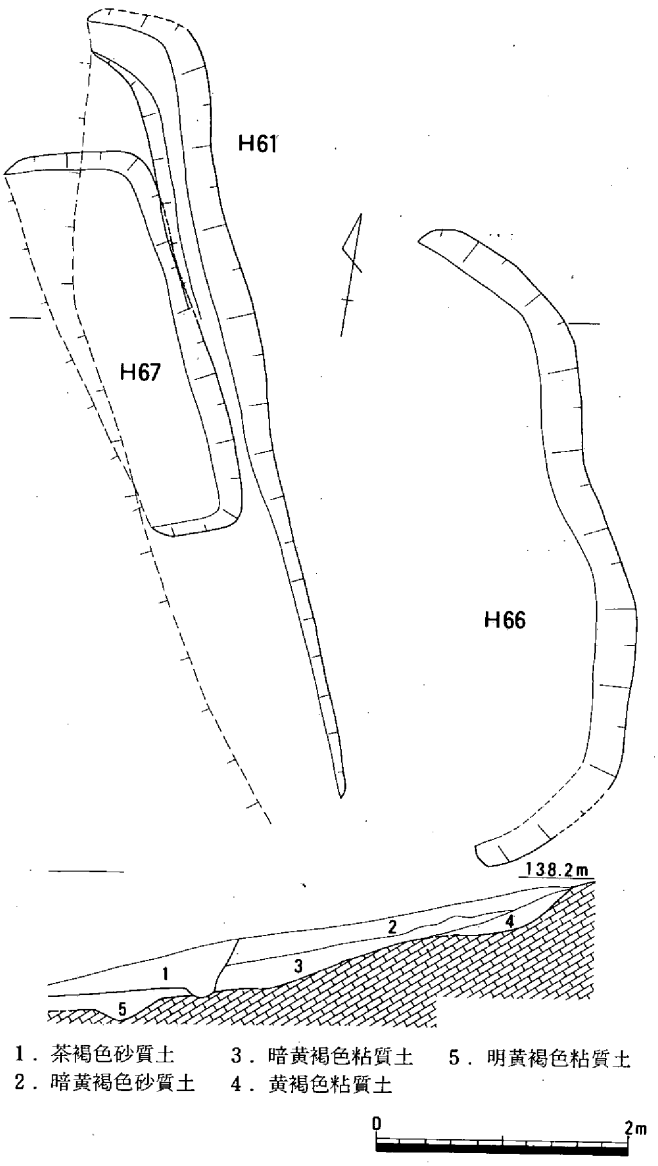
竪穴住居64の南で検出した一部壁溝を伴う住居。壁の立ち上がりは断面では25cmある。床面の残りは長さ500cm、幅120cm。海抜高は138.2m。柱穴は1本検出した。土器は皆無である。住居の時期は不明と言わざるを得ない。

竪穴住居66（第233図）

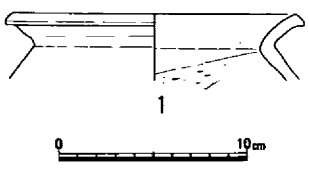
竪穴住居61の東上で検出した「コ」の字形の住居。壁の立ち上がりは断面では40cmある。床面の残りは長さ480cm、幅115cm。海抜高は137.8m。土層断面の観察から竪穴住居60より古いことが分かる。土器は出土していない。時期不明。

竪穴住居67（第233図）

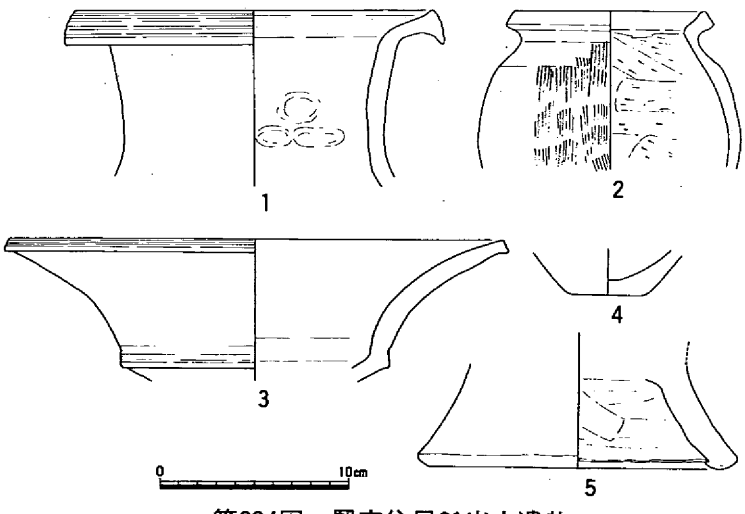
竪穴住居61の西下で検出した「コ」の字形の住居。土層断面の観察から壁の立ち上がりは断面では20cmあり、壁体溝らしき凹みも見る。床面の残りは長さ480cm、幅115cm。海抜高は137.8m。土層断面の観察から竪穴住居60より古い。



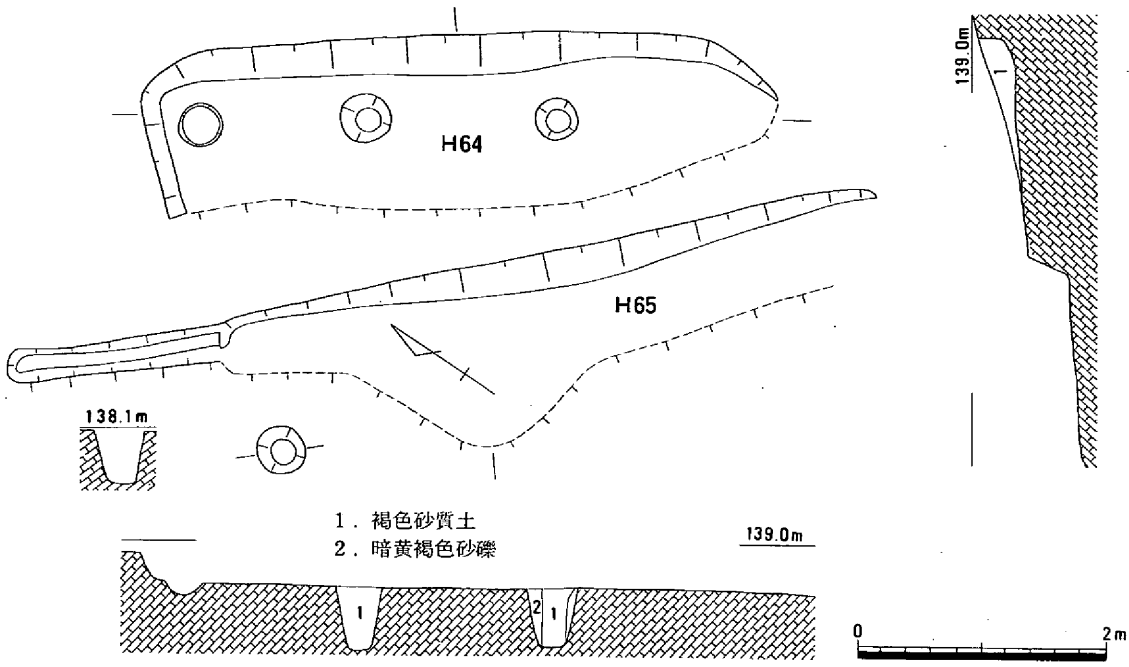
第233図　竪穴住居61・66・67（1/60）



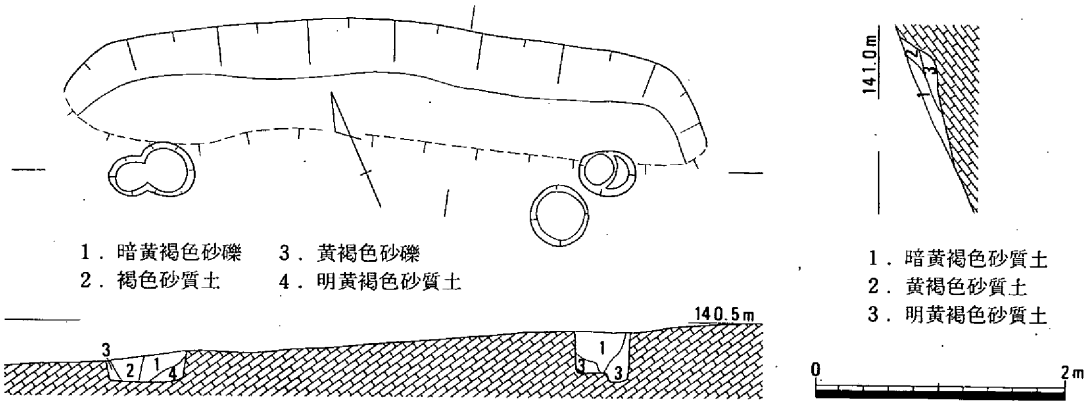
第235図　竪穴住居64出土遺物



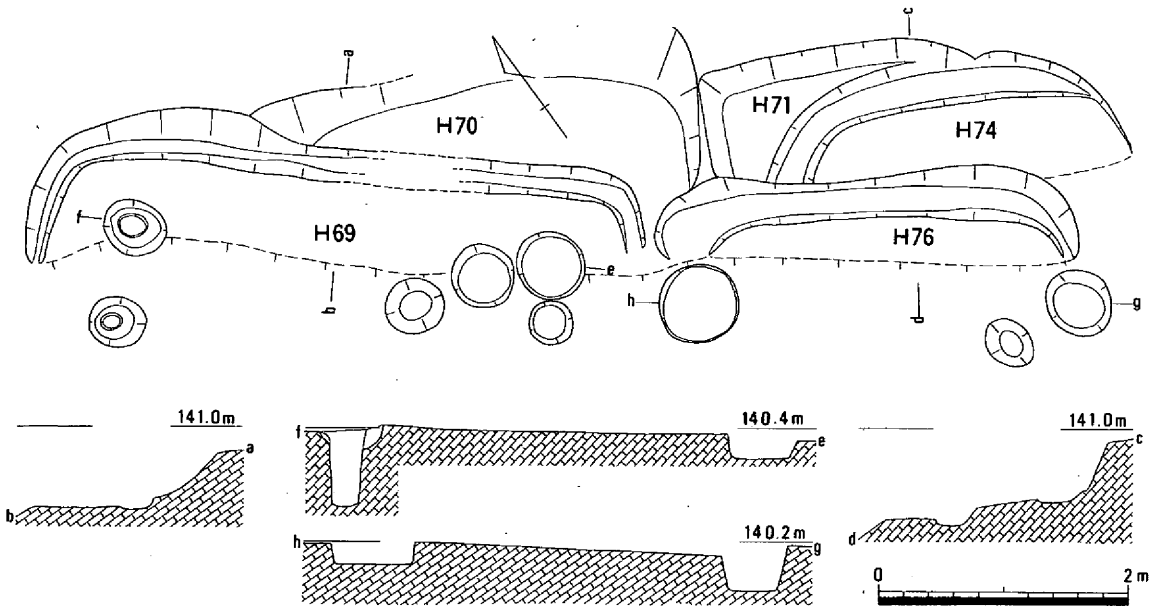
第234図　竪穴住居61出土遺物



第236図　竪穴住居64・65（1/60）



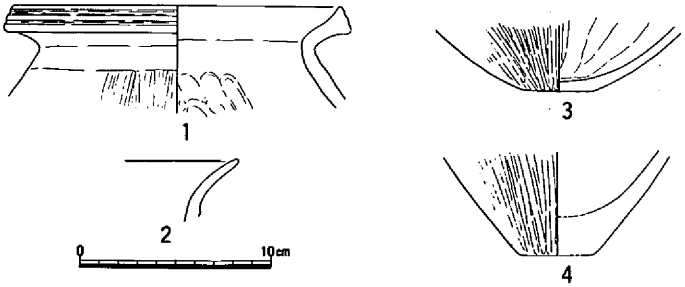
第237図　竪穴住居68（1/60）



第238図　竪穴住居69・70・71・74・76（1/60）

竪穴住居68（第237図）

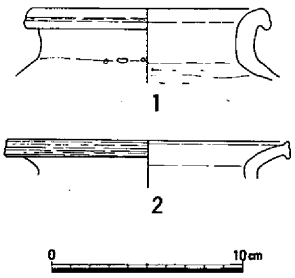
竪穴住居62の東方11ｍで検出した「コ」の字形の住居。壁の立ち上がりは断面では30cmある。床面の残りは長さ480cm、幅50cm。海抜高は140.5m。柱穴は４本検出した。建て替えが考えられる。土器は出土していない。住居の時期は不明。



第239図　竪穴住居69出土遺物

竪穴住居69（第238図）

竪穴住居68の東方３ｍで検出した「コ」の字形の壁体溝を伴う住居。壁の立ち上がりは断面では50cmある。床面の残りは長さ450cm、幅70cm。海抜高は140.4m。柱穴は４本検出した。建て替えが考えられる。土器は甕・高杯片が出土。住居の時期は弥生後期。



第240図　竪穴住居71出土遺物

竪穴住居70（第238図）

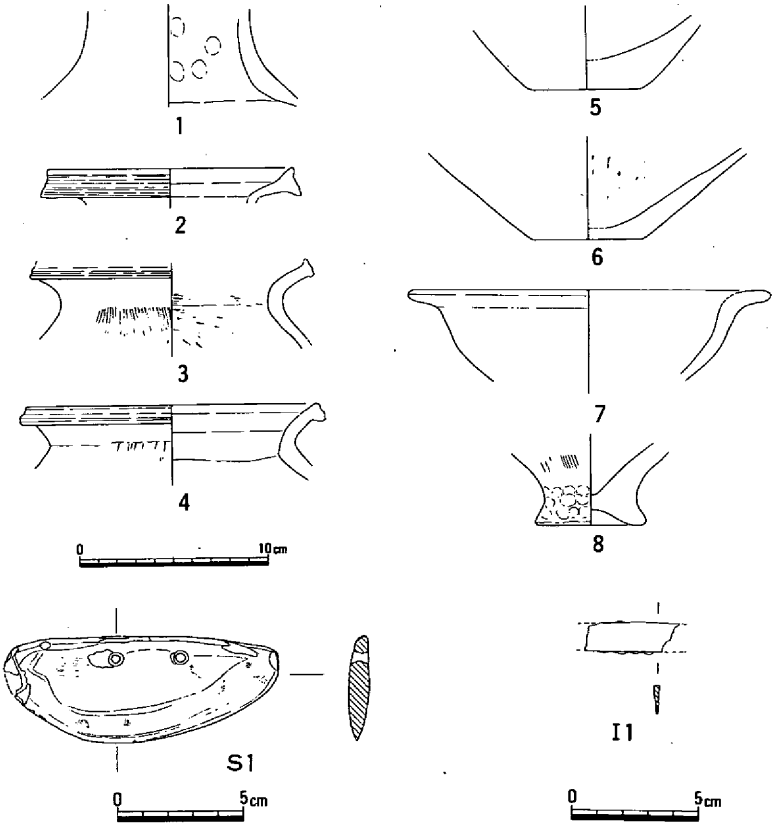
竪穴住居69の北上で検出した「L」の字形住居。壁の立ち上がりは断面では40cmある。床面の残りは長さ300cm、幅100cm。海抜高は140.5m。竪穴住居65より古い。

竪穴住居71（第238図）

竪穴住居70の東に接して検出した「L」の字形住居。壁の立ち上がりは断面では40cmある。床面の残りは長さ300cm、幅160cm。海抜高は140.5m。土器は壺・甕片が出土。時期は弥生後期。

竪穴住居72（第243図）

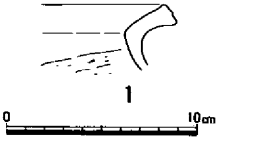
４区Ｃの西端、竪穴住居71の東で検出した「L」の字形溝を伴う住居。壁立ち上がりは40cmある。柱穴は２本。床面の長さ450cm、幅120cm。海抜高は140.6m。土器・石包丁・鉄器が出土。時期は弥生後期。



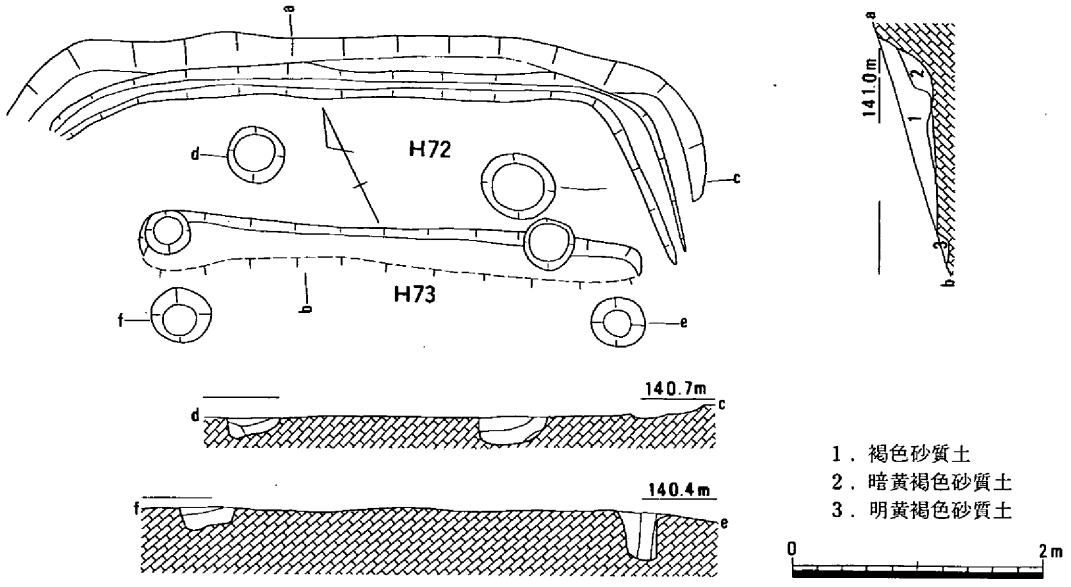
第241図　竪穴住居72出土遺物

竪穴住居73（第243図）

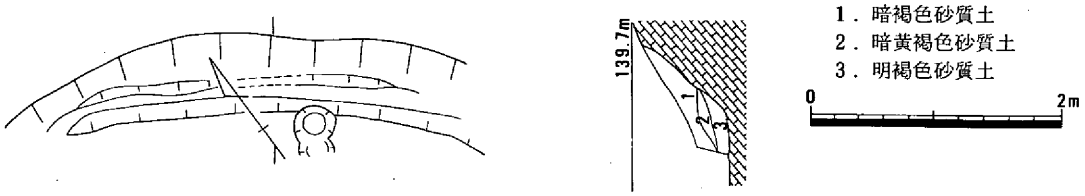
竪穴住居72の南下で検出した住居。壁立ち上がりは10cmしかない。柱穴は２本。床面は長さ390cm、幅30cm。海抜高は140.5m。土器は甕片が出土。時期は弥生後期。



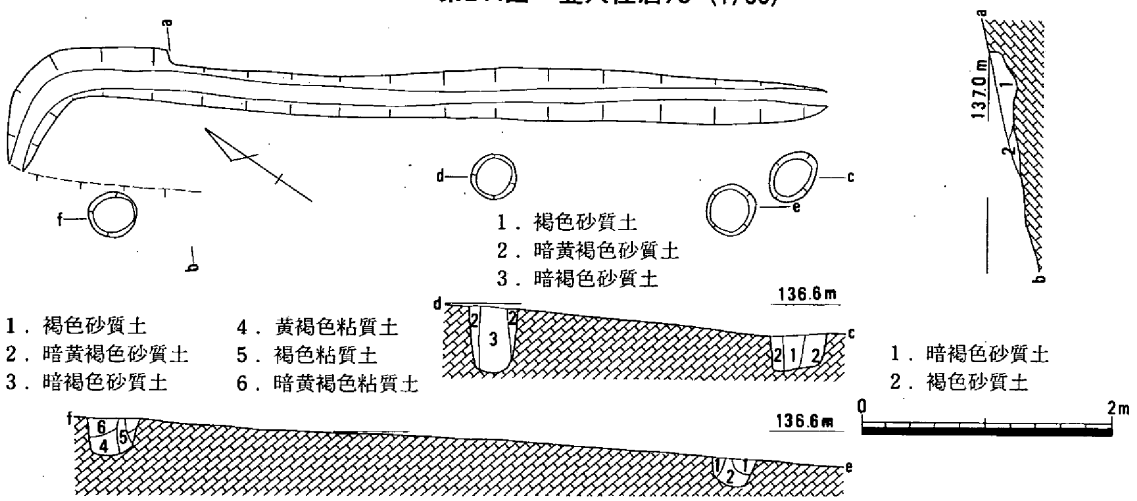
第242図　竪穴住居73出土遺物



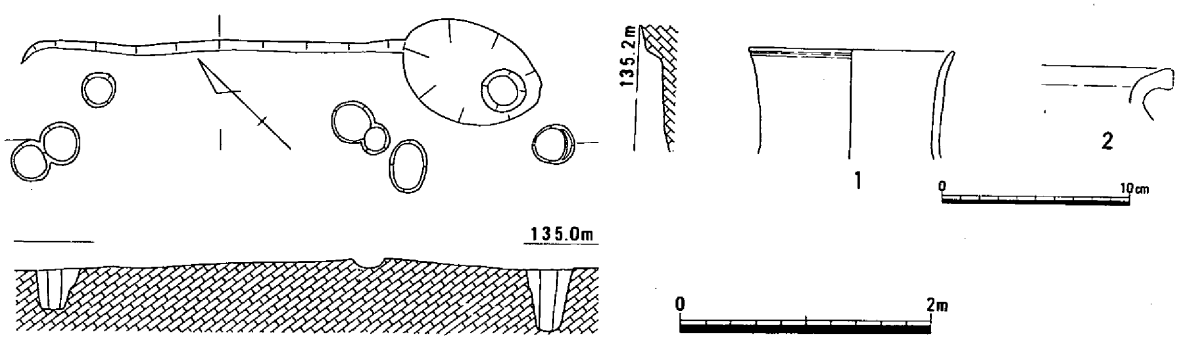
第243図　竪穴住居72・73（1/60）



第244図　竪穴住居75（1/60）



第245図　竪穴住居77（1/60）



第246図　竪穴住居78（1/60）・出土遺物

竪穴住居74（第238図）

竪穴住居71の南下で検出した壁体溝のみの住居。床面は長さ250cm、幅60cm。海抜高は140.4m。土器は甕片が出土。時期は弥生後期。

竪穴住居75（第244図）

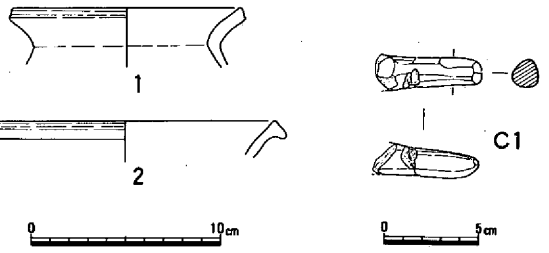
竪穴住居68の南東下で検出した壁体溝のみの住居。床面は長さ330cm、幅20cm。海抜高は139.0m。棒形土製品片が出土。時期は弥生後期か。

竪穴住居76（第238図）

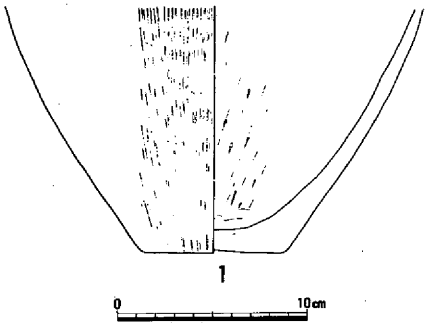
竪穴住居74の南西下で検出した壁体溝のみの住居。床面は長さ280cm、幅30cm。海抜高は140.3m。柱穴2本は伴うかどうか。土器は甕底部片が出土。時期は弥生後期。

竪穴住居77（第245図）

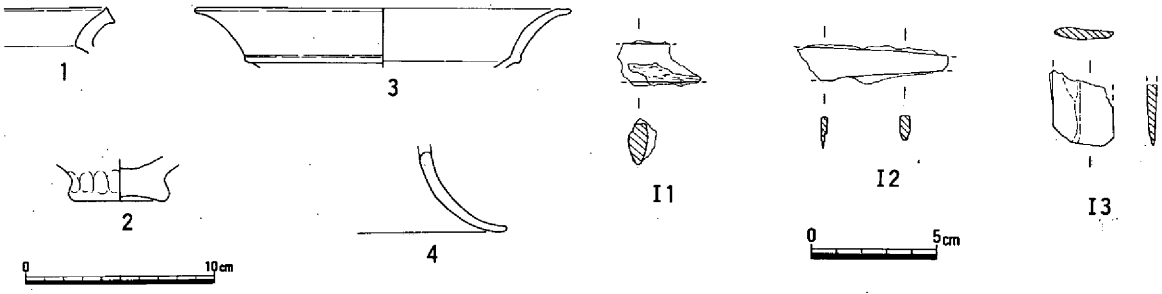
竪穴住居65の西下で検出した「L」溝と柱穴2本を伴う住居。床面は長さ650cm、幅70cm。海抜高は136.8m。土器は甕・鉢底部・高杯片が出土。鉄器も3点ある。刀子とノミか。時期は土器から弥生後期と考えたい。



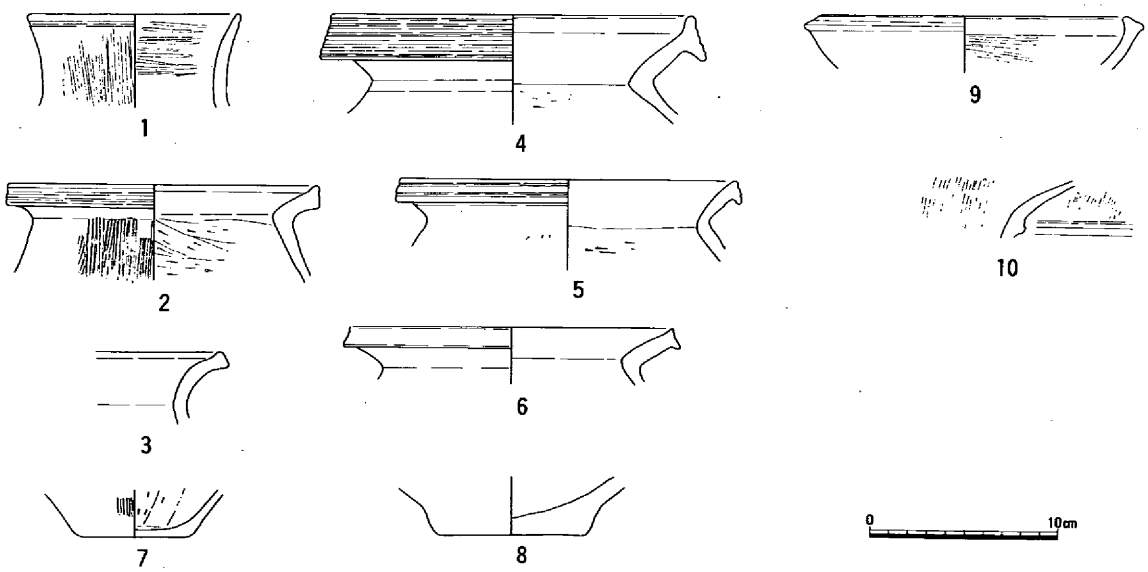
第247図　竪穴住居74出土遺物　第248図　竪穴住居75出土遺物



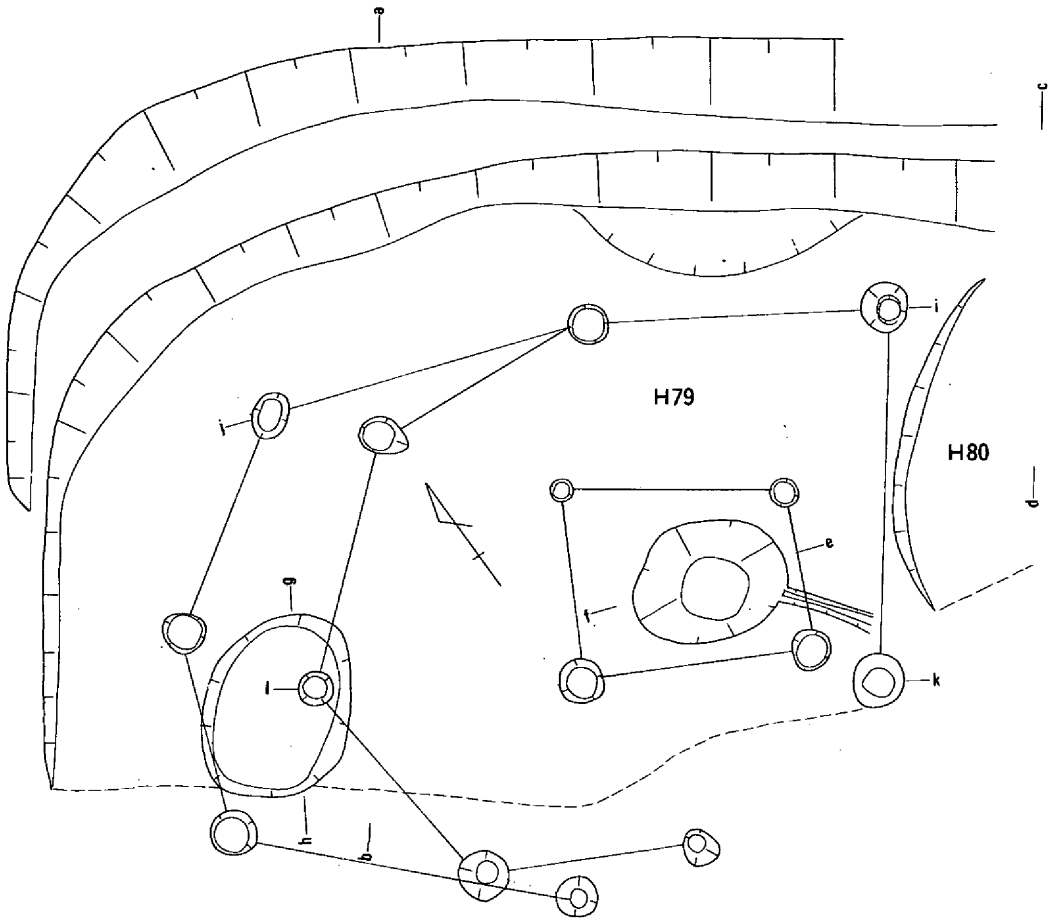
第249図　竪穴住居76出土遺物



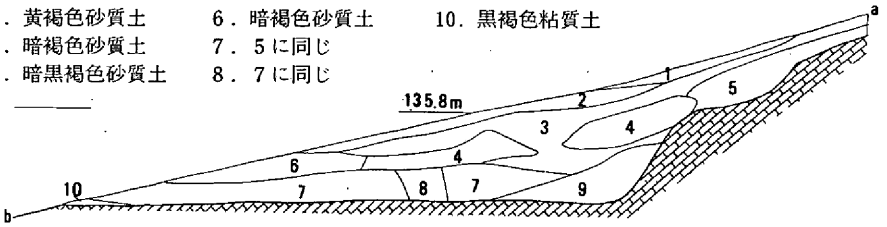
第250図　竪穴住居77出土遺物

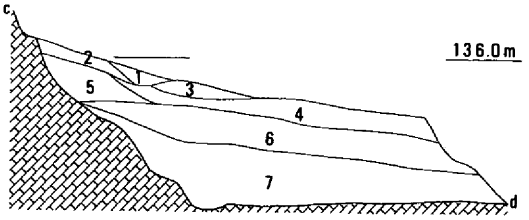


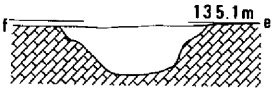
第251図　竪穴住居79出土遺物



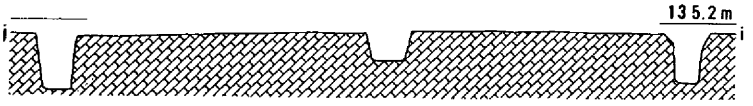
1．黄褐色微砂質土　　5．暗黄褐色砂質土　　9．8に同じ
2．黄褐色砂質土　　6．暗褐色砂質土　　10．黒褐色粘質土
3．暗褐色砂質土　　7．5に同じ
4．暗黒褐色砂質土　　8．7に同じ

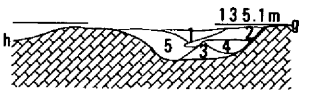




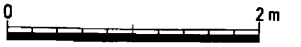


1．明黄褐色砂質土　　4．明褐色砂質土　　7．暗黄褐色砂質土
2．暗黄褐色微砂質土　　5．暗黄褐色砂質土
3．黄褐色微砂質土　　6．黒黄褐色砂質土





1．暗黄褐色砂質土　　4．褐色砂質土
2．黄褐色砂質土　　5．暗褐色砂質土
3．2よりやや暗い



第252図　竪穴住居79・80（1/60）

竪穴住居78（第246図）

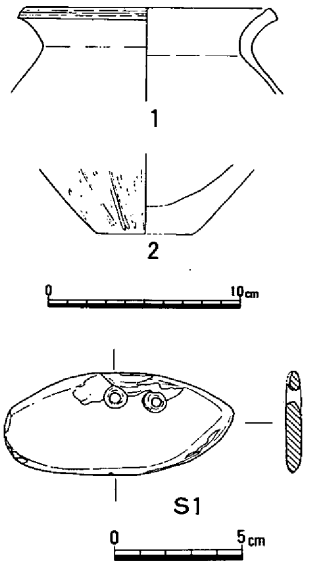
竪穴住居65の南下で検出した柱穴を伴う住居。床面は長さ400cm、幅50cm。海抜高は135.0m。柱穴は8本も検出したが、図の2本が伴うものか。土器は直口壺・壺片が出土。時期は弥生後期。

竪穴住居79（第252図、図版41—3）

4区C南端で検出した柱穴を6本伴う比較的残存状態の良い住居。壁は70cmもある。床面は長さ700cm、幅470cm。海抜高は135.1m。中央穴とそれから出る排水溝も残る。壺・甕・高杯が出土している。土器から時期は弥生後期。

竪穴住居80（第252図、図版41—3）

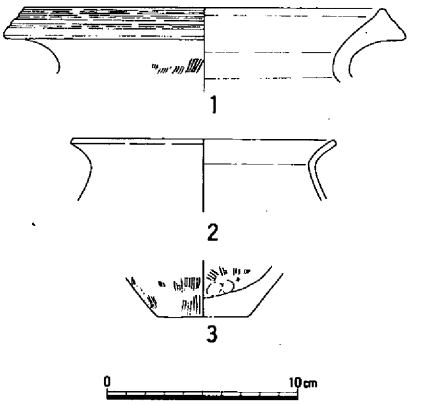
竪穴住居79の東で検出した住居。断面には溝状の凹みがある。大半が調査区外。床面海抜高は134.8m。断面では床面の幅230cm。竪穴住居77と同様残りが良い。土器なし。時期不明。



第253図　竪穴住居81出土遺物

竪穴住居81（第255図）

4区E南東端で検出した柱穴を2本伴う住居。断面には溝の痕跡がある。壁の立ち上がりは、20cm、床面は長さ500cm、幅210cm。海抜高は143.0m。2本の柱穴は極めて浅い。甕の口縁と底部、また完形の磨製石包丁も出土している。土器から時期は弥生後期。



第254図　竪穴住居83出土遺物

竪穴住居82（第256図）

竪穴住居81の北西上で検出した住居。逆「U」字形の段の中に「コ」の字形の溝と、浅い柱穴2本を伴う。2軒重複しているものか。土器なし。時期不明。

竪穴住居83（第258図）

竪穴住居82の北西上で検出した住居。「コ」の字形の溝と、浅い柱穴4本を伴う。柱間は180～200cm、柱穴の直径45～60cm、深さ10～20cm。床面は長さ300cm、幅110cm。海抜高は144.3m。土器は壺・甕が出土している。土器から時期は弥生後期。

竪穴住居84（第257図）

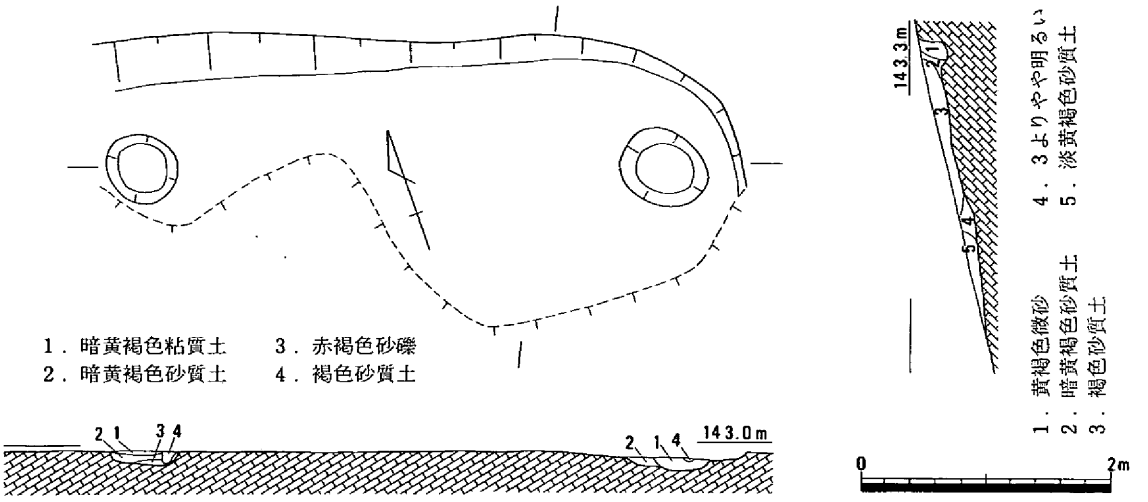
竪穴住居82の北東上で検出した住居。「コ」の字形の床面は長さ430cm、幅50cm。海抜高は144.5m。柱穴3本を伴う。あと1本は見つからなかった。柱穴の直径30～40cm、深さ10～20cm。土器なし。時期不明。竪穴住居85に切られている。

竪穴住居85（第257図）

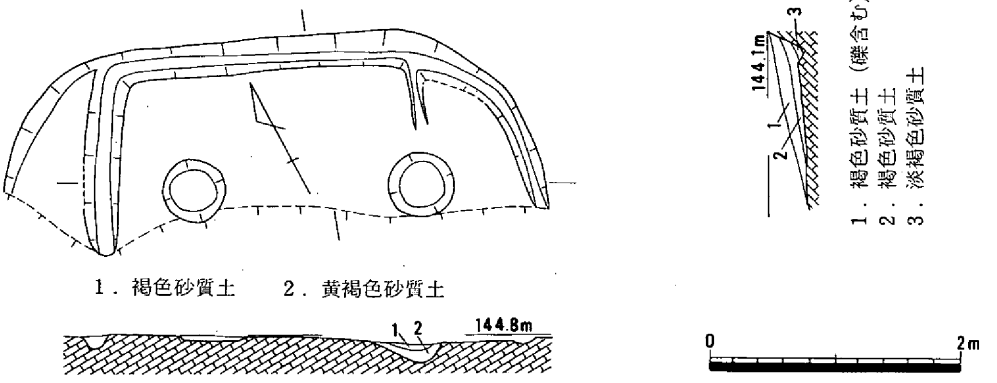
竪穴住居84の南下で検出した住居。横一字形の床面は長さ490cm、幅50cm。海抜高は144.3m。柱穴7本を伴う。あと1本は検出できなかった。4本柱の住居が重複しているものであろう。柱穴の直径40～50cm、深さ15～50cm。土器なし。時期不明。竪穴住居84を切っている。

竪穴住居86（第259図）

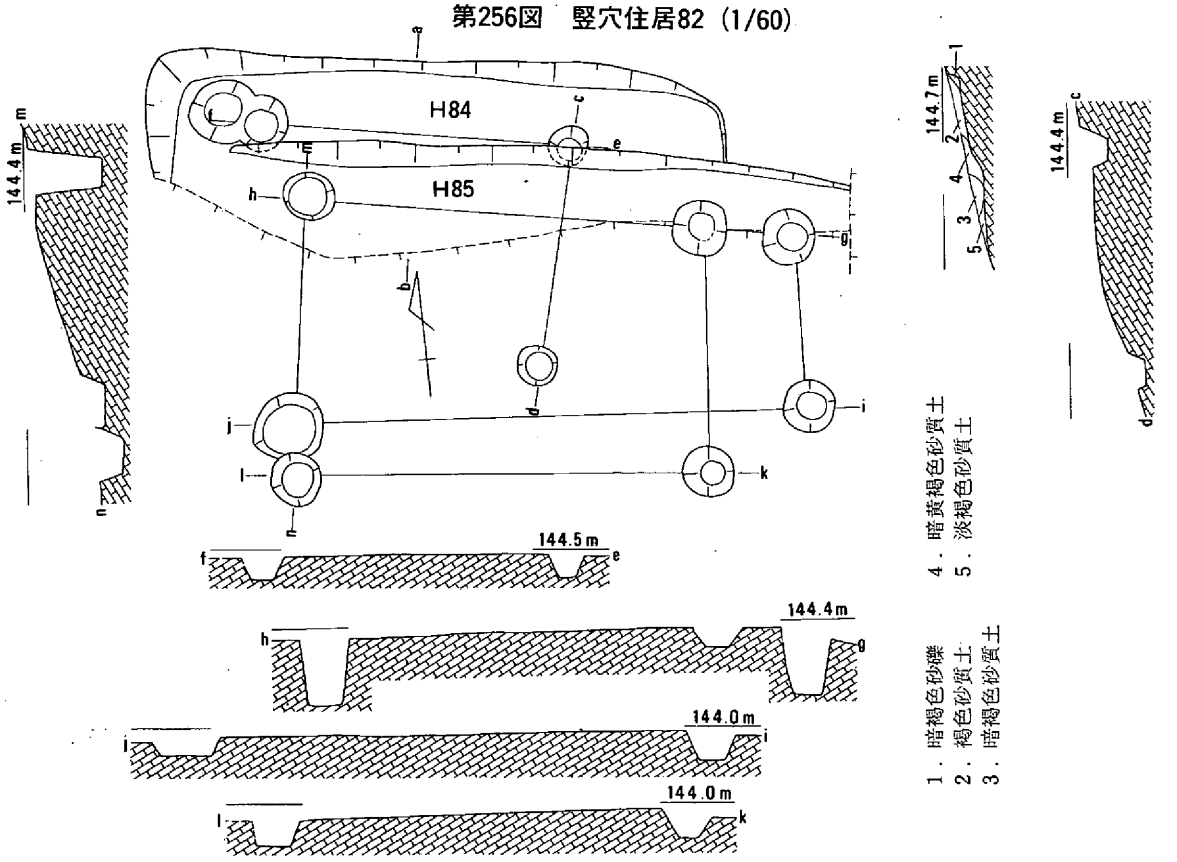
竪穴住居84の北上で検出した住居。西・南・東ともに抉り取られ、床面は長さ140cm、幅60cm。海抜高は145.2m。土器なし。時期不明。



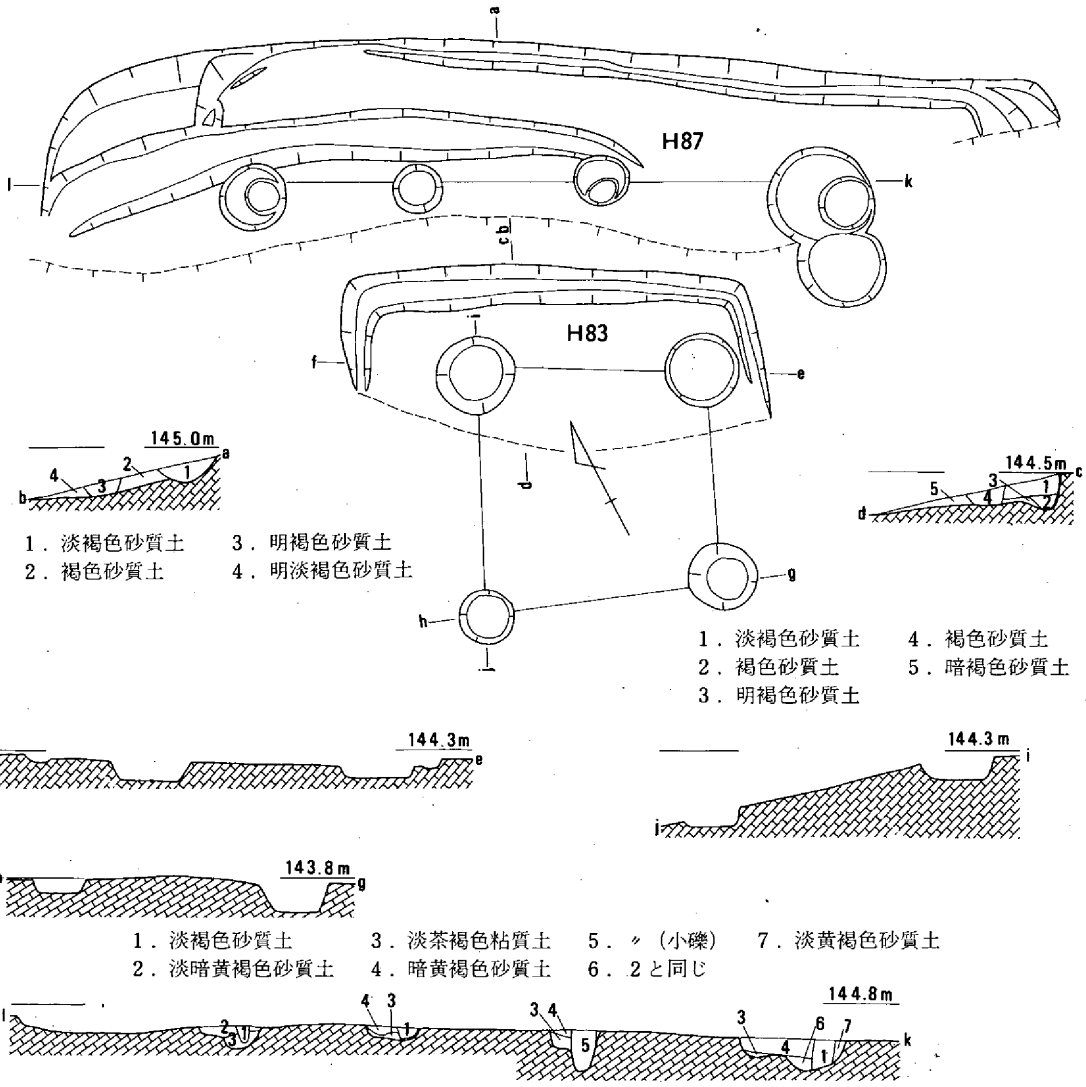
第255図　竪穴住居81（1/60）



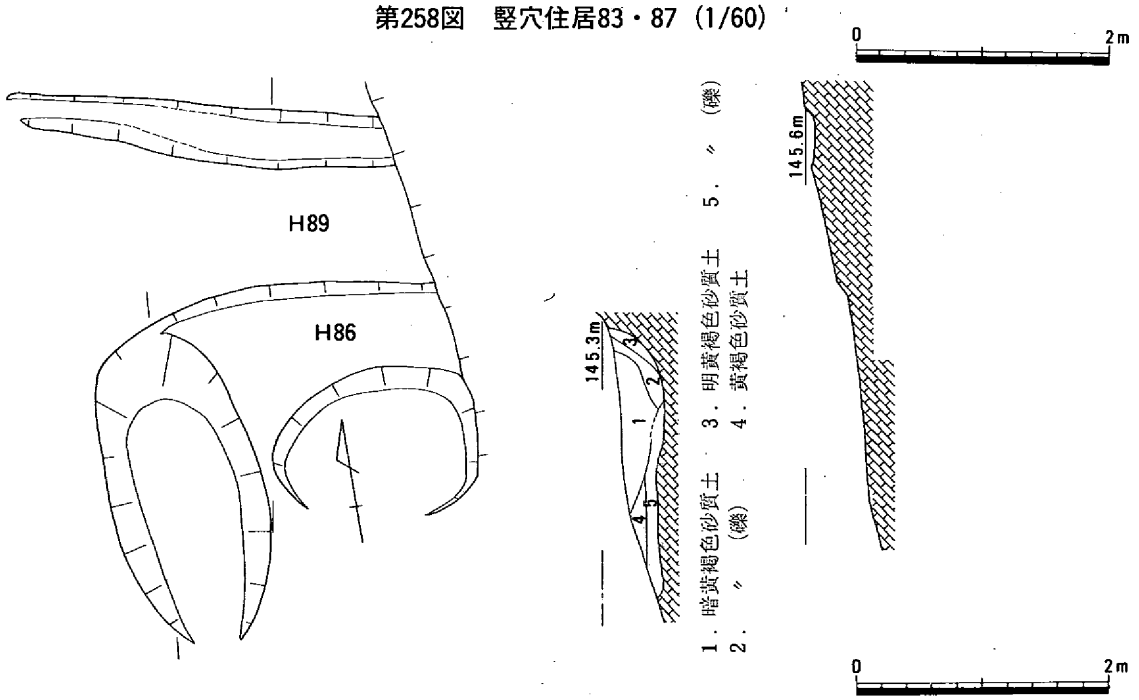
第256図　竪穴住居82（1/60）



第257図　竪穴住居84・85（1/60）



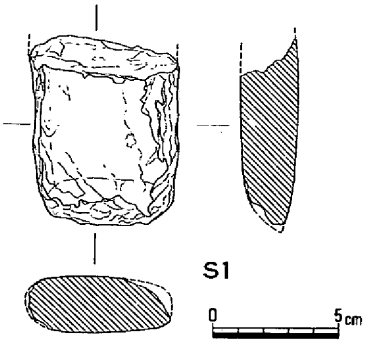
第258図　竪穴住居83・87（1/60）

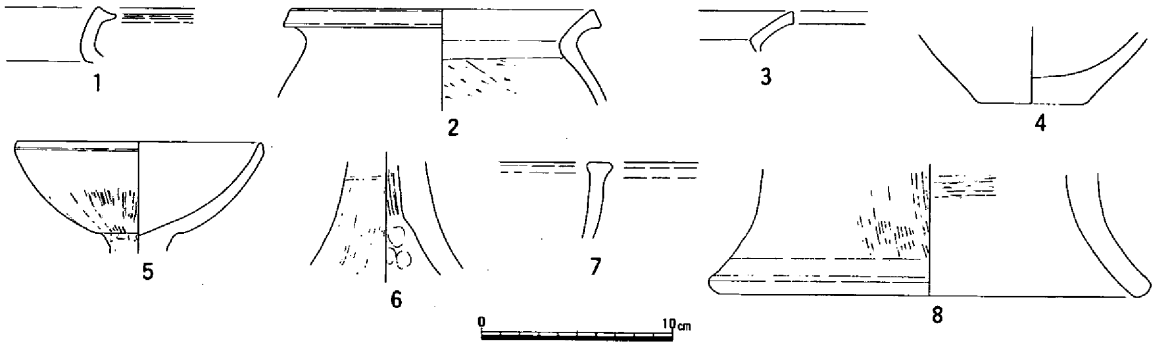


第259図　竪穴住居86・89（1/60）

竪穴住居87（第258図）

竪穴住居83の北上で検出した住居。細くて長い「コ」の字形の床面は長さ600cm、幅50cm。海抜高は144.7m。柱穴４本を伴う。柱穴４本は一列に並んでいる。２本ずつの組合せが出来るのかもしれない。また壁際には溝が残り、少し南下にも溝が存在する。したがって、２軒の重複が考えられる。土器は壺・甕・高杯・器台が出土し、石器は石斧片が出ている。土器からこの住居の時期は弥生後期にしておきたい。

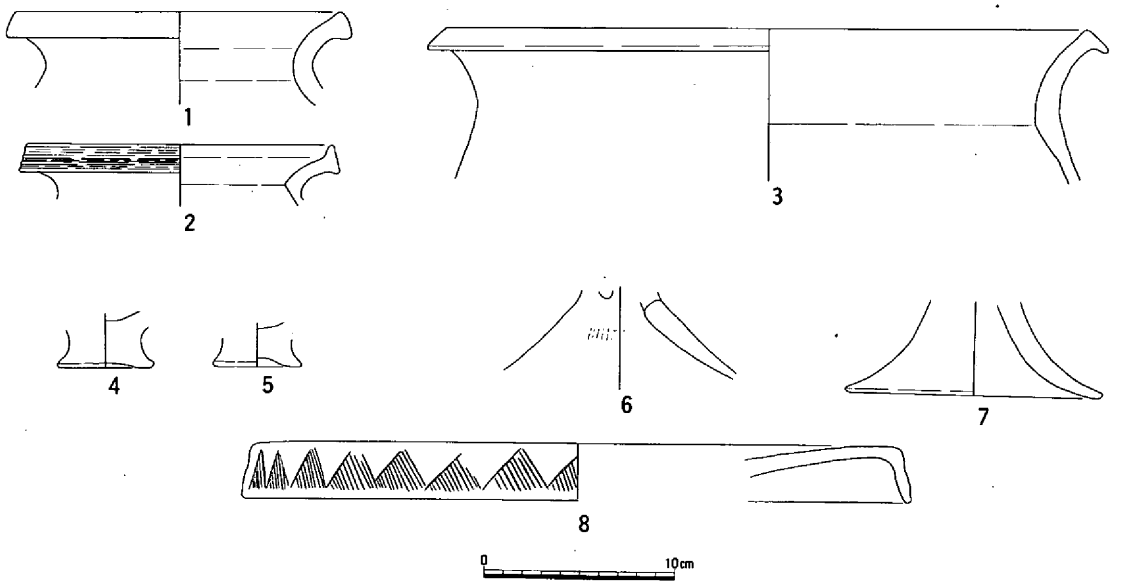




第260図　竪穴住居87出土遺物

竪穴住居88（第261図、第262図）

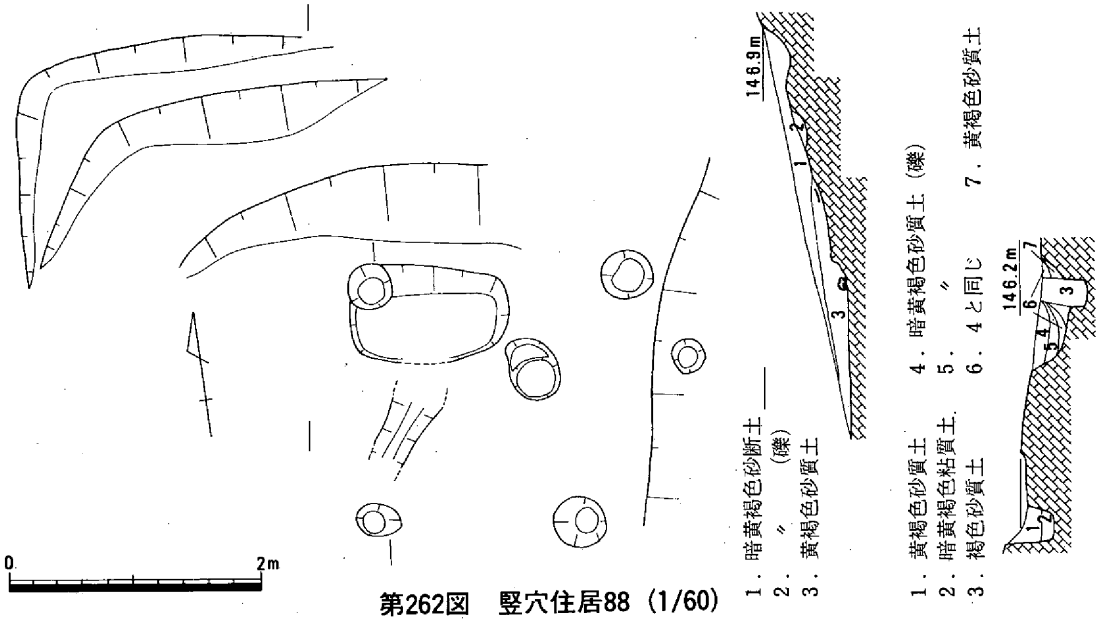
４区Ｅの北東隅で検出した住居。床面は長さ360cm、幅250cm。海抜高は146.2m。柱穴４本を伴うかもしれない。図の長方形土壙と溝はともなうかどうか分からない。断面では柱穴よりも古くなる。土器は壺・甕・高杯・鉢・装飾高杯が出土。土器から時期は弥生後期であろう。



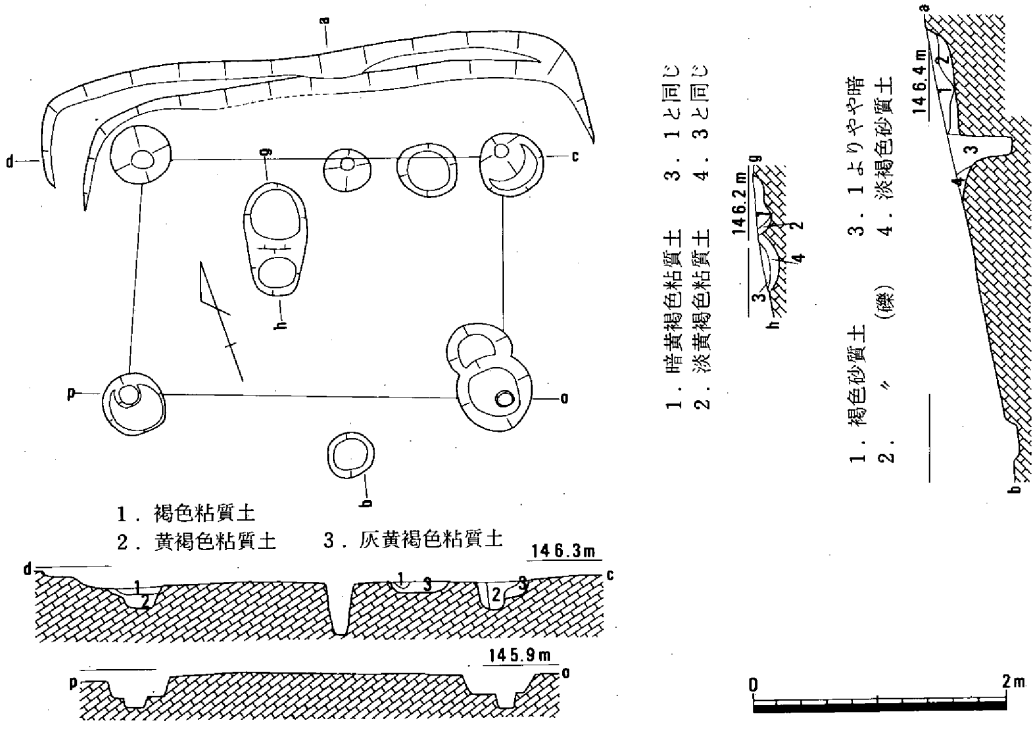
第261図　竪穴住居88出土遺物

竪穴住居89（第259図）

竪穴住居86の北上で検出した住居。壁体溝だけがやっと残存したものであろうか。床平坦面も残っていない。溝の長さ300cm、幅40cm、深さ10cm。検出面の海抜高は145.6m。土器など遺物は全く出ていない。したがって、時期は不明である。



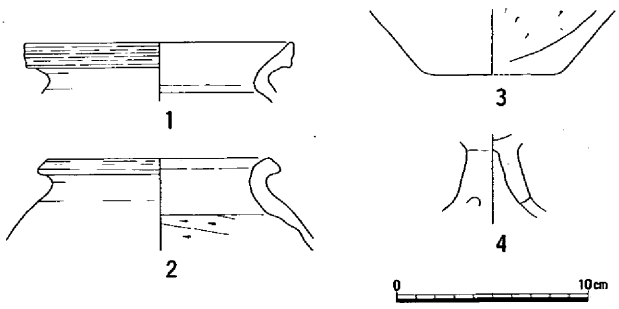
第262図　竪穴住居88（1/60）



第263図　竪穴住居90（1/60）

竪穴住居90（第263図）

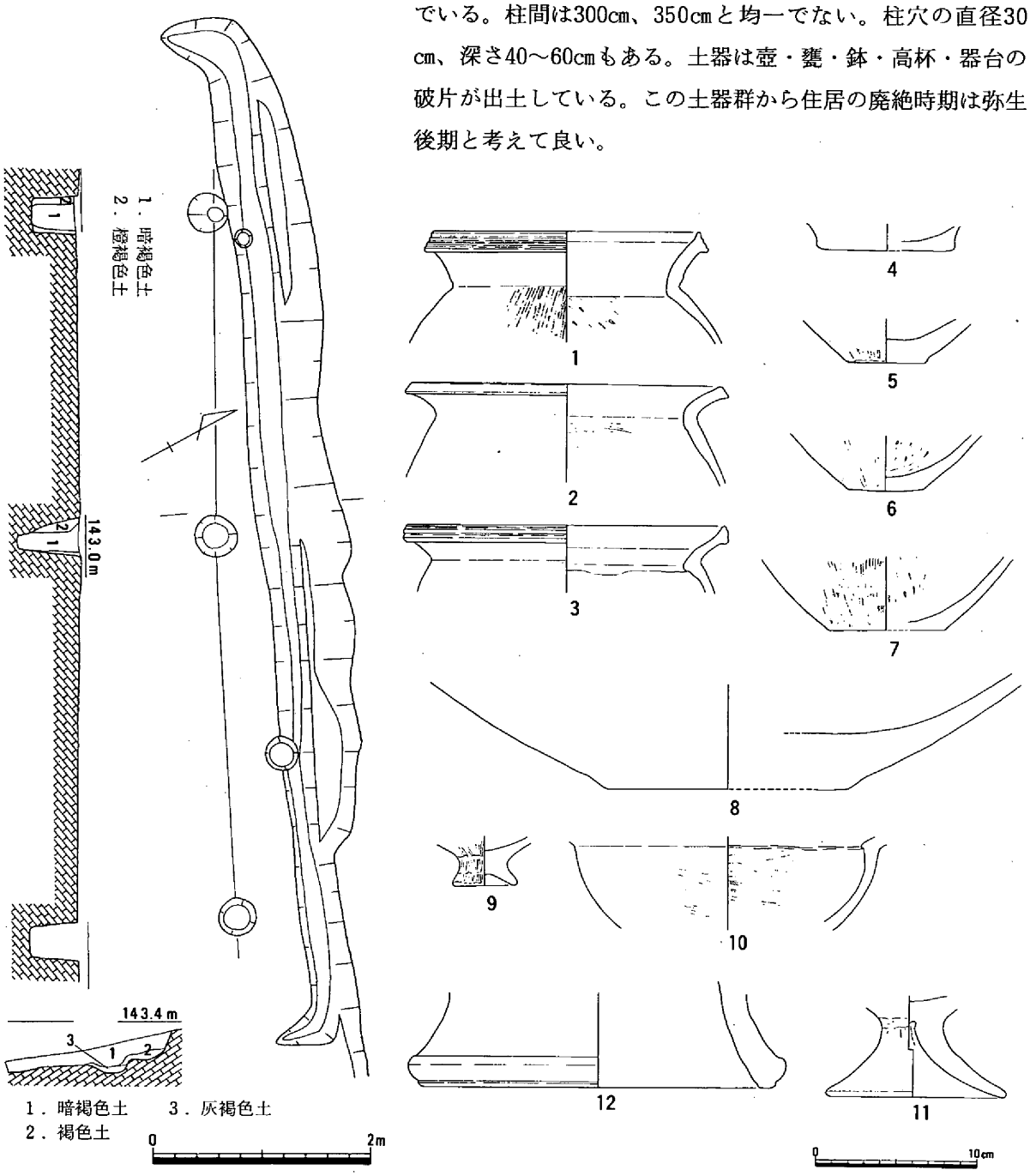
竪穴住居88の西で検出した住居。段は小さいが二段になっている。柱穴は4本でまとまる。中央穴らしき小土壙もある。柱穴の柱間は東西300cm、南北200cmを測る。床面の海抜高は146.2m。土器は甕・高杯の破片が出土している。この土器から住居の時期は弥生後期。



第264図　竪穴住居90出土遺物

竪穴住居91（第265図）

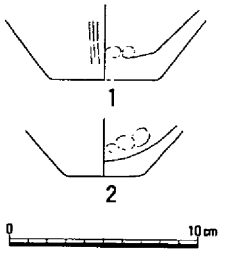
４区Ｅの南端で検出した東西に長い「コ」の字形溝を伴う住居。溝の深さは10cm。床平坦面の長さは900cmもあるのに、幅は30cmしかない。床の海抜高は143.0mを測る。柱穴は３本伴い、一列に並んでいる。柱間は300cm、350cmと均一でない。柱穴の直径30cm、深さ40～60cmもある。土器は壺・甕・鉢・高杯・器台の破片が出土している。この土器群から住居の廃絶時期は弥生後期と考えて良い。



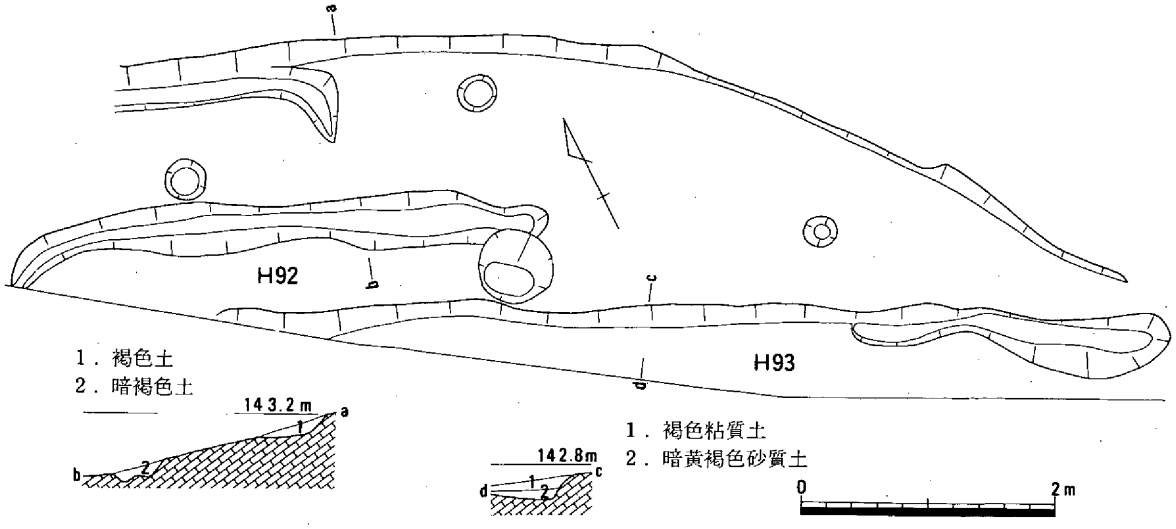
第265図　竪穴住居91（1/60）・出土遺物

竪穴住居92（第267図）

竪穴住居91の南東下で検出した東西に長い「し」の字形溝を伴う住居。溝の深さは10cm。床平坦面の長さは420cm、幅は50cm。床の海抜高は142.7mを測る。溝の東端に柱穴があるが、伴うものではない。土器は２点の甕底部片があるにすぎないが、住居の時期は弥生後期と考えたい。



第266図　竪穴住居92出土遺物



第267図　竪穴住居92・93（1/60）

竪穴住居93（第267図）

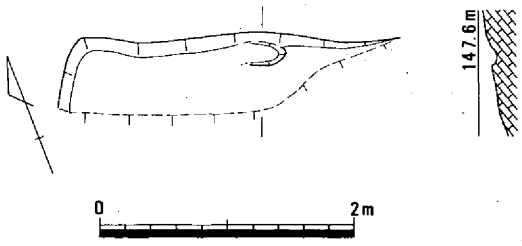
竪穴住居92の南西下で検出した横一文字の一部溝を伴う住居である。溝は長さ250cm、幅70cm、深さは床面から５cm。床平坦面の長さは750cm、幅は50cm。床の海抜高は142.6mを測る。

竪穴住居94（第268図）

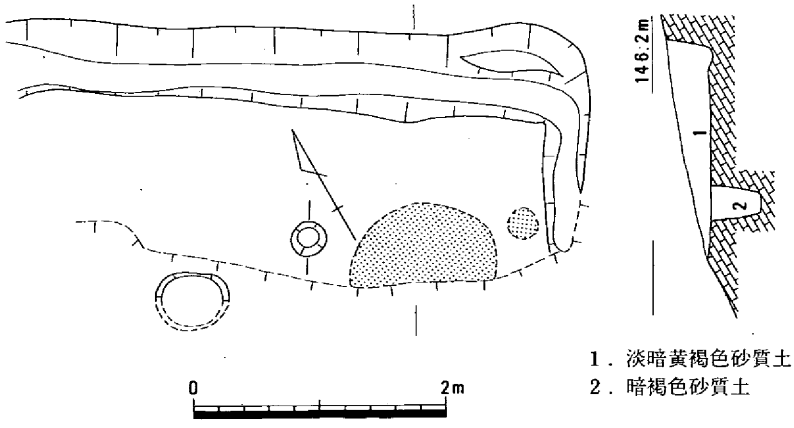
４区Ｅの北西端で検出した「Ｌ」字形の段状住居である。溝は痕跡程度に残存する。床平坦面の長さは250cm、幅は50cm。床の海抜高は147.5mを測る。土器なし。時期不明。

竪穴住居95（第269図）

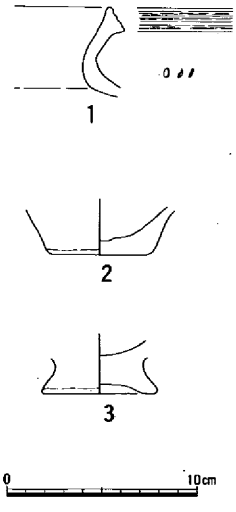
竪穴住居94の南西下で検出した「Ｌ」字形の溝を伴う住居。床面西部に被熱部分がある。柱穴１本。土器は壺・鉢の破片が出土。この土器から時期は弥生後期。



第268図　竪穴住居94（1/60）



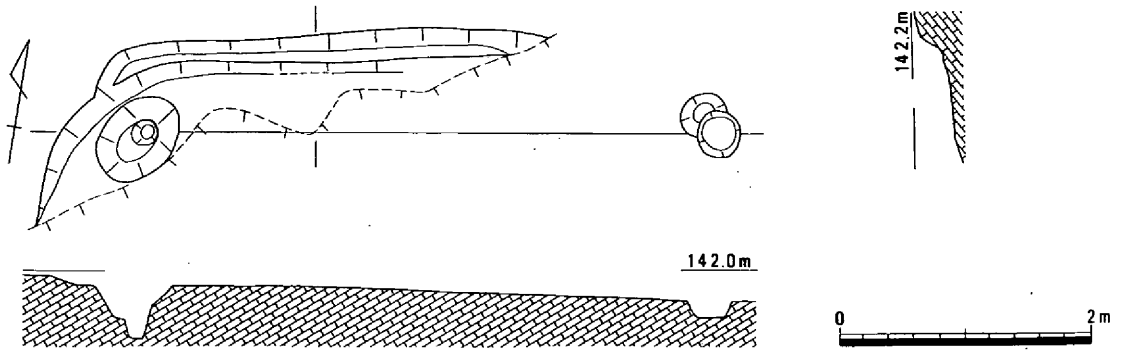
第269図　竪穴住居95（1/60）



第270図　竪穴住居95出土遺物

竪穴住居96（第271図）

４区Ｄの最南端で検出した「Ｌ」字形住居。床平坦面の長さは400cm、幅は50cm。床の海抜高は142.0mを測る。柱穴２本で、深さが異なる。柱間は450cmある。土器なし。時期不明。



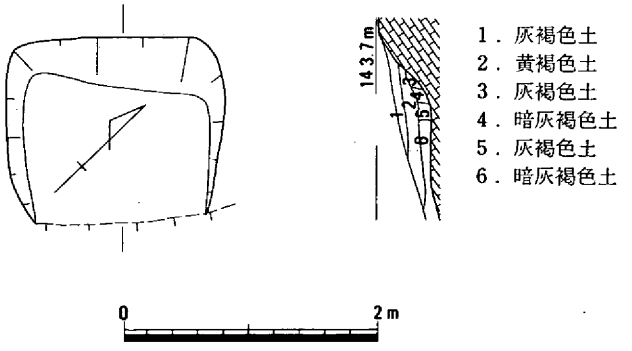
第271図　竪穴住居96（1/60）

竪穴住居97（第272図）

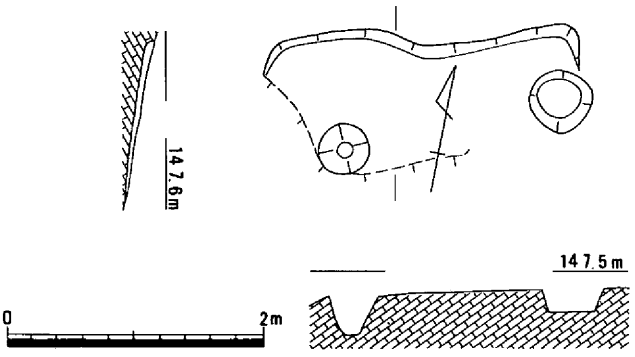
４区Ｄの南西部で検出した小さい「コ」字形遺構。住居として良いかどうか疑問が残る。床平坦面の長さは140cm、幅は110cm、海抜高は143.3mを測る。土器なし。時期不明。

竪穴住居98（第273図）

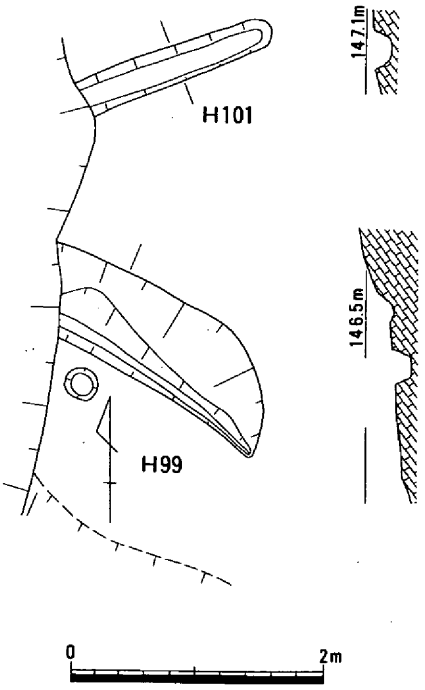
建物10の北上で検出した小さい「コ」字形住居。床平坦面の長さは240cm、幅は広いところで100cm、海抜高は147.4mを測る。柱穴２本を伴う。柱間は180cm。土器がないため、時期不明。



第272図　竪穴住居97（1/60）



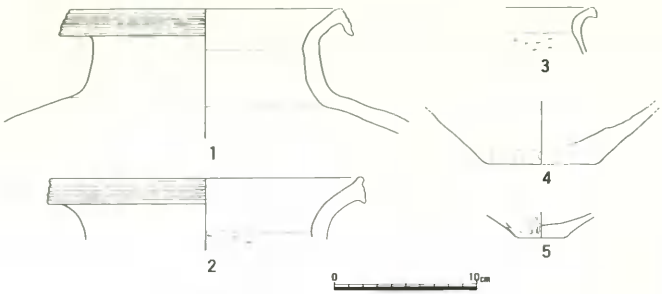
第273図　竪穴住居98（1/60）



第274図　竪穴住居99・101（1/60）

竪穴住居99（第274図）

4区D北西部で検出した溝を伴う住居。柱穴も1本ある。床平坦面の長さは170cm、幅は広いところで100cm、床面の海抜高は146.3m。土器は壺・甕が出土している。土器からこの住居の時期は弥生後期であろう。



第275図　竪穴住居99出土遺物

竪穴住居100（第275図）

4区Dの中央部で検出した小さい「コ」字形住居。住居として良いかどうか疑問が残る。床も二段の平坦面がある。その長さは南北260cm、幅は東西250cm、海抜高は145.1mと144.8mを測る。土器なし。土器がないため、時期不明。

竪穴住居101（第274図）

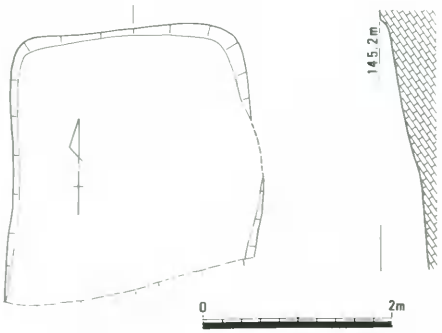
竪穴住居99の北上で検出した短い横一字形溝のみの住居。溝は長さ170cm、幅は広いところで30cm、検出面の海抜高は147.1mを測る。土器がないため、時期不明と言わざるを得ない。

竪穴住居102（第278図）

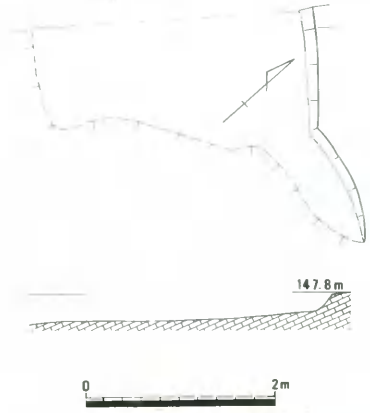
4区Dの北端部で検出した非常に残りの良い円形住居。住居の北部約1/3は発掘出来ていない。壁体溝・柱穴・中央穴などから建て替えしていることが分かる。中央穴からは排水溝が南北に伸びる。柱穴は5本から8本に変わっている。土器は装飾壺・壺・甕・高杯などが出土している。時期は土器から弥生後期。

竪穴住居103（第277図）

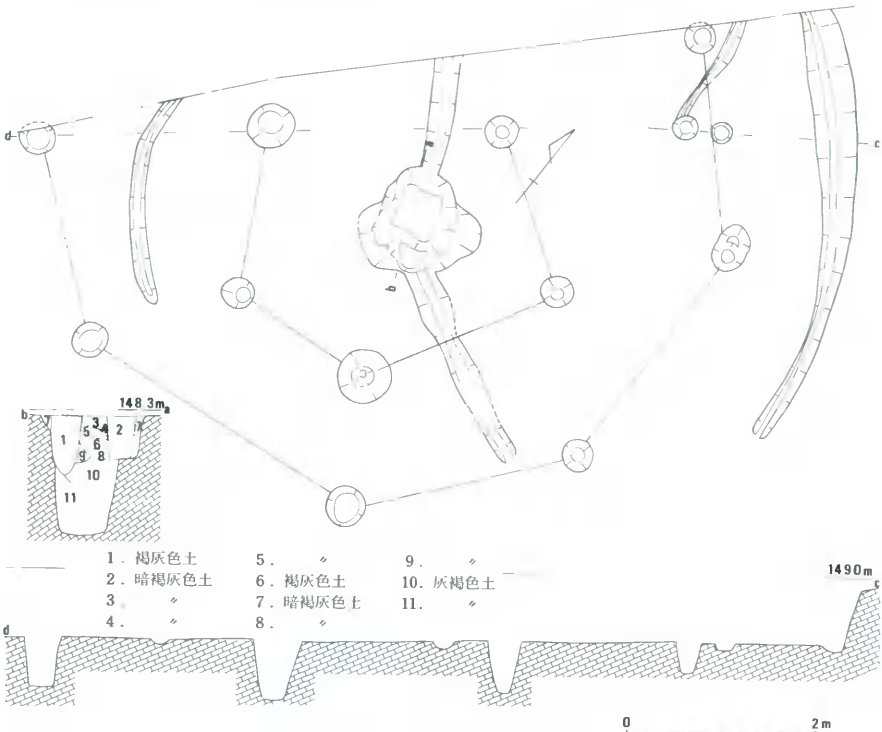
竪穴住居102の南西下で検出した住居。床面の長さは南北280cm、幅は東西230cm、海抜高は147.6m。柱穴・溝もない。土器もなし。時期不明。西側は発掘出来ていない。



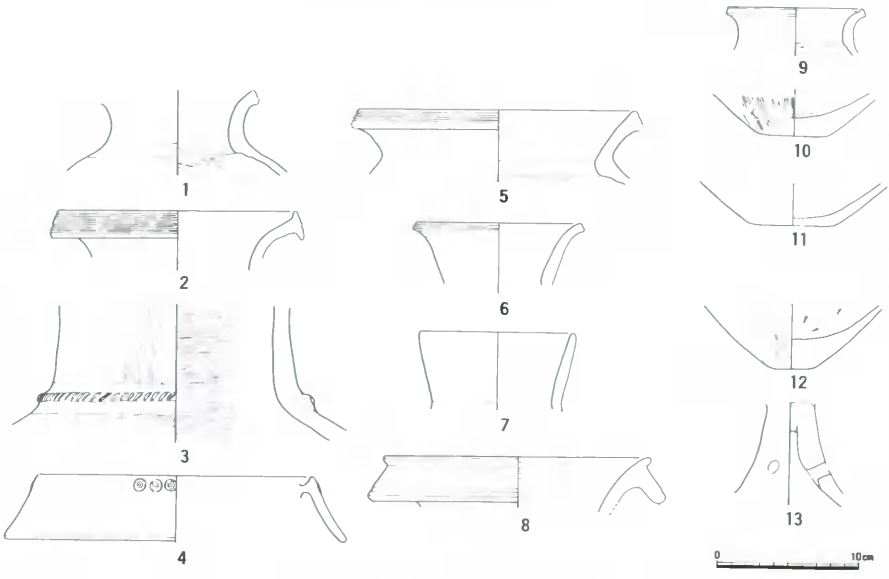
第276図　竪穴住居100（1/60）



第277図　竪穴住居103（1/60）



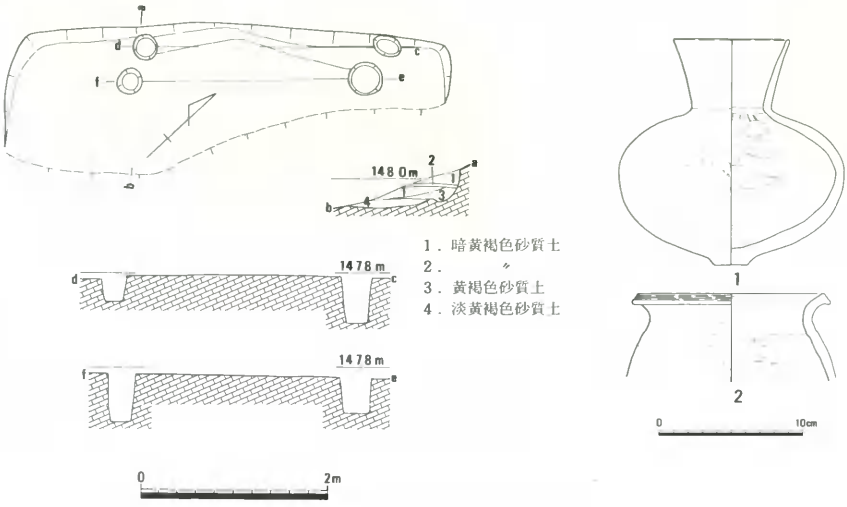
第278図　竪穴住居102（1/60）



第279図　竪穴住居102出土遺物

竪穴住居104（第280図）

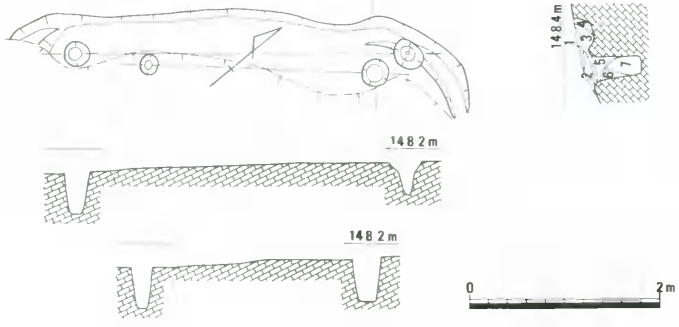
竪穴住居102の東５ｍ、４区Ｇで検出した住居。床面の長さは450cm、幅は140cm、海抜高は147.8ｍ。柱穴は２組２本ずつある。建て替えか。土器は直口壺・甕が出土している。前者は口縁部から底部まで揃っている。時期は弥生後期である。



第280図　竪穴住居104（1/60）・出土遺物

竪穴住居105（第281図）

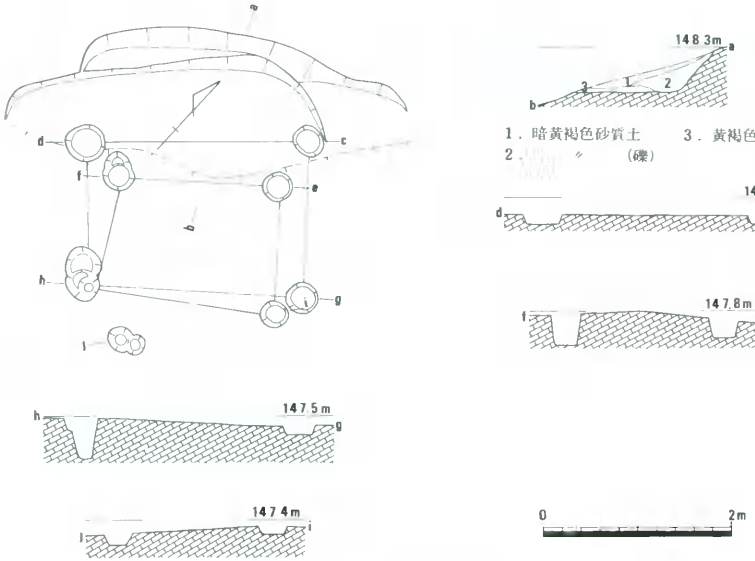
竪穴住居104の北東に接してほぼ同一段として検出した住居。床面の長さは420cm、幅は70cm、海抜高は148.1m。柱穴は２組２本ずつある。建て替えか。柱間は350cmと240cm。北東隅には溝もわずかに残存している。時期は不明である。



第281図　竪穴住居105（1/60）

竪穴住居106（第282図、図版42－３）

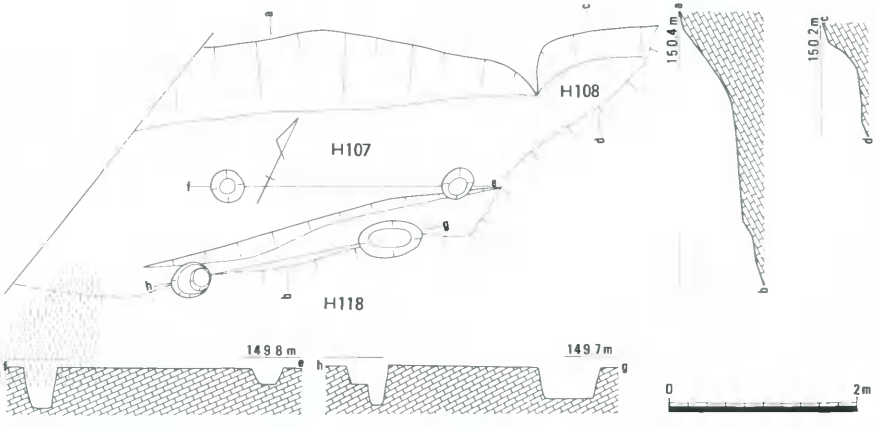
竪穴住居104の南西に接してほぼ同一段として検出した住居。床平坦面の長さは320cm、幅は110cm、海抜高は147.9m。柱穴は２組４本ずつある。建て替えである。柱間は東西240cmと170cm、南北150cmと170cm。時期は不明である。



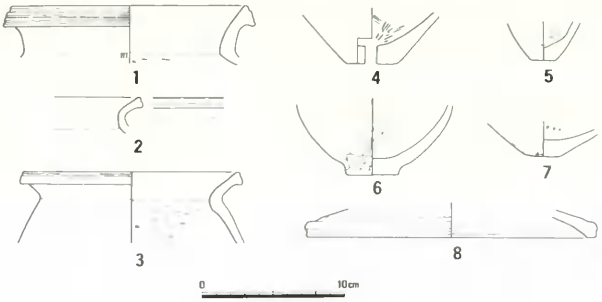
第282図　竪穴住居106（1/60）

竪穴住居107（第283図）

竪穴住居105の北５mで検出した住居。床平坦面の長さは450cm、幅は130cm、海抜高は149.8m。柱穴は２本あり、柱間は24.0cm。土器は壺・甕・こしき・高杯が出土している。



第283図　竪穴住居107・108・118（1/60）



第284図　竪穴住居107出土遺物

第285図　竪穴住居108出土遺物

竪穴住居108（第283図）

竪穴住居107の北西に接してほぼ同一段として検出した住居。土器から弥生後期。

竪穴住居109（第286図）

竪穴住居107の南２ｍで検出した小型住居。床平坦面の長さは280cm、幅は130cm、海抜高は149.3m。断面図には溝の痕跡が見える。時期不明。

竪穴住居110（第287図）

竪穴住居108の北11ｍで検出した住居。「L」字形の溝と長方形にまとまる２間×１間の建物で構成する。柱穴は直径20～35cm、深さ15～45cm。柱穴検出面の海抜高は152.0ｍである。

竪穴住居111（第288図）

竪穴住居110の北３ｍで検出した住居。横一文字の溝は中央部に少し残存。溝は長さ240～35cm、深さ５cm。土器なし。時期不明。

竪穴住居112（第289図）

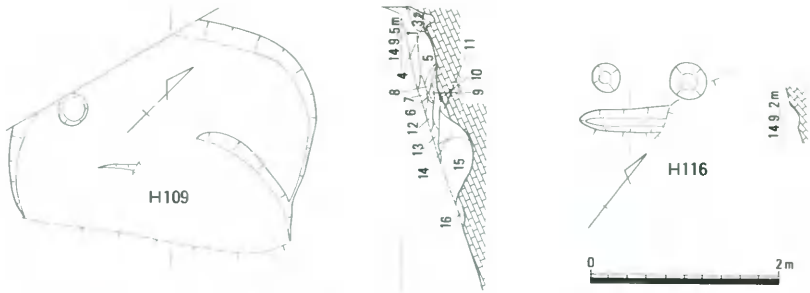
竪穴住居111の北35ｍで検出した住居。北側は調査出来ていない。床は長さ180cm、幅60cm。その海抜高は156.2ｍである。土器なし。時期不明。

竪穴住居113（第290図）

竪穴住居112の西上５ｍで検出した住居。北側は調査出来ていない。太くて深い溝を伴う。床は長さ130cm、幅わずか10cm。その海抜高は157.8ｍである。土器なし。時期不明。

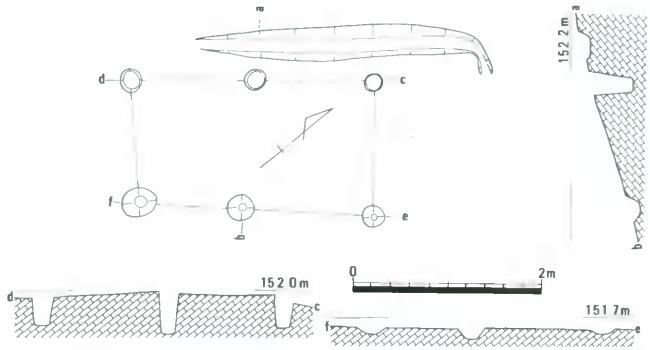
竪穴住居114（第291図）

竪穴住居106の南下２ｍで検出した「コ」の字形住居。床は長さ550cm、幅90cm。その海抜高は146.5ｍである。柱穴３本は一列に並ぶ。土器は上層から須恵器が出土しているが、伴わない。



1．褐色砂質土　5．明黄褐色砂質土　9．5と同じ　13．3と同じ
2．赤褐色砂質土　6．褐色粘質土　10．淡黄褐色粘質土　14．黄白色粘質土
3．黄褐色砂質土　7．黄褐色砂質土　11．10と同じ　15．淡黄褐色粘質土
4．暗黄褐色砂質土　8．赤黄褐色砂質土　12．5と同じ　16．黄褐色砂質土

第286図　竪穴住居109・116（1/60）

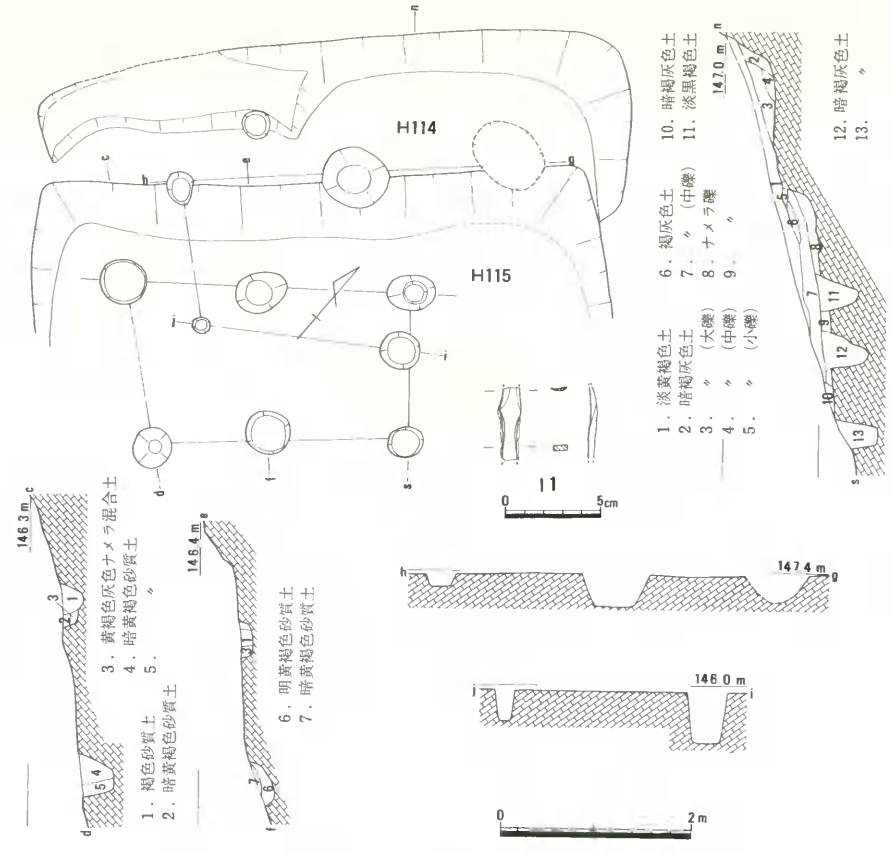


第287図　竪穴住居110（1/60）

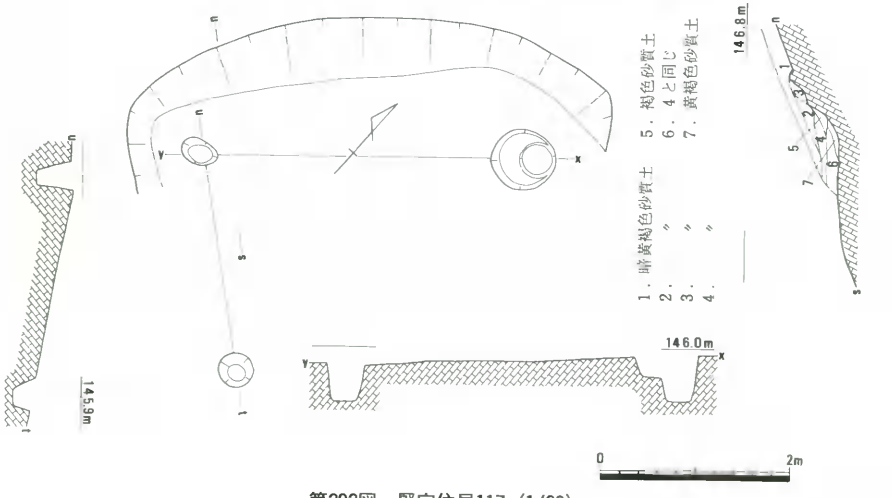
第288図　竪穴住居111（1/60）

第289図　竪穴住居112（1/60）

第290図　竪穴住居113（1/60）



第291図　竪穴住居114・115（1/60）・竪穴住居115出土遺物



第292図　竪穴住居117（1/60）

竪穴住居115（第291図）

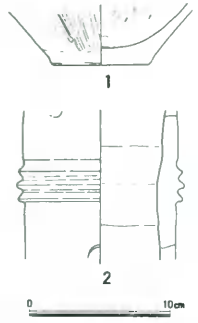
竪穴住居114の南下で検出した「コ」の字形の住居。柱穴は6本で1間・2間にまとまる。遺物としては鉄器のヤリガンナが出土している。土器はないが、時期は弥生後期であろう。

竪穴住居116（第286図）

竪穴住居109の北東で検出した短い溝だけの住居。溝は長さ90cm、幅25cm、深さ5cm。検出面の海抜高は149.1m。時期不明。

竪穴住居117（第292図）

竪穴住居115の北東で検出した住居。柱穴は3本見つけている。床面の海抜高は145.8m。土器は甕・器台が出土している。時期は弥生後期である。



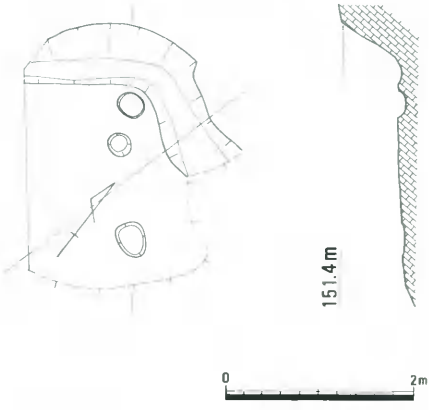
第293図　竪穴住居117出土遺物

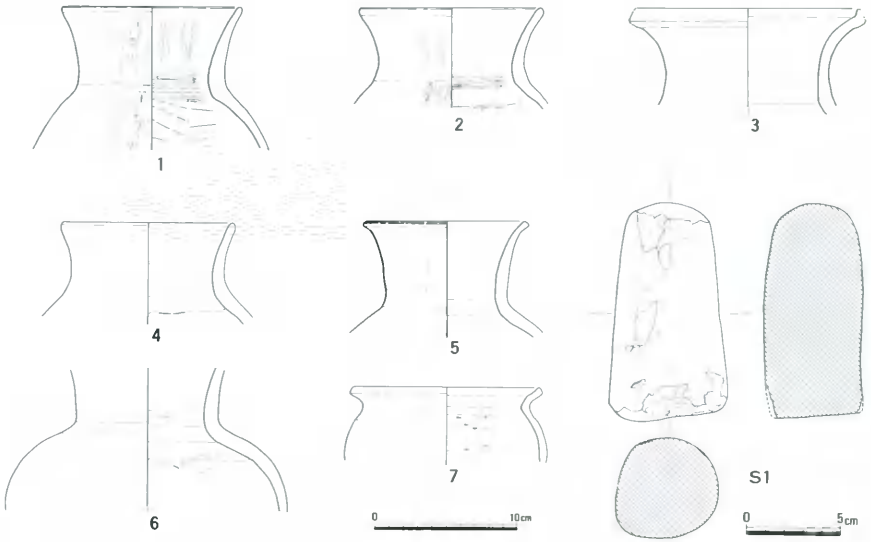
竪穴住居118（第283図）

竪穴住居107の南下で検出した住居。柱穴は2本確認している。柱間は200cm、柱穴の深さは30～45cm。床面の海抜高は149.8m。土器なし。時期不明。

竪穴住居119（第294図）

竪穴住居106の北上で検出した住居。柱穴は2本確認している。壁溝を伴う。西側は調査区外。床面の海抜高は150.8m。土器は整理箱に4箱も出土している。壺・甕が多い。石斧を転用した磨石も。弥生後期。





第294図　竪穴住居119（1/60）・出土遺物

2．段状遺構

段状遺構1（第296図）

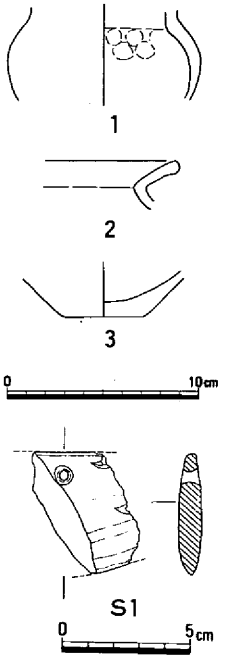
建物10の北上で検出した「L」字形段状遺構。床平坦面の長さは950cm、幅は広いところで150cm、海抜高は146.6mを測る。柱穴2本で、深さ20cm。柱間は180cmある。土器片と石包丁片が出土。時期は弥生後期。

段状遺構2（第297図）

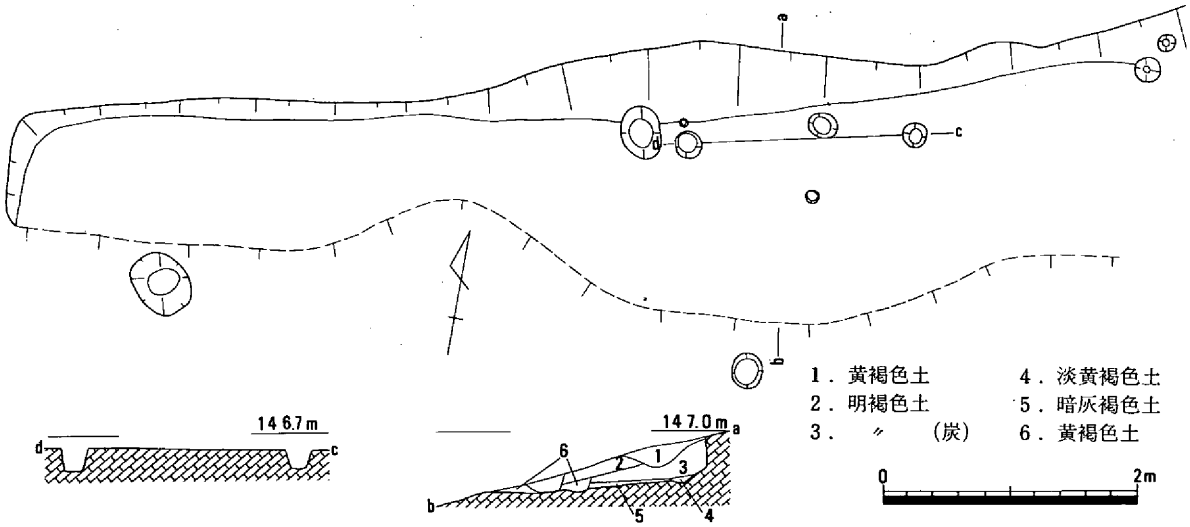
段状遺構1の同一段で検出した「L」字形段状遺構。同上遺構の可能性もある。土器なし。時期不明。

段状遺構3（第297図）

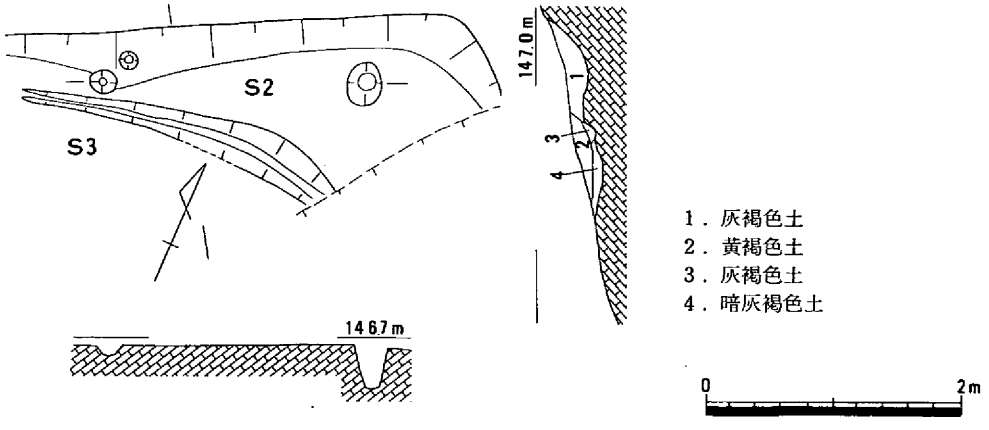
段状遺構2の内部にある溝。溝の長さは210cm、幅は20cm、深さ5cm。時期不明。



第295図　段状遺構1 出土遺物



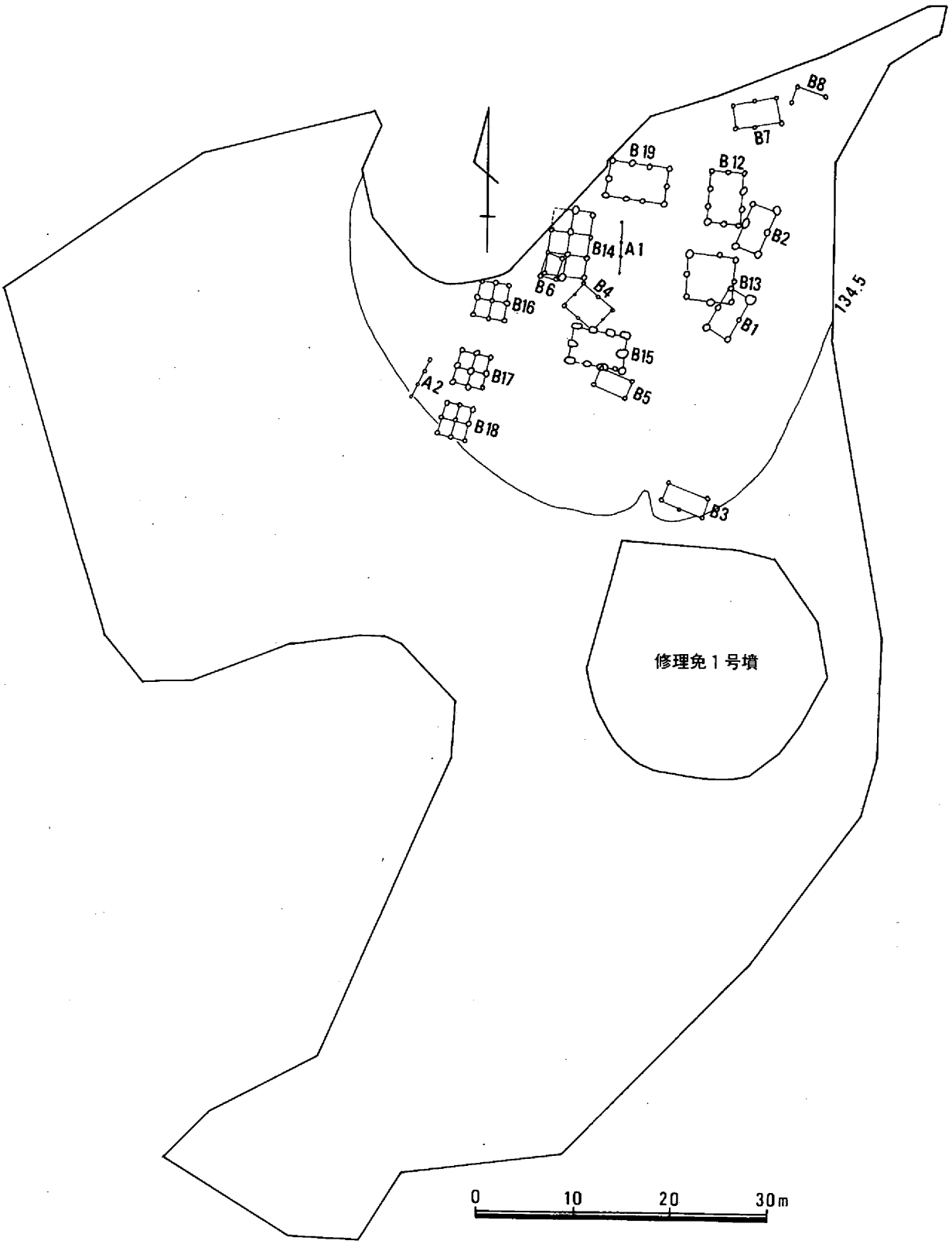
第296図　段状遺構1　(1/60)



第297図　段状遺構2・3　(1/60)

3．建物・柵列・建物周辺遺物

4区Aでは柱穴が多数検出出来たが、建物にまとめることが可能なものは全柱穴の50％に満たない。その建物は、4区Aでも北部の尾根上比較的平坦な範囲に集中している。造成の結果とも考えら

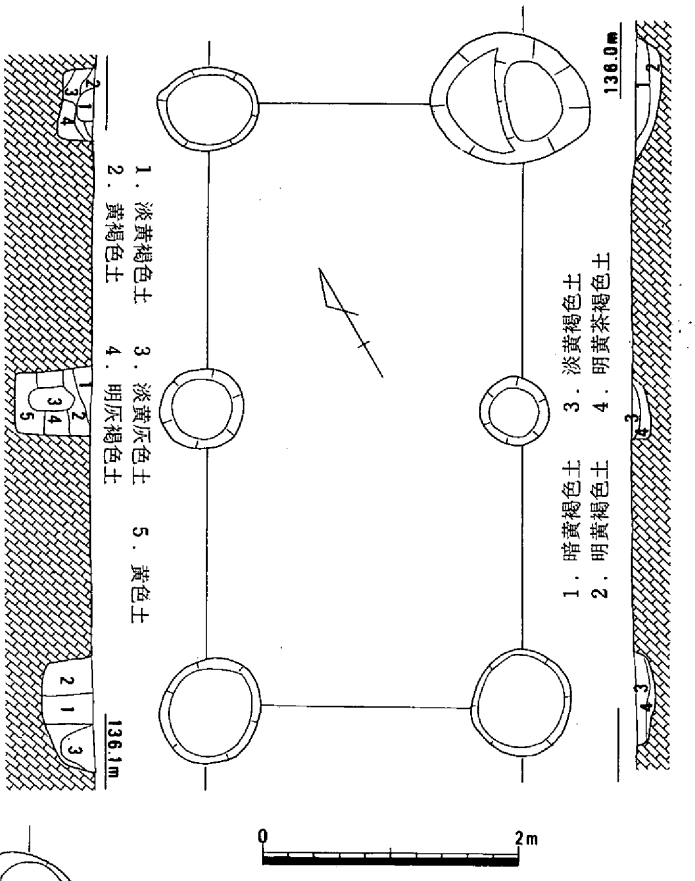


第298図　4区A建物配置図（1/600）

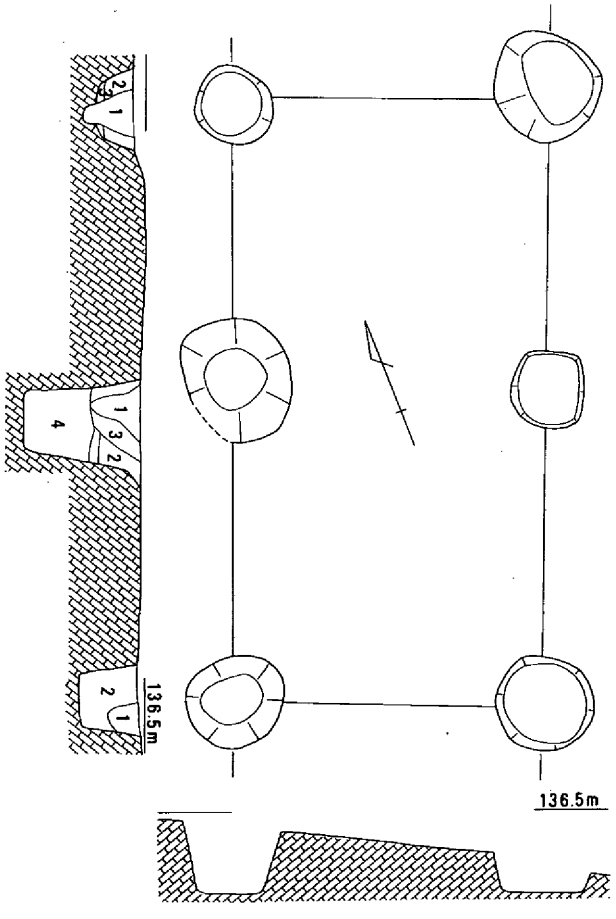
れる。柱穴が並ぶにもかかわらず並行しないものを柵列とした。建物の時期決定資料として周辺遺物を少数載せた。

建物１（第299図、図版43－３）

建物12の南６ｍの位置で検出した南北に長い２間×１間の建物である。長軸は真北から30°東にずれている。柱穴は６本で、すべて円形を呈するが、その大きさは直径50～90cmとばらつきがある。東北隅の柱穴は現状の植林穴で撹乱されている。柱穴の芯から芯までの長さは長軸（桁行）で500cm、短軸（梁行）で250cmを測る。柱穴の検出面の海抜高は136ｍである。断面に柱痕跡の残っているものもある。遺物は全く出土していない。しかし竪穴住居２との関係はより新しいと言うことが出来る。



第299図　建物１（1/60）



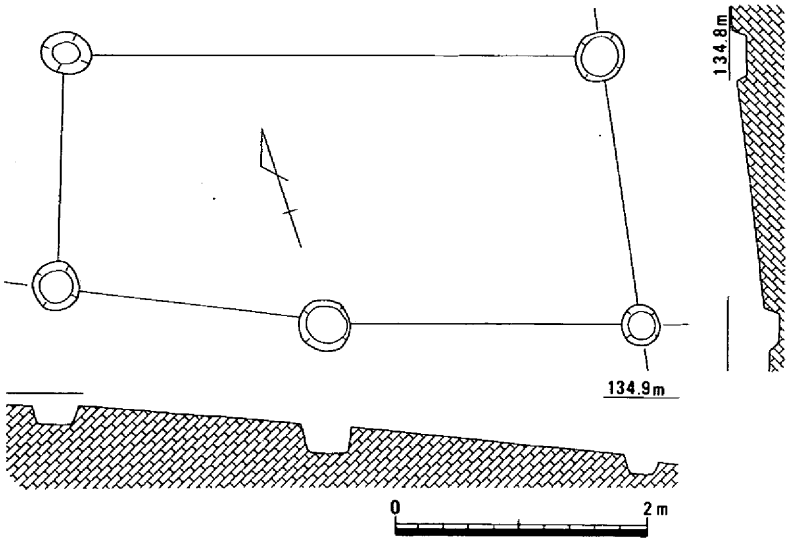
第300図　建物２（1/60）

建物２（第300図）

建物12の東南に接した位置で検出した南北に長い２間×１間の建物である。長軸は真北から20°東にずれている。柱穴は６本で、すべて円形を呈するが、その大きさは直径60～90cmとばらつきがある。西中央の柱穴は100cmと異常に深く底も平らで他のものと雰囲気が違う。どうも貯蔵穴が下層に隠れていたようである。遺物は弥生土器と推定できる土器細片が若干出土しているが、時期を決定し得る資料ではない。

建物３（第301図）

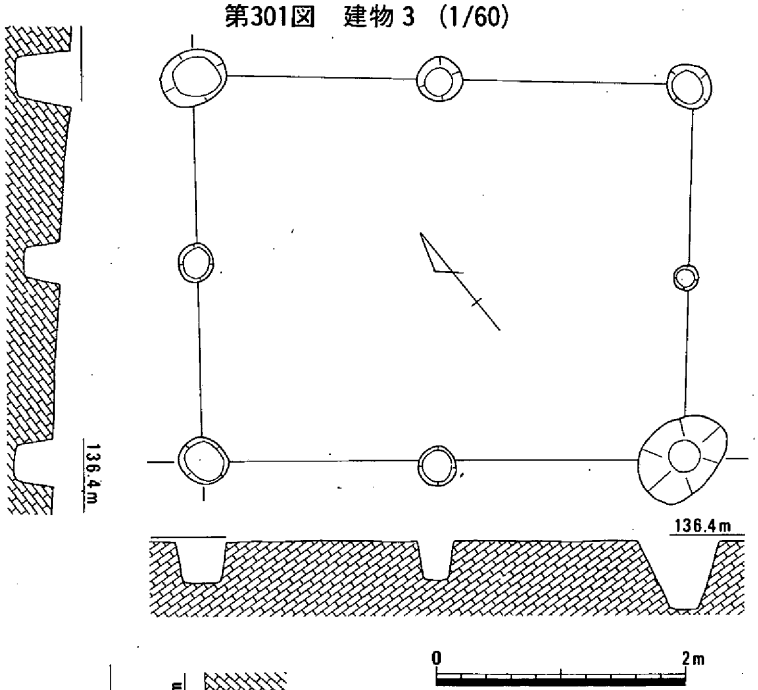
修理免１号墳の北でまとめた建物で、長軸は東西に向いている。この方向は建物８とはずれている。後で説明する建物13とは並行関係にある。南側の柱穴は３本あるが、中央の物は直線上になく、距離も西に片寄っている。北側の方が柱穴が深く良く残るはずにもかかわらず中央には柱穴を検出できない。



第301図　建物３（1/60）

建物４（第302図）

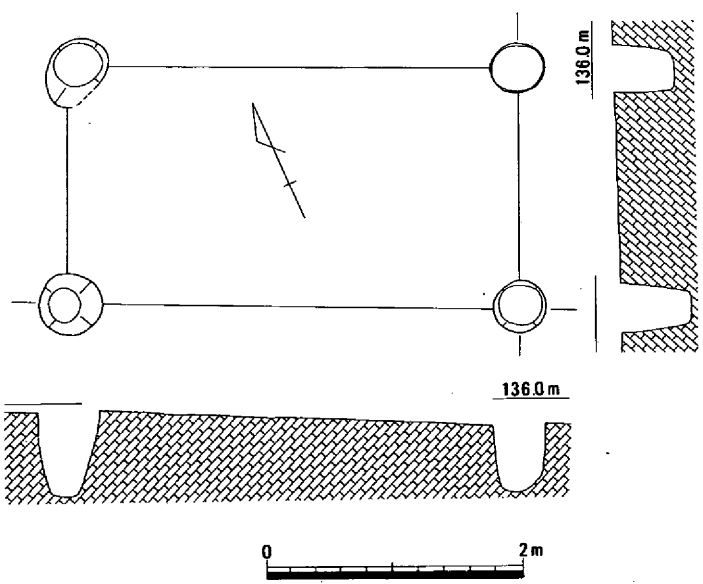
建物14と建物15との間でまとめることができた２軒×２軒の建物である。４隅の柱穴は比較的大きく、中間のそれは小さい。深さは30～50cmある。長軸は東西から45°南北に振っている。いままでの建物と全く無関係な方向を示す。建物の大きさは長辺400cm、短辺300cmを測る。遺物は柱穴からは出土していない。時期は不明である。

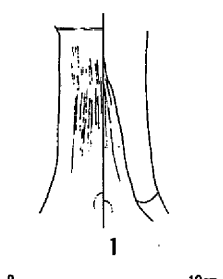


第302図　建物４（1/60）

建物５（第303図）

建物８の南でまとまった１間×１間の建物で、建物８と切り合い、明らかにより古いと言える。建物の大きさは長辺350cm、短辺190cmを測る。遺物は柱穴から弥生土器の高杯が出土している。





第303図　建物５（1/60）・出土遺物

建物６（第304図）

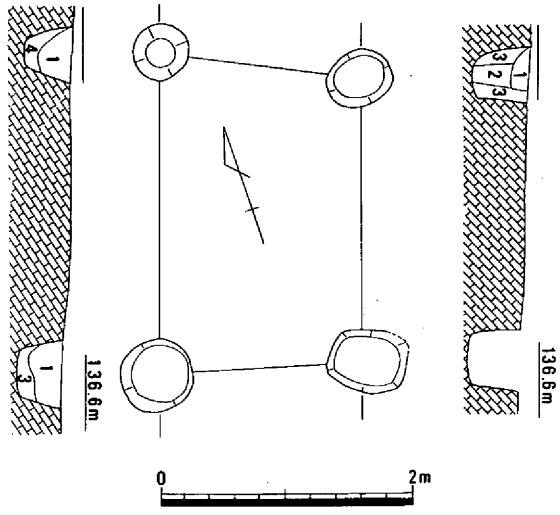
建物14と南西部で重複する１間×１間の建物。不整形な方形を呈す。柱穴の掘方も不正円形。柱痕の判明するものもある。

遺物は若干の弥生土器細片が出土したが、時期決定資料とはならない。

建物７（第305図）

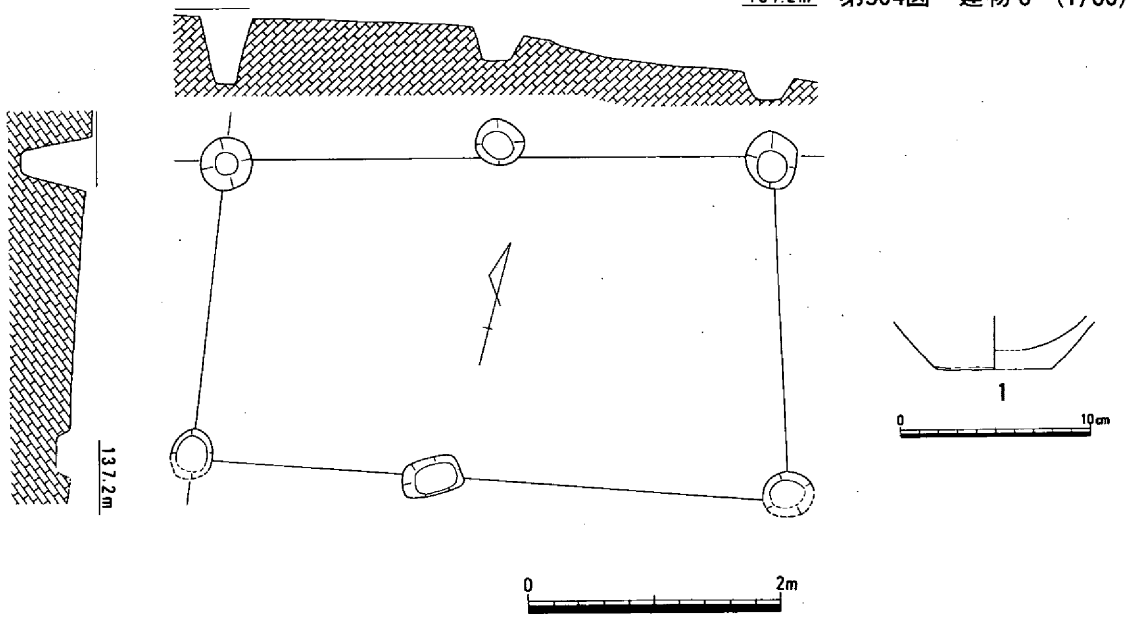
建物12の北４ｍ離れてまとめた東西に長軸を持つ１間×２間の建物である。大きさは長辺420cm、短辺240cmを測る。遺物は甕の底部が出土している。

弥生後期である。



1．淡黄褐色土　　3．黄茶褐色土
2．　〃　（粘質）　4．茶褐色土

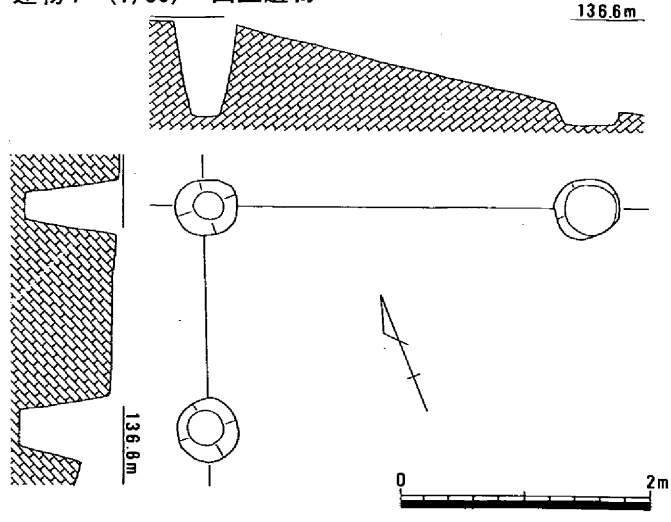
137.2m　第304図　建物６（1/60）



第305図　建物７（1/60）・出土遺物

建物８（第306図）

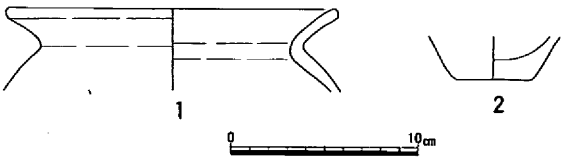
建物７の東１ｍ離れてまとめた東西に長軸を持つ１間×１間の建物である。ただし南東隅の柱穴は検出できていない。北の方向に１間分離れて深い土壙が検出でき当初は２間×１間と考えていたが、結果的に図のようにまとめた。建物７の軸方向とは30°ほどずれている。大きさは長辺300cm、短辺180cmを測る。



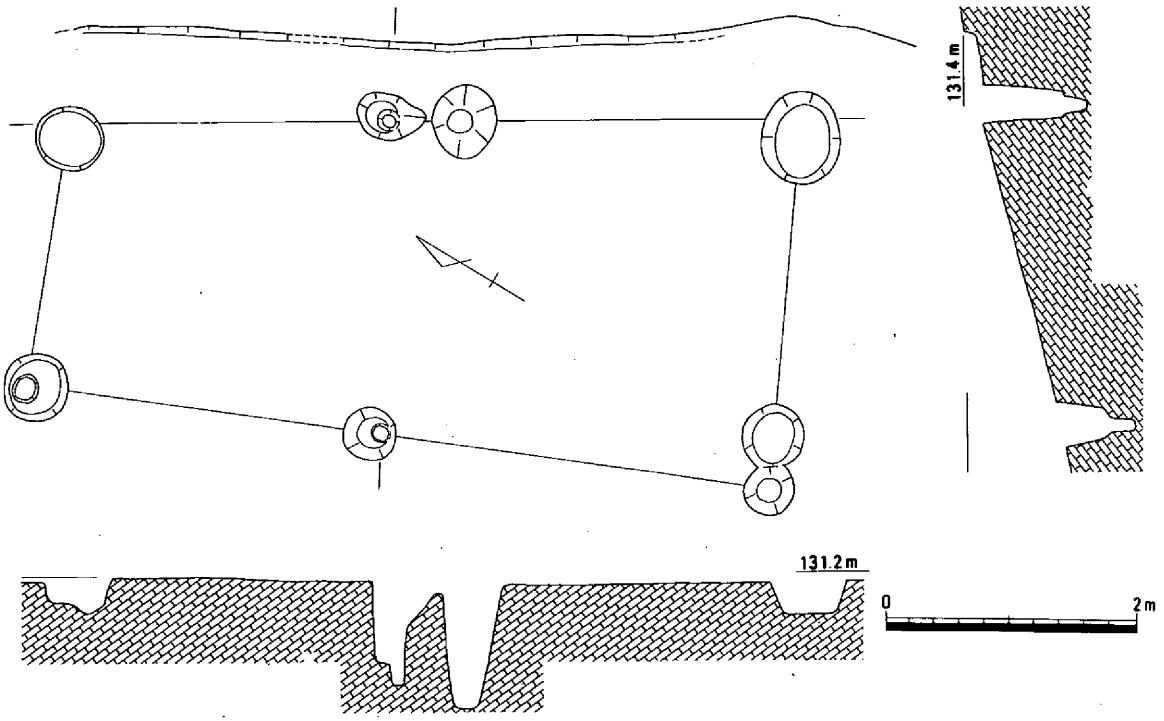
第306図　建物８（1/60）

建物９（第308図）

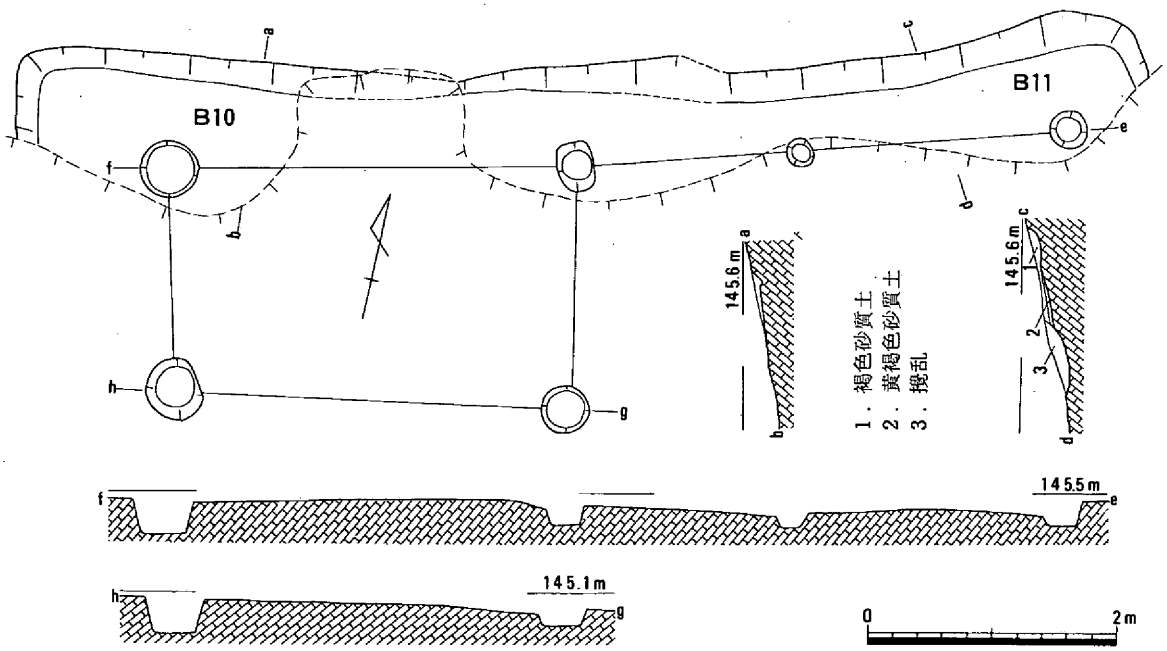
竪穴住居12の北西で検出した建物である。細長い段に柱穴６本を伴う。１間×２間の建物とも考えられる。中央の２本の柱穴が他と比べて深いのが気になる。土器を２点実測している。時期は弥生後期であろう。



第307図　建物９出土遺物



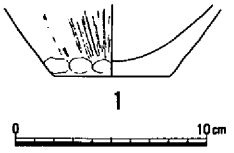
第308図　建物９（1/60）



第309図　建物10・11（1/60）

建物10（第309図）

4区Dの中央部で検出した「L」字形住居。床平坦面の長さは500cm、幅は広いところで100cm、海抜高は145.4mを測る。柱穴4本で長方形にまとまる。柱間は310cm、180cm。時期不明。



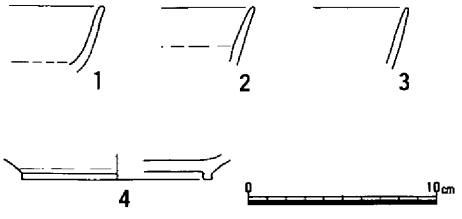
第310図　建物11出土遺物

建物11（第309図）

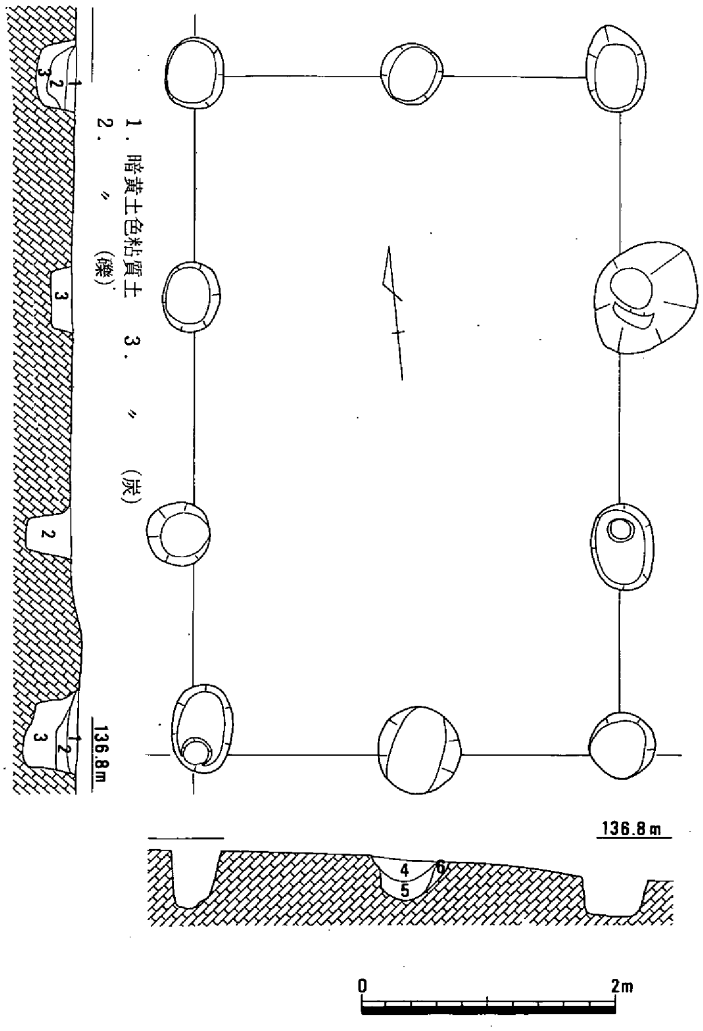
4区Dの中央部で建物10の同一段で検出した「L」字形テラスを伴う。床平坦面の長さは330cm、幅は広いところで80cm、海抜高は145.4mを測る。柱穴2本を伴う。柱間は210cm。柱穴の直径20～25cm、深さ10cm。竪穴住居98と同じ住居の可能性もある。土器は甕底部。弥生後期か。

建物12（第312図）

竪穴住居8の埋土の東側を掘り込んでいる。住居より明らかに新しい。長軸をほぼ真北の南北方向に合わしている。東西2間・南北3間の建物である。中央に柱穴はなく、南北の端に2本あることから、これ以上南北に拡大することはないものと判断した。柱穴の掘方は7～80cmと大きくしかも角張っている。断面に柱痕跡の残っているものはない。遺物は柱穴埋土から須恵器細片が出土してはいるものの実測不能である。第311図は周辺からの出土遺物であるが、8世紀に比定される。



第311図　建物12周辺出土遺物

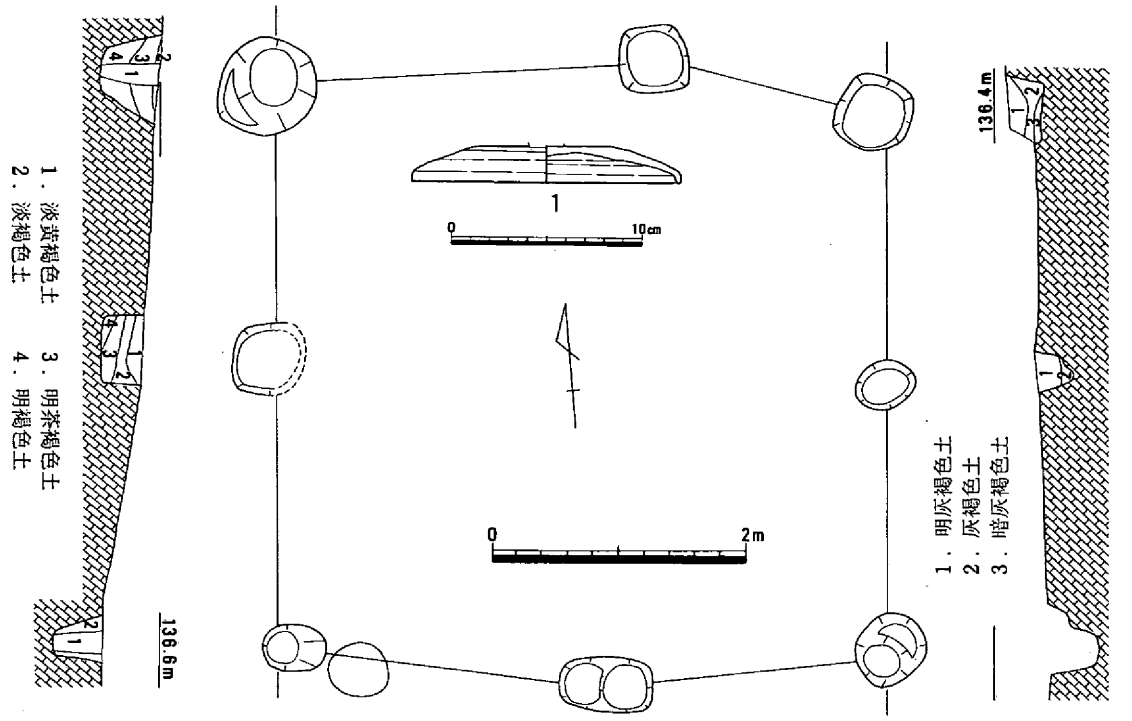


第312図　建物12（1/60）

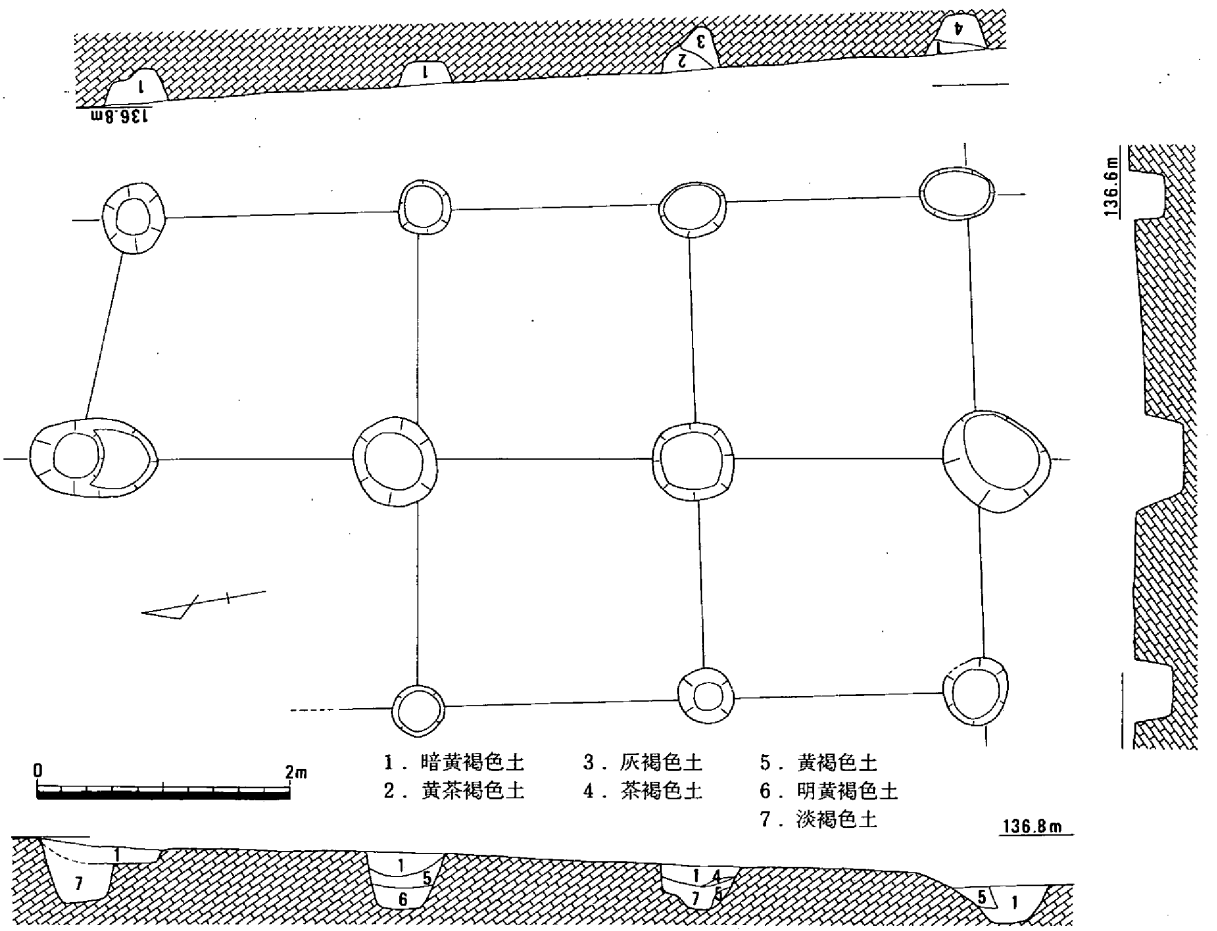
建物13（第313図、図版43―3）

竪穴住居1の埋土を掘り込んでいる。したがって明らかに住居より新しい。2間×2間のほぼ正方形に柱穴をまとめることができたが、北側中央のそれは東に寄りすぎている。しかし精査したにもかかわらずこの位置にしか柱穴を検出することが出来なかった。柱穴の掘方は5～80cmと大きくしかも角張っている。断面に柱痕跡の残っているものもある。

遺物は南西隅近くの柱穴から須恵器蓋杯が出土しているので、8世紀に比定される。



第313図　建物13（1/60）・出土遺物



第314図　建物14（1/60）

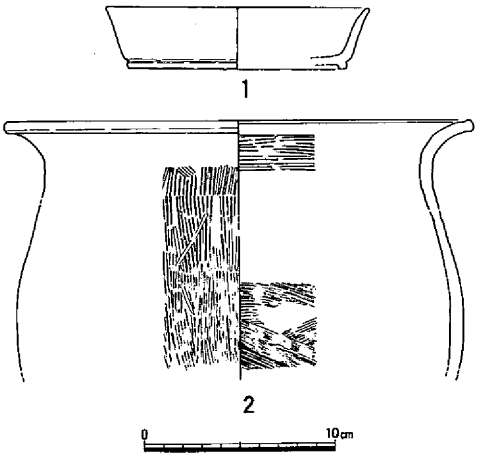
建物14（第314図）

建物12から11m西でまとめた3間×2間の建物。長軸はほぼ南北に向く。北西端の柱穴は調査区外のため検出出来ず。中央の柱穴列は掘方が大きく方形に近いが、他は小さい。

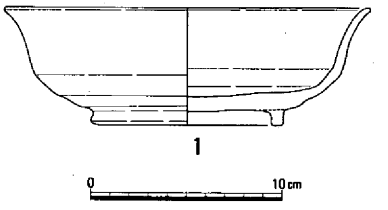
柱穴から須恵器杯・土師器甕出土。

建物15（第317図、図版43－2）

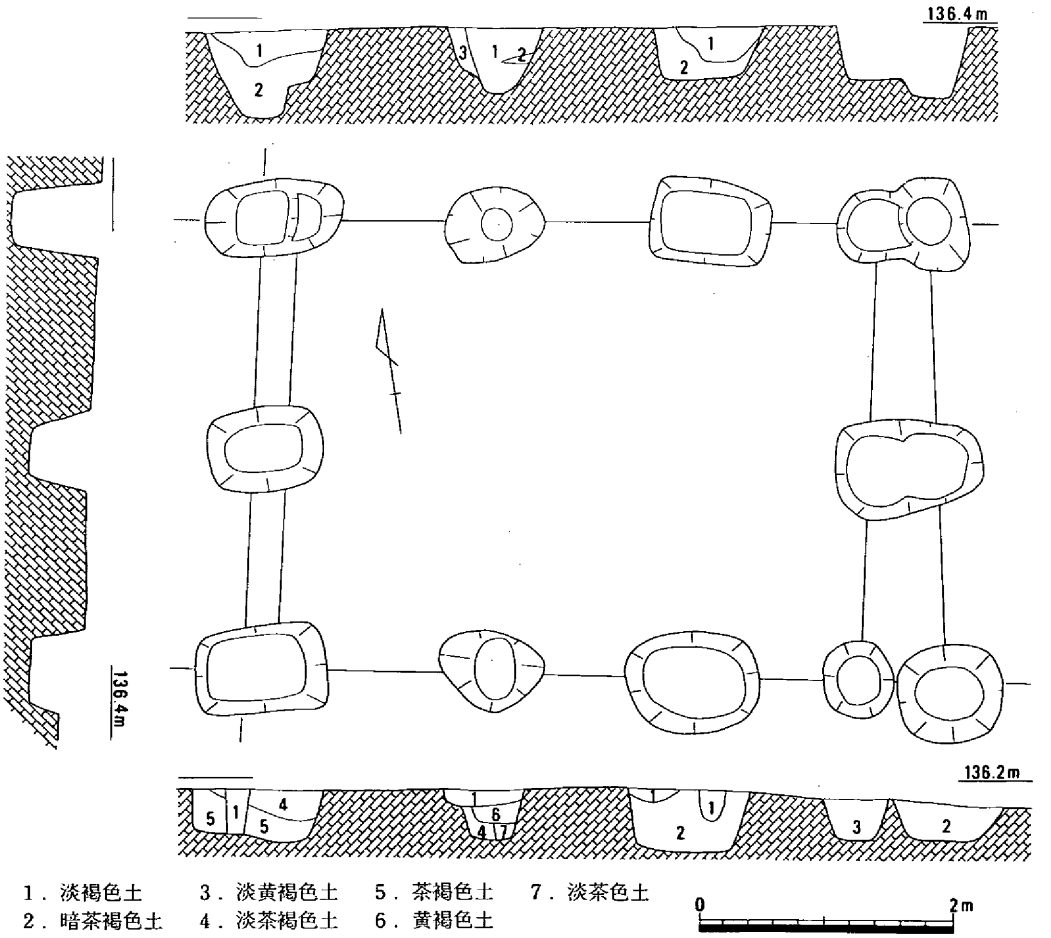
建物14の南東5m離れてまとめた3間×2間の建物である。柱穴の掘方は方形が基本形である。長方形になっているのは2本が重なっているからで、南東隅の物は2本が離れて検出出来た。つまりこの建物はほぼ同規模の2軒の建物が建て替えられているのである。須恵器高台付杯が柱穴から出土。



第315図　建物14出土遺物



第316図　建物15出土遺物



第317図　建物15（1/60）

建物16（第318図、図版43—１）

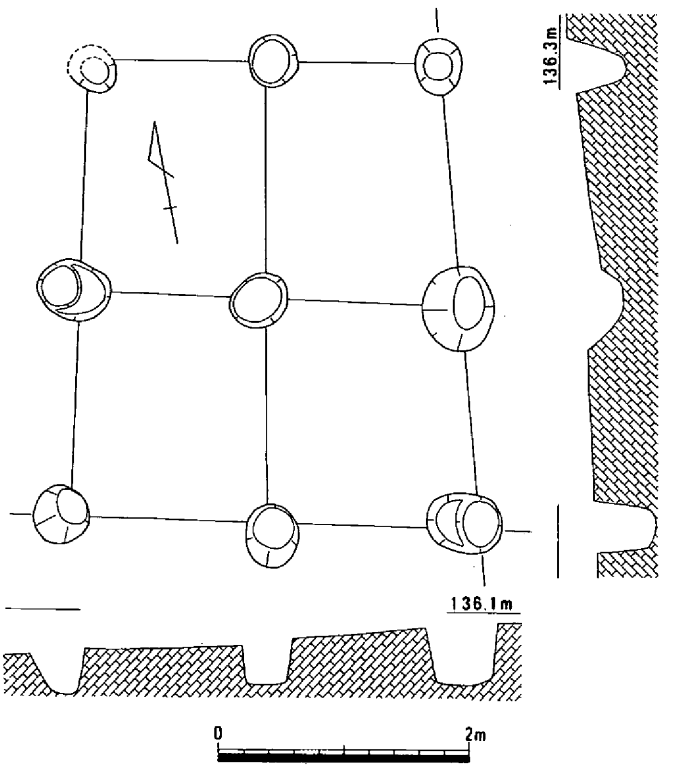
建物６の南西部３ｍ離れてまとめた２間×２間の総柱建物である。倉庫と考えられる。調査当初２間×１間の建物にまとめていたが、建物17・18をまとめてみてもう１間北側に柱穴を検出することができた。遺物は柱穴からは出土していない。

建物17（第319図、図版43—１）

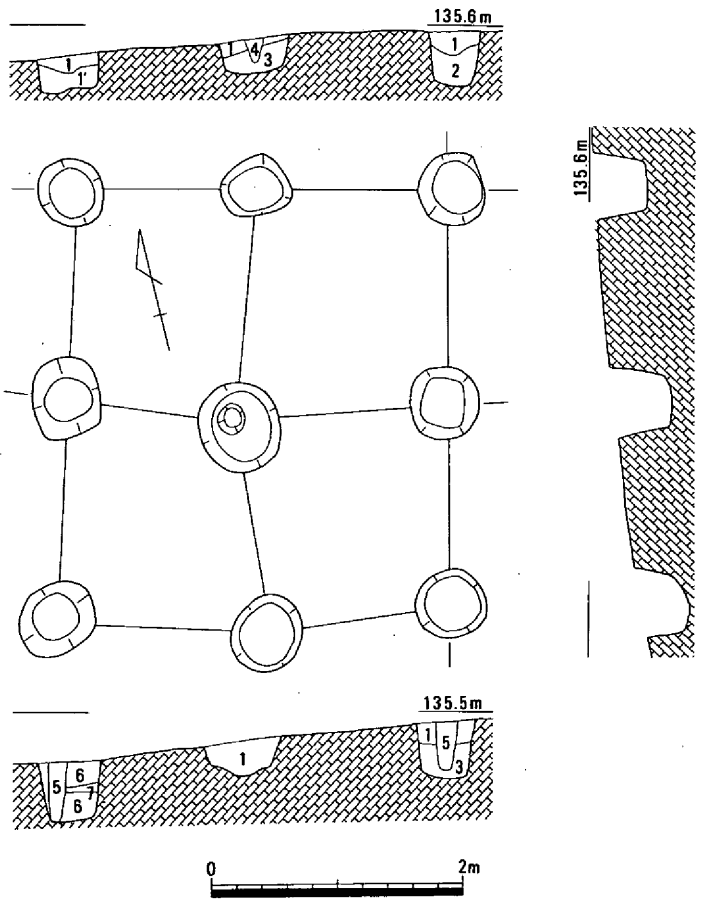
建物16の南３ｍ離れてまとめた２間×２間の総柱建物である。倉庫と考えられる。壁の向きはほぼ東西—南北で、建物16の壁の向きにほぼ並行している。２軒が同時に建っていたことも推定できる。柱穴の掘方は不整円形で直径60cm前後、深さは30～50cmある。柱痕のあるものが３本ある。建物の大きさは柱穴の芯々距離で南北330cm、東西300cmである。遺物は柱穴からは出土していない。

建物18（第320図、図版43—１）

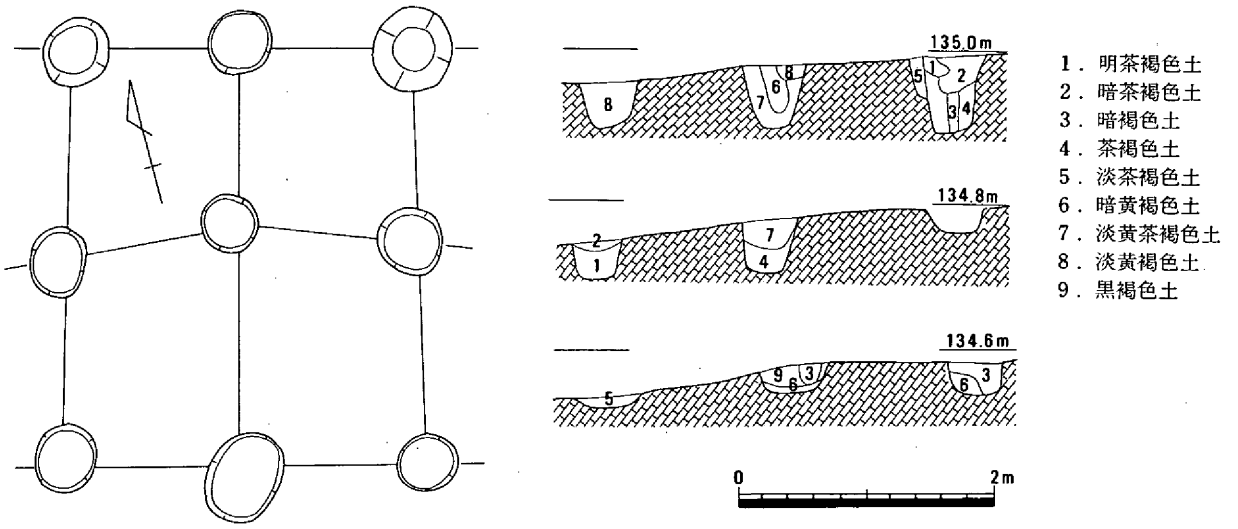
建物17の南へ２ｍ離れてまとめた２間×２間の総柱建物である。倉庫と考えられる。壁の向きはほぼ東西—南北で、建物17の壁の向きにほぼ並行している。２軒が軒を接して同時に建っていた可能性も考えられる。柱穴の掘方は不整円形で直径60cm前後、深さは10～60cmある。建物の大きさは柱穴の芯々距離で南北330cm、東西300cmである。遺物は柱穴からは時期決定の土器は出土していない。



第318図　建物16（1/60）



第319図　建物17（1/60）

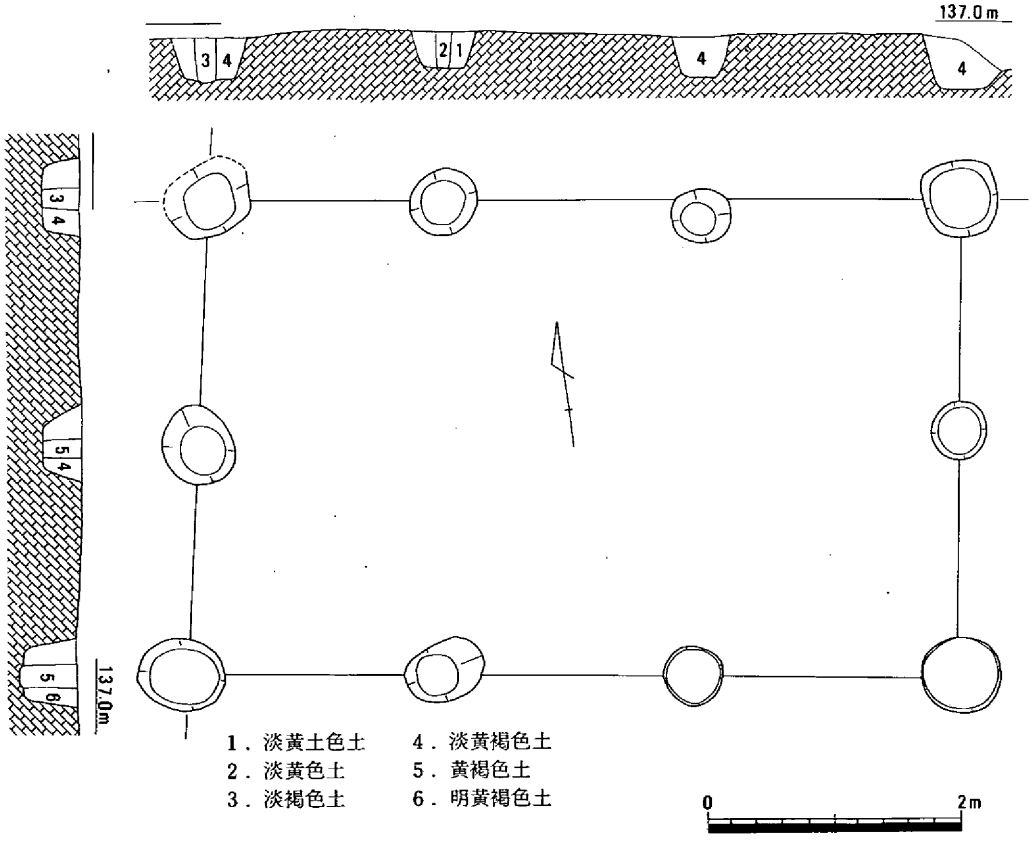


第320図　建物18（1/60）

建物19（第321図）

修理免２号墳の東、竪穴住居７と一部重複して検出した３間×２間の建物で、東西に長軸が向く。建物15と並行関係にある。柱穴の掘方は方形に近い。大きさは長辺600cm、短辺390cmを測る。

遺物は柱穴から出土していないが、この建物の時期は方向から考えて古代に比定したい。



第321図　建物19（1/60）

柵列１（第322図）

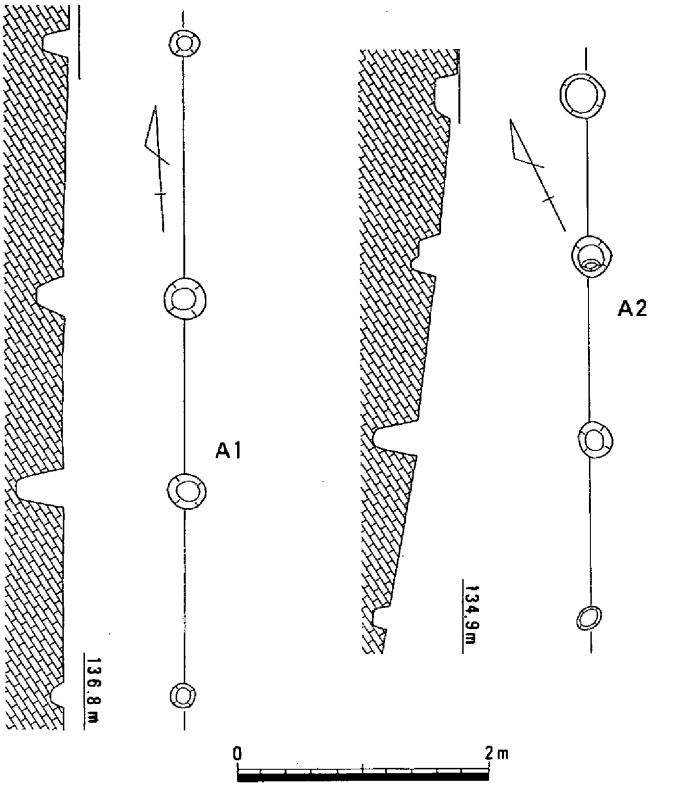
建物14の東３ｍ離れて南北に並んだ３間の柱穴列である。建物５の壁と完全には平行しない。柱穴は大きさ・深さともにまばらである。遺物は皆無。

柵列２（第322図）

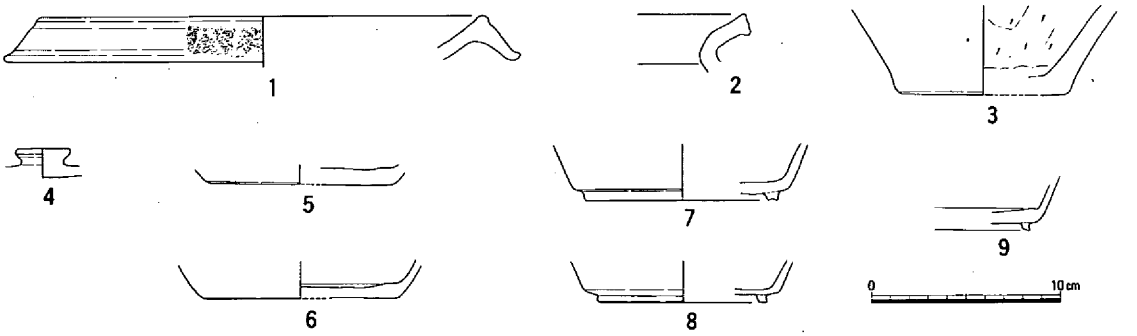
建物17・18の西３ｍ離れて南北に並んだ３間の柱穴列である。両建物の壁と完全には平行しない。柱穴の大きさ・深さはまばら。

建物周辺出土遺物（第323図）

建物にまとめることの出来た柱穴のうち遺物の出土したものは極めて少ない。そのため建物の時期を決定するに足る資料としては周辺出土遺物しかない。弥生土器と古代の須恵器がある。



第322図　柵列１・２（1/60）

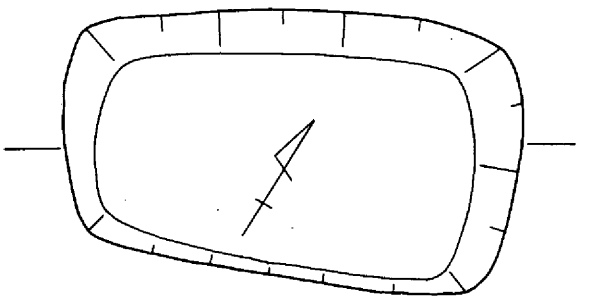


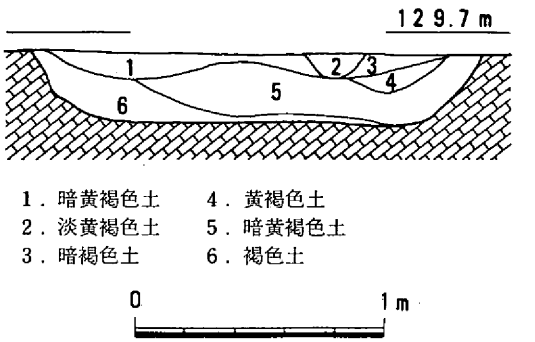
第323図　建物周辺出土遺物

４．土　　壙

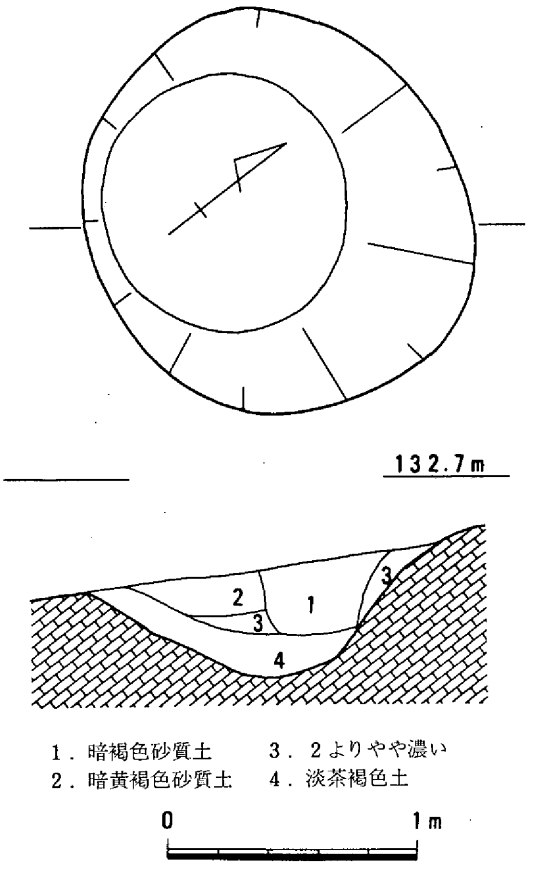
土壙１（第324図）

修理免１号墳の南にあり、長方形を呈す。床は平坦。遺物は皆無。時期・用途不明。





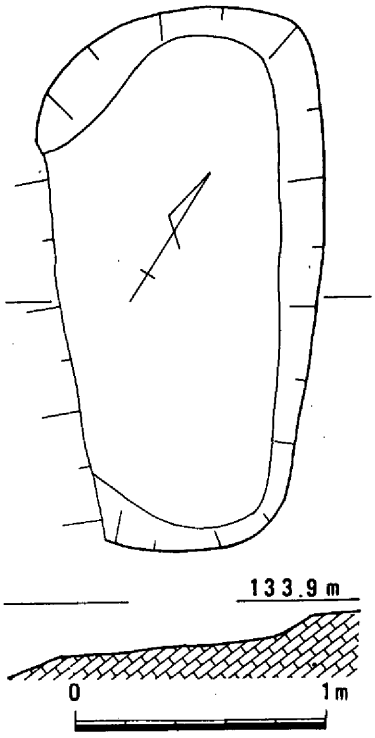
第324図　土壙１（1/30）



第325図　土壙2（1/30）

土壙2（第325図）

竪穴住居48の東にあり、円形を呈す土壙。床は丸く納まっている。直径150cm、深さ45cmを測る。遺物は全く出土していない。用途・時期は不明。



第326図　土壙4（1/30）

土壙3

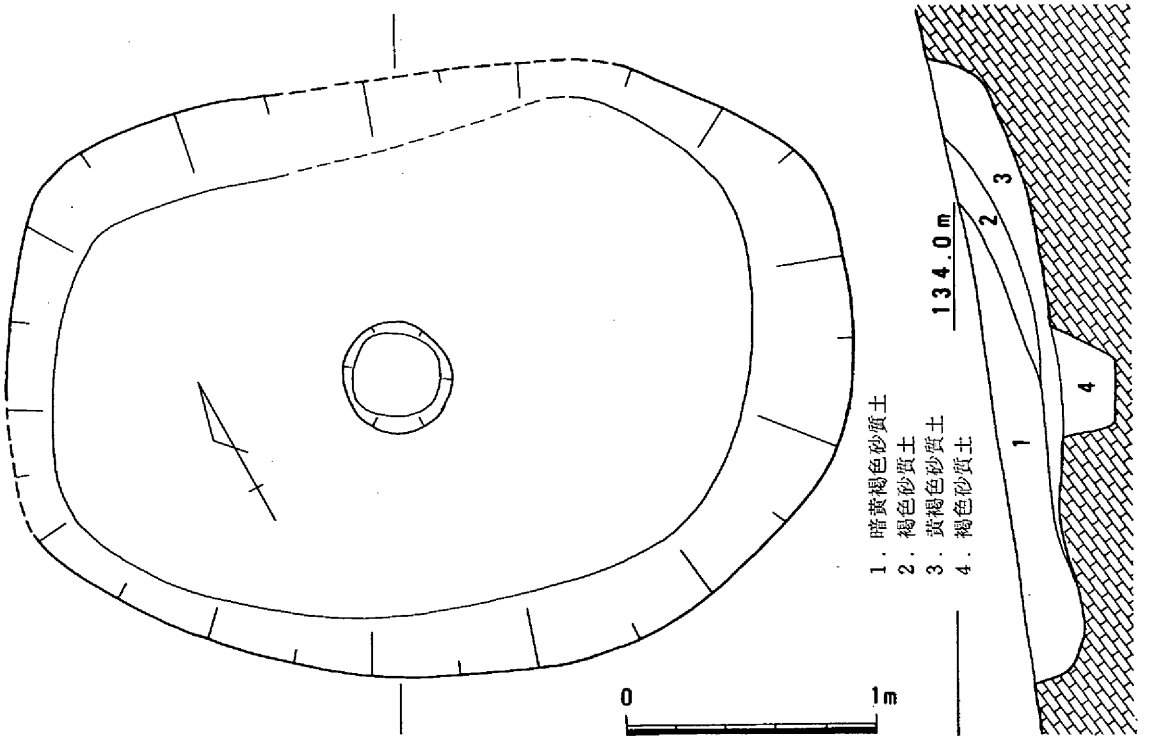
竪穴住居38の北にあり、円形を呈す小さく浅い土壙。柱穴とは考えがたい。

土壙4（第326図）

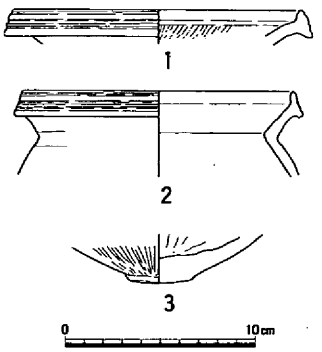
竪穴住居38の北西にあり、長楕円形を呈す浅い土壙。長さ220cm、幅120cm、深さ15cmを測る。

土壙5（第327図）

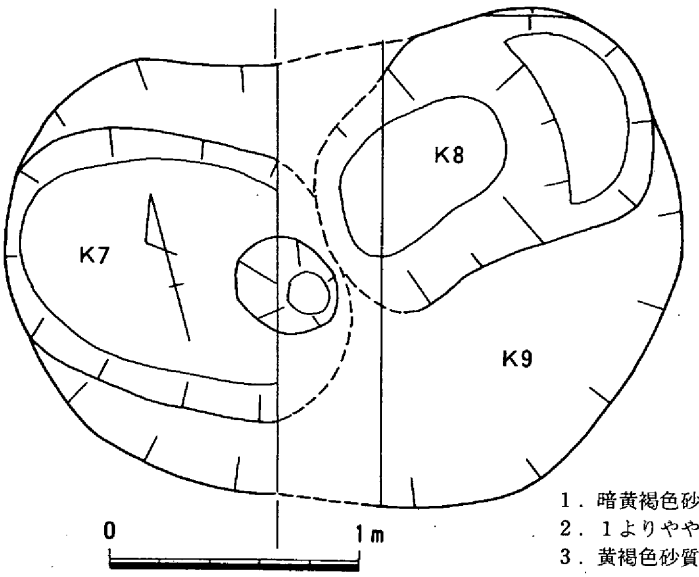
竪穴住居51の南東にあり、長楕円形を呈す大型土壙。中央に柱穴状の小穴を伴う。長さ340cm、幅240cm、深さ30cmを測る。用途・時期は不明。



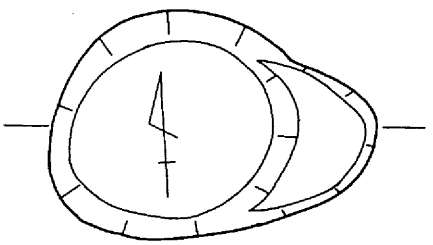
第327図　土壙5（1/30）

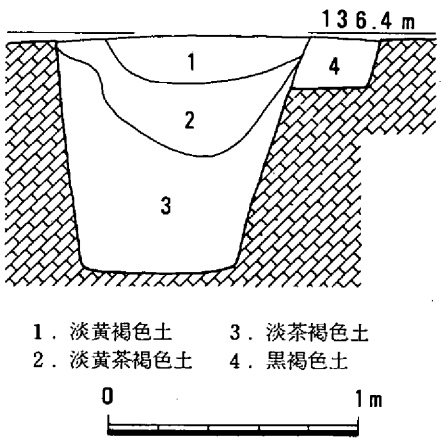


第328図　土壙６出土遺物



第329図　土壙７・８・９（1/30）





第330図　土壙10（1/30）

土壙６（第202図）

竪穴住居31の南東にあり、方形を呈す小型土壙。竪穴住居26に伴う可能性もある。一辺80cm、深さ50cmを測る。土器が若干出土。弥生後期である。

土壙７（第329図）

竪穴住居２の南にあり、楕円形を呈す小型土壙。竪穴住居７の排水溝に切られている。長さ150cm、幅100cm、深さ30cmを測る。

土壙８（第329図）

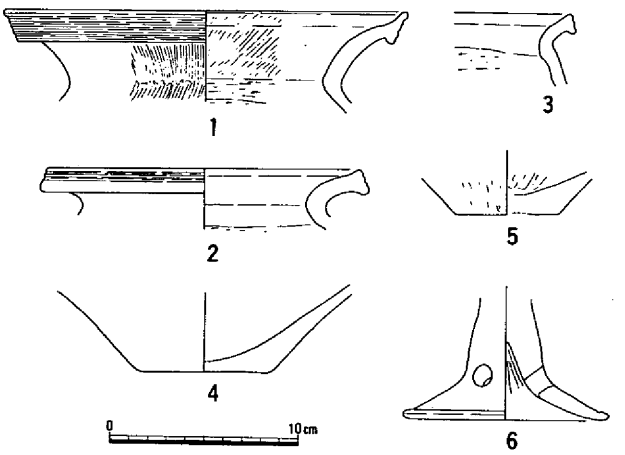
土壙７の東にあり、不整形を呈す小型土壙。竪穴住居２の排水溝に切られている。

土壙９（第329図）

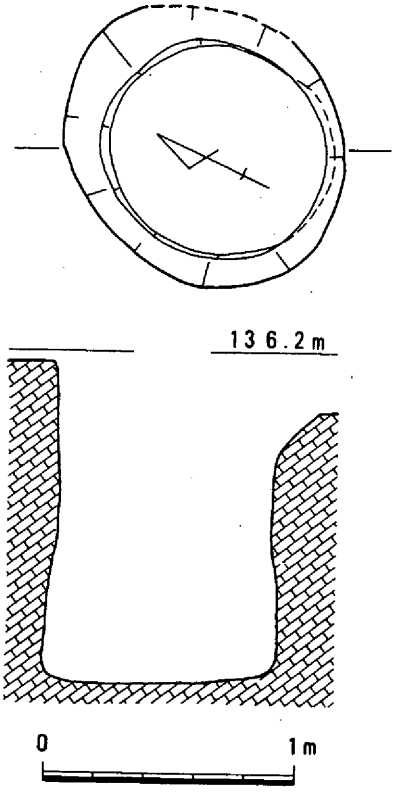
土壙７・８の下層にあり、不整形を呈す大型土壙。自然地形ではないようである。

土壙10（第330図）

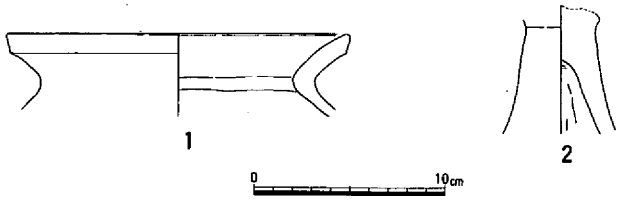
竪穴住居１と54の中間位置にある円形の深い土壙。貯蔵穴か大型建物の柱穴と推定される。埋土上層から弥生土器出土。



第331図　土壙10出土遺物



第332図　土壙11（1/30）



第333図　土壙11出土遺物

土壙11（第332図）

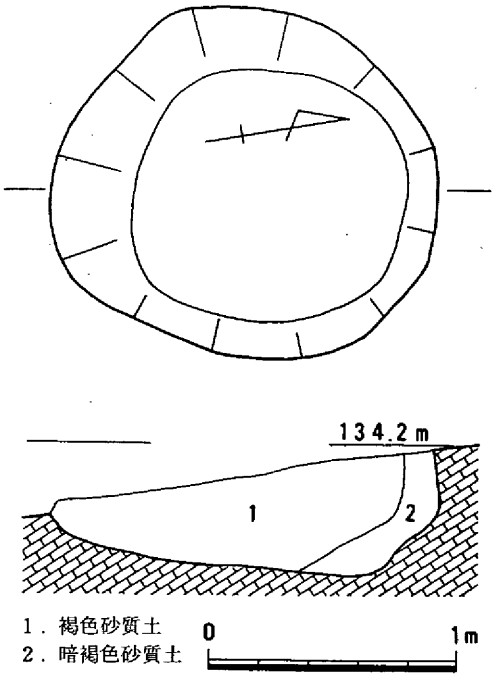
土壙10の西５ｍにある円形の深い土壙。崩れていない部分の直径90cm、深さ140cmを測る。貯蔵穴と考えられる。土器２点出土。弥生後期。

土壙12（第334図）

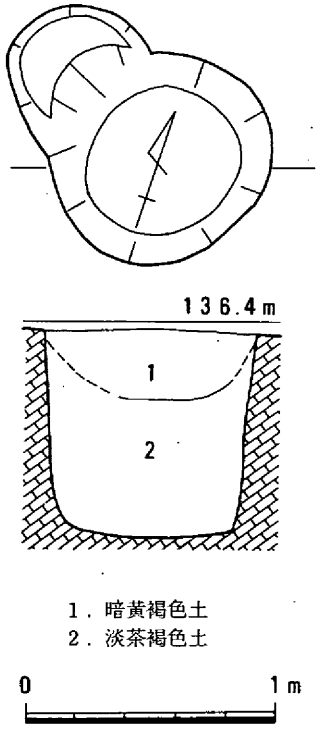
竪穴住居40の東にある円形の土壙。直径150cm、深さ50cmを測る。時期不明。

土壙13（第335図）

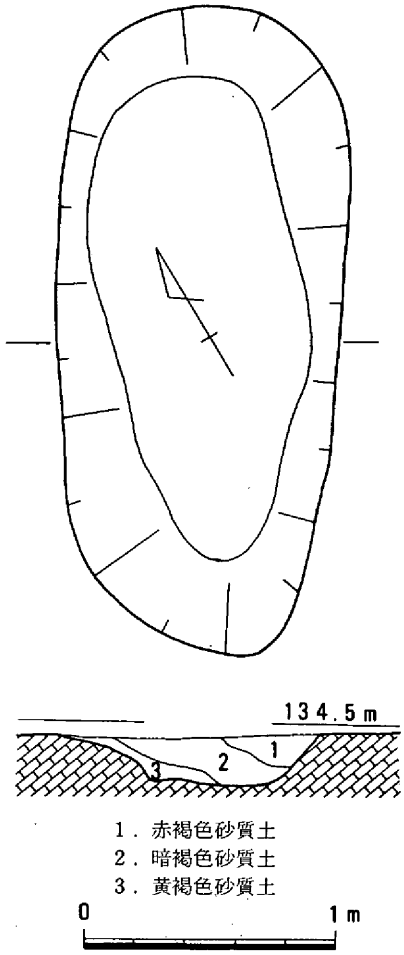
土壙10の西５ｍにある円形の深い土壙。直径80cm、深さ80cmを測る。貯蔵穴と考える。



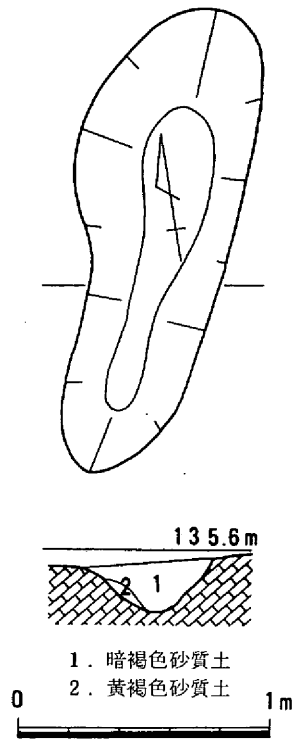
第334図　土壙12（1/30）



第335図　土壙13（1/30）



第336図　土壙14（1/30）



第337図　土壙15（1/30）

土壙14（第336図）

竪穴住居50の東にある長楕円形の土壙。長さ250cm、幅110cm、深さ20cm。

土壙15（第337図）

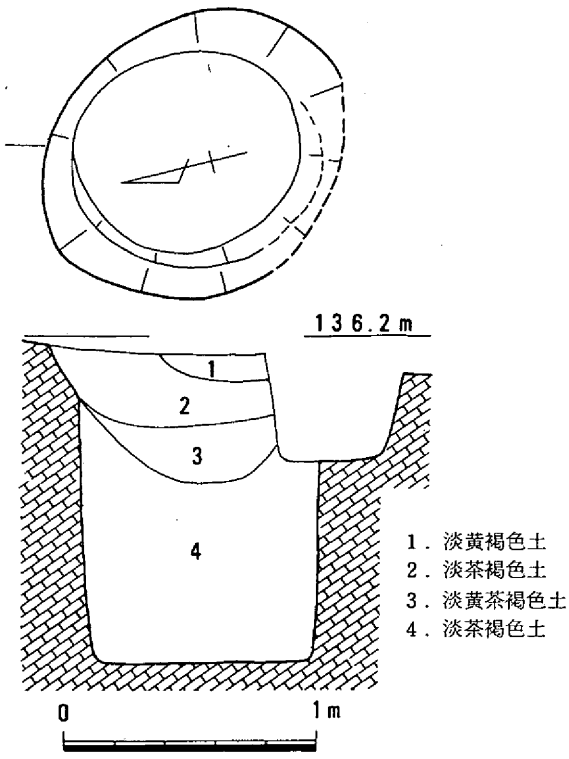
竪穴住居52の南にある長楕円形の土壙。長さ190cm、幅70cm、深さ20cm。

土壙16（第338図）

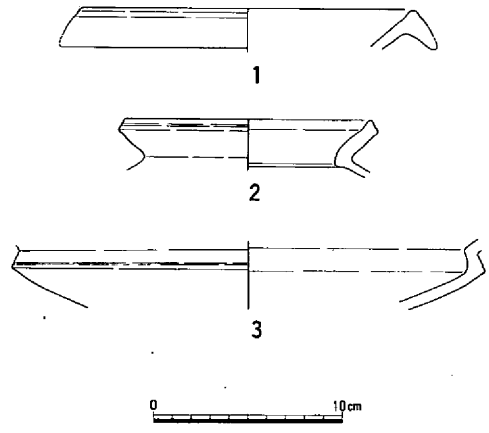
土壙11の東２ｍの位置で検出した平面形楕円形の土壙。長さ130cm、幅110cm、深さ125cm。を測る。

遺物は、壺・甕・高杯が出土している。

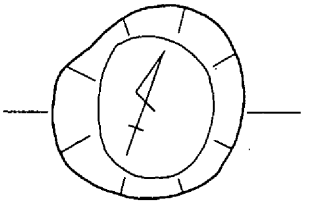
時期は弥生中期。



第338図　土壙16（1/30）



第339図　土壙16出土遺物



土壙17（第346図）

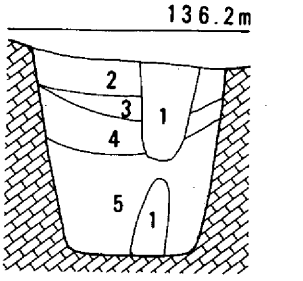
竪穴住居54の中にある不整円形の土壙。崩れていない部分の直径80cm、深さ80cmを測る。小型の貯蔵穴と思えるが、柱痕状の断面が観察できる。土器は弥生土器のようなものがごく少量出土しているが、時期が決定できるものではない。

土壙18（第341図）

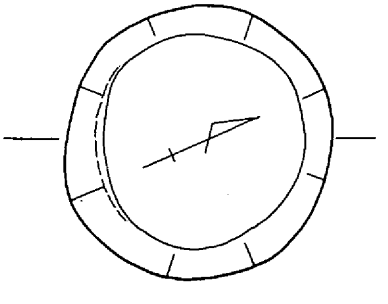
竪穴住居54の溝に切られ、土壙18の南にある円形の土壙。上部は崩れているので、そうでない部分の直径80cm、深さ130cmを測る。第二層は一気に埋め戻されたか、あるいは埋まってしまったようである。貯蔵穴と考えたい。土器は出土していない。時期不明。

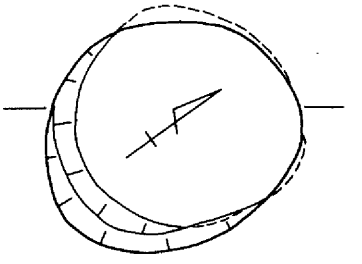
土壙19（第342図）

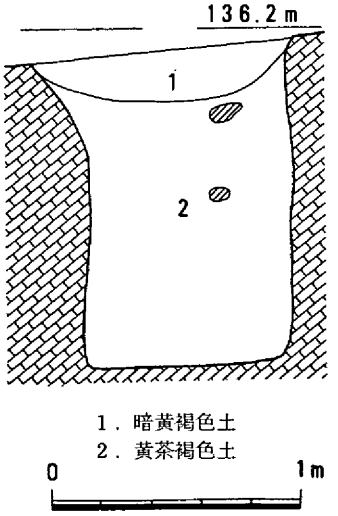
土壙16の南西12mにある円形の土壙。直径80cm、深さ100cmを測る。貯蔵穴と考えたい。埋積土は4層に分けている。土器は出土していない。時期不明。なおこれと土壙16・11・18とで建物の可能性を追求したが、形態や深さなどから確認できなかった。



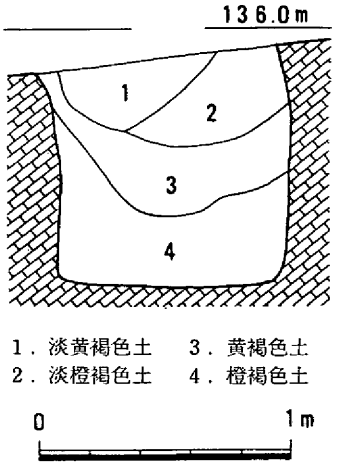
第340図　土壙17（1/30）



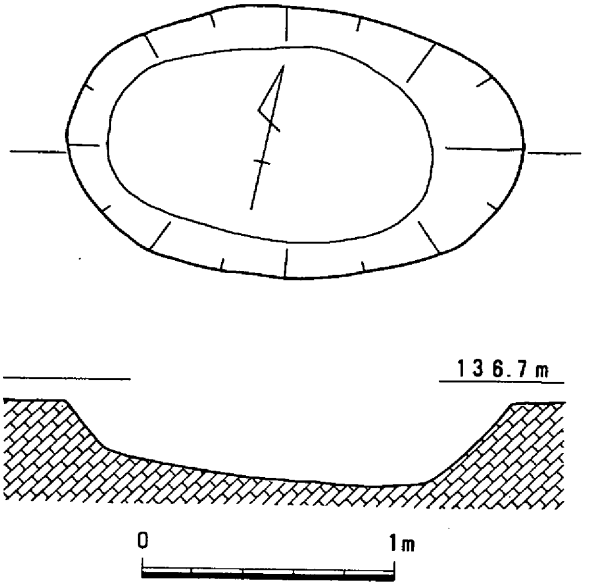




第341図　土壙18（1/30）



第342図　土壙19（1/30）



第343図　土壙20（1/30）

土壙20（第343図）

竪穴住居７の南南西で検出した楕円形の土壙。長軸は東西方向にある。底部は東のほうが深くなる。大きさは長さ180cm、幅110cm、深さ30cmを測る。遺物は皆無。用途・時期は不明である。

土壙21（第344図）

竪穴住居１の西で検出した不整円形の土壙。長軸は東西方向にある。底部は南のほうが少し深い。大きさは長さ140cm、幅130cm、深さ30cmを測る。遺物は皆無。用途・時期は不明である。

土壙22（第344図）

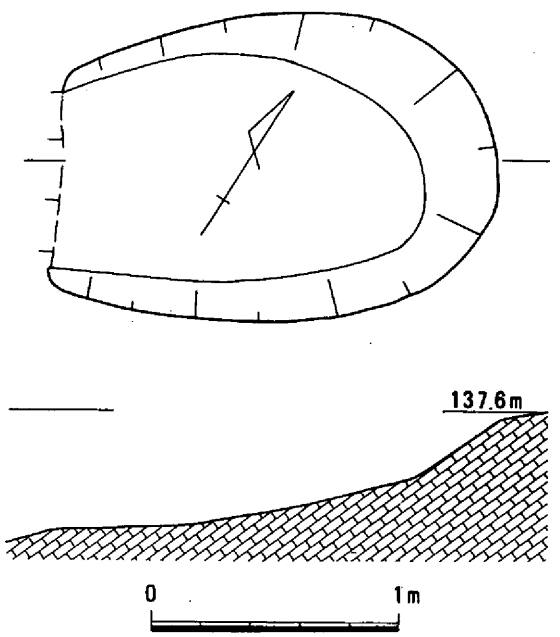
竪穴住居21の南で連続して検出した不整円形の土壙。長軸は北東―南西方向にある。底部は南のほうが少し深い。大きさは長さ120cm、幅110cm、深さ30cmを測る。遺物は皆無。用途・時期は不明。

土壙23（第345図）

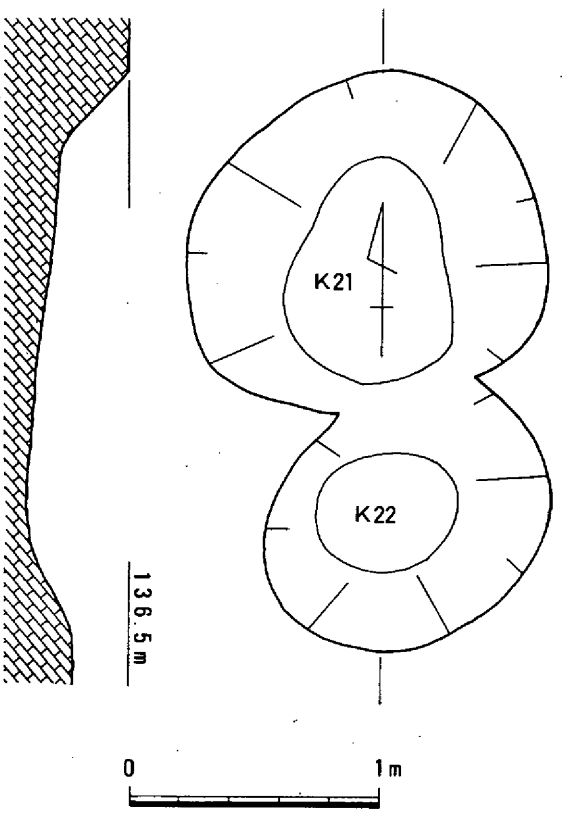
４区Ｃの西竪穴住居66の中で検出した楕円形の土壙。残存の長さ170cm、幅120cm、深さ30cmを測る。遺物は皆無。用途・時期は不明。竪穴住居78に伴うとは考えていない。

土壙24（第346図）

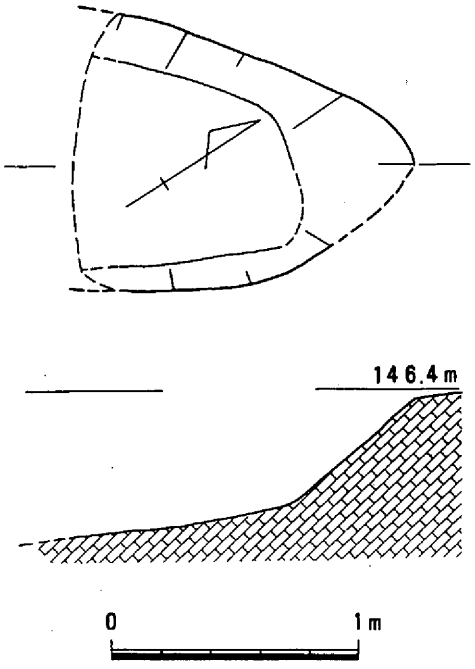
４区Ｅの北西竪穴住居95に切られている楕円形の土壙。残存の長さ140cm、幅110cm、深さ50cmを測る。遺物は皆無。用途・時期は不明。



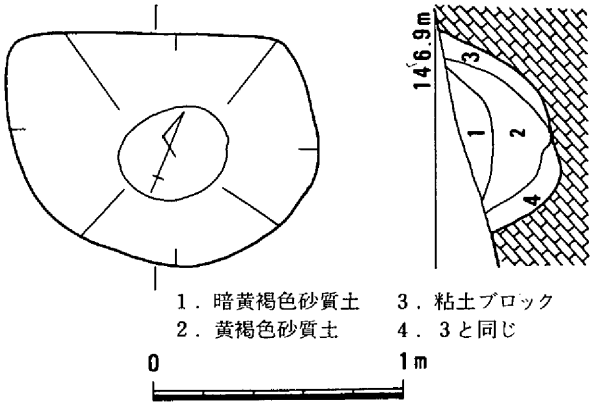
第345図　土壙23（1/30）



第344図　土壙21・22（1/30）



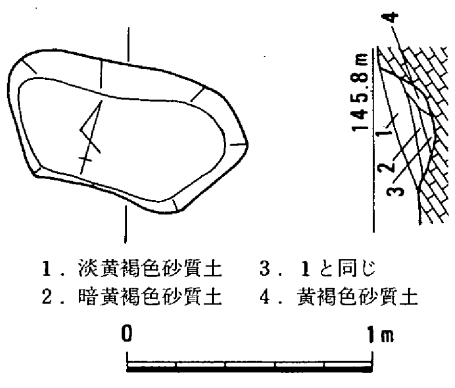
第346図　土壙24（1/30）



第347図　土壙25（1/30）

土壙25（第347図）

4区Dの北東建物11の北東で検出した不整形な小型土壙。長さ120cm、幅90cm、深さ45cmを測る。遺物は皆無。用途・時期は不明。



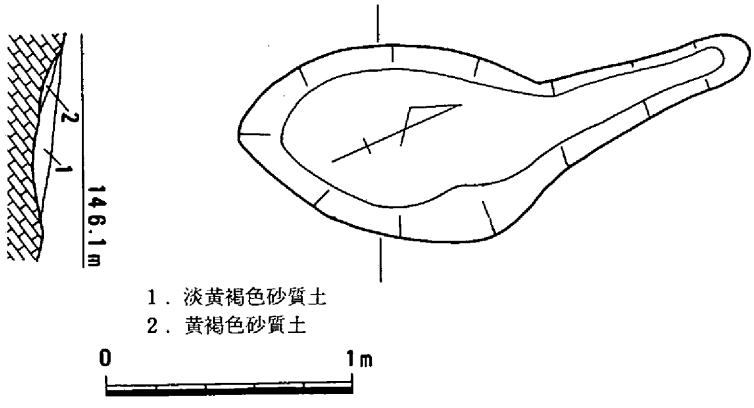
第348図　土壙26（1/30）

土壙26（第348図）

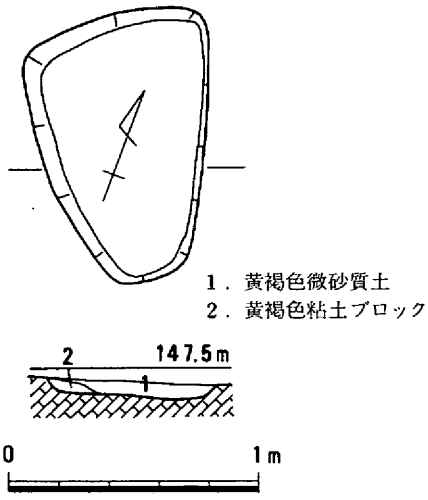
4区Dの北建物10の北で検出した不整形な小型土壙。長さ100cm、幅50cm、深さ20cmを測る。検出面の海抜高は145.8m。遺物は皆無。用途・時期は不明。

土壙27（第349図）

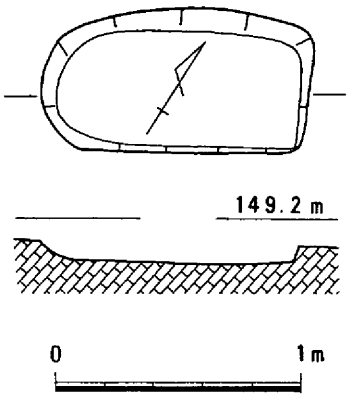
4区Dの北建物10の北西で検出した不整形な小型土壙。長さ200cm、幅80cm、深さ10cmを測る。検出面の海抜高は146.0m。遺物は皆無。用途・時期は不明。



第349図　土壙27（1/30）



第350図　土壙28（1/30）



第351図　土壙29（1/30）

土壙28（第350図）

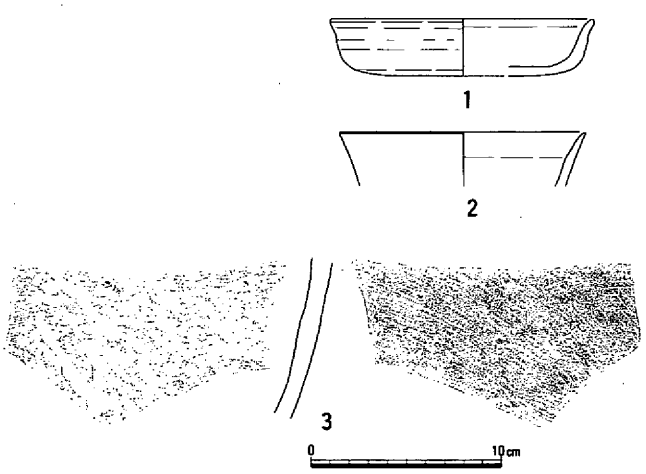
4区Dの北竪穴住居98の東で検出した不整形な小型土壙。長さ100cm、幅50cm、深さ20cmを測る。遺物は皆無。用途・時期は不明。検出面の海抜高は147.5m。

土壙29（第351図）

4区Gの竪穴住居109の東で検出した長方形の小型土壙。長さ100cm、幅50cm、深さ10cmを測る。遺物は皆無。用途については竪穴住居109よりも竪穴住居116に伴う貯蔵穴と考えられないだろうか。時期は遺物が出土していないため、不明である。検出面の海抜高は149.1m。

土壙30（第170図）

竪穴住居1の東にあり、長楕円形を呈す浅い土壙。長さ120cm、幅80cm、深さ15cmを測る。土師器・須恵器杯・須恵器甕片出土。用途は不明。時期は古代と考えられる。

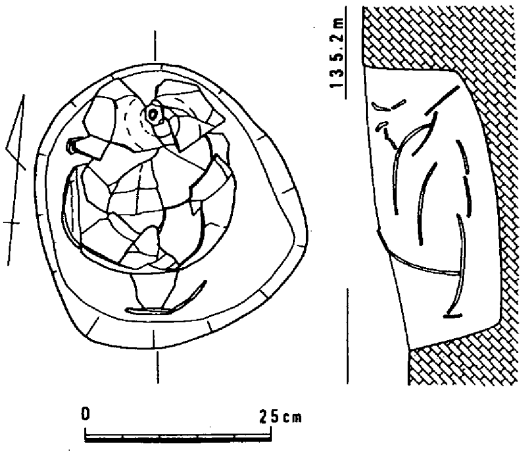


第352図　土壙30出土遺物

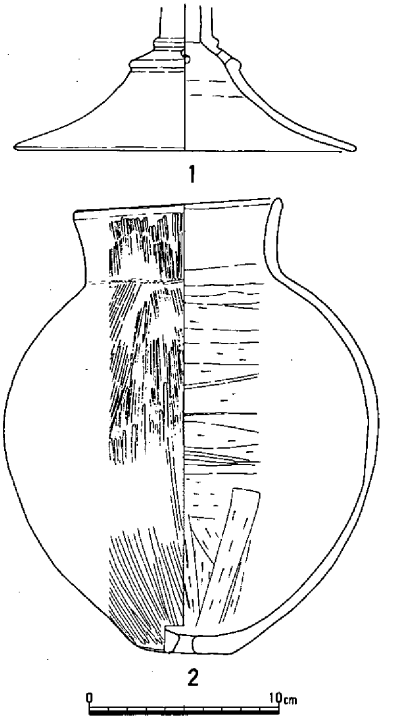
5．土器棺・土壙墓

土器棺1（第353図、図版44－1）

4区Aの竪穴住居2の西で検出したほぼ円形の小型土壙のなかに土器を容器と蓋に使用して埋め、棺にしたもの。使用していた土器はひびが入り潰れていた。土壙の掘方は長さ40cm、幅30cm、深さ20cmを測る。容器は直口壺で、底部は焼成後に穿孔している。蓋のほうは高杯の脚裾および脚柱部である。この土器から土器棺の時期は弥生後期と考えられる。



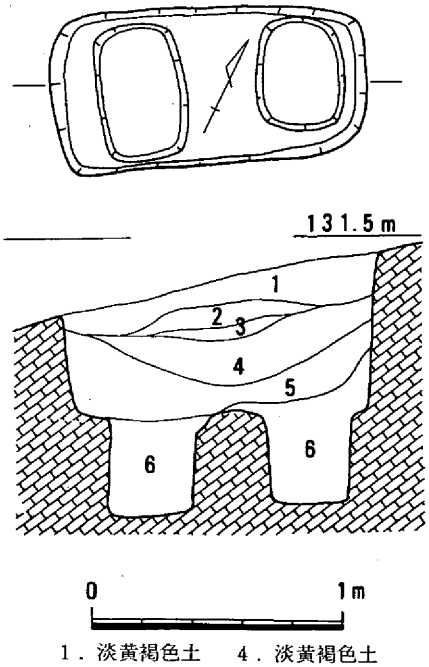
第353図　土器棺1（1/10）



第354図　土器棺1使用土器

土壙墓1（第355図、図版44－2）

4区Aの建物9の東端で検出した長方形の小型で深い土壙墓である。土壙の掘方は長さ125cm、幅55cm、深さ70cmを測る。さらにこの床面から下に2個の長方形の穴が掘り込まれている。断面形は全体でゲタのような形を呈する。下の穴の大きさは西のものが長さ50cm、幅30cm、深さ40cm、東のものが長さ40cm、幅30cm、深さ30cmを測る。小口板をはめ込むにしては深く、かつ大きすぎる気がする。土層断面の第2・3層は木蓋の上に乗せていた土ではないかと思われる。いずれにせよ地山は新世代第三期の砂岩層で表面は軟らかいが掘りすぎることはない。遺物は皆無である。したがって時期は不明と言わざるを得ない。



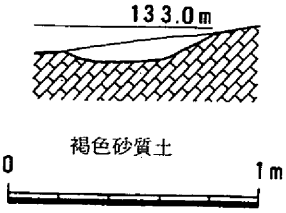
1．淡黄褐色土　4．淡黄褐色土
2．黒褐色土　5．暗褐色土
3．淡褐色土　6．暗黄褐色土

第355図　土壙墓1（1/30）

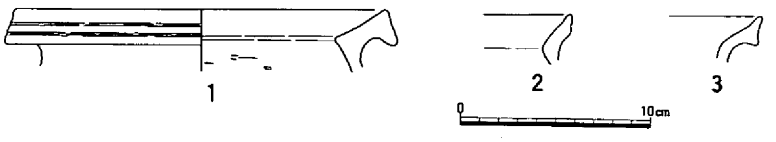
6．溝

溝１（第356図）

４区Ａの竪穴住居31から竪穴住居17の間で検出できた溝である。長さ900cm、幅60cm、深さ10cmを測る。竪穴住居31の土層断面からより新しい事がわかる。土器は甕の口縁部・底部片が出土しているので、弥生後期に属していると言える。



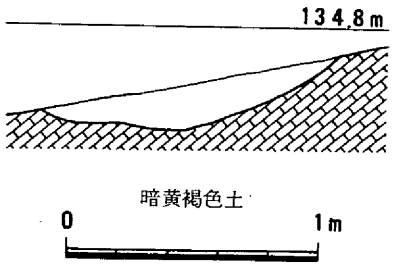
第356図　溝１（1/30）



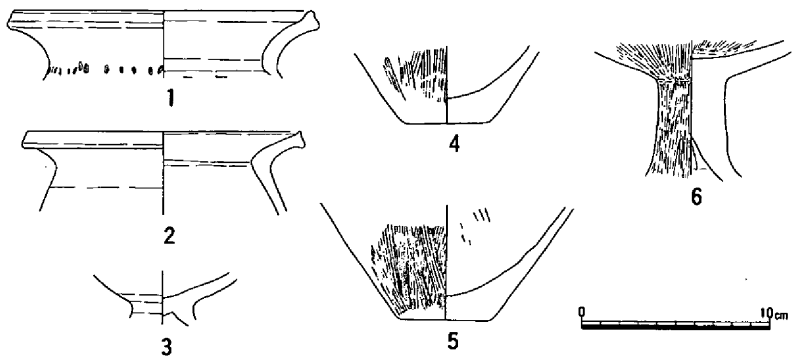
第357図　溝１出土遺物

溝２（第358図）

修理免２号墳の西で検出できた溝である。南北に伸びる溝であるが、少し西にカーブを描いている。検出長1000cm、幅110cm、深さ30cmを測る。遺構検出中には須恵器も見られたが、溝の埋土中からは弥生土器しか出土していない。壺・甕・鉢・高杯が見られる。



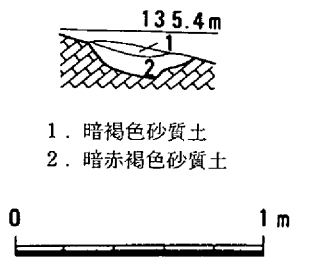
第358図　溝２（1/30）



第359図　溝２出土遺物

溝３（第360図）

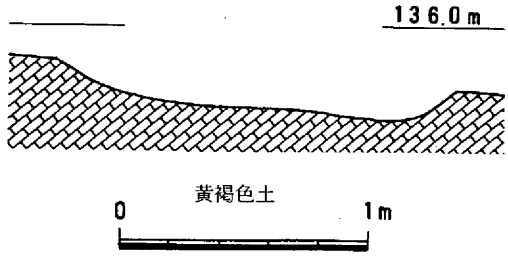
４区Ａの土器棺１の北側で検出できた溝である。長さ500cm、幅40cm、深さ15cmを測る。東方は竪穴住居２によって切られている。西の方は少し鍵形に曲がる。住居の溝の可能性もある。



第360図　溝３（1/30）

溝４（第361図）

４区Ａの竪穴住居２の北、土壙19の南で検出できた溝である。長さ900cm、幅160cm、深さ15cmを測る。土色・土質の観察から中・近世の新しい山道のように思われる。



第361図　溝４（1/30）

(6)　4区Fの調査

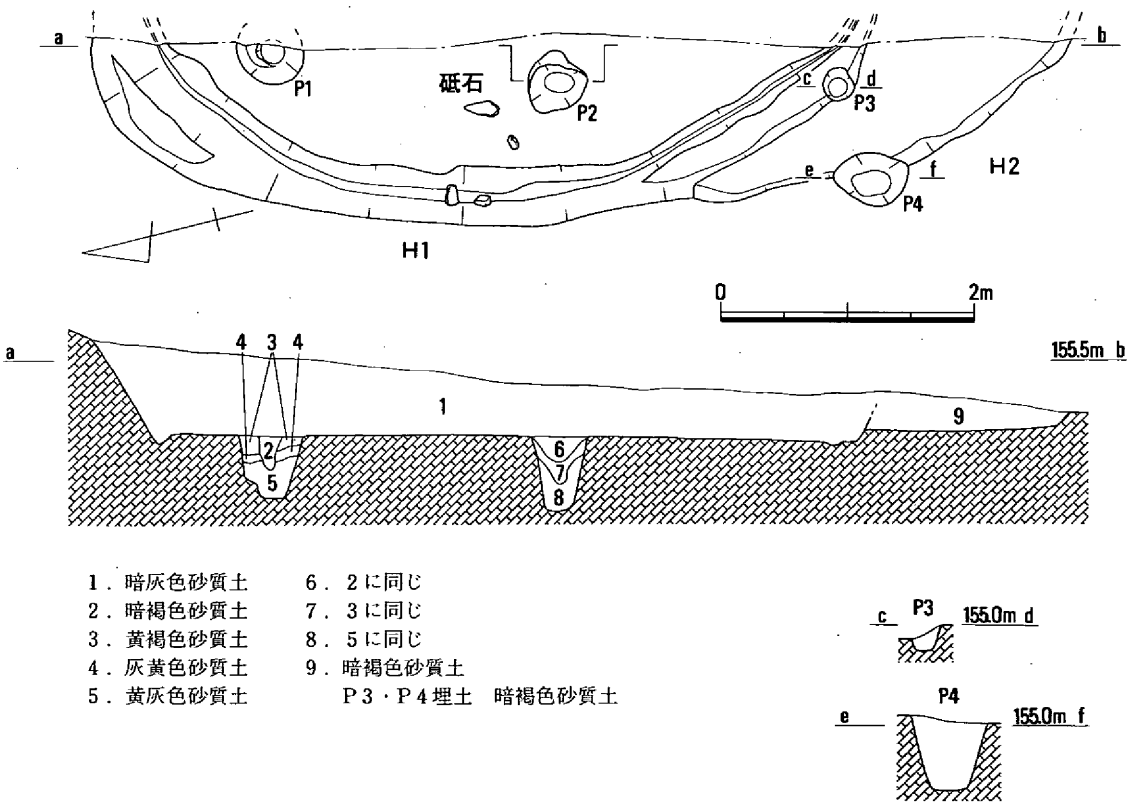
すべての調査区の中で最も高い位置にあり、標高145～160m前後を測る。幅の狭い痩せ尾根上で、広い平坦地はほとんど確保できないが、比較的多くの遺構が検出された。竪穴住居７軒、段状遺構20基、建物３棟、土壙１基、溝１本である。

１．竪穴住居

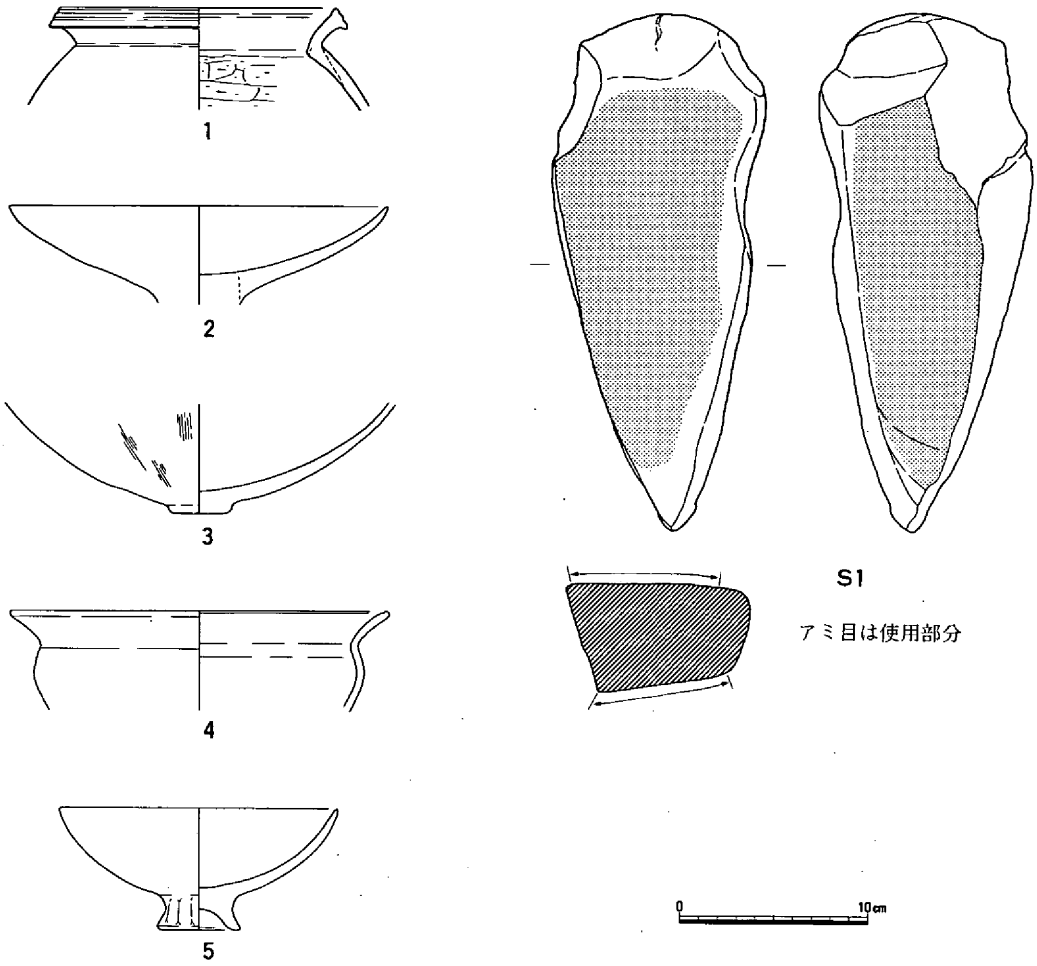
竪穴住居１（第362図、図版45－１）

平面円形の竪穴住居である。調査区境部分に一部が検出されたのみであるが、規模を復元すれば径約７ｍとなる。残存状況は比較的よく、地形の高い北側で床面から約70cm、地形の低い南側でも約40cmの深さが残存していた。竪穴住居２と重複しているが、断面観察から竪穴住居１の方が新しいことがわかった。住居床面には、壁体に沿って壁体溝がめぐっているが、南側約１/３の部分では壁体と溝が離れている。建て替えに伴う結果かどうか不明だが、埋土の断面観察や柱穴の配列状況等から、建て替えを伴う可能性は低いと思われる。柱穴は図示したもののうち、Ｐ１・Ｐ２がこの住居に伴うものである。径約50cm、深さ約50～60cmで、発掘区外の部分にも同様に配置しているとすれば、６本の主柱を伴う竪穴住居と推定できる。

遺物は土器と石器が出土している。土器は南半部分の床面直上から多く出土しており、石器は砥石がＰ２付近の床面上に置かれた状態で出土した。そのほか床面上や壁体溝の中から拳大の礫が数点出土している。出土遺物は第363図に示した。１は、口縁端部に２条の凹線をめぐらせる甕で、内面は口縁部直下までヘラケズリを行なっているが、その後全面的にナデを加えているようである。２は高杯



第362図　竪穴住居１・２（1/60）



第363図　竪穴住居１出土遺物

で、杯部は浅い皿状を呈する。杯部と脚部は別作りで挿入接合している。３は壺または鉢の底部で、中央に径約3.5cmの小さな台をもつ。４は鉢、５は台付鉢である。土器は全体に風化が著しく、調整等の不明なものが多い。Ｓ１は閃緑岩製の砥石で、表裏両面を作業面として使用している。出土土器からこの竪穴住居は弥生時代後期前半ないし中葉頃に位置づけられる。

竪穴住居２（第362図、図版45―１）

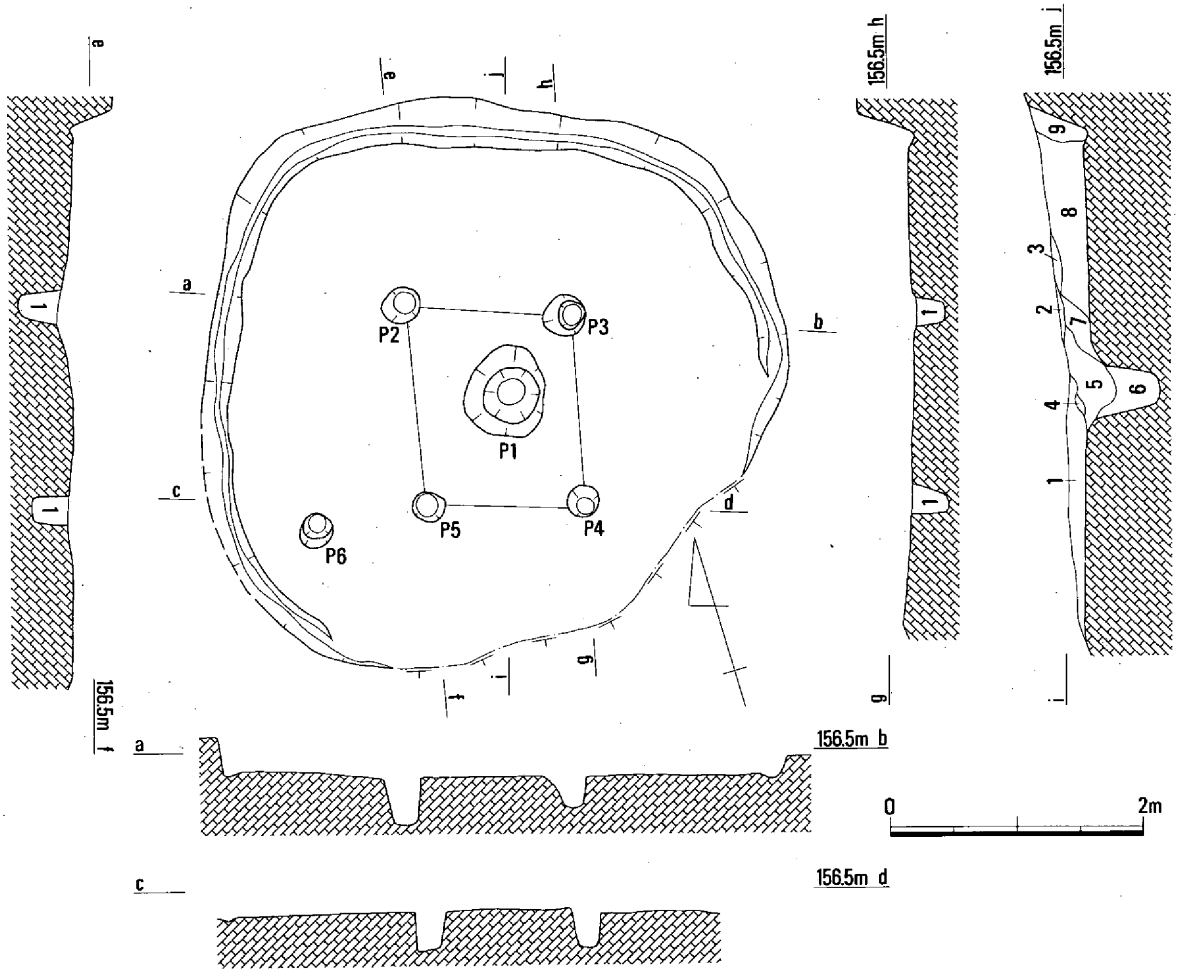
竪穴住居１と重複し、ごく一部のみが検出されている。わずかに弧を描くことから平面円形の竪穴住居と考えられ、直径は約６～７ｍに復元される。壁体は深さ15cm前後が残存している。壁体溝は認められないが、壁体ぎわの床面がわずかに窪んでいる箇所がみられた。この竪穴住居に伴う明確な柱穴は確認されなかった。遺物は弥生土器の小片が出土したのみで、時期の決定は困難である。

竪穴住居３（第365図、図版45―２）

竪穴住居１からやや北へ上った位置に検出された竪穴住居である。尾根線のほぼ頂部に位置しており、地形は北から南に向かって緩やかに傾斜している。平面形は不整形であるが、隅丸方形あるいは円形を呈し、規模は径約4.5～５ｍである。最も残りのよい北側で床面から約40cmの深さが残存していた。壁体に沿って深さ５cm程度の壁体溝をもっているが、地形の低い南東側には認められず、地形の高い側のみにめぐらせていたようである。柱穴はＰ２～Ｐ５の４つを伴い、いずれの柱穴も径約25cm、深さ約25～30cmである。Ｐ６も、規模、埋土ともにＰ２～Ｐ５とよく似ており、この竪穴住居に伴う可能性があるが、その性格は不明である。中央ピット（Ｐ１）は他の柱穴より規模が大きく、住

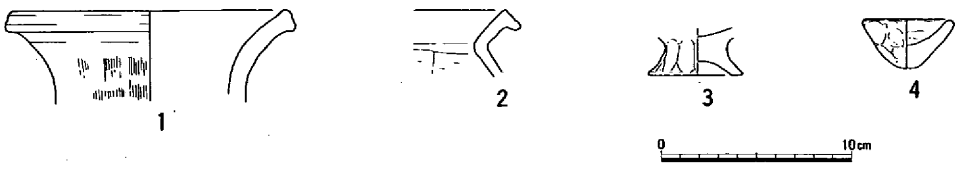
居床面での径約60cm、底部での径約25cm、深さ約55cmを測る。中央ピット周辺の埋土には木炭・焼土の分布が著しいが、ピット内よりも上層の方がより顕著である（5層・7層）。ピット内の6層には若干の木炭が含まれるにすぎない。

遺物は土器若干が出土している（第365図）。1は壺で、風化が著しく調整等不明瞭である。2は甕で、やや下方に垂下する口縁端部に2条の凹線文をめぐらせている。内面は口縁部直下までヘラケズリを行なっていると思われるが、風化のため不明瞭である。3は台付鉢で、底部内面には不定方向のハケ目が施されている。4は手づくね土器であり、他の土器に比べて非常にきめの細かい胎土を使用



e－f・g－h　　1．灰色砂質土
i－j
1．黄褐色砂質土　　4．暗褐色砂質土　　7．暗褐色砂質土（木炭・焼土多含）
2．褐色砂質土　　5．黒褐色砂質土（木炭・焼土含）　　8．黄褐色砂質土（1層に類似）
3．褐色砂質土（地山礫多含）　　6．暗灰色砂質土（木炭含）　　9．暗黄褐色砂質土（1・8層に類似）

第364図　竪穴住居3（1/60）

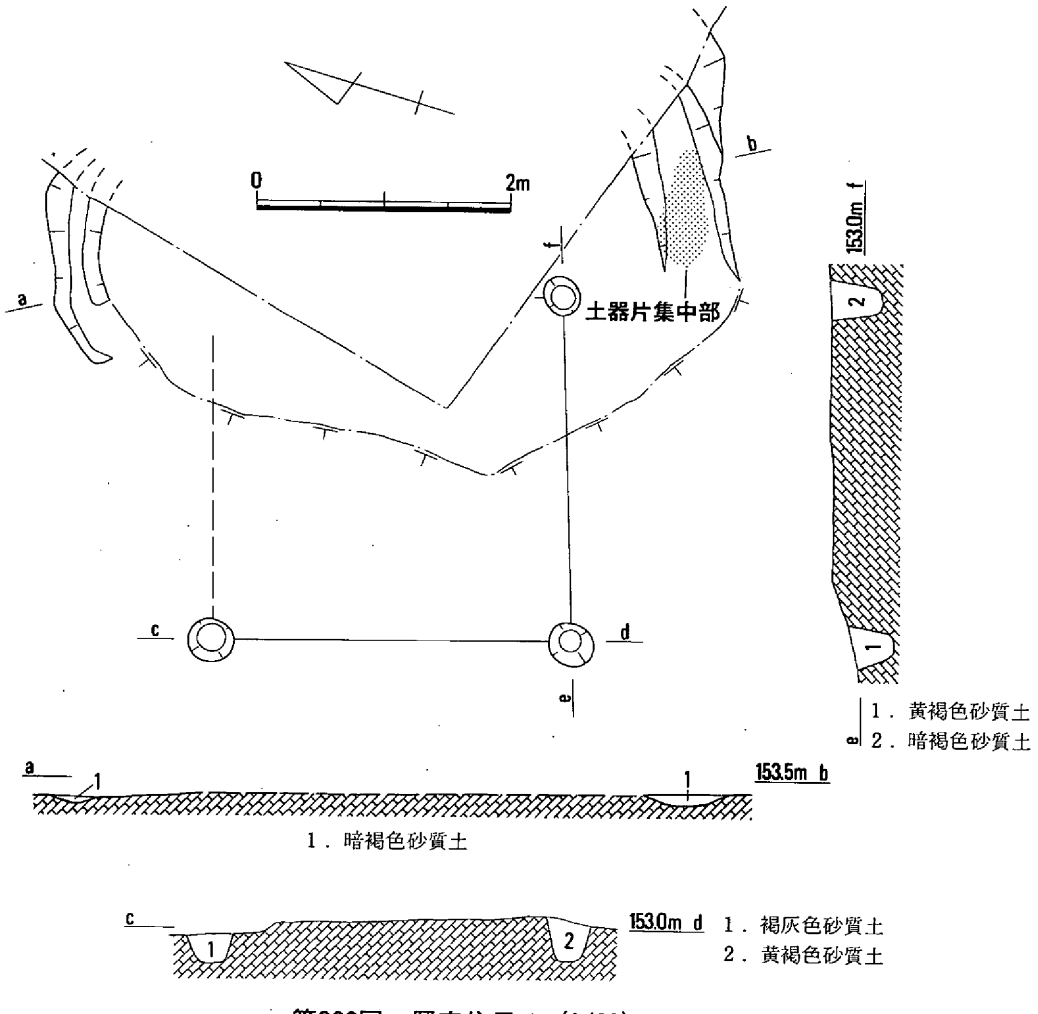


第365図　竪穴住居3出土遺物

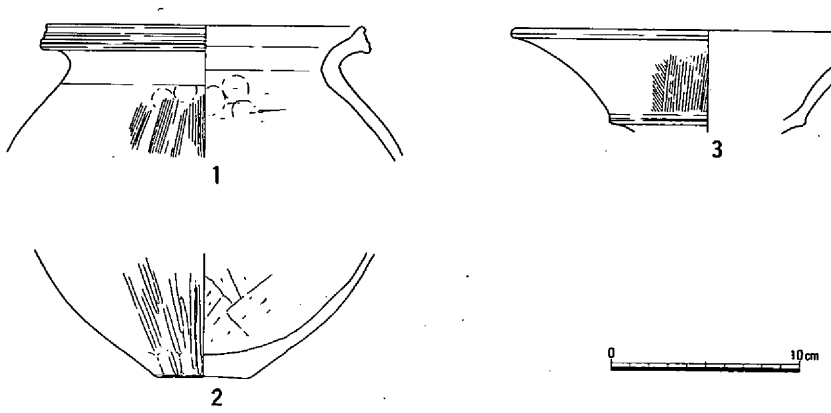
している。外面は指頭圧痕が顕著で、内面は横ナデ調整である。これらの遺物から、弥生時代後期前半ないし中葉の年代が与えられる。

竪穴住居４（第366図）

南西に向かって緩やかに下る斜面につくられた竪穴住居である。平面形など不明な部分が多く、柱穴と、東半部の調査区境付近にわずかに壁体溝が残存しているにすぎない。平面形を推定復元すれば



第366図　竪穴住居４（1/60）



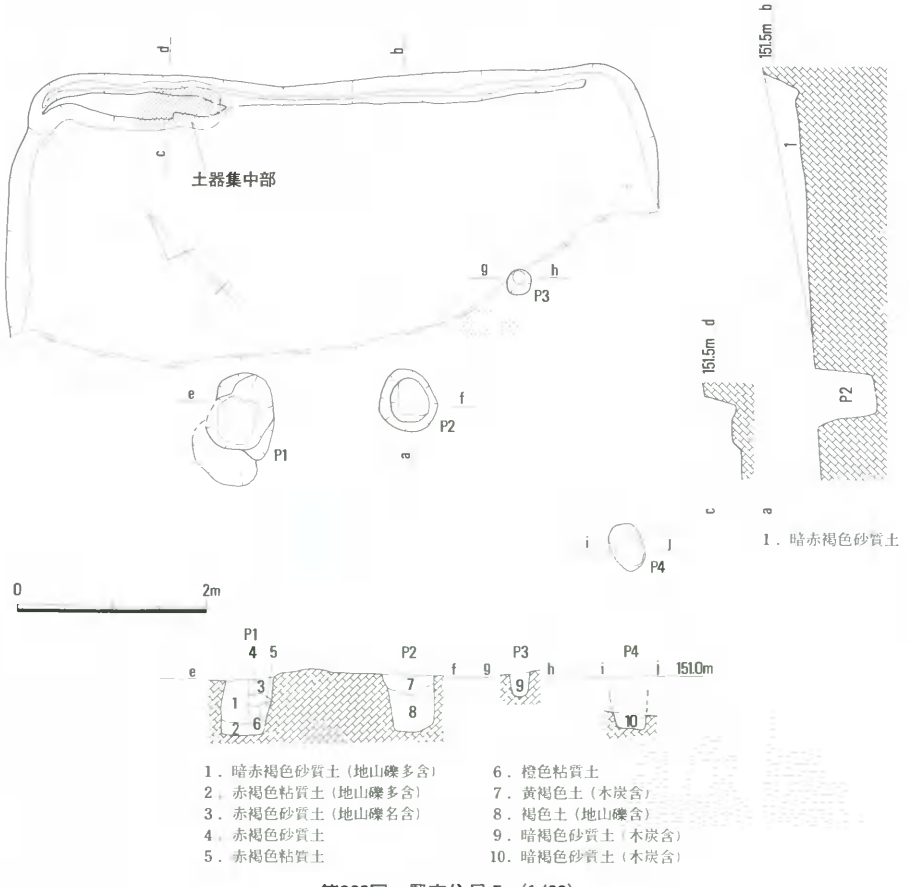
第367図　竪穴住居４出土遺物

一辺5m前後の方形になると思われる。柱穴は3つが確認されている。

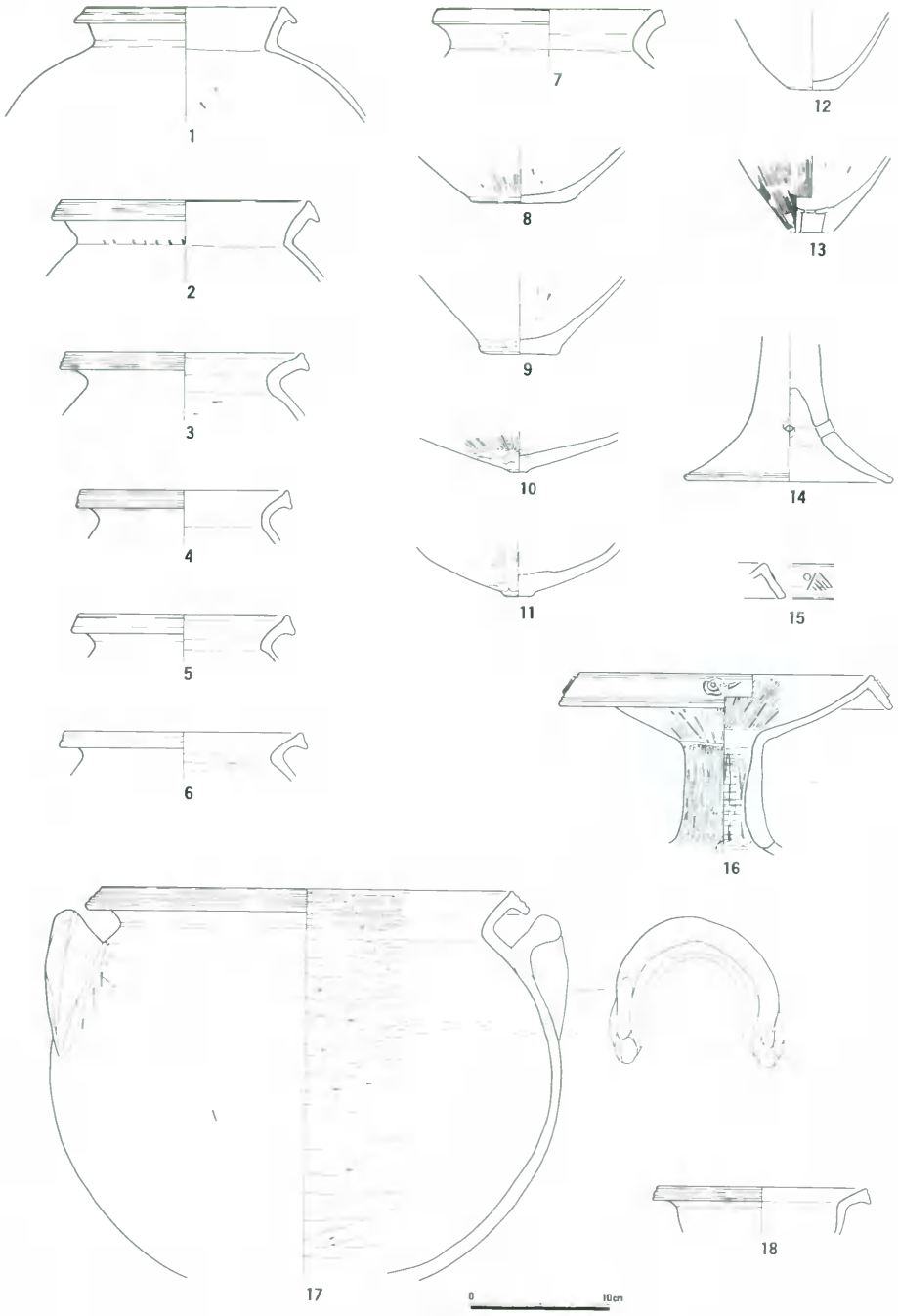
遺物は、南側に残存している壁体溝内の底部付近に土器片がまとまって出土したが、壺の胴部の破片が多く、図示できるものは少ない（第367図）。1は甕で、口縁部には3条の凹線がめぐる。胴部外面は縦ハケ、内面は口縁部直下までヘラケズリを行なっている。2は壺の底部で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリで、外面下端部には板状工具の押圧によるとみられる面取りがなされている。3は鼓形器台と思われる。弥生時代後期前半頃の年代が与えられよう。

竪穴住居5（第368図、図版45－3）

4区Fで最も南の部分、南に向かって緩やかに傾斜する比較的平坦な箇所につくられた竪穴住居である。平面形は一辺約6.5mのほぼ正方形と推定される。深さは残りのよい北東辺部分で床面から約30cmが残存していた。壁体溝は、地形の高い側である北東辺のみに認められ、他の辺にまでは回っていない。また北側コーナー部分には、壁体溝を挟んで、床面より10cm前後高く掘り残してある部分が



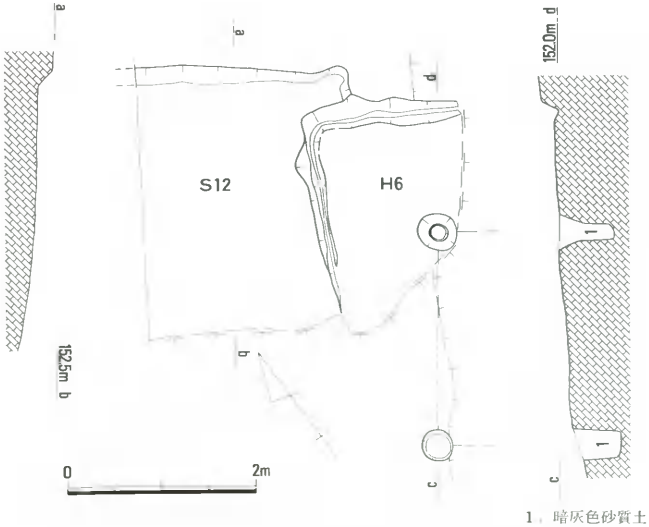
第368図　竪穴住居5（1/60）



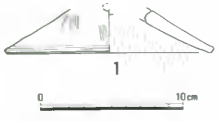
第369図　竪穴住居５出土遺物（1/4）

認められる。幅30cm、長さ180cm前後の棚状を呈し、その付近には土器片が集積してみられたことから、土器置場であった可能性が高い。住居床面のほぼ中央付近には、大形の柱穴2つが対をなして検出された。その間隔は約180cmである。柱穴の規模は両者とも類似しており、径約55cm、深さ約60cmを測る。その他に明確な柱穴は認められない。

第369図に示した土器は、ほとんどが北側コーナーの土器集中部から出土したものである。1～7は壺および甕の口縁部で、端部に2～3条の凹線をめぐらせるものが多い。内面はいずれもヘラケズリが口縁部直下まで及んでいる。なお、2は口縁部と胴部との境目に刺突文がみられる。8・9・12・13は壺または甕の底部である。13は底部中央に焼成前の穿孔が認められるが、一度あけた孔を内面から粘土を貼ってふさぎ、またあけ直している。10・11は壺の底部で、非常に小さな径1.5～2cmの扁平なボタン状の底部をもつ。いずれも外面は縦方向のヘラミガキを行なっている。14は高杯の脚部で、杯部とは別作りで挿入接合されている。15・16は器台である。口縁部はほぼ直角に折れ曲がって垂下し、その外面には、15では円形浮文と篦描鋸歯文、16では渦巻状の浮文が認められる。脚部には高杯と同様、4方向に透かし孔をもつ。全体に縦方向のヘラミガキがなされている。また16には赤色顔料が塗布されているが、15は器面風化のため明確でない。17は美作地域に多くみられる把手付鉢である。破片からの図上復元のため、プロポーションは若干の変動があり得る。口縁部下に逆U字形の把手を2方向に貼りつけている。外面はナデ調整、内面は横方向のヘラケズリの上から横ナデを加えている。このような把手付鉢には赤色顔料を塗布した例が多いが、この資料についてはその形跡はない。18は小形の鉢の口縁部である。以上の土器から、竪穴住居5は弥生時代後期中葉頃に位置づけられる。



第370図　竪穴住居6・段状遺構12（1/60）



第371図　竪穴住居6出土遺物（1/4）

竪穴住居6（第370図）

竪穴住居5に近い位置に検出された平面方形を呈する竪穴住居である。東側の大部分を後世の道によって削平され、南側を流失しているため、壁体が残存しているのは北側コー

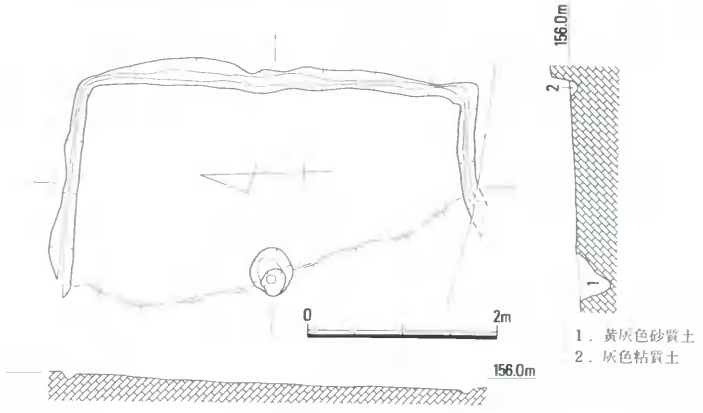
ナーのわずかな部分のみである。この部分で、床面からの深さ約20cmが残っていた。壁体溝もこの部分の壁に沿って認められるが、地形の低い南方へ向かうにしたがって浅くなり、途中でとぎれてしまう状況がうかがえた。竪穴住居３や竪穴住居５と同様に、主として地形の高い側に壁体溝を伴っていると考えられる。柱穴は２つが確認されており、４本柱のうちの２本にあたると推定される。他の２つの柱穴は調査区外に存在するものと考えられる。検出された２つの柱穴は、断面形がやや異なるものの、いずれも径約35cm、深さ約55cmで、類似した規模を示している。以上の壁体や柱穴の位置関係から、竪穴住居６がほぼ正方形の整った平面形を示すものとして規模を復元すれば、およそ一辺５ｍ弱となろう。

遺物は土器片がわずかしか出土していないが、時期の推定できる資料として第371図に示した高杯脚部の破片がある。外面は縦ハケ目の後に横ナデを加えており、脚端部は内外面とも横ナデを行なっている。脚端部中央には１条の細沈線がめぐる。弥生時代後期後葉の年代が与えられる。

なお、この竪穴住居６は段状遺構12と重複しているが、前後関係は竪穴住居６の方が古いことがわかった。竪穴住居６の埋土は地山の礫を多く含む褐色土を突き固めたような状況を呈しており、通常の遺構埋土とは異なるものであった。段状遺構12の構築にあたって竪穴住居６を埋め立て、床面を造成したものと思われる。段状遺構12については後述する。

竪穴住居７（第372図、図版46－２）

尾根の頂部に近く、西に面した斜面上に築かれた平面方形の竪穴住居である。立地する斜面の傾斜は、今まで述べてきた４区Ｆの竪穴住居の中では最も大きく、約10°を測る。西半部を流失し、約半分が残存していた。地形の高い東側では床面から約20cmが残っている。規模は一辺約3.5ｍで、正方形の平面形を呈するものと考えられる。コーナーは北東および南東が残っているが、いずれもあまり丸みを帯びず角張ってほぼ直角に曲がっている。また南辺は、途中で緩く反り返り、調査区外にのびている。壁体溝は、幅の狭いものが壁体に沿ってめぐっているが、壁体溝内の埋土は灰色を呈する粘性の強い土であり、竪穴住居自体の埋土とは様相を異にしている。ピットは、床面中央１か所に認められたのみで、その他に柱穴と考えられるようなピットは一切検出されなかった。中央のピットは平面・断面ともに不整形なものである。また、住居の床面は水平でなく、南西方向に向かって若干の傾斜が



第372図　竪穴住居７（1/60）

認められる。遺物は出土しておらず、時期も不明である。

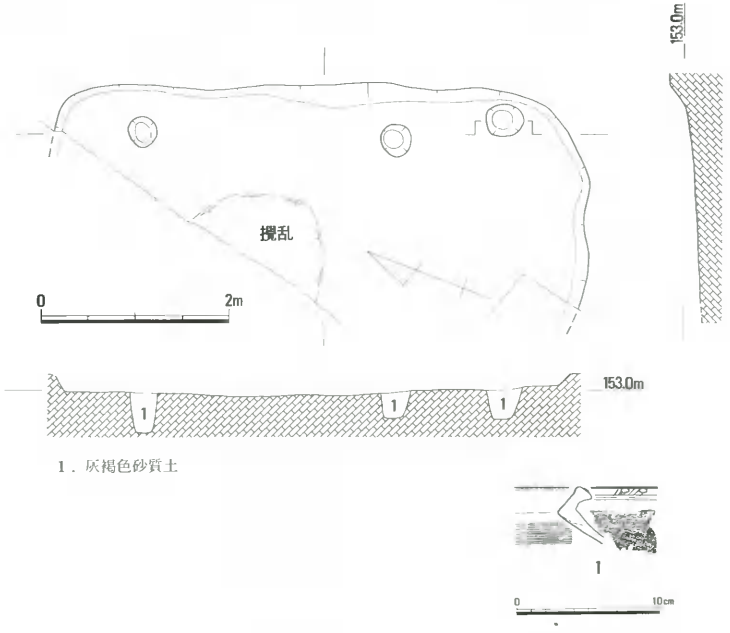
2. 段状遺構

竪穴住居との区別の困難なものもあるが、ここでは平面形や柱穴の配置状況が通常の竪穴住居とは異なるものを段状遺構として区別している。上述したように4区Fは幅の狭い尾根上にあたり、平坦な場所は少なく急斜面が多い。このため竪穴住居よりも段状遺構の方が多く検出されており、竪穴住居は中でも比較的傾斜の緩い地点（10°以下）に限って築かれているのに対し、段状遺構は20°前後の急斜面に築かれているものもある。

段状遺構1（第373図）

西に面した斜面上に築かれた段状遺構である。およそ半分が調査区外にあるため、平面形、規模など正確にはおさえられない部分が多い。およそ隅丸方形の平面であるが、正方形に近い形になるのか、長方形になるのかは不明である。ただし周辺の地形から判断すれば、正方形に近い形にするには谷側にかなりの高さの床面造成を行なわなければならず、長方形と推定する方が妥当である。東西辺（短辺）の長さは不明であるが、南北辺（長辺）の長さは約5.7mである。深さは床面から約15cmが残存していた。また壁体溝は認められなかった。ピットは、この段状遺構に伴うものとして、3つが確認されている。東辺の壁体に沿って3つが並んでおり、なんらかの上部構造物に伴う柱穴と考えられる。ただしこれらのピットは厳密に一直線に並ぶわけではなく、その間隔も揃っていない。

遺物は、埋土中より土器片が若干出土しており、図示した壺の口縁部の破片がある。口縁端部を肥厚しその部分に左下がりの篦描沈線文と円形浮文を施し、また口縁上端部には細かな刻目をもつ。胴部はかなり肩がはる形態で、外面には櫛描波状文をめぐらせ、内面は横方向のハケ目で仕上げてい



第373図　段状遺構1（1/60）・出土遺物

る。この土器から、段状遺構１は弥生時代中期中葉頃に位置づけられる。

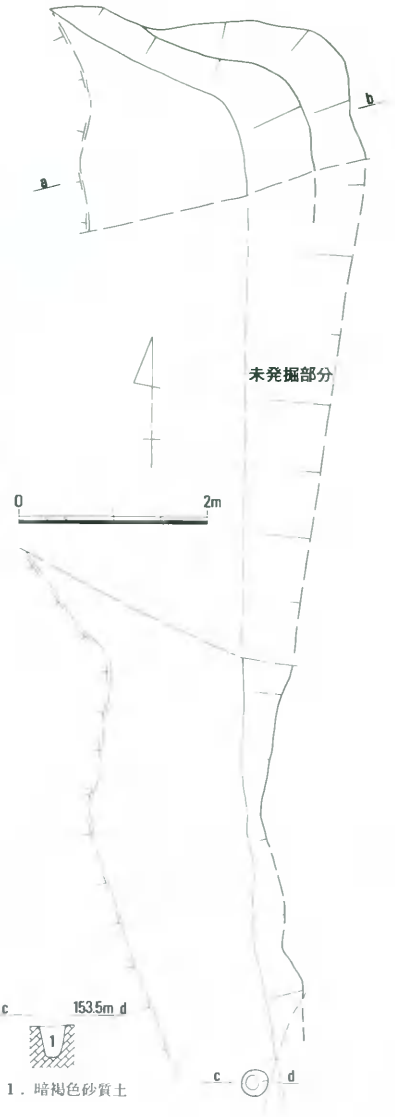
段状遺構２（第374図）

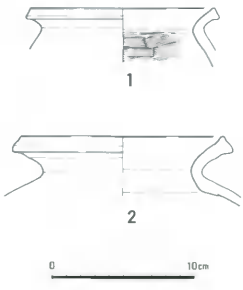
西に面した斜面上に築かれた段状遺構で、段状遺構１の上側に位置する。等高線に沿って、南北に細長い形態をとっており、途中に未発掘部分があるが、床面のレベルが一致することから一連の遺構であると考えられる。南北長は少なくとも11m以上である。地形の傾斜は北側でより急角度となっているため、この部分では壁体をかなり深く掘り込んでおり、現状で約70cmの深さが残存していた。床面に壁体溝は認められなかったが、部分的に壁体ぎわが若干くぼんでいる部分がある。ピットは１か所に小規模なものが認められたのみである。

遺物は弥生土器片が若干出土している（第374図）。１は甕で、内面は横方向のハケ目が認められる。２は壺である。これらの遺物から、弥生時代中期末ないし後期前半頃の時期が与えられる。

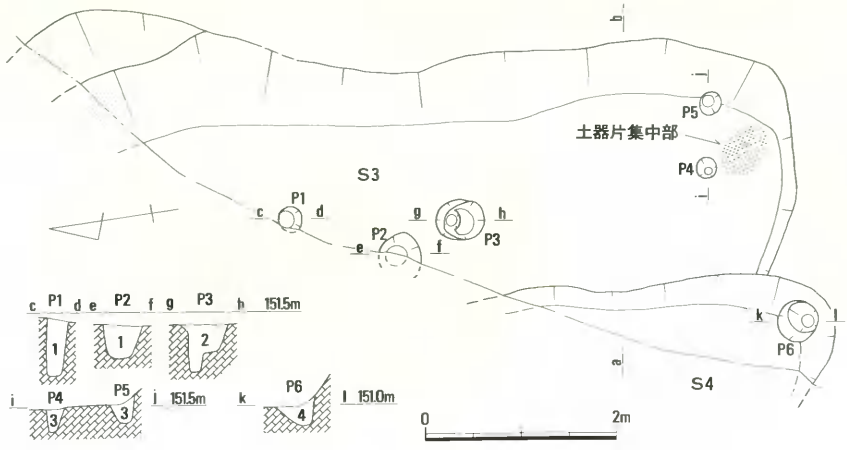
段状遺構３（第375図、図版46－３）

これも西側斜面部に検出されたもので、同じく地形の傾斜が急であるため、深く掘り込んで築かれており、最も残りのよいところで床面から１m以上が残っている。また、谷側は高さ約30cm程度の盛土を行なって床面を造成している。北側が調査区外までのびているが、調査区境に近い部分で壁体がまわりこむような状況を

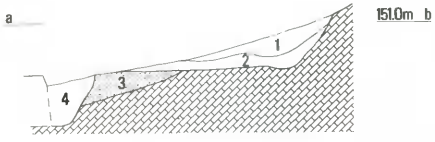




第374図　段状遺構２（1/60）・出土遺物

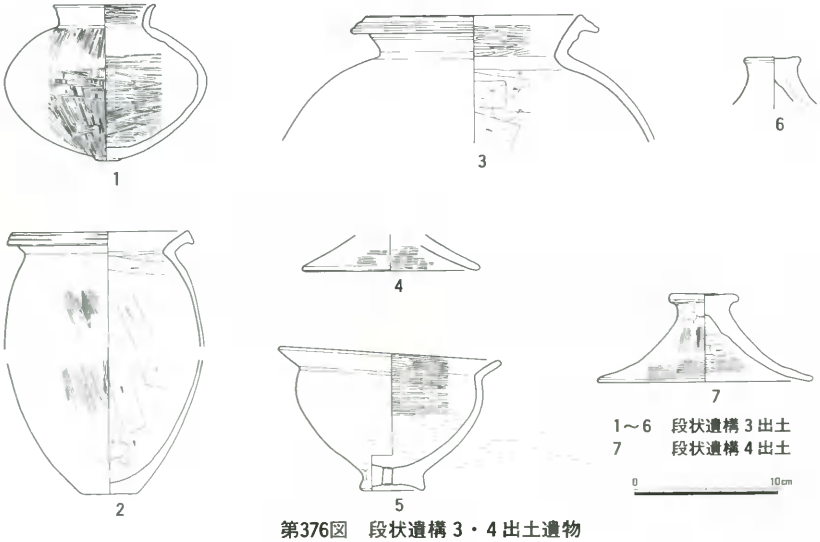


1．褐灰色砂質土
2．褐色砂質土（木炭含）
3．灰色砂質土
4．暗褐色砂質土



1．暗褐色砂質土
2．橙褐色砂質土
3．黄褐色砂質土（地山ブロック多含）
4．暗褐色砂質土

第375図　段状遺構3・4（1/60）



1～6　段状遺構3出土
7　段状遺構4出土

第376図　段状遺構3・4出土遺物

示していることから、南北長は７ｍ程度になると推定できる。壁体溝は明確には認められなかったが、段状遺構２と同様に壁体ぎわの床面が若干くぼんでいる箇所がいくらか確認された（断面図ａ－ｂ参照）。床面のピットは５つが検出されている（Ｐ１～Ｐ５）。それらの配置に規則性はなく、ピットの規模もまちまちである。ただしＰ４・Ｐ５については、規模、埋土の様子ともに共通しており、対をなしている可能性がある。

Ｐ４・Ｐ５と南壁体とに囲まれた部分において、床面直上に多数の土器片が集積して検出された。そこから出土した土器のうち、図示できるものを第376図に示している（１～６）。１は小形の壺で、やや扁平な球形の胴部に短く直立する口縁部のつくもので、内外面ともに緻密なヘラミガキを施して丁寧に仕上げている。また底部には径約２㎝の小さなボタン状の台を貼りつけている。２は甕で、胴部中ほど以上の破片とそれ以下の破片からの図上復元であり、器高については若干の変動があり得る。口縁端部には２条の凹線文をめぐらせ、胴部外面は縦ハケ、内面は口縁部直下までヘラケズリを行なっている。３は壺で、口縁端部には２条の凹線文をめぐらせ、口縁部内面はヘラミガキ、胴部内面はヘラケズリである。胴部外面はナデ調整のようである。４は高杯脚部の可能性もあるが、透かしが認められないことや他の土器との時期的な関係から、蓋と考えておきたい。内外面とも横ハケがみられる。６も蓋で、つまみ部分の破片である。５は台付鉢で、破片の接合によりほぼ完形に復元することができた。内面はヘラミガキで平滑に仕上げてあり、外面も丁寧なナデで仕上げられている。底部には上げ底状の台がつくが、そのほぼ中央に径５㎜の穿孔が焼成前になされている。以上の出土土器から、段状遺構３の時期は、弥生時代後期中葉頃と考えられる。

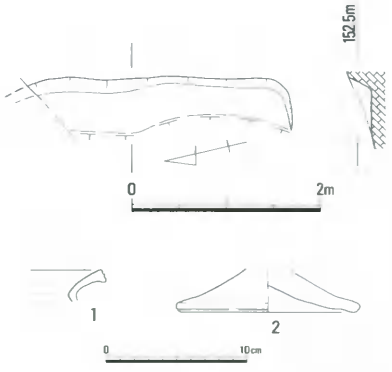
段状遺構４（第375図、図版46－３）

段状遺構３と重複して検出された段状遺構である。段状遺構３の構築に伴う床面造成土（３層）を切り込んでつくっていることが断面観察からも明らかであり、段状遺構３より新しい時期の築造と考えられる。大部分は調査区外にあるため、全体の形態、規模は不明であるが、段状遺構３と同様に、等高線と平行して南北に細長い隅丸長方形の平面形をとり、壁体が「コ」の字状にまわるものと思われる。深さは50㎝程度が残存していた。壁体溝は認められず、ピットはコーナーの部分に１か所検出されている。

遺物は弥生土器の蓋が１点、床面より少し浮いたレベルで出土している（第376図－７）。つまみの上端は外方へ張り出し、円盤状を呈している。上半部外面は縦ハケ、内面はヘラケズリ、下半部は内外面とも横ハケを施している，時期の決定が難しいが、弥生時代後期中葉から後半のものと考えられよう。

段状遺構５（第377図）

西に面した斜面で、段状遺構２と３の間に検出されたものである。北側は調査区外にのびており、また残存状況も悪く壁体に沿ったごくわずかな部分しか残っていない。規模は不明であるが、等高線に沿って南北に細長い平面形となる。壁体溝、ピットともに検出されなかった。



第377図　段状遺構５（1/60）・出土遺物

遺物は土器片が少量出土している。1は甕の口縁部の破片で、「く」の字に屈曲する口縁の端部に2条の凹線文をめぐらせている。2は蓋である。時期は弥生時代後期前半頃と思われる。

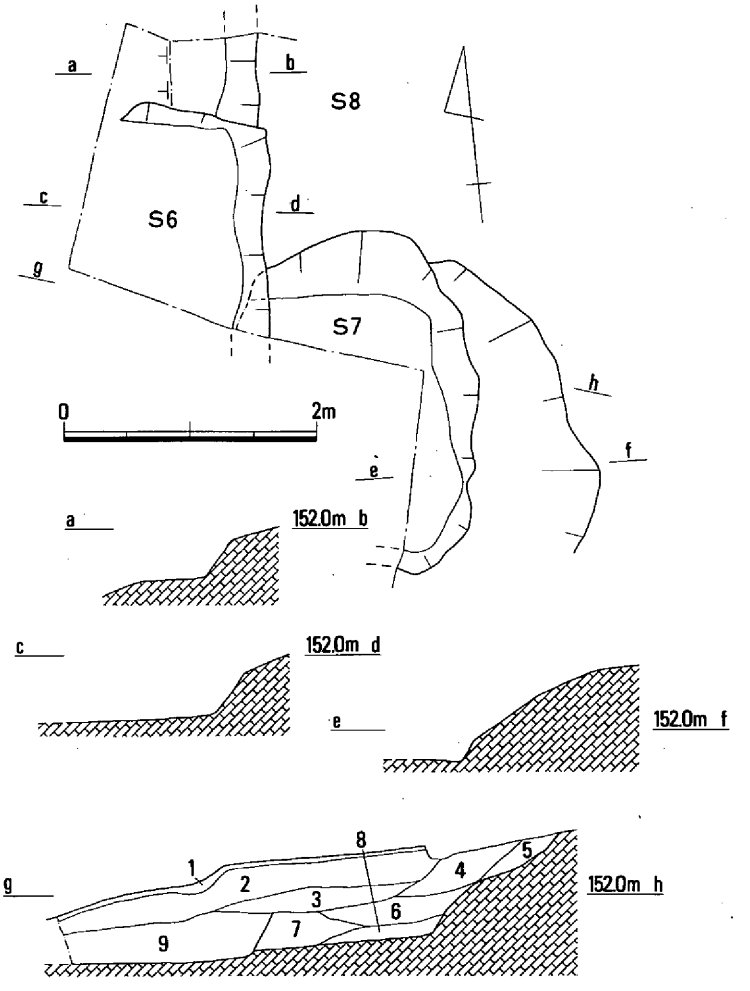
段状遺構6（第378図）

西に面した斜面に築かれた段状遺構であり、段状遺構7・8と計3基の段状遺構が切り合っている。その前後関係は、段状遺構6が最も新しく、7・8がそれによって切られている。段状遺構6は、ごく一部が検出されたのみであるが、「コ」の字形に壁体がめぐるものと考えられ、その北側コーナーが検出されている。南北長は不明であり、深さは現状で約35cmが残存していた。壁体溝、ピットともに検出されなかった。

遺物は弥生土器が出土している（第379図）。1は甕の口縁部で、端部を肥厚させ2条の凹線文をめぐらせている。2は高杯で、内外面ともにヘラミガキおよびナデ調整で仕上げている。口縁部内面は横方向の緻密なヘラミガキの後、縦方向に蛇行するように粗いヘラミガキを加えている。杯部と脚部は別作りで挿入接合している。3は鉢で、口縁端部を肥厚するが表面の風化が著しく凹線文の有無は明確でない。胴部外面には縦ハケ目が認められる。以上の土器から、弥生時代後期中葉の年代が与えられる。

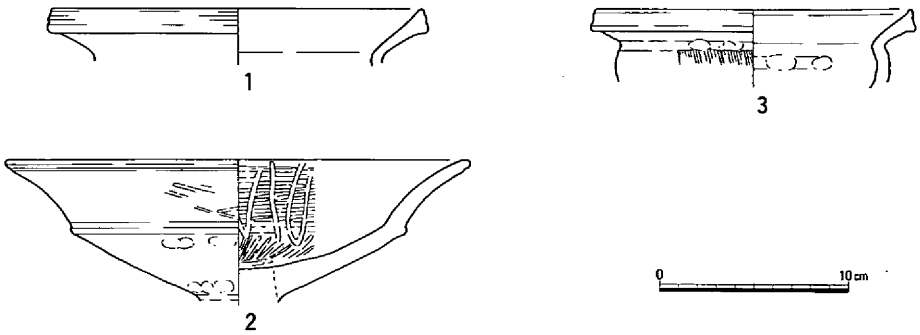
段状遺構7（第378図）

段状遺構6によって切られたもので、また調査区外にかかる部分も多く、全容は明らかでない。平面形は、他の段状遺構と同様にほぼ方形で、壁体が「コ」の字形にまわっているが、規模が他のものに比べて小さい。南北長が床面で約2mしかなく、他のものとは機能的に異なるものであろう。なお、コの字形の壁体の上部にももう一か所地形の落ちる箇所があり、断面図によるともう1基別の遺構が重複している可能性も考え



1．表土
2．黄褐色砂質土
3．明黄褐色砂質土（地山礫）
4．暗褐色砂質土
5．黄褐色粘質土（地山礫含）
6．暗黄褐色砂質土（地山礫含）
7．褐色砂質土（地山礫含）
8．暗黄褐色粘質土（地山礫多含）
＜段状遺構7埋土＞
9．褐色粘質土　＜段状遺構6埋土＞

第378図　段状遺構6・7・8（1/60）



第379図　段状遺構６出土遺物

られる。残存している深さは、上部の地形の落ちから床面までで約80cmである。床面に壁体溝やピットは一切認められない。遺物も出土しておらず時期不明であるが、段状遺構６との切り合い関係からそれより古い遺構である。

段状遺構８（第378図）

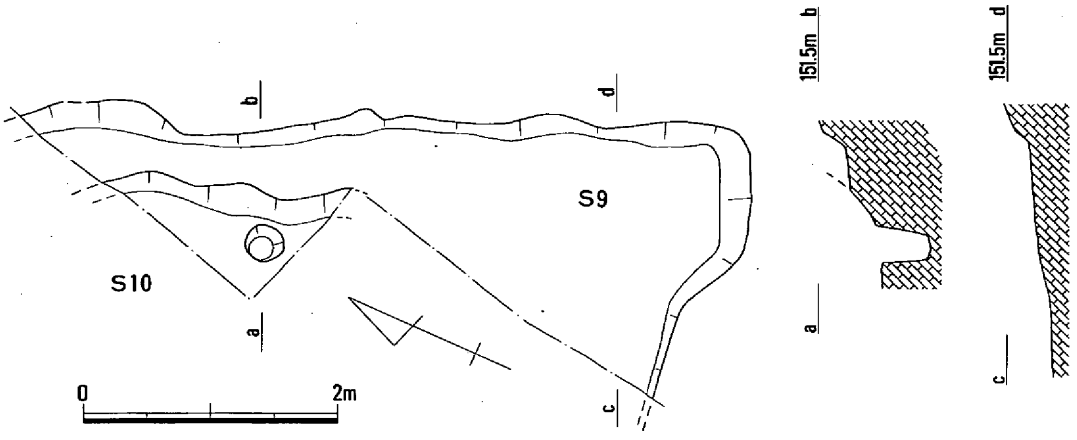
これも段状遺構６によって切られたもので、調査区外にかかる部分も多く全容は明らかでない。等高線に平行して、壁体が南北方向にのびている状況がうかがえるのみで、規模は不明である。深さは30cm前後が残存している。壁体溝、ピットともに確認されていない。遺物は出土しておらず時期不明であるが、段状遺構６との切り合い関係からそれより古い遺構である。

段状遺構９（第380図）

南西に面した緩やかな斜面に築かれた段状遺構である。段状遺構10と重複しているが、断面観察から段状遺構９の方が古いことが判明している。壁体の立ち上がり角度は場所によって異なっており一定しないが、全体的に緩い角度で立ち上がっている。床面も水平でなく、かなりの凹凸があって、全体に西側に向かって傾斜している。壁体溝、ピットともに検出されておらず、遺物も出土していない。

段状遺構10（第380図）

段状遺構９を切り込む形で築かれている。壁体の一部が検出されたのみで、平面形、規模ともに不明である。深さは50cm前後が残存していた。壁体溝はなく、ピットは一か所に検出されているが段状遺構９に伴うものであるかもしれない。遺物は弥生土器の小片が出土しているのみである。



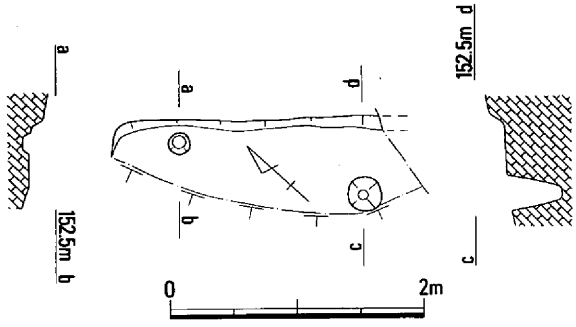
第380図　段状遺構９・10（1/60）

段状遺構11（第381図）

南西に面した緩やかな斜面に築かれた段状遺構である。非常に残りが悪く、壁体ぎわの部分が深さ10cm程度残存していたにすぎない。南西側は調査区外にのびており、規模は不明である。床面には2つのピットが検出されているが、その深さは差が著しい。壁体溝は検出されなかった。遺物も出土していない。

段状遺構12（第370図）

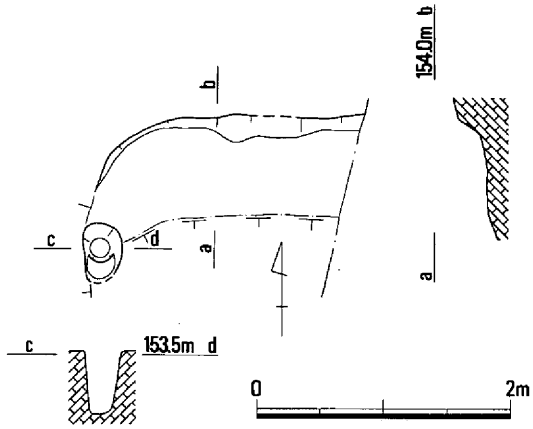
竪穴住居6と重複して検出され、上述したように竪穴住居6を埋め立てて構築している。西側は調査区外にのびているため、規模は不明である。深さは20cm程度が残存していた。壁体溝、ピットともに認められず、遺物は弥生土器の小片が出土しているが、時期不明である。



第381図　段状遺構11（1/60）

段状遺構13（第382図）

尾根のほぼ稜線上、南に傾斜する緩やかな斜面に築かれている。東側は調査区外にのびており、規模は不明である。深さは20cm程度が残存していた。壁体溝は認められない。ピットは1つ検出されているが、この遺構に伴うものかどうか不明である。遺物は出土していない。

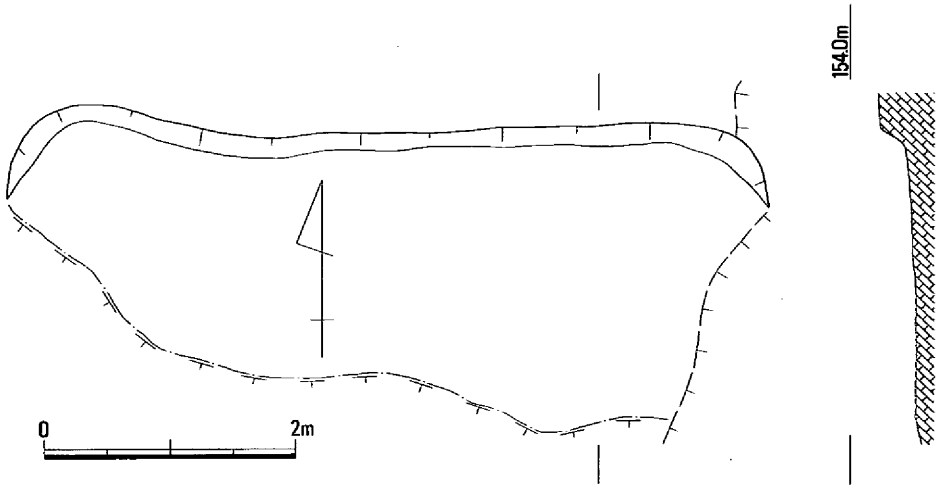


第382図　段状遺構13（1/60）

段状遺構14（第383図）

段状遺構13のすぐ西隣に検出された。壁体は平面コの字形を呈し、東西長は約6mである。深さは20cm程度残存していた。壁体溝、ピットともに認められない。遺物は弥生土器の小片が出土しているが、時期不明である。

なお、段状遺構13と14は後述する建物1の背後に存在しており、本来一連で建物1に伴うものが、後世の道によって切られ、2つに分かれ

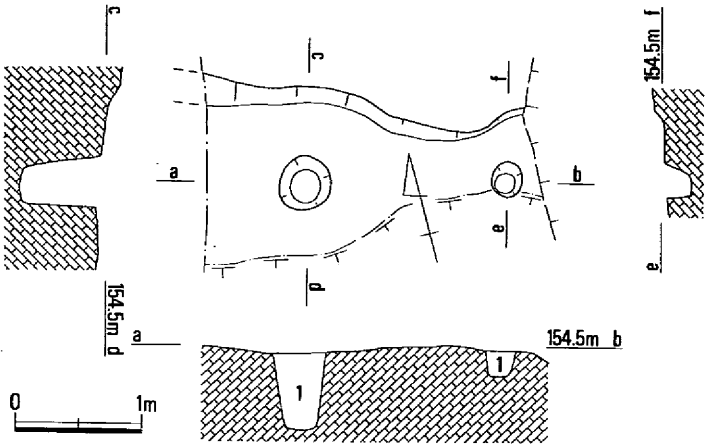


第383図　段状遺構14（1/60）

ている可能性も考えられた。しかし、それぞれの段状遺構の壁体が「コ」の字形に、側面にまわり込んでいるため、段状遺構13と14を別遺構として扱い、したがって建物１とも直接関係しない遺構であると解釈している。

段状遺構15（第384図）

これも尾根のほぼ稜線上、南に傾斜する緩やかな斜面に築かれている。ごく一部が検出されたのみで、東側を後世の道に切られ、西側は調査区外にのびているため、規模は不明である。深さは10cm前後が残存しているにすぎない。壁体溝は認められず、ピットは２つが確認されたがその規模は不揃いである。遺物は出土していない。

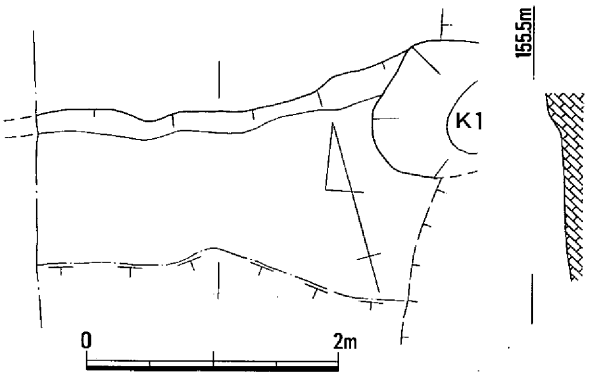


1．褐灰色砂質土

第384図　段状遺構15（1/60）

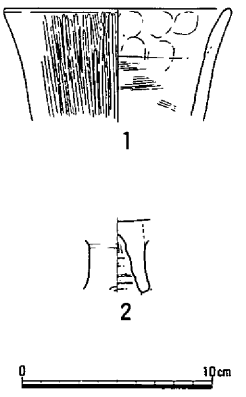
段状遺構16（第385図）

これも尾根のほぼ稜線上に築かれている。ごく一部が検出されたのみで、東側を後述する土壙１および後世の道に切られ、西側は調査区外にのびているため、規模は不明である。深さは10cm前後が残存しているにすぎない。壁体溝、ピットともに認められない。

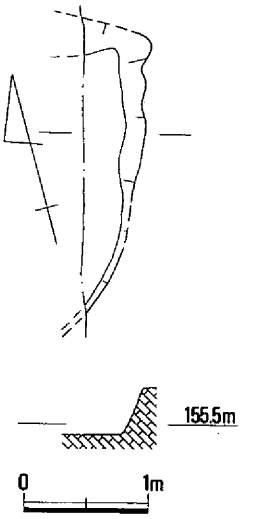


第385図　段状遺構16（1/60）

遺物は、床面直上から弥生土器が若干出土している（第386図）。１は壺の口縁部で、外面に縦方向のヘラミガキを施し、内面には横ハケと指オサエの痕が観察される。２は高杯脚柱部の破片で、下端に透かし孔の一部がある。これらの土器から、弥生時代後期後葉の時期と推定される。



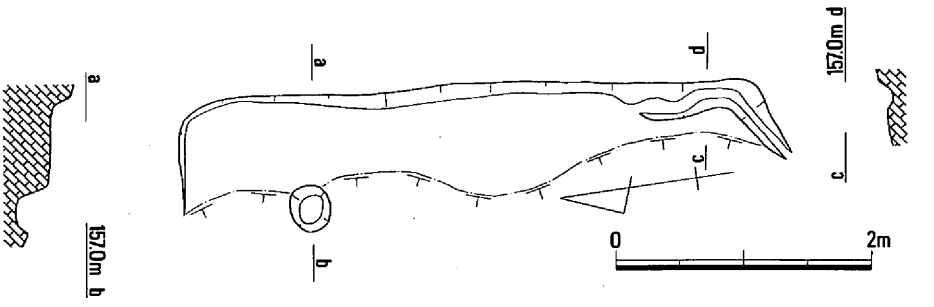
第386図　段状遺構16 出土遺物



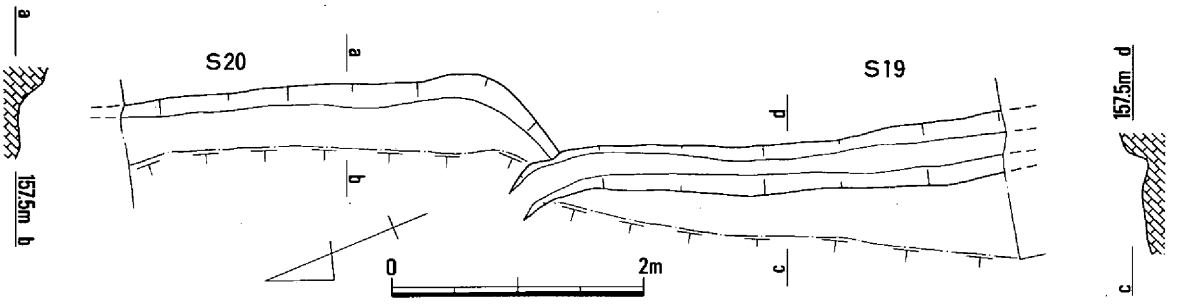
第387図　段状遺構17（1/60）

段状遺構17（第387図）

南西に面する緩やかな斜面上に築かれた段状遺構と思われるが、ごく一部が検出されたのみで詳細



第388図　段状遺構18（1/60）



第389図　段状遺構19・20（1/60）

は不明である。深さは35cm前後が残存しており、傾斜の緩い地点に築かれた段状遺構にしては比較的深く掘り込まれているようである。壁体の立ち上がりは他の段状遺構に比べて急角度である。壁体溝は認められない。遺物は弥生土器の小片が出土しているが、時期は不明である。

段状遺構18（第388図）

調査区北半部の、西に面する斜面上に築かれた段状遺構である。地形の低い西側を大きく流失しているが、壁体は「コ」の字形に検出され、南北長約4.8mである。深さは残りのよいところで約20cmが残存している。壁体溝は南側の一部分にのみ検出されている。ピットは1か所のみに認められ、径約35cm、深さ約25cmである。遺物は出土していない。

段状遺構19（第389図）

調査区北半部の尾根の頂部に近い、北西に面した斜面に築かれた段状遺構である。上述の段状遺構18に近接した位置にあるが、この付近になると斜面が西向きから徐々に北向きに変わっていき、傾斜もかなり急であるためか、遺構の密度は非常に低くなってくるようである。

壁体ぎわの一部しか残存しておらず、南側は調査区外にのびているため、規模等は不明である。深さも10cm程度しか残存していない。壁体溝が認められ、幅30cm前後、床面からの深さ5～10cm程度のものが壁体に沿ってめぐっている。ピットは検出されていない。遺物は弥生土器の小片がわずかに出土しているのみである。

段状遺構20（第389図）

段状遺構19と重複して検出されたものであるが、壁体端部のわずかな部分が重複しているのみであり、両者の前後関係はおさえることができなかった。壁体ぎわの一部しか残存しておらず、北側が調査区外にのびているため規模等は不明である。壁体溝、ピットともに認められない。遺物は弥生土器の小片がわずかに出土しているのみである。

3．建　　物

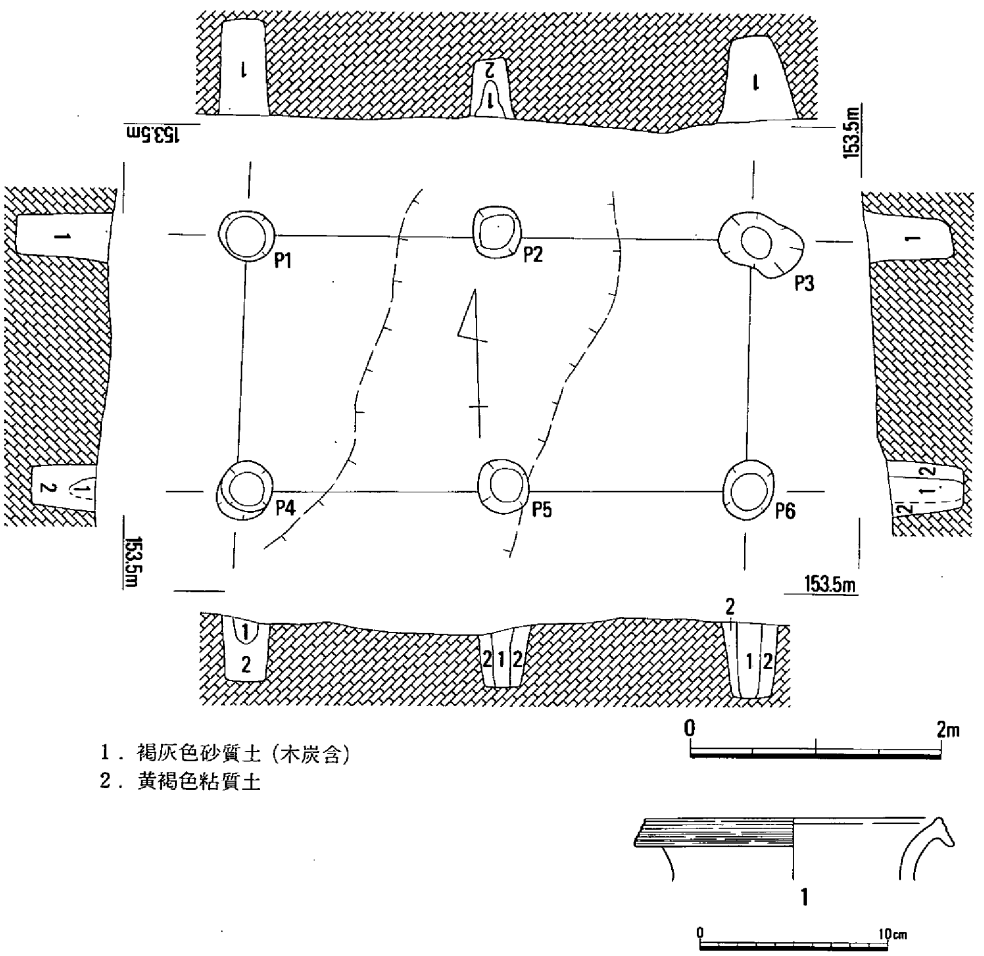
建物１（第390図、図版47－１）

調査区南半部のほぼ尾根線上に検出された２間×１間の掘立柱建物である。建物の方位はほぼ東西に長軸を向けており、等高線に平行して建てられている。建物の規模は桁行4.0m、梁間2.0mで、柱間距離は10cm程度のばらつきがあるものの、ほぼ２mである。柱穴は径が40～45cm、現状での深さが50～75cmを測る。建物の四隅にあたる部分の柱穴に比べて、長辺の中間に位置するＰ２・Ｐ５はやや規模が小さい。

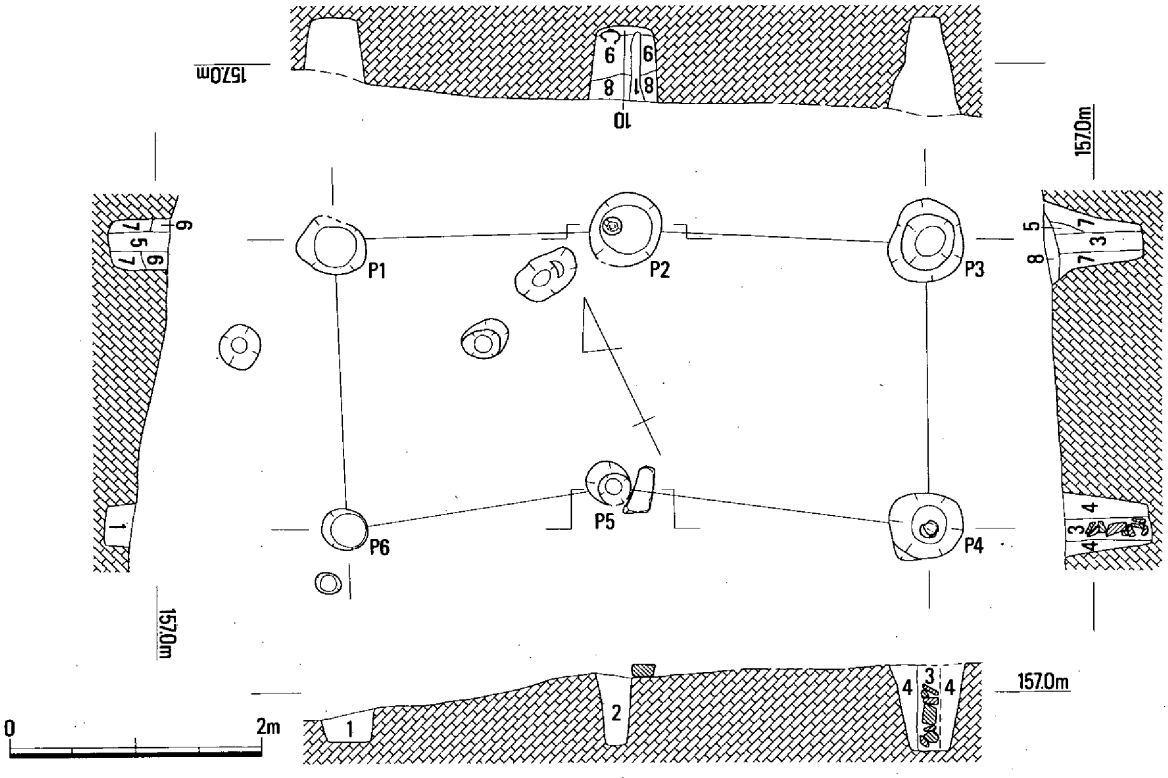
遺物は、柱穴の埋土中より弥生土器の破片が出土しており、そのうちＰ１から出土したものを図示している。甕の口縁部で、やや下方に垂れ下る拡張面には４条の凹線文がめぐらされている。弥生時代後期前半に位置づけられよう。

建物２（第391図、図版47－２）

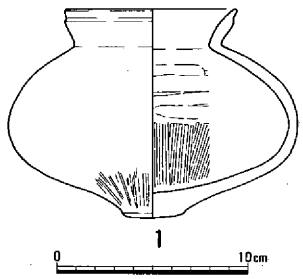
尾根頂部からやや下った緩やかな斜面に位置する２間×１間の掘立柱建物である。これもほぼ等高線に平行する方向に建てられている。規模は桁行4.7m、梁間2.3m、柱間距離はばらつきが大きいが平均すると約2.3mで、建物１よりも長い。柱穴の並び方はやや不規則で整っておらず、一直線に並ばない部分がある。柱穴の規模も大小があり、径35～60cmで、上部を大きく削平されたものを除いて深さは60～75cmである。以下、特徴的な柱穴について触れておく。Ｐ２は、柱痕が確認されたが、その



第390図　建物１（1/60）・Ｐ１出土遺物



1．褐灰色砂質土
2．黄褐色砂質土
3．暗褐色砂質土
4．黄褐色砂質土（地山礫多含）
5．暗黄褐色砂質土
6．暗灰黄褐色砂質土
7．黄褐色粘質土（地山礫含）
8．暗灰褐色砂質土（地山礫含）
9．暗黄褐色粘質土
10．暗灰色粘質土



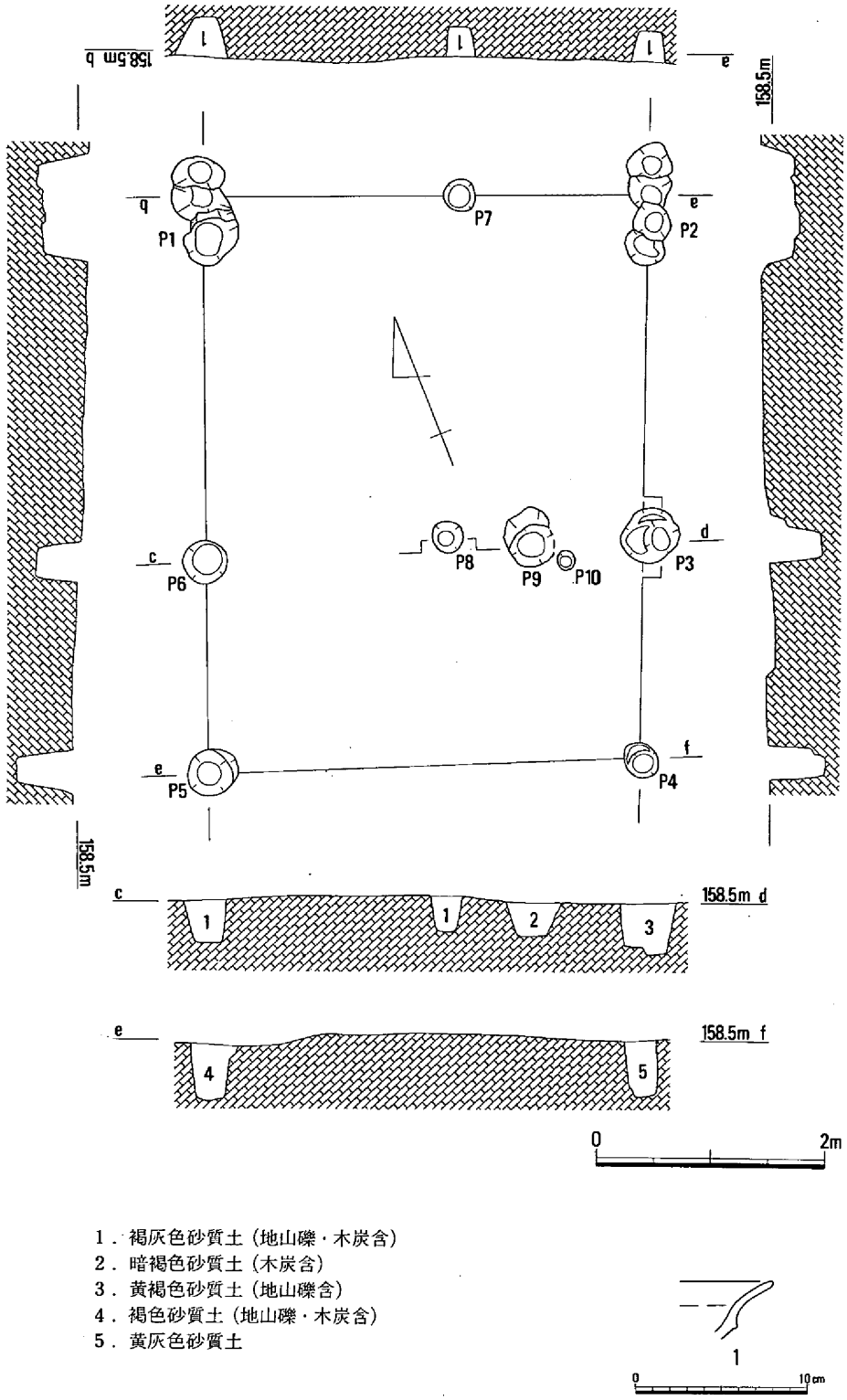
第391図　建物2（1/60）・P2出土遺物

脇に底部に据え置かれた状態で弥生土器の壺が検出された。P4は、柱痕部分に多数の拳大の礫が積み重なるようにして検出されている。おそらく建物の建て替えに伴い、柱を抜き取った後に礫を詰め込み、その上に再び柱を立てたものと考えられる。建て替えの痕跡はP5においても認められる。やや小規模な柱穴（P5）の脇に扁平な石が存在し、建物に伴う礎石の可能性がある。建て替えの際に礎石を用いたのかもしれない。

遺物はP2出土の壺がある。扁平な玉葱形の胴部に短くやや外反する口縁部がつくもので、底部には径約3㎝の台をもつ。風化が著しく器面調整は不明な部分もあるが、口縁部は内外面とも横ナデ、胴部内面は上半部が横方向の指ナデ、下半部が縦ハケ、胴部外面はヘラミガキと思われる。器形、法量ともに段状遺構3出土の壺に類似している。時期は弥生時代後期前半ないし中葉頃であろう。

建物3（第392図、図版47—3）

尾根のほぼ頂部にあたる平坦な部分に検出された掘立柱建物である。建物の主軸は尾根線の方向と一致し、ほぼ南北を向いている。柱穴の並び方がやや不規則であるが、図示した柱穴のうちP1～P8がこの建物を構成するもので、間数は2間×2間と考えられる。P7・P8は小規模なもので、それらと対応する位置にあたるP4とP5の中間の位置には柱穴は確認されなかった。P1・P2はそ



第392図　建物３（1/60）・Ｐ１出土遺物

れぞれ４つの柱穴がわずかに位置をずらしながら重なり合って検出されている。建て替えの際に位置を修正したものであろうか。それぞれの切り合い関係は確認できなかった。またＰ３・Ｐ４も、数回の掘り直しを行なっている可能性がある。建物の規模は、南北4.6～5.3m（Ｐ１・Ｐ２の位置の移動による変化がある。）、東西3.8mで、やや南北方向が長い。柱間距離は一定しないが、平均すると２m前後で、Ｐ１・Ｐ６間、Ｐ２・Ｐ３間、Ｐ７・Ｐ８間のみ３m前後と長くなっている。柱痕の残りは

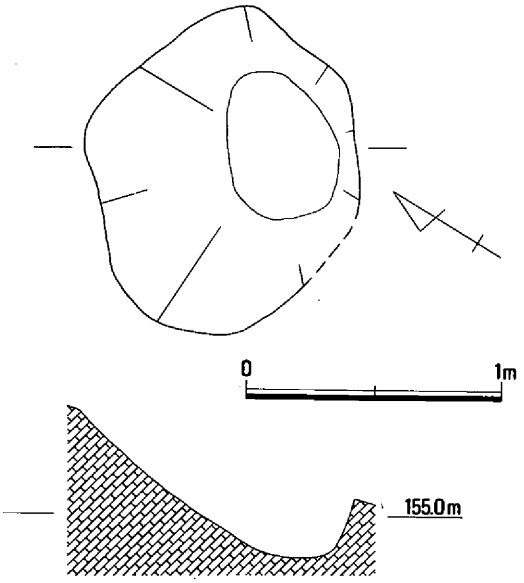
悪く、断面で柱痕が確認できたものはなかった。遺物は弥生土器の小片が柱穴内より出土しているが、そのうち時期を推定できるものとして1点を図示している。高杯の口縁部であり、弥生時代後期前半頃の年代が与えられる。

4．土　　壙

土壙1（第393図）

段状遺構16を切る形で検出された土壙である。やや不整形であるが、南側を後世の道によって削平されているためで、元はほぼ円形を呈していたと考えられる。径約1.3mで、残りのよい北側で深さ約60cmである。埋土は暗褐色砂質土の単層である。

遺物は、埋土中より弥生時代後期頃のものと思われる土器の小片が若干出土しているが、この遺構に伴うものかどうか不明である。

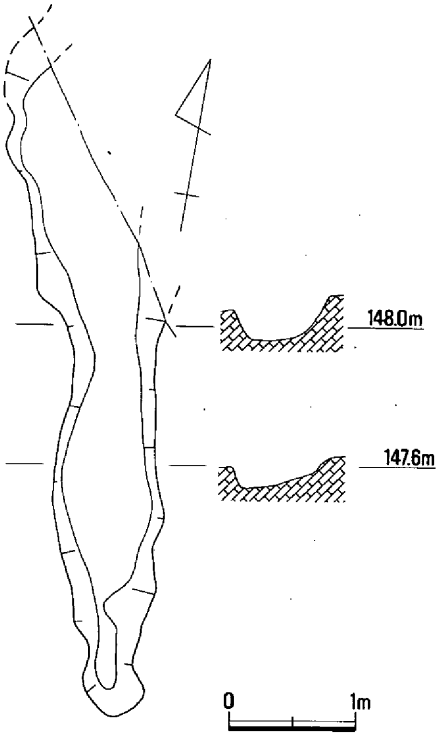


第393図　土壙1（1/30）

5．溝

溝1（第394図）

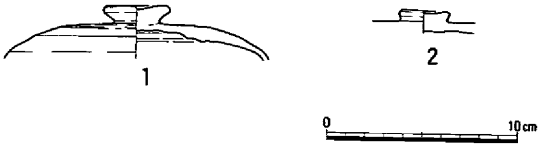
調査区の南西端部付近の、約25°の急斜面に検出された遺構である。検出された長さは約5mであるが、北側が調査区外にのびているため全長は不明である。幅は部分によって異なるが、概ね1m前後である。深さも一定でなく底面にかなりの凹凸がある。埋土は暗褐色砂質土の単層で、かなり砂利を含んでいる。遺物はまったく出土していない。遺構の性格も不明であるが、溝か道、あるいは遺構ではなく自然流路の跡かもしれない。



第394図　溝1（1/60）

遺構に伴わない遺物（第395図）

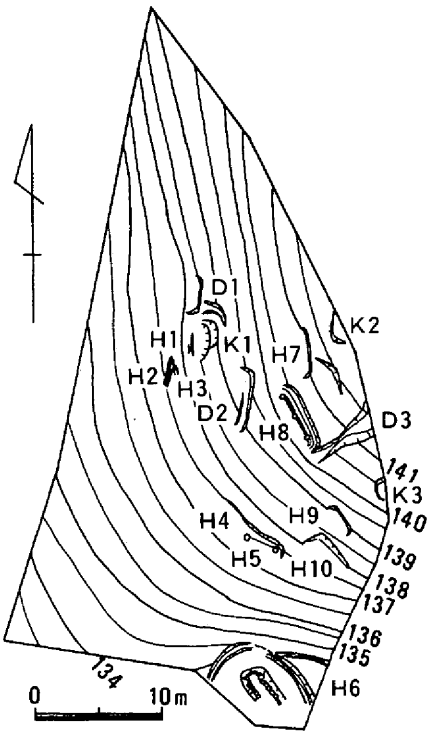
遺構に伴わない遺物として、須恵器の杯蓋の破片が2点、竪穴住居5の上層から出土している。いずれも焼成は良好で、1は青灰色、2は明灰色を呈し、中央の窪んだ扁平なつまみを有する。形態から、7世紀末から8世紀前半頃のものと考えられる。弥生時代以外の遺物は、このほかには出土していない。



第395図　竪穴住居5上層出土遺物

(7)　5区の調査

5区は工事の進行に伴って、新たに土取り場として設定されたところである。従来、遺跡は確認されていなかったが表土を除去したところ、遺構・遺物が発見されたため、必要最小限の範囲について全面調査を実施した。検出された遺構には、古墳1基のほか竪穴住居・土壙・溝があり、遺物も2箱出土している。



第396図　5区遺構配置図（1/600）

1．竪穴住居

竪穴住居1（第398図）

5区中央やや北寄りで検出した住居で、極めて残りが悪い。長さ140cm・平坦面の幅最大20cm、同海抜高138.2mを測る。遺物なし。時期不明。住居とする根拠は土質のみ。

竪穴住居2（第398図）

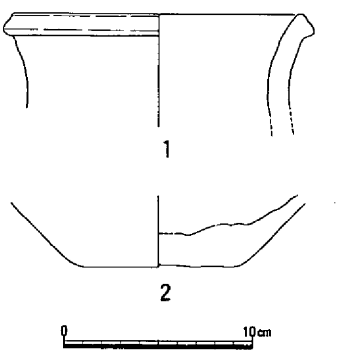
5区中央やや北寄りで検出した溝を伴う住居で、極めて残りが悪い。溝の長さ250cm・同深さ5cm、床面海抜高137.8mを測る。遺物なし。時期不明。

竪穴住居3（第398図）

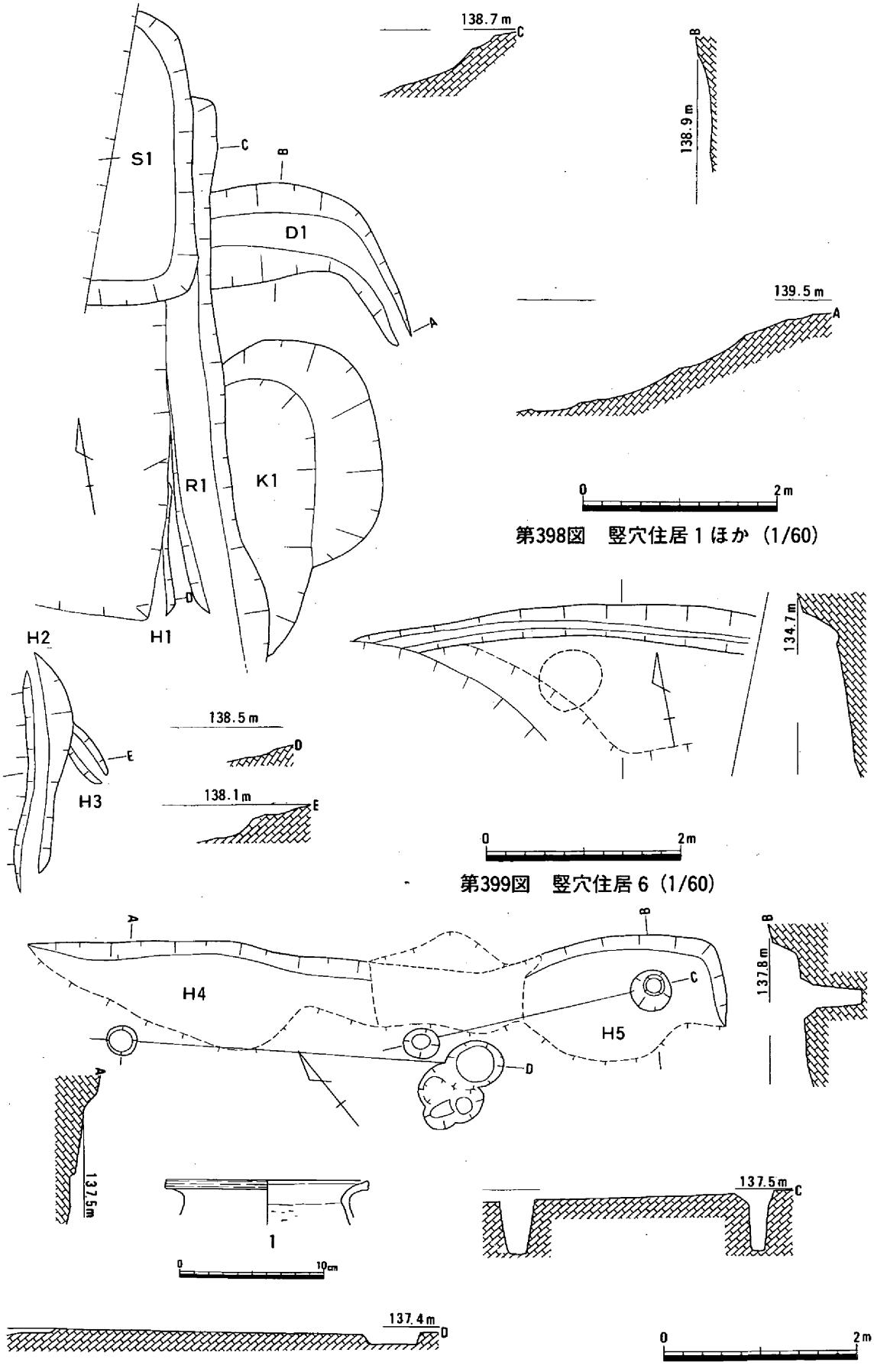
竪穴住居2に切られた溝を伴う住居で、極めて残りが悪い。溝の長さ50cm・同深さ5cm、床面海抜高138.1mを測る。遺物なし。時期不明。

竪穴住居4（第400図）

5区中央やや南寄りで検出した住居で、柱穴2本を伴う。床面の長さ350cm・同幅90cm、床面海抜高137.5mを測る。柱穴の深さは10cm以下。遺物は土器溜りとして出土。壺の口縁部と底部。弥生後期。



第397図　竪穴住居4出土遺物



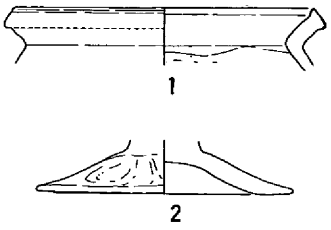
第398図　竪穴住居1ほか（1/60）

第399図　竪穴住居6（1/60）

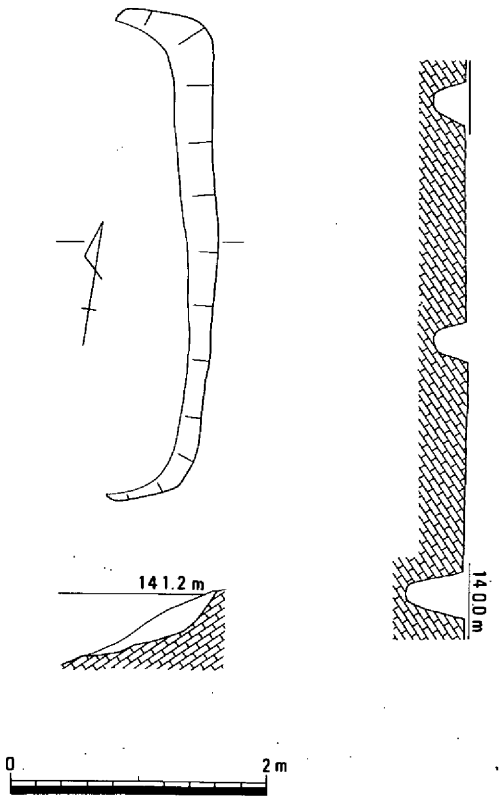
第400図　竪穴住居4・5（1/60）・竪穴住居5 出土遺物

竪穴住居５（第400図）

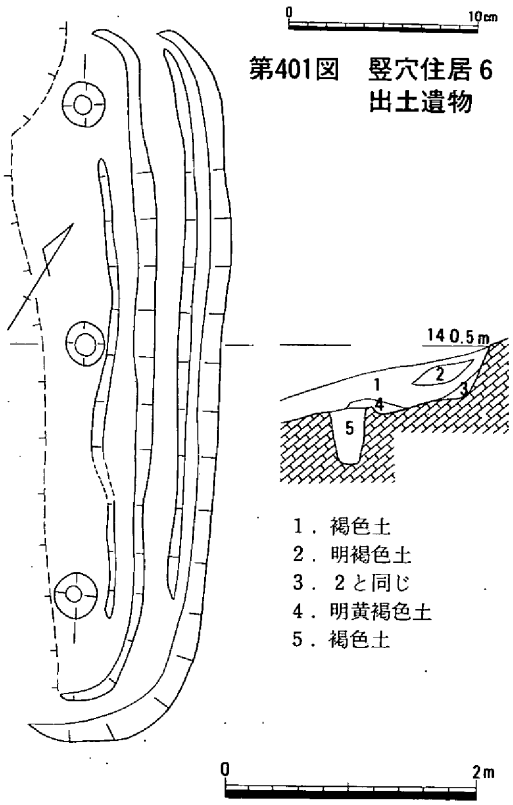
竪穴住居４東寄り同一段で検出した住居で、柱穴２本を伴う。床面の長さ200cm・同幅120cm、床面海抜高137.5mを測る。柱穴は深さ50～60cmもある。土器は１点出土。弥生後期。



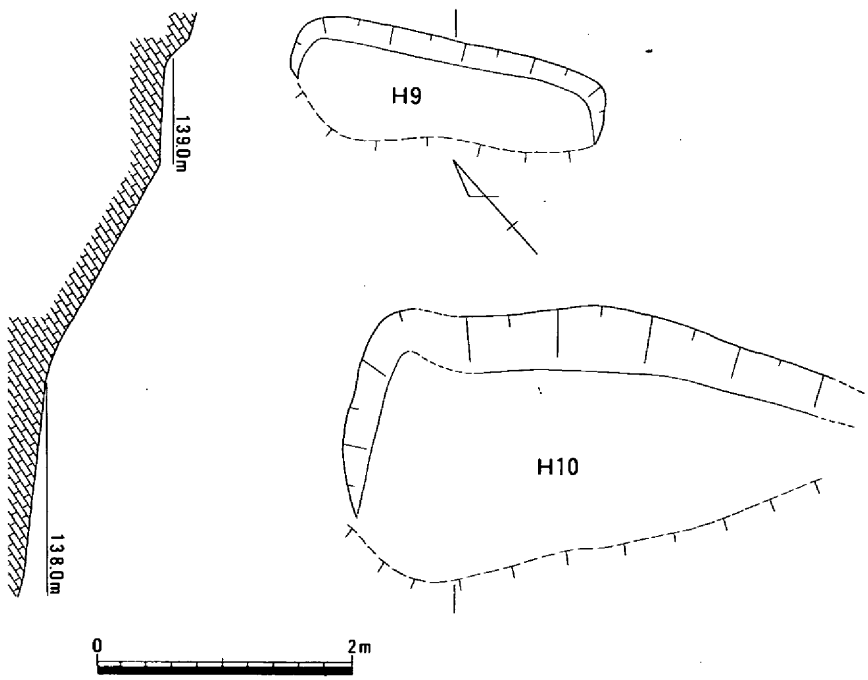
第401図　竪穴住居６出土遺物



第402図　竪穴住居７（1/60）



第403図　竪穴住居８（1/60）



第404図　竪穴住居９・10（1/60）

竪穴住居６（第399図）

５区南東部で検出した溝を伴う住居。溝の長さ440cm・幅45cm、検出海抜高134.7m。遺物の高杯・甕から弥生後期。

竪穴住居７（第402図）

５区北東部で検出した住居。床の長さ350cm・幅50cm、海抜高140.9mを測る。遺物なし。

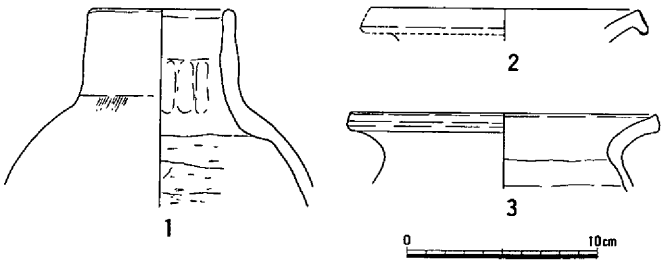
竪穴住居８（第403図）

竪穴住居７の南で検出した溝と柱穴を伴う住

居。溝は2条・柱穴は3本ある。建て替えがあるが、柱穴はどちらの溝に伴うのか不明。床の長さ520cm・幅100cm、海抜高140.1m。遺物3点。弥生後期。

竪穴住居9（第404図）

竪穴住居4北東にある小型住居。床の長さ230cm・幅50cm、海抜高140.9m。遺物なし。



第405図　竪穴住居8出土遺物

竪穴住居10（第404図）

竪穴住居9南にある段状住居。床の長さ350cm・幅150cm、海抜高138.0m。遺物なし。

2．段状遺構

段状遺構1（第398図）

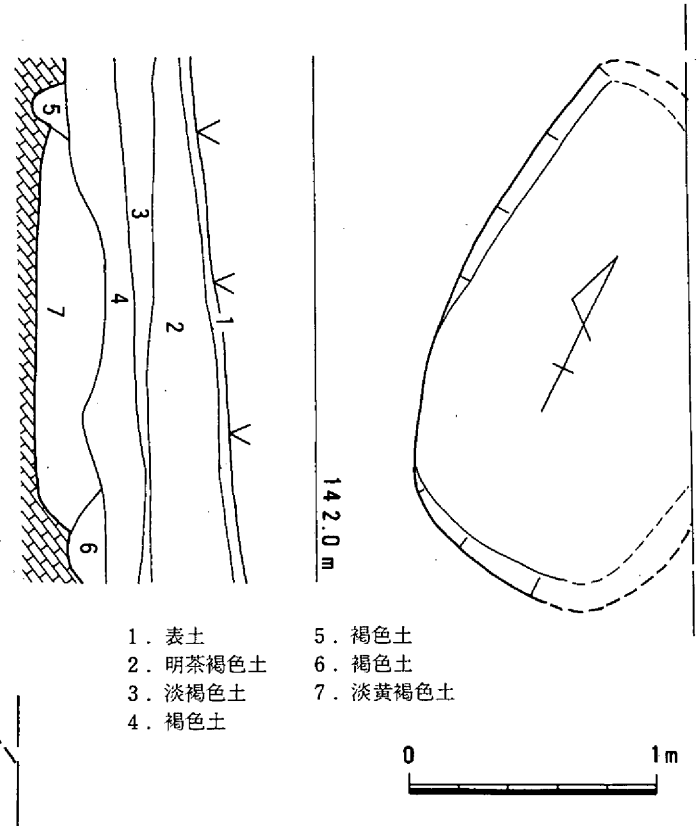
5区北部で検出した遺構で、土層から中世よりも新しい時期に比定される。床の長さ260cm・幅80cm、海抜高138.3m。

3．土　　壙

土壙1（第398図）

竪穴住居1の東にある二段に凹んだ部分で、溝1との関係であるいは古墳主体部かもしれないが、遺構とするには疑問が残る。遺物なし。

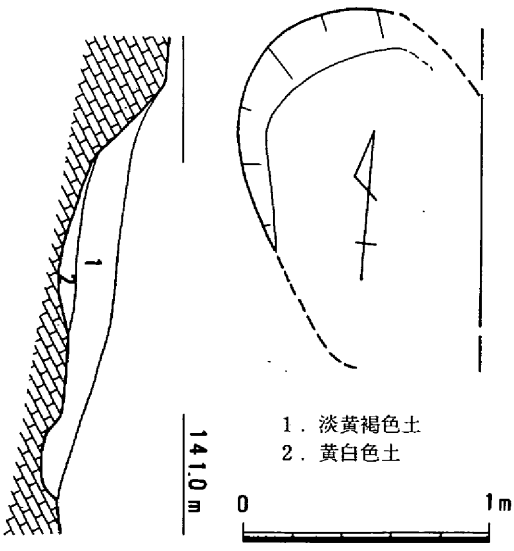
土壙2（第406図）



第406図　土壙2（1/30）

竪穴住居7の東にある隅丸長方形土壙。長さ200cm・幅140cm、深さ15cm、検出面の海抜高141.0m。淡黄褐色土（礫混じり）が入る。遺物なし。用途・時期不明。

土壙3（第407図）



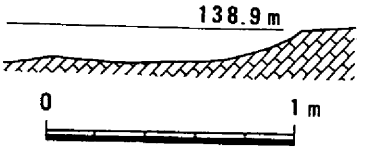
第407図　土壙3（1/30）

竪穴住居9の東にある楕円形土壙。長さ150cm、幅100cm、深さ20cm、検出面の海抜高141.0m。淡黄褐色土・黄白色土が入る。遺物なし。用途・時期不明。

4．溝　・　道

溝１（第408図）

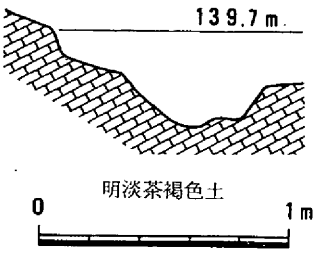
段状遺構に切られている「し」の字状の溝である。南東から西に広くなる。残存の長さ230cm、最大幅100cm、深さ10cm、検出面の海抜高139.4～138.7m。遺物なし。時期不明。



第408図　溝１（1/30）

溝２（第409図）

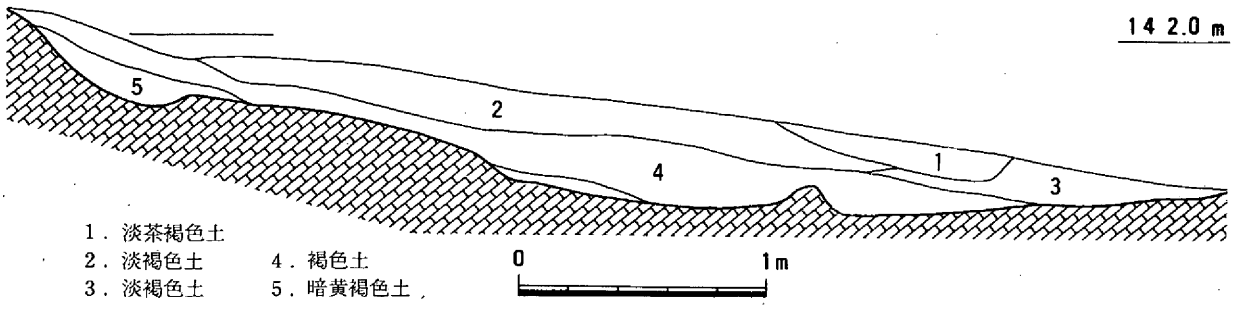
竪穴住居８の西にある「し」の字状の溝である。北西から南に下がる。長さ500cm、最大幅90cm、深さ40cm、検出面の海抜高140～139m。遺物なし。時期不明。



第409図　溝２（1/30）

溝３（第410図）

竪穴住居８の東にある溝。北東から南西に狭くなって下がる。長さ550cm、最大幅300cm、最大の深さ20cm、検出面の海抜高142～140m。遺物なし。時期不明。



第410図　溝３（1/30）

道１（第398図）

竪穴住居１や段状遺構１の間に検出した溝状の遺構で、道と考えた。中世か近世の山道であろうか。長さ600cm、最大幅70cm、最大の深さ15cm、検出面の海抜高138.7m。遺物なし。

(8) 白迫古墳群の調査

古墳の所在は、調査区域の北端に位置し、古墳の南東部は大きくえぐられ谷となっているが、古墳築造時は南側の丘陵に続く小さな舌状上に存在していたものと思われる。さらに1区C西向きのゆるやかな斜面で、古墳とおぼしきわずかな高まりがあり、トレンチ調査で確認、古墳と認められる。また全面調査中に1基を確認し、合計3基で、北から1号墳、2号墳、調査中発見を3号墳とし、順次調査を行なっていった。

1．1号墳（第411～415図、図版56～58）

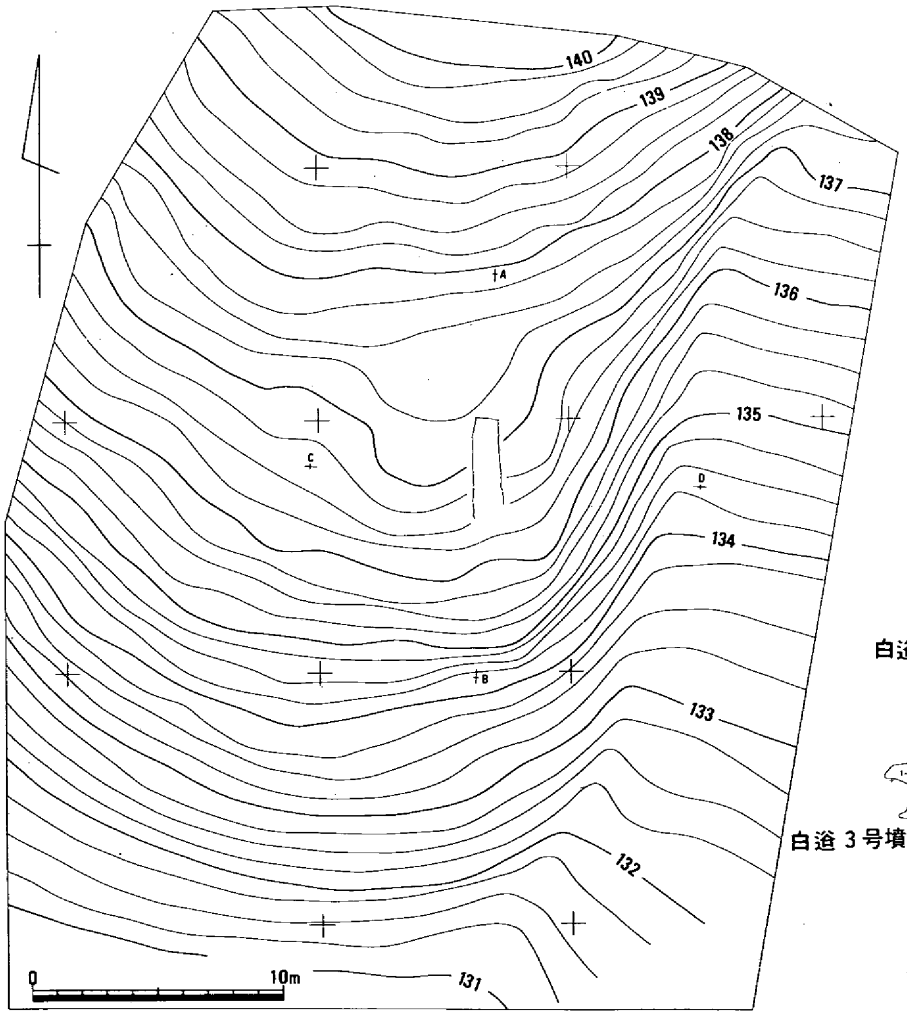
調査前の状況（第411図、図版56－1）

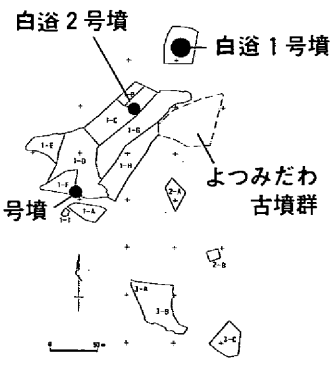
現状においての1号墳の所在するのは、丘陵を土取り（池の堤防用）によって切り取られた西側の南傾斜の端部に位置し、墳丘の東側は削り取られている。墳丘の盛り土はほとんど流出し，天井石はすべて抜き取られており、横穴式石室の壁面が一部で露出していた。東の谷部には天井石と思われる石材が転落していた。

墳丘と周溝（第412・413図、図版56－2）

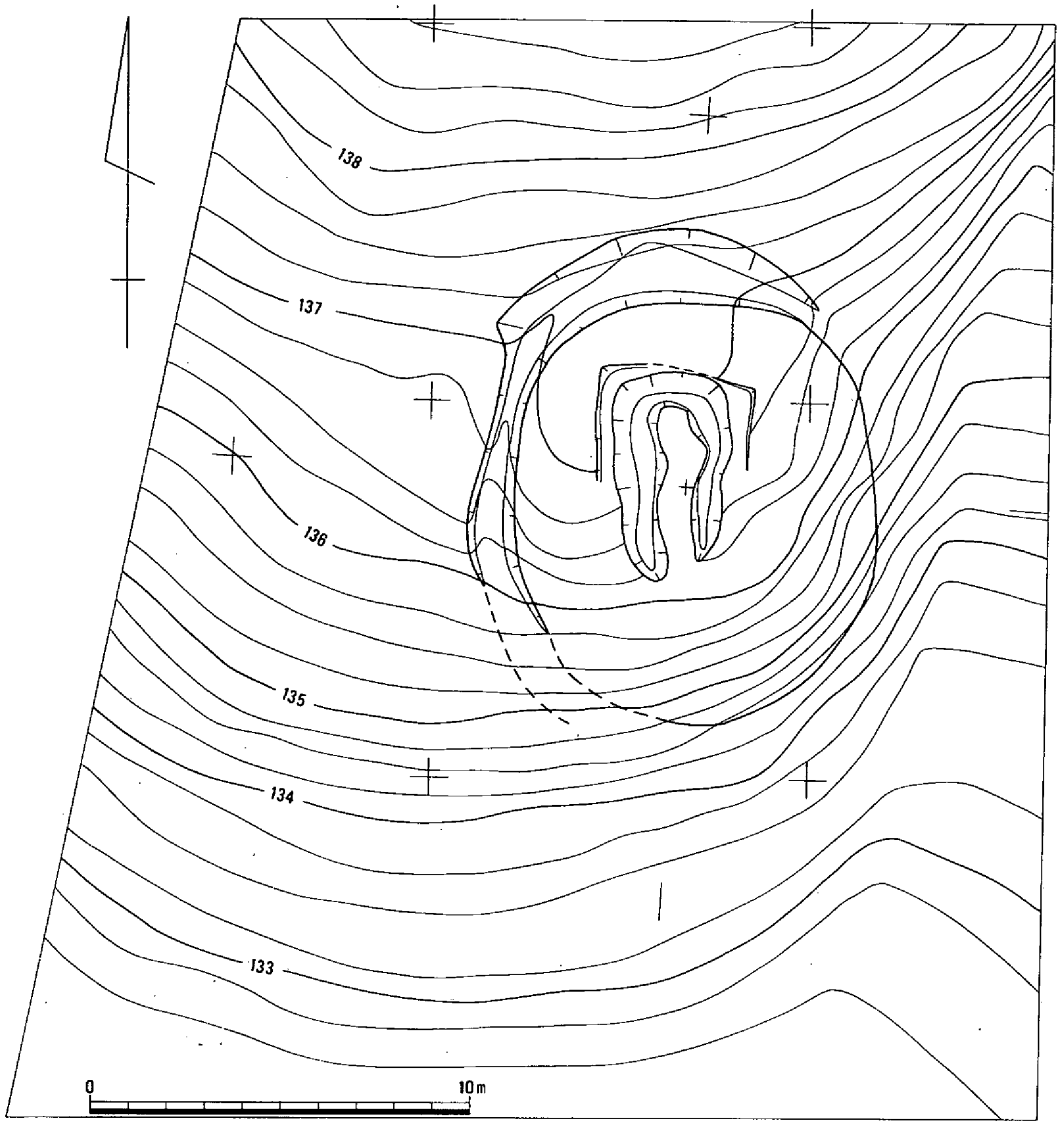
1号墳の墳丘は著しく削平あるいは流出、さらに東側を削り取られてはいるものの比較的良好な状態で当時の形態を保持していた。埋葬施設の横穴式石室は、地山を削平し平坦面に築造されているため、高地形の奥壁（北側）の一部を除いて大量の盛り土がなされていたと思われる。墳丘盛り土は版築状の層位は認められなかった。

この1号墳墳丘は東西約9.5m、南北約





第411図　白迫1号墳調査前地形図（1/300）・位置図（1/8,000）



第412図　白迫１号墳調査後地形図・遺構配置図（1/200）

11.5mでわずかに南北が長い円墳である。残存する墳丘の高さは東西方向で約40cm、羨道部床面から測ると約140cmになっていた。

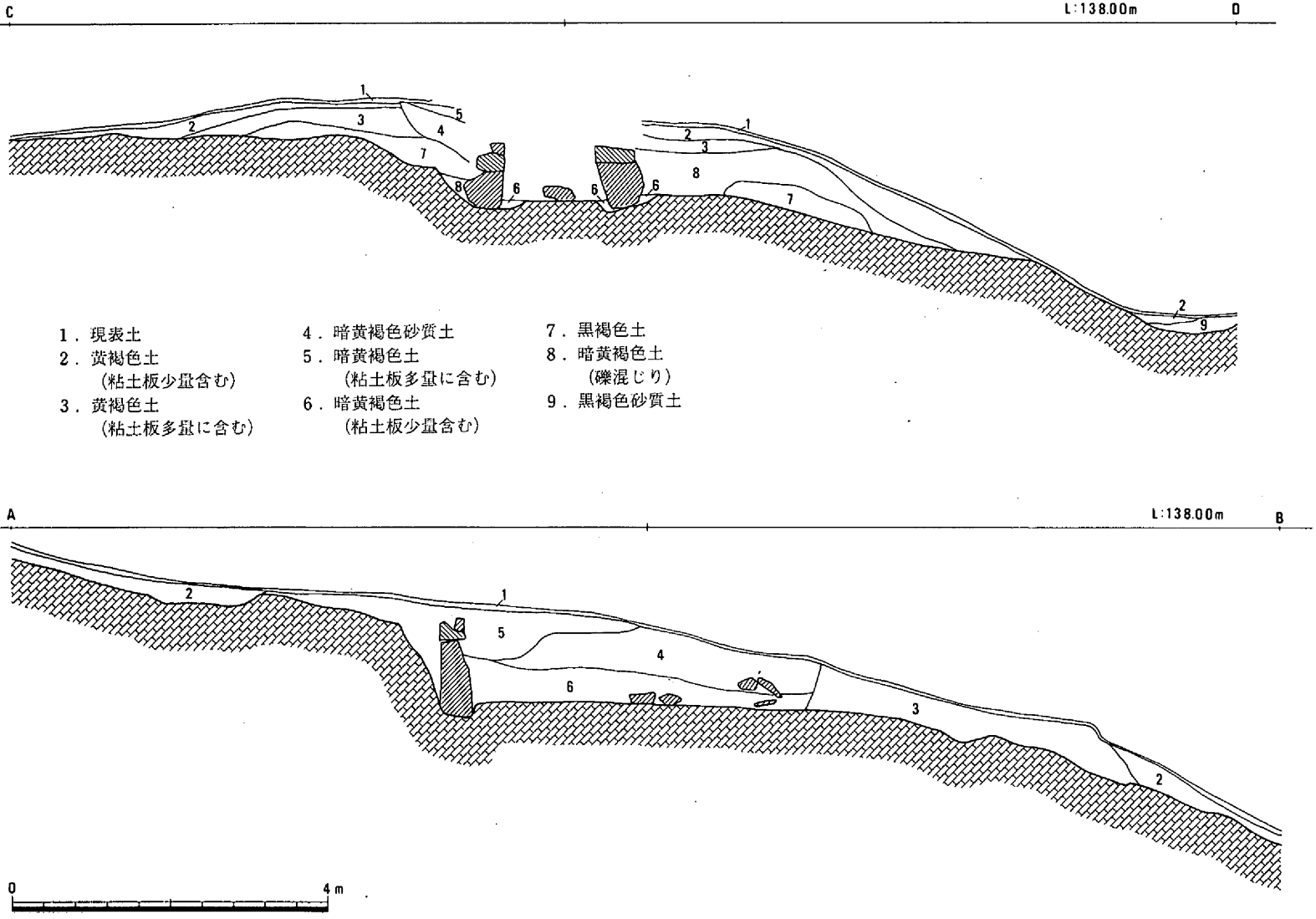
周溝については、高地形の北側から東西両方に向けて馬蹄形の形状とおぼしき状態で検出された。周溝は地山を掘り窪めたもので、幅は奥壁に面した位置が最も広く、断面形態は「U」字形を呈していた。

埋葬施設（第414・415図、図版56、57－１）

１号墳の埋葬施設は、無袖の横穴式石室である。

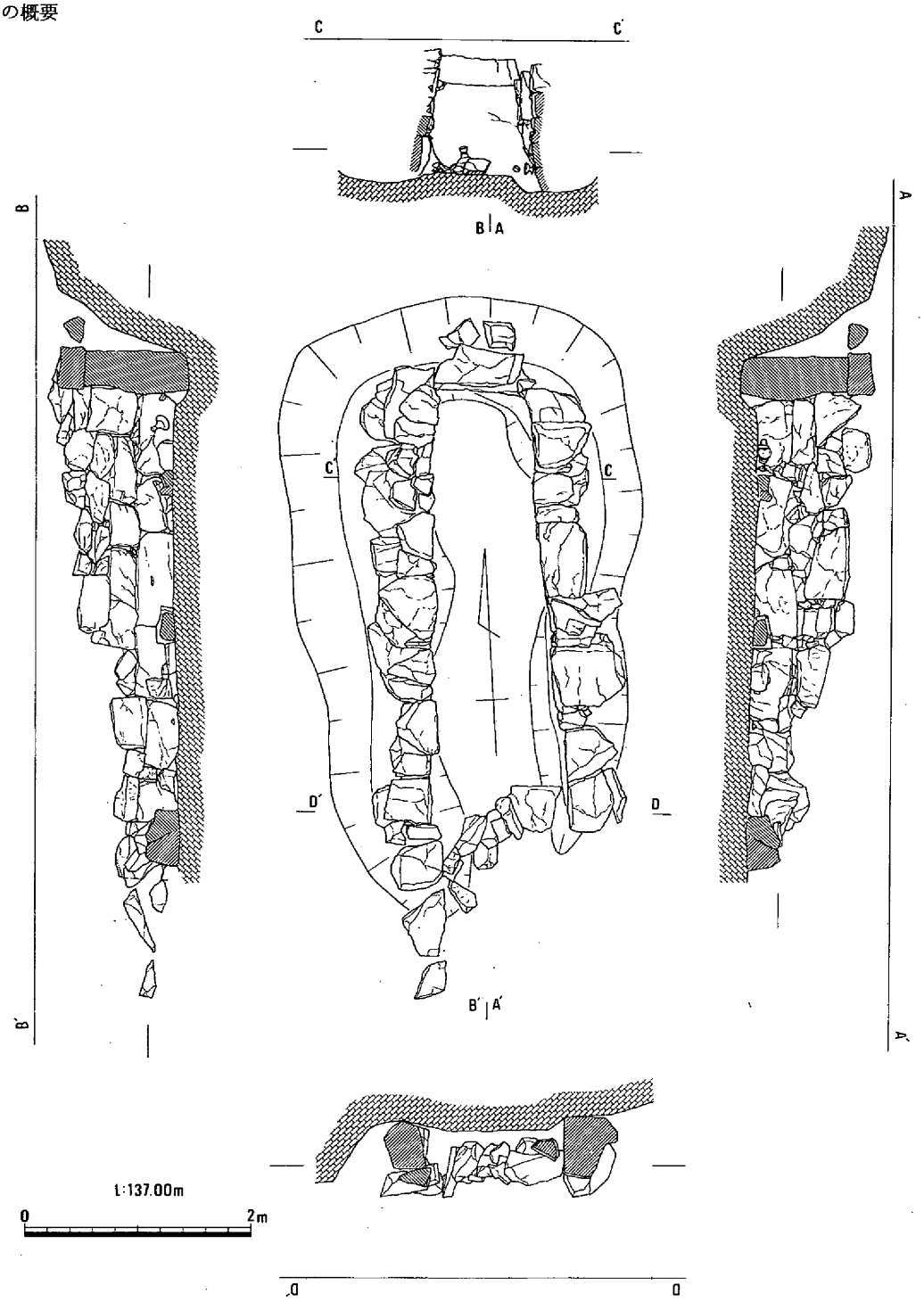
石室両壁面は、奥壁に接する部分は３段、その前方部では２段・１段目までの石が残存し、著しい崩壊を受けていた。さらには羨道部の築造の様子はうかがい知れなかった。しかし、閉塞石と考えられる施設が残存していた。

石室の奥壁底部には一辺約80cmのほぼ正方形に近い厚さ約30cmの角を取った１枚の石を据え、東側のすき間には小規模な石を詰め、上部には長方形の石を据えている。第414図の残存状況であるため、規模については明確な数値は出しえないが、奥壁幅約90cm、石室最大幅120cm、玄室長約380cm、玄室高は不明である。石室の両側壁とも緩やかに内傾する「持ち送り」の形態をとっている。また右側が



1．現表土
2．黄褐色土
（粘土板少量含む）
3．黄褐色土
（粘土板多量に含む）
4．暗黄褐色砂質土
5．暗黄褐色土
（粘土板多量に含む）
6．暗黄褐色土
（粘土板少量含む）
7．黒褐色土
8．暗黄褐色土
（礫混じり）
9．黒褐色砂質土

第413図　白迨1号墳土層断面図（1/80）



第414図　白迫1号墳主体部平・断面図（1/60）

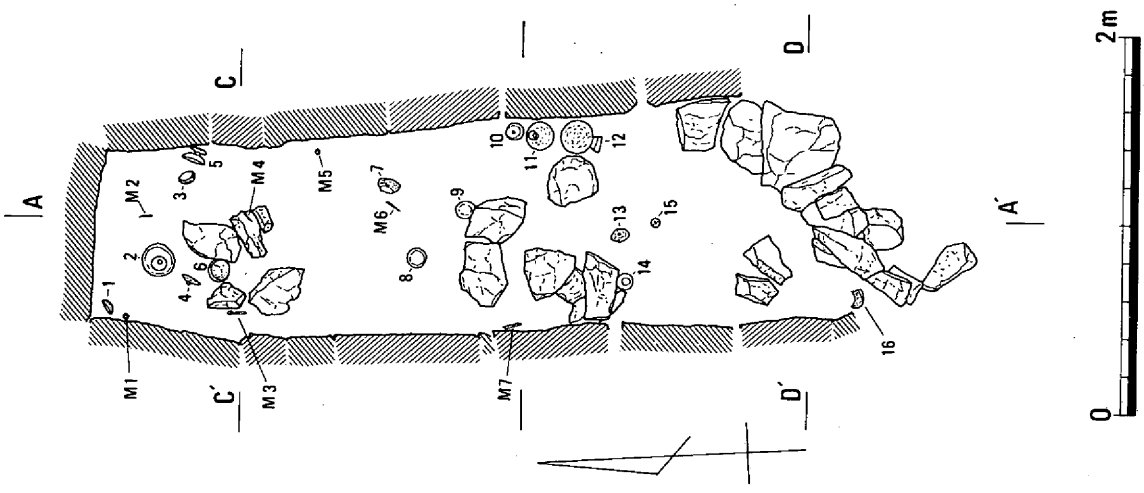
わずかに湾曲し「胴張り」の様相を呈していた。

遺物出土状況（第415図、図版57―2・3，58―1）

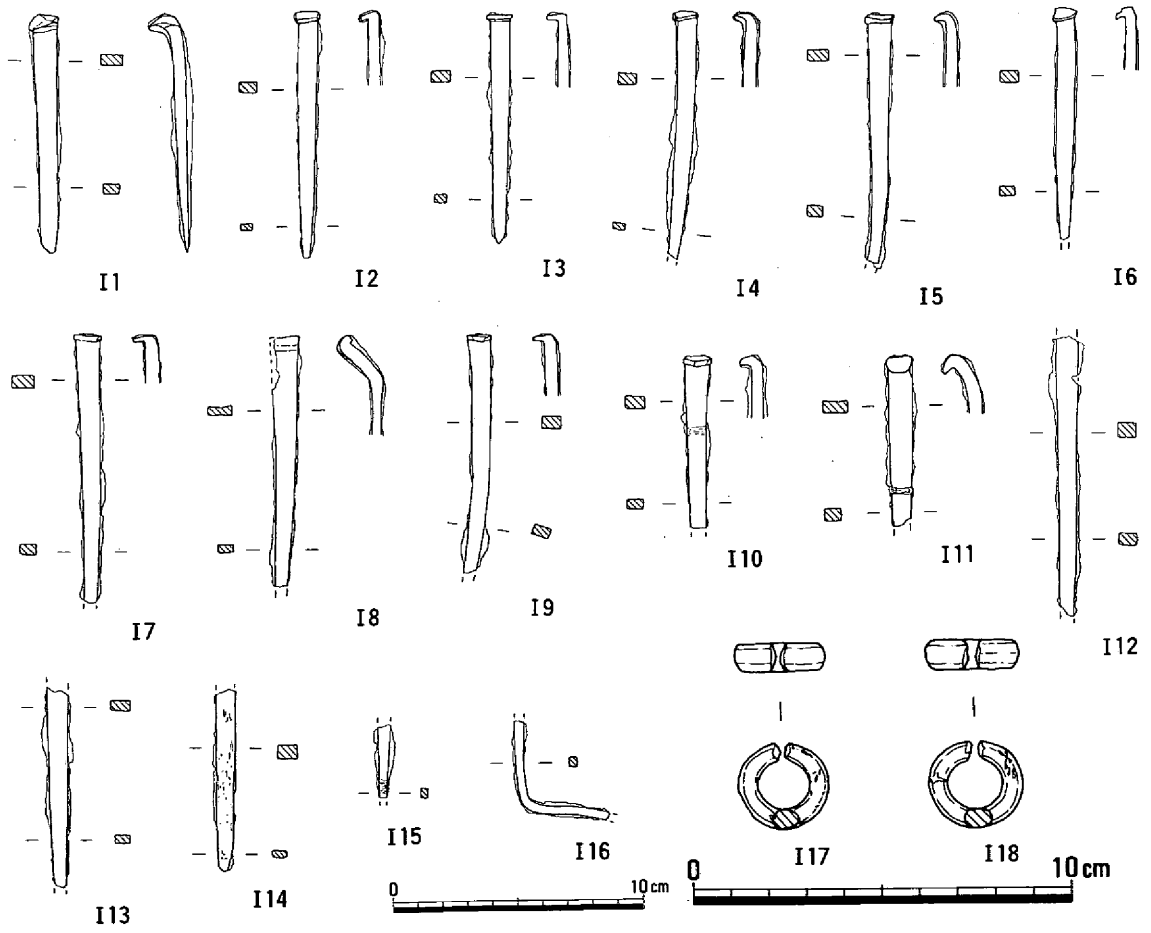
1号墳の埋葬施設である横穴式石室は、天井石だけでなく両側壁の大部分の石材をも抜き取られ、内部も撹乱を受けた状態であった。しかしながら床面全体の撹乱は免れており、棺台と数点の遺物が埋葬状態と思われる位置に存在していた。耳環は2個で元位置とは考えがたい位置にて検出された。これから考えて追葬が行われたとは考えがたい状況である。

出土遺物（第416・417図、図版59～61）

須恵器（第417図）は21点出土し、杯身底部にヘラ記号が見られる。

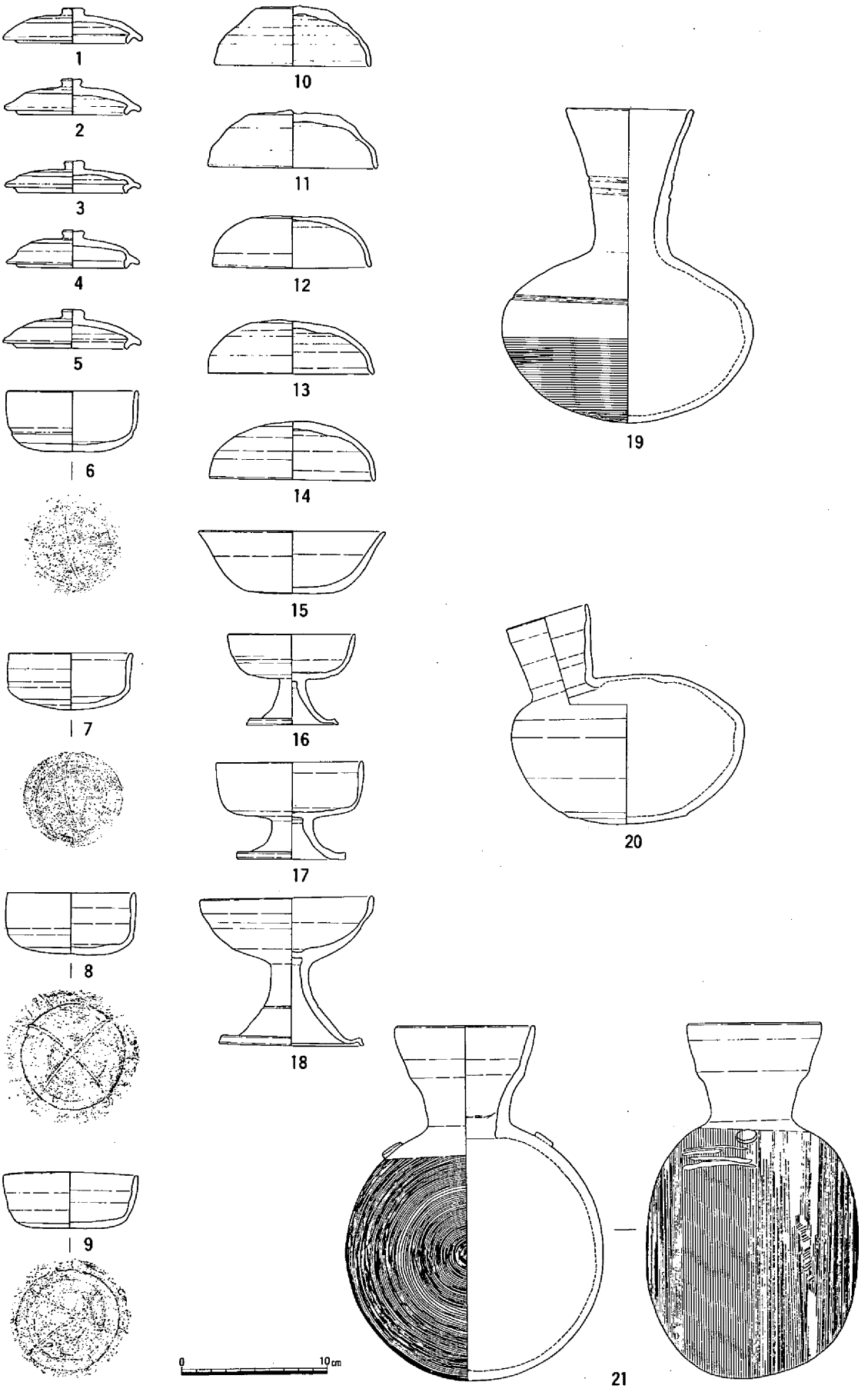


第415図　白涂１号墳石室内遺物出土状況（1/40）



第416図　白涂１号墳石室出土鉄器・耳環

鉄釘・耳環（第416図）で、釘は破片を含めて16点あり、無欠損品はわずか３点であった。いずれの断面形態も長方形を呈する角釘である。耳環はいずれも金銅製で、表面全体の金箔残存状態は良いものである。古墳の時期は６世紀末から７世紀初頭にかけて築造されたものと思われる。

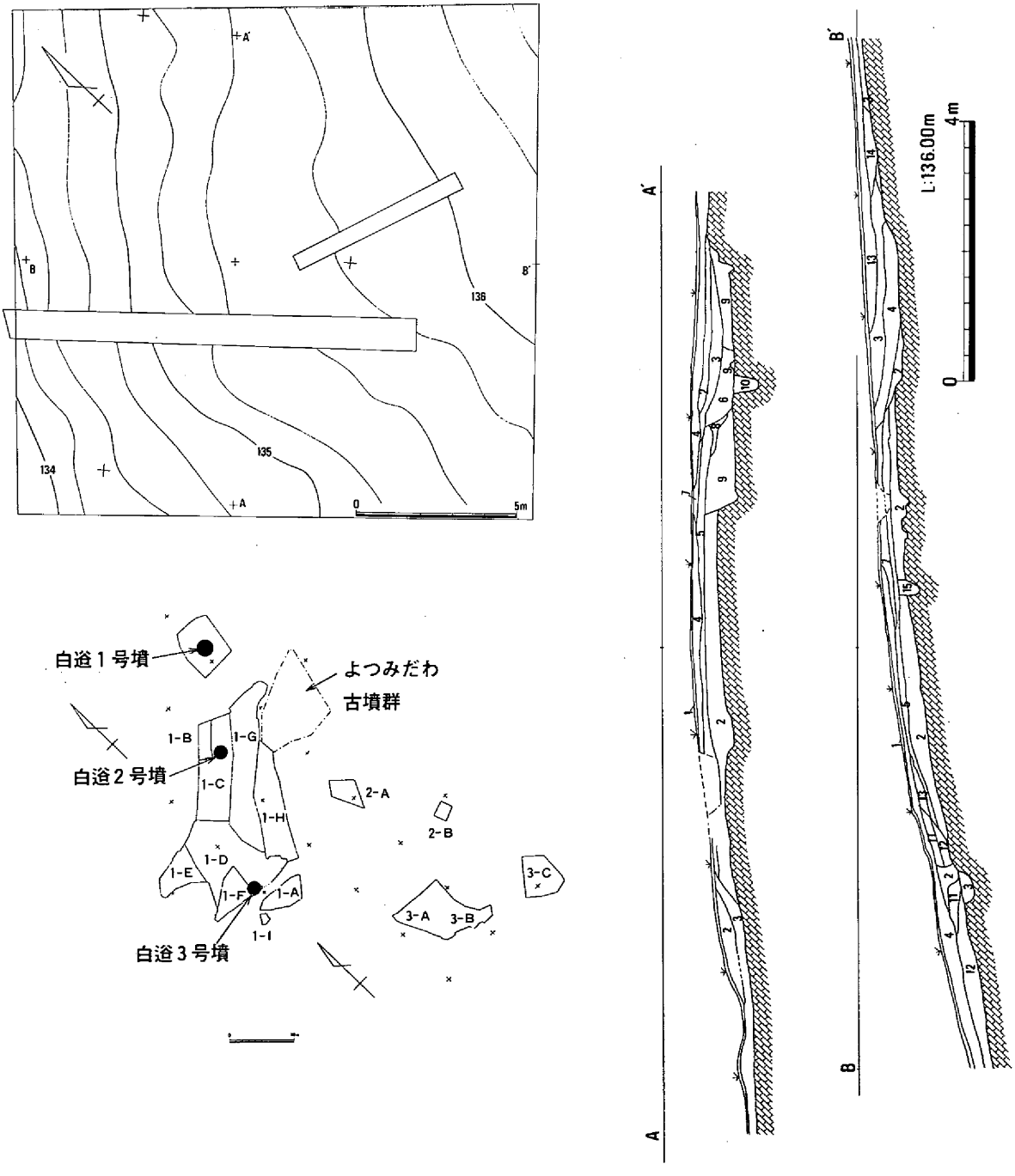


第417図　白迫１号墳石室出土遺物

2．2号墳

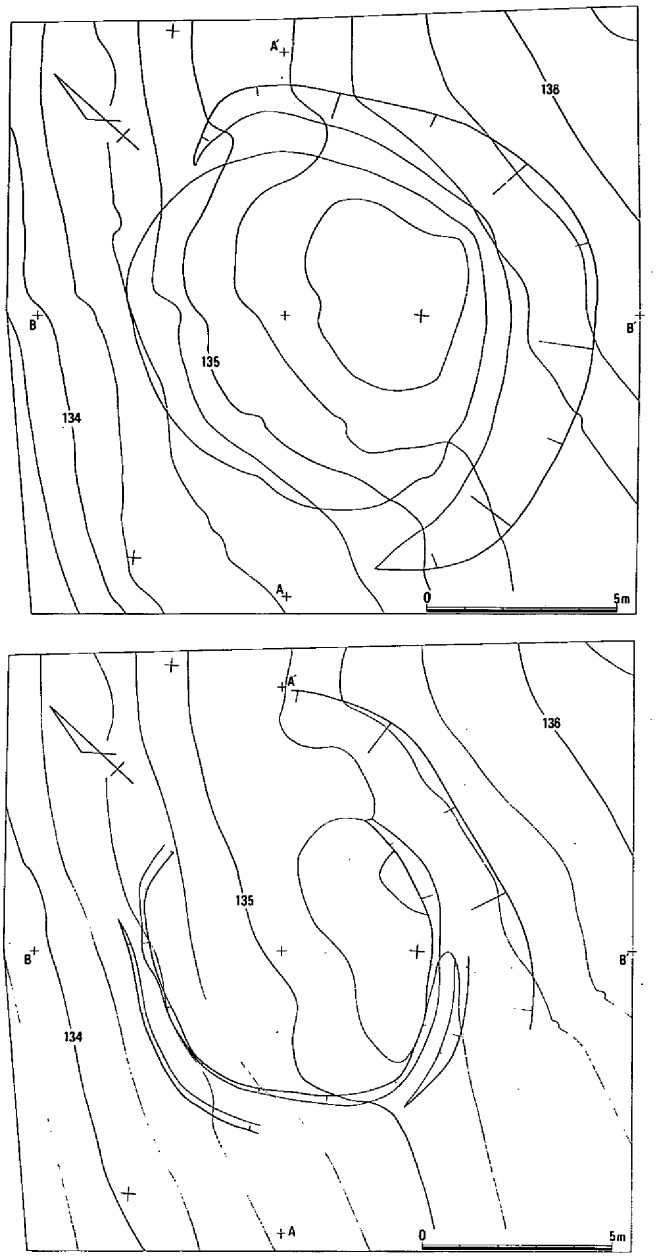
調査前の状況（第418図、図版62—1）

現状での2号墳は1区C北端の西向きの緩斜面にわずかに盛り土的なものが認められたため、トレンチによって有無を確認した。その結果主体部は存在せず周溝のみ存在する状況であった。主体部は木棺直葬であったろうと思われる。



1．表土
2．暗黄褐色土
3．淡褐色土
4．淡黄褐色土
5．暗灰褐色土（旧表土）
6．淡黒褐色土
7．黄褐色土
8．褐色土
9．淡黒暗黄褐色土
10．暗黄淡黒褐色土
11．淡黄褐色土（山礫少）
12．暗黄褐色土（15より明）
13．淡黄褐色土（山礫含）
14．淡褐色土（パサついている）
15．暗黄褐色土

第418図　白迩2号墳調査前地形図（1/200）・土層断面図（1/100）・位置図（1/5,000）



第419図　白迨２号墳調査後地形図（1/200）

墳丘と周溝（第418・419図、図版62—２・３）

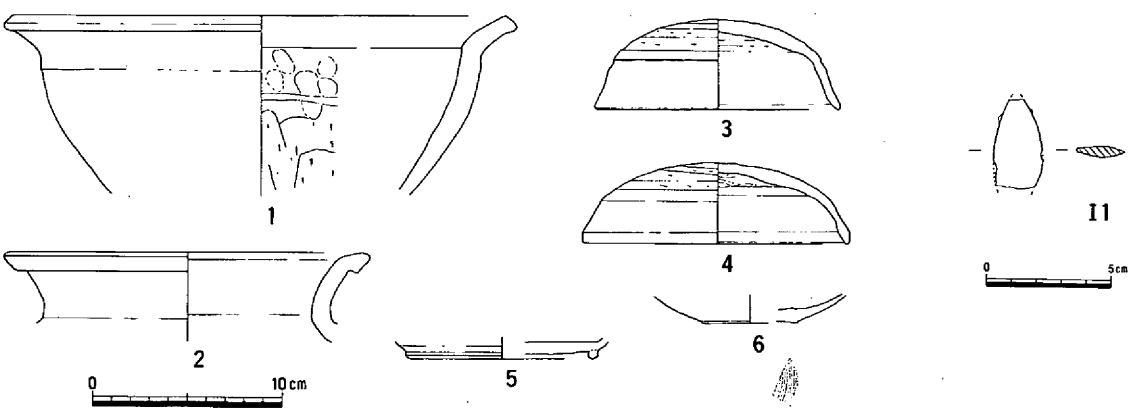
２号墳の墳丘は後世の開墾によって著しく削平がなされ現状では平坦面に近い形態を呈していたが、東側の丘陵陵線側でわずかに窪みを示し、周溝が認められた。墳丘盛り土は約20cmを測るが、築造時の形態を保持していない。

２号墳墳丘は最初7.5m×8.0mで造られ、次いで9.0m×9.5mと若干大きく造り直されている。周溝についても全周していたものが、後ちには丘陵上部側のみが残存する形となっていた。なお、周溝は地山を掘り窪め、断面形態は「U」字形を呈していた。

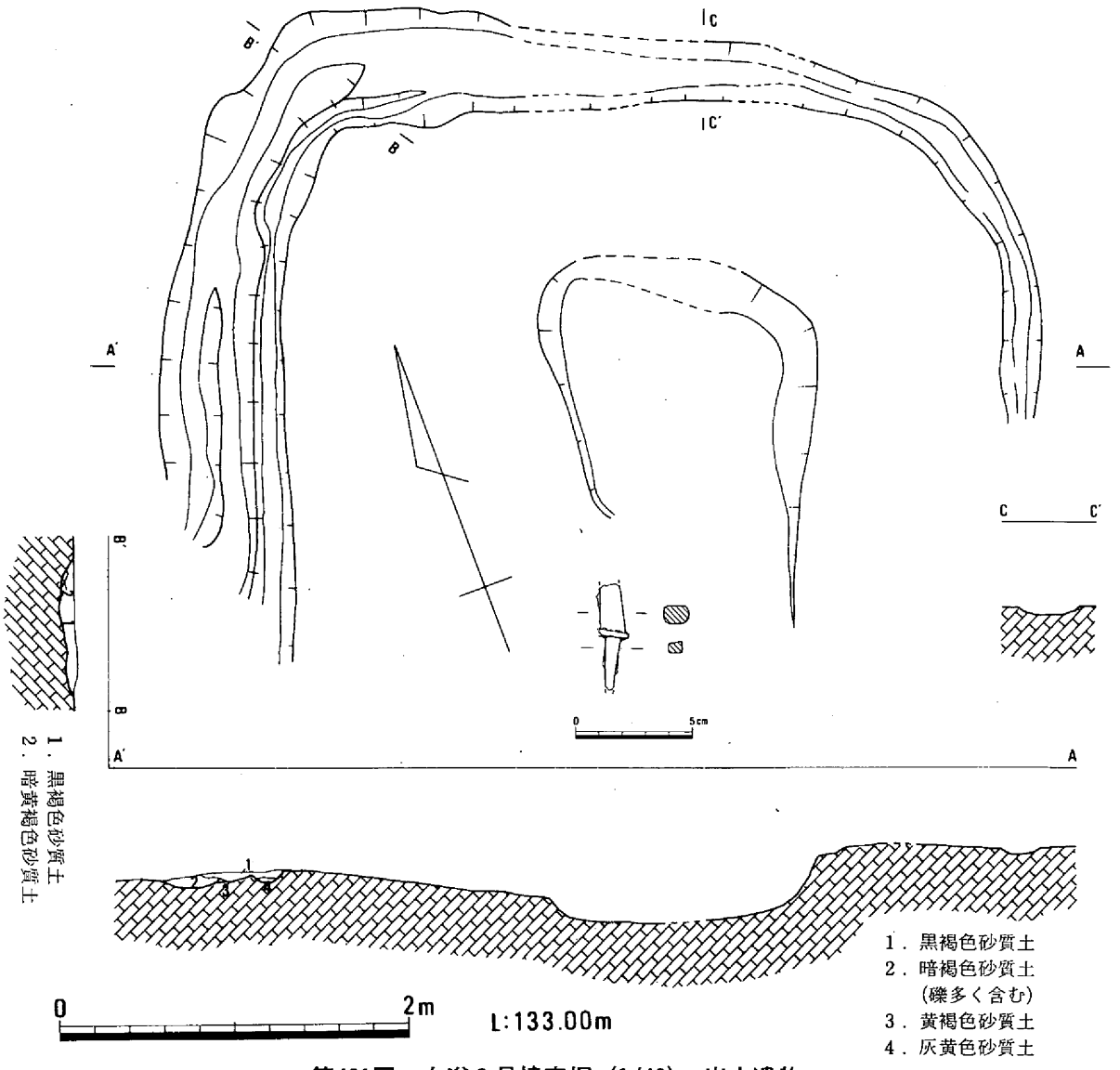
埋葬施設及び出土遺物（第420図）

２号墳の埋葬施設は第418図の土層断面図を見るかぎり存在していない。木棺直葬であったためと、削平により消滅しているものである。

出土遺物については、墳丘盛り土内にわずかな破片と、周溝内から出土しているものである。Ｉ１は鉄鏃で前後を損失している。古墳の時期は７世紀代に比定されよう。



第420図　白迨２号墳及び周辺出土遺物



第421図　白迩３号墳完掘（1/40）・出土遺物

３．３号墳

調査前の状況

丘陵部南西末端にあたる位置で確認されたが、調査開始時点においては、後世の開墾により平坦面となっており何ら確認することができなかった遺構である。全面調査において、ほぼ方形の溝と、その中央部分に近い位置で長方形になると思われる浅い窪みを検出し、この窪みを中心主体にした方墳が存在していたことが確認されたものである。

墳丘と周溝（第421図、図版62―４）

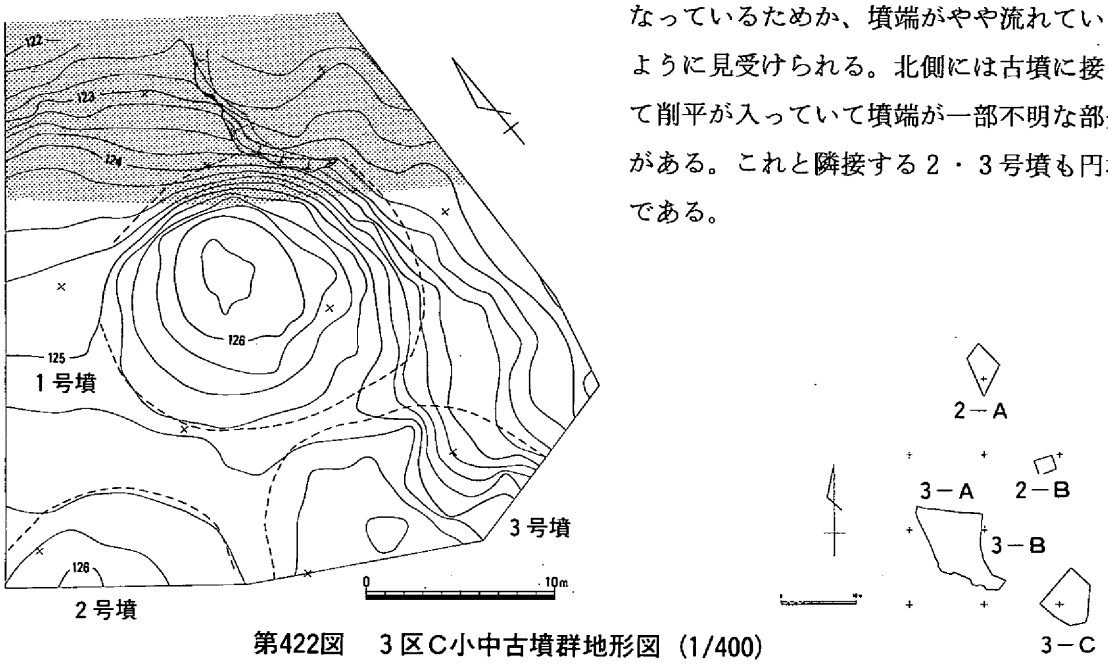
３号墳の盛り土は全くない。方形に廻る周溝は北側半分で検出、断面形状は「U」字状を呈する。

埋葬施設及び出土遺物（第421図）

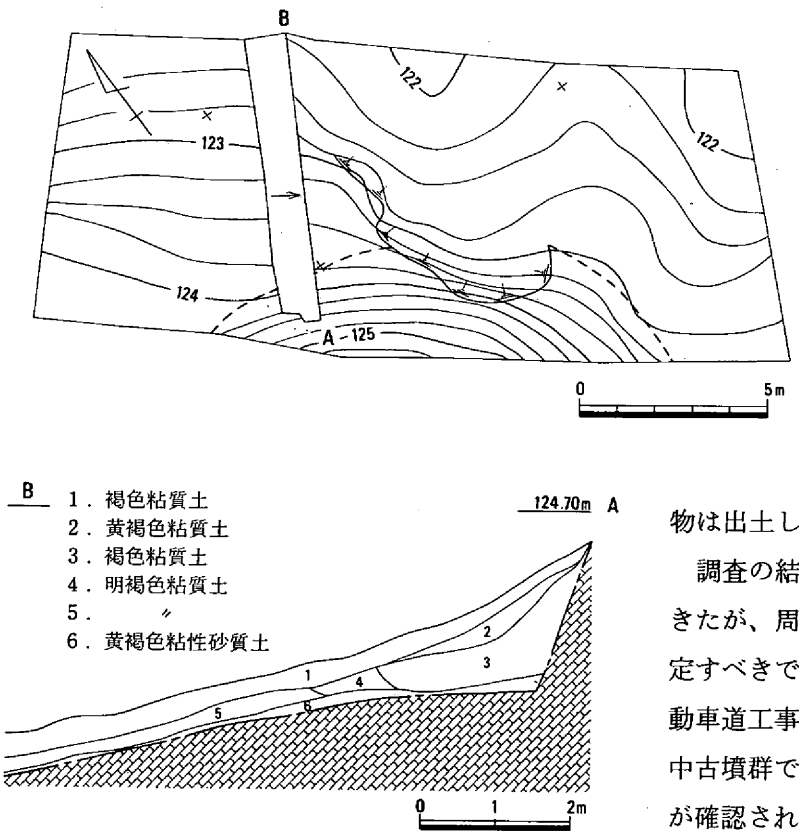
３号墳の埋葬施設は中央部に窪みが存在するのみで、竪穴・横穴等に関する石材等は一切存在していなかった。窪みの規模から竪穴式石室が相定される。出土遺物は鉄鏃片１点が周溝から出土しているのみである。古墳の時期は６世紀末から７世紀初頭に位置づけられよう。

(9)　小中古墳群の調査

今回の調査では、小中古墳群のうち残った１～３号墳に関しての測量と１号墳北側斜面の発掘調査を行った。１号墳は南西に向かってのびる尾根の北西端、古墳群全体の北端に位置する。現状は、直径16mの円墳で比高差最大３mを測る。海抜溝126m付近で墳頂平坦面がみられる。西側が斜面になっているためか、墳端がやや流れているように見受けられる。北側には古墳に接して削平が入っていて墳端が一部不明な部分がある。これと隣接する２・３号墳も円墳である。



第422図　３区C小中古墳群地形図（1/400）



第423図　小中１号墳調査範囲（1/200）・土層断面図（1/100）

１号墳北側の発掘調査部分では、表土・流土を除去した結果周溝は認められなかった。ただし傾斜の変換はより明確になったので、墳端はほぼ間違いないものと思われる。土層観察では、盛土と流土の区別が困難で、盛土の範囲を確定することができなかった。また、古墳に伴う遺物は出土していない。

調査の結果、１号墳の規模はほぼ確定できたが、周溝の有無に関しては現状では断定すべきではないだろう。ちなみに中国自動車道工事に伴って発掘調査が行われた小中古墳群では、調査された古墳全てに周溝が確認されている。

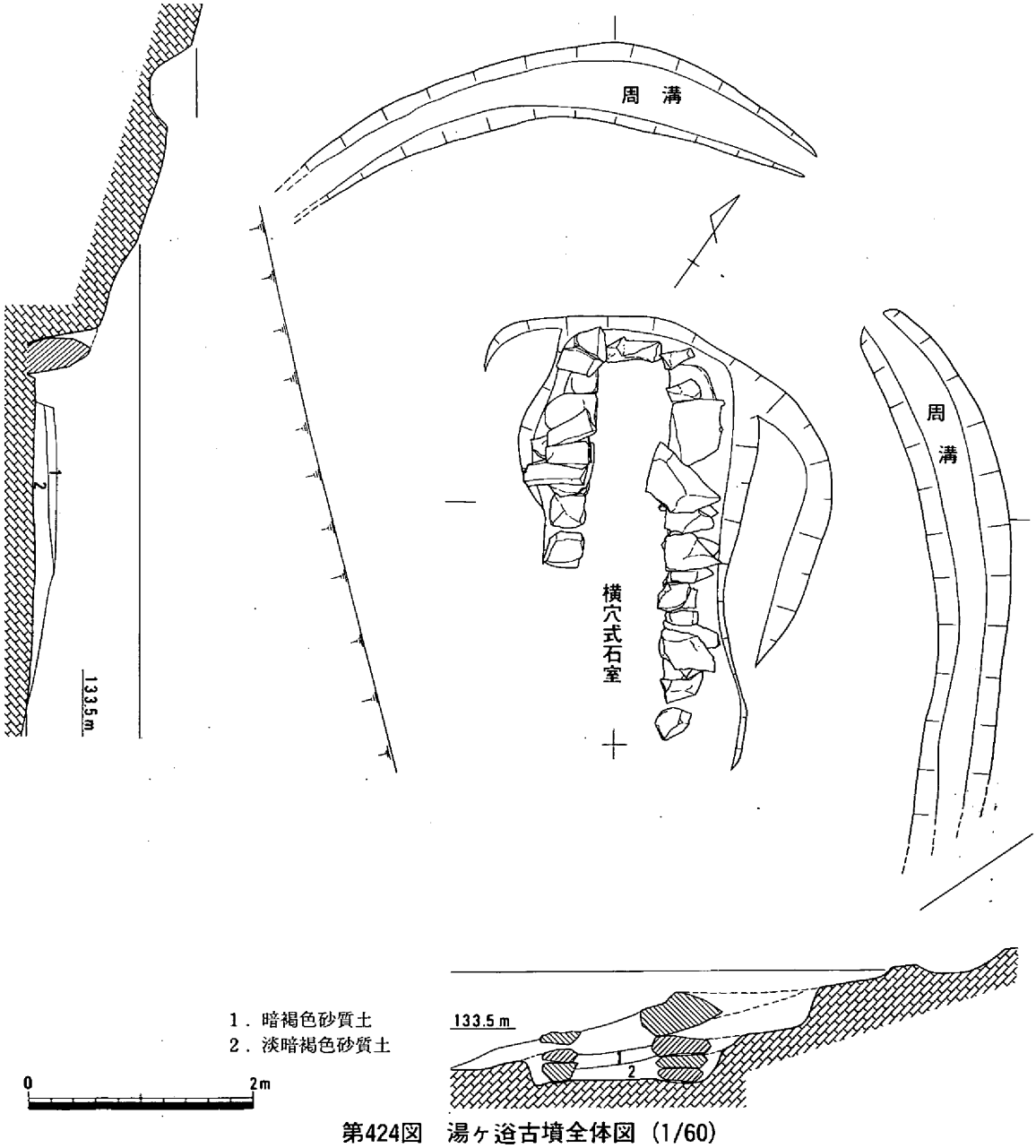
⑽　湯ケ迨古墳の調査

1．はじめに

土取り場として急拠設定した5区の最南端で新発見した古墳である。当初は中世の墓地基壇か経塚のような遺構と考えられ側壁の石列を現わすに及んで小石室であることが判明した。

2．墳丘・周溝

墳丘は完全に削平されており、土層断面にさえ残っていない。しかし、周溝は断続的に残存している。周溝の上幅は約80cm、深さ約20cmである。周溝の中心から石室の中心までの距離は南北400cm、東西300cmを測る。つまりこの古墳の墳丘は南北に長い楕円形を呈する。長軸約8m、短軸6mの円墳と言うことができる。



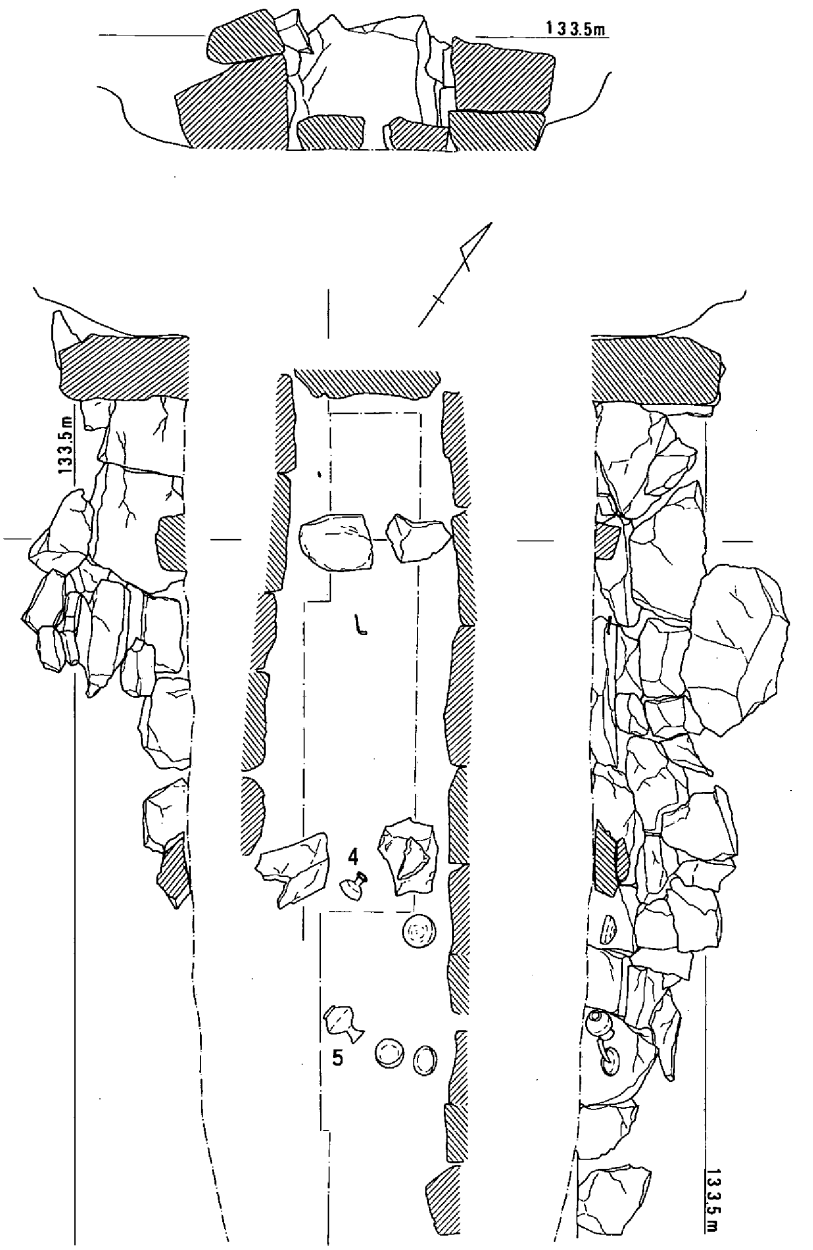
第424図　湯ケ迨古墳全体図（1/60）

3．横穴式石室

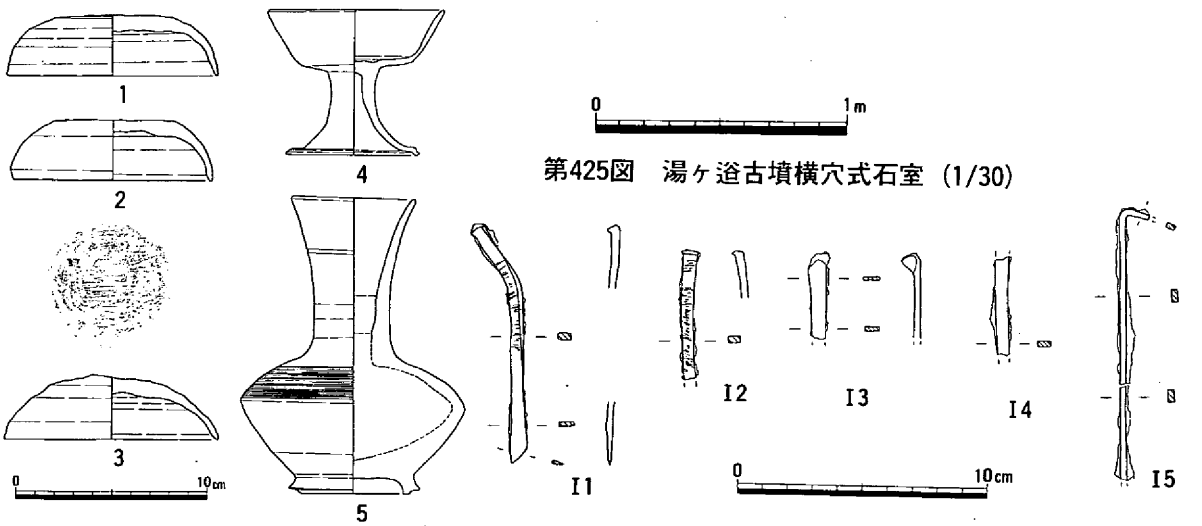
ほぼ南北に長い石室で、奥壁は一辺60cm、厚さ25cmの正方形一枚石を使用している。東側壁は長さ320cm、高さ80cmを残し、最大三段に一抱えの石を積み上げている。一方西側壁は長さ190cm、高さ60cmを残し、最大三段に一抱えの石を積み上げている。いずれも一段目は石の広口を内側に向け、二段目は小口積みにしている。床面の幅は奥は60cm、奥から180cmの位置で75cmである。四個の角石で棺台を作っている。

4．出土遺物

石室から須恵器5点と鉄器5点が出土している。須恵器は杯3点、高杯1点、台付長頸壺1点である。すべて完形品で、出土場所も南部に集中していた。鉄器はすべて棺釘である。また周溝の埋積土からは鉄の製錬滓（大沢鑑定）が出土していたが、古墳に伴うものか疑わしい。（浅倉）



第425図　湯ヶ迫古墳横穴式石室（1/30）



第426図　湯ヶ迫古墳出土遺物

Ⅳ まとめ

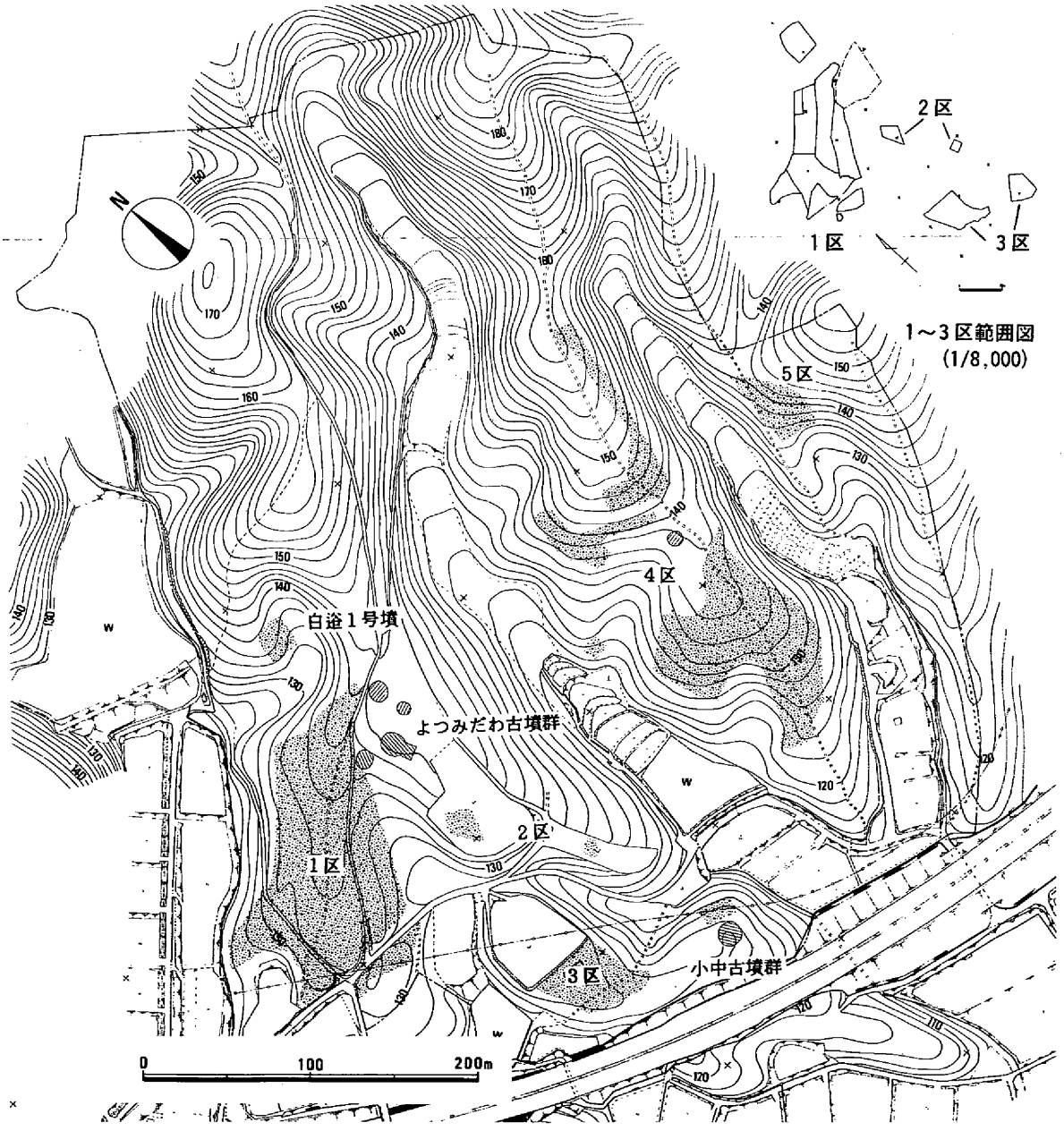
(1) 竪穴住居について

今回調査を行った小中遺跡の１区から５区の５調査区で検出された竪穴住居について、形態別に分類を行い、考察を加えてみたい。

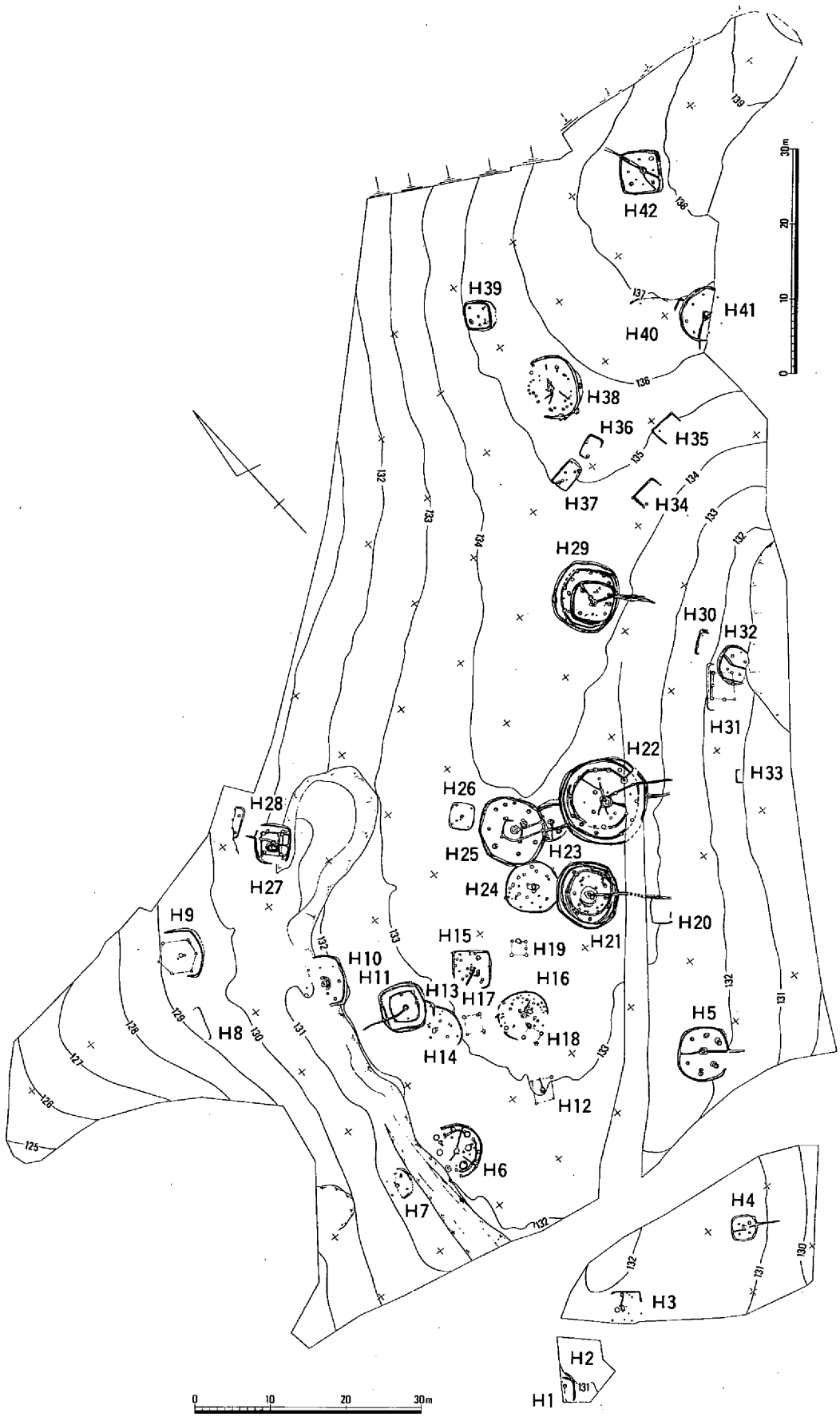
調査を行った丘陵は、間山から南に舌状にのび、低丘陵にかかった位置が調査区域である。

丘陵は修理免池から北に延びた谷を挟んで丘陵が東（４・５区）と西（１～３区）に分岐している。この分岐した丘陵により、検出された竪穴住居の規模・平面形態に違いが顕著に表われている。

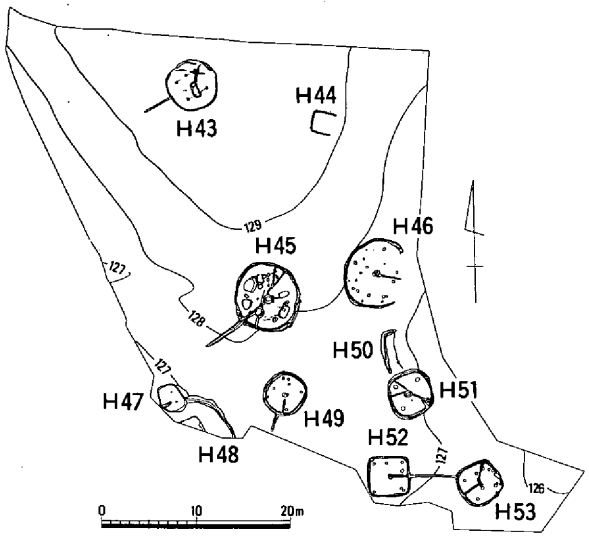
このように形態等を異にする大きな要因は、地形の形状によるところが大であり、谷を挟んで検出



第427図　地形図・調査範囲図（1/4,000）



第428図　1区住居址配置図（1/800）



第429図　3区A・B住居址配置図（1/800）

された竪穴住居の形態は、西側丘陵（1区～3区）では、円形・方形、もしくはそれに順ずる形態の住居が大部分である。それに対して東側丘陵（4区・5区）においては、円形の竪穴住居は10軒程を数え、大部分が方形・隅丸方形の形状を呈する住居である。

このことは、地形により形態が異なり、緩斜面では円形が主体をなし、傾斜角度が急になれば方形・隅丸方形が主になっている。以上の点から地形の傾斜角度によって平面形態が変化することが結論づけられた。

小中遺跡の調査で確認された竪穴住居については、次のⅠ類からⅩ類までに分類（円形・方形にかかわらない）できる。

Ⅰ　類……主柱穴・中央穴を有し、壁体溝を有さない。

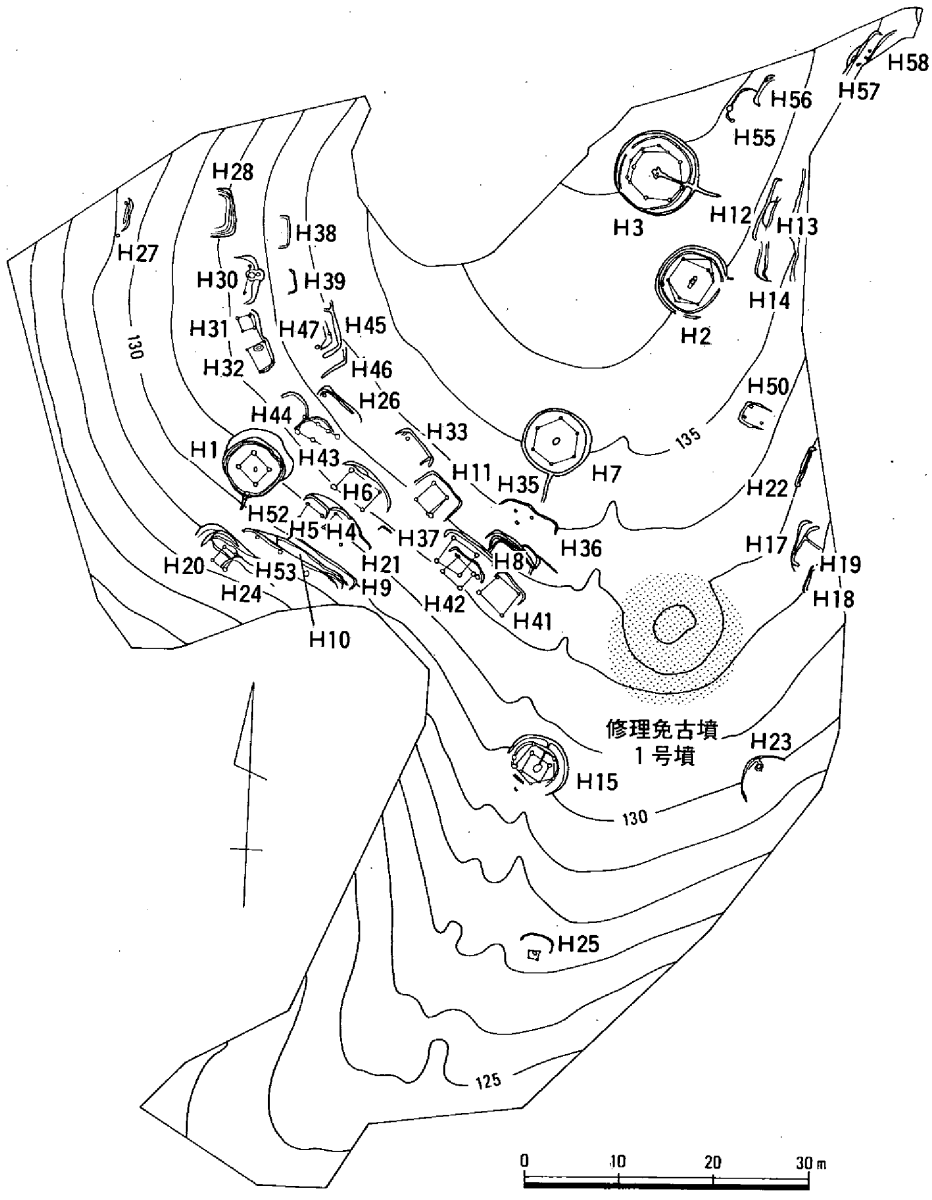
Ⅱ　類……主柱穴・中央穴・壁体溝を有す。

Ⅲa類……主柱穴・中央穴・壁体溝・屋内溝を有す。4と同形平面を呈す。

Ⅲb類……主柱穴・中央穴・壁体溝・複数の屋内溝を有す。

Ⅳ　類……主柱穴・中央穴・壁体溝・屋内溝、屋外溝を有す。

Ⅴ　類……主柱



第430図　4区A住居址配置図（1/800）

穴・中央穴・壁体溝・屋外溝を有する。

Ⅵａ類……主柱穴・中央穴・壁体溝・屋内外溝（中央穴から直線的に屋外溝へと続く）を有する。

Ⅵｂ類……主柱穴・中央穴・壁体溝・屋内外溝（暗渠施設）を有する。

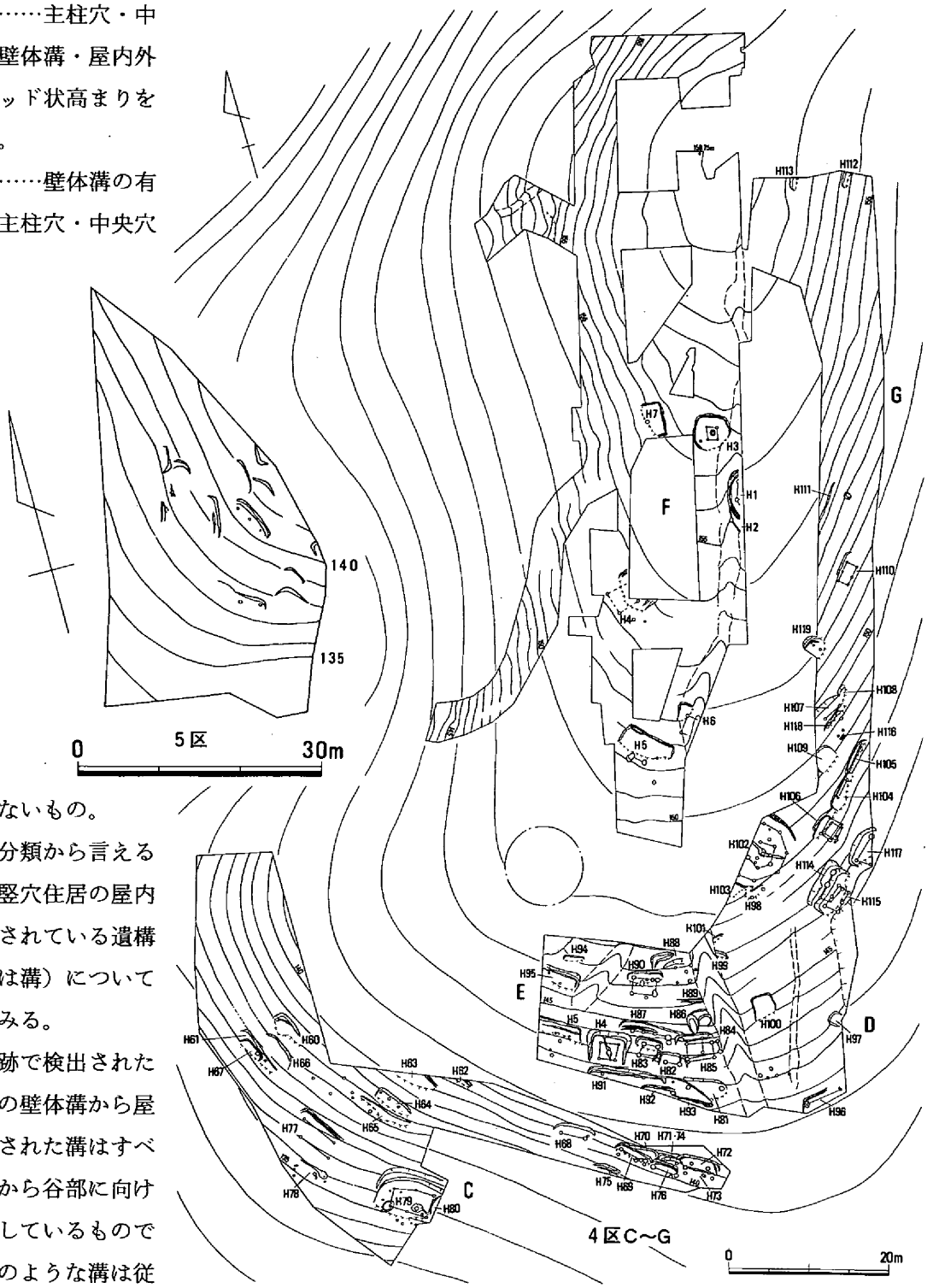
Ⅶ　類……主柱穴・中央穴・壁体溝・屋内外溝・中央穴を取り巻く溝を有する。

Ⅷａ類……主柱穴・中央穴・壁体溝・屋内外溝（中央穴を貫く屋内溝）を有する。

Ⅷｂ類……主柱穴・中央穴・壁体溝・屋内外溝（中央穴を貫き、隅へ通ずる）を有する。

Ⅸ　類……主柱穴・中央穴・壁体溝・屋内外溝・ベッド状高まりを有する。

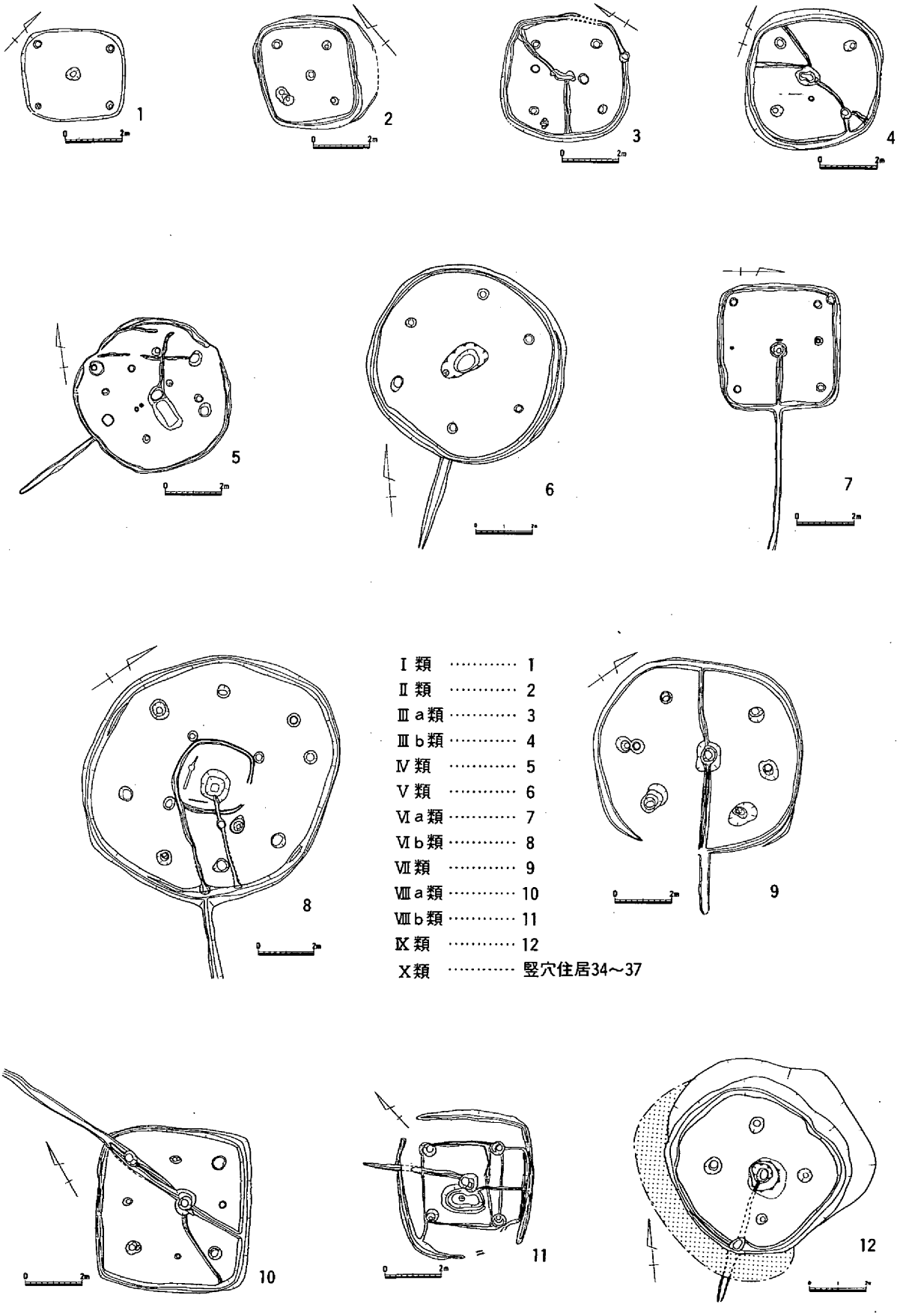
Ｘ　類……壁体溝の有無と、主柱穴・中央穴を有しないもの。



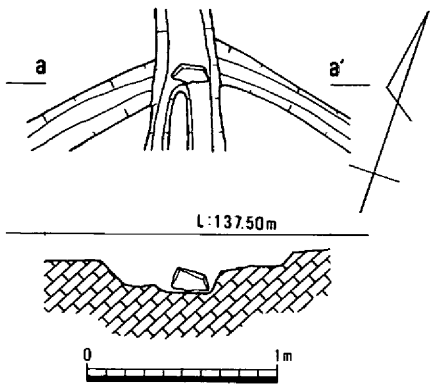
第431図　4区(下)・5区(左上) 住居址配置図 (1/800)

以上の分類から言えることは、竪穴住居の屋内外に併設されている遺構（ここでは溝）について注目してみる。

小中遺跡で検出された竪穴住居の壁体溝から屋外に設備された溝はすべてが丘陵から谷部に向けての開孔しているものである。このような溝は従来から住居内の排水溝の



第432図　小中遺跡住居址形態別分類図（1/200）



第433図　住42閉塞部（1/40）

見方が一般的であったが、今回の調査で確認できたかぎり、排水施設とは考えがたい遺構である。

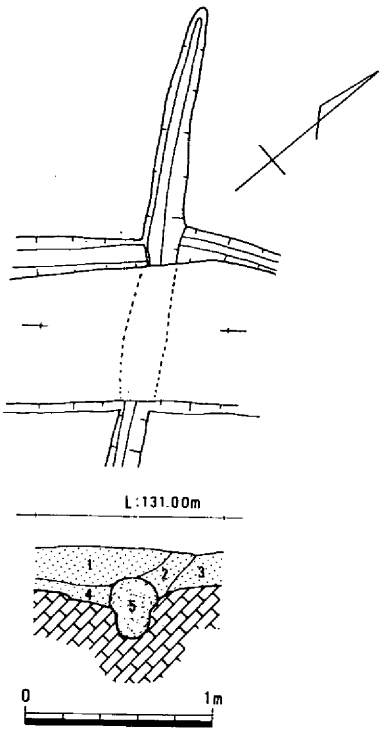
竪穴住居は沖積地・丘陵上の別なく、壁体溝は有しているが、住居の屋内外に併設された溝は丘陵にのみ見受けられる。これらのことから、屋内外に設置された溝は排水とは考えられない遺構である。なぜならば、今回の調査で確認されたかぎり、溝は中央穴（火所）に連結し、屋外へと延びている。しかも溝の埋土中には炭化物・灰等を含む土も認められた。さらに屋内に設置されている溝すべてが壁体溝底面より上層に位置している。壁体溝と交わる部分から屋外にかけての位置では壁体溝より深く下げられての設置も存在している。

以上のことから、住居屋内外に設置された溝は排水が目的の遺構ではなく、竪穴住居内に空気を取り入れる目的で設置された遺構であると考えられる。

もし、排水が目的で設置された遺構であるならば、沖積地に存在する竪穴住居にも伴ってしかるべき遺構である。

小中遺跡で確認された住居内外の溝の形態は、壁体溝に比べ屋内では狭く、浅いものが多く、屋外では比較的幅・深さとも大きめである。また屋内併設のものについて、1区の竪穴住居25、4区竪穴住居1では床面では暗渠であったことが確認されている。

1区竪穴住居42（Ⅷb類・第76図）では、壁体溝と交差する位置の溝内に石材（石皿）を溝に直交して立てた状態が確認さ

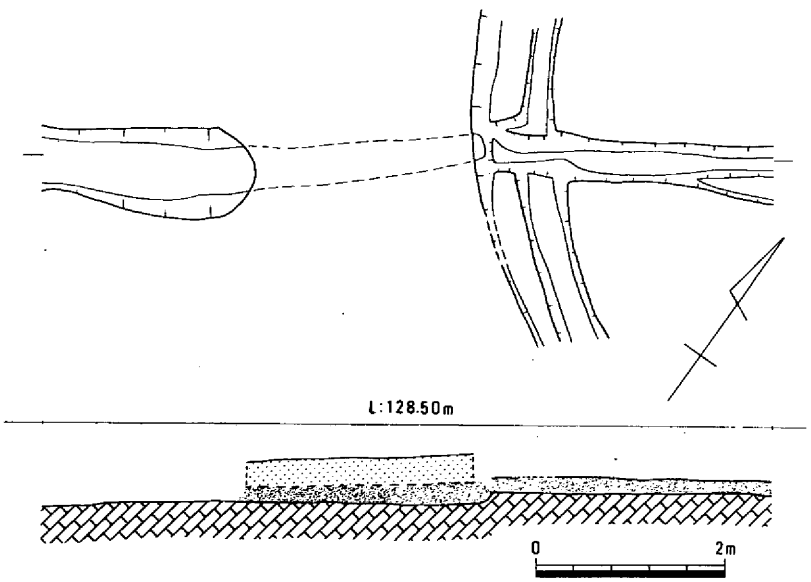


第434図　住27溝部分図（1/40）

れている。この状況から住居屋内において、通気孔に蓋をした状態と受けとめられる。あたかも、中央穴（火所）あるいは屋内への自然送風を調節する目的を示している施設である。

竪穴住居に伴う暗渠施設（第434～436図）

第434図は1区竪穴住居27（Ⅸ類）の屋内でのベッド状高まりの下部における施設図である。作り付けの高まり部



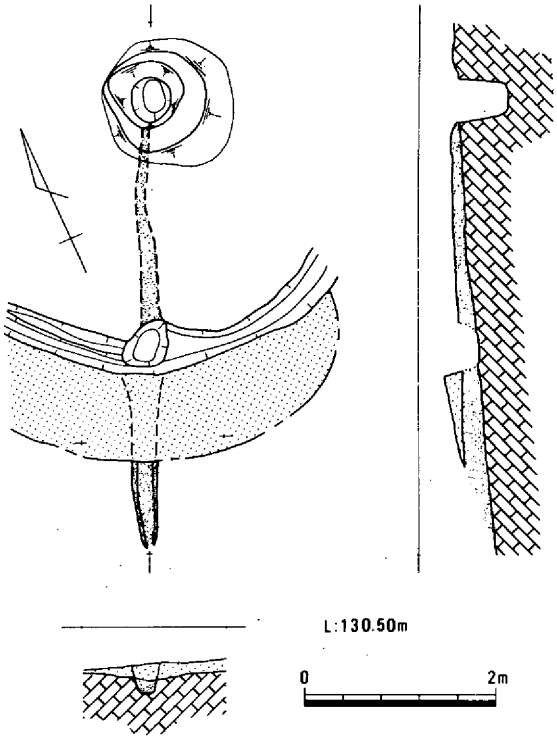
第435図　住45溝部分図（1/80）

分を掘り下げ、さらに「U」字状に掘り窪めたのち、筒状の暗渠施設を施した形状を示している遺構である。暗渠内の埋積土内にはかなりの炭化物が含まれていた。

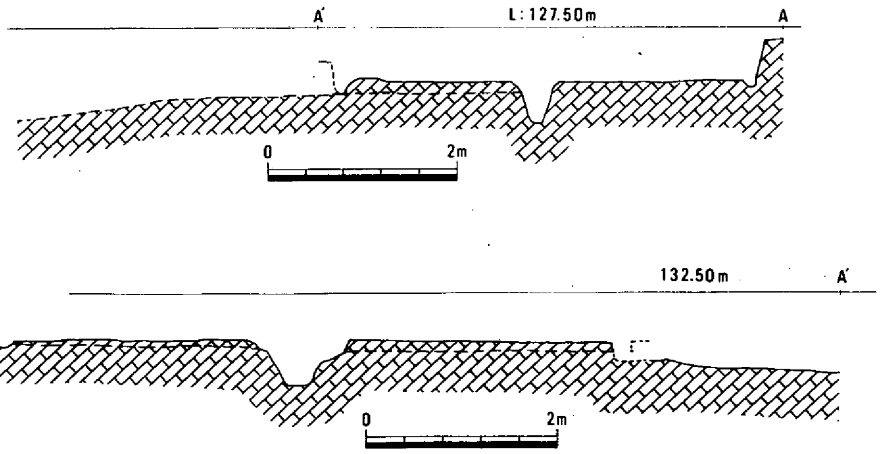
第435図は3区竪穴住居45（Ⅷa類）は屋外（壁下）に位置する部分の図である。断面図に示す併設の溝は壁体溝より深く掘り込まれている。また暗渠部分の間隔は約230cmを測る。しかし、この幅が即住居の壁厚とは言いがたい。

第436図は4区竪穴住居1（Ⅵb類）は屋内・屋外共に暗渠で検出確認された併設遺構である。図示したように、点線部分が今回の調査で確認できた暗渠施設であるが、壁体溝と交差する部分にはピット状の掘り窪みがなされ、溝はこのピットに続き、屋外へと続いている。

屋内溝は中央穴（火所）に向けて浅く、先細りの形状で徐々に登りながら中央穴に達している。



第436図　4区住1溝部分図（1/80）



第437図　住52(上)・住5（下）断面図（1/80）

（断面図に示す通り）。

この竪穴住居では、壁体溝外側（ドット部分）に現状では竪穴住居の南西半分において逆「コ」字状に壁と考えられる盛り土部分を確認した。現状での現存最大幅は約90cmを測る。よって、この住居の壁の厚さは約90cmであったことがうかがえる。

屋外溝は、この盛り土を切り込み、暗渠施設として設置した遺構であるが、その断面形からは1区竪穴住居27のごとく明瞭な暗渠の形状は示していなかった。

今回の調査で明らかになったことは、調査区内における竪穴住居の平面形態が地形によって様々な形状を呈している。さらに、住居に併設された通気のために設置された溝（暗渠）等が確認されたことである。また、3区竪穴住居45の床面検出の土壙の用途等については今後の検討課題の一つにあげられよう。

(2)　段状遺構と竪穴住居

4区の調査では、竪穴住居が120軒あまり検出されているが、その大部分は残存状況が悪く、段状遺構との区別が困難である。竪穴住居と段状遺構との区別については、客観的な分類基準を設けることはほとんど不可能であり、各調査担当者の見解にしたがっているため、調査区によって若干の相違が生じていることをまず断っておきたい。

段状遺構は、従来、「段状遺構」[1]のほかに「地山整形遺構」[2]、「住居址状遺構」[3]、「長方形長屋状住居址」[4]などさまざまな名称が用いられてきた。段状遺構は、その性格から大きく2つに分類できる。A．独立した施設と考えられるものと、B．竪穴住居等の付属施設と考えられるものである。前者の機能としては、a．住居等の建築物、b．広場、c．通路、d．排水に関する施設などさまざまなものが考えられている。後者は、a．竪穴住居等の建築のための平坦面造成、b．竪穴住居等に取り付く排水施設といった機能がある。Bについては、本報告書では段状遺構とせず、それが付属する竪穴住居等の遺構の一部分として報告している。以下においても、A．独立施設としての段状遺構を中心に扱う。

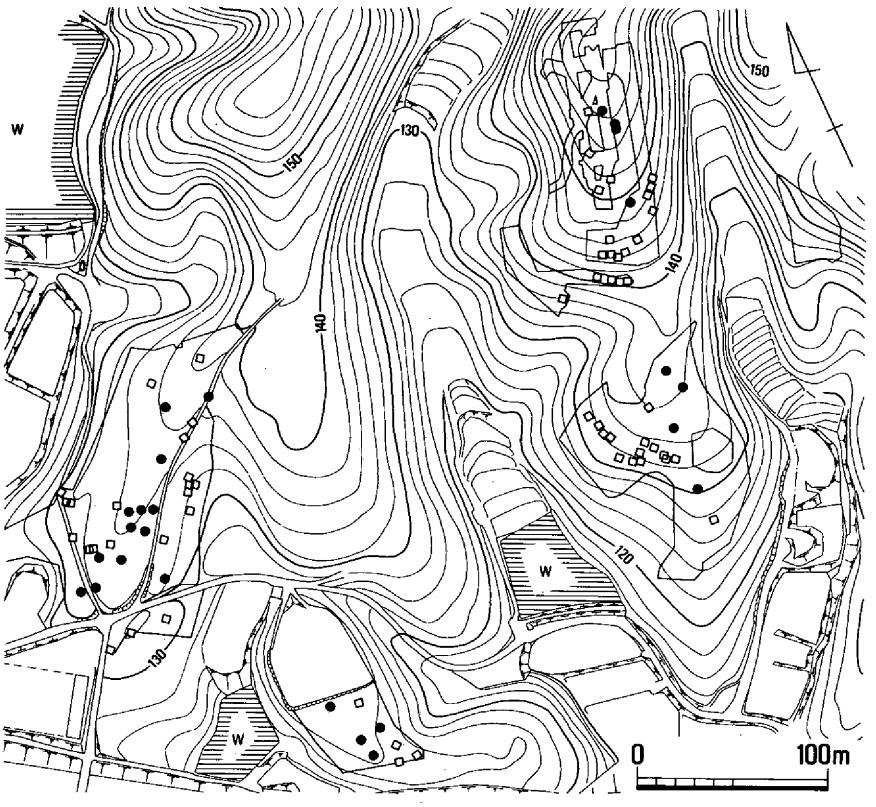
小中遺跡における段状遺構は、急な傾斜地の少ない1～3区ではあまりみられず、急な傾斜地の多い4・5区において顕著に認められる。4・5区では、傾斜が20°前後になるような急斜面にも遺構が検出されているが、そのような部分では段状遺構が非常に多い。急傾斜地に対応した構造物といえる。上では、一般に考えられている性格、機能からの分類を示したが、ここでは検出された遺構の形態から今一度分類を行ないたい。遺構の性格を考える上でまずその規模が重要であり、この観点から分類を行なう。通常の竪穴住居と同様の規模（一辺の長さ）をもつものを基準として、分類する。1．通常の竪穴住居よりも小さい2～3m程度の規模のもの、2．通常の竪穴住居の一辺の長さと同様の、4～7m程度のもの、3．それ以上の長さをもつ長大なものである。そのほかの分類基準として、壁体溝の有無、柱穴の有無といったものも考えられよう。柱穴に関していえば、もたないものの割合が高く、柱穴をもっていてもその配置や規模に規則性、統一性のないものが大部分である。住居としての機能をもつものでも、竪穴住居ほど形式化された上部構造ではなかったのであろう。また、分類基準としてもう一つ、壁体の平面形を挙げておきたい。大部分のものは壁体が側面にまわり込んで「コ」の字形を呈するが、側面に明確な壁体をもたない「Ⅰ」字形平面のものもある。「コ」の字形のものは、通路や排水施設には適さないであろう。

規模に関する分類のうち1については、数も少なく不明な部分が多い。柱穴を伴うものもあり、小さな小屋のようなものと考えられる。2は、数が最も多く、段状遺構の大部分がこれに属する。このことは、小中遺跡の段状遺構の多くが住居を中心とする機能をもった建物である可能性を示している。中には竪穴住居の残欠も含んでいると思われるが、かなり急な傾斜地に立地するため、通常の竪穴住居と同様に正方形に近い床面を確保しようとすると地形の低い側に著しい量の盛り土を行なわねばならない例が多く、現実的でない。等高線に沿った細長い建物や、半竪穴半高床の建物を考える必要もあるだろう。3は、長さ10数mに達するものもあるが、数は少なく不明な点が多い。「Ⅰ」字形平面のものは通路等の可能性がある。

以上のように、段状遺構にはさまざまな機能が推定できるものの、規模において竪穴住居と共通するものが大部分で、住居に近い機能をもつものが多いと考えられる。急傾斜地に対応した住居形態と

いうこともできよう。1・3区と4区とを比較した場合、4区の方が遺構密度がかなり高いものの、典型的な竪穴住居はかえって1区よりも少ないということも、このことを裏付けている。

ところで、小中遺跡における竪穴住居の平面形をみると、円形、隅丸方形、方形、多角形など多様な形態が認められる。多角形のものは多くないので、大きく円形と方形に分けることができよう。これらの形態差は何に原因しているのであろうか。小中遺跡の集落の営まれた時期は弥生時代中期から後期にかけてであるが、各時期を通じて円形、方形の両者が認められ、時期による変化とは考えにくい。また分布状況から、居住した集団の違いによるとも考えられない。小中遺跡における円形竪穴住居と方形竪穴住居の分布をみると、円形のものは尾根線上に多く分布しその周囲に方形のものが分布する状況が認められる（第438図）。これは地形の傾斜具合と関係していると考えられ、尾根線上の比較的傾斜の緩い地点に円形の竪穴住居、その周囲の傾斜の急な地点に方形の竪穴住居が築かれる傾向がある。傾斜の急な地点では、住居床面積が同じであれば、方形のものを等高線に沿う形で築いた方が掘削土量が少なくてすむためであろう。そして、さらに傾斜の急な地点では竪穴住居にかわって段状遺構が分布している。すなわち、先に述べたように多くの段状遺構が住居として使用されていたと推定できるならば、地形の傾斜が強くなるにしたがって、円形竪穴住居→方形竪穴住居→段状遺構と、住居形態を変化させて地形に適応しているといえる。しかし、このような状況は、弥生時代後期中葉前後の時期に集中する小中遺跡での状況であって、他の遺跡でも同様であるとは考えていない。やはり時期的な変化をも同時に考慮する必要があり、弥生時代も後期末頃になると、大形の円形住居は減少し、やや小規模な方形住居が中心的な存在になると思われる。



第438図　竪穴住居の分布（1/4,000）

● 円形竪穴住居　□ 方形～隅丸方形竪穴住居
段状遺構に近いものなど特殊なものは除外した。

註

(1) 井上弘ほか「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』3　岡山県教育委員会　1973年

(2) 井守徳男ほか「奈カリ与遺跡」『兵庫県文化財調査報告書』第16冊　兵庫県教育委員会　1983年

(3) 竹田勝ほか「山根屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』22　岡山県教育委員会　1977年

(4) 神原英郎『用木山遺跡』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(4)　岡山県山陽町教育委員会　1977年

(3) 弥生土器の編年と集落の消長

今回の調査で非常に多くの弥生時代の遺構が検出され、大規模な集落の様相が明らかになった。弥生時代中期から後期にいたる集落であるが、ここでもう少し細かな時期区分を行ない、集落の消長という観点から再度整理を試みたい。

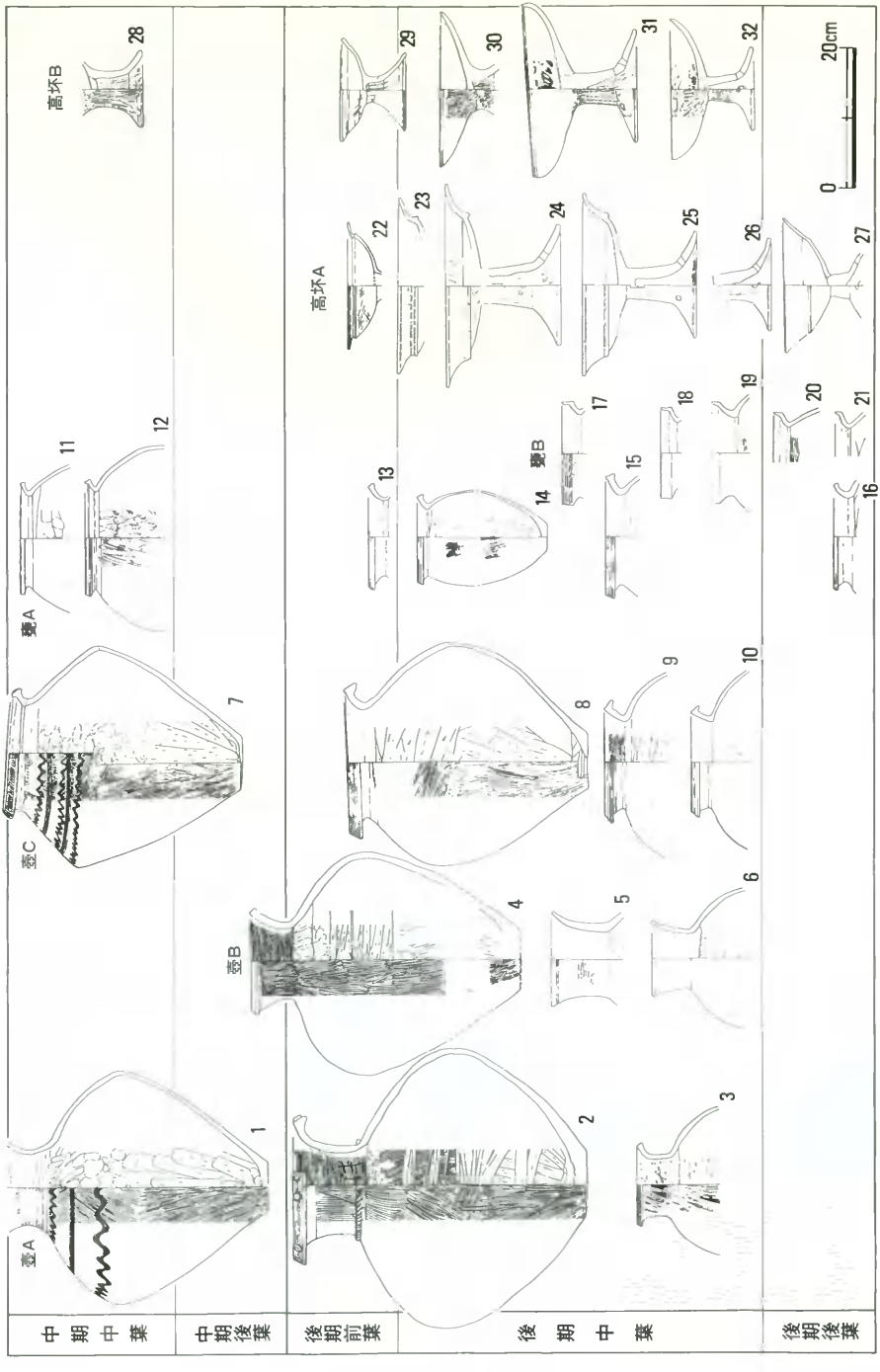
まず土器の編年について整理を行なっておく。小中遺跡における弥生土器の様相は大筋では岡山県南部のものに共通し、その地域における編年観が適用できるものと思われるが、若干異なるところがあり、また独特の器種もみられるためそのまま使用することは難しい。一方、美作地方における弥生土器の編年では、津山市域の遺跡の発掘調査報告書の中でいくらか整理されたものがある(1)。ところが小中遺跡の土器とそれらを照らし合わせてみても、必ずしも一致しない部分が認められる。ここであらためて整理を行ないたいと思う。

まず小中遺跡出土土器の中で、数も多く普遍的な存在といえる器種を抽出しておく。壺Aは頸部がやや長く、口縁部がラッパ状に開くもの、壺Bは壺Aと類似するが、口縁部があまり開かず直口気味に終わるもの、壺Cは広口状で甕に近い形態のものである。甕Aは概ね「く」の字状の口縁形態をとり、端部の拡張の仕方によって多様な形態をもつ。甕Bは二重口縁のものである。高杯Aは県内でも一般的にみられる、杯部に屈曲をもつもの、高杯Bは杯部が椀形ないし皿形を呈するものである。図示したもの以外では、美作地域に特徴的な大形の把手付鉢が計4個体出土している。同様のものは津山市、勝央町、美作町などで出土しており、美作でも東部地域に例が多い。

次に、以上の器種を中心にしてそれらの変化をみてみたい。小中遺跡出土の弥生土器は概ね中期中葉から後期後葉までの幅が認められるが、中期後葉から後期初頭にかけての資料は非常に乏しい。また、出土状況においても良好な一括資料として得られているものはほとんどなく、時期を細かく区分することは困難である。中期、後期ともに前葉、中葉、後葉の3時期に区分するにとどめておく。

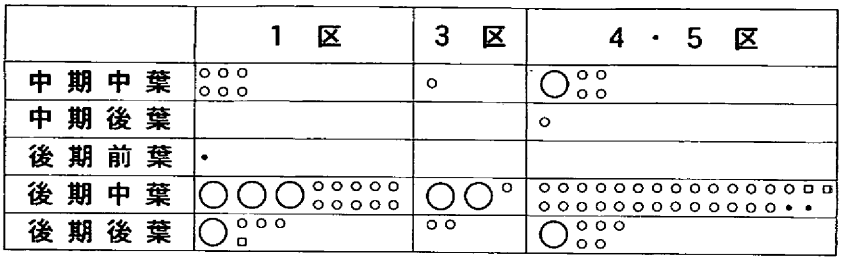
まず中期中葉と考えられる土器であるが、これらについては岡山県南部地域の土器とそれほど大きな違いはなく、ほぼ菰池式土器と呼ばれているものに相当する。

中期後葉と後期初頭に相当するとみられる土器はほとんどない。1区の土壙2出土資料は、高杯の形状等から判断して、後期前葉のうちでも後半にあたると思われる。この土壙2の段階から後期中葉にかけては非常に豊富な資料数があり、土器の変遷をより詳細にみることができる。壺・甕類は、全体的に口縁形態の退化傾向を追うことができる。また二重口縁をもつ甕Bが後期中葉のある段階で出現し、これも形態的に退化を示す。ただし甕Bは小中遺跡ではあまり主体的な存在でなく、甕Aの方が多い。後期後半に入ると二重口縁の甕が主体的になる津山市域の状況と比べても差異がみられるようである。これら壺・甕類の口縁拡張面に多用される凹線文についてみると、その出現は資料的制約から明らかでないが、後期中葉の新しい段階まで残存している。また、胴部内面のヘラケズリは、他地域と同様、後期の早い段階から口縁部直下まで施すようになる。しかしこれら後期の甕の中に、ヘラケズリを行なった後で指ナデを加えているものが比較的多く見られ、中にはヘラケズリ痕の観察が困難なほどの指ナデを行なっているものもある。高杯Aの変化は県南における編年観とほぼ一致するものと考えられる。高杯Bは中期の椀形の杯部をもつ高杯の形態をそのまま受け継いで変化したものと考えられ、小中遺跡ではかなり一般的な存在である。ほぼ高杯Aと共通した変化を示し、杯部と脚部の作り方についても後期中葉に入る頃に円盤充塡のものから別作り挿入接合のものに変化している。



第439図　小中遺跡における弥生土器変遷図（1/8）

以上、小中遺跡の弥生土器の変遷について概観したが、参考までに高橋護氏の編年案[2]との対応関係を示しておけば、中期中葉としたものがⅣ－ｂ～Ⅳ－ｃ期、後期前葉のうちでも後半にあたるとした土壙２の資料がⅧ－ｄ期、後期中葉としたものがⅧ－ａ～Ⅷ－ｂ期、後期後葉としたものがⅧ－ｃ～Ⅷ－ｄ期にほぼ並行するものと考えている。



○ 大形竪穴住居　◦ 竪穴住居　段状遺構
▫ 建　物　　・ 土　壙

第440図　弥生時代の遺構の時期別分布

（時期の特定できない遺構は除外した。大形竪穴住居は径約７ｍ以上のものである。）

上の土器編年をもとに、各遺構の時期別分布を示したのが第440図である。中期後葉から後期前葉にかけての遺構が非常に少なく、集落の断絶をうかがわせる。中期中葉の遺構もそれほど多くはないが、各調査区において散見される。それがいったん断絶し、後期中葉になると爆発的ともいえる遺構の増加が認められ、後期後葉になると再び遺構数が減少する。そして古墳時代に入ると竪穴住居をはじめとする遺構は皆無である。調査区別にみてもこの傾向は変わるものでなく、小中遺跡全体としてこのような変化が認められる。このように小中遺跡の弥生集落は、中期中葉と後期中葉～後葉という、大きく分けて２つの時期に営まれている。断絶期については他の遺跡への移動を考えなければならないが、いずれにしても長い時代にわたって継続して営まれた集落ではないといえる。今回、小中遺跡の全体を調査したわけではなく、土器による時期決定の困難な遺構も多いが、この傾向は動かないものと思われる。断絶期の移動先については、それを埋める時期の遺跡が津山市東部をはじめ周辺地域で調査されているが、断片的な資料であり、不明といわざるをえない。

註

(1)　中期の土器の編年案では、行田裕美「西吉田遺跡中期弥生土器編年について」『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集　津山市教育委員会　1985年、後期の編年案では、中山俊紀「土器編年について」『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集　津山市教育委員会　1981年などがある。

(2)　高橋護「入門講座・弥生土器―山陽１・２―」『考古学ジャーナル』173・175　ニュー・サイエンス社　1980年

第439図掲載土器の出土遺構

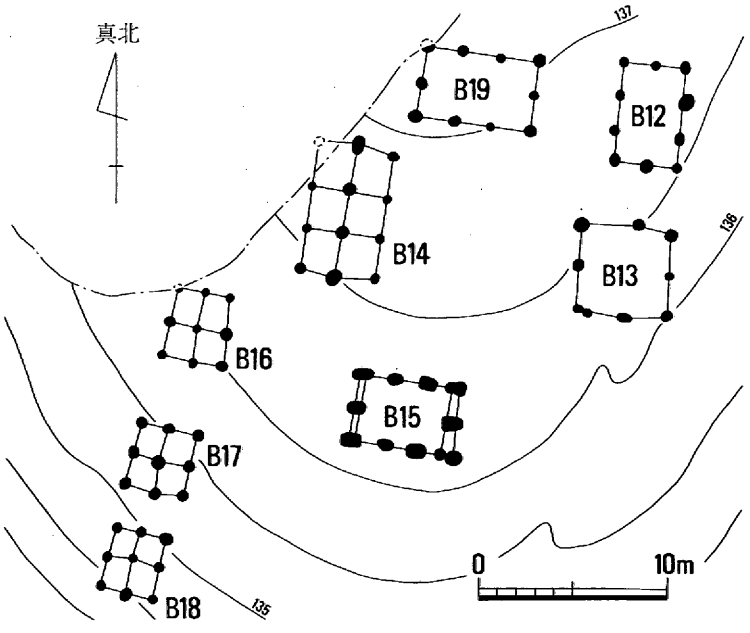
1　３区・竪穴住居53
2・4・8・13・22・29　１区・土壙２
3・17　４区Ａ・竪穴住居37内方形土壙
5・24　４区Ａ・竪穴住居36
6・31・32　３区・竪穴住居45
7　１区・竪穴住居７
9・14　４区Ｆ・段状遺構３
10・15　４区Ｆ・竪穴住居５
11・12・28　１区・竪穴住居24
16　１区・竪穴住居22
18・19・23・25・26　４区Ａ・竪穴住居17
20・21　１区・竪穴住居32
27　１区・竪穴住居１
30　１区・竪穴住居21

(4) 古代の建物群

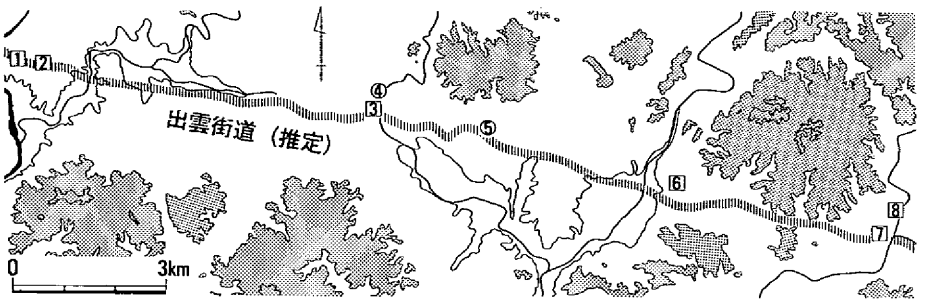
4区Aの最高所付近より、古代の建物群が検出されている。出土遺物と建物の示す方位の共通性から、古代の建物と考えられるのは8棟である（第441図）。等高線とは無関係に東西南北を指向している。弥生時代の建物が等高線に平行して建てられているのと対照的である。総柱建物4棟と側柱建物4棟からなり、総柱建物は2間×3間のもの1棟と2間×2間のもの3棟、側柱建物は2間×3間のもの3棟と2間×2間のもの1棟である。そのうち、建物15については、部分的に平面方形の柱穴をもっているのが特徴的である。遺物は須恵器が若干出土しているのみで非常に少なく、基本的に倉庫であると思われる。この1か所に建物が集中して建てられており、それ以外には同時期の遺構は認められない。建物群のみが孤立した状況であり、集落の一角に設けられた倉庫という状況ではない。ふもとの勝間田盆地からの比高が30m程ある丘陵上に、集落から離れて、どのような経緯で倉庫群が建てられたのか明らかでないが、遺跡の眼前を東西にはしる出雲街道との関係も無視できないであろう。出雲街道のルートについては確定的でないが、ファーマーズ・マーケット建設予定地内の、今回の調査区でいえば1区と3区との間を通る道もその候補と考えられている。まさに街道を見下ろす丘陵頂部に立地しているといえる。

美作東部における古代の主要遺跡は、いずれも出雲街道に沿ってその分布が知られている。西から順に、勝田郡衙およびその関連遺跡と推定される勝央町勝間田遺跡[1]・平遺跡[2]、美作町楢原廃寺[3]、英多郡衙と推定される作東町高本遺跡[4]、同町江見廃寺などである（第442図）。小中遺跡は勝間田遺跡の東2km強の距離にあり、美作国分寺・国分尼寺と高本遺跡・江見廃寺とのちょうど中間の位置にあたる。小中遺跡と勝田郡衙との関係は明らかでないが、小中遺跡倉庫群の立地は、「凡そ倉は、皆高く燥ける処に置け。」[5]とする倉庫令の規定を思い起させるものである。倉庫令は官の諸倉庫に関する規定を収めたものであり、小中遺跡の倉庫群についても公的な施設である可能性も否定できない。倉庫群の位置付け、性格についてはさらなる検討を要するであろう。以上の建物群の時期についてであるが、わずかながら出土している須恵器の蓋杯類は、8世紀後半代を示すものが多いようである。

ところで、これら8棟の建物群は東西南北の方位を指向して建てられているが、いずれも真北から10°前後東に振った方位を示している。他の遺跡についてみてみると、勝間田遺跡ではほぼ真北、平遺跡の古代のものと考えられる建物群ではやや西に振って現在の磁北に近い。このように遺跡によって微妙に異なっているが、小中遺跡の建物群に近い方位を示すものは高本遺跡の中にみられる。高本遺跡ではさまざまな方位を示す建物があるが、それらは大きく3グ



第441図　4区Aの古代の建物群（1/400）



1．美作国分尼寺
2．美作国分寺
3．勝間田遺跡（推定勝田郡衙）
4．平遺跡
5．小中遺跡
6．楯原廃寺
7．高本遺跡（推定英田郡衙）
8．江見廃寺

第442図　美作東部における古代の主要遺跡の分布（1/150,000）

ループに分けられる。第1はほぼ真北を向くもの、第2は小中遺跡例と同様に東に10°前後振るもの、第3は西に30°～60°振るもので、第3のグループに関しては東西南北を指向しているとは考えにくく、むしろ周辺の水田畦畔の方向と一致することから地形の傾斜に合わせているとみられる。これら3グループの差はおそらく時期差と思われるが、それぞれの建築された時期については不明な点が多い。ただし、第2のグループの建物の中には、小中遺跡と共通する8世紀後半代の須恵器を伴うものがあり、関連がうかがえる。また真北を指向する第1のグループについては、第2のグループよりも古いことがわかる建物がある。同じく8世紀でも古い時期の建物である勝間田遺跡の例が、ほぼ真北を向くことと関連する可能性もあろう。

註

(1)　「勝間田遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県文化財報告』4　岡山県教育委員会　1974年

(2)　井上弘・田仲満雄「平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8　岡山県教育委員会　1975年

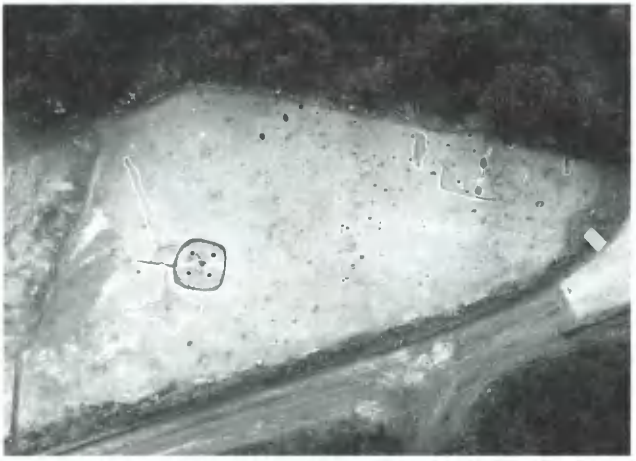
(3)　伊藤晃ほか「楯原廃寺緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』13　岡山県教育委員会　1976年

(4)　井上弘ほか「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8　岡山県教育委員会　1975年
　　二宮治夫ほか「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』61　岡山県教育委員会　1985年

(5)　「倉庫令　第廿二」『日本思想大系3　律令』岩波書店　1976年

図版1

1．1区竪穴住居1（右）・2（左）・道1（上）（北西から）



2．1区A全景（上空から）

3．1区竪穴住居3（北東から）

図版 2

1．1区竪穴住居4
（南西から）

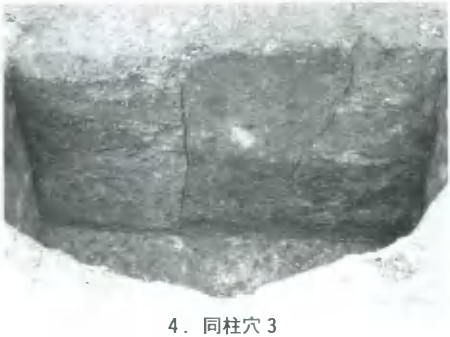
2．同上
（南東から）

3．1区竪穴住居5
（南東から）

1．1区竪穴住居6（北西から）

2．同壁体部分断面

3．同柱穴1



4．同柱穴3

5．同柱穴5

図版 4

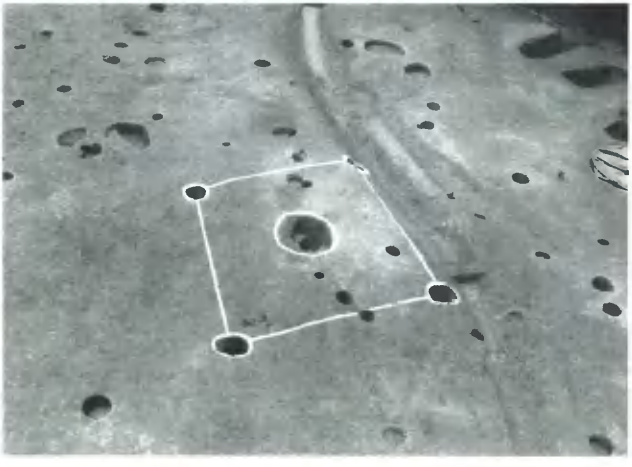
1．1区竪穴住居7
（北西から）

2．同住居内遺物近影

3．1区竪穴住居9
（南西から）

1．1区竪穴住居10
（北西から）

2．1区竪穴住居11
（北西から）



3．1区竪穴住居12
（北東から）

図版 6

1．1区竪穴住居14(左)
・13(中)・11(右)
(北東から)

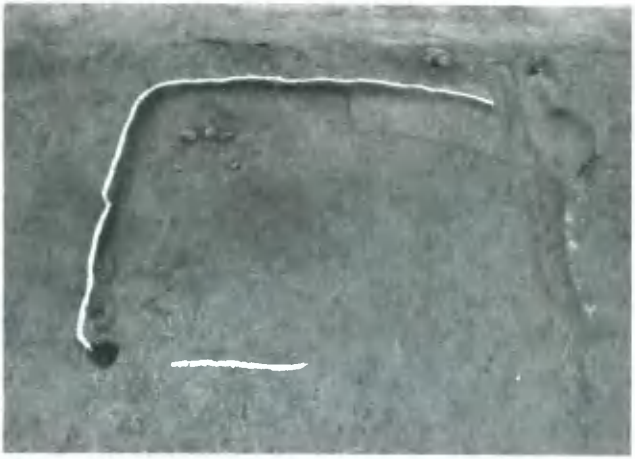
2．1区竪穴住居15
(南西から)

3．1区竪穴住居16
(北西から)

1．1区D・G・H全景（上空から）

2．同近影（上空から）

図版 8



1．1区竪穴住居20
（南東から）

2．1区竪穴住居21
（東から）

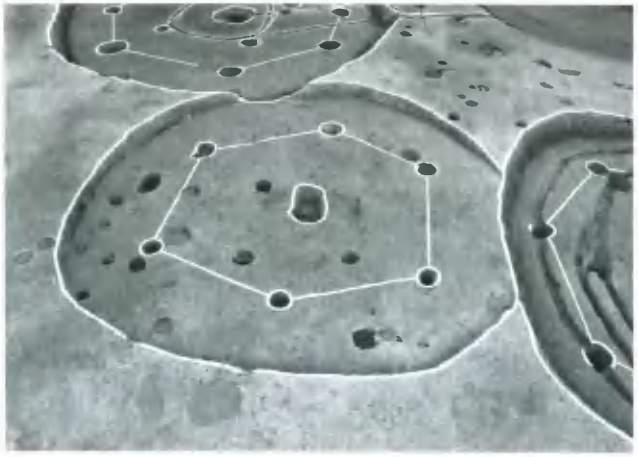
3．1区竪穴住居22
北西断面
（南から）

1．1区竪穴住居22(新)
（南東から）

2．同完掘(新・旧)
（南東から）

3．1区竪穴住居23(中)
・25(上)
（南東から）

図版10



1．1区竪穴住居24
（南西から）

2．1区竪穴住居25
（南東から）

3．1区竪穴住居25
遺物近景

1．1区竪穴住居26
（北西から）

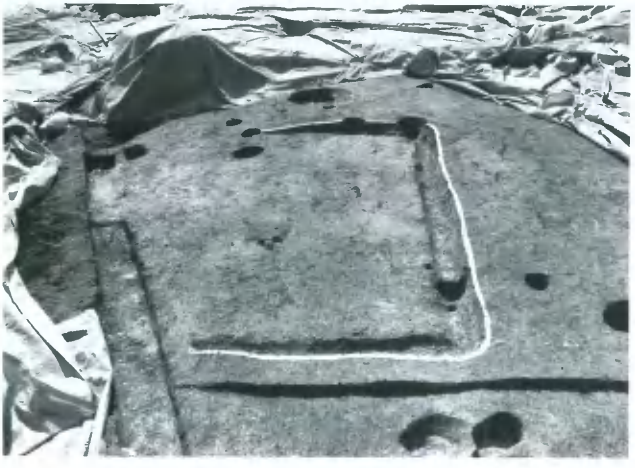
2．1区竪穴住居27
（北西から）

3．1区竪穴住居27
ベッド下溝断面

図版12

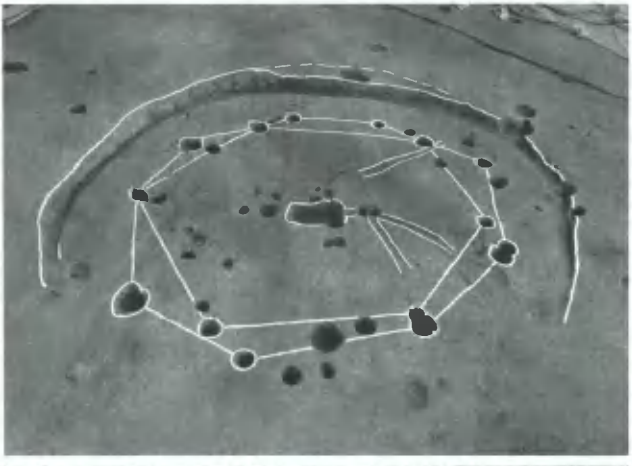
1．1区竪穴住居29
（南東から）

2．1区竪穴住居30（右上）
・31（左）・32（中下）
（南東から）



3．1区竪穴住居34
（東から）

1．1区竪穴住居35
（東から）



2．1区竪穴住居38
（北西から）

3．1区竪穴住居39
（北西から）

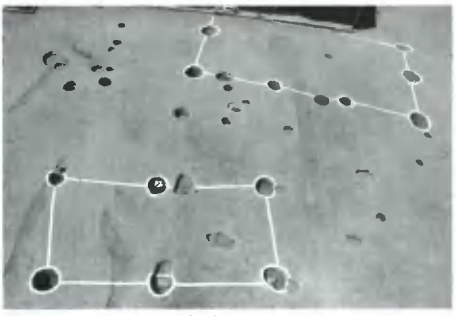
図版14

1．1区竪穴住居41
（西から）

2．1区竪穴住居42
（南西から）

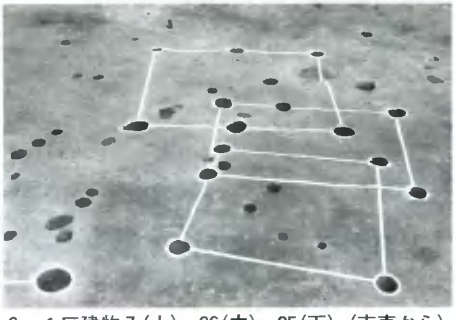
3．同北辺コーナー部
閉塞部・同遺物（下）

1．1区建物1（東から）

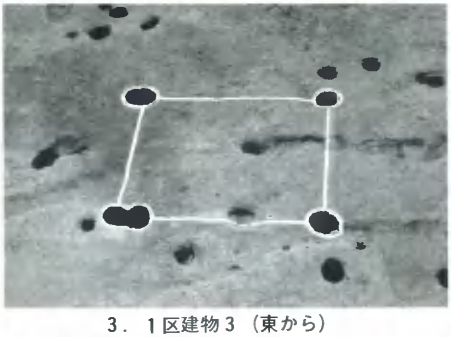


5．1区建物5（下）・6（上）（南東から）

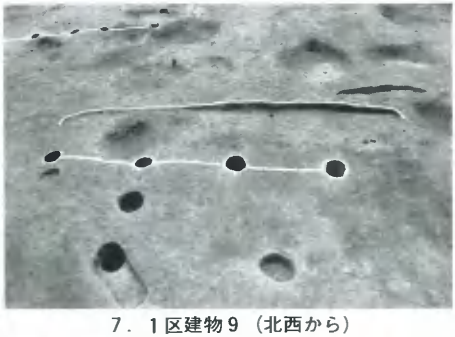
2．1区建物2（上）・23(中)・24(右)（南東から）



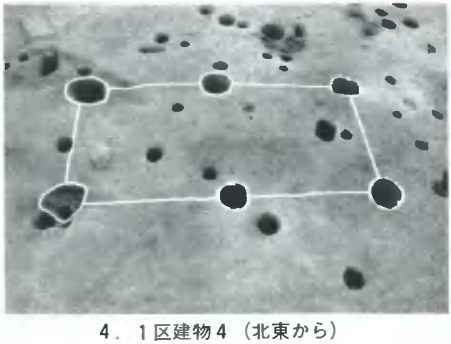
6．1区建物7（上）・26(中)・25(下)（南東から）



3．1区建物3（東から）



7．1区建物9（北西から）

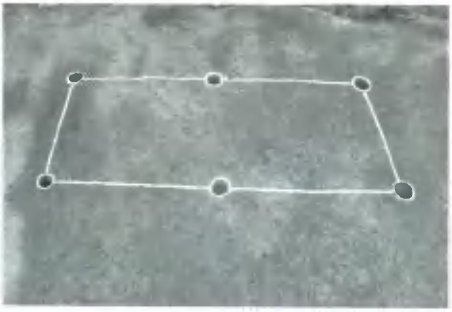


4．1区建物4（北東から）

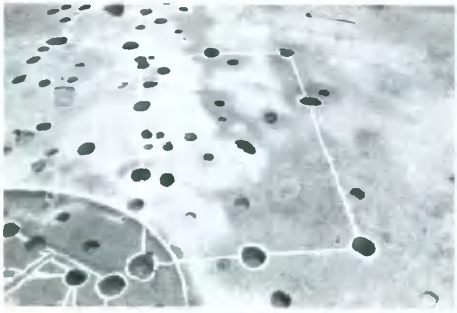
8．1区建物10（南西から）

図版16

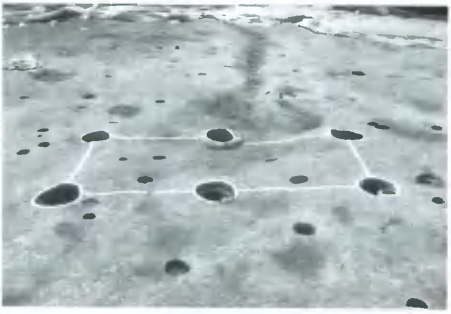
1．1区建物19（南西から）



2．1区建物20（南東から）

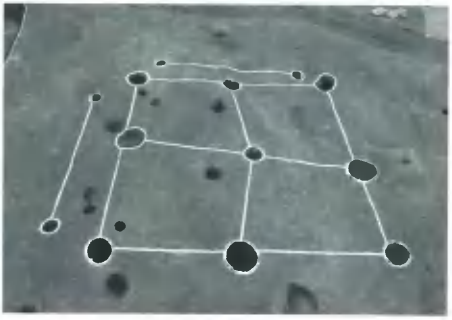


3．1区建物22（南西から）



4．1区建物21（南東から）

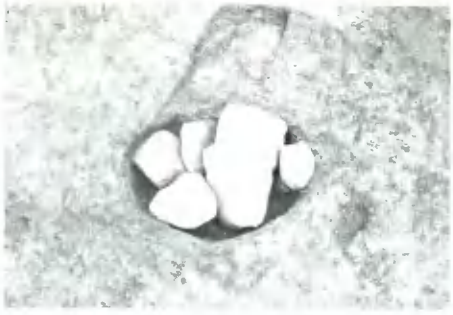
5．1区建物29(左)・30(右)・31(上)（南西から）



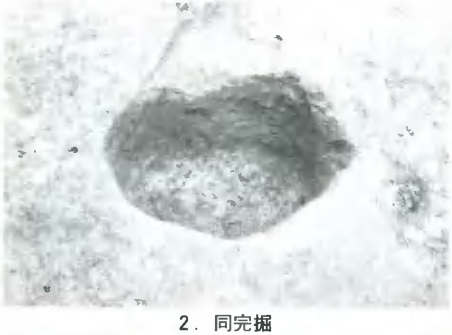
6．1区建物32（北西から）

7．1区土壙2（北西から）

8．同完掘



1．1区土壙墓2（西から）



2．同完掘

3．1区土壙墓3（北西から）

4　1区土壙墓4（北西から）

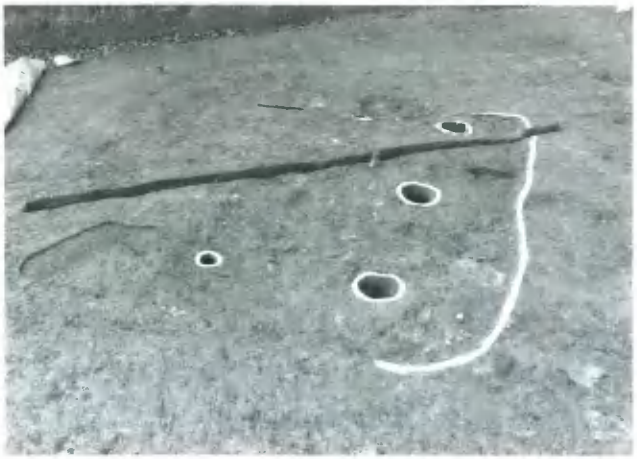
5．1区土壙墓8（北西から）

6．同遺物近影

7．1区土壙墓14（北西から）

8．1区土壙墓15（北西から）

図版18



1．2区A建物11
（南東から）

2．3区A・B全景
（上空から）

1．3区竪穴住居43
炭化物検出面
（北西から）

2．同完掘
（南西から）
下：壁外溝断面

3．3区竪穴住居44
（西から）

図版20

1．3区竪穴住居45（北から）

2．同内土壙4（南から）

3．同内土壙5（北から）

4．同内土壙6（北から）

5．同内土壙6（南から）

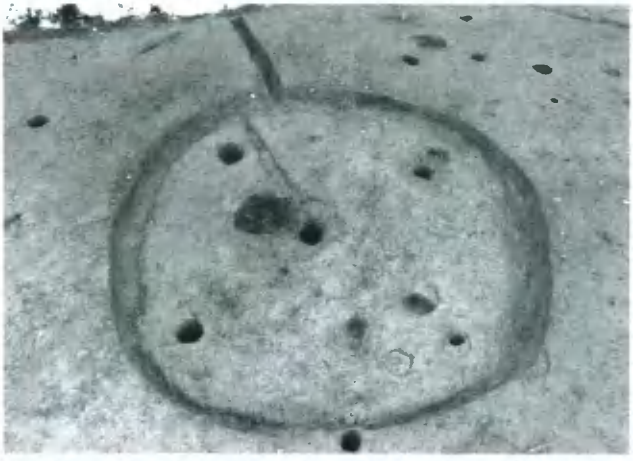
1．3区竪穴住居46
（北から）

2．3区竪穴住居47
（北東から）

3．3区竪穴住居48
（北から）

図版22

1．3区竪穴住居49
焼土面検出
（北東から）



2．同完掘
（北北東から）

3．3区竪穴住居51
（南から）

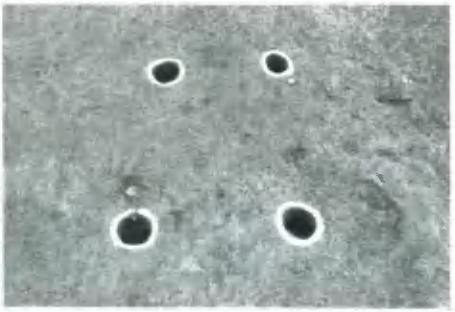
1．3区竪穴住居52
焼土・炭化物面
（北から）

2．同完掘（北西から）

3．3区竪穴住居53
（北北西から）
下：遺物近景

図版24

1．3区建物12(左)・13(右)（南西から）



3．3区建物15（南々東から）

2．3区建物14（西北西から）

4．3区建物17（北西から）

5．3区土壙5（北々東から）

6．3区土壙6（北から）

7．3区土壙7断面（北から）

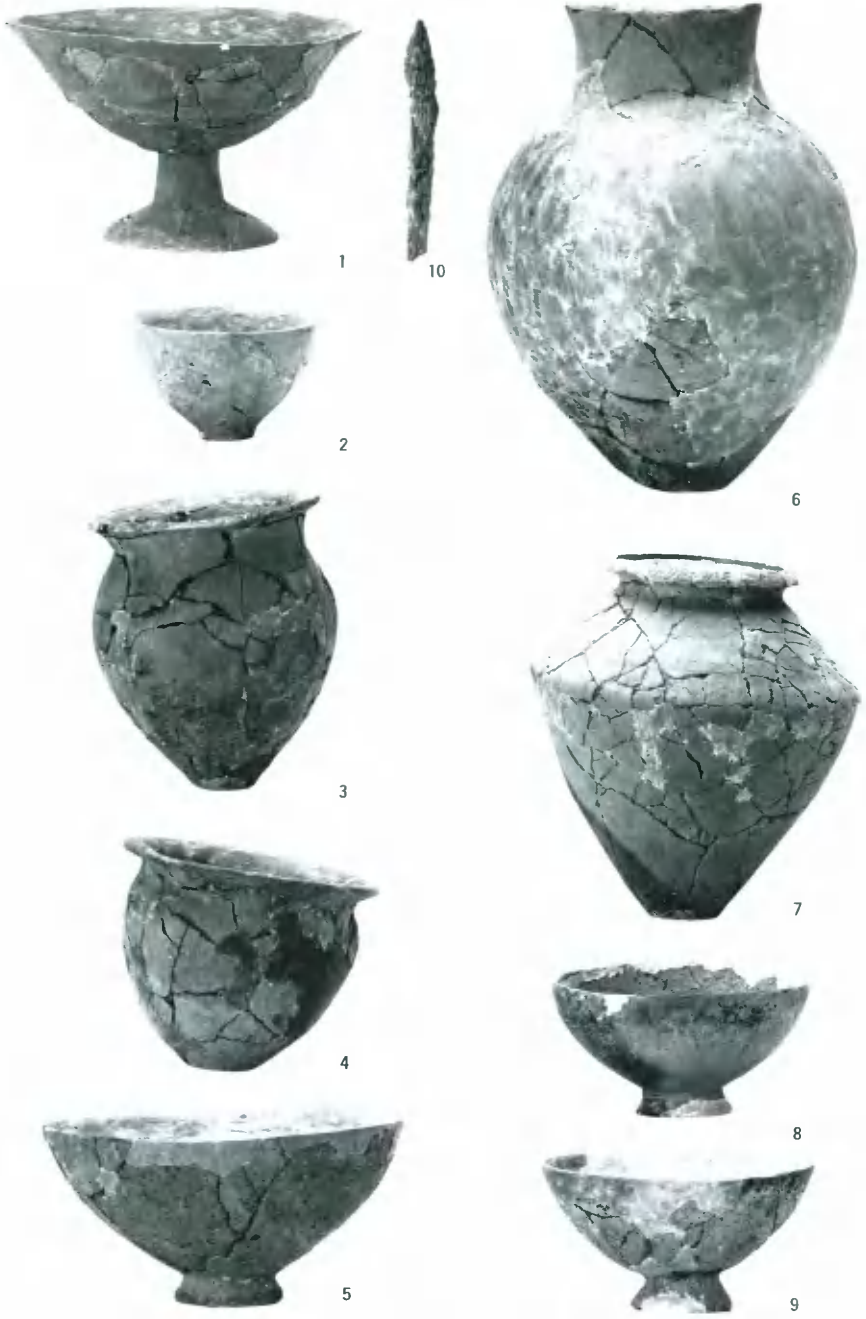
8．同完掘（北西から）

1．3区土壙墓1
（北北西から）

2．同遺物近景

3．同上

図版26



1区竪穴住居出土遺物（1）

1

5

6

7

2

8

3

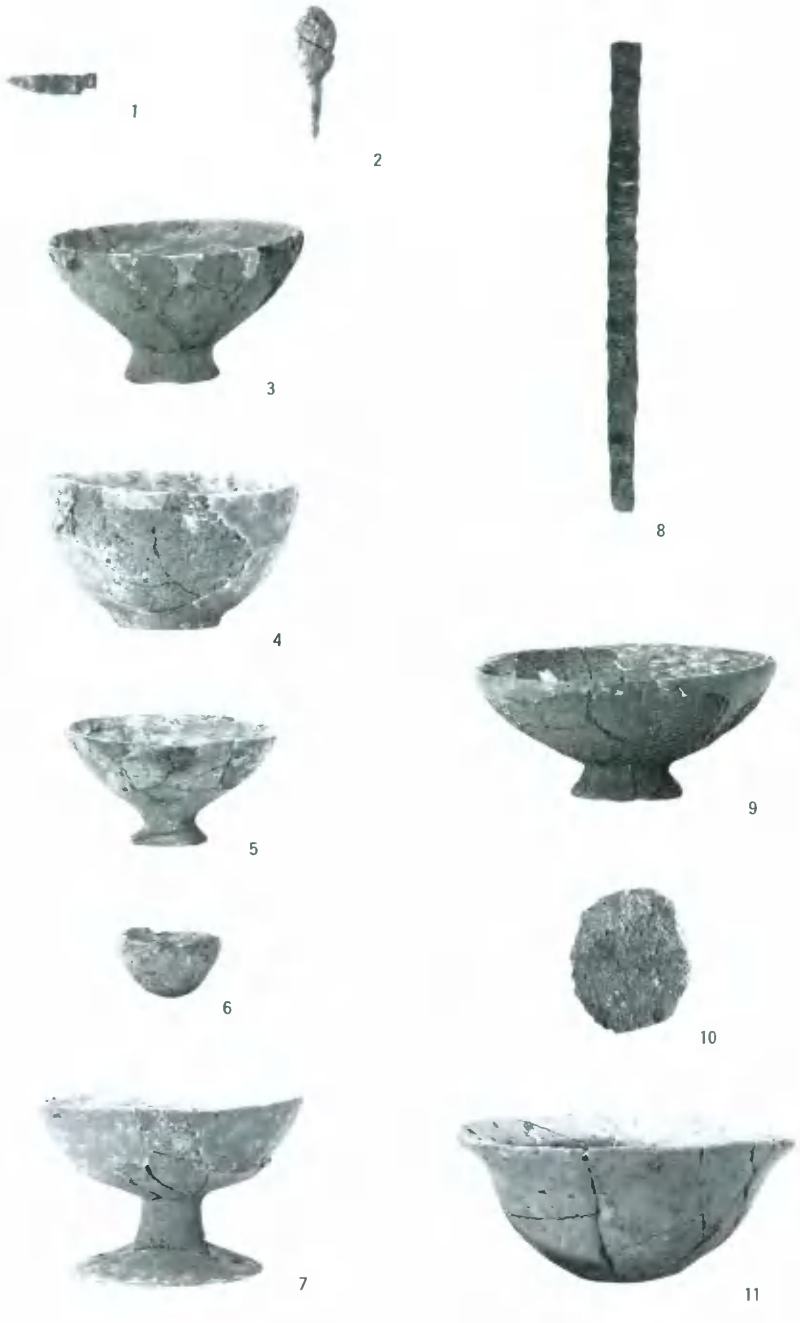
9

4

10

1区竪穴住居出土遺物（2）

図版28



1区竪穴住居出土遺物 (3)

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

1区竪穴住居出土遺物（4）

図版30

1

2

3

4

5

6

7

1区建物・柱穴出土遺物

1

4

2

5

3

6

1区土壙2出土遺物（1）

図版32

1

4

2

5

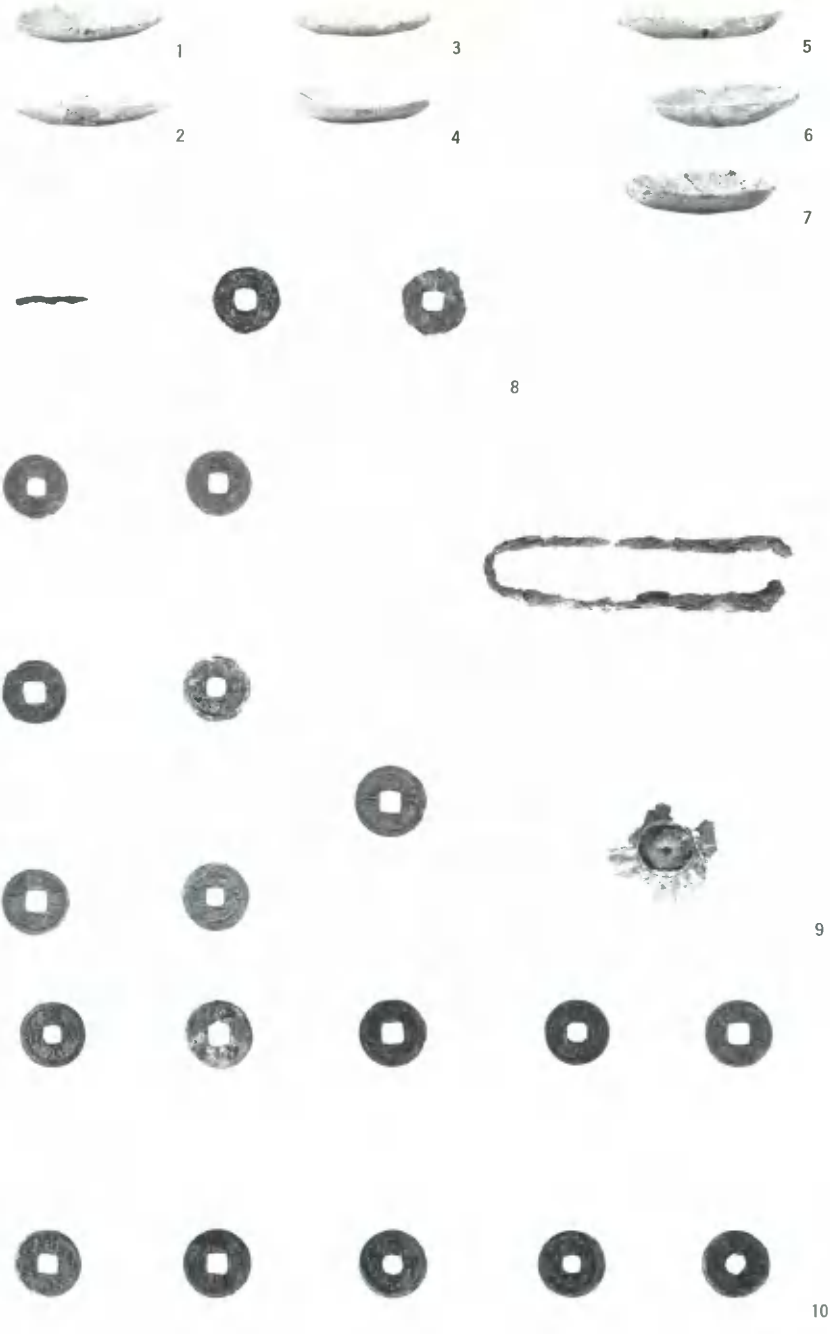
6

3

7

8

1区土壙2出土遺物（2）



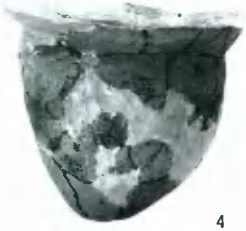
1区土壙墓出土遺物

図版34

1

2

3



4

5

6

7

8

2区A建物11・3区竪穴住居出土遺物

1

7

2

8

3

4

9

5

10

6

11

3区竪穴住居出土遺物

図版36

3区建物・柱穴・土壙1出土遺物

1

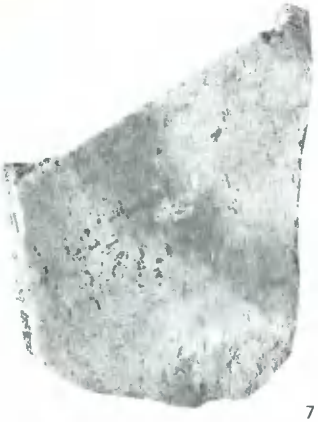
2

3

4

5

6


7

8

9

10

1区竪穴住居出土遺物

図版38

1

6

2

7

8

3

4

9

5

1・3区竪穴住居出土遺物

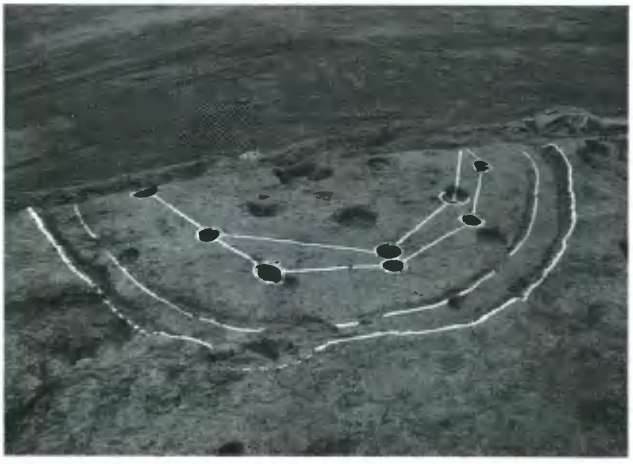
3区竪穴住居・1・3区柱穴・包含層出土遺物

図版40

1．4区A竪穴住居6
（南から）

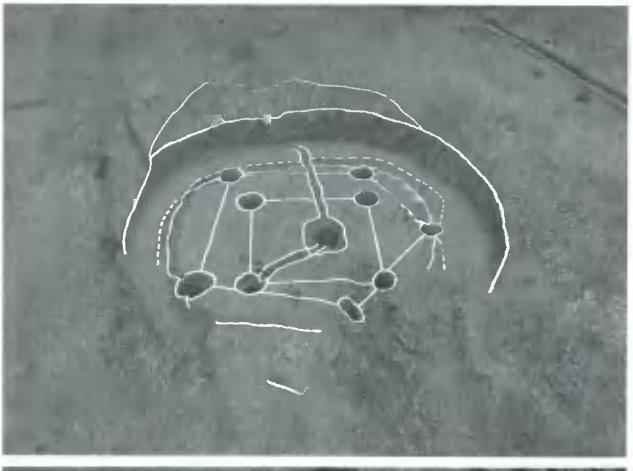
竪穴住居6出土鉄鏃

2．4区A竪穴住居1
（東から）



3．4区A竪穴住居7
（北から）

1．4区A竪穴住居2
（東から）



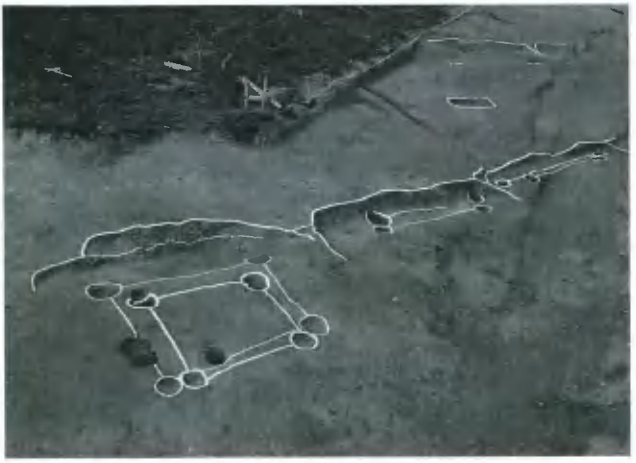
2．4区A竪穴住居21
（南から）

3．4区C竪穴住居79
（南から）

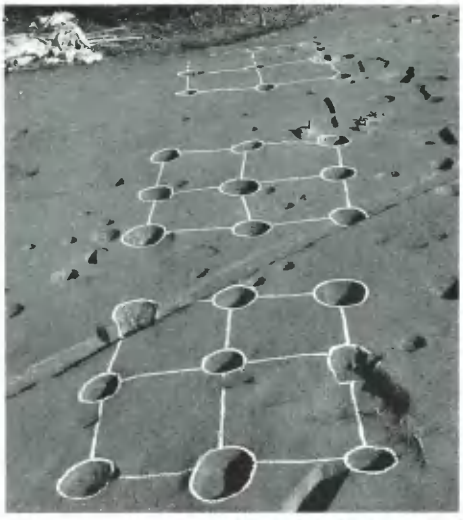
図版42

1．4区E竪穴住居群
（南から）

2．4区E竪穴住居4
（南から）



3．4区G竪穴住居106
ほか　（南から）



1．4区A建物16・17・18
（南から）

2．4区A建物15
（北から）

3．4区A建物1・13
（東から）

図版44

1．4区A土器棺1（東から）

2．4区A土壙墓1（東から）

3．4区A竪穴住居37内土壙（南から）

4．4区A竪穴住居6壁体溝内土器出土状況

5．同柱穴内土器出土状況

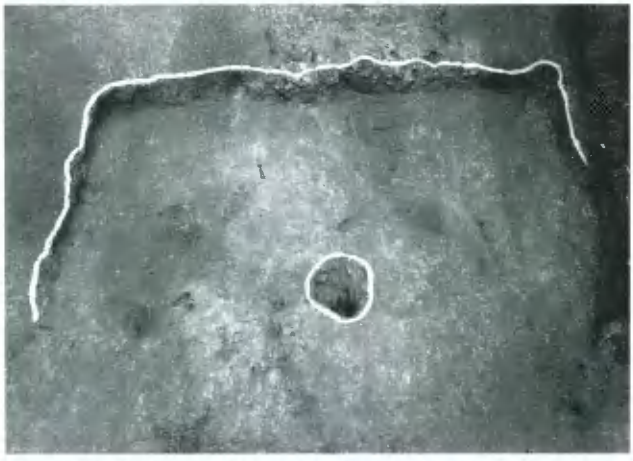
1．4区F竪穴住居1・2　（南西から）

2．4区F竪穴住居3（南から）

3．4区F竪穴住居5（南西から）

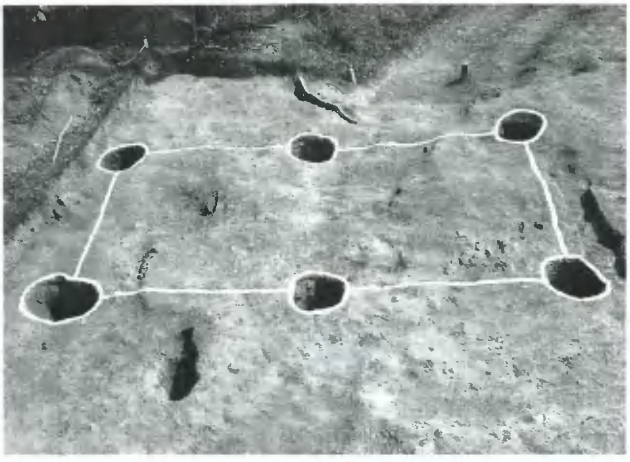
図版46

1．4区F竪穴住居5
土器出土状況
（南西から）

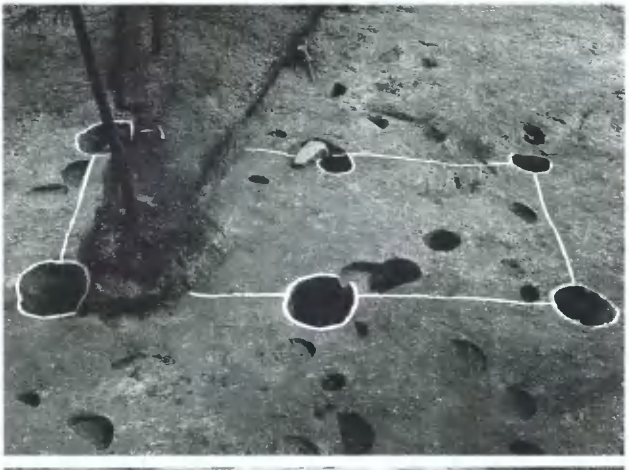


2．4区F竪穴住居7
（西から）

3．4区F段状遺構3・4
（南西から）



1．4区F建物1
（北から）



2．4区F建物2
（北から）

3．4区F建物3
（北から）

図版48

1．5区拡張区
（北西から）

2．同上（南西から）

3．同上（西から）

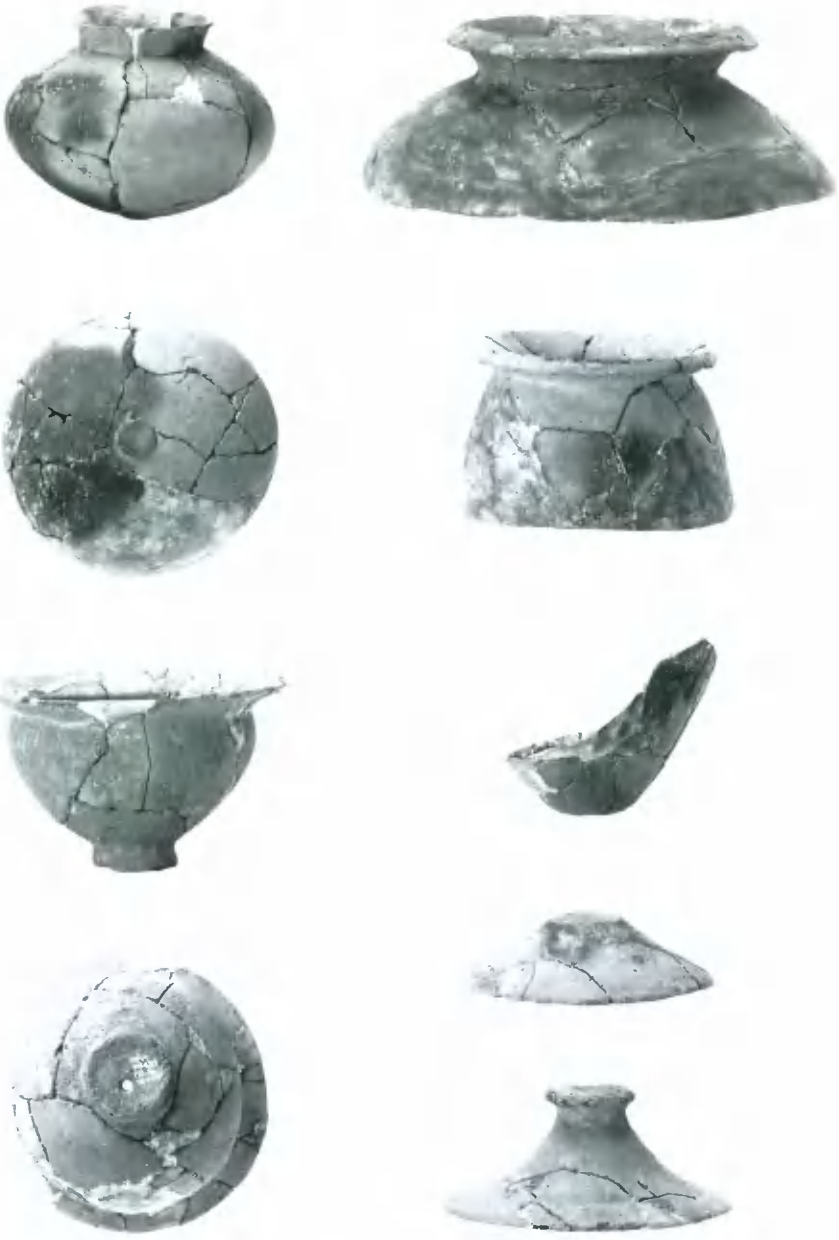
4区竪穴住居出土遺物

図版50

4・5区出土遺物

4区F竪穴住居5出土土器

図版52



4区F段状遺構3・4出土土器

小中遺跡出土石器（1）

図版54

小中遺跡出土石器（2）

小中遺跡出土石器（3）・玉類

図版56

1．白迫1号墳調査前
全景　　（東から）

2．同表土除去後
（南から）

3．同掘り上げ
（南から）

1．石室内状況
（奥壁より望む）

2．奥壁部分

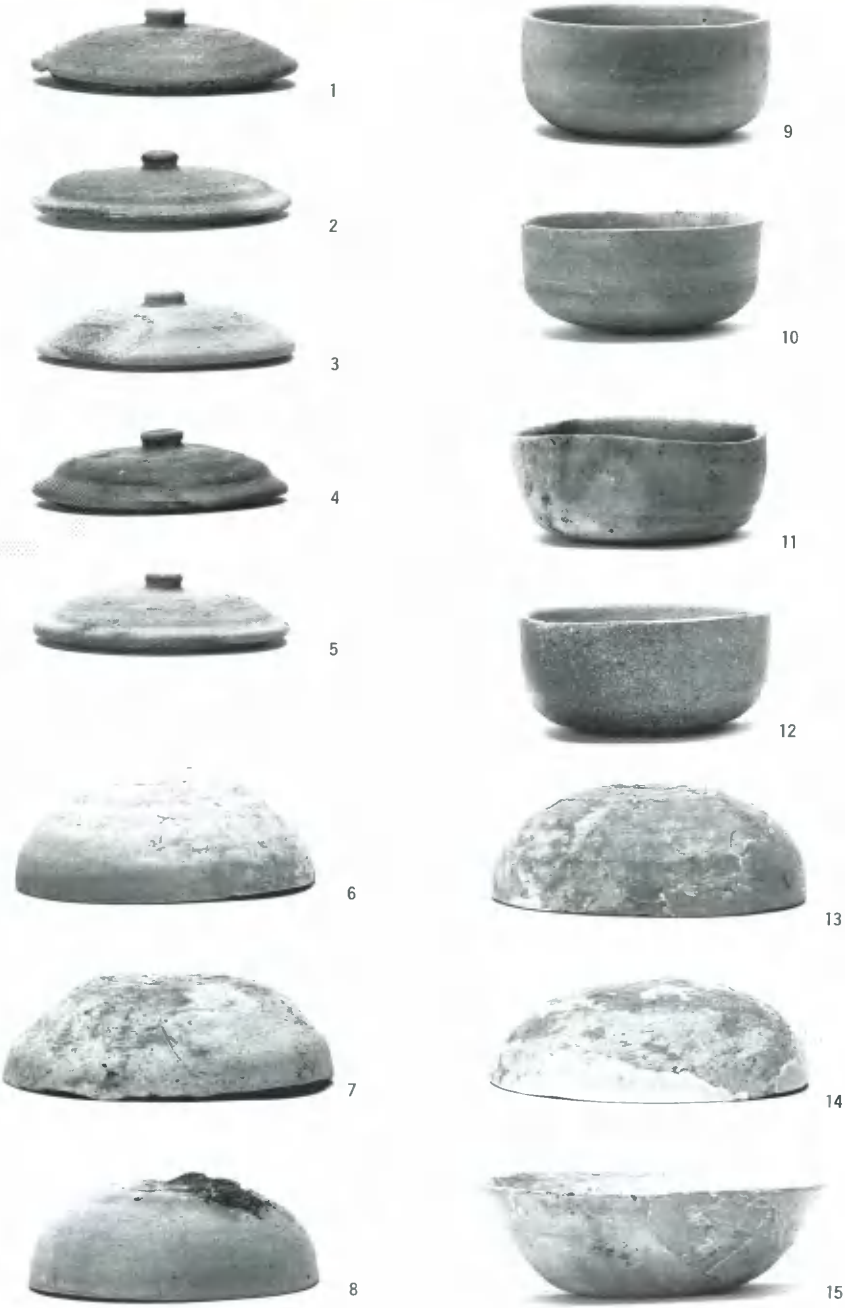
3．遺物近影

図版58

1．遺物近影

2．遺物取り上げ後
（羨道部より望む）

3．完掘後全景
（南から）



白逧1号墳出土遺物

図版60

1

2

3

4

5

6

7

8

白迫1・2号墳出土遺物

1

2　3　4

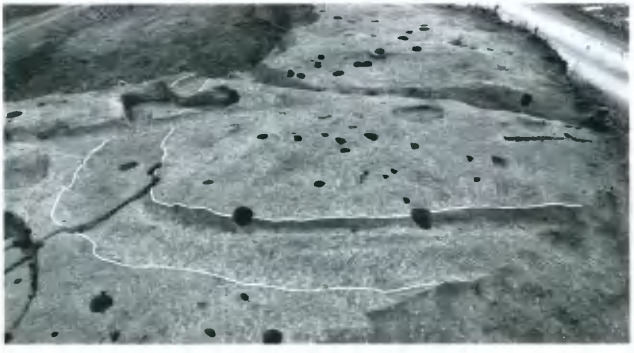
白迫１・２・３号墳出土遺物

図版62

1．白迫2号墳
調査前
（南西から）

2．同表土除去後
（南西から）

3．同完掘（南から）



4．白迫3号墳周溝
（西から）

1．小中１号墳調査前
（北から）

2．同表土除去後
（南から）

3．同土層断面
（北西から）

図版64

1．湯ヶ迫古墳
（南から）

2．同横穴式石室
（南東から）

3．同遺物出土状態
（南西から）

1

4

2

3

5

湯ヶ迫古墳出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こなかいせき　しらさここふんぐん　こなかこふんぐん　ゆがさここふん
書名	小中遺跡　白逾古墳群　小中古墳群　湯ケ逾古墳
副書名	おかやまファーマーズ・マーケット建設に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	117
編著者名	浅倉秀昭・正岡睦夫・二宮治夫・山磨康平・氏平昭則・尾上元規
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-01　岡山県岡山市西花尻1325-3　℡086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700　岡山県岡山市内山下2-4-6　℡086-224-2111
発行年月日	西暦　1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
こなかいせき 小中遺跡 しらさこふんぐん 白逾古墳群 こなかこふんぐん 小中古墳群 ゆがさここふん 湯ケ逾古墳	おかやまけんかつたぐん 岡山県勝田郡 しょうおうちょうおか 勝央町岡	33622		35度 2分	134度 8分	19930701～ 19950331 19960401～ 19960630	25,300	おかやまファーマーズ・マーケット建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小中遺跡	集落跡 墓地	弥生時代 ～ 中世	竪穴住居約180軒 建物約45棟 土壙約50基	弥生土器 土師器 須恵器 石器・玉類 鉄器・古銭	弥生時代後期の県下最大級の規模をもつ大形竪穴住居など
白逾古墳群	古墳	古墳時代後期	古墳　3基	鉄釘・耳環 須恵器	
小中1号墳	古墳	古墳時代後期	古墳　1基		
湯ケ逾古墳	古墳	古墳時代後期	古墳　1基	鉄釘、須恵器	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告117

小中遺跡
白逾古墳群
小中古墳群
湯ケ逾古墳

おかやまファーマーズ・マーケット
建設に伴う発掘調査

1997年3月15日　印刷
1997年3月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印　刷　西日本法規出版株式会社